宗典學

第五卷

BL 1411 T8J3 1929 v.29

Tripitaka. Japanese. 1929
Showa shinshu kokuyaku
Daizokyo

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

昭和新纂
國譯大藏經

LIBRARY
MAY 31 1971
UNIVERSITY OF TORONTO

BL
1411
T8J3
1929
v. 29

昭和新纂 國譯大藏經 宗典部 第五卷

曹洞宗聖典 目次

普勸坐禪儀……道元禪師撰……一
學道用心集……道元禪師撰……五
正法眼藏……道元禪師撰……一七
正法眼藏辨道話……一七
正法眼藏摩訶般若波羅蜜……三四
正法眼藏現成公案……三七
正法眼藏一顆明珠……四一
正法眼藏重雲堂式……四五
正法眼藏卽心是佛……四九
正法眼藏洗淨……五三

正法眼藏禮拜得髓……六一
正法眼藏谿聲山色……七三
正法眼藏諸惡莫作……八二
正法眼藏有時……九〇
正法眼藏袈裟功德……九五
正法眼藏傳衣……一一六
正法眼藏山水經……一三一
正法眼藏佛祖……一四一
正法眼藏嗣書……一四三
正法眼藏法華轉法華……一五三
正法眼藏心不可得……一六二
正法眼藏後心不可得……一六五
正法眼藏古鏡……一七六
正法眼藏看經……一九〇
正法眼藏佛性……一九九

正法眼藏行佛威儀……二二三
正法眼藏佛教……二三五
正法眼藏神通……二四四
正法眼藏大悟……二五一
正法眼藏坐禪箴……二五七
正法眼藏佛向上事……二六八
正法眼藏恁麼……二七五
正法眼藏行持(上)……二八二
正法眼藏行持(下)……三〇二
正法眼藏海印三昧……三二五
正法眼藏授記……三三〇
正法眼藏觀音……三三九
正法眼藏阿羅漢……三四四
正法眼藏栢樹子……三四八
正法眼藏光明……三五二

正法眼藏身心學道……三五八
正法眼藏夢中說夢……三六四
正法眼藏道得……三六九
正法眼藏畫餠……三七四
正法眼藏全機……三七八
正法眼藏都機……三八一
正法眼藏空華……三八四
正法眼藏古佛心……三九二
正法眼藏菩提薩埵四攝法……三九五
正法眼藏葛藤……四〇〇
正法眼藏三界唯心……四〇五
正法眼藏說心說性……四〇九
正法眼藏佛道……四一五
正法眼藏諸法實相……四二八
正法眼藏密語……四三九

正法眼藏佛經……四四三
正法眼藏無情說法……四五三
正法眼藏法性……四六一
正法眼藏陀羅尼……四六四
正法眼藏洗面……四六九
正法眼藏面授……四八一
正法眼藏坐禪儀……四八九
正法眼藏梅華……四九〇
正法眼藏十方……四九八
正法眼藏見佛……五〇三
正法眼藏徧參……五一一
正法眼藏眼睛……五一五
正法眼藏家常……五一九
正法眼藏龍吟……五二三
正法眼藏春秋……五二五

正法眼藏祖師西來意……五二九
正法眼藏優曇華……五三三
正法眼藏發無上心……五三四
正法眼藏如來全身……五四一
正法眼藏三昧王三昧……五四三
正法眼藏三十七品菩提分法……五四六
正法眼藏轉法輪……五六一
正法眼藏自證三昧……五六三
正法眼藏大修行……五七二
正法眼藏虛空……五八〇
正法眼藏鉢盂……五八三
正法眼藏安居……五八五
正法眼藏他心通……六〇一
正法眼藏王索仙陀婆……六一〇
正法眼藏示庫院文……六一三

正法眼藏出家……六一五
正法眼藏三時業……六一八
正法眼藏四馬……六二六
正法眼藏發菩提心……六二九
正法眼藏出家功德……六三六
正法眼藏供養諸佛……六五二
正法眼藏歸依三寳……六六六
正法眼藏生死……六七四
正法眼藏深信因果……六七五
正法眼藏道心……六八一
正法眼藏受戒……六八三
正法眼藏四禪比丘……六八七
正法眼藏唯佛與佛……七〇〇
正法眼藏八大人覺……七〇七
坐禪用心記……紹瑾禪師撰……七一三

三根坐禪說……紹瑾禪師撰……七三
曹洞教會修證義……七五

曹洞宗聖典

宗典部
第五卷

〔注〕本篇の撰述年代は記載なけれども、嘉祿三年道元二十八歳即ち歸朝の年なるべし。今篇七百五十八字永平廣錄卷八に輯む。普勸とは本文の不論上智下愚莫簡利人鈍者の意を標榜せるものにて上中下の三根に普く勸說する言。坐禪は佛祖嫡傳するところの最上乘の端坐參禪。儀は儀則にして三世諸佛同道の儀式なり。
【宗乘】宗は尊なり、乘は運載を義となす。起信論に一切諸佛本所乘故、一切菩薩皆乘此法到如來地故と。直指單傳の第一義を云ふ。
【祇園の生知】釋尊のこと、祇園は佛在精舍の號、生知は生而知之者上の語より出づ、釋尊は天上天下唯我獨尊の故に云ふ。

普勸坐禪儀

高祖永平承陽大師撰

原ぬるに夫れ道本圓通、爭でか修證を假らん、宗乘自在何ぞ工夫を費さん。況んや全體迥に塵埃を出づ。孰か拂拭の手段を信ぜん。大都當處を離れず、豈修行の脚頭を用ふる者ならんや。然れども毫釐も差あれば、天地懸に隔る。違順纔に起れば紛然として心を失す。直饒、會に誇り悟に豐にして瞥地の智通を獲、道を得、心を明めて衝天の志氣を擧げ、入頭の邊量に逍遙すと雖も、幾ど出身の活路を虧闕す。矧んや彼祇園の生知たる、端坐六年の蹤跡見つべし。少林の心印を傳ふる面壁九歳の聲名尚聞ゆ。古聖既に然り、今人盍ぞ辨ぜざる。所以に須らく言を尋ね語を逐ふの解行を休すべし。須らく回光返照の退歩を學すべし。身心自然に脫落して本來の面目現前せん。恁麽の事を得んと欲せば急に恁麽の事を務めよ。

夫れ參禪は靜室宜しく、飲食節あり。諸緣を放捨し萬事を休息して、善惡を思はず是非を管すること莫れ。心意識の運轉を停め、念想觀の測量を止めて作佛を圖ること莫れ。豈坐臥に拘らんや。尋常坐處には厚く坐物を敷き上に蒲團を用ふ。或は結跏趺坐、或は半跏趺坐、謂く結跏趺坐は先づ右の足を以て左の腿の上に安じ、左の足をもつて右の腿の上に安ず。半

【少林の心印】達磨大師のこと。少林は大師所住の寺號、心印は佛心の印を傳ふる祖なり。

【回光返照】心の萬法に隨ふものを回らして返つて物に隨ふの心を照す。時、心法ともに無主、之を求むるに不可得なり。

【退步】惛沈と散亂との[illegible]を逐はずして休心に立ち返る。宏智禪師に也須退步就己力[illegible]底相應[illegible]

【身心脫落】身心は五蘊の總名、脫落は解脫、身心脫落は五蘊皆空の義、般若の智慧に照見、五蘊皆空の光明一境に片片なれる心境なり。

【任運自在】悠々、如此、[illegible]は隨時[illegible]如是の[illegible]に[illegible]身心脫落よりして現前まで指して面目[illegible]云ふ。

【參禪】天童淨祖

跏趺坐は但左の足を以て右の腿を壓すなり。寬く衣帶を繫けて齊整ならしむべし。次に右の手を以て左の足の上に安じ、左の掌を右の掌の上に安ず。兩の大拇指面へて相拄へ、乃ち正身端坐して左に側ち右に傾き前に躬り後に仰ぐことを得ざれ。耳と肩と對し、鼻と臍と對せしめんことを要す。舌上の腭に掛け、脣齒相着け、眼は須らく常に開くべし。鼻息微に通じ、身相既に調へて欠氣一息し、左右搖振して兀兀として坐定して箇の不思量底を思量せよ。不思量底如何が思量せん、非思量此れ乃ち坐禪の要術なり。

謂ゆる坐禪は習禪にはあらず、唯是れ安樂の法門なり。菩提を究盡するの修證なり。公案現成、羅籠到ること未し。若し此意を得ば、龍の水を得るが如く、虎の山に靠るに似たり。當に知るべし正法自ら現前し、昏散先づ撲落することを。若し坐より起たば、徐徐として身を動かし安祥として起つべし、卒暴なるべからず。嘗て觀る超凡越聖、坐脫立亡も此力に一任することを。況んや復、指竿針鎚を拈ずるの轉機、拂拳棒喝を擧するの證契も未だ是れ思量分別の能く解する所にあらず。豈神通修證の能く知る所と爲んや。聲色の外の威儀たるべし、那ぞ知見の前の軌則に非ざる者ならんや。然れば則ち上智下愚を論ぜず。利人鈍者を簡ぶこと莫れ。專一に工夫せば正に是れ辨道なり。修證自ら染汚せず、趣向更に是れ平常なる者なり。凡そ夫れ自界他方、西天東地、等しく佛印を持し、一ら宗風を擅にす。唯打坐を務めて兀地に礙へらる。萬別千差と謂ふと雖も、祇管に參禪辨道せよ。何ぞ自家の坐牀を抛却して、謾に他國の塵境に去來せん。若し一歩を錯らば當面に蹉

と永平高祖とは坐禪と參禪とを同一視す。眼藏の坐禪儀に─參禪は坐禪なり─と。

【諸緣を放捨】外にあるを諸緣と云ふ。眼に色の緣あり耳に聲の緣あるが如し、諸緣は外有の故に之を收取すれば心散亂す、之を放捨すれば心安樂なり。

【萬事を休息】內に造作するを萬と云ふ、萬事は內よりおこる、故に內に造作すれば心散亂す、之を休息すれば心安樂なり。

【個の不思量底を思量】藥山弘道大師の公案。

【習禪】習學の禪にて悟を得んために習修する小乘の禪なり。

【坐脫立亡】脫亡は死すること、坐しながら、立ちながら死す。

【指竿鋮鎚】古人

過す。既に人身の機要を得たり。虚しく光陰を度ること莫れ。佛道の要機を保任す、誰か浪りに石火を樂しまん。加之、形質は草露の如く、運命は電光に似たり。倏忽として便ち空し、須臾に卽ち失す。冀くば其れ、參學の高流、久しく摸象に習つて眞龍を怪しむこと勿れ。直指端的の道に精進し、絕學無爲の人を尊貴し、佛佛の菩提に合沓し、祖祖の三昧に嫡嗣せよ。久しく恁麼なることを爲さば須らく是れ恁麼なるべし。寶藏自ら開けて受用如意ならん。

が臨機應變、觸處に手に信かせて拈用す。其調度として指と竿と針と鎚との四を擧ぐ。

【拂拳棒喝】同前

【兀地】兀兀地にして坐禪。

【摸象に習って】六度集經に鏡面王群盲を引いて象を摸せしむる因緣。

【眞龍を怪しむ】中子の略に、葉公子高龍を好む、居室文を雕て以て龍を象る。天龍聞て下り、頭を牖に窺ひ、尾を堂に拖く。葉公之を見て、棄て還走し、其魂魄を失ふ。是れ葉公龍を好むに非ず、夫の龍に似て龍に非ざる者を好むなりと云へり。

【寶藏自ら云云】南岳慧思の偈に、頓ニ悟心源ニ開ニ寶藏ーと。人人屋裡の大光明藏なり。冒頭の道本圓通宗乘自在の意を結す。

普勸坐禪儀 畢

學道用心集

高祖永平承陽大師撰

【■本篇述作の年代は末文より推して天福二年春道元三十五歳の時と見るべし。學道は修學辨道の謂にして其の用心に就いて十事を開き以て參學を冀はんに示す。集は十章を輯錄するを以て名く。

【菩提心を發す云ふ】第一章。菩提心は道心、これ初發心にして又究竟心なり。發菩提心無くんば他の九事皆是れ豈具となる故に第一に示す。

【頭燃を救ふ】華嚴入法界品に如救二頭燃一無レ有二厭足一と、事の最も急にして匡救の最も切要なるをいふ。

【翹足に慣ふ】大施太子抒レ海逢七日翹ノ足讃ニ弗沙佛一進滿と蒙潤ノ集註にあり。至極の精進にして之を慣習せよの意。

【毛嬙西施】毛嬙

第一　菩提心を發すべき事

右菩提心とは多名一心なり。龍樹祖師の曰はく、世間の生滅無常を觀ずるの心も亦菩提心と名く。然れば乃ち此心に依るは菩提心たるべき者か。誠に夫れ無常を觀ずるの時、吾我の心生ぜず名利の念起らず、時光の太だ速かなることを恐怖す、所以に行道は頭燃を救ふ、身命の牢からざることを顧眄す、所以に精進は翹足に慣ふ。縱ひ緊那迦陵讃歎の音聲を聞くも夕の風耳を拂ふ、毛嬙西施美妙の容顏を見るも、朝の露眼を遮る。已に聲色の繫縛を離るれば、自ら道心の理致に合はんか。往古來今、或は寡聞の士を聞き、或は少見の人を見るに、多くは名利の坑に墮して永く佛道の命を失す、哀むべく惜しむべし、知らずんばあるべからず。縱ひ權實の妙典を讀む有り、縱ひ顯密の敎籍を傳ふる有るも、未だ名利を抛たざれば發心と稱せず。有が云はく、菩提心とは無上正等覺心なり、名聞利養に拘るべからず。有が云はく、一念三千の觀解なり。有が云はく、一念不生の法門なり。有が云はく、入佛界の心なりと。是の如きの輩は未だ菩提心を知らず、猥に菩提心を謗す。

は越王の寵姿、西施は越王范蠡が計を用ひて之を呉王に献ぜし美人なり

【一念三千ノ觀解】天台十乘觀法の第一觀不思境の文。

【一念不生の法門】華嚴宗五教を以て一代の聖教を判釋する第四頓教の文一念不生即名爲佛、不依地位漸次故說爲頓也と

【入佛界の心】龍樹菩提心論に若人求佛慧通達菩提心、父母所生身速證大覺位此文の註に依斯文入佛界心爲菩提心也とす

【六十二見】外道は我見を本として之に斷常の二見を立つ、五蘊の一一に蘊大我小、我大蘊小、離蘊是我、即蘊是我の四句あるを以て二十をなす、この二十ともに過、現、未の三世を歴、故に六十、之

佛道の中に於て遠うして遠し。試に吾我名利の當心を顧みよ、一念三千の性相を融ずるや否や、一念不生の法門を證するや否や、唯貪名愛利の妄念のみ有つて更に菩提道心の取るべき無きをや。古來得道得法の聖人、同聚の方便有りと雖も、未だ名利の邪念有らず、法執すら尚無し、況んや世執をや。謂ゆる菩提心とは前來云ふところの無常を觀ずるの心、便ち是れ其一なり、全く狂者の指す所に非ず、彼不生の念三千の相は發心以後の妙行なり。猥にすべからざるものか。唯暫く吾我を忘れて潜に修す、乃ち菩提心の親しきなり、所以に六十二見は我を以て本と爲す。若し我見起るの時は靜坐觀察せよ、今我身體内外の所有、何を以て本と爲んや、身體髮膚は父母に稟く、赤白の二滴始終是れ空なり、所以に我に非ず。心意識智壽命を繫ぐ、出入の一息畢竟如何、所以に我に非ず、彼此執るべき無きをや。迷者は此を執り、悟者は之を離る、而るを無我に我を計し、不生に生を執す。佛道の行ずべきを行ぜず、世情の斷ずべきを斷ぜず、實法を厭ひ妄法を求む、豈錯らざらんや。

第二　正法を見聞して必ず修習すべき事

右忠臣一言を獻ずれば數回天の力有り。佛祖一語を施さば回心せざるの人莫し。明主に非ざるよりは忠言を容るること無く、拔群に非ざるよりは佛語を容るることなし、如し回心せざるが如きは、順流生死之れ未だ斷ぜず、如し忠言を容れざるが如きは治國德政之れ未だ行はれざるなり。

第三　佛道は必ず行に依つて證入すべき事

右俗に曰はく、「學べば乃ち祿其中に在り」と。佛の言はく、「行ずれば證乃ち其中に在り」と。未だ嘗て學ばずして祿を得る者、行ぜずして證を得る者を聞くを得ず。縱ひ行に信法頓漸の異あるも必ず行を待つて超證す、縱ひ學に淺深利鈍の科あるも必ず學を積んで祿に預る、是れ乃ち獨り王者の優と不優と天運の應と不應とに由るべきに非ざるか。若し學に非ずして祿を受くる者ならば、誰か先王理亂の道を傳へん、若し行に非ずして證を得る者ならば誰か如來迷悟の法を了ぜん。識るべし行を迷の中に立てて證を覺の前に獲ることを。時に始めて船筏の昨夢を知つて、永く藤蛇の舊見を斷ず、是れ佛の强爲に非ず。機の周旋せしむる所なり。況んや行の招くところの者は證なり、自家の寶藏外より來らず、證の使ふところの者は行なり、心地の蹤跡豈回轉すべけんや。然れども若し證眼を廻らして行地を顧みば、一翳の眼に當る無く、將に見んとすれば白雲萬里。若し行の足を擧して證の階を擬すれば、一塵の足を受くる無く、將に踏まんとすれば天地懸隔す。是に於て退歩せば佛地を蹉跎す。天福二甲午三月九日書す。

第四　有所得の心を以て佛法を修すべからざる事

右佛法修行は、必ず先達の眞訣を稟けて私の用心を用ひざるか。況んや佛法は有心を

に根本の斷常の二見を加へて六十二見となる。

【正法を見聞し云云】第二章。正法は如來直示の教法見聞は或は經卷に從ひ或は知識に從ふなり。見聞正法は解にして必可修習は行、行解相應せんことを勸む。

【回天の力】唐張玄素爲ニ諫議ニ切直敢言、太宗欲レ修ニ洛陽一、玄素力諫中止。魏徵嘆曰張公論レ事有ニ回天之力一、可レ謂仁人之言其利溥哉と增補書言故事卷一に出づ

【佛道は必ず云云】第三章。修習は行、行は坐禪、行ぜずんば證入することと能はざるを示す。

【俗に曰はく云云】論語衞靈公篇の語

【信法頓漸】信は隨信行、信力師力に依て修行得道の漸機なり、法は隨法行、法力自力に

以ても得べからず、無心を以ても得べからず、但操行の心と道と符合せざれば、身心未だ嘗て安寧ならず、身心未だ安寧ならざれば身心安樂ならず、身心安樂ならざれば道を證するに荊棘生ず。謂ゆる操行と道と合して如何が行履せん、心取捨せず、心名利無きなり。佛法修行は是れ人の爲に修せず、今世の人の如きは佛法修行の人、其心と道と遠うして之れ遠し。若し人賞翫すれば縱ひ非道と知るも乃ち之を修行す、行し恭敬讃歎せずんば是れ正道と知ると雖も、棄てて修せず、痛ましいかな。汝等試に心を靜にして觀察せよ、此心行佛法とせんや、佛法に非ずとせんや、恥づべし恥づべし、聖眼の照すところなり。夫れ佛法修行は自身の爲にすらせず、況んや名聞利養の爲に之を修せんや、但佛法の爲に之を修すべきなり。諸佛の慈悲にして衆生を哀愍するは、自身の爲にせず他人の爲にせず、唯佛法の常なり。見ずや小蟲畜類の其子を養育す、身心艱難し、經營辛苦して、畢竟長養するに父母に於て終に益無きをや、然れども子を念ふの慈悲あり、小物すら尚然り。自ら諸佛の衆生を念ずるに似たり。諸佛の妙法は唯慈悲一條のみにあらず、普く諸門に現ず。其本、皆然なり。既に佛子と爲る、盍んぞ佛風に慣はざらんや。行者自身の爲に佛法を修すと念ふべからず、名利の爲に佛法を修すべからず、果報を得んが爲に佛法を修すべからず、靈驗を得んが爲に佛法を修すべからず、但佛法の爲に佛法を修する、乃ち是れ道なり。

第五　參禪學道は正師を求むべき事

依て修行得道の頓機なり。頓とは超越證の人、漸とは次第證の人。

【天福二】道元三十五歳、本章を書せし年月日なり。

【有所得の心云云】第四章。所得あらん事を求めて佛法を修せば人天有漏の因と成るのみならず、有所得を以て法を求むれば附佛法の外道となる

【先達の直訣】先進達者の眞傳口訣を稟受すべし、口訣とは字彙に方術要法なりと。

【操行の心】操行が心にして菩提道心と行持と相應し金剛不壞なる心操行持をいふ。

【佛法の爲に修す】これ無所得の修行なり、自他不二法界平等の修行といふ。之を修すとは佛法を修するなり

【參禪學道は云云】第五章。正師を求

めて印可證明を得ざれば眞の佛法に非ず、己見を誇つて佛法とすべからざるを誡む。

【古人云はく】天台の湛然妙樂大師の語。

【日夜云云】華嚴第六法首菩薩文殊大士に答ふる偈に云はく、譬如下貧窮人日夜數二他寶一自無中半錢分上多聞亦如レ是と。

右古人云はく「發心正しからざれば萬行空しく施す」と。誠なるかな此言、行道は導師の正と邪とに依るべきか、機は良材の如く、師は工匠に似たり、縱ひ良材たりと雖も、良工を得ざれば綺麗未だ彰れず、縱ひ曲木なりと雖も、若し好手に遇はば妙功忽ち現る、師の正邪に隨つて悟の眞僞有り、之を以て曉るべし。但し我國は昔より正師未だ在らず。何を以てか之が然ることを知るや、言を見て察す、流を酌んで源を討ぬるが如し。我朝古來の諸師篇集の書籍、弟子に訓へ人天に施す。其言是れ青く、其語未だ熟せず、未だ學地の頂に到らず、何んぞ證階の邊に及ばん。只文言を傳へ、名字を誦せしむ、日夜他の寶を數へて自ら半錢の分なしと。古の責之に在り、或は人をして心外の正覺を求めしめ、或は人をして他土の往生を願はしむ、惑亂此より起り、邪念此を職とす。縱ひ良藥を與ふと雖も、銷する方を教へずんば病と作ること毒を服するよりも甚し。我朝古より良藥を與ふる人無きが如し、藥毒を銷するの師未だ在らず、是を以て生病除き難く老死何ぞ免れん。皆是れ師の咎なり、全く機の咎に非ず。所以は何ん、人の師たる者、人をして本を捨て末を逐はしむるの然らしむるなり、自解未だ立せざる以前、偏に己我の心を專にして、濫に他人をして邪境に墜つることを招かしむ。哀れむべし、師たるものすら未だ是邪惑を知らず、弟子何すれば是非を覺了せんや。悲しむべし、邊鄙の小邦佛法未だ弘通せず、正師未だ出世せず。若し無上の佛道を學ばんと欲せば、遙に宋土の知識を訪ふべし。遙に心外の活路を顧るべし、正師を得ざれば學ばざるに如かず。夫れ正師は年老耆宿を問は

ず、唯正法を明めて正師の印證を得るなり。文字を先とせず、解會を先とせず、格外の力量あり、過節の志氣有りて、我見に拘らず、情識に滯らず、行解相應する、是れ乃ち正師なり。

第六　參禪知るべき事

右參禪學道は一生の大事なり、忽にすべからず、豈卒爾ならんや。古人臂を斷ち指を斬る神丹の勝躅なり。昔は佛家を捨て國を捐つ行道の遺蹤なり。今の人云はく、「行じ易きの行を行ずべし」と。此言尤も非なり、太だ佛道に合はず。若し事を專にして、以て行を擬せば、偃臥猶倦し、一事に懶ければ萬事に懶し、易を好むの人は自ら道器に非ざることを知る。況んや今世流布の法は、此れ乃ち釋迦大師無量劫來難行苦行、然して後に乃ち此法を得たり。本源既に爾なり、流波豈易かるべけんや。道を好むの士は易行に志すこと莫れ、若し易行を求めば定んで實地に達せず、必ず寶所に到らざらん者か。古人大力量を具するすら尙言ふ、「行じ難し」と。識るべし、佛道の深大なることを。若し佛道本より行じ易き者ならば古來大力量の士難行難解と言ふべからず、今人を以て古人に比するに九牛の一毛にだも及ばず、而るに此小根薄識を以て、縱ひ力を勵まして、以て難行能行に擬するに、猶古人の易行易解にだも及ぶべからず。今人の好む所の易解易行の法は其れ是れ何ぞや。已に世法に非ず、又佛法に非ず、未だ天魔波旬の行にも及ばず、未だ外道二

【行解相應】達磨答二揚衒之一之語に明二佛心宗一行解相應名レ之曰レ祖と。

【參禪知るべき事】第六章、參禪學道上知るべき事多多あり約して五とす（一）擧レ是譏レ非、（二）示二調心事一、（三）廣引二諸證一、（四）正示二參禪法一、（五）結誡二邪解一是なり。

【臂を斷ち指を斬る】斷臂は二祖慧可、斬指は倶胝和尚輪下の童子。

【家を捨て云云】世尊釋氏の王家を捨てて出家し摩訶陀の大國を弊履の如く捐つ。

【心操を調ふ】調は調和もみやわらげるなり、稜角を除く、調心の秘訣は無我なり。
【長齋梵行】齋は戒なり、中(正午)を過ぎて食せざるを齋と爲す、比丘は日中に一食、淸淨にして自活し、身心を端肅して安禪入道して以て修行の常法とし、之を長齋と爲さしむ。梵行は梵は離欲淸淨の義にして戒律を嚴淨する行持を梵行といふ。
【釋迦老子云はく】首楞嚴經卷六觀音圓通下の文。
【神秀上座】黃梅山五祖弘忍禪師會下七百中の俊髦、北漸の祖、北宗禪を唱ふ。
【曹溪高祖】黃梅五祖下の碓房に在りし盧能、五祖の衣鉢を得て六祖位を嗣ぎ後韶州府の曹溪に入りて寶林

乘の行にも及ばず、凡夫迷妄の甚しきと云ふべきか。縱ひ出離に擬すと雖も、還つて是れ無窮の輪廻なり。其骨を折り髓を碎くを觀るに亦難からずや。心操を調ふるの事最も難し、長齋梵行も亦難からずや、身行を調ふるの事尤も難し、若し粉骨貴むべくんば之を忍ぶ者昔より多しと雖も、得法の者惟れ少し、齋行の者貴むべくんば古より多しと雖も悟道の者惟れ少し、是れ乃ち心を調ふること甚だ難きが故なり。聰明を先と爲ず、學解を先と爲ず、心意識を先と爲ず、念想觀を先と爲ず、向來都て之を用ひずして、而して身心を調へて以て佛道に入るなり。釋迦老子云はく「觀音流を入して所知を亡ず」と。即ち此意なり、動靜の二相了然として生ぜず、即ち之れ調なり。若し聰明博解を以て佛道に入るべくんば神秀上座其人なり、若し庸體卑賤を以て佛道を嫌ふべくんば、曹溪高祖豈敢てせんや。佛道を傳へ得るの法は聰明博解の外に在り、事是に於て明かなり、探つて尋ぬべし顧みて參ずべし。又年老耆及をも嫌はず、幼稚壯齡をも嫌はず、趙州は六旬餘にして始めて參ず、然りと雖も祖席の英雄なり、鄭娘は十三歳にして久學す、能く叢林の拔萃なり。佛法の威は加と不加とに見れ參と不參とに分る。或は教家の久習、或は世典の舊才も皆禪門を訪ふべし、其例是れ多し。南嶽の慧思は多材の人なり、尚達磨に參ず、永嘉の玄覺は秀逸の士なり已に大鑑に參ず、法を明め道を得るは、參師の力たるべし。但し宗師に參問するの時、師の說を聞いて己見に同うすること勿れ、若し已見に同うすれば師の法を得ざるなり、參師問法の時、身心を淨うし、耳目を靜にし、師の法を聽受して、更に餘念を

寺に開法す。南頓の祖、北宗禪に對して南宗禪といふ

【鄭頌は十三藏】十三は十二の寫誤なるべし、類聚九卷に鄭十三頌十二の時師結に隨つて三山に列る、後に禮拜して起つ云云。鄭十三とは鄭氏十三番目の頌といふ意、年齡にあらず

【南嶽の慧思】は佛祖統紀卷六にあり、興禪護國論中卷に云はく、思禪師値二達磨大師一家二敎示二と。又天台觀心論與批に、嵩山少林寺達磨大師以二禪法一傳二授南岳思禪師一、以二此法一傳二授智者大師一と。

【永嘉の玄覺】五燈會元に、師諱玄覺、本郡戴氏子、早歳出家、徧探二三藏一、精二天台止觀圓明法門一、於二四威儀中一常冥二禪觀一、後因二左溪玄朗禪師激勵一與二東陽策禪

交へざれ、身心一如にして水を器に瀉すが如くせよ、若し能く是の如くならば方に師の法を得ん。今愚魯の輩、或は文籍を記し、或は先聞を積み、以て師の說に同うす、此時唯己見古語のみ有つて師の語未だ契はず。或は一類あり、己見を先として敎家を拔き一兩語を記持して以て佛法と爲す、後に明師宗匠に參じて法を聞くの時、若し己見に同じければ是と爲し、若し舊意に合はずんば非と爲す、縱ひ塵沙劫も尚迷者たらん、尤も哀れむべし。參學識るべし、佛道は思量と分別と卜度と觀想と知覺と慧解との外に在ることを。若し此等の際に在らば、生來常に此等の中に在りて常に此等を翫ぶ。何が故ぞ今に佛道を覺せざるや、學道は思量分別等の事を用ふべからず、常に思量等を帶て吾身を以て檢點せば是に於て明鑑なる者なり。其所入の門は得法の宗匠有つて之を悉す、文字法師の及ぶところに非ざるのみ。天福甲午淸明の日書す。

第七　佛法を修行して出離を欣求する人は須らく參禪すべき事

右佛法は諸道に勝れたり、故に人之を求む。如來の在世には全く二敎無く全く二師無し。大師釋尊唯無上菩提を以て衆生を誘引するのみ。迦葉正法眼藏を傳へてより以來、西天二十八代東土六代、乃至五家の諸祖嫡嫡相承して更に斷絕無し。然れば則ち梁の普通中より以後、始めて僧徒より乃ち王臣に至るまで、拔群の者は歸せずといふこと無し、誠に夫れ勝を愛すべき所以の者は勝を愛すべきなり。葉公の龍を愛するが如くなるべからざるもの

師同詣曹溪一宿而覺故回一宿覺云云。
【大鑑】六祖慧能禪師の謚號。
【天福甲午清明の日】天福甲午は二年にして祖壽三十五歳清明日は寒食節の後二日目なり冬至の後一百五日に火を禁じて冷食す。之を寒食といふ清明日は三月の節に入る日に當る
【佛法を修行して云云】第七章。修行佛法は所修の法、欣求出離人は能修の利、須參禪は所修の要なり。三界出離の法は參禪を以て捷徑と爲す所以を示す章なり。
【西天二十八代】印度に於て釋尊摩訶迦葉尊者に法を付す故に尊者を初祖とし嫡嫡相承し來り達摩大師に至て二十八代なり。
【東土】東土は支那、達摩大師を初

か。神丹以東の諸國、文字の教網海に布き、山に遍し、山に遍しと雖も、雲の心無く、海に布くと雖も、波の心を枯らす、愚者は之を嗜む、譬へば魚目を撮つて以て珠と執するが如し、迷者は之を翫ぶ、譬へば燕石を藏して以て玉と崇むるが如し。多く魔境に墮して屢自身を損ふ。哀むべし邊鄙の境、邪風扇ぎ易く正法通じ難し。然りと雖も、神丹一國は已に佛の正法に歸す、我朝高麗等は佛の正法未だ弘通せず、何が爲ぞ、何が爲ぞ。高麗國は猶正法の名を聞く、我朝未だ嘗て聞くことを得ず、前來入唐の諸師皆教網に滯りし故なり、佛書を傳ふと雖も佛法を忘るるが如し。其益是れ何ぞ、其功終に空し、是れ乃ち學道の故實を知らざる所以なり。哀むべし徒に勞して一生の人身を過すことを。夫れ學佛道は初め門に入るの時、智識の教を聞いて教の如く修行す。此時知るべき事有り、謂ゆる法我を轉じ、我法を轉ずるなり、我能く法を轉ずるの時、我は強く法は弱し、法還つて我を轉ずるの時、法は強く我は弱し、佛法從來此兩節あり、正嫡に非ざれば未だ嘗て之を知らず、衲僧に非ざれば名すら尚聞くこと罕なり。若し此故實を知らざる者は學道未だ辨ぜず、正邪奚ぞ分別せんや。今の參禪學道の人は、自ら此故實を傳授す、所以に誤らざるなり、餘門には無し。佛道を欣求するの人は、參禪に非ずんば眞の道を了知すべからざるなり。

第八　禪僧行履の事

右佛祖より以來直指單傳、西乾の四七東地の六世、絲毫を添へず、一塵を破る莫し。衣は曹溪に及び法は沙界に周し、時に如來の正法眼藏亙唐に盛なり。其法の爲體、模索することを得ず、求覓することを得ず。見處知を忘じ得時心を超ゆ、面目を黄梅に失し、臂腕を少室に斷ず、髓を得、心を翻して風流を買ひ、邪を設け步を退いて便宜に墮つ。然り而して心に於ても身に於ても、住すること無く著すること無く、留まらず滯らず。趙州に僧問ふ、「狗子還つて佛性有りや亦無しや」州云はく「無」無の字の上に於て擬量し得てんや、擺帶し得てんや、全く巴鼻無し。請ふ試に手を撒せよ、且つ手を撒して看よ。身心如何、行李如何、生死如何、佛法如何、世法如何、山河大地人畜家屋、畢竟如何。看來り看去つて、自然に動靜の二相了然として生ぜず、此不生の時是れ頑然なるにあらず。人の之を證するは無く、之に迷ふものは惟れ多し、參禪の人且く半途にして始めて得たり、全途にして辭すること莫れ、祈禱祈禱。

第九　道に向つて修行すべき事

右學道の丈夫は、先づ須らく向道の正と不正とを知るべし、夫れ釋尊調御菩提樹下に坐して、明星を見るを得、忽然として頓に無上乘の道を悟る。其悟る所の道は、聲聞緣覺等の能く及ぶところに非ず、佛能く自ら悟り、佛、佛に傳へて今に斷絕せず、其悟を得る者豈佛に非ざらんや、謂ゆる道に向ふ者は佛道の際涯を了するなり、佛道の樣子を明む

祖とし大鑑慧能禪師に相承して六代と爲す。

【五家の諸祖】潙仰宗の祖潙山仰山、臨濟宗の祖臨濟、曹洞宗の祖曹溪洞山或は曹山、雲門宗の祖雲門、法眼宗の祖法眼等。

【梁の普通中】達磨大師初めて支那に到着せられし年月を梁の武帝普通八年丁未九月廿一日とす。諸說あり是れ其一說なり。

【葉公の龍を愛す】普勸坐禪儀の勿怪眞龍の項に詳出せり。

【魚目燕石】韓愈文集に有下表二燕石一而懷二玄圃一帶上魚目一而遊二漲海一。祇取レ笑耳と。註に燕石似レ玉魚目似レ珠玄圃漲海珠玉多處也なり。

【禪僧行履の事】第八章。參禪の僧皆是れ禪僧なり、僧行履は日常の運作

顚倒行住坐臥にして脚跟常に佛地にし往來し住在することを示す。

【西乾】乾は天、西天、印度のこと

【道に向つて云云】第九章。眞正の佛道に向つて修行すべし、然らずんば多劫の修行も却て魔業となり終らんことを誡む。

【調御】如來十號の一。

【父を捨て云云】法華經信解品長者窮子の意を以て述ぶ。

【直下承當の事】第十章。直下はそのまま、承當はうけとりうなづくなり。此身心を以て直に佛を證する是れ承當なりの本文に合當す。

るなり。佛道は人人の脚跟下なり、道に礙へられて當處に明了、悟に礙へられて當人圓成す。是に因つて縱ひ十分の會を擧すと雖も、猶一半の悟に落つるが如きか。是れ則ち向道の風流なり、而今學道の人未だ道の通塞を辨せず、强ひて見驗之れ有らんことを好む、錯らざるは阿誰ぞ。父を捨てて逃逝し、寶を棄てて跉跰す、長者の一子たりと雖も久しく客作の賤人と作る、良に以あるなり、夫れ學道は道に礙へらるることを求む、道に礙へらるる者は悟迹を忘ずるなり、佛道を修行する者は先づ須らく佛道を信ずべし、佛道を信ずる者は須らく自己本道の中に在つて、迷惑せず顚倒せず增減無く悞謬無しといふことを信ずべし。是の如きの信を生じ是の如きの道を明め、依つて之を行ず、乃ち學道の本基なり。其風規たる、意根を坐斷して知解の路に向はざらしむ、是れ乃ち初心を誘引するの方便なり。其後、身心を脫落し迷悟を放下する第二の樣子なり。大凡自己佛道に在りと信ずるの人最も得難きなり、若し正しく道に在りと信ぜば、自然に大道の通塞を了じ迷悟の職由を知らん。人試に意根を坐斷せよ、十が八九は忽然として道を見ることを得ん。

第十　直下承當の事

右身心を決擇するに自ら兩般あり、參師聞法と工夫坐禪となり、聞法は心識を遊化し、坐禪は行證を左右にす、是を以て佛道に入るは、尙一を捨てては承當すべからず。夫れ人は皆身心有り、作は必ず强弱有り、勇猛と昧劣となり、也は動、也は容、此身心を以

て直に佛を證する、是れ承當なり。謂ゆる從來の身心を回轉せず、但他の證に隨ひ去るを直下と名け、承當と名くるなり。唯他に隨ひ去る、所以に舊見に非ず、唯承當し去る、所以に新巢に非ざるなり。

學道用心集畢

正法眼藏

高祖永平承陽大師撰

正法眼藏辨道話

諸佛如來、ともに妙法を單傳して阿耨菩提を證するに、最上無爲の妙術あり。これただほとけ佛にさづけて、よこしまなることなきは、すなはち自受用三昧その標準なり。この三昧に遊化するに端坐參禪を正門とせり。この法は人人の分上に、ゆたかにそなはれりといへども、いまだ修せざるにはあらはれず、證せざるにはうることなし。はなてばてにみてり、一多のきはならんや。かたればくちにみつ、縱横きはまりなし。諸佛のつねにこのなかに住持たる、各各の方面に知覺をのこさず、群生のとこしなへにこのなかに使用する、各各の知覺に方面あらはれず。いまをしふる功夫辨道は、證上に萬法をあらしめ、出路に一如を行ずるなり。その超關脫落のとき、この節目にかかはらんや。予發心求法よりこのかた、わが朝の遍方に知識をとぶらひき。ちなみに建仁の全公をみる。あひしたがふ霜華、すみやかに九廻をへたり。いささか臨濟の家風をきく。全公は祖師西和尚の上足として、ひとり無上の佛法を正傳せり。あへて餘輩のならぶべきにあらず。予かさねて大宋國におもむき、

【一】本書を正法眼藏と名くる所以は、釋尊靈山會上にて金波羅華を拈じ給ふに大衆措くことなし、唯迦葉尊者のみ破顔、微笑す、世尊曰く、我に正法眼藏涅槃妙心あり、摩訶迦葉に付屬すと。これを語原とす。佛正法を云ふ、眼と藏とは正法の意義を明にす。眼は能照の義、佛正法を以て一切を照すの意、藏は含藏の義、如來一代の藏經を含攝して餘すなきの意。道元禪師は如來嫡傳五十一代能くこの正法眼藏を傳持し來て本朝に開顯說示す、故に九十五卷の說法を悉く正法眼藏と名く。

【辨道話】佛道を辨內すると道業を成辨するとの二義あり、前者は理智、後者は實踐、二義併せ用ふべし。平

知識を兩浙にとぶらひ、家風を五門にきく。つひに大白峯の淨禪師に參じて、一生參學の大事ここにをはりぬ。それよりのち大宋紹定のはじめ、本郷にかへりし、すなはち弘法救生をおもひとせり、なほ重擔をかたにおけるがごとし。しかあるに弘通のこころを放下せん、激揚のときをまつゆゑに、しばらく雲遊萍寄して、まさに先哲の風をきこえんとす。ただしおのづから名利にかかはらず、道念をさきとせん、眞實の參學あらんか。いたづらに邪師にまどはされて、みだりに正解をおほひ、むなしく自狂にゑうて、ひさしく迷鄕にしづまん、なにによりてか般若の正種を長じ、得道の時をえん。貧道はいま雲遊萍寄をこととすれば、いづれの山川をかとぶらはん。これをあはれむゆゑに、まのあたり大宋國にして禪林の風規を見聞し、知識の玄旨を稟持せしを、しるしあつめて、參學閑道の人にのこし、佛家の正法をしらしめんとす、これ眞訣ならんかも。いはく大師釋尊靈山會上にして、法を迦葉につけ、祖祖正傳して、菩提達磨尊者にいたる。尊者みづから神丹國におもむき、法を慧可大師につけき。これ東地の佛法傳來のはじめなり。かくのごとく單傳して、おのづから六祖大鑑禪師にいたるごとき、眞實の佛法まさに東漢に流演して、節目にかかはらぬむねあらはれき。ときに六祖に二位の神足ありき。南嶽の懷讓と、靑原の行思となり。ともに佛印を傳持して、おなじく人天の導師なり。その二派の流通するに、よく五門ひらけたり、いはゆる法眼宗、潙仰宗、曹洞宗、雲門宗、臨濟宗なり。見在大宋には、臨濟宗のみ天下にあまねし。五家ことなれども、ただ一佛心印なり。大宋國も後漢よりこのかた、

易に辨道に就て談話する一篇なり。

【自受用三昧】他受用に對する自受用に非ず、光明の蓋天蓋地なるをいふ。

【正門】坐禪は如來の正法にして唯一の直路正面の法門とす。

【證上に萬法】平等の上に差別を置いて平等差別の二見無し。

【出路に一如】差別の世界に活動しながら平等の本位を離れず、故に自在なり。之を自受用三昧といひ功夫辨道といふ。

【超關脫落】平等差別の境界線の脫れたるをいふ。

【建仁の全公】全公は明全和尙にして榮西禪師の嗣、建仁寺の第二世。道元禪師相隨ふこと前後九年。宋天童山に在て嘉祿元年寂す。

【西和尙】榮西禪師。黄龍派虛菴懷敞の嗣、日本臨濟宗第一の祖。建保三年五月寂。

【兩浙】錢塘江を浙江と稱す。昔の吳の地を浙西、越の地を浙東といふ。唐土の五山は皆兩浙の間に在り、徑山、靈隱、淨慈を浙西の三寺、天童、育王を浙東の兩寺とす。

【五門】潙仰、臨濟、曹洞、雲門、法眼の五家の門風。

【大白峰の淨禪師】天童山景德寺の長翁如淨禪師、如來嫡傳第五十代の祖にして道元禪師の師。宋の紹定二年寂、壽六十六。

【大宋紹定】道元禪師廿四歲貞應二年、宋朝嘉定十六年入宋、廿八歲安貞元年、宋の寶慶三年歸朝。但し肥後川尻着船は安貞二年正月にして宋

教籍あとをたれて、一天にしけりといへども、雌雄いまださだめざりき。祖師西來ののち直に葛藤の根源をきり、純一の佛法ひろまれり、わがくにもまたしかあらんことをこひねがふべし。いはく、佛法を住持せし諸祖ならびに諸佛、ともに自受用三昧に端坐依行するを、その開悟のまさしきみちとせり。西天東地さとりをえし人、その風にしたがへり。これ師資ひそかに妙術を正傳し、眞訣を稟持せしによりてなり。宗門の正傳にいはく、この單傳正直の佛法は、最上のなかに最上なり、參見知識のはじめより、さらに燒香、禮拜、念佛、修懺、看經をもちゐず。ただし打坐して身心脫落することをえよ。もし人一時なりといふとも、三業に佛印を標し、三昧に端坐するとき、遍法界みな佛印となり、盡虛空ことごとくさとりとなる。ゆゑに諸佛如來をしては本地の法樂をまし、覺道の莊嚴をあらたにす。および十方法界、三途六道の群類、みなともに一時に身心明淨にして、大解脫地を證し、本來面目現ずるとき、諸法みな正覺を證會し、萬物ともに佛身を使用して、すみやかに證會の邊際を一超して、覺樹王に端坐し、一時に無等等の大法輪を轉じ、究竟無爲の深般若を開演す。これらの等正覺さらにかへりて、したしくあひ冥資するみちかよふがゆゑに、この坐禪人、確爾として身心脫落し、從來雜穢の知見思量を截斷して、天眞の佛法に證會し、あまねく微塵際そこばくの諸佛如來の道場ごとに、佛事を助發し、ひろく佛向上の機にかうぶらしめて、よく佛向上の法を激揚す。このとき十方法界の土地艸木、牆壁瓦礫、みな佛事をなすをもて、そのおこすところの風水の利益にあづかるともがら、みな甚妙不

可思議の佛化に冥資せられて、ちかきさとりをあらはす。この水火を受用するたぐひ、みな本證の佛化を周旋するゆゑに。これらのたぐひと共住して同語するもの、またことごとくあひたがひに無窮の佛德そなはり、展轉廣作して、無盡無間斷、不可思議、不可稱量の佛法を遍法界の內外に流通するものなり。しかあれども、このもろもろの當人の知覺に昏せざらしむることは、靜中の無造作にして、直證なるをもてなり。もし凡流のおもひのごとく、修證を兩段にあらせば、おのおのあひ覺知すべきなり。もし覺知にまじはらば、證則にあらず、證則には迷情およばざるがゆゑに。また心境ともに靜中の證入悟出あれども、自受用の境界なるをもて、一塵をうごかさず、一相をやぶらず、廣大の佛事、甚深微妙の佛化をなす。この化道のおよぶところの艸木土地、ともに大光明をはなち、深妙法をとくこと、きはまることなし、艸木牆壁はよく凡聖含靈のために宣揚し、凡聖含靈はかへつて艸木牆壁のために演暢す。自覺覺他の境界、もとより證相をそなへて、かけたることなく、證則おこなはれて、おこたるときなからしむ。ここをもて、わづかに一人一時の坐禪なりといへども、諸法とあひ冥し、諸時とまどかに通ずるがゆゑに、無盡法界のなかに去來現に、常恆の佛化道事をなすなり。彼彼ともに一等の同修なり、同證なり、ただ坐上の修のみにあらず、空をうちてひびきをなすこと、撞の前後に妙聲綿綿たるものなり。このきはのみにかぎらんや、百頭みな本面目に本修行をそなへて、はかりはかるべきにあらず。しるべしたとひ十方無量恆河沙數の諸佛ともにちからをはげまして、佛智慧をもて

朝の紹定元年に丁る。南宋理宗の年號なり。

【雲遊萍寄】一定の伽藍に住せざるをいふ、うきぐさに喩ふ。

【靈山】耆闍崛山(Gṛdhrakūṭa)譯して靈鷲山、鷲峰鷲頭山といふ。

【迦葉】摩訶迦葉尊者、付法藏第一の祖。

【菩提達磨尊者】西天に於ける付法藏第廿八代、震旦に於ける初祖、南印度香至王の第三子、廿七祖般若多羅に嗣ぐ、梁の大通元年(一說)支那南海廣州に達し、武帝に會見して後、北魏の嵩山少林寺に面壁九年、二祖慧可等を得て、大同二年十月五日(一說)を以て坐化す

【神丹國】印度人支那を稱して神丹國或は震旦といふ

【慧可大師】達磨

大師の嗣、付法藏の第廿九代、東土の第二祖。隋の開皇十三年三月寂、壽一百七歲。唐の德宗、大祖禪師正宗普覺大師と諡す。

【六祖大鑑禪師】付法藏第三十三代、東土の第六祖、五祖大滿弘忍に嗣ぐ。唐の玄宗開元元年八月寂、壽七十六。憲宗勅して大鑑禪師と諡す。諱は慧能、俗姓は盧氏、故に盧能とも云ふ。

【南嶽の懷讓】六祖の嗣。唐の先天二年衡山即ち南嶽の般若寺に開法す。故に南嶽の名を以て聞ゆ。天寶三年八月寂。壽六十四。大慧禪師と諡す。

【青原の行思】六祖の嗣。吉州青原山靜居寺に開法。唐の玄宗開元廿八年十二月寂、壽不詳。弘濟禪師と諡號せらる。

【法眼宗】大法眼

一人坐禪の功德をはかりしりきはめんとすといふとも、あへてほとりをうることあらじ。

いまこの坐禪の功德高大なることをききをはりぬ。おろかならん人うたがふていはん、「佛法におほくの門あり、なにをもてかひとへに坐禪をすすむるや。」しめしていはく、「これ佛法の正門なるをもてなり。」とふていはく、「なんぞひとり正門とする。」しめしていはく、「大師釋尊、まさしく得道の妙術を正傳し、また三世の如來、ともに坐禪より得道せり。このゆゑに正門なることをあひつたへたるなり。しかのみにあらず、西天東地の諸祖、みな坐禪より得道せるなり、ゆゑにいま正門を人天にしめす。」とふていはく、「あるひは如來の妙術を正傳し、または祖師のあとをたづぬるによらん、まことに凡慮のおよぶにあらず。しかはあれども、讀經念佛は、おのづからさとりの因緣となりぬべし、ただむなしく坐して、なすところなからん、なにによりてかさとりをうるたよりとならん。」しめしていはく、「なんぢいま諸佛の三昧、無上の大法を、むなしく坐してなすところなしとおもはん、これを大乘を謗する人とす、まどひのいとふかき、大海のなかにゐながら、水なしといはんがごとし。すでにかたじけなく諸佛自受用三昧に安坐せり、これ廣大の功德をなすにあらずや。あはれむべし、まなこいまだひらけず、こころなほゑひにあることを。おほよそ諸佛の境界は、不可思議なり、心識のおよぶべきにあらず、いはんや不信劣智のしることをえんや。ただ正信の大機のみ、よくいることをうるなり。不信の人はたとひをしふとも、うくべきことかたし。靈山になほ退亦佳矣のたぐひあり。おほよそ心に正信おこらば、修行し參學

文益禪師を祖とす。青原下の出なり。
【潙仰宗】潙山靈祐、仰山慧寂の兩禪師を祖とす。南嶽下の出なり。
【曹洞宗】洞山良价、曹山本寂の兩禪師を祖とす。青原下の出なり。
【雲門宗】雲門文偃禪師を祖とす。青原下の出なり。
【臨濟宗】臨濟義玄禪師を祖とす。南嶽下の出なり。
【佛心印】佛印ともいふ。佛心印證にして佛面祖面毫も缺減なき心地を證するなり。正法眼藏の大精神に名く。
【師資】師は本師、資は弟子。弟子は師の法を資け擧揚するが故に。
【身心脱落】五蘊皆空と照見し、三業に佛印を標するの端的。身心共に凡夫のあくのぬけたるをいふ。

すべし、しかあらずば、しばらくやむべし。むかしより法のうるほひなきことをうらみよ。又讀經念佛等のつとめに、うるところの功德を、なんぢしるやいなや。ただしたをうごかし、こゑをあぐるを、佛事功德とおもへる、いとはかなし。佛法に擬するにうたたとほく、いよいよはるかなり。又經書をひらくことは、ほとけ頓漸修行の儀則ををしへおけるをあきらめしり、敎のごとく修行すれば、かならず證をとらしめんとなり。いたづらに思量念度をつひやして、菩提をうる功德に擬せんとにはあらぬなり。おろかに千萬誦の口業をしきりにして、佛道にいたらんとするは、なほこれながえをきたにして越にむかはんとおもはんがごとし。又圓孔に方木をいれんとせんとおなじ。文をみながら、修するみちにくらき、それ醫方をみる人の合藥をわすれん、なにの益かあらん。口聲をひまなくせる、春の田の蛙の晝夜に鳴くがごとし、つひに又益なし。いはんやふかく名利にまどはさるるやから、これらのことをすてがたし、それ利貪のこころはなはだふかきゆゑに。むかしすでにありき、いまのよになからんや、もともあはれむべし。ただまさにしるべし、七佛の妙法は、得道明心の宗匠に契心證會の學人あひしたがふて正傳すれば、的旨あらはれて稟持せらるるなり。文字習學の法師のしりおよぶべきにあらず。しかあればすなはちこの疑迷をやめて、正師のをしへにより、坐禪辨道して諸佛の自受用三昧を證得すべし。」(四)とふていはく、「いまわが朝につたはれるところの法華宗、華嚴敎、ともに大乘の究竟なり。いはんや眞言宗のごときは、毘盧遮那如來したしく金剛薩埵につたへて、師資みだりならず。その談ずるむね、即心是佛是

【佛向上】佛見法見を離れたる坐禪の當體。

【證入悟出】證悟の上の出入なり。能緣の心を出とし所緣の境を入とす。心は境をとり境は心に緣ぜらると雖も迷を超え悟を越ゆるを云ふ。

【妙聲綿綿】空を擊ちて響を成す、聲あれども前後際斷にして前なし後なし、故に其聲は妙聲にして其響は綿綿なりとす。

【一】以下十八問を設けて說示す。其一、坐禪が佛法の正門なることを明す。

【二】其二、三世の諸佛諸祖共に坐禪に依て得道せることを明す。

【三】其三、坐禪の諸佛の三昧無上の大法なることを明す。

【退亦佳矣】法華方便品云、會中五

心作佛といふて、多劫の修行をふることとなく、一座に五佛の正覺をとなふ、佛法の極妙といふべし。しかあるにいまいふところの修行、なにのすぐれたることあれば、かれらをさしおきて、ひとへにこれをすすむるや。』しめしていはく、『しるべし佛家には敎の殊劣を對論することなく、法の淺深をえらばず。ただし修行の眞僞をしるべし。艸華山水にひかれて、佛道に流入することありき。土石沙礫をにぎりて、佛印を稟持することあり。いはんや廣大の文字は萬象にあまりてなほゆたかなり。轉大法輪また一塵にをさまれり。しかあればすなはち卽心卽佛のことば、なほこれ水中の月なり。卽坐成佛のむね、さらにまたかがみのうちのかげなり。ことばのたくみにかかはるべからず。いま直證菩提の修行をすすむるに佛祖單傳の妙道をしめして眞實の道人とならしめんとなり。又佛法を傳授することは、かならず證契の人をその宗師とすべし。文字をかぞふる學者をもてその導師とするにたらず。一盲の衆盲をひかんがごとし。いまこの佛祖正傳の門下にはみな得道證契の哲匠をうやまひて佛法を住持せしむ。かるがゆゑに冥陽の神道もきたり歸依し、證果の羅漢もきたり問法するに、おのおの心地を開明する手をさづけずといふことなし。餘門にいまだきかざるところなり。ただ佛弟子は佛法をならふべし。又しるべし、われらはもとより無上菩提かけたるにあらず。とこしなへに受用すといへども、承當することをえざるゆゑに、みだりに知見をおこすことをならひとして、これを物とおふによりて、大道いたづらに蹉過す。この知見によりて空華まちまちなり。あるひは十二輪轉、二十五有の境界とおも

ひ、三乘五乘有佛無佛の見つくることなし。この知見をならふて佛法修行の正道とおもふべからず。しかあるをいまはまさしく佛印によりて萬事を放下し、一向に坐禪するとき、迷悟情量のほとりをこえて、凡聖のみちにかかはらず。すみやかに格外に逍遙し、大菩提を受用するなり。かの文字の荃罤にかかはるもの、かたをならぶるにおよばんや。（五）ことふていはく、『三學のなかに定學あり、六度のなかに禪度あり、ともにこれ一切の菩薩の初心よりまなぶところ、利鈍をわかず修行す。いまの坐禪もそのひとつなるべし。なにによりてか、このなかに如來の正法あつめたりといふや。』しめしていはく、『いまこの如來一大事の正法眼藏無上の大法を禪宗となづくるゆゑに、この問きたれり。しるべしこの禪宗の號は神丹以東におこれり、竺乾にはきかず。はじめ達磨大師嵩山の少林寺にして、九年面壁のあひだ道俗いまだ佛正法をしらず。坐禪を宗とする婆羅門となづけき。のち代代の諸祖みなつねに坐禪をもはらす。これをみるおろかなる俗家は實をしらず、ひたたけて坐禪宗といひき。いまのよには坐のことばを簡して、ただ禪宗といふなり。そのこころ諸祖の廣語にあきらかなり。六度および三學の禪定にならつていふべきにあらず。この佛法の相傳の嫡意なること一代にかくれなし。如來むかし靈山會上にして、正法眼藏涅槃妙心、無上の大法をもて、ひとり迦葉尊者にのみ付法せし儀式は、現在して上界にある天衆、まのあたりみしもの存せり、うたがふべきにたらず。おほよそ佛法はかの天衆とこしなへに護持するものなり、その功いまだふりず。まさにしるべし、これは佛法の全道なり。ならべていふべき物

千人等佛を禮して退く、增上慢にして未得謂得未證謂證此の如き失あり世尊制止し給はず如是の增上慢人は退くも亦佳なりと（取意）。

【圓孔に方木】雲居の語に、方木を得て圓孔に逼る則ち多少差別するが如しと。

【醫方をみる人】勅修清規に、後の學者復文言に膠して指歸を得ずんば猶方書を善くして藥石を廢せんが如し何の益かあらん

【四】其四、修行の眞僞を明す。

【毘盧遮那如來】諸教の本尊、譯して遍一切處、大日如來。

【一座に五佛】阿字本不生の一念の其場を立たず五佛の正覺を成ず。五佛とは東阿閦、南寶勝、中大日、西阿彌陀、北藥師、之

を金剛界の五佛といふ。

【佛家】佛正法眼藏嫡傳の宗家。敢て禪宗といはず、何ぞ曹洞宗といはんや。

【一盲の衆盲】大論に譬へば一盲見ず千盲倶に闇るが如しと。

【承當】言を承け手に當て確と呑物にして保任受用す

【十二輪轉】十二因緣なり。三界に輪廻流轉の因果を明すが故に云ふ。

【二十五有】有情の三界に流轉する世界を分別したる名、四洲四惡趣六欲並梵天四禪四空處無想五那含。

【五乘】聲緣菩の三乘に人天の二乘を加ふ。

【荃罤】魚を得るには荃、兎を得るには罤を要す。魚を得て後荃を忘れ兎を得て後罤を忘るべし。文字言語

なし。』(六)とふていはく、『佛家なにによりてか四儀のなかに、ただし坐にのみおほせて、禪定をすすめて證入をいふや。』しめしていはく『むかしよりの諸佛、あひつぎて修行し證入せるみち、きはめしりがたし。ゆゑをたづねば、ただ佛家のもちゐるところをゆゑとしるべし、このほかにたづぬべからず。ただし祖師ほめていはく、坐禪はすなはち安樂の法門なり、はかりしりぬ四儀のなかに安樂なるゆゑか。いはんや一佛二佛の修行のみちにあらず、諸佛諸祖にみなこのみちあり。』(七)とふていはく『この坐禪の行はいまだ佛法を證會せざらんものは坐禪辨道してその證をとるべし。すでに佛正法をあきらめえん人は、坐禪なにのまつところかあらん。』しめしていはく『癡人のまへにゆめをとかず、山子の手には舟棹をあたへがたしといへども、さらに訓を垂るべし。それ修證はひとつにあらずとおもへる、すなはち外道の見なり。佛法には修證これ一等なり。いまも證上の修なるゆゑに、初心の辨道すなはち本證の全體なり。かるがゆゑに修行の用心をさづくるにも、修のほかに證をまつおもひなかれとをしふ。直指の本證なるがゆゑなるべし。すでに修の證なれば證にきはなく。證の修なれば修にはじめなし。ここをもて釋迦如來、迦葉尊者、ともに證上の修に受用せられ、達磨大師、大鑑高祖、おなじく證上の修に引轉せらる。佛法住持のあとみなかくのごとし。すでに證をはなれぬ修あり。われらさいはひに一分の妙修を單傳せる初心の辨道、すなはち一分の本證を無爲の地にうるなり。しるべし修をはなれぬ證を染汚せざらしめんがために佛祖しきりに修行のゆるくすべからざるとをしふ。妙修を放下すれば

本證手の中にみてり。本證を出身すれば妙修通身におこなはる。又まのあたり大宋國にしてみしかば諸方の禪院みな坐禪堂をかまへて、五百六百および一二千僧を安じて日夜に坐禪をすすめき。その席主とせる、傳佛心印の宗師に佛法の大意をとぶらひしかば修證の兩段にあらぬむねをきこえき。このゆゑに、門下の參學のみにあらず。求法の高流、佛法のなかに眞實をねがはん人、初心後心をえらばず、凡人聖人を論ぜず、佛祖のをしへにより、宗匠の道をおふて坐禪辨道すべしとすすむ。きかずや、祖師のいはく、修證はすなはちなきにあらず、染汙することは得じ。又いはく、道をみるもの道を修すと。しるべし、得道のなかに修行すべしといふことを。』(八)とふていはく、『わが朝の先代に教をひろめし諸師、ともにこれ入唐傳法せしとき、なんぞこのむねをさしおきて、ただ教をのみつたへし。』しめしていはく、『むかしの人師この法をつたへざりしことは、時節のいまだいたらざりしゆゑなり。』(九)とふていはく、『かの上代の師この法を會得せりや。』しめしていはく、『會せば通じてん。』(一〇)とふていはく、『あるがいはく、生死をなげくことなかれ、生死を出離するに、いとすみやかなるみちあり、いはゆる心性の常住なることはりをしるなり。そのむねたらく、この身體は、すでに生あれば、かならず滅にうつされゆくことありとも、この心性はあへて滅することなし。よく生滅にうつされぬ心性、わが身にあることをしりぬれば、これを本來の性とするがゆゑに、身はこれかりのすがたなり、死此生彼さだまりなし。心はこれ常住なり、去來現在かはるべからず。かくのごとくしるを生死をはなれたりとはいふなり。

は意を得るまでの方便に過ぎず、故に捨も魚兎の筌の如しとなす。筌はたらき、蹄はあみ。

【五】其五、佛法の全道なることを明す。

【婆羅門】印度古代四姓中の最上位僧侶階級の稱、僧侶のこと。

【佛法の全道】道は道取、言ふと云ふ意、坐禪の當相は佛法を全分道取し盡して不足無し。

【六】其六、坐禪は安樂の法門なることを明す。

【四儀】行住坐臥の四威儀。

【このみち】結跏趺坐卽ち坐禪の方式。

【七】其七、修證の一等なることを明す。

【證上の修】坐禪は本來成佛の上の修行なり、故に證悟を待たず。修するところに本證の

光明現前す、一一に證の故に修の一一に光明を放つ。
【證を染汙】修と證とを相對して二となすを染汙と云ふ。
【妙修】本證の上の修禪を妙修とす。證果を期せざる修の故に。
【祖師のいはく〜】南嶽懷讓禪師の語。
【又いはく】同、空山本淨禪師の語。
【八】其八、古人未得の故を明す。
【九】其九、先德も會得せざりしを明す。
【十】其十、心常相滅の見を破して性相不二の道理を示す。
【先尼外道】心常相滅の見を執し神我の存在を認むる一種の學派。
【慧忠國師】六祖大鑑禪師に嗣ぐ。南陽白崖山に居る故に南陽の慧忠國師と稱す。唐の太

このむねをしるものは、從來の生死永くたえて、この身をはるとき、性海にいる。性海に朝宗するとき、諸佛如來のごとく、妙德まさにそなはる。いまはたとひしるといへども、前世の妄業になされたる身體なるがゆゑに、諸聖とひとしからず。いまだこのむねをしらざるものは、ひさしく生死にめぐるべし。しかあればすなはち、ただいそぎて心性の常住なるむねを了知すべし。いたづらに閑坐して一生をすぐさん、なにのまつところかあらん。かくのごとくいふむね、これはまことに諸佛諸祖の道にかなへりやいかん。しめしていはく、『いまいふところの見、またく佛法にあらず。先尼外道が見なり。いはく、かの外道の見は、わが身うちにひとつの靈知あり。かの知すなはち緣にあふところに、よく好惡をわきまへ、是非をわきまふ。痛痒をしり、苦樂をしる。みなかの靈知のちからなり。しかあるにかの靈性はこの身の滅するとき、もぬけてかしこにうまるる、ゆゑにここに滅すとみゆれども、かしこの生あれば、ながく滅せずして常住なりといふなり。かの外道が見かくのごとし。しかあるを、この見をならふて佛法とせん、瓦礫をにぎりて金寶とおもはんよりもなほおろかなり。癡迷のはづべき、たとふるにものなし。大唐國の慧忠國師ふかくいましめたり。いま心常相滅の邪見を計して、諸佛の妙法にひとしめ、生死の本因をおこして生死をはなれたりとおもはん、おろかなるにあらずや、もともあはれむべし。ただこれ外道の邪見なりとしれ、みみにふるべからず。ことやむことをえず、いまなほあはれみをたれて、なんぢが邪見をすくはば、しるべし佛法にはもとより身心一如にして、性相不二なりと談

暦十年十二月寂、勅して大證國師と謚す。

【二】其十一、禪戒一致の旨を明す【その分】破戒したればとて自受用三昧の分を失せしには非ず。

ずる、西天東地おなじくしれるところ、あへてたがふべからず。いはんや常住を談ずる門には、萬法みな常住なり、身と心とをわくことなし。寂滅を談ずる門には、諸法みな寂滅なり、性と相とをわくことなし。しかあるをなんぞ身滅心常といはん、正理にそむかざらんや。しかのみならず、生死はすなはち涅槃なりと覺了すべし、いまだ生死のほかに涅槃を談ずることなし。いはんや心は身をはなれて常住なりと領解するをもて、生死をはなれたる佛智に妄計すといふとも、この領解知覺の心は、すなはちなほ生滅して、またく常住ならず。これはかなきにあらずや。常觀すべし。身心一如のむねは、佛法のつねの談ずるところなり。しかあるに、なんぞこの身の生滅せんとき、心ひとり身をはなれて生滅せざらん。もし一如なるときあり、一如ならぬときあらば、佛説おのづから虚妄にありぬべし。又生死はのぞくべき法ぞとおもへるは、佛法を厭ふつみとなる、つつしまざらんや。しるべし佛法に心性大總相の法門といふは、一大法界をこめて性相をわかず、生滅をいふことなし。菩提涅槃におよぶまで心性にあらざるなし。一切諸法萬象森羅ともに、ただこれ一心にして、こめずかねざることなし。このもろもろの法門、みな平等一心なり、あへて異違なしと談ずる、これすなはち佛家の心性をしれる樣子なり。しかあるを、この一法に身と心とを分別し、生死と涅槃とをわくことあらんや。すでに佛子なり、外道の見をかたる狂人、舌のひびきをみみにふるることなかれ。」(二二)「とふていはく、この坐禪をもはらせん人、かならず戒律を嚴淨すべしや。」しめしていはく、「持戒梵行は、すなはち禪門の規矩なり、佛祖の

【一二】其十二、徒行の益無きを明す。【眞言止觀】眞言は密教、止觀は天台の觀法。【一事を】雲門の語、一事に因ぜずんば一智に長ぜず。【一三】其十三、坐禪は道俗男女貴賤を擇ばざるを明す。【一四】其十四、坐禪は在家出家共に修すべき法なることを明す。【代宗順宗】唐の八代代宗皇帝、徑山の道欽禪師に參ず、十代順宗皇帝佛光如滿禪師に參ず。【李相國】唐の相李翺、朗州の刺史たりし時藥山の惟儼禪師に參ず。【防相國】防は裴の誤。裴休、黃檗希運禪師に參ず。【馮相公】字は濟川、不動居士と號す、佛眼清遠禪師に參ず、佛眼詩は佛法金湯編卷十四に出づ。

家風なり、いまだ戒をうけず、又戒をやぶれるもの、その分なきにあらず。」とふていはく(一二)、「この坐禪をつとめん人、さらに眞言止觀の行をかね修せん、さまたげあるべからずや。」しめしていはく、「在唐のとき宗師に眞訣をききしちなみに、西天東地の古今に佛印を正傳せし諸祖いづれもいまだしかのごときの行をかね修すときかずといひき。まことに一事をこととせざれば、一智に達することなし。」とふていはく(一三)、「この行は在俗の男女もつとむべしや、ひとり出家人のみ修するか。」しめしていはく、「祖師のいはく、佛法を會すること、男女貴賤をえらぶべからずときこゆ。」とふていはく(一四)、「出家人は諸緣すみやかにはなれて、坐禪辨道にさはりなし。在俗の繁務は、いかにしてか一向に修行して、無爲の佛道にかなはん。」しめしていはく、「おほよそ佛祖あはれみのあまり、廣大の慈門をひらきおけり、これ一切衆生を證入せしめんがためなり。人天たれかいらざらんものや。ここをもてむかしいまをたづぬるにその證これおほし。しばらく代宗順宗の帝位にして萬機いとしげかりし、坐禪辨道して佛祖の大道を會通す。李相國、防相國ともに輔佐の臣位にはんべりて、一天の股肱たりし、坐禪辨道して佛祖の大道に證入す。ただこれこころざしのありなしによるべし、身の在家出家にはかかはらじ。又ふかくことの殊劣をわきまふる人、おのづから信ずることあり。いはんや世務は佛法をさゆとおもへるものは、ただ世中に佛法なしとのみしりて、佛中に世法なきことをいまだしらざるなり。ちかごろ大宋に馮相公といふありき。祖道に長ぜりし大官なり。のちに詩をつくりてみづからをいふにいはく、「公事之餘喜坐禪、少曾

將レ脇到レ牀眠、雖三然現二出宰官相、長老之名四海傳。』これは官務ひまなかりし身なれども、佛道にこころざしふかければ得道せるなり。他をもてわれをかへりみ、むかしをもていまをかがみるべし。大宋國にはいまのよの國王大臣士俗男女ともに心を祖道にとどめずといふことなし。武門文家いづれも參禪學道をこころざせり。こころざすものかならず心地を開明することおほし。これ世務の佛法をさまたげざる、おのづからしられたり。國家に眞實の佛法弘通すれば諸佛諸天ひまなく衞護するがゆゑに、王化太平なり。聖化太平なれば、佛法そのちからをうるものなり。又釋尊の在世には、逆人邪見みちをえき。祖師の會下には、獵者樵翁さとりをひらく、いはんやそのほかの人をや。ただ正師の敎道をたづぬべし。』（一五）とふていはく、『この行は、いま末代惡世にも修行せば、證をうべしや。』しめしていはく、『敎家に名相をこととせるに、なほ大乘實敎には、正像末法をわくことなし、修すればみな得道すといふ。いはんや、この單傳の正法には、入法出身、おなじく自家の財珍を受用するなり。證の得否は修せんものおのづからしらんこと用水の人の冷煖をみづからわきまふるがごとし。』（一六）とふていはく、『あるがいはく、佛法には卽心是佛のむねを了達しぬるがごときは、口に經典を誦せず、身に佛道を行ぜざれども、あへて佛法にかけたるところなし。ただ佛法はもとより自己にありとしる、これを得道の全圓とす。このほか更に他人にむかひてもとむべきにあらず。いはんや坐禪辨道をわづらはしくせんや。』しめしていはく、『このことばもともはかなし、もしなんぢがいふごとくならば、こころあらんもの

【一五】其十五、法に正像末の別なきを示す。

【用水の人】六祖壇經に、人の水を飮んで自知するが如しとあり、冷煖自知の意。【一六】自他の見を破す。

【卽心是佛】馬祖道一禪師の語。

【則公監院】玄則禪師、監院は役の名、院の事務を總監す。
【法眼禪師】清凉院の文益禪師、法眼宗の祖。周の顯德五年閏七月寂、壽七十四。大法眼禪師の諡號を賜ふ。
【青峰禪師】青峰禪師に住せし志國顯教大師と號す。
【丙丁童子】丙丁は火のえと、火の神。

たれかこむねのをしへんにしることとなからん。しるべし佛法はまさに自他の見をやめて學するなり。もし自己卽佛としるをもて得道とせば、釋尊むかし化道にわづらはじ。しばらく古德の妙則をもて、これを證すべし。むかし則公監院といふ僧、法眼禪師の會中にありしに法眼禪師とふていはく、則監寺、なんぢわが會にありていくばくのときぞ。則公がいはく、われ師の會にはんべりて、すでに三年をへたり。禪師のいはく、なんぢはこれ後生なり、なんぞつねにわれに佛法をとはざる。則公がいはく、それがし和尚をあざむくべからず。かつて青峯禪師のところにありしとき佛法におきて安樂のところを了達せり。禪師のいはく、なんぢいかなることばによりてかいることをえし。則公がいはく、それがしかつて青峯にとひき、いかなるかこれ學人の自己なる。青峯のいはく、丙丁童子來求火。法眼のいはく、よきことばなり。ただしおそらくはなんぢ會せざらんことを。則公がいはく、丙丁は火に屬す、火をもてさらに火をもとむ、自己をもて自己をもとむるににたりと會せり。禪師のいはく、まことにしりぬ、なんぢ會せざりけり。佛法もしかくのごとくならばけふまでにつたはれじ、ここに則公燥悶して、すなはちたちぬ。中路にいたりておもひき、禪師はこれ天下の善知識、又五百人の大導師なり。わが非をいさむる、さだめて長處あらん。禪師のみもとにかへりて、懺悔禮謝してとふていはく、いかなるかこれ學人の自己なる。禪師のいはく、丙丁童子來求火と。則公この言の下におほきに佛法をさとりき。あきらかにしりぬ、自己卽佛の領解をもて、佛法をしれりといふにはあらずといふことを。もし自

【一七】其十七、辨道には擬議量沒きことを示す。
【明星をみし】修行本起經云、菩薩所作已に成じ智慧已に了じて明星出づる時廓然として大悟し、無上眞道を得最正覺を成ず
【阿難尊者】阿難尊者迦葉に問うて云く、師兄世尊金襴の袈裟を傳ふる外別に箇の甚麼をか傳ふ。迦葉召して云く、阿難と、阿難應諾す。迦葉云く、門前の刹竿を倒卻著せよと。阿難大悟の因緣。
【一八】其十八、正信修行すれば利鈍ひとしく得入することを明す。
【てまりによりて】老比丘を戲弄して皮毬を以て頭を打ち終に阿羅漢果を得しめたる因緣。雜寶藏經に出づ。

已即佛の領解を佛法とせば禪師さきのことばをもてみちびかじ。又しかのごとくいましむべからず。ただまさにはじめ善知識をみんより修行の儀則を諮問して一向に坐禪辨道して一知半解を心にとどむることなかれ。佛法の妙術それむなしからじ。(一七)とふていはく、乾唐の古今をきくに、あるひはたけのこゑをきゝて道をさとり、あるひは花のいろをみてこゝろをあきらむるものあり。いはんや釋迦大師は明星をみしとき道を證し、阿難尊者は刹竿のたふれしところに法をあきらめしのみならず、六代よりのち五家のあひだに一言半句の下に心地をあきらむるものおほし。かれらかならずしもかつて坐禪辨道せるもののみならんや。しめしていはく、古今に見色明心し、聞聲悟道せし當人、ともに辨道に擬議量なく、直下に第二人なきことをしるべし。(一八)とふていはく、西天および神丹國は人もとより質直なり。中華のしからしむるによりて、佛法を教化するに、いとはやく會入す。我朝はむかしより人に仁智すくなくして、正種つもりがたし。蕃夷のしからしむるうらみざらんや。又このくにの出家人は、大國の在家人にもおとれり。擧世おろかにして心量狹少なり。ふかく有爲の功を執して事相の善をこのむ。かくのごとくのやから、たとひ坐禪すといふとも、たちまちに佛法を證得せんや。しめしていはく、いふがごとし、わがくにの人いまだ仁智あまねからず、人また迂曲なり。たとひ正直の法をしめすとも、甘露かへりて毒となりぬべし。名利にはおもむきやすく、惑執とらけがたし。しかはあれども、佛法に證入すること、かならずしも人天の世智をもて、出世の舟航とするにはあらず。佛在世にもてまりに

よりて四果を證し、袈裟をかけて大道をあきらめし、ともに愚暗のやから、癡狂の畜類なり。ただし正信のたすくるところ、まどひをはなるるみちあり。また癡老の比丘默坐せしをみて、設齋の信女さとりをひらきし。これ智によらず、文によらず、ことばをまたず、かたりをまたず、ただしこれ正信にたすけられたり。また釋敎の三千界にひろまること、わづかに二千餘年の前後なり。刹土のしなじななる、かならずしも仁智のくににあらず。人またかならずしも利智聰明のみあらんや。しかあれども如來の正法もとより不思議の大功德力をそなへて、ときいたればその刹土にひろまる。人まさに正信修行すれば利鈍をわかず、ひとしく得道するなり。わが朝は、仁智のくににあらず、人に知解おろかなりとして、佛法を會すべからずとおもふことなかれ。いはんや人みな般若の正種ゆたかなり。ただ承當することまれに、受用することいまだしきならじ。」

さきの問答往來し、賓主相交することみだりがはし。いくばくかはななきそらにはなをなさしむる。しかあれども、このくに坐禪辨道におきて、いまだその宗旨つたはれず。しらんとこころざさんもの、かなしむべし。このゆゑにいささか異域の見聞をあつめ、明師の眞訣をしるしとどめて、參學のねがはんにきこえんとす。このほか叢林の規範、および寺院の格式、いましめすにいとまあらず。又草草にすべからず。」おほよそ我朝は龍海の以東にところして、雲煙はるかなれども、欽明用明の前後より、秋方の佛法東漸する、これすなはち人のさいはひなり。しかあるを名相事緣しげくみだれて、修行のところにわづらふ。い

【袈裟をかけて】蓮華色比丘尼三生得果の因緣。袈裟功德卷に詳出。

【癡老の比丘】一信女齋を設け若比丘を請して說法を求む、比丘說く能はず、信女却て法の不可說を悟りて即時に須陀洹果を得たり。雜寶藏經八に出づ。

【刹土】刹（Kṣetra）譯して國土。

【さきの問答】以下十八問答の總結

【おほよそ】以下勸結文。

【龍海】大海なり

【秋方】秋は西、西方即ち印度。

【破衣綴盂】百綴りの袈裟、五綴の鉢、質素枯淡の意。

【龍牙の誡勅】龍牙居遁禪師の山居の偈を擧ぐる者あれ共當らず。靈山又は鷲頭に改むべしとの說あり好し

まは破衣綴盂を生涯として、青巖白石のほとりに茅をむすんで、端坐修練するに、佛向上の事たちまちにあらはれて、一生參學の大事、すみやかに究竟するものなり。これすなはち龍牙の誡勅なり、雞足の遺風なり。その坐禪の儀則は、すぎぬる嘉祿のころ撰集せし普勸坐禪儀に依行すべし。」それ佛法を國中に弘通すること、王勅をまつべしといへども、ふたたび靈山の遺囑をおもへば、いま百萬億刹に現出せる王公相將、みなともにかたじけなく佛勅をうけて、夙生に佛法を護持する素懐をわすれず、生來せるものなり。その化をしくさかひ、いづれのところか佛國土にあらざらん。このゆゑに佛祖の道を流通せん、かならずしもところをえらび、緣をまつべきにあらず。ただけふをはじめとおもはんや。しかあればすなはち、これをあつめて佛法をねがはん哲匠、あはせて道をとぶらひ雲遊萍寄せん、參學の眞流にのこす。ときに

寛喜辛卯中秋日　入宋傳法沙門道元記

正法眼藏辦道話　畢

正法眼藏摩訶般若波羅蜜

（一）觀自在菩薩の行深般若波羅蜜多時は、渾身の照見五蘊皆空なり。五蘊は色受想行識なり。五枚の般若なり。照見これ般若なり。この宗旨の開演現成するにいはく、色即是空なり、

釋尊の勅命遺誡の意。

【雞足の遺風】迦葉尊者雞足山に住す、尊者は常に十二頭陀を修す、故に上行第一とす。迦葉の行持嫡々なりし遺誡家風なり。

【靈山の遺囑】仁王般若經云、末世の佛法國王大臣有力の檀越に付囑す。

【寛喜辛卯】後堀河天皇の年號、寛喜三年八月十五日、道元禪師三十二歳。深草の禪庵に在て道俗男女に對する最初の說法なり。中秋日は八月十五日か。

【摩訶般若波羅蜜】釋尊所說の摩訶般若を道元禪師は直に釋尊の胸臆中に突入し般若の五臟六腑を剔來しての說示なり。

【一】主として般若心經の肝要を拈提擧揚す。

【二】大般若經第二百九十二卷の要文、敬禮般若の提唱。

【苾蒭】梵音(Bhiksu)草の名に出づと云ふ。比丘、僧侶のこと。

【三】大般若經同上及大智度論第六十四卷の要文、學般若の提示。

【具壽善現】具壽は長老、善現は須菩提、佛十大弟子中の解空第一とす。

空即是色なり、色是色なり、空即空なり。百艸なり、萬象なり。般若波羅蜜十二枚、これ十二入なり。また十八枚の般若あり、眼耳鼻舌身意色聲香味觸法、および眼耳鼻舌身意識等なり。また四枚の般若あり、苦集滅道なり。また六枚の般若あり、布施、淨戒、安忍、精進、靜慮、般若なり。また一枚の般若波羅蜜而今現成せり、阿耨多羅三藐三菩提なり。また般若波羅蜜三枚あり、過去現在未來なり。また般若六枚あり、地水火風空識なり。また四枚の般若、よのつねにおこなはる行住坐臥なり。

(二)釋迦牟尼如來會中、有二一苾蒭一竊作二是念一、我應レ敬二禮甚深般若波羅蜜多一。此中雖レ無二諸法生滅一、而有二戒蘊、定蘊、慧蘊、解脱蘊、知見蘊施設可得一。亦有二預流果、一來果、不還果、阿羅漢果施設可得一。亦有二獨覺菩提施設可得一。亦有二無上正等菩提施設可得一。亦有二佛法僧寶施設可得一。亦有二轉妙法輪、度有情類施設可得一。佛知二其念一。告二苾蒭一言、『如是如是甚深般若波羅蜜、微妙難レ測。』而今の一苾蒭の竊作是念は、諸法を敬禮するところに、雖無生滅の般若、これ敬禮なり、この正當敬禮時、ちなみに施設可得の般若現成せり。いはゆる戒定慧乃至度有情類等なり、これを無といふ、無の施設、かくのごとく可得なり、これ甚深微妙難測の般若波羅蜜なり。

(三)天帝釋問二具壽善現一言、『大德、若菩薩摩訶薩、欲レ學二甚深般若波羅蜜多一、當二如何學一。』善現答言、『憍尸迦、若菩薩摩訶薩、欲レ學二甚深般若波羅蜜多一、當下如二虛空一學上。』

しかあれば學般若これ虛空なり、虛空は學般若なり。

【四】大般若經同上守護般若を說示す。

【人非人】緊那羅(Kimnara)の譯語。八部衆の率ゐる從屬者の總稱。

【五】先師天童如淨師の風鈴頌。渾身般若を擧拈す。

【六】大般若經第百七十二卷の要文。人法一如の般若を開演す。

【薄伽梵】梵音(Bhagavat)楞嚴經に六義を具すと云ふ。自在、熾盛、端嚴、名稱、吉祥、尊重これなり。佛の總名衆德成就の義。

(四)天帝釋復白レ佛言、「世尊、若善男子善女人等、於ニ此所說甚深般若波羅蜜多一、受持讀誦、如理思惟、爲レ他演說、我當ニ云何而爲ニ守護一、唯願世尊垂哀示教。」爾時具壽善現謂ニ天帝釋一言、「憍尸迦汝見レ有ニ法可ニ守護一不。」天帝釋言、「不也。」「大德我不レ見レ有ニ法是可ニ守護。」善現言、「憍尸迦、若善男子、善女人等、作ニ如レ是說一、甚深般若波羅蜜多、卽爲ニ守護一。若善男子、善女人等、作ニ如ニ所說一、甚深般若波羅蜜多、常不ニ遠離一。當レ知一切人非人、伺ニ求其便一、欲レ爲ニ損害一、終不レ能レ得。憍尸迦、若欲ニ守護一、作ニ如ニ所說一甚深般若波羅蜜多。諸菩薩者、無レ異レ爲ニ欲レ守ニ護虛空一。」しるべし受持讀誦如理思惟、すなはち守護般若なり、欲守護は受持讀誦等なり。

(五)先師古佛云、「渾身似レ口掛ニ虛空一、不レ問ニ東西南北風一、一等爲レ他談ニ般若一、滴丁東了滴丁東。」これ佛祖嫡嫡の談般若なり、渾身般若なり、渾他般若なり、渾自般若なり、渾東西南北般若なり。

(六)釋迦牟尼佛言、「舍利子、是諸有情、於ニ此般若波羅蜜多一、應レ如ニ佛住一供ニ養禮敬一。思ニ惟般若波羅蜜多一、應レ如ニ供ニ養禮ニ敬佛薄伽梵一。所以者何。般若波羅蜜多、不レ異ニ佛薄伽梵一、佛薄伽梵、不レ異ニ般若波羅蜜多一。般若波羅蜜多、卽是佛薄伽梵。佛薄伽梵、卽是般若波羅蜜多。何以故。舍利子、一切如來應正等覺、皆由ニ般若波羅蜜多一、得ニ出現一故。舍利子、一切菩薩摩訶薩、獨覺、阿羅漢、不還、一來、預流等、皆由ニ般若波羅蜜多一、得ニ出現一故。舍利子、一切世間十善業道、四靜慮、四無色定、五神通、皆由ニ般若波羅蜜多一、得ニ出現一

【天福元年】四條天皇の年號、癸巳道元禪師三十四歳四月十五日より七月十五日に至る夏安居中に宇治の觀音導利院興聖寶林禪寺即ち興聖寺にて會下の大衆に對する說法なり。

【寬元二年】說示後十一年、越前吉峰寺の侍者寮にて謄寫せし紀年なり。

【現成公案】公案は公府の案牘に喩ふ。今の公案は正法眼藏を云ふ。現成とは遍界曾て藏さざる義、故に遍界不曾藏の正法眼藏を觀面に提擧し給ふ一篇なり。

【一】佛法に漏れたるもの無き時節を示す。且らく七個を擧げて諸法を合攝す。

【二】諸法無我、一法の取るべき無き時節を示す。

故しかあればすなはち佛薄伽梵は、般若波羅蜜多なり、般若波羅蜜多は、是諸法なり、この諸法は空相なり、不生不滅なり、不垢不淨、不增不減なり、この般若波羅蜜多の現成せるは、佛薄伽梵の現成せるなり、問取すべし、參取すべし、供養禮敬する、これ佛薄伽梵に奉覲承事するなり、奉覲承事の佛薄伽梵なり。

爾時天福元年夏安居日　在觀音導利院示衆

寬元二年甲辰春三月廿一日在越宇吉峯精舍侍者寮書寫之。

正法眼藏摩訶般若波羅蜜　畢

正法眼藏現成公案

(一)諸法の佛法なる時節、すなはち迷悟あり、修行あり、生あり死あり、諸佛あり、衆生あり。(二)萬法ともにわれにあらざる時節、まどひなく、さとりなく、諸佛なく、衆生なく、生なく滅なし。(三)佛道もとより豐儉より跳出せるゆゑに、生滅あり、迷悟あり、生佛あり。しかもかくのごとくなりといへども、華は愛惜にちり、艸は棄嫌におふるのみなり。(四)自己をはこびて萬法を修證するを迷とす、萬法すすみて自己を修證するはさとりなり。(五)迷を大悟するは諸佛なり、悟に大迷なるは衆生なり。さらに悟上に得悟する漢あり、迷中又迷の漢あり。(六)諸佛のまさしく諸佛なるときは、自己は諸佛なりと覺知することをもちゐず、しかあ

【三】佛法は正（平等）偏（差別）を雙出することを示す。
【四】自己と萬法と一如なるを示す。
【五】諸佛と衆生と迷と悟と相侵さざることを示す。
【六】諸法の脱落なることを示す。
【七】諸法の冥會なることを示す。
【八】佛道に慣熟するとき早く吾我の邊際を超越することを明す。
【九】佛道に慣熟せる消息を示す。
【一〇】相似の法を擧けて以て參究の方路を示す。
【人舟にのりて】圓覺經に云、譬へば動く目能く湛水を搖がすが如く、又定眼なほ廻轉するが如し、火を旋らせば雲駛き月運び、舟行きて岸移る亦是の如しと。
【一一】外道の計會する常住を破して佛道の常住を顯はす。
【たきぎはい】

れども證佛なり、佛を證しもてゆく。(七)身心を擧して色を見取し、身心を擧して聲を聽取するに、したしく會取すれどもかがみにかげをやどすがごとくにあらず、水と月とのごとくにあらず、一方を證するときは一方はくらし。(八)佛道をならふといふは、自己をならふなり。自己をならふといふは、自己をわするるなり。自己をわするるといふは、萬法に證せらるるなり。萬法に證せらるるといふは、自己の身心、および他己の身心をして脱落せしむるなり。悟迹の休歇なるあり、休歇なる悟迹を長長出ならしむ。(九)人はじめて法をもとむるとき、はるかに法の邊際を離却せり、法すでにおのれに正傳するとき、すみやかに本分人なり。(一〇)人舟にのりてゆくに、目をめぐらしてきしをみれば、きしのうつるとあやまる。めをしたしくふねにつくれば、ふねのすすむをしるがごとく、身心を亂想して、萬法を辨肯するには、自心自性は常住なるかとあやまる。もし行李をしたしくして、箇裏に歸すれば萬法のわれにあらぬ道理あきらけし。(一一)たきぎはいとなる、さらにかへりてたきぎとなるべきにあらず。しかあるを灰はのち薪はさきと見取すべからず、しるべし薪は薪の法位に住して、さきありのちあり、前後ありといへども、前後際斷せり。灰は灰の法位にありて、後あり先あり、かの薪はいとなりぬるのち、さらに薪とならざるがごとく、人のしぬるのちさらに生とならず、しかあるを生の死になるといはざるは、佛法のさだまれるならひなり、このゆゑに不生といふ。死の生にならざる、法輪のさだまれる佛轉なり、このゆゑに不滅といふ。生も一時のくらゐなり、死も一時のくらゐなり、たとへば冬と春とのごとし。

楞嚴經に云、薪の灰となるが如く更に薪とならず、諸佛涅槃亦復是の如しと。

【二二】一時の位の消息を明す。

【二三】人始めて法を求むる時と云ふの一段に應ず。

【二四】人の悟りを得ると云ふ一段に應じて人法不二を明す。

冬の春となるとおもはず、春の夏となるといはぬなり。(二二)人の悟をうる、水に月のやどるがごとし、月ぬれず、水やぶれず、ひろくおほきなる光にてあれど、尺寸の水にやどり、全月も彌天もくさの露にもやどり、一滴の水にもやどる。悟の人をやぶらざること、月の水をうがたざるがごとし。人の悟を罣礙せざること、滴露の天月を罣礙せざるがごとし、ふかきことはたかき分量なるべし。時節の長短は、大水小水を檢點し、天月の廣狹を辨取すべし。(二三)身心に法いまだ參飽せざるには、法すでにたれりとおぼゆ。法もし身心に充足すれば、ひとかたはたらずとおぼゆるなり。たとへば船にのりて山なき海中にいでて、四方をみるに、ただまろにのみみゆ、さらにことなる相みゆることなし。しかあれどこの大海、まろなるにあらず方なるにあらず、のこれる海德、つくすべからざるなり。宮殿のごとし、瓔珞のごとし、ただわがまなこのおよぶところ、しばらくまろにみゆるのみなり。かれがごとく、萬法もまたしかあり。塵中格外、おほく樣子を帶せりといへども、參學眼力のおよぶばかりを見取會取するなり。萬法の家風をきかんには、方圓とみゆるよりほかに、のこりの海德山德おほくきはまりなく、よもの世界あることをしるべし。かたはらのみかくのごとくあるにあらず、直下も一滴もしかあるとしるべし。(二四)魚の水を行に、ゆけども水のきはなく、鳥そらをとぶにとぶといへどもそらのきはなし。しかあれども魚鳥いまだむかしよりみづそらをはなれず。ただ用大のときは使大なり。用小のときは使小なり、かくのごとくして頭頭に邊際をつくさずといふことなく、處處に踏翻せずといふことなしといへども、

鳥もしそらをいづれば、たちまちに死す。魚もし水をいづれば、たちまちに死す。以水爲命しりぬべし、以空爲命しりぬべし。以鳥爲命あり、以魚爲命あり、以命爲鳥なるべし、以命爲魚なるべし。このほかさらに進歩あるべし。修證あり、その壽者命者あることかくのごとし。しかあるを水をきはめそらをきはめてのち、水そらをゆかんと擬する鳥魚あらんば、水にもそらにも、みちをうべからず、ところをうべからず。このところをうれば、この行李したがひて現成公案す。このみちをうれば、この行履したがひて現成公案なり。このみち、このところ、大にあらず小にあらず、自にあらず他にあらず、さきよりあるにあらず、いま現ずるにあらざるがゆゑに、かくのごとくあるなり。しかあるがごとく人もし佛道を修證するに、得一法通一法なり、遇一行修一行なり。これにところあり、みち通達せるによりて、しらるるきはのしるからざるは、このしることの佛法の究盡と同生し同參するゆゑにしかあるなり。（二五）得處かならず自己の知見となりて慮知にしられざるとならふことなかれ。證究すみやかに現成すといへども、密有かならずしも見成にあらず、見成これ何必なり。麻谷山寶徹禪師、あふぎをつかふ。ちなみに僧きたりてとふ、「風性常住無處不周なり。なにをもてかさらに和尚あふぎをつかふ。」師いはく、「なんぢただ風性常住をしれりとも、いまだところとしていたらずといふことなき道理をしらず。」と。僧いはく、「いかならんかこれ無處不周底の道理。」ときに師あふぎをつかふのみなり。僧禮拜す、佛法の證驗、正傳の活路、それかくのごとし。常住なればあふぎをつかふべからず、つかはぬ

【しらるるきはの】能知と所知との分際の顯著ならずして分別し能はざるなり。要は能知所知ともに一條の拄杖子にして同死同生同道同參なり。

【二五】人もし佛道を修證するにといふを承けて一章を總結す。

【麻谷山寶徹】馬祖道一禪師の法嗣蒲州麻谷山に在りて大に宗風を振ふ。

【風性常住】楞嚴經に云、阿難、風性體無く、動靜常ならず、汝究かも如來藏中の性風眞空性空眞風の清淨本然にして法界に周遍し衆生の心に隨つて所知量に應ずるを知らずと。

【大地の黄金】五祖法演禪師の語に大地を變じて黄金と爲し長河を攪いて酥酪と爲す、獨未だ白雲と稱せざることと在りと。

おりも風をきくべきといふは、常住をもしらず、風性をもしらぬなり。風性は常住なるがゆゑに、佛家の風は大地の黃金なるを現成せしめ、長河の酥酪を參熟せり。

これは天福元年中秋のころ、かきて鎭西の俗弟子楊光秀にあたふ。建長壬子拾勒

正法眼藏現成公案　畢

正法眼藏一顆明珠

娑婆世界大宋國福州玄沙山院宗一大師、法諱師備、俗姓者謝なり。在家のそのかみ釣魚を愛し、舟を南臺江にうかべて、もろもろのつり人にならひけり。不釣自上の金鱗の不待にもありけん。唐の咸通のはじめたちまちに出塵をねがふ。舟をすてて山にいる。そのとし三十歲になりけり。浮世のあやうきをさとり、佛道の高貴をしりぬ。つひに雪峯山にのぼりて、眞覺大師に參じて、晝夜に辦道す。あるときあまねく諸方を參徹せんため、嚢をたづさへて出嶺するちなみに、脚指を石に築著して、流血し痛楚するに、忽然として猛省していはく、『是身非レ有、痛自レ何來。』すなはち雪峯にかへる。雪峯とふ、『那箇是備頭陀。』玄沙いはく、『終不三敢誑二於人一。』このことばを、雪峯ことに愛していはく、『たれかこのことばをもたざらん、たれかこのことばを道得せん。』雪峯さらにとふ、『備頭陀なんぞ徧參せざる。』師いはく、『達磨不レ來二東土一、二祖不レ往二西天一。』といふに、雪峯ことにほめき。ひごろ

【天福元年】摩訶般若の卷と同年の説示、八月の頃俗弟子なる鎭西の楊光秀に書き與へられたる一篇なり。楊光秀のこと全く知られず。

【建長壬子拾勒】干支は建長四年、即ち道元禪師入滅の前年、説示後十九年拾錄せし意か。

【一顆明珠】玄沙師備禪師の語。玄沙大悟の眼よりみて盡十方世界を、一顆の明珠となす、即ち一顆の明珠を盡十方世界と云ふなり。

【娑婆世界】梵音サハ(Sahā)忍土又は忍界と譯す、内には諸の煩惱、外には寒暑風雨等の苦を忍ばざるべからざる國土の義。世は遷り變る、界は境界、限られたる土地を云ふ。

【大宋國】大唐國に作るべし。

【玄沙師備】雪峰義存禪師の法嗣、名は師備、賜號を宗一大師と云ふ、俗姓謝氏、幼時好んで南臺江に釣を垂れ漁者に狎る、年三十始めて釣舟を捨て雪峰に投ず。雪峰、玄沙の苦行するを見て呼んで備頭陀となす。梁の開平二年十一月寂、壽七十四。

【不釣自上……不待】自から菩提の心に催され、不惜身命の英氣を以て挺出する玄沙の俊傑なるを讃む。

【雪峰山……眞覺大師】徳山宣鑑禪師に嗣ぐ。諱は義存、十七歳落髪、參學甚だ勤む。三到投子、九至洞山を以て名あり。唐の咸通年中雪峰山に院を創し衆を接す、懿宗特に眞覺大師並に紫衣を賜ふ。梁の開平二年五月寂、壽八十七。

はつりする人にてあれば、もろもろの經書ゆめにもかつていまだみざりけれども、こころざしのあさからぬをさきとすれば、かたへにこゆる志氣あらはれけり。雪峯も衆のなかにすぐれたりとおもひて、門下の角立なりとほめき。衣は布をもちゐ、ひとつをかへざりければ、ももつづりにつづれりけり。はだへには紙衣をもちゐけり、艾艸をもきけり。雪峯に參ずるほかは、自餘の知識をとぶらはざりけり。しかあれども、まさに師の法を嗣するちから辨取せりき。つひにみちをえてのち人にしめすにいはく、「盡十方世界是一箇明珠。」ときに僧問、「承和尚有レ言。盡十方世界是一顆明珠、學人如何會得。」師曰、「盡十方世界、是一顆明珠。用レ會作レ麼。」師來日却問二其僧一、「盡十方世界、是一顆明珠、汝作麼生會。」僧曰、「盡十方世界、是一顆明珠。用レ會作レ麼。」師曰、「知汝向二黑山鬼窟裏一作二活計一。」いま道取する盡十方世界是一顆明珠、はじめて玄沙にあり。その宗旨は、盡十方世界は、廣大にあらず微小にあらず、方圓にあらず中正にあらず、活鱍鱍にあらず、露迥迥にあらず、さらに生死去來にあらざるゆゑに生死去來なり。恁麼のゆゑに、昔日曾此去にして、而今從此來なり。究辨するにたれか片片なりと見徹するあらん。たれか兀兀なりと檢擧するあらん。盡十方といふは、逐物爲己、逐己爲物の未休なり。情生智隔を隔と道取する、これ回頭換面なり、展事投機なり。逐己爲物のゆゑに、未休なる盡十方なり、機先の道理なるゆゑに、機要の管得にあまれることあり。是一顆珠は、いまだ名にあらざれども道得なり。これを名に認しきたることあり。一顆珠は、直須萬年なり。亙古未了な

【是身非有】五蘊皆空の道理。
【達摩不來東土】大地無寸土の道理にして西天東土は一平面上の符號に過ぎず、達摩二祖また別人に非ざるなり。

るに、亙今到來なり。身今あり心今ありといへども、明珠なり。彼此の艸木にあらず、乾坤の山河にあらず、明珠なり。學人如何會得、この道取は、たとひ僧の弄業識に相似せりとも、大用現前是大軌則なり。すすみて一尺水一尺波を突兀ならしむべし。いはゆる一丈珠一丈明なり。いはゆるの道得を道取するに、玄沙の道は、盡十方世界是一顆明珠用會作麼なり。この道取は、佛は佛に嗣し、祖は祖に嗣す、玄沙は玄沙に嗣する道得なり。嗣せざらんと廻避せんに廻避のところなかるべきにあらざれども、しばらく灼然廻避するも、道取生あるは、現前の蓋時節なり。玄沙、來日問其僧、盡十方世界是一顆明珠、汝作麼生會。これは道取す。昨日說定法なる、今日二枚をかりて出氣す。今日說不定法なり、推倒昨日點頭笑なり。僧曰、盡十方世界是一顆明珠、用會作麼、いふべし騎賊馬逐賊なり。古佛爲汝說するには、異類中行なり、しばらく回光返照すべし。幾個枚の用會作麼かある。試道するには、乳餅七枚、菜餅五枚なりといへども、湘之南潭之北の敎行なり。玄沙曰、知汝向黑山鬼窟裏作活計。しるべし日面月面は、往古よりいまだ不換なり。日面は日面とともに共出す、月面は月面とともに共出するゆゑに、若六月道正是時、不可道我姓熱也なり。しかあればすなはち、この明珠の有始無始は、無端なり。盡十方世界一顆明珠なり、兩顆三顆といはず。全身これ一隻の正法眼なり、全身これ眞實體なり、全身これ一句なり、全身これ光明なり、全身これ全身なり。全身のとき全身の罣礙なし、圓陀陀地なり、轉轆轆なり。明珠の功德、かくのごとく見成なるゆゑに、いまの見色聞聲

の觀音彌勒あり。現身說法の古佛新佛あり。正當恁麼時、あるひは虛空にかかり、衣裏にかかる。あるひは頷下にをさむ、髻中にをさむる、みな盡十方世界一顆明珠なり。ころものうらにかかるを樣子とせり、おもてにかけんと道取することなかれ。髻中頷下にかかるを樣子とせり、髻表頷表に弄せんと擬することなかれ。醉酒の時節にたまをあたふる親友あり、親友にはかならずたまをあたふべし。たまをかけらるる時節、かならず醉酒するなり。既是恁麼は、盡十方界にてある一顆明珠なり。しかあればすなはち轉不轉のおもてをかへゆくににたれども、すなはち明珠なり。まさにたまはかくありけるとしる、すなはちこれ明珠なり。明珠はかくのごとくきこゆる聲色あり。既得恁麼なるには、われは明珠にはあらじとたどらるるは、たまにはあらじとうたがはざるべきなり。たどりうたがひ取舍する作無作も、ただしばらく小量の見なり、さらに小量に相似ならしむるのみなり、愛せざらんや。明珠かくのごとくの彩光きはまりなきなり。彩彩光光の片片條條は、盡十方界の功德なり。たれかこれを攙奪せん、行市に甎をなぐる人あらず。六道の因果に不落有落をわづらふことなかれ。不昧本來の頭正尾正なる、明珠は面目なり、明珠は眼睛なり。しかあれどもわれもなんぢもいかなるかこれ明珠、いかなるかこれ明珠にあらざるとしらざる。百思百不思は、明明の艸料をむすびきたれども、玄沙の法道によりて、明珠なりける身心の樣子をもききしりあきらめつれば、心これわたくしにあらず。起滅をたれとしてか、明珠なり明珠にあらざると取舍にわづらはん、たとひたどりわづらふも明珠にあらぬ

【衣裏にかかる】法華五百弟子品にある譬喩。譬如下有二人至二親友家一醉レ酒而臥。是時親友官事當レ行。以二無價寶珠一繋二其衣裏一。與レ之而去上。

【頷下にをさめ】莊子に云く、夫れ千金の珠は驪龍頷下に在りと。

【嘉禎四年】道元禪師三十九歳。

【雍州】支那長安の都の所在地雍州鳳翔府に擬し日本の京地を稱す。

【觀音導利興聖寶林寺】天福元年弘誓院正覺禪尼深草の極樂寺の舊趾に就いて禪院を建て道元禪師を邀へて

居らしむ、禪師入つて名く。

【示衆】座下の大衆に示されたる法語なり。

【吉峰寺】寛元元年七月道元禪師宇治の興聖寺より移錫して暫時庵居せられし寺。

【重雲堂式】雲堂は禪堂、僧堂。重は二重にして、本僧堂滿衆のため重ねて別に僧堂を設けて衆を居らしむ特に重雲堂に式日廿一條を定めて示す。

にあらず。明珠にあらぬがありておこさせける行にも念にもにてはあらざれば、ただまさに黒山鬼窟の進歩退歩、これ一顆明珠なるのみなり。

爾時嘉禎四年四月十八日在雍州宇治縣觀音導利興聖寶林寺示衆

寛元元年癸卯閏七月二十三日書ㇾ寫于越州吉田郡志比莊吉峯寺院主房ㇾ侍者比丘懷奘

正法眼藏一顆明珠　畢

正法眼藏重雲堂式

一、道心ありて名利をなげすてんひといるべし。いたづらに、まことなからんもの、いるべからず。あやまりていれりとも、かんがへていだすべし。しるべし、道心ひそかにをこれば、名利たちどころに解脫するものなり。おほよそ大千界のなかに、正嫡の付屬まれなり。わがくにむかしよりいまこれを本源とせん。のちをあはれみて、いまをおもくすべし。

一、堂中の衆は、乳水のごとくに和合して、たがひに道業を一興すべし。いまは、しばらく賓主なりとも、のちにはながく佛祖なるべし。しかあればすなはち、おのおのともにあひがたきにあひて、をこなひがたきをおこなふ、まことのおもひをわすることなかれ、これを佛祖の身心といふ。かならず佛となり祖となる、すでに家をはなれ、里をはなれ、

【ありき】歩くなり。外出すること。

【韜光晦跡】心光を韜み行跡を晦す。禪苑淸規八に韜光晦迹、不事追倍と。

【頭然をはらふ】中阿含經に人火の爲に頭を燒き衣を燒くが如し、忽ち方便を設けて頭を救ひ衣を救ふと。

【古教照心】看讀すること。寶藏論に古鏡精を照せば、其精自ら形はる、古教心を照せば其心自ら明なりと。

【不見他非我是】白楊法順禪師示衆の語、（上略）爲レ衆若似レ爲レ己彼此事辨、不レ見二他非一我是、自然上敬下恭、佛法時時現前、煩惱塵塵解脫。

【正偏あきらめ】主客、上下の位。

雲をたのみ、水をたのむ。身をたすけ、道をたすけむこと、この衆の恩は父母にもすぐるべし。父母はしばらく生死のなかの親なり、この衆はながく佛道のともにてあるべし。

一、ありきを、このむべからず、たとひ切要には一月に一度をゆるす。むかしのひと、とをき山にすみ、はるかなる、はやしに、をこなふし。人事まれなるのみにあらず、萬縁ともにすつ、韜光晦跡せしところをならふべし。いまはこれ頭然をはらふときなり、このときをもて、いたづらに世縁にめぐらさむ、なげかざらめや、なげかざらめやは。無常たのみがたし、しらず露命いかなるみちのくさにかをちむ、まことにあはれむべし。

一、堂のうちにて、たとひ禪冊なりとも文字をみるべからず、堂にしては究理辨道すべし。明窓下にむかふては古教照心すべし。寸陰すつることなかれ、專一に功夫すべし。

一、おほよそ、よるも、ひるも、さらむところをば、堂主にしらすべし。ほしいままに、あそぶことなかれ、衆の規矩にかかはるべし、しらず今生のたよりにてもあるらん。閑遊のなかにいのちをはらん、さだめてのちにくやしからん。

一、他人の非に手かくべからず、にくむこころにて、ひとの非をみるべからず、不レ見二他非一我是、自然上敬下恭の、むかしのことばあり。またひとの非をならふべからず、わが徳を修すべし。ほとけも非を制することあれども、にくめとにはあらず。

一、大小の事、かならず堂主にふれて、をこなふべし。堂主にふれずして、ことををこなはんひとは、堂をいだすべし。賓主の禮みだれば、正偏あきらめがたし。

【少水のうを】出曜經無常品の偈に「是日既過、命亦隨減、如少水魚、斯有何樂。」

【にらぎのか】韮の悪臭。

一、堂のうち、ならびにその近邊にて、こゑをたかくし、かしらをつどへて、ものいふべからず。堂主これを制すべし。

一、堂のうちにて行道すべからず。

一、堂のうちにて珠數もつべからず。手をたれて、いでいり、すべからず。

一、堂のうちにて、念誦看經すべからず。檀那の一會の看經を請ぜんはゆるす。

一、堂のうちにて、はなかたくかみ、つばきかたくはくべからず。道業のいまだ通達せざることをかなしむべし。光陰のひそかにうつり、行道のいのちをうばふことを、をしむべし。をのづから少水のうをのこころあらむ。

一、堂の衆あやおりものをきるべからず、かみぬの、などをきるべし。むかしより道をあきらめしひと、みなかくのごとし。

一、さけにゑひて、堂中にいるべからず。わすれてあやまらんは、禮拜懺悔すべし。またさけをとりいるべからず。にらぎのかして堂中にいるべからず。

一、いさかひせんものは、二人ともに下寮すべし。みづから道業をさまたぐるのみにあらず、他人をもさまたぐるゆへに。いさかはんをみて制せざらんものも、をなじく、とがあるべし。

一、堂中のをしへにかかはらざらんば、諸人をなじこころにて擯出すべし。をかしと、をなじこころにあらんば、とがあるべし。

【修練自稱】自身の修行せし數數を鼻高高と言ひ立てるなり。

【曆仁二年】道元禪師四十歲なり。

一、僧俗を堂内にまねきて、衆を起動すべからず。近邊にても賓客と、ものいふこゑ、たかくすべからず。ことさら修練自稱して、供養をむさぼることなかれ。ひさしく參學のこころざしあらむか。あながちに巡禮のあらむはいるべし、そのときもかならず堂主にふるべし。

一、坐禪は僧堂のごとくにすべし、朝參暮請いささかも、をこたることなかれ。

一、齋粥のとき、鉢盂の具足を地にをとさんひとは、叢林の式によりて罰油あるべし。

一、おほよそ佛祖の制誡をば、あながちにまもるべし。叢林の淸規は、ほねにも銘ずべし、心にも銘ずべし。

一、一生安穩にして辦道無爲にあらむと、ねがふべし。

以前の數條は、古佛の身心なり、うやまひ、したがふべし。

曆仁二年己亥四月二十五日觀音導利興聖護國寺開闢　沙門道元示

觀音導利興聖護國寺重雲堂式終

爾時の堂主宗信、この文をうつして、のちにつたふるなり。ゆゑに近代流布の本のをはりに、堂主宗信の四字をのするものあり、しかあれども、撰者にあらざること、しるべきなり。

正法眼藏重雲堂式　畢

【即心是佛】禪類二に云く、馬祖道一禪師に僧問ふ、如何なるか是れ佛、師云く即心是佛、云く如何なるか是れ道、師云く無心是れ道、云く佛と道と相去ること多少ぞ、師云く佛は手を展ぶるが如く道は拳を握るが如しと云々此に出づ。

即は諸相を指事す心は諸法の差別を離れたる自性清淨心、是は當體全是の義、佛は解脱なり只管打坐の當體を即心是佛といふ。

【慮知念覺の】一惡未斷の凡夫心をその儘に佛とすると思ふは大なる誤なり。

【先尼】辨道話に出づ。

正法眼藏即心是佛

佛佛祖祖、いまだまぬかれず保任しきたれるは、即心是佛のみなり。しかあるを西天には即心是佛なし、震旦にはじめてきけり。學者おほくあやまるによりて、將錯就錯せず。將錯就錯せざるゆゑに、おほく外道に零落す。いはゆる即心の話をききて、癡人おもはくは、衆生の慮知念覺の未發菩提心なるをすなはち佛とすとおもへり。これはかつて正師にあはざるによりてなり。外道のたぐひとなるといふは、西天竺國に外道あり先尼となづく、かれが見處のいはくは、大道はわれらがいまの身にあり、そのていたらくは、たやすくしりぬべし。いはゆる苦樂をわきまへ、冷煖を自知し、痛癢を了知す、萬物にさへられず、諸境にかかはれず、物は去來し、境は生滅すれども、靈知はつねにありて不變なり。この靈知ひろく周遍せり、凡聖含靈の隔異なし。そのなかにしばらく妄法の空華ありといへども、一念相應の智慧あらはれぬれば、物も亡じ境も滅しぬれば、靈知本性ひとり了了として鎭常なり。たとひ身相はやぶれぬれども、靈知はやぶれずしていづるなり。たとへば人舍の失火にやくるに、舍主いでてさるがごとし。昭昭靈靈としてある、これを覺者知者の性といふ、これをほとけともいひ、さとりとも稱す。自他おなじく具足し、迷悟ともに通達せり。萬法諸境ともかくもあれ、靈知は境とともならず、物とおなじからず、歷劫

【大證國師慧忠和尚】傳既に辨道話に出す。

【他境經】東土の六祖大鑑慧能禪師の著、六祖法寶壇經なり、他は彼の意。

【淨名】維摩なり

に常住なり。いま現在せる諸境も、靈知の所在によらば、眞實といひぬべし。本性より緣起せるゆゑには實法なり、たとひしかありとも靈知のごとくに常住ならず、存沒するがゆゑに、明暗にかかはれず、靈知するがゆゑに、これを靈知といふ。また眞我と稱し、覺元といひ、本性と稱し、本體と稱す。かくのごとくの本性をさとるを、常住にかへりぬるといひ、歸眞の大士といふ。これよりのちはさらに生死に流轉せず、不生不滅の性海に證入するなり。このほかは眞實にあらず、この性あらはさざるほど三界六道は競起するといふなり、これすなはち先尼外道が見なり。

大唐國大證國師慧忠和尚問レ僧、『從二何方一來。』僧曰、『南方來。』師曰、『南方有二何知識一。』僧曰、『知識頗多。』師曰、『如何示レ人。』僧曰、『彼方知識、直下示二學人即心是佛一、佛是覺義、汝今悉具二見聞覺知之性一、此性善能揚眉瞬目、去來運用、徧二於身中一。挃レ頭頭知、挃レ脚脚知、故名二正徧知一。離レ此之外、更無二別佛一。此身即有二生滅一、心性無始以來、未二曾生滅一、身生滅者、如二龍換一レ骨、似三蛇脫レ皮、人出二故宅一。即身是無常、其性常也。南方所說、大約如レ是。』師曰、『若然者、與二彼先尼外道一、無レ有二差別一。彼云、我此身中有二一神性一、此性能知二痛癢一、身壞之時、神則出去。如下舍被レ燒舍主出去上。舍即無常、舍主常矣。審二如レ此者一、邪正莫レ辨、孰爲レ之乎。吾比二遊方一、多見二此色一、近尤盛矣。聚二却三五百衆一、目視二雲漢一云、是南方宗旨、把二他壇經一改換、添二糅鄙譚一、削二除聖意一、惑二亂後徒一、豈成二言教一、苦哉吾宗喪矣。若以二見聞覺知一、是爲二佛性一者、淨名

【曹溪古佛】東土の六祖、曹溪山寶林寺に住せられしに依る。古佛は尊敬の語。
【臨濟德山】臨濟義玄禪師、德山宣鑑禪師。
【一心一切法】六祖壇經に一心一切法、一切法一心と。
【古人いはく】傳燈廿五。
【古德云】禪類十に云く、潙山祐禪師仰山に問ふ、妙淨明心汝作麽生か會す、仰山云く山河大地日月星辰と。

不レ應レ云下法離ニ見聞覺知一、若行ニ見聞覺知一、是則見聞覺知非ニ求レ法也。」

大證國師は、曹溪古佛の上足なり、天上人間の大善知識なり。國師のしめす宗旨をあきらめて、參學の龜鑑とすべし、先尼外道が見處としりて、したがふことなかれ。近代大宋國に諸山の主人とあるやから國師のごとくなるは、あるべからず。むかしより國師にひとしかるべき知識、いまだかつて出世せず。しかあるに世人あやまりておもはく臨濟德山も國師にひとしかるべしと。かくのごとくのやからのみおほし、あはれむべし明眼の師なきことを。いはゆる佛祖の保任する即心是佛は、外道二乘のゆめにもみるところにあらず。唯佛祖與佛祖のみ即心是佛しきたり究盡しきたる聞著あり、行取あり、證著あり。佛百艸を拈却しきたり、打失しきたる。しかあれども丈六の金身に說似せず、即公案あり、見成を相待せず、敗壞を廻避せず。是三界あり、退出にあらず唯心にあらず、心牆壁あり、いまだ泥水せず、いまだ造作せず。あるひは即心是佛を參究し、心即佛是を參究し、佛即是心を參究し、即心佛是を參究し、是佛心即を參究す。かくのごとくの參究、まさしく即心是佛、これを擧して即心是佛に正傳するなり。かくのごとく正傳して今日にいたれり。いはゆる正傳しきたれる心といふは、一心一切法、一切法一心なり。このゆゑに古人いはく、「若人識ニ得心一、大地無ニ寸土一。」しるべし心を識得するとき、蓋天撲落し、匝地裂破す。あるひは心を識得すれば、大地さらにあつさ三寸をます。古德云、「作麽生是妙淨明心、山河大地、日月星辰。」あきらかにしりぬ心とは山河大地なり、日月星辰なり、しかあれど

【延應元年】暦仁二年二月七日改元道元禪師即ち四十歳なり。

もこの道取するところすすめば不足あり、しりぞくればあまれり。山河大地心は、山河大地のみなり、さらに波浪なし風煙なし。日月星辰心は、日月星辰のみなり、さらにきりなしかすみなし。生死去來心は、生死去來のみなり、さらに迷なし悟なし。牆壁瓦礫心は、牆壁瓦礫のみなり、さらに泥なし水なし。四大五蘊のみなり、さらに馬なし猿なし。椅子拂子心は、椅子拂子のみなり、さらに竹なし木なし。かくのごとくなるがゆゑに、即心是佛、不染汚即心是佛なり、諸佛不染汚諸佛なり。しかあればすなはち即心是佛とは、發心、修行、菩提、涅槃の諸佛なり。いまだ發心修行、菩提涅槃せざるは、即心是佛にあらず。たとひ一刹那に、發心修證するも、即心是佛なり。たとひ一極微中に、發心修證するも、即心是佛なり。たとひ無量劫に發心修證するも、即心是佛なり。たとひ一念中に、發心修證するも、即心是佛なり。たとひ半拳裏に、發心修證するも、即心是佛なり。しかあるを長劫に修行作佛するは、即心是佛にあらずといふは、即心是佛をいまだみざるなり、いまだしらざるなり、いまだ學せざるなり。即心是佛を開演する正師をみざるなり。いはゆる諸佛とは、釋迦牟尼佛なり、釋迦牟尼佛、これ即心是佛なり。過去現在未來の諸佛、ともにほとけとなるときは、かならず釋迦牟尼佛となるなり、これ即心是佛なり。

爾時延應元年五月二十五日在雍州宇治郡觀音導利興聖寶林寺示衆

正法眼藏即心是佛　畢

【洗淨】大小便の作法なり不淨を洗淨するの理事の二法を明す。理東司を以て不染汙修證の道場とす。

【南嶽山】南嶽懷讓禪師と六祖大鑑慧能禪師との不染汙修證の一大事因緣なり。これ理の洗淨とす。

【大比丘…經云】この一段事の洗淨を明す。身心もとより不染汙なれ共染あり淨あり、染を淨め淨を淨むる佛家の洗淨法なり

正法眼藏洗淨

佛祖の護持しきたれる修證あり、いはゆる不染汙なり。

南嶽山觀音院大慧禪師、因六祖問、「還假ニ修證一不。」大慧云、「修證不レ無、染汙卽不レ得。」六祖云、『只是不染汙、諸佛之所ニ護念一、汝亦如レ是、吾亦如レ是。乃至西天祖師亦如レ是」云云。

大比丘三千威儀經云、『淨身者、洗ニ大小便一剪ニ十指爪一。』しかあれば身心これ不染汙なれども、淨身の法あり、淨心の法あり、ただ身心をきよむるのみにあらず、國土樹下をもきよむるなり。國土いまだかつて塵穢あらざれどもきよむるは、諸佛之所護念なり。佛果にいたりてなほ退せず廢せざるなり、その宗旨はかりつくすべきことかたし。作法これ宗旨なり、得道これ作法なり。華嚴經淨行品云、『左右便利、當願衆生、蠲除穢汙、無婬怒癡。已而就水、當願衆生、向無上道、得出世法。以水滌穢、當願衆生、具足淨忍、畢竟無垢。』水かならずしも本淨にあらず、本不淨にあらず。身かならずしも本淨にあらず、本不淨にあらず。諸法またかくのごとし、水いまだ情非情にあらず、身いまだ情非情にあらず、諸法またかくのごとし。佛世尊の說、それかくのごとし。しかあれども水をもて身をきよむるにあらず、佛法によりて、佛法を保任するに、この儀あり、これを洗淨と稱す。

佛祖の一身心をしたしくして正傳するなり、佛祖の一光明をあきらかに住持するなり。おほよそ無量無邊の功德を現成せしむるなり。身心に修行を威儀せしむる、正當恁麽時すなはち久遠の本行を具足圓成せり。このゆゑに修行の身心本現するなり。十指の爪をきるべし、十指といふは、左右の兩手の指のつめなり、足指の爪おなじくきるべし。經にいはく、「つめのながさもし一麥ばかりになれば罪をうるなり。」しかあれば爪をながくすべからず、爪のながきはおのづから外道の先蹤なり、ことさらつめをきるべし。しかあるにいま大宋國の僧家のなかに、參學眼そなはらざるともがら、おほく爪をながからしむ。あるひは一寸兩寸および三四寸にながきもあり。これ非法なり、佛法の身心にあらず、佛家の稽古あらざるによりてかくのごとし、有道の尊宿はしかあらざるなり。あるひは長髪ならしむるともがらあり、これも非法なり。大國の僧家の所作なりとして、正法ならんとあやまることなかれ。先師古佛、ふかくいましめのことばを天下の僧家の長髪長爪のともがらにたまふにいはく、「不レ會二淨髪一、不二是俗人一、不二是僧家一、便是畜生、古來佛祖誰是不二淨髪一者。如今不レ會二淨髪一、眞箇是畜生。」かくのごとく示衆するに、年來不剃頭のともがら、剃頭せるおほし。あるひは上堂、あるひは普說のとき、彈指かまびすしくして責呵す。いかなる道理としらず、胡亂に長髪長爪なる、あはれむべし南閻浮の身心をして非道におけること、近來二三百年、祖師道廢せるゆゑに、しかのごとくのともがらおほし。かくのごとくのやから、寺院の主人となり、師號に署して、爲

【經にいはく】文殊問經上卷菩薩戒品に云く、髮の長き二指ならば當に剃るべし、又云く、爪長きことを得ざれ一の積麥の如きことを得よ、何を以ての故に、攘を搔かんが爲の故にと。

【外道の先蹤】長爪梵志の一類。

【先師古佛】天童如淨禪師。

【南閻浮】須彌四洲の一、梵音チヤンブ、ドヰーパ(Jambu-dvīpa)贍金洲、好金土と譯す。須彌の南方に位するを以て南閻浮洲と云ふ。

【長老】阿含に云く三長老あり云く耆年、云く法、云く作と。
【陳說なし】陳辯の語無し。
【舍利弗この法】僧祇律三十五に舍利弗聚落に入りて乞食せし時如法に洗淨の法を行ひしかば婆羅門見了つて歡喜心を生ず、舍利弗爲に說法して法眼淨を得しむと。
【身子】舍利弗の譯語。
【籌】木竹葉にて作る、極長は一搩手、短は四指と。不淨を拭ふ箆狀のもの。
【觸手】穢れたる手なり。
【東司】便所のこと。摩訶僧祇律に廁屋は東に在りて北に在るを得ず、應に南に在り西に在るべし、小行も

衆の相をなす、人天の無福なり。いま天下の諸山に道心箇渾無なり、得道箇久絶なり、祇管破落黨のみなり。かくのごとく普說するに、諸方に長老の名をみだりにせるともがら、うらみず陳說なし。しるべし長髪は佛祖のいましむるところ、長爪は外道の所行なり。佛祖の兒孫、これらの非法をこのむべからず。身心をきよからしむべし、剪爪剃髪すべきなり、洗大小便おこたらしむることなかれ。舍利弗この法をもて外道を降伏せしむることありき、外道の本期にあらず、身子が素懷にあらざれども、佛祖の威儀現成するところに、邪法おのづから伏するなり。樹下露地に修習するときは、起屋なし、便宜の谿谷河水等によりて、分土洗淨するなり。これは灰なし、ただ二七丸の土をもちゐる。二七丸をもちゐる法は、まづ法衣をぬぎてたたみおきてのち、くろからず黃色なる土をとりて、一丸のおほきさ大豆許に分して、いしのうへあるひは便宜のところに、七丸をひとならべにおきて、二七丸をふたへにならべおく、そののち磨石にもちゐるべき石をまうく。そののち屙す。屙後使籌、あるひは使紙、そののち水邊にいたりて洗淨する、まづ三丸の土をたづさへて洗淨す。一丸土を掌にとりて、水すこしばかりをいれて、水に合してときて、泥よりもうすく漿ばかりになして、まづ小便を洗淨す。つぎに一丸の土をもてさきのごとくして大便所を洗淨す。つぎに一丸の土をさきのごとくして、略して觸手をあらふ。寺舍に居してよりこのかたは、その屋を起立せり、これを東司と稱す。あるときは圊といひ、廁といふときもありき、僧家の所住にかならずあるべき屋舍なり。東司にいたる法は、かならず

亦是の如しと。東司は十刹圖の厠屋の額なり、東淨西淨の東淨の意にして穢を忌んで故に東司西淨と謂ふ。

【直裰】法服の褊衫と裙子とを綴ぢて一着とせしもの

【褊衫】法服の上衣なり。

手巾をもつ、その法は、手巾をふたへにをりて、ひだりのひぢのうへにあたりて衫袖のうへにかくるなり。すでに東司にいたりては、淨竿に手巾をかくべし、かくる法は、臂にかけたりつるがごとし。もし九條七條等の袈裟を著してきたれらば、手巾にならべてかくべし、おちざらんやうに打併すべし、倉卒になげかくることなかれ。よくよく記號すべし、記號といふは、淨竿に字をかけり、白紙にかきて月輪のごとく圓にして、淨竿につけ列せり。しかあるをいづれの字にわが直裰はおけりとわすれずみだらざるを、記號といふなり。衆家きたらんに自他の竿位を亂すべからず。このあひだ、衆家きたりてたちつらなれば、叉手して揖すべし、揖するにかならずしもあひむかひて曲躬せず、ただ叉手をむねのまへにもてて氣色ある揖なり。東司にては直裰を著せざるにも、衆家と揖し氣色するなり。もし兩手ともにいまだ觸せず、兩手ともにものをひさげざるには、兩手を叉して揖すべし。もしすでに一手を觸せしめ一手にものを提せらんときは、一手にて揖すべし。一手にて揖するには、手をあふけて指頭すこしきかがめて水を掬せんとするがごとくしてもちて、頭をいささか低頭せんとするがごとく揖するなり。他かくのごとくせば、おのれかくのごとくすべし、おのれかくのごとくせば、他またしかあるべし。褊衫および直裰を脱して手巾のかたはらにかく、かくる法は、直裰をぬぎとりて、ふたつのそでをうしろへあはせて、ふたつのわきのしたをとりあはせてひきあぐれば、ふたつのそでかさなれる、このときは、左手にては直裰のうなぢのうらのもとをとり、右手にては、わきをひきあぐれ

【裙】法服の下衣なり。

【蒲鞋】蒲葉又は穇にて作れる履物

【彈指】去穢彈指といふ、或は嗽糞の鬼を誡むと。

ば、ふたつのたもとと左右の兩襟とかさなるなり、兩袖と兩襟とをかさねて、またたてさまになかよりをりて、直裰のうなぢを淨竿の那邊へなげこす、直裰の裙ならびに袖口等は竿の遮邊にかかれり、たとへば直裰の合腰、淨竿にかくるなり。つぎに竿にかけたりつる手巾の遮那兩端をひきちがへて、直裰よりひきこして、手巾のかからざりつるかたにて、またちがへてむすびとどむ。兩三匝もちかへちがへしてむすびて直裰を淨竿より落地せしめざらんとなり。直裰にむかひて合掌す。つぎに絆子をとりて兩臂にかく。つぎに淨架にいたりて、淨桶に水をもりて、右手に提して淨廁にのぼる。淨桶に水をいるる法は、十分にみつることなかれ、九分を度とす。廁門のまへにして換鞋すべし、蒲鞋をはきて自鞋を廁門の前に脫するなり。これを換鞋といふ。

禪苑淸規云、欲上東司、應須預往、勿致臨時內逼倉卒。乃疊袈裟、安寮中案上、或淨竿上。廁內にいたりて左手にて門扉を掩す。つぎに淨桶の水をすこしばかり槽裏に瀉す。つぎに淨桶を當面の淨桶位に安ず。つぎにたちながら槽にむかひて彈指三下すべし。彈指のとき、左手は拳にして左腰につけてもつなり。つぎに袴口衣角をさめて、門にむかひて兩足に槽脣の兩邊をふみて、蹲居し屙す。兩邊をけがすことなかれ、前後にそましむることなかれ。このあひに默然なるべし、隔壁と語笑し、聲をあげて吟詠することなかれ。涕唾狼藉なることなかれ、怒氣卒暴なることなかれ。壁面に字をかくべからず。廁籌をもて地面を劃することなかれ。屙屎退後、すべからく使籌すべし。

【籌斗】籌を入れる函。

【皂莢】俗に云ふさいかちの粉。

【面薬】塗香又は米粉、小豆の粉などを入れて用ふ。洗顔料の粉末。

またかみをもちゐる法あり、故紙をもちゐるべからず、字をかきたらん紙もちゐるべからず。浄籌觸籌わきまふべし。籌はながさ八寸につくりて三角なり、ふとさは手拇指大なり、漆にてぬれるもあり、未漆なるもあり。觸は籌斗になげおき浄はもとより籌架にあり、籌架は槽のまへの版頭のほとりにおけり、使籌使紙ののち、洗浄する法は、右手に浄桶をもちて、左手をよくよくぬらしてのち、左手を掬につくりて水をうけて、まづ小便を洗浄すること三度。つぎに大便をあらふ。洗浄如法にして浄潔ならしむべし。このあひだあらく浄桶をかたぶけて、水をして手のほかにあまし、おとしあふれちらして、水をはやくうしなふことなかれ。洗浄しをはりて浄桶を安桶のところにおきて、つぎに籌をとりてのごひかはかす、あるひは紙をもちゐるべし。大小両處、よくよくのごひかはかすべし。つぎに右手にて袴口衣角をひきつくろいて、右手に浄桶を提して廁門をいづるちなみに蒲鞋をぬぎて自鞋をはく。つぎに浄架にかへりて、浄桶を本所に安ず、つぎに洗手すべし。右手に灰匙をとりて、まづすくひて瓦石のおもてにおきて、右手をもて滴水を點じて觸手をあらふ、瓦石にあてゝときあらふなり。たとへばさびあるかたなを砥にあてゝとぐがごとし、かくの如く灰にて三度あらふべし。つぎに土をおきて水を點じてあらふこと三度すべし。つぎに右手に皂莢をとりて小桶の水にさしひたして、兩手あはせてもみあらふ。腕にいたらんとするまでもよくよくあらふなり。誠心に住して慇懃にあらふべし。灰三土三皂莢一なり、あはせて一七度を度とせり。つぎに大桶にてあらふ、このときは面薬土灰等をもちゐず、

【香木を寶瓶形に】大智度論に云く二種抹と爲し以て身に塗る、寒時は沈水を用ひ熱時は栴檀を用ふるなりと。寶瓶形に作るとは栴檀木をいふなり。

【東司上不說佛法】禪苑卷五に云く趙州一日東司に在り文遠の過ぐるを見る、喚んで云く、文遠と、遠應諾す、州云く東司上爾が與に佛法を說かずと。又禪頌五に鼓山珪の頌あり云く、老僧、正に東司上に在り、佛法を將つて人の爲に說かず、一般の屎臭栴檀香、父子の機俱に漏泄すと。

ただ水にても湯にてもあらふなり。一番あらひて、その水を小桶にうつして、さらにあたらしき水をいれて兩手をあらふ。

華嚴經云、『以水盥掌。當願衆生。得上妙手。受持佛法。』水杓をとらんことは、かならず右手にてすべし。このあひだ桶杓おとをなしかまびすしくすることなかれ。水をちらし皀莢をちらし、水架の邊をぬらし、おほよそ倉卒なることなかれ。狼藉なることなかれ。つぎに公界の手巾に手をのごふ、あるひはみづからが手巾にのごふ。手をのごひをはりて、淨竿のした直裰のまへにいたりて、絆を脱して竿にかく。つぎに合掌してのち、手巾をとき直裰をとりて著す。つぎに手巾を左臂にかけて塗香す。公界に塗香あり、香木を寶瓶形につくれり、その大は拇指大なり、ながさ四指量につくれり。纖索の尺餘なるをもちて、香の兩端に穿貫せり、これを淨竿にかけおけり、これを兩掌をあはせてもみあはすれば、その香氣おのづから兩手に薰ず。絆を竿にかくるとき、おなじくうへにかけかさねて、絆と絆とみだらしめ亂縷せしむることなかれ。かくのごとくするみなこれ淨佛國土なり、莊嚴佛國なり、審細にすべし倉卒にすべからず。いそぎをはりてかへりなばやとおもひいとなむことなかれ、ひそかに東司上不說佛法の道理を思量すべし。衆家のきたりゐる面をしきりにまもることなかれ。廁中の洗淨には、冷水をよろしとす、熱湯は腸風をひきおこすといふ。洗手には溫湯をもちゐるさまたげなし。釜一隻をおくことは、燒湯洗手のためなり。淸規云、『晩後燒湯上油、常令湯水相續。無使大衆動念。』しかあればしり

【湯風】下血病、痔疾なり。
【燒湯】湯を煮るなり、湯をわかす。
【突吉羅罪】梵音ヅシユクリタ（Duṣkṛta）惡作、惡說と譯す。身口になす所の惡をいふ。
【離人の滴血】會元卷十七兜率從悅の傳、上堂の語に灼然たり其血人にあれば煖暖、人を離るれば寒凝なり、淨穢も亦爾り、定一の性あること無しと、意知るべし。
【羅睺羅沙彌】梵音ラーフラ（Rāhula）覆障と譯す、釋尊の子、成道の後郷に歸りし時、出家して佛弟子となる、密行第一と稱す。沙彌はシユラマネーラ（Śrāmaṇera）息慈、勤策男と譯す、出家して未だ修行熟せず比丘となる迄の者をいふ。

ぬ湯水ともにもちゐるなり。もし廁中の觸せることあらば、門扉を掩して、觸牌をかくべし。もしあやまりて落桶あらば、門扉を掩して、落桶牌をかくべし。これらの牌かかれらん局にはのぼることなかれ。もしさきより廁上にのぼれらんに、ほかに人ありて彈指せば、しばらくいづべし。淸規云、「若不二洗淨一、不レ得下坐二僧牀一、及禮中三寶上。亦不レ得レ受二人禮拜一。」三千威儀經云、「若不レ洗二大小便一、得二突吉羅罪一。亦不レ得下僧淨坐具上坐、及禮中三寶上。設禮無二福德一。」しかあればすなはち辨道功夫の道場、この儀をさきにすべし。あに三寶を禮せざらんや、あに人の禮拜をうけざらんや、あに人を禮せざらんや。佛祖の道場、かならずこの威儀あり、佛祖道場中人、かならずこの威儀具足あり。これ自己の強爲にあらず、威儀の云爲なり、諸佛の常儀なり、諸祖の家常なり。ただ此界の諸佛のみにあらず。十方の佛儀なり、淨土穢土の佛儀なり。少聞のともがらおもはくは、諸佛には廁屋の威儀あらず、娑婆世界の諸佛の威儀は、淨土の諸佛のごとくにあらずとおもふ。これは學佛道にあらず、しるべし淨穢は離人の滴血なり、あるときはあたたかなり、あるときはすさまじ、諸佛に廁屋ありしるべし。

十誦律第十四云、「羅睺羅沙彌宿二佛廁一。佛覺了、佛以二右手一摩二羅睺羅頂一、說二是偈一言、汝不レ爲二貧窮一、亦不レ失二富貴一、但爲二求道一故、出家應レ忍レ苦。」しかあればすなはち佛道場に廁屋あり、佛廁屋裏の威儀は洗淨なり、祖祖相傳しきたれり、佛儀のなほのこれる、慕古の慶快なり、あひがたきにあへるなり。いはんや如來かたじけなく廁屋裏にして、羅睺羅

【延應元年】前卷に同じ。

【禮拜得髓】題は達磨大師、門人道副尼總持道育慧可を試驗するの語に出づ。最後に慧可

のために說法しまします、廁屋は佛轉法輪の一會なり、この道場の進止、これ佛祖正傳せり。

摩訶僧祇律第三十四云、「廁屋不ㇾ得ㇾ在二東在一ㇾ北。應ㇾ在二南在一ㇾ西。小行亦如ㇾ是。」この方宜によるべし、これ西天竺國諸精舍の圖なり、如來現在の建立なり。しるべし一佛の佛儀のみにあらず、七佛の道場なり、精舍なり。はじめたるにあらず、諸佛の威儀なり。これらをあきらめざらんよりさきは、寺院を剏創し、佛法を修行せん、あやまりはおほく、佛威儀そなはらず、佛菩提いまだ現前せざらん。もし道場を建立し、寺院を剏創せんには、佛祖正傳の法儀によるべし。これ正嫡正傳の法儀によるべし、これ正嫡正傳なるがゆゑに、その功德あつめかさなれり。佛祖正傳の嫡嗣にあらざれば、佛法の身心いまだしらず、佛法の身心しらざれば、佛業あきらめざるなり。いま大師釋迦牟尼佛の佛法、あまねく十方につたはれるといふは、佛身心の現成なり、佛身心現成の正當恁麼時かくのごとし。

爾時延應元年己亥冬十月二十三日在二雍州宇治縣觀音導利興聖寶林寺一示衆

正法眼藏洗淨 畢

正法眼藏禮拜得髓

修行阿耨多羅三藐三菩提の時節には導師をうることもともかたし。その導師は、男女等

禮拜して後位に依て立つ、摩云く、汝得吾髓と、即ち是れなり。得法の師を禮拜恭敬すべし是れ一篇の意。

【大丈夫】涅槃經に云く、若し能く自ら佛性あることを知る者、我れ是人を說いて丈夫の相と爲す、若し女人あつて能く自身定んで佛性ありと知らば、當に知るべし是等即ち男子と爲すと。

【斷臂得髓の祖】二祖慧可大師なり大師、(師達磨)の示誨を聞き潜に利刀を取り自ら左臂を斷ち師の前に置くと傳に出づ。

【釋迦……佛の】大般若經文の取意か。

【野干を師として】未曾有因緣經に出づ歸依三寶の卷に詳出す。

の相にあらず、大丈夫なるべし、作麼人なるべし。古今人にあらず、野狐精にして善知識ならん。これ得髓の面目なり。導師なるべし。不昧因果なり、儞我渠なるべし。すでに導師に相逢せんよりこのかたは、萬縁をなげすてて、寸陰をすごさず、精進辨道すべし。有心にても修行し、無心にても修行し、半心にても修行すべし。しかあれば頭燃をはらひ翹足を學すべし。かくのごとくすれば誹謗の魔黨にをかされず、斷臂得髓の祖さらに他にあらず、脱落身心の師すでに自なりき。髓をうること法をつたふること、必定して至誠により信心によるなり。誠心ほかよりきたるあとなく、内よりいづる方なし、ただまさに法をおもくし身をかろくするなり、世をのがれ道をすみかとするなり。いささかも身をかへりみること法よりもおもきには、法つたはれず、道うることなし。その法をおもくする志氣ひとつにあらず。他の教訓をまたずといへども、しばらく一二を擧拈すべし。いはく法をおもくするは、たとひ露柱なりともたとひ燈籠なりとも、たとひ諸佛なりとも、たとひ野干なりとも、鬼神なりとも男女なりとも、大法を保任し吾髓を汝得せるあらば、身心を牀座にして、無量劫にも奉事するなり。身心はうることやすし、世界に稻麻竹葦のごとし。法はあふことまれなり。釋迦牟尼佛のいはく、「無上菩提を演説する師にあはんには、種姓を觀ずることなかれ、容顏をみることなかれ、非をきらふことなかれ、行をかんがふることなかれ。ただ般若を尊重するがゆゑに、日日に百千兩の金を食せしむべし、天食をおくりて供養すべし、天華を散じて供養すべし。日日三時に禮拜し恭敬して、さらに患惱

【趙州眞際大師】南泉普願禪師に嗣ぐ。衆請して趙州觀音院に住せしむ。天下當時の雲水趙州の門風を聞けば皆悚然として信伏すと云ふ。唐の乾寧四年十一月寂。壽百二十。眞際大師は謚號。

【志閑禪師】臨濟義玄禪師に嗣ぐ。末山の鉗鎚に入つて大悟承當大いに家風を宣揚す。唐の乾寧二年五月立亡す。

の心を生ぜしむることなかれ、かくのごとくすれば菩提の道かならずところあり。われ發心よりこのかた、かくのごとく修行して、今日は阿耨多羅三藐三菩提をえたるなり。』しかあれば若樹若石もとかましとねがひ、若田若里もとかましともとむべし。露柱に問取し、牆壁をしても參究すべし。むかし野干を師として禮拜問法する天帝釋あり、大菩薩の稱つたはれり、依業の尊卑によらず。しかあるに不聞佛法の愚癡のたぐひおもはくは、われは大比丘なり、年少の得法を拜すべからず、われは久修練行なり、得法の晩學を拜すべからず、われは師號に署せり、師號なきを拜すべからず、われは法務司なり、得法の餘僧を拜すべからず、われは僧正司なり、得法の俗男俗女を拜すべからず、われは三賢十聖なり、得法せりとも比丘尼等を禮拜すべからず、われは帝胤なり、得法なりとも臣家相門を拜すべからずといふ。かくのごとくの癡人、いたづらに父國をはなれて他國の道路に跉跰するによりて、佛道を見聞せざるなり。むかし唐朝の趙州眞際大師、こころをおこして發足行脚せしちなみにいふ、「たとひ七歳なりともわれよりも勝ならばわれかれにとふべし、たとひ百歳なりともわれよりも劣ならばわれかれをしふべし。」七歳に問法せんとき、老漢禮拜すべきなり、奇夷の志氣なり、古佛の心術なり。得道得法の比丘尼出世せるとき、求法參學の比丘僧、その會に投じて、禮拜問法するは、參學の勝躅なり、たとへば渴に飮にあふがごとくなるべし。

震旦國の志閑禪師は、臨濟下の尊宿なり。臨濟ちなみに師のきたるをみてとりとどむる

【末山】末山了然尼、高安大愚に嗣ぐ。傳未詳。

【園頭】叢林に於て菜園種草の勞を執る役の名。

【高安大愚】歸宗知常に嗣ぐ。傳詳ならず。

【黃檗希運】百丈懷海禪師に嗣ぐ。洪州の黃檗山に住す。唐の宣宗大中四年八月黃檗山に寂す。諡して斷際禪師の號を賜ふ。

【擊關破節】關節は停滯する處也、之を擊破する男女の相に滯らぬなり。

【妙信尼】仰山慧寂禪師の嗣ならん。傳不詳。

【廨院主】廨は官舍なり。廨院主の職は、院門の收羅買賣僧行宿食、並に供養物の受納を司り、遠方の施主等を迎接する非職にして且つ任務重し。

に、師いはく「領也。」臨濟をはなちていはく「且放你一頓。」これより臨濟の子となれり。臨濟をはなれて末山にいたるに、末山とふ「近離甚處。」師いはく「路口。」末山いはく「なんぢなんぞ蓋却しきたらざる。」師無語。すなはち禮拜して師資の禮をまうく。師かへりて末山にとふ「いかならんかこれ末山。」末山いはく「不露頂。」師いはく「いかならんかこれ山中人。」末山いはく「非男女等相。」師いはく「なんぢなんぞ變せざる。」末山いはく「これ野狐精にあらず、なにをか變せん。」師禮拜す。ついに發心して園頭をつとむること始終三年なり。のちに出世せりしとき、衆にしめしていはく「われ臨濟爺爺のところにして半杓を得しき、末山孃孃のところにして半杓を得しき、ともに一杓につくりて喫しをはりて、直至如今飽餉餉なり。」いまこの道をききて、昔日のあとを慕古するに、末山は高安大愚の神足なり。命脈ちからありて、志閑の孃となる。臨濟は黃檗運禪師の嫡嗣なり、功夫ちからありて、志閑の爺となる。爺とは、ちちといふなり、孃とは、ははといふなり、志閑禪師の末山尼了然を禮拜求法する志氣の勝躅なり、晩學の慣節なり。擊關破節といふべし。

妙信尼は、仰山の弟子なり、仰山ときに廨院主を選するに、仰山あまねく勤舊前資等にとふ、「たれ人かその仁なる。」問答往來するに、仰山ついにいはく、「信准子これ女流なりといへども、大丈夫の志氣あり。まさに廨院主とするにたへたり。」衆みな應諾す、妙信つひに廨院主に充す。ときに仰山の會下にある龍象うらみず、まことに非細の職にあらざれ

【曹溪高祖の風幡】六祖大鑑慧能禪師曾て南海に居り印宗法師の法性寺に涅槃經を講ずるに遇ふ、暮夜廡廡間の刹竿の颺るを見て二僧對論し一は曰く幡動、一は曰く風動と、往復酬答理に契はず、師云く不是風動、不是幡動、仁者心動と、印宗聽いて錬然として之を異しむ。

【瞎驢】瞎は眼見えざるなり。めくら坊主、蔑める語。

【村人】無智の者なり。

ども、選にあたらん自己としては自愛しつべし。充職して廨院にあるとき、蜀僧十七人ありて、黨をむすびて尋師訪道するに、仰山にのぼらんとして薄暮に廨院に宿す。歇息する夜話に、曹谿高祖の風幡の話を擧す、十七人おのおのいふことみな道不是なり。ときに廨院主かべのほかにありてききていはく、『十七頭の瞎驢、をしむべしいくばくの艸鞋をかつひやす、佛法也未夢見在』ときに行者ありて廨院主の僧を不肯するをききて、十七僧にかたるに、十七僧ともに廨院主の不肯するをうらみず。おのれが道不得をはぢて、すなはち威儀を具し、燒香禮拜して請問す。廨院主いはく、『近前來』十七僧近前するあゆみいまだやまざるに、廨院主いはく、『不是風動、不是幡動、不是心動。』かくのごとく爲道するに、十七僧ともに有省なり、禮謝して師資の儀をなす。すみやかに西蜀にかへる、つひに仰山にのぼらず。まことにこれ三賢十聖のおよぶところにあらず、佛祖嫡嫡の道業なり。しかあればいまも住持および半座の職むなしからんときは、比丘尼の高年宿老なりとも得法せざらん、なにの要かあらん、爲業の主人、かならず明眼によるべし、しかあるに村人の身心に沈溺せらんはかたくなにして、世俗にもわらひぬべきことおほし。いはんや佛法にはいふにたらず、また女人および姉姑等の傳法の師僧を拜不肯ならんと擬するものありぬべし。これはしることなく學せざるゆゑに、畜生にはちかく、佛祖にはとほきなり。一向に佛法に身心を投せんことをふかくたくはふるこころとせるは、佛法かならず人をあはれむことあるなり。おろかなる人天なほまことを感ずるおもひあり、諸佛の正法、いかで

かまことに感應するあはれみなからん。土石沙礫にも、誠感の至神はあるなり。見在大宋國の寺院に比丘尼の掛塔せるが、もし得法の聲あれば、官家より尼寺の住持に補すべき詔をたまふには、即寺にて上堂す。住持以下衆僧みな上參して、立地聽法するに、問話も比丘僧なり、これ古來の規矩なり。得法せらんは、すなはち一箇の眞箇なる古佛にてあれば、むかしのたれにて相見すべからず。かれわれをみるに新條の特地に相接す、われかれを見るに今日須入今日の相待なるべし。たとへば正法眼藏を傳持せらん比丘尼は、四果支佛、および三賢十聖も、きたりて禮拜問法せんに、比丘尼この禮拜をうくべし。男兒なにをもてか貴ならん、虚空は虚空なり、四大は四大なり、五蘊は五蘊なり。女流もまたかくのごとし、得道はいづれも得道す。ただしいづれも得法を敬重すべし、男女を論ずることなかれ、これ佛道極妙の法則なり。また宋朝に居士といふは、未出家の士大夫なり、庵居して夫婦そなはれるもあり、また孤獨潔白なるもあり、なほ塵勞稠林といひぬべし。しかあれどもあきらむるところあるは、雲衲霞袂、あつまりて禮拜請益すること、出家の宗匠におなじ。たとひ女人なりとも畜生なりとも、またしかあるべし。佛法の道理いまだゆめにもみざらんは、たとひ百歳なる老比丘なりとも、得法の男女におよぶべきにあらず、うやまうべからず、ただ賓主の禮のみなり。佛法を修行し、佛法を道取せんは、たとひ七歳の女流なりとも、すなはち四衆の導師なり、衆生の慈父なり。たとへば龍女成佛のごとし、供養恭敬せんこと、諸佛如來にひとしかるべし。これすなはち佛道の古儀なり、しらず單傳せ

【四果支佛】四果は阿羅漢果、支佛は辟支佛、前者は聲聞、後者は緣覺、果上より云ふ。

【三賢十聖】十住十行十廻向の位にある菩薩を三賢位と稱し十地の位にある菩薩を十聖と云

【四大】地大、水大、火大、風大、

【五蘊】色受想行識の五蘊、

【居士】梵語迦羅越(Kulapati)家主と譯す。出家せず家に居りて佛門に歸依せる男子の尊

【龍女成佛】法華經提婆品に娑竭羅龍王に女あり年始めて八才智慧利根なり、乃至當時の衆會皆龍女の忽然として女を變じて男子となり菩薩行を具して即ち南方無垢世界に往き、寳蓮華に坐して等正覺を成ずるを見ると。

【三界の諸天】欲界の六天、色界の四禪天、無色界の四空處天。

ざらんはあはれむべし。

また和漢の古今に、帝位にして女人あり、その國土みなこの帝王の所領なり、人みなその臣となる、これは人をうやまふにあらず位をうやまふなり。比丘尼もまたその人をうやまふことは、むかしよりなし、ひとへに得法をうやまふなり。また阿羅漢となれる比丘尼のあるには、四果にしたがふ功德みなきたる。功德なほしたがふ、人天たれか四果の功德よりもすぐれん。三界の諸天、みなおよぶところにあらず、しかしながらすつるものとなる、諸天みなうやまふところなり。いはんや如來の正法を傳來し、菩薩の大心をおこさん、たれのうやまはざるかあらん。これをうやまはざらんはおのれがをかしなり、おのれが無上菩提をうやまはざれば、謗法の愚癡なり。またわが國には、帝者のむすめ、あるひは大臣のむすめの后宮に準ずるあり、また皇后の院號せるあり、これらかみをそれるあり、かみをそらざるあり。しかあるに貪名愛利の比丘僧ににたる僧侶、この家門にはしるに、かうべをはきものにうたずといふことなし、なほ主從よりも劣なり。いはんやまた奴僕となりことしをふるもおほし、あはれなるかな小國邊地にうまれぬるに、かくのごときの邪風ともしらざることは、天竺唐土にはいまだなし、我國のみなり、かなしむべし。あながちに鬚髮をそりて、如來の正法をやぶる、深重の罪業といふべし。これひとへに夢幻空華の世途をわするるによりて、女人の奴僕と繫縛せられたることをかなしむべし。いたづらなる世途のため、なほかくのごとくす、無上菩提のため、なんぞ得法のうやまふべきをうやま

【非梵行】不清淨の行、婬行なり。

【律云】四分律の語。

【波羅夷不共住】梵音パーラーヂカー（Pārājika）無餘、極惡、斷頭、不共住と譯す、邪婬、偸盜、殺生、妄語の四罪をいふ。この罪を犯せば道を失して僧中に共住するを得ず、永く佛法の外に棄てられ死後阿鼻地獄に墮す、故に極罪とす。

はざらん。これは法をおもくするこころざしあさく、法をもとむるこころざしあまねからざるゆゑなり。すでにたからをむさぼるとき、女人のたからにてあればうべからずとおもはず、法をもとめんときは、このこころざしにはすぐるべし。もししかあらば艸木牆壁も正法をほどこし、天地萬法も正法をあたふるなり、かならずしるべき道理なり。眞善知識にあふといへども、いまだこの志氣をたてて法をもとめざるときは、法水のうるほひかうぶらざるなり、審細に功夫すべし。またいま至愚のはなはだしき人おもふことは、女流は貪婬所對の境界にてありとおもふこころをあらためずしてこれをみる。佛子かくのごとくあるべからず、貪婬所對の境となりぬべしとて、いむことあらば、一切男子も、またいむべきか。染汙の因縁となることは、男も境となる、女も境緣となる、非男非女も境緣となる、夢幻空華も境緣となる、あるひは水影を緣として非梵行あることあり、あるひは天日を緣として非梵行ありき、神も境となる、鬼も境となる、その緣かぞへつくすべからず。八萬四千の境界ありといふ。これみなすつべきか、みるべからざるか。律云、「男二所、女三所、おなじくこれ波羅夷不共住。」しかあれば婬所對の境になりぬべしとてきらはば、一切の男子と女人と、たがひにあひきらふて、さらに得度の期あるべからず、この道理、子細に檢點すべし。外道も妻なきあり、妻なしといへども、佛法にいらざれば、邪見の外道なり。佛弟子も在家の二衆は夫婦あり、夫婦あれども佛弟子なれば、人中天上にも、肩をひとしくする餘類なし。

【愚癡僧】徵觀のことなるべし。宋高僧傳卷五に華嚴徵觀の傳を載す。其觀十願を發す、其三に目に女人を視ず其四に身影俗家に落さず等。

【衆生無邊】諸佛の通願、四弘誓願の一。法界次第、四教儀等に云く、四弘誓願乃ち四諦の境に依りて誓願を發するなり。

また唐國にも愚癡僧ありて願志を立するにいはく、生生世世ながく女人をみることなからん、この願なにの法にかよる、世法によるか、佛法によるか、外道の法によるか、天魔の法によるか。女人なにのとがかある、男子なにの德かある、惡人は男子も惡人なるあり、善人は女人も善人なるあり。聞法をねがひ出離をもとむることかならず男子女人によらず、もし未斷惑のときは、男子女人おなじく未斷惑なり。斷惑證理のときは、男子女人、簡別さらにあらず。またながく女人をみじと願せば、衆生無邊誓願度のときも女人をばすつべきか、すてては菩薩にあらず、佛慈悲といはんや。ただこれ聲聞の酒にゑふことふかきによりて、醉狂の言語なり、人天これをまことと信ずべからず。またむかし犯罪ありしとてきらはば、一切菩薩をもきらふべし。もしのちに犯罪ありぬべしとてきらはば、一切發心の菩薩をもきらふべし。かくのごとくきらはば、一切みなすてん、なにによりてか佛法現成せん、かくのごとくのことばは、佛法をしらざる、癡人の狂言なり、かなしむべし。もしたなんぢが願のごとくにあらば、釋尊および在世の諸菩薩、みな犯罪ありけるか、またなんぢよりも菩提心もあさかりけるか、しづかに觀察すべし。付法藏の祖師、および佛在世の菩薩、この願なくば、佛法にならぶべきところやあると參學すべきなり。もし汝が願のごとくにあらば、女人を濟度せざるのみにあらず、得法の女人よにいでて人天のために說法せんときも、きたりてきくべからざるか。もしきたりてきかずば、菩薩にあらず、すなはち外道なり。いま大宋國をみるに久修練行に似たる僧侶のいたづらに海沙をかぞへて、

【餅をうらず】心不可得の巻に詳し

【結界の境地】佛道修行に障害なきやう一定の境地を制限すること。高野山比叡山を古来女人結界の地として女人の登山を許さざりし類。

【四衆】比丘は男僧、比丘尼は婦人の僧、比丘以上出家。優婆塞は男子の信者、優婆夷は婦人の信者、優婆塞以上在家共に佛弟子なり。

【八部】天、龍、夜叉（勇健）、乾闥婆（尋香神）、阿修羅（非天）、迦樓羅（金翅鳥）、緊那羅（疑神）、摩睺羅伽（大蟒神）。

【三十七部】只是れ表法の数なり。八萬四千部亦同じ。

生死海に流浪せるあり。女人にてあれども參尋知識し、辦道功夫して、人天の導師にてあるあり。餅をうらず餅をすてし老婆等あり。あはれむべし男子の比丘僧にてあれども、いたづらに教海のいさごをかぞへて、佛法は夢にもいまだみざることを。おほよそ境をみてはあきらむることをならふべし、おぢてにぐるとのみならふは、小乘聲聞の教行なり。東をすてて西にかくれんとすれば、西にも境界なきにあらず、たとひにげぬるとおもふとあきらめざるにも、遠にても境なり、なほこれ解脱の分にあらず、遠境はいよいよふかかるべし。また日本國にひとつのわらひごとあり。いはゆるあるひは結界の境地と稱し、あるひは大乘の道場と稱して、比丘尼女人等を來入せしめず。邪風ひさしくつたはれて人わきまふることなし、稽古の人あらためず、博達の士もかんがふることなし、あるひは權者の所爲と稱し、あるひは古先の遺風と號して、さらに論ずることなき、わらはば人の腸もたえぬべし。權者とはなにものぞ、賢人か聖人か、神か鬼か、十聖か、三賢か、等覺か、妙覺か。またふるきをあらためざるべくば生死流轉をばすつべからざるか。いはんや大師釋尊これ無上正等覺なり、あきらむべきはことごとくあきらむ、おこなふべきはことごとくこれをおこなふ、解脱すべきはみな解脱せり、いまのたれかほとりにもおよばん。しかあるに在世の佛會に、みな比丘、比尼丘、優婆塞、優婆夷等の四衆あり、八部あり、三十七部あり、八萬四千部あり。みなこれ佛界を結せることあらたなる佛會なり、いづれの會か比丘尼なき、女人なき、八部なき。如來在世の佛會よりもすぐれて淸淨ならん結界をば、

【轉輪聖王】梵名シヤカラヴルテーラーツヤ(Cakravarti-rāja)須彌四洲を統領する王なり輪寶を轉じて一切を威服するが故に

われらねがふべきにあらず。天魔界なるがゆゑに、佛會の法儀は、自界他方三世千佛ことなることなし、ことなる法あらんは佛會にあらずとしるべし。いはゆる四果は、極位なり、大乘にても、小乘にても、極位の功德は差別せず。しかあるに比丘尼の四果を證するおほし、三界のうちにも、十方の佛土にも、いづれの界にかいたらざらん、たれかこの行履をふさぐことあらん。また妙覺は、無上位なり、女人すでに作佛す、諸方いづれのものか究盡せられざらん、たれかこれをふさぎていたらしめざらんと擬せん。すでに遍照於十方の功德あり、界畔いかがせん。また天女をもふさぎていたらしめざるか、神女をもふさぎていたらしめざるか。天女神女も、いまだ斷惑の類にあらず、なほこれ流轉の衆生なり、犯罪あるときはあり、なきときはなし。人女畜女も、罪あるときはあり、罪なきときはなし。天のみち神のみちふさがん人はたれぞ。すでに三世の佛會に參詣す、佛所に參學す、佛所佛會にことならん、たれか佛法と信受せん、ただこれ誑惑世間人の至愚なり、野干の窟穴を人にうばはれざらんとをしむよりもおろかなり。また佛弟子の位は、菩薩にもあれ、たとひ聲聞にもあれ、第一比丘、第二比丘、第三優婆塞、第四優婆夷、かくのごとし。このくらゐ、天上人間ともにしれり、ひさしくきこえたり。しかあるを佛弟子第二の位は、轉輪聖王よりもすぐれ、釋提桓因よりもすぐるべし。いたらざるところあるべからず。いはんや小國邊土の國王大臣の位にならぶべきにあらず。いま比丘尼いるべからずといふ道場をみるに、田夫野人農夫樵翁みだれいる、いはんや國王、大臣、百官、宰相たれかいら

轉輪王と云ふ。三十二相を具へ人壽無量歳より八萬歳の時までに出で其後出世せずと。

【釋提桓因】具には釋迦提婆因陀羅、略して帝釋、天帝釋と云ふ、梵には(Śakradevendra)能天主と譯す。帝はインドラの譯、釋はシヤクラ、梵漢並擧の名稱。須彌山の頂上忉利天の天主にして善見城に居り四天王及び他の三十二天を領して佛法歸依の人を護り阿修羅の軍を制する天王なり

ざるあらん。田夫等と比丘尼と、學道を論じ得位を論ぜんに、勝劣つひにいかん。たとひ世法にて論ずとも、たとひ佛法にて論ずとも比丘尼のいたらんところへ、田夫野人あへていたるべからず。錯亂のはなはだしき、小國はじめてこのあとをのこす。あはれむべし三界慈父の長子小國にきたりて、ふさぎていたらしめざるところありき。またかの結界と稱するところにすめるやから、十惡をおそるることなし、十重つぶさにをかす。ただ造罪界として不造罪人をきらふか。いはんや逆罪をおもきこととす、結界の地にすめるもの、逆罪もつくりぬべし。かくのごときの魔界はまさにやぶるべし、佛化を學すべし、佛界にいるべし、まさに佛恩を報するにてあらん。かくのごときの古先、なんぢ結界の旨趣をしれりやいなや、たれよりか相承せりし、たれが印をかかうぶる。いはゆるこの諸佛所結の大界にいるものは、諸佛も、衆生も、大地も、虚空も、繫縛を解脫し、諸佛の妙法に歸源するなり。しかあればすなはちこの界をひとたびふむ衆生、しかしながら佛功德をかうぶるなり。不違越の功德あり、得清淨の功德あり。一方を結するときすなはち法界みな結せられ、一重を結するとき、法界みな結せらるるなり。あるひは水をもて結する界あり、あるひは心をもて結界することあり、あるひは空をもて結界することあり、かならず相承相傳ありて、しるべきことあり。いはんや結界のとき、灑甘露ののち、歸命の禮をはり、乃至淨界等ののち、頌して云『玆界遍法界、無爲結清淨』この旨趣、いまひごろ結界と稱する古先老人、しれりやいなや。おもふになんだち結の中に遍法界の結せらるることとしるべか

らざるなり。しりぬなんぢ聲聞の酒にゑふて小界を大界とおもふなり、ねがはくばひごろの迷醉すみやかにさめて、諸佛の大界の遍界に違越すべからず。濟度攝受に、一切衆生みな化をかうぶらん功德を禮拜恭敬すべし、たれかこれを得道髓といはざらん。

正法眼藏禮拜得髓　畢

延應庚子淸明日記觀音導利興聖寶林寺

正法眼藏谿聲山色

阿耨菩提に、傳道受業の佛祖おほし。粉骨の先蹤即不無なり、斷臂の祖宗まなぶべし。掩泥の毫髮もたがふることなかれ。各各の脫殼をうるに、從來の知見解會に拘牽せられず、曠劫未明の事たちまちに現前す。恁麼時の而今は、吾も不知なり、誰も不識なり。汝も不期なり、佛眼も覷不見なり、人慮あに測度せんや。

大宋國に東坡居士蘇軾とてありしは、字は子瞻といふ、筆海の眞龍なりぬべし。佛海の龍象を學す、重淵にも游泳す、層雲にも昇降す。あるとき廬山にいたりしちなみに、溪水の夜流する聲をきくに悟道す。偈をつくりて常總禪師に呈するにいはく、『谿聲便是廣長舌、山色豈非清淨身、夜來八萬四千偈、他日如何擧似人。』この偈を總禪師に呈するに、總禪師然之す。總は、照覺常總禪師なり、總は黃龍慧南禪師の法嗣なり、南は、慈

【得道髓】佛道の骨髓を體得したる者と云ふべし。

【延應庚子】延應二年、道元禪師四十一歳の時なり。

【晴明日】三月の節に當る。

【記】單に記とのみありて對機を示さざれ共當時に於ける教界の通弊を打破せんとする一の公開狀とも見るを得べし。

【谿聲山色】本文に擧ぐる東坡居士悟道の偈の起承谿聲便是廣長舌、山色豈非淸淨身の語を以て題號に置く宗意は谿聲を以て廣長舌に比し山色を以て清淨身に喩ふるには非ず谿聲を如來の轉法輪と云ひ山色を如來の淨法身と云ふなり更に云へば轉法輪も淨法身も不用なり、谿聲は谿聲なり、山色は山色なり。

【曠劫未明の事】空劫已前の消息。我見我慢名聞利養を離れたる當處に現成する谿聲山色の風光。

【東坡居士】姓は蘇氏、字は子瞻、蘇老泉の子。眉山の人、宋中世の文學者にして久博く經史に通ず。東林常總禪師に參じて心要を得、室を東坡に築き自ら東坡居士と號す。此偈最も聞ゆ。

【廬山】廬山の東林寺、慧遠の開創せし處、當時は禪の道場たりしものか。

【照覺常總】黄龍慧南禪師に嗣ぐ。初め泐潭に住し後江州東林の龍興寺に遷る、門下多數の龍象を出す。東坡禪師を接して名あり。寂年不詳、照覺禪師は諡號。

【黄龍慧南】慈明楚圓禪師に嗣ぐ。

明楚圓禪師の法嗣なり。居士あるとき佛印禪師了元和尚と相見するに、佛印さづくるに、法衣佛戒等をもてす。居士つねに法衣を搭して修道しき。居士佛印にたてまつるに無價の玉帶をもてす。ときの人いはく、「凡俗所及の儀にあらず。」と。しかあれば聞谿悟道の因緣さらにこれ晩流の潤益なからんや。あはれむべしいくめぐりか現身說法の化儀にもれたるがごとくなる。なにとしてかさらに山色をみ谿聲をきく、一句なりとやせん、半句なりとやせん、八萬四千偈なりとやせん。うらむべし山水にかくれたる聲色あること、またよろこぶべし山水にあらはるる時節因緣あること、舌相も懈倦なし、身色あに存沒あらんや。しかあれどもあらはるるときをやちかしとならふ、かくれたるときをやちかしとならはん。一枚なりとやせん、半枚なりとやせん。從來の春秋は、山水を見聞せざりけり、夜來の時節には、山水を見聞することわづかなり。いま學道の菩薩も山流水不流より學入の門を開すべし。この居士の悟道せし夜は、そのさきの日、總禪師と居士無情說法話を參問せしなり。禪師の言下に飜身の儀いまだしといへども、谿聲のきこゆるところは、逆水の波浪たかく天をうつものなり。しかあればいま谿聲の居士をおどろかす、谿聲なりとやせん、照覺の流瀉なりとやせん。うたがふらくは照覺の無情說法の語、ひびきいまだやまず、ひそかに谿流のよるの聲にみだれいる。たれかこれ一升なりと辨肯せん、一海なりと朝宗せん。畢竟じていはば、居士の悟道するか、山水の悟道するか、たれの明眼あらんか、長舌相淸淨身を急著眼せざらん。

黄龍派の祖。宋の神宗熙寧二年三月寂す、普覺禪師と諡す。

【慈明楚圓】汾陽善昭禪師に嗣ぐ。石霜に住して大いに臨濟の家風を唱ふ。宋の仁宗寶元二年正月寂壽五十四

【佛印禪師了元】開先善暹禪師に嗣ぐ。禪林類聚第十五卷に佛印禪師と東坡居士との機緣を載せ佛印、居士に贈るに衲衣を以てすることを記す

【香嚴智閑】潙山靈祐禪師の嗣、印可の後鄧州の香嚴寺に開堂し大いに宗風を擧ぐ。襲燈禪師と諡す。傳不詳

【大潙大圓禪師】大潙山に住せし靈祐禪師、大圓禪師は諡號。

【大證國師】六祖の嗣、南陽慧忠國師のこと。

【一擊亡所知】香巖擊竹の偈として

また香嚴智閑禪師、かつて大潙大圓禪師の會に學道せしとき、大潙いはく、「なんぢ聰明博解なり、章疏のなかより記持せず、父母未生以前にあたりて、わがために一句を道取しきたるべし。」香嚴いはんことをもとむること數番すれども不得なり。ふかく身心をうらみ、年來たくはふるところの書籍を披尋するに、なほ茫然なり。つひに火をもちて年來のあつむる書をやきていはく、「畫にかけるもちひはうゑをふさぐにたらず、われちかふ此生に佛法を會せんことをのぞまじ、ただ行粥飯僧とならん」といひて行粥飯して年月をふるなり。行粥飯僧といふは、衆僧に粥飯を行益するなり、このくにの陪饌役送のごときなり。かくのごとくして大潙にまうす、「智閑は身心昏昧にして道不得なり、和尚わがためにいふべし。」大潙のいはく、「われなんぢがためにいはんことを辭せず、おそらくはのちになんぢわれをうらみん。」かくて年月をふるに、大證國師の蹤跡をたづねて、武當山にいりて、國師の菴のあとに、くさをむすびて爲菴す。竹をうゑてともしけり。あるとき道路を掃淨するちなみに、かはらほとばしりて竹にあたりてひびきをなすをきくに、豁然として大悟す。沐浴し潔齋して、大潙山にむかひて燒香禮拜して、大潙にむかひてまうす、「大潙大和尚、むかしわがためにとくことあらば、いかでかいまこの事あらん、恩のふかきこと父母よりもすぐれたり。」つひに偈をつくりていはく、「一擊亡㆓所知㆒。更不㆓自修治㆒。動容揚㆓古路㆒。不㆑墮㆓悄然機㆒。處處無㆓蹤跡㆒。聲色外威儀。諸方達道者。咸言上上機。」この偈を大潙に呈す。大潙いはく、『此子徹也。』

名高し。

【靈雲志勤】潙山靈祐禪師に嗣ぐ。傳記不詳。桃花を見て悟りし因緣を以て名高し。悟道の偈此にあり。

【長沙景岑禪師】南泉普願禪師に嗣ぐ。字は景岑、招賢大師と號す。機鋒峻烈天下人皆その香頭に懾伏す、故に叢林稱して岑大蟲（虎のこと）といふ。寂年等不詳。

【瑯琊の廣照大師】名は慧覺、汾陽善昭禪師に嗣ぐ、南嶽下第十世。瑯琊山開化寺に宗風を唱ふ。世壽寂年不詳。

【講師子璿】秀州嘉興の人。楞嚴經を誦して瑯琊慧覺に依つて省あり、後長水に住し大いに禪要を說く。講師は敬稱。

また靈雲志勤禪師は、三十年の辨道なり。あるとき遊山するに山脚に休息して、はるかに人里を望見す。ときに春なり、桃華のさかりなるをみて、忽然として悟道す。偈をつくりて大潙に呈するにいはく、「三十年來尋劍客、幾回葉落又抽枝、自從一見桃華後、直至如今更不疑。」大潙いはく、「從緣入者、永不退失。」すなはち許可するなり。いづれの入者か從緣せざらん、いづれの入者か退失あらん、ひとり勤をいふにあらず、つひに大潙に嗣法す。山色の清淨身にあらざらん、いかでか恁麼ならん。

長沙景岑禪師にある僧とふ、「いかにしてか山河大地を轉じて自己に歸せしめん。」師いはく、「いかにしてか自己を轉じて山河大地に歸せしめん。」いまの道取は、自己のおのづから自己にある、自己たとひ山河大地といふも、さらに所歸に罣礙すべきにあらず。

瑯琊の廣照大師慧覺和尚は南嶽の遠孫なり。あるとき教家の講師子璿とふ、「清淨本然、云何忽生山河大地。」かくのごとくとふに、和尚しめすにいはく、「清淨本然、云何忽生山河大地。」ここにしりぬ清淨本然なる山河大地を、山河大地とあやまるべきにあらず。しかあるを經師かつてゆめにもきかざれば、山河大地を山河大地としらざるなり。

しるべし山色谿聲にあらざれば、拈華も開演せず、得髓も依位せざるべし。谿聲山色の功德によりて、大地有情同時成道し、見明星悟道する諸佛あるなり。かくのごとくなる皮袋、これ求法の志氣甚深なりし先哲なり。その先蹤、いまの人かならず參取すべし。いまも名利にかかはらざらん。眞實の參學は、かくのごときの志氣をたつべきなり。遠方の

【黒暗業】觀佛三昧經に説く黒暗地獄に墮する惡事。冥より冥に入る業繫をいふ。

【眞龍を愛せざらん】葉公子高常に畫龍を愛す、眞龍現はるるに及んで驚異氣を絶す。假に宜しくして眞に宜しからざるの例。

【寶山にうまれ】大論に云く、唯信を手と爲す、人の手あるが如く寶山の中に入つて自在に能く取るが如し若し信の手無くんば取るところある能はずと。

近來は、まことに佛法を求覓する人まれなり、なきにはあらず難遇なるなり。たまたま出家兒となり離俗せるにゝたるも、佛道をもて名利のかけはしとするのみおほし、あはれむべしかなしむべし。この光陰をしまず、むなしく黒暗業に賣買すること、いづれのときかこれ出離得道の期ならん。たとひ正師にあふとも、眞龍を愛せざらん。かくのごとくのたぐひ、先佛これを可憐憫者といふ。その先世に惡因あるによりてしかあるなり。生をうくるに爲法求法のこころざしなきによりて、眞龍をみるとき眞龍をあやしみ、正法にあふとき正法にいとはるるなり。この身心骨肉かつて從法而生ならざるによりて、法と不相應なり、法と不受用なり。祖宗師資、かくのごとく相承してひさしくなりぬ。菩提心は、むかしのゆめをとくがごとし。あはれむべし寶山にうまれながら寶財をしらず、寶財をみず、いはんや法財をえんや。もし菩提心をおこしてのち、六趣四生に輪轉すといへども、その輪轉の因縁、みな菩提の行願となるなり。しかあれば從來の光陰は、たとひむなしくすごすといふとも、今生のいまだすぎざるあひだに、いそぎて發願すべし。ねがはくばわれと一切衆生と、今生より乃至生生をつくして正法をきくことあらん。きくことあらんとき、正法を疑著せじ、不信なるべからず。まさに正法にあはんとき、世法をすてて、佛法を受持せん、つひに大地有情ともに成道することをえん。

かくのごとく發願せば、おのづから正發心の因縁ならん、この心術懈倦することなかれ。またこの日本國は海外の遠方なり、人のこころ至愚なり、むかしよりいまだ聖人うまれず、

【忠言逆耳】孔子家語に云く、良薬口に苦し而も病に利あり、忠言耳に逆ふ而も行に利ありと。

生知うまれず、いはんや學道の實士まれなり。道心をしらざるともがらに、道心をしふるときは、忠言の逆耳するによりて、自己をかへりみず、他人をうらむ。おほよそ菩提心の行願には、菩提心の發未發、行道不行道を、世人にしられんことをおもはざるべし、しられざらんといとなむべし、いはんやみづから口稱せんをや。いまの人は實をもとむることまれなるによりて身に行なくこころにさとりなくとも、他人のほむることありて、行解相應せりといはん人をもとむるがごとし。迷中又迷、すなはちこれなり、この邪念すみやかに抛捨すべし。學道のとき、見聞すとことのかたきは、正法の心術なり、その心術は、佛佛相傳しきたれるものなり、これを佛光明とも、佛心とも相傳するなり。如來在世より、今日にいたるまで、名利をもとむるを學道の用心とするににたるともがらおほかり。しかありしも正師のをしへにあひて、ひるがへして正法をもとむれば、おのづから得道す、いま學道には、かくのごとくのやまふのあらんとしるべきなり、たとへば初心始學にもあれ、久修練行にもあれ、傳道授業の機をうることもあり、機をえざることもあり、慕古してならふ機あるべし、訕謗してならはざる魔もあらん、兩頭ともに愛すべからず、うらむべからず、いかにしてかうれへなからんうらみざらん、いはく、三毒を三毒としれるともがらまれなるによりて、うらみざるなり。いはく、はじめて佛道を欣求せしときのこころざしをわすれざるべし。いはく、はじめて發心するときは、他人のために法をもとめず、名利をなげすてきたる、名利をもとむるにあらず、ただひとすぢに得道をこころざす、かつて

國王大臣の恭敬供養をまつこと期せざるものなり。しかあるにいまかくのごとくの因緣あり、本期にあらず所求にあらず、人天の繋縛にかかはらんことを期せざるところなり。しかあるをおろかなる人は、たとひ道心ありといへども、はやく本志をわすれて、あやまりて人天の供養をまちて、佛法の功德いたれりとよろこぶ、國王大臣の歸依しきりなれば、わがみちの現成とおもへり。これは學道の一魔なり、あはれむこころをわするべからずといふとも、よろこぶことなかるべし。みずや、ほとけのたまはく、如來現在猶多怨嫉の金言あることを。愚の賢をしらず、小畜の大聖をねたむこと理かくのごとし。

また西天の祖師おほく外道二乘國王等のためにやぶられたるを、これ外道のすぐれたるにあらず、祖師に遠慮なきにあらず。初祖西來よりのち、嵩山に掛錫するに、梁武もしらず、魏主もしらず、ときに兩箇のいぬあり。いはゆる菩提流支三藏と光統律師となり、虚名邪利の正人にふさがれんことをおそれて、あふぎて天日をくらまさんと擬するがごとくなりき、在世の達多よりもなほはなはだし。あはれむべしなんぢが深愛する名利は、祖師これを糞穢よりもいとふなり。かくのごとくの道理、佛法の力量の究竟せざるにはあらず、良人をほゆるいぬありとしるべし、ほゆるいぬをわづらふことなかれ、うらむることなかれ、引導の發願すべし、汝是畜生發菩提心と施設すべし。先哲いはく、「これはこの人面の畜生なり、また歸依供養する魔類もあるべきなり。」前佛いはく、「不視近國王、王子、大臣、官長、婆羅門、居士。」まことに佛道を學習せん人、わすれざるべき行儀なり、菩薩初學の

【如來現在】法華法師品の文。
【金言】金口の言
【菩提流支】梵音ボーディルチ（Bodhiruci）覺希、道希と譯す。北印度の人魏の永平の初め東夏に來る永寧寺に在りて經論三十九部百二十七卷を譯出す、その終る處を詳にせず。
【光統律師】慧光僧統を略して光統といふ、四分律を究め、其興隆を圖る、故に律師と數稱す、梁武帝六年八十歳を以て寂す
【良人をほゆる犬】史記に云く、跖の犬堯を吠ゆ、堯不仁なるに非ず、狗は固より其主に非ざるに吠ゆるなり

【汝是畜生】梵網經の不化有情戒の文。

【不親近國王】法華安樂品の文。

【魔波旬】波旬の梵音(Pāpiyān)惡又は殺者と譯す、魔王の名、常に惡意を懷き、惡法を成就し僧を擾し人の慧命を斷つと云ふ。

功徳すすむにしたがふてかさなるべし。

またむかしより天帝きたりて行者の志氣を試驗し、あるひは魔波旬きたりて、行者の修道をさまたぐることあり。これみな名利の士氣はなれざるときこの事ありき。大慈大悲のふかく、廣度衆生の願の老大なるには、これらの障礙あらざるなり。修行の力量、おのづから國土をうることあり、世運の達せるに相似せることあり、かくのごとくの時節、さらにかれを辨肯すべきなり、かれに瞌睡することなかれ。愚人これをよろこぶ、たとへば癡犬の枯骨をねぶるがごとし、賢聖これをいとふ、たとへば世人の糞穢をおづるにたり。おほよそ初心の情量は、佛道をはからふことあたはず、測量すといへども、あたらざるなり。初心に測量せずといへども、究竟に究盡なきにあらず。徹地の堂奧は、初心の淺識にあらず、ただまさに先聖の道をふまんことを行履すべし。このとき尋師訪道するに、梯山航海あるなり。導師をたづね知識をねがふには、從天降下なり、從地涌出なり。その接渠のところに、有情に道取せしめ、無情に道取せしむるに、身處にきき心處にきく。若將耳聽は、家常の茶飯なりといへども、眼處聞聲これ何必不必なり。見佛にも自佛他佛をみ、大佛小佛をみる、大佛にもおどろきおそれざれ、小佛にもあやしみわづらはざれ。いはゆる大佛小佛を、しばらく山色谿聲と認ずるものなり。これに廣長舌あり、八萬偈あり、擧似迥脫なり、見徹獨拔なり。このゆゑに、俗いはく、彌高彌堅なり。先佛いはく、彌天彌綸なり。春松の操あり、秋菊の秀ある、即是なるのみなり。善知識この田地にいたらん

【前佛に懺悔】前佛を佛前の意となす者あれ共非なり。前佛は先佛の意。佛前懺悔は小乘の儀式とす、戒法は先佛養祖傳來するところを受授す、先佛養祖に對して懺悔する是れ理の至極にしてその文證次の發願文に明らかなり。懺悔は懺摩(Ksama)懺悔過と譯す。梵漢兼學の語。

【ねがはくは】「ねがはくはわれと一切衆生と」より、「大地有情とともに成道することをえん」に至る一段と「ねがはくはわれたとひ過去の惡業おほくかさなりて」より「これ一色の正修行なり」に至る一段とを拔續し、永平高祖發願文として平常諷誦す。前段は正發心の願文、後段は淨信懺悔の發願文

とき、人天の大師なるべし。いまだこの田地にいたらず、みだりに爲人の儀を存せん、人天の大賊なり。春松しらず、秋菊みざらん、なにの艸料かあらん、いかが根源を截斷せん。また心も肉も、懈怠にもあり。不信にもあらんには、誠心をもはらして前佛に懺悔すべし、恁麼するとき前佛懺悔の功德力、われをすくひて淸淨ならしむ。この功德、よく無礙の淨信精進を生長せしむるなり。淨信一現するとき、自他おなじく轉ぜらるるなり、その利益あまねく情非情にかうぶらしむ。その大旨は、ねがはくはわれたとひ過去の惡業おほくかさなりて、障道の因緣ありとも、佛道によりて得道せりし、諸佛諸祖われをあはれみて、業果を解脫せしめ、學道さはりなからしめ、その功德法門、あまねく無盡法界に充滿彌綸せらん。あはれみをわれに分布すべし。佛祖の往昔は、吾等なり、吾等が當來は、佛祖ならん。佛祖を仰觀すれば、一佛祖なり、發心を觀想するにも、一發心なるべし。あはれみを七通八達せんに、得便宜なり、落便宜なり。

このゆゑに龍牙のいはく、『昔生未レ了今須レ了。此生度ニ取果生身一。古佛未レ悟同ニ今者一。悟了今人卽古人。』しづかにこの因緣を參究すべし、これ諸佛の承當なり。かくのごとく懺悔すれば、かならず佛祖の冥助あるなり、心念身儀發露白佛すべし。發露のちから、罪根をして銷殞せしむるなり。これ一色の正修行なり、正信心なり、正信身なり。正修行のとき、谿聲谿色、山色山聲、ともに八萬四千偈をしまざるなり。自己もし名利身心を不惜すれば、谿山また恁麼の不惜あり。たとひ谿聲山色八萬四千偈を現成せ

【得便宜】學人修して必ず證を得。
【落便宜】學人修して證を得るも證の痕迹をとどめず
【龍牙】龍牙山の居遁禪師の偈。龍牙は洞山良价禪師の法嗣、湖南龍牙山の妙濟禪苑に開法、唐の龍德三年九月寂、壽八十九
【心念身儀發露白佛】三業等しく懺悔す。心念は意業身儀は身業、發露白佛は口業。
【一色の正修行】純一無雜三業清淨身心一如の修行。正修行とは正信の心なり正信の身なり。正信修行の身心なるが故に一色
【結制後五日】四月廿日。
【示衆】對機は大衆。
【諸惡莫作】諸惡莫作乃至是諸佛教の四言四句は七佛通誡の偈として增一阿含經第一卷及

しめ、現成せしめざることは、夜來なりとも、谿山の谿山を擧似する盡力未便ならんば、たれかなんぢを谿聲山色と見聞せん。

爾時延應庚子結制後五日在㆓觀音導利興聖寶林寺㆒示衆

正法眼藏谿聲山色　畢

正法眼藏諸惡莫作

古佛曰、『諸惡莫作、衆善奉行、自淨其意、是諸佛教。』これ七佛祖宗の通戒として、前佛より後佛に正傳す。後佛は前佛に相嗣せり。ただ七佛のみにあらず、是諸佛教なり。この道理を功夫參究すべし。いはゆる七佛の法道、かならず七佛の法道のごとし。相傳相嗣、なほ箇裏の通消息なり。すでに是諸佛教なり、百千萬佛の教行證なり。」いまいふところの諸惡は、善性惡性無記性のなかに惡性あり、その性これ無生なり。善性無記性等も、また無生なり、無漏なり、實相なりといふとも、この三性の裏箇に、許多般の法あり。諸惡は、此界の惡と他界の惡と同不同あり。先時と後時と同不同あり。天上の惡と人間の惡と同不同なり。いはんや佛道と世間と、道惡道善道無記はるかに殊異あり。善惡は時なり、時は善惡にあらず。善惡は法なり法は善惡にあらず。法等惡等なり、法等善等なり。しかあるに阿耨多羅三藐三菩提を學するに、聞教し修行し證果するに、深なり、遠なり、妙な

び出曜經、第十七卷等に出づ、今その第一句を以て標題と爲す、全篇通じて此四句の提唱なり。三聚淨戒、四弘誓願、三身、三德、乃至六度萬行、八萬の法藏、悉く此四句に攝す、諸佛の未だ道はざる道を道元禪師之を盡し了れり。深く參究すべし。

【古佛】釋迦牟尼佛。

【道善道惡無記道】道は言ふなり、みちにはあらず。

【諸惡莫作とねがひ】諸惡作ること莫れと訓ず、次の諸惡莫作とおこなひもてゆくは、諸惡作ること莫しと訓ず。之を莫作三段の說示とす、曰く作ること莫れ、曰く作ること莫し、曰く作られざるなり。

り。この無上菩提を、或從知識してきき、或從經卷してきく。はじめは諸惡莫作ときこゆるなり、諸惡莫作ときこえざるは、佛正法にあらず、魔說なるべし。しるべし諸惡莫作ときこゆる、これ佛正法なり。この諸惡つくることなかれといふ、凡夫のはじめて造作してかくのごとくあらしむるにあらず、菩提の說となれるを聞教するに、しかのごとくきこゆるなり。しかのごとくきこゆるは、無上菩提のことばにてある道著なり。すでに菩提語なり、ゆゑに語菩提なり。無上菩提の說著となりて聞著せらるるに轉ぜられて、諸惡莫作とねがひ、諸惡莫作とおこなひもてゆく。諸惡すでにつくられずなりゆくところに、修行力たちまちに現成す。この現成は、盡地盡界盡時盡法を量として、現成するなり、その量は莫作を量とせり。正當恁麼時の正當恁麼人は、諸惡つくりぬべきところに住し往來し、諸惡つくりぬべき緣に對し、諸惡つくる友にまじはるににたりといへども、諸惡さらにつくられざるなり。莫作の力量現成するゆゑに、諸惡みづから諸惡と道著せず、諸惡にさだまれる調度なきなり。一拈一放の道理あり。正當恁麼時、すなはち惡の人ををかさざる道理しられ、人の惡をやぶらざる道理あきらめらる。みづからが心を擧して修行せしむ、身を擧して修行せしむるに、機先の八九成あり、腦後の莫作あり。なんぢが身心を拈來して修行し、たれの身心を拈來して修行するに、四大五蘊にて修行するちから、驀地に見成するに、四大五蘊の自己を染汚せず、今日の四大五蘊までも修行せられもてゆく。如今の修行なる四大五蘊のちから、上項の四大五蘊を修行ならしむるなり。山河大地日月星辰まで

も修行せしむるに、山河大地日月星辰、かへりてわれらを修行せしむるなり。一時の眼睛にあらず、諸時の活眼なり。眼睛の活眼にてある諸時なるがゆゑに、諸佛諸祖をして修行せしむ、聞教せしむ、證果せしむ。諸佛諸祖、かつて教行證をして染汙せしむることなきがゆゑに、教行證いまだ諸佛諸祖を罣礙することなし。このゆゑに佛祖をして修行せしむるに、過現當の機先機後に廻避する諸佛諸祖なし。衆生作佛作祖の時節、ひごろ所有の佛祖を罣礙せずといへども、作佛祖する道理を十二時中の行住坐臥につらつら思量すべきなり。作佛祖するに衆生をやぶらず、うばはず、うしなふにあらず、しかあれども脱落しきたれるなり。善惡因果をして修行せしむ、いはゆる因果を動ずるにあらず造作するにあらず。因果、あるときはわれらをして修行せしむるなり。この因果の本來面目すでに分明なる、これ莫作なり、無生なり、無常なり、不昧なり、不落なり、脱落なるがゆゑに、かくのごとく參究するに、諸惡は一條にかつて莫作なりけると現成するなり。この現成に助發せられて、諸惡莫作なりと見得徹し坐得斷するなり。正當恁麼のとき、初中後諸惡莫作にて現成するに、諸惡は因緣生にあらず、ただ莫作なるのみなり。諸惡は因緣滅にあらず、ただ莫作なるのみなり。諸惡もし等なれば、諸法も等なり。諸惡は因緣生としりて、この因緣のおのれと莫作なるをみざるは、あはれむべきともがらなり。佛種從緣起なれば、緣從佛種起なり。諸惡なきにあらず、莫作なるのみなり。諸惡あるにあらず、莫作なるのみなり。諸惡は空にあらず莫作なり、諸惡は色にあらず莫作なり、諸惡は莫作にあらず、

【井の驢をみる】曹山錄に云く、師(曹山)徳上座に問うて曰く佛の眞法身は猶ほ虚空の如く物に應じて形を現ずること、水中の月の如しと、作麼生か應底の道理を說かん、徳曰く驢の井を覷るが如し、師曰く只八九成を道ひ得たり、徳曰く和尚作麼生、師曰く井の驢を覷るが如しと。

【佛眞法身】金光明經四天王品の偈

【磁鐵よりも】涅槃經第三十二に師子菩薩曰く、世尊

莫作なるのみなり。たとへば春松は無にあらず有にあらず、つくらざるなり。秋菊は有にあらず無にあらず、つくらざるなり。諸佛は有にあらず無にあらず莫作なり。露柱燈籠、拂子、拄杖等あるにあらずなきにあらず、莫作なり。自己は有にあらず無にあらず莫作なり。恁麼の參學は、見成せる公案なり、公案の見成なり。主より功夫し、賓より功夫す、すでに恁麼なるにつくられざりけるをつくりけるとくやしむものがれず。さらにこれ莫作の功夫力なり。しかあれば莫作にあらばつくらまじと趣向するは、あゆみをきたにして越にいたらんとまたんがごとし。諸惡莫作は、井の驢をみるのみにあらず、井の井をみるなり、驢の驢をみるなり、人の人をみるなり、山の山をみるなり。說箇應底道理あるゆゑに、諸惡莫作なり。佛眞法身、猶若虛空、應物現形、如水中月なり。應物の莫作なるゆゑに、現形の莫作なり。猶若虛空、左拍右拍なり。如水中月、被水月礙なり。これらの莫作、さらにうたがふべからざる現成なり。衆善奉行、この衆善は、三性のなかの善性なり。善性のなかに衆善ありといへども、さきより現成して行人をまつ衆善いまだあらず。作善の正當恁麼時、きたらざる衆善なし。萬善は無象なりといへども、作善のところに計會すること、磁鐵よりも速疾なり。そのちから毘嵐風よりもつよきなり。大地山河世界國土、業增上力なほ善の計會を罣礙することあたはざるなり。しかあるに世界によりて善を認ずることおなじからざる道理、おなじ認得を善とせるがゆゑに、如三世諸佛說法之儀式、おなじといふは、在世說法ただ時なり。壽命身量またときに一任しきたれるがゆゑに、說無分別

譬へば磁石の鐵を去ること遠しと雖も其力を以ての故に鐵則ち隨著するが如しと。

【毘嵐風】梵音鞞藍婆（Velamba）迅猛風と譯す、速力迅急にして至るところ皆壞散する風

【信行の機】婆沙論に、一に鈍根を隨信行と名く、彼は信に由つて起行するが故にと。

【法行の機】婆沙論に、二に利根を隨法行と名く、彼は法に由つて起行するが故にと。

法なり。しかあればすなはち信行の機の善と、法行の機の善と、はるかにことなり、別法にあらざるがごとし。たとへば聲聞の持戒は菩薩の破戒なるがごとし。衆善、これ因緣生、因緣滅にあらず。衆善は諸法なりといふとも、諸法は衆善にあらず。因緣と生滅と衆善と、おなじく頭正あれば尾正あり。衆善は奉行なりといへども、自にあらず自にしられず、他にあらず他にしられず。自他の知見は、知の自あり他あり、見の自あり他あるがゆゑに、各各の活眼睛それ日にもあり、月にもあり、これ奉行なり。奉行の正當恁麼時に、現成の公案ありとも、公案の始成にあらず、公案の久住にあらず。さらにこれを本行といはんや、作善の奉行なるといへども、測度すべきにはあらざるなり。いまの奉行これ活眼睛なりといへども、測度にはあらず、法を測度せんために現成せるにあらず。活眼睛の測度は、餘法の測度とおなじかるべからず。衆善有無色空等にあらず、ただ奉行なるのみなり。いづれのところの現成、いづれのときの現成も、かならず奉行なり。この奉行にかならず衆善の現成あり。奉行の現成、これ公案なりといふとも、生滅にあらず因緣にあらず、奉行の入住出等もまたかくのごとし。衆善のなかの一善、すでに奉行するところに、盡法全身、眞實地等、ともに奉行せらるゝなり。この善の因果、おなじく奉行の現成公案なり。因はさき果はのちなるにあらざれども、因圓滿し果圓滿す。因等法等、果等法等なり。因にまたれて果感ずといへども、前後にあらず、前後等の道あるがゆゑに。「自淨其意といふは、莫作の自なり、莫作の淨なり。自の其なり、自の意なり。莫作の其なり、莫作の意なり。奉

【驢事未去馬事到來】長慶慧稜の語。未去到來は二物の如くなれ共隙間なきが故に一體不二なるを云ふ。

【白居易】唐の杭州の刺史、名は居易、樂天は其號。久しく佛光如滿禪師に參じて心要を得、元和十五年鳥窠禪師を訪うて禪に參ず。後龍門の香山寺を修し文酒に放意し醉吟先生と云ひ、晩年葷茹を食はず香山居士と稱す。會昌六年七十五歳を以て逝く。

【佛光如滿】法を馬祖道一禪師に嗣

行の意なり、奉行の淨なり。奉行の其なり、奉行の自なり。」かるがゆゑに是諸佛教といふなり。いはゆる諸佛あるひは自在天のごとし、自在天に同不同ありといへども、一切の自在天は諸佛にあらず、あるひは轉輪王のごとくなり。しかあれども一切の轉輪聖王の諸佛なるにあらず、かくのごとくの道理、功夫參學すべし。諸佛はいかなるべしとも學せず、いたづらに苦辛するに相似せりといへども、さらに受苦の衆生にして行佛道にあらざるなり。」莫作および奉行は、驢事未去、馬事到來なり。

唐の白居易は、佛光如滿禪師の俗弟子なり、江西大寂禪師に孫子なり。杭州の刺史にてありしとき、鳥窠の道林禪師に參じき。ちなみに居易とふ、『如何是佛法大意。』道林いはく、『諸惡莫作、衆善奉行。』居易いはく、『もし恁麼にてあらんば、三歳の孩兒も道得ならん。』道林いはく、『三歳孩兒縱道得、八十老翁行不レ得なり。』恁麼いふに、居易すなはち拜謝してさる。まことに居易は白將軍がのちなりといへども、奇代の詩仙なり。人つたふらくは二十四生の文學なり、あるひは文殊の號あり、あるひは彌勒の號あり、風情のきこえざるなし、筆海の朝せざるなかるべし。しかあれども佛道には初心なり、晩進なり。」いはんやこの諸惡莫作、衆善奉行は、その宗旨、ゆめにもいまだみざるがごとし。居易おもはくは、道林ひとへに有心の趣向を認じて、諸惡をつくることなかれ、衆善奉行すべしといふならんとおもひて、佛道に千古萬古の諸惡莫作、衆善奉行の、亙古亙今なる道理、しらずきかずして、佛法のところをふまず佛法のちからなきがゆゑに、しかのごとく

ぐ、五臺山の金閣寺に住して大に宗風を張る、白居易は其俗弟子。寂年世壽等不詳。

【江西大寂禪師】南嶽懷讓禪師の法嗣。姓は馬氏、諱は道一、江西馬祖山に法幢を建立し盛に宗風を唱ふ、德宗貞元四年二月寂し、憲宗諡して大寂禪師と號す。

【鳥窠の道林】國一禪師徑山道欽に嗣ぐ、後秦望山の長松の枝葉繁茂し盤桓して蓋の如くなるを見て遂に其上に棲止す、時人稱して鳥窠禪師といふ、復鵲あつて其側に巣ひ自然に馴る、依て又鵲巣禪師とも云ふ。唐の長慶四年二月坐脱す、壽八十。

【異熟等流】異熟果とは果の因と異りて熟するが故に等流果果とは果の因と等しき流類のの

いふなり。たとひ造作の諸惡をいましめ、たとひ造作の衆善をすすむとも、現成の莫作なるべし。おほよそ佛法は、知識のほとりにしてはじめてきくと、究竟の果上もひとしきなり。これを頭正尾正といひ、妙因妙果といひ、佛因佛果といふ。佛道の因果は、異熟等流等の論にあらざれば、佛因にあらずば、佛果を感得すべからず。道林この道理を道取するゆゑに、佛法あるなり。諸惡たとひいくかさなりの盡界に彌綸し、いくかさなりの盡法を呑却せりとも、これ莫作の解脱なり。衆善すでに初中後善にてあれば、奉行の性相體力等を如是せるなり。居易かつてこの蹤跡をふまざるによりて、三歳の孩兒も道得ならんとはいふなり。道得をまさしく道得するちからなくして、かくのごとくいふなり。あはれむべし、居易なんぢ、道甚麼なるぞ。佛風いまだきかざるがゆゑに、三歳の孩兒をしれりやいなや。孩兒の才生せる道理をしれりやいなや、もし三歳の孩兒をしらんものは、三世諸佛をもしるべし。いまだ三世諸佛をしらざらんもの、いかでか三歳の孩兒をしらん。對面せるはしれりとおもふことなかれ、對面せざればしらざるとおもふことなかれ。一塵をしれるものは盡界をしり、一法を通ずるものは萬法を通ず、萬法に通ぜざるものは、一法に通ぜず、通を學せるもの通徹のとき、萬法をもみる一法をもみるがゆゑに、一塵を學するもの、のがれず盡界を學するなり、三歳の孩兒は佛法をいふべからずとおもひ、三歳の孩兒のいはんことは容易ならんとおもふは至愚なり。そのゆゑは、生をあきらめ死をあきらむるは、佛家一大事の因縁なり。古德いはく、『なんぢがはじめて生下せりしとき、すなはち師子吼の分

ものなるを云ふ。
【才生】才は草木初生の貌、才生はうまれたての赤ん坊なり。
【古德いはくなんぢ】普曜經に云く佛初めて生れし時行くこと七歩にし於いて手を分つて上下を指し獅子吼の聲を作す。
【古德いはく生死】圜悟克勤禪師の語
【延應庚子月夕】延應二年八月十五日。實は七月十六日仁治と改元す故に嚴密に云へば延應を仁治と改むべきなり。
【示衆】　對機は大衆。

あり。』師子吼の分とは、如來轉法輪の功德なり、轉法輪なり。又古德いはく、『生死去來眞實人體なり。』しかあれば眞實體をあきらめ、師子吼の功德あらん、まことに一大事なるべし、たやすかるべからず。かるがゆゑに三歲孩兒の因緣行履あきらめんとするに、さらに大因緣なり。それ三世諸佛の行履因緣と、同不同あるがゆゑに、居易おろかにして三歲の孩兒の道得をかつてきかざれば、あるらんとだにも疑著せずして、恁麼道取するなり。道林の道聲、雷よりも顯赫なるをきかず。道不得をいはんとしては、三歲孩兒還つて道得といふ。これ孩兒の師子吼をきかず、禪師の轉法輪をも遮過するなり。禪師あはれみをやむるにあたはずかさねていふしなり。三歲の孩兒はたとひ道得なりとも、八十の老翁は行不得ならんと。いふこころは三歲の孩兒に道得のことばあり、これをよくよく參究すべし。八十の老翁に行不得の道あり、よくよく功夫すべし。孩兒の道得はなんぢに一任す、しかあれども孩兒に一任せず。老翁の行不得はなんぢに一任す、しかあれども老翁に一任せずといひしなり。佛法はかくのごとく辨取し說取し宗取するを、道理とせり。

延應庚子月夕在興聖寶林寺示衆

正法眼藏諸惡莫作　畢

正法眼藏有時

古佛言、有時高高峯頂立。有時深深海底行。有時三頭八臂。有時丈六八尺。有時拄杖拂子。有時露柱燈籠。有時張三李四。有時大地虛空。いはゆる有時は、時すでにこれ有なり、有はみな時なり。丈六金身これ時なり、時なるがゆゑに、時の莊嚴光明あり、いまの十二時に習學すべし。三頭八臂これ時なり、時なるがゆゑに、いまの十二時に一如なるべし。十二時の長遠短促、いまだ度量せずといへども、これを十二時といふ。去來の方跡あきらかなるによりて、人これを疑著せず、疑著せざれども、しれるにあらず。衆生もとより、しらざる每物每事を疑著すること、一定せざるがゆゑに、疑著する前程、かならずしも、いまの疑著に符合することなし、ただ疑著しばらく時なるのみなり。われを排列しをきて盡界とせり、この盡界の頭頭物物を時時なりと覰見すべし。物物の相礙せざるは、時時の相礙せざるがごとし。このゆゑに、同時發心あり、同心發時あり、および修行成道もかくのごとし。われを排列して、われこれをみるなり。自己の時なる道理、それかくのごとし。恁麼の道理なるゆゑに、盡地に萬象百艸あり、一艸一象おのおの盡地にあることを參學すべし。かくのごとくの往來は、修行の發足なり。到恁麼の田地のとき、すなはち一艸一象なり、會象不會象なり、會艸不會艸なり。正當恁麼時のみなるがゆゑに、有時みな

【有時】藥山惟儼禪師の法語に語緣を假り、有時の二字を以て、諸法實相を直示す、即ち有は諸法にして妙有、時は實相にして眞空、斷常の二見を破し動靜の二相を超えたる有時の盡十方世界を提唱す。

【古佛言】藥山惟儼禪師を古佛と云ふ。此三字無き本あり。

【有時高高峯頂立】此八つの有時、普通には虛字にしてきれまあり、今は實字にしきれまなし、盡十方界を有時とし有時の外に別法無し、故に有る時と謂むべからず、うじと讀むべし。

【三頭八臂】明王部、不動明王の如き憤怒の相を現じて降伏門に赴く形。

【丈六八尺】丈六は釋尊の身相、八尺は半身の坐相の

み、佛身をいふ。【張三李四】張、李は支那にありふれたる姓、日本の權兵衛、太郎兵衛と云はんが如し。【われを排列し】われの語、有時の代名詞に見るべし、以下われ字多し、之に倣へ。

盡時なり、有艸有象ともに時なり。時時の時に盡有盡界あるなり。しばらくいまの時にもれたる、盡有盡界ありやなしやと觀想すべし。しかあるを、佛法をならはざる、凡夫の時節に、あらゆる見解は、有時のことばをきくにもおもはく、あるときは三頭八臂となれりき、あるときは丈六八尺となれりき、たとへば河をすぎ山をすぎしがごとくなりと。いまは、その山河たとひあるらめとも、われすぎきたりて、いまは玉殿朱樓に處せり、山河とわれと天と地となりとおもふ。しかあれども、道理この一條のみにあらず、いはゆる山をのぼり河をわたりし時にわれありき、われに時あるべし。われすでにあり、時さるべからず。時もし去來の相にあらずば、上山の時は有時の而今なり、時もし去來の相を保任せば、われに有時の而今ある、これ有時なり。かの上山渡河の時、この玉殿朱樓の時を呑却せざらん、吐却せざらんや。三頭八臂は、きのふの時なり、丈六八尺は、けふの時なり。しかあれどもその昨今の道理ただこれ山のなかに直入して、千峯萬峯をみわたす時節なり、すぎぬるにあらず。三頭八臂も、すなはちわが有時にて一經す、彼方にあるににたれども而今なり。丈六八尺もすなはちわが有時にて一經す、彼處にあるににたれども而今なり。しかあれば松も時なり、竹も時なり、時は飛去するとのみ解會すべからず、飛去は時の能とのみは學すべからず、時もし飛去に一任せば間隙ありぬべし、有時の道を經聞せざるは、すぎぬるとのみ學するによりてなり。要をとりていはば、盡界にあらゆる盡有は、つらなりながら時時なり、有時なるによりて吾有時なり。有時に經歷の功德あり、いはゆる今日

より明日に經歷す、今日より昨日に經歷す、昨日より今日に經歷す、今日より今日に經歷す、明日より明日に經歷す。經歷はそれ時の功德なるがゆゑに、古今の時かさなれるにあらず、ならびつもれるにあらざれども、青原も時なり、黃檗も時なり、江西も石頭も時なり。自他すでに時なるがゆゑに、修證は諸時なり、入泥入水をなじく時なり。いまの凡夫の見、をよび見の因緣、これ凡夫のみるところなりといへども、凡夫の法にあらず、法しばらく凡夫を因緣せるのみなり。この時この有は、法にあらずと學するがゆゑに、丈六金身は、われにあらずと認ずるなり、われを丈六金身にあらずと、のがれんとする、またすなはち有時の片片なり、未證據者の看看なり。いま世界に排列せる、むまひつじを、あらしむるも、住法位の恁麼なる昇降上下なり。ねずみも時なり、とらも時なり、生も時なり、佛も時なり。この時、三頭八臂にて、盡界を證し、丈六金身にて盡界を證す。それ盡界をもて盡界を界盡するを、究盡するとはいふなり。丈六金身をもて丈六金身するを、發心修行菩提涅槃と現成する、すなはち有なり、時なり、盡時を盡有と究盡するのみ、さらに剩法なし、剩法これ剩法なるがゆゑに、たとひ半究盡の有時も、半有時の究盡なり、たとひ蹉過すとみゆる形段も、有なり。さらにかれにまかすれば、蹉過の現成する前後ながら、有時の住位なり、住法位の活鱍鱍地なる、これ有時なり。無と勞著すべからず、有と强爲すべからず。時は一向にすぐるとのみ計功して、未到と解會せず、解會は時なりといへども、他にひかかる緣なし。去來と認じて、住位の有時と見徹せる皮袋なし、いはんや透關

【藥山弘道大師】石頭希遷禪師の法嗣、諱は惟儼、弘道大師は其謚號、初め石頭に參じ後、馬祖に付して證契するところあり、再び石頭に還つて嗣法す、澧州藥山に

の時あらんや。たとひ住位を認ずとも、たれか既得恁麼の保任を道得せん。たとひ恁麼と道得せることひさしきも、いまだ面目現前を摸索せざるなし。凡夫の有時なるに一任すれば、菩提涅槃も、わづかに去來の相のみなる有時なり、おほよそ羅籠とどまらず、有時現成なり。いま有界に現成し、左方に現成する、天王天衆、いまもわが盡力する有時なり。その餘外にある水陸の衆有時、これわがいま盡力して現成するなり、冥陽に有時なる諸類諸頭、みなわが盡力現成なり、盡力經歴なり。わがいま盡力經歴にあらざれば、一法一物も現成することなし、經歴することなしと參學すべし。經歴といふは、風雨の東西するがごとく學しきたるべからず。盡界は不動轉なるにあらず、不進退なるにあらず、經歴なり。經歴は、たとへは春のごとし、春に許多般の樣子あり、これを經歴といふ。外物なきに經歴すると參學すべし、たとへば春の經歴はかならず春を經歴するなり。經歴は春にあらざれども、春の經歴なるがゆゑに、經歴いま春の時に成道せり、審細に參來參去すべし。經歴をいふに、境は外頭にして、能經歴の法は、東にむきて百千世界をゆきすぎて、百千劫をふるとおもふは、佛道の參學これのみを、專一にせざるなり。

藥山弘道大師、ちなみに無際大師の指示によりて、江西大寂禪師に參問す、「三乘十二分敎某甲ほぼその宗旨をあきらむ、如何是祖師西來意。」かくのごとくとふに、大寂禪師いはく、「有時敎ニ伊揚眉瞬目ー。有時不レ敎ニ伊揚眉瞬目ー。有時敎ニ伊揚眉瞬目ー者是。有時敎ニ伊揚眉瞬目ー者不是。」藥山ききて大悟し、大寂にまふす、「某甲かつて石頭にありし、蚊子の

住し盛に化門を開く。唐文宗太和八年十一月寂壽八十四。

【無際大師】青原行思禪師の嗣石頭希遷禪師の諡號。

【三乘十二分敎】佛敎の卷に詳出す

【葉縣の歸省禪師】臨濟下六世の祖、首山省念の嗣法。汝州葉縣の廣敎院に住して大に宗風を張る。寂年世壽等不詳。

鐵牛にのぼれるがごとし。大寂の道取するところ、餘者とおなじからず。眉目は山海なるべし、山海は眉目なるゆゑに。その教伊揚は山をみるべし、その教伊瞬は海を宗すべし。是は伊に慣習せり、伊は教に誘引せらる、不是は不教伊にあらず、不教伊は不是にあらず、これらともに有時なり。山も時なり海も時なり、時にあらざれば山海あるべからず、山海の而今に時あらずとすべからず、時もし壞すれば山海も壞す、時もし不壞なれば、山海も不壞なり。この道理に明星出現す、如來出現す、眼睛出現す、拈華出現す、これ時なり、時にあらざれば不恁麼なり。

　葉縣の歸省禪師は、臨濟の法孫なり、首山の嫡嗣なり。あるとき大衆にしめしていはく、「有時意到句不到。有時句到意不到。有時意句兩俱到。有時意句俱不到。」意句ともに有時なり、到不到ともに有時なり。到時未了なりといへども、不到時來なり。意は驢なり、句は馬なり、馬を句とし、驢を意とせり。到それ來にあらず、不到これ未來にあらず、有時かくのごとくなり。到は到に罣礙せられて、不到に罣礙せられず、不到は不到に罣礙せられて、到に罣礙せられず。意は意をさへ意をみる、句は句をさへ句をみる、礙は礙をさへ礙をみる、礙は礙を礙するなり、これ時なり。礙は他法に使得せらるといへども、他法を礙する礙いまだあらざるなり。我逢人なり、人逢人なり、我逢我なり、出逢出なり。これらもし時をえざるにも恁麼ならざるなり。また意は現成公案の時なり、句は向上關棙の時なり、到は脫體の時なり、不到は即此離此の時なり。かくのごとく辨肯すべし、有時

すべし。向來の尊宿ともに恁麼いふとも、さらに道取すべきところなからんや。いふべし『意句半到也有時、意句半不到也有時。』かくのごとくの參究あるべきなり『教伊揚眉瞬目也半有時、教伊揚眉瞬目也錯有時、不教伊揚眉瞬目也半有時、不教伊揚眉瞬目也錯有時。』恁麼のごとく參來參去、參到參不到する有時の時なり。

仁治元年庚子開冬日書于興聖寶林寺

寛元癸卯夏安居書寫之　懷奘

正法眼藏有時　畢

正法眼藏袈裟功德

佛佛祖祖、正傳の衣法、まさしく震旦國に正傳することは、嵩嶽の高祖のみなり。高祖は釋迦牟尼佛より第二十八代の祖なり、西天二十八傳、嫡嫡あひつたはれり。二十八祖、したしく震旦にいりて初祖たり。震旦國人五傳して、曹谿にいたりて三十三代の祖なり、これを六祖と稱す。第三十三代の祖大鑑禪師、この衣法を黃梅山にして夜半に正傳し、一生護持しまします、いまなほ曹谿山寶林寺に安置せり。諸代の帝王、あひつぎて內裏に奉請し、供養禮拜す、神物護持せるものなり。唐朝中宗肅宗、代宗、しきりに歸內供養しき。奉請のとき、奉送のとき、ことさら勅使をつかはしみことのりをたまふ。代宗皇帝あると

【向來の尊宿】藥山弘道大師、葉縣歸省禪師をいふ。

【さらに道取すべき】永平別に道ひ分あり、いふべしとなり。

【仁治元年庚子】開冬前卷に同じ。

【開冬日】十月一日なり。

【書于】記と同意なり。

【袈裟功德】袈裟は如來の悲智圓滿の德を外相に表示したるもの故活法身の如來を尊重するが如く恭敬すべし、今經律を經とし宗意を緯として佛衣の體色量を示し其功德を述ぶ。

【嵩嶽の高祖】菩提達磨圓覺大師。

【曹溪】震旦の六祖大鑑慧能禪師。

【黃梅山】震旦の五祖大滿弘忍禪師蘄州黃梅縣黃梅山に在て七百の衆を接す。

【夜半に正傳し】盧能初め黃梅の碓房に在て苦役す、五祖法を傳へんとして各自に其所見を呈せしむ、會衆七百の上座神秀先づ所解を呈す、盧能又碓房に在て之を聞き本來無一物何處惹塵埃の偈を呈す、五祖三更碓房に來つて潜かに衣鉢を傳へ直ちに會を去らしむ。盧能は即ち六祖大鑑慧能禪師なり。

【寶林寺に安置せり】盧能衣鉢を受けてより神秀一派之を奪はんとして爭ふ故に衣（袈裟）は曹溪に留めて傳へず。

【唐朝】二十主二百九十年相傳ふ、中宗は四代、肅宗は七代、代宗は八代の皇帝。

【跋陀婆羅菩薩】佛陀跋陀羅（Buddhabadra）の訛譯覺賢と譯す、印度迦

き佛衣を曹谿山におくりたてまつるみことのりにいはく、「今遣二鎮國大將軍劉崇景頂戴而送一。朕爲二之國寶一。卿可レ於二本寺一如法安置、專令下僧衆親承二宗旨一者嚴加中守護上、勿レ令二遺墜一。」まことに無量恒河沙の三千大千世界を統領せんよりも、佛衣現在の小國に王としてこれを見聞供養したてまつらんは、生死のなかの善生最勝の生なるべし。佛化のおよぶところ、三千界いづれのところか袈裟なからん。しかありといへども嫡嫡面授して、佛袈裟を正傳せるは、ただひとり嵩嶽の曩祖のみなり。傍出は佛袈裟をさづけられず、二十七祖の傍出、跋陀婆羅菩薩の傳、まさに肇法師におよぶといへども、佛袈裟の正傳なし。震旦の四祖大師、また牛頭山の法融禪師をわたすといへども、佛袈裟を正傳せず。しかあればすなはち、正嫡の相承なしといへども、如來の正法、その功德むなしからず、千古萬古みな利益廣大なり。正嫡相承せらんは、相承なきとひとしかるべからず。しかあればすなはち人天もし袈裟を受持せんは、佛祖相傳の正傳を傳授すべし。印度、震旦、正法像法のときは、在家なほ袈裟を受持す。いま遠方邊土の澆季には剃除鬚髮して佛弟子と稱する袈裟を受持せず、いまだ受持すべきと信ぜずしらず、あきらめず、かなしむべし、いはんや體色量をしらんや、いはんや著用の法をしらんや。袈裟はふるくより解脱服と稱す、業障、煩惱障、報障等みな解脱すべきなり。龍もし一縷をうれば、三熱をまぬかる、牛もし一角にふるれば、その罪おのづから消滅す。諸佛成道のとき、かならず袈裟を著す、しるべし。最尊最上の功德なりといふこと。まことにわれら邊地にうまれて末法にあふ、う

維羅衛の人、甘露飯王の苗裔といふ。羅什の長安にあるを聞き往いて從ひ、共に法相を論ず。宋の元嘉六年寂、壽七十一。

【肇法師】僧肇なり。鳩摩羅什に師事して飜經を助く。理を解すること什門第一と稱せらる。姚秦の弘始十六年寂す、壽三十一。

【四祖大師】震旦四祖、大醫道信禪師。三祖鑑智僧璨禪師に嗣ぐ。唐の永徽二年九月寂、壽七十二。

【牛頭山の法融】四祖の傍出、牛頭禪の祖。牛頭山幽棲寺北岩の石室に居して修禪し四祖の來訪に逢ひて心要を得。顯慶二年閏正月寂、壽六十四。

【體色量】體は袈裟の材料、色は壞色、染め色、量は寸法、量尺。

らむべしといへども、佛佛嫡嫡相承の衣法にあふたてまつる、いくそばくのよろこびとかせん。いづれの家門かわが正傳のごとく釋尊の衣法ともに正傳せる。これにあふたてまつりてたれか恭敬供養せざらん、たとひ一日に無量恆河沙の身命をすてても、供養したてまつるべし。なほ生生世世の値遇頂戴、供養恭敬を發願すべし。われら佛生國をへだつること、十萬餘里の山海、はるかにして通じがたしといへども、宿善のあひもよほすところ、山海に擁蔽せられず、邊鄙の愚蒙きらはるることなし。この正法にあふたてまつり、あくまで日夜に修習す、この袈裟を受持したてまつり、常恆に頂戴護持す。ただ一佛二佛のみもとにして、功德を修せるのみならんや。すでに恆河沙等の諸佛のみもとにして、もろもろの功德を修習せるなるべし。たとひ自己なりといふとも、たふとぶべし、隨喜すべし、祖師傳法の深恩、ねんごろに報謝すべし、畜類なほ恩を報ず、人類いかでか恩をしらざらん、もし恩をしらずば、畜類よりも愚なるべし。この佛衣佛法の功德、その傳佛正法の祖師にあらざれば、餘輩いまだあきらめずしらず。諸佛のあとを欣求すべくば、まさにこれを欣樂すべし、たとひ百千萬代ののちも、この正傳を正傳とすべし。これ佛法なるべし、證驗まさにあらたならん。水を乳にいるに、相似すべからず、皇太子の帝位に即位するがごとし。かの合水の乳なりとも、乳をもちゐんときは、この乳のほかにさらに乳なからんには、これをもちゐるべし。たとひ水を合せずとも、あぶらをもちゐるべからず、うるしをもちゐるべからず、さけをもちゐるべからず。この正傳もまたかくのごとくならん、たとひ凡

【三熱】一に熱沙熱風、二に惡風暴起、三に金翅鳥を畏る、是を三熱の患と名く。僧祇律に龍宮、門に佛衣を掛くれば金翅力を失ふと。

【先王の法服】孝經卿太夫章に云く先王の法服に非ざれば敢へて服せず、先王の法言に非ざれば敢へて道はず、先王の德行に非ざれば敢へて行はずと。

【後漢の孝明皇帝】支那佛敎初傳の年を後漢の孝明皇帝の永平十年とす。

師の庸流なりとも、正傳あらんは、用乳のよろしきときなるべし。いはんや佛佛祖祖の正傳は、皇太子の卽位のごとくなるなり。俗なほいはく、〔一〕先王の法服にあらざれば服せずと。佛子いづくんぞ佛衣にあらざらんを著せん。後漢の孝明皇帝、永平十年よりのち、西天東地に往還する出家在家、くびすをつぎて、たえずといへども、西天にして、佛佛祖祖正傳の祖師にあふといはず、如來より面授相承の系譜なし。ただ經論師にしたがふて、梵本の經教を傳來せるなり。佛法正嫡の祖師にあふといはず、佛袈裟祖傳の祖師ありとかたらず、あきらかにしりぬ、佛法の閫奥にいらざりけりと、いふことを。かくのごときのひと、佛祖正傳のむねあきらめざるなり、釋迦牟尼如來正法眼藏無上菩提を、摩訶迦葉に付授しましますに、迦葉佛正傳の袈裟ともに傳授しまします、嫡嫡相承して曹谿山大鑑禪師にいたる、三十三代なり。その體色量親傳せり。それよりのち靑原南嶽の法孫、したしく傳法しきたり、祖宗の法を搭し祖宗の法を製す。浣洗の法および受持の法、その嫡嫡面授の堂奧に參學せざれば、しらざるところなり。

袈裟言レ有ニ三衣一、五條衣、七條衣、九條衣等大衣也。上行之流、唯受ニ此三衣一、不レ畜ニ餘衣一。唯用ニ三衣一、供身事足、若經營作務、大小行來、著ニ五條衣一、爲ニ諸善事一入衆、著ニ七條衣一、敎ニ化人天一、令ニ其敬信一、須レ著ニ九條等大衣一。又在ニ屏處一、著ニ五條衣一。入衆之時、著ニ七條衣一。若入ニ王宮聚落一、須レ著ニ大衣一。又復調和煖熱之時、著ニ五條衣一、寒冷之時、加ニ著七條衣一。寒苦嚴切、加以著ニ大衣一。故往一時、正冬八夜、天寒裂レ竹、如來於ニ彼初夜分時一、著ニ五條衣一。夜久轉寒、加ニ

七條衣一。於二夜後分一、天寒轉盛、加以二大衣一、佛便作レ念、未來世中、不レ忍二寒苦一諸善男子、以二此三衣一足二得充身一。

搭袈裟法

偏袒右肩、これ常途の法なり。通兩肩搭の法あり、如來および耆年老宿の儀なり。兩肩を通ずといふとも、胸臆をあらはすときあり、胸臆をおほふときあり。通兩肩搭は、六十條衣以上の大袈裟のときなり。搭袈裟のとき、兩端ともに左臂肩にかさねかくるなり。前頭は左端のうへにかけて、臂外にたれたり。大袈裟のとき、前頭を左肩より通じて、背後にいだしたれたり。このほか種種の著袈裟の法あり、久參咨問すべし。梁陳隋唐宋あひつたはれて、數百歳のあひだ、大小兩乘の學者、おほく講經の業をなげすてて、究竟にあらずとしりて、すすみて佛祖正傳の法を習學せんとするとき、かならず從來の弊衣を脫落して、佛祖正傳の袈裟を受持するなり、まさしくこれ捨邪歸正なり。如來の正法は、西天すなはち法本なり、古今の人師、おほく凡夫の情量局量の小見をたつ。佛界衆生界、それ有邊無邊にあらざるがゆゑに、大小乘の教行人理、いまの凡夫の局量にいるべからず。しかあるに、いたづらに、西天を本とせず、震旦國にして、あらたに局量の小見を今案して、佛法とせる道理、しかあるべからず。しかあればすなはち、いま發心のともがら、袈裟を受持すべくば、正傳の袈裟を受持すべし、今案の新作袈裟を受持すべからず。正傳の袈裟といふは、少林曹谿正傳しきたれる、如來の嫡嫡相承なり、一代も虧闕なし。

その法子法孫の、著しきたれる、これ正傳袈裟なり、唐土の新作は、正傳にあらず。いま古今に西天よりきたれる、僧徒の所著の袈裟、みな佛祖正傳の袈裟のごとく著せり、一人としてもいま震旦新作の律學のともがらの、所製の袈裟のごとくなるなし、くらきともがら、律學の袈裟を信ず、あきらかなるものは拋却するなり。おほよそ、佛佛祖祖相傳の袈裟の功德、あきらかにして、信受しやすし。正傳まさしく相承せり、本様のあたりつたはれり、いまに現在せり、受持しあひ嗣法していまにいたる、受持せる祖師ともにこれ證契傳法の師資なり。しかあればすなはち、佛祖正傳の作袈裟の法によりて作法すべし。ひとりこれ正傳なるがゆゑに、凡聖人天龍神、みなひさしく證知しきたれるところなり。この法の流布にうまれあひて、ひとたび袈裟を身體におほひ、刹那須臾も受持せん、すなはちこれ決定成無上菩提の護身符子ならん。一句一偈を身心にそめん、長劫光明の種子として、つひに無上菩提にいたる。一法一善を身心にそめん、亦復如是なるべし。心念も刹那生滅し無所住なり、身體も刹那生滅し無所住なりといへども、所修の功德、かならず熟脱のときあり。袈裟また作にあらず無作にあらず、有所住にあらず、無所住にあらず。唯佛與佛の究盡するところなりといへども、受持する行者、その所得の功德、かならず成就するなり、かならず究竟するなり。もし宿善なきものは、一生二生乃至無量生を經歷すといへども、袈裟をみるべからず、袈裟を著すべからず、袈裟を信受すべからず、袈裟をあきらめしるべからず。いま震旦國日本國をみるに、袈裟ひとたび身體に著することうるものあり、

えざるものあり、貴賤によらず、愚智によらず。はかりしりぬ宿善によれりといふこと。しかればすなはち袈裟を受持せんは、宿善よろこぶべし。積功累德うたがふべからず。いまだえざらんはねがふべし。今生いそぎ、そのはじめて下種せんことを、いとなむべし。さはありて受持することえざらんものは、諸佛如來佛法僧の三寶に慚愧懺悔すべし。他國の衆いくばくか、ねがふらん。わがくにも震旦國のごとく、如來の法衣、まさしく正傳親臨せまじと。おのれがくにに正傳せざること、慚愧ふかかるらん、かなしむうらみあるらん。われらなにのさいはひありてか、如來世尊の衣法正傳せる法にあふたてまつる、宿殖般若の大功德力なり。いま末法惡時世は、おのれが正傳なきをはぢず、他の正傳あるをそねむ、おもはく魔黨たらん。おのれがいまの所有所住は、前業にひかれて眞實にあらず、ただ正傳の佛法に歸敬せん、すなはちおのれが學佛の實歸なるべし。おほよそしるべし袈裟はこれ諸佛の恭敬歸依しましますところなり、佛身なり、佛心なり、解脫服と稱し、福田衣と稱し、無相衣と稱し、無上衣と稱し、忍辱衣と稱し、如來衣と稱し、大慈悲衣と稱し、勝幢衣と稱し、阿耨多羅三藐三菩提衣と稱す。まさにかくのごとく受持頂戴すべし。かくのごとくなるがゆゑにこころにしたがふて、あらたむべきにあらず。その衣財、また絹布よろしきにしたがふてもちゐる、かならずしも布は淸淨なり、絹は不淨なるにあらず、布をきらふて絹をとる所見なし、わらふべし、諸佛の常法かならず、糞掃衣を上品とす。糞掃に十種あり、四種あり、いはゆる火燒、牛嚼、鼠嚙、死人衣等、五印度人、如レ此等衣、棄ニ之巷野一事

【阿耨達池】梵に阿那婆達多(Anavadapta or Anavatapta)無熱惱、清凉と譯す。香醉山の南大雪山の北にあり恆河、信度河等の源を爲すと云ふ。

【龍王】阿耨達池に住する阿耨達龍王、八大龍王の一。

【古佛にとふ】六祖慧能禪師に問ふ

【商那和修尊者】付法藏の第三祖、西天に於ける阿難尊者に嗣ぐ、梵音(Sanakavasa)自然服又は胎衣と譯す自在胎六年身に自然衣を著けて生るといふ。

【鮮白比丘尼】蓮華色比丘尼又は優盞羅華比丘尼のこと。後段に詳出。

同ニ糞掃一名ニ糞掃衣一、行者取レ之浣洗縫治、用以供レ身。そのなかに絹類あり、布類あり、絹布の見をなげすてて、糞掃を參學すべきなり。糞掃衣を、むかし阿耨達池にして浣洗せしに、龍王讃歎雨華禮拜しき。小乘教師、また化絲の說あり、よるところなかるべし、大乘人わらふべし、いづれか化絲にあらざらん、なんぢ化をきくみみを信ずとも、化をみる目をうたがふ。しるべし糞掃をひろふなかに、絹に相似なる布あらん、布に相似なる絹あらん。土俗萬差にして、造化はかりがたし、肉眼のよくしるところにあらず。かくのごときものをえたらん、絹布と論ずべからず。糞掃と稱すべし。たとひ人天の糞掃と生長せるありとも、有情ならじ、糞掃なるべし。たとひ松菊の糞掃と生長せるありとも、非情ならじ、糞掃なるべし。糞掃の絹布にあらず、金銀珠玉にあらざる道理を信受するとき、糞掃現成するなり。絹布の見解いまだ脫落せざれば、糞掃也未夢見在なり。ある僧かつて古佛にとふ、『黃梅夜半の傳衣、これ布なりとやせん、絹なりとやせん、畢竟してなにものなりとかせん。』古佛いはく、「これ布にあらずこれ絹にあらず、」しるべし袈裟は絹布にあらざる、これ佛道の玄訓なり。「商那和修尊者は、第三の付法藏なり、うまるるときより衣と倶生せり。この衣、すなはち在家のときは俗服なり、出家すれば袈裟となる。また鮮白比丘尼、發願施氎ののち、生生のところ、および中有、かならず衣と倶生せり。今日釋迦牟尼佛にあふたてまつりて、出家するとき、生得の俗衣、すみやかに轉じて袈裟となる、和修尊者におなじ。あきらかにしりぬ、袈裟は絹布等にあらざること。いはんや佛法の功德、

よく身心諸法を轉ずること、それかくのごとし。われら出家受戒のとき、身心依正、すみやかに轉ずる道理あきらかなれど、愚蒙にしてしらざるのみなり。諸佛の常法、ひとり和修鮮白に加して、われらに加せざることなきなり。隨分の利益、うたがふべからざるなり。かくのごとくの道理、あきらかに功夫參學すべし。善來得戒の披體の袈裟、かならずしも布にあらず絹にあらず、佛化難思なり。衣裏の寶珠は、算沙の所能にあらず、諸佛の袈裟の體色量の、有量無量、有相無相、あきらめ參學すべし。西天東地、古往今來の祖師、みな參學正傳せるところなり、祖祖正傳のあきらかにして、うたがふところなきを見聞しながら、いたづらにこの祖師に正傳せざらんは、その意樂ゆるしがたからん、愚癡のいたり不信のゆゑなるべし。實をすてて虛をもとめ、本をすてて末をねがふものなり、これ如來を輕忽したてまつるならん。菩提心をおこさんともがら、かならず祖師の正傳を傳受すべし。われらあひがたき佛法に、あふたてまつるのみにあらず、佛袈裟正傳の法孫として、これを見聞し、學習し、受持することをえたり。すなはちこれ如來をみたてまつるなり、佛說法をきくなり、佛光明にてらさるるなり、佛受用を受用するなり、佛心を單傳するなり、佛髓をえたるなり。まのあたり釋迦牟尼佛の袈裟に、おほはれたてまつるなり、釋迦牟尼佛、まのあたりわれに袈裟をさづけましますなり。佛にしたがふたてまつりて、この袈裟はうけたてまつれり。

浣袈裟法

【偈を誦して】大哉解脱服、無相福田衣、披奉如來教、廣度諸衆生。

【世尊告大衆言】悲華經の文、釋尊の五百大願中袈裟に對する五願を説く、之に依て袈裟の大功德を知ることを得。

袈裟をたたまず、淨桶にいれて、香湯を百沸して袈裟をひたして、一時ばかりおく。またの法、きよき灰水を百沸して袈裟をひたして、湯のひややかになるをまつ。いまはよのつねに灰湯をもちゐる、灰湯ここにはあくのゆといふ。灰湯さめぬれば、きよくすみたる湯をもて、たびたびこれを浣洗するあひだ、兩手にいれて、もみあらはず、ふまず、あかのぞこほり、あぶらのぞこほるを期とす。そののち沈香梅檀香等を冷水に和してこれをあらふ。そののち淨竿にかけてほす。よくほしてのち、摺襞してたかく安じて、燒香散華して、右遶數帀して禮拜したてまつる。あるひは三拜、あるひは六拜、あるひは九拜して、胡跪合掌して、袈裟を兩手にささげて、くちに偈を誦してのち、たちて如法に著したてまつる。

世尊告ニ大衆一言、我往昔在ニ寶藏佛所一時、爲ニ大悲菩薩一。爾時大悲菩薩摩訶薩、在ニ寶藏佛前一、而發願言、世尊、我成佛已、若有下衆生、入ニ我法中一出家、著ニ袈裟一者上、或犯ニ重戒一、或行ニ邪見一、若於ニ三寶一輕毀不レ信、集ニ諸重罪一、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、若於ニ一念中一、生ニ恭敬心一、尊ニ重僧伽梨衣一、生ニ恭敬心一、尊ニ重世尊、或於法僧一、世尊如レ是衆生、乃至一人、不下於ニ三乘一得受ニ記莂一、而退轉者、則爲レ欺ニ誑十方世界、無量無邊阿僧祇等、現在諸佛一、必定不レ成ニ阿耨多羅三藐三菩提一。世尊、我成佛已來、諸天、龍、鬼、神、人及非人、若能於ニ此著袈裟者一、恭敬供養、尊重讃歎、其人若得レ見ニ此袈裟少分一、即得レ不レ退ニ於三乘中一。若有ニ衆生一、爲ニ飢渴一所レ逼、若貧窮鬼神、下賤諸人、乃至餓鬼衆生、若得ニ袈裟少分一、乃至

四寸、卽得二飮食充足一、隨二其所願一、疾得二成就一、若有二衆生一、共相違反、起二怨賊想一、展轉鬪諍、若諸天、龍、鬼神、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、狗辦荼、毘舍遮、人及非人、共鬪諍時、念二此袈裟一、依二袈裟力一、尋生二悲心、柔軟之心、無怨賊心、寂滅之心、調伏善心一、還得二淸淨一。有レ人若在二兵甲鬪訟斷事之中一、持二此袈裟少分一、至二此輩中一、爲二自護一故、供養恭敬尊重、是諸人等、無二能侵毀觸嬈輕弄一、常得レ勝レ他、過中此諸難上。世尊、若我袈裟、不レ能成二就如レ是五事聖功德一者、卽爲レ欺二誑十方世界、無量無邊阿僧祇等、現在諸佛一、未來不レ應下成二就阿耨多羅三藐三菩提一作中佛事上也。沒二失善法一、必定不レ能レ破二壞外道一。」善男子、爾時寶藏如來、申二金色右臂一、摩二大悲菩薩頂一。讚言、善哉善哉、大丈夫、汝所レ言者、是大珍寶、是大賢善、汝成二阿耨多羅三藐三菩提一已、是袈裟衣服、能成二就此五聖功德一、作二大利益一。」善男子、爾時大悲菩薩摩訶薩、聞二佛讚歎一已、心生二歡喜一踊躍無量、因佛申二此金色之手一、長指合縵、其手柔軟、猶如二天衣一、摩二其頭一已、其身卽變狀如二童子二十歲人一。」善男子、彼會大衆、諸天龍神乾闥婆、人、及非人、叉手恭敬、向二大悲菩薩一、供二養種種華一、乃至伎樂而供二養之一、種種讚歎已、默然而住一。」

如來在世より今日にいたるまで、菩薩聲聞の經律のなかより、袈裟の功德をえらびあぐるとき、かならずこの五聖功德をむねとするなり。まことにそれ、袈裟は三世諸佛の佛衣なり。その功德無量なりといへども、釋迦牟尼佛の法のなかにして、袈裟をえたらんば、餘佛の法のなかにして袈裟をえんにも、すぐれたるべし。ゆゑいかんとなれば、釋迦牟尼佛

【龍樹祖師曰】大智度論の文に優鉢羅華比丘尼經を引用して袈裟の功徳を説く。

むかし因地のとき、大悲菩薩摩訶薩として、寶藏佛のみまへにて、五百大願をたてましますとき、ことさらこの袈裟の功德におきて、かくのごとく誓願をおこしまします、その功德さらに無量不可思議なるべし。しかあればすなはち、世尊の皮肉骨髓、いまに正傳するといふは、袈裟衣なり。正法眼藏を正傳する祖師、かならず袈裟を正傳せり。この衣を傳持し頂戴する衆生、かならず二三生のあひだに得道せり。たとひ戲笑のため利益のために身に著せる、かならず得道の因緣なり。

龍樹祖師曰、復次佛法中出家人、雖破戒墮罪、罪畢得解脱、如優鉢羅華比丘尼本生經中說、佛在世時、此比丘尼、得六神通阿羅漢、入貴人舍、常讃出家法、語諸貴人婦女言、「姉妹可出家。」諸貴婦女言、「我等少容盛美、持戒爲難、或當破戒。」比丘尼言、「破戒便破、但出家。」問言、「破戒當墮地獄、云何可破。」答言、「墮地獄便墮。」諸貴婦女皆笑之言、「地獄受罪、云何可墮。」比丘尼言、「我自憶念本宿命、時作戲女、著種種衣服、而說雜語。或時著比丘尼衣、以爲戲笑、以之因緣故、迦葉佛時、作比丘尼、時自恃貴姓端正、心生憍慢、而破禁戒。破禁戒罪故、墮地獄、受種種罪、受罪畢竟、値釋迦牟尼佛出家、得六神通阿羅漢道。以是故知、出家受戒、雖復破戒、以戒因緣故、得阿羅漢道。若但作惡、無戒因緣、不得道也。我乃昔時、世世墮地獄、從地獄出、爲惡人、惡人死還入地獄、都無所得。」今以此證知、出家受戒、雖復破戒、以是因緣、可得道果。この蓮華色比丘尼、阿羅漢得道の初因、さらに他の功にあらず、ただこれ袈裟を戲笑のために、

その身に著せし功德によりて、いま得道せり、二生に迦葉佛の法にあふたてまつりて、比丘尼となり、三生に釋迦牟尼佛にあふたてまつりて、大阿羅漢となり、三明六通を具足せり。三明とは、天眼宿命漏盡なり。六通とは、神境通、他心通、天眼通、天耳通、宿命通、漏盡通なり。まことにそれ、ただ作惡人とありしときはむなしく死して地獄にいる、地獄よりいでて、また作惡人となる、戒の因緣あるときは、禁戒を破して地獄におちたりといへども、つひに得道の因緣なり、いま戯笑のため袈裟を著せる、なほこれ三生に得道す。いはんや無上菩提のために、清淨の信心をおこして袈裟を著せん、その功德成就せざらめやは。いかにいはんや、一生のあひだ、受持したてまつり、頂戴したてまつらん功德、まさに廣大無量なるべし。もし菩提心をおこさん人、いそぎ袈裟を受持頂戴すべし。この好世にあふて、佛種をうゑざらん、かなしむべし、南洲の人身をうけて、釋迦牟尼佛の法にあふたてまつり、佛法嫡嫡の祖師にうまれあひ、單傳直指の袈裟を、うけたてまつりぬべきを、むなしくすごさん、かなしむべし。いま袈裟正傳は、ひとり祖師正傳これ正嫡なり、餘師の肩をひとしくすべきにあらず、相承なき師にしたがふて、袈裟を受持する、なほ功德甚深なり、いはんや嫡嫡面授しきたれる、正師に受持せん、まさしき如來の法子法孫ならん、まさに如來の皮肉骨髓を正傳せるなるべし。おほよそ袈裟は、三世十方の諸佛正傳しきたれること、いまだ斷絕せず。三世十方の諸佛菩薩聲聞緣覺、おなじく護持しきたれるところなり。袈裟をつくるには麤布を本とす。麤布なきがごときは、細布をもちゐ

【具壽鄔波離】具壽毘奈耶律の文。具壽は長老、鄔波離は佛大弟子の一人、持戒第一と稱せらる。

る、麤細の布ともになきには、絹素を、もちゐる、絹布ともになきがごときは、綾羅等を、もちゐろ、如來の聽許なり。絹布綾羅等の類、すべてなきくにには、如來また皮袈裟を、聽許しまします。おほよそ袈裟は、そめて青黄赤黑紫色ならしむべし、いづれも色のなかの壞色ならしむ。如來はつねに肉色の袈裟を御しましませり、これ袈裟色なり。初祖相傳の佛袈裟は青黑色なり、西天の屈眴布なり、いま曹谿山にあり、西天二十八傳し、震旦五傳せり。いま曹谿古佛の遺弟、みな佛衣の故實を傳持せり、餘僧のおよばざるところなり。おほよそ衣に三種あり、一者糞掃衣、二者毳衣、三者衲衣なり。糞掃は、さきにしめすがごとし。毳衣者、鳥獸細毛、これをなづけて毳とす。行者若無ニ糞掃可一レ得、取レ之爲レ衣。衲衣者、朽故破弊、縫衲供レ身、不レ著ニ世間好衣一。

具壽鄔波離請ニ世尊一曰、『大德世尊、僧伽胝衣、條數有レ幾。』佛言、『有レ九。何謂爲レ九。謂九條、十一條、十三條、十五條、十七條、十九條、二十一條、二十三條、二十五條。其僧伽胝衣、初之三品、其中壇隔、兩長一短、如レ是應レ持。次三品、三長一短、後三品、四長一短、過ニ是條一外、便成ニ破衲一也。』鄔波離復白ニ世尊一曰、『大德世尊、有ニ幾種僧伽胝衣一。』佛言、『有ニ三種一、謂、上中下。上者、竪三肘、横五肘、下者、竪二肘半、横四肘半、二內名レ中。』鄔波離復白ニ世尊一曰、『大德世尊、嗢呾羅僧伽衣、條數有レ幾。』佛言、『但有ニ七條一、壇隔兩長一短。』鄔波離復白ニ世尊一曰、『大德世尊、七條復有ニ幾種一。』佛言、『有ニ其三品一。謂、上中下。上者、三五肘、下者、各減ニ半肘一、二內名レ中。』鄔波離復白レ佛言、『大德世尊、安呾婆娑衣、條數有レ幾。』佛

【迦葉佛】過去七佛の第六佛、釋迦牟尼佛の前佛。

【釋迦牟尼佛】この娑婆世界出現の佛にして人天の教主。

【彌勒如來】釋尊滅後五十六億七千萬歳を過ぎて此土に出現する當來の佛。

言、『有五條、壇隔一長一短。』鄔波離復白世尊言、『安呾婆娑衣、有幾種。』佛言、『有三品。謂、上中下。上者、三五肘、中下同前。』佛言、『安呾婆娑衣、復有二種、何爲二、一者竪二橫四。』

僧伽胝者、譯爲重複衣。嗢呾羅僧伽者、譯爲上衣。安呾婆娑者、譯云下衣、又云内衣。」

又云、僧伽梨衣、謂、大衣也。又云、入王宮衣、說法衣。鬱多羅僧、謂、七條衣也。又云、中衣、入衆衣。安陀會、謂、五條衣也。又云、小衣、行道作務衣。この三衣、かならず護持すべし。また僧伽胝衣に、六十條袈裟あり、かならず受持すべし。おほよそ、八萬歳より、百歳にいたるまで、壽命の増減にしたがふに、身量の長短あり、八萬歳と、一百歳と、ことなることありといふ、また平等なるべしといふ。そのなかに、平等なるべしといふを正傳とす。佛と、人と、身量はるかに、ことなり、人身は、はかりつべし、佛身は、つひに、はかるべからず。このゆゑに、迦葉佛の袈裟、いま釋迦牟尼佛著しましますに、長にあらず、ひろきにあらず。いま釋迦牟尼佛の袈裟、彌勒如來、著しましますに、みぢかきにあらず、せばきにあらず。佛身の長短にあらざる道理、あきらかに觀見し、決斷し、照了し、警察すべきなり。梵王のたかく色界にあれど、その佛頂をみたてまつらず。目連はるかに、光明旛世界にいたる、その佛聲をきはめず。遠近の見聞ひとし、まことに不可思議なるものなり。如來の一切の功德、みなかくのごとし、この功德を念じたてまつるべし。袈裟を裁縫するに、割截衣あり、縵衣あり、ともにこれ作法なり。その所得にしたがふて、受持すべし。佛言、『三世佛袈裟

【梁武帝】姓は蕭、名は衍、漢の蕭何廿五世の孫、初め梁公に封ぜられ後梁王となる。帝位に卽き高祖武帝と稱し、改元して天監と云ふ。道敎を捨て、佛敎に歸し盛んに佛敎を究め、自ら袈裟を搭けて講經す。時人佛心天子と稱す。達磨大師との相見を以て名あり。太淸三年五月崩ず、壽八十六。

【隋煬帝】名は廣帝戒を受け經を誦し僧を請ずる等の事あり。

【聖德太子】推古天皇十四年太子三十三歲岡本の宮に袈裟を搭けて法華經を講ず、並に勝鬘經、維摩經を講じたまふ。

【聖武皇帝】天平勝寶七年歸佛、行基菩薩に就て受戒し、名を勝滿と稱し袈裟を披したまふ。

必定卻刺。』その衣財をえんこと、また淸淨を善なりとす。いはゆる糞掃衣を最上淸淨とす、三世の諸佛、ともにこれを淸淨としまします、そのほか、信心檀那の所施の衣また淸淨なり。あるひは淨財をもて、いちにしてかふ、また淸淨なり。作衣の日限ありといへども、いま末法澆季なり、遠方邊邦なり、信心のもよほすところ、裁縫をえて、受持せんには、しかじ。在家の人天なれども、袈裟を受持することは、大乘最極の秘訣なり。いまは梵王釋王、ともに袈裟を受持せり、欲色の勝躅なり、人間には勝計すべからず。在家の菩薩、みなともに受持せり。震旦國には、梁武帝、隋煬帝、ともに袈裟を受持せり。代宗、肅宗、ともに袈裟を著し、僧家に參學し、菩薩戒を受持せり。その餘の、居士婦女等の受袈裟受佛戒のともがら古今の勝躅なり。日本國には、聖德太子、袈裟を受持し、法華勝鬘等の諸經講讃のとき、天雨寳華の奇瑞を感得す。それよりこのかた、佛法わがくにに流通せり。天下の攝籙なりといへども、すなはち人天の導師なり、佛のつかひとして、衆生の父母なり。いまわがくにに、袈裟の體色量ともに訛謬せりといへども、袈裟の名字を見聞する、ただこれ聖德太子のおほんちからなり。そのとき、邪をくだき、正をたてずば、今日かなしむべし。のちに聖武皇帝、また袈裟を受持し、菩薩戒をうけまします。しかあればすなはち、たとひ帝位なりとも、たとひ臣下なりとも、いそぎ袈裟を受持し、菩薩戒をうくべし、人身の慶幸、これよりもすぐれたるあるべからず。有言、『在家受持袈裟、一名㆓單縫㆒、二名㆓俗服㆒、乃未㆑用㆓卻刺而縫㆒也。』又言、『在家趣㆓道場㆒時、具㆓三

【有言在家】摩訶止觀輔行等の取意

【又言在家】大方等陀羅尼經の取意

【盧行者】六祖大鑑慧能禪師のこと。俗姓は盧氏、黃梅山の碓房に在りて米を舂く、故に行者といふ。

【大哉解脫服】淸信士度人經の文なりといふ。

【佛言剃頭】出所未考。或はいふ阿毘曇經の取意文か。

【世尊告智光】本生心地觀經卷五無垢稱品の文。袈裟の十勝利を說く。

法衣楊枝澡水食器坐具、應下如二比丘一修中行淨行上。』古德の相傳かくのごとし。ただしいま佛祖單傳しきたれるところ、國王、大臣、居士、士民にさづくる袈裟みな却刺なり。盧行者すでに佛袈裟を正傳せる勝躅なり。おほよそ袈裟は、佛弟子の標幟なり。もし袈裟を受持しをはりなば、毎日に頂戴したてまつるべし、頂上に安じて、合掌してこの偈を誦す。『大哉解脫服、無相福田衣、披奉如來敎、廣度諸衆生。』しかうしてのち著すべし、袈裟におきては、師想塔想をなすべし、浣衣頂戴のときも、この偈を誦するなり。

佛言、『剃頭著二袈裟一、諸佛所二加護一、一人出家者、天人所二供養一。』あきらかにしりぬ、剃頭著袈裟よりこのかた、一切諸佛に加護せられたてまつるなり。この諸佛の加護によりて、無上菩提の功德圓滿すべし。この人をば、天衆人衆ともに供養するなり、世尊告二智光比丘一言、『法衣得二十勝利一。一者、能覆二其身一遠二離羞耻一、具二足慚愧一、修二行善法一。二者、遠二離寒熱、及以蚊蟲惡獸毒蟲一、安穩修道。三者、示二現沙門出家相貌一、見者歡喜遠二離邪心一。四者、袈裟即是人天寶幢之相、尊重敬禮、得レ生二梵天一。五者、著袈裟時、生二寶幢想一、能滅二衆罪一、生二諸福德一。六者、本制二袈裟一、染令二壞色一、離二五欲想一、不レ生二貪愛一。七者、袈裟是佛淨衣、永斷二煩惱一作二良田一故。八者、身著二袈裟一、罪業消除、十善業道、念念增長。九者、袈裟猶如二良田一、能善增二長菩薩道一故。十者、袈裟猶如二甲冑一、煩惱毒箭不レ能レ害故。智光當レ知、以二此因緣一、三世諸佛、緣覺、聲聞、淸淨出家、身著二袈裟一、三聖同坐二解脫寶牀一、執二智慧劍一、破二煩惱魔一、共入二一味諸涅槃界一。』爾時世尊、而說レ偈言、『智光比丘應二善聽一、大福田衣十勝

利。世間衣服增欲染、如來法服不如是。法服能遮世羞恥、慚愧圓滿生福田。遠離寒熱及毒蟲、道心堅固得究竟。示現出家離貪欲、斷除五見正修行。瞻禮寶袈裟幢相、恭敬生於梵王福、佛子披衣生塔想。生福滅罪感人天、肅容致敬眞沙門、所爲不染諸塵俗。諸佛稱讚爲良田、利樂群生此爲最。袈裟神力不思議、能令修植菩提行、道芽增長如春苗、菩提妙果類秋實。堅固金剛眞甲冑、煩惱毒箭不能害。今略讚十勝利、歷劫廣說無有邊。若有龍身披一縷、得脫金翅鳥王食。若人渡海持此衣、不怖龍魚諸鬼難。雷電霹靂天之怒、披袈裟者無恐畏。白衣若能親捧持、一切惡鬼無能近。若能發心求出家、厭離世間修佛道、十方魔宮皆振動。是人速證法王身。」この十勝利、ひろく佛道の、もろもろの功德を具足せり。長行偈頌に、あらゆる功德あきらかに參學すべし、披閱して、すみやかに、さしおくことなかれ、句句にむかひて久參すべし。この勝利は、ただ袈裟の功德なり、行者の猛利恆修のちからにあらず。佛言、袈裟神力不思議いたづらに凡夫賢聖の、はかりしるところにあらず。おほよそ速證法王身のとき、かならず袈裟を著せり、袈裟を著せざるものの、法王身を證せること、むかしよりいまだあらざるところなり。」○その最第一清淨の衣財は、これ糞掃衣なり。その功德あまねく大乘小乘の經律論のなかに、あきらかなり、廣學に咨問すべし。その餘の衣財、またかねあきらむべし。佛佛祖祖かならずあきらめ、正傳しましますところなり、餘類のおよぶべきにあらず。

中阿含經曰、『復次、諸賢或有二一人一、身淨行、口意不淨行、若慧者見設生二恚惱一、應二當除一レ之。諸賢或有二一人一、身不淨行、口意淨行、若慧者見設生二恚惱一、應二當除一レ之、當云何除、諸賢猶如阿練若比丘、持二糞掃衣一、見二糞掃中所レ棄弊衣一、或大便汙、或小便唾涕、及餘不淨之所二染汙一見已左手執レ之、右手舒張、若非二大便小便、涕唾、及餘不淨之所レ汙處一、又不レ穿者、便裂取レ之。如レ是諸賢或有二一人一、身不淨行、口意淨行、莫レ念二彼身不淨行一。但當レ念二彼口意之淨行一、若慧者見、設生二恚惱一應二如レ是除一』これ阿練若比丘の、拾糞掃衣の法なり。四種の糞掃あり、十種の糞掃あり。その糞掃をひろふとき、まづ不穿のところをえらびとる。つぎには大便小便、ひさしくそみて、ふかくして、浣洗すべからざらん、またとるべからず、浣洗しつべからんこれをとるべきなり。

十種糞掃

一牛嚼衣、二鼠噛衣、三火燒衣、四月水衣、五産婦衣、六神廟衣、七塚間衣、八求願衣、九王職衣、十往還衣。この十種ひとのすつるところなり、人間のもちゐるところにあらず。これをひろふて、袈裟の淨財とせり、三世諸佛の讃歎しましますところ、もちゐたりましますところなり。しかあればすなはち、この糞掃衣は、人天龍等の、おもくし擁護するところなり、これをひろふて袈裟をつくるべし。これ最第一の淨財なり、最第一の清淨なり。いま日本國、かくのごとくの糞掃衣なし、たとひもとめんとすとも、あふべからず、邊地小國かなしむべし。ただ檀那所施の淨財、これをもちゐるべし。人天の布施する

【長連牀】僧堂内の單の最も長く連れる牀座を云ふ。
【開靜】後夜の坐禪の終る知らせの鳴る時。

ところの淨財、これをもちゐるべし、あるひは淨命より、うるところのものをもて、市にして貿易せらん、またこれ袈裟につくりつべし。かくのごときの糞掃、および淨命よりえたるところは、絹にあらず、布にあらず、金銀珠玉綾羅錦繡等にあらず、ただこれ糞掃衣なり。この糞掃は、弊衣のためにあらず、美服のためにあらず、ただこれ佛法のためなり。これを用著する、すなはち三世諸佛の皮肉骨髓を正傳せるなり、正法眼藏を正傳せるなり。この功德さらに、人天に問著すべからず、佛祖に參學すべし。

正法眼藏袈裟功德

予在宋のそのかみ、長連牀に功夫せしとき、齊肩の隣單をみるに、開靜のときごとに、袈裟をささげて頂上に安じ、合掌恭敬し一偈を默誦す。その偈にいはく、「大哉解脫服、無相福田衣、披奉如來敎、廣度諸衆生。」ときに予未曾見のおもひを生じ、歡喜身にあまり、感淚ひそかにおちて衣襟をひたす。その旨趣は、そのかみ阿含經を披閱せしとき、頂戴袈裟の文をみるといへども、その儀則いまだあきらめず、いまのあたりみる、歡喜隨喜し、ひそかにおもはく、あはれむべし鄉土にありしとき、をしゆる師匠なし、すすむる善友あらず、いくばくか、いたづらにすぐる光陰を、をしまざる、かなしまざらめやは。いまの見聞するところ、宿善よろこぶべし。もしいたづらに鄉閭にあらば、いかでか、まさしく佛衣を相承著用せる、僧寶に隣肩することをえん。悲喜ひとかたならず、感淚千萬行。ときにひそかに發願す、いかにしてか、われ不肖なりといふとも、佛法の嫡嗣とな

【嘉定十七年癸未】嘉定十七年は甲申にして癸未に非ず若し癸未とせば嘉定十六年なるべし日本の元仁元年にして祖廿五歳。

【十二年中】釋尊の出家を十九歳とし成道を三十歳として前後十二年といふ。

【仁治元年庚子開冬日】前卷に同じ【示衆】對機は大衆。

り、正法を正傳して、郷土の衆生をあはれむに、佛祖正傳の衣法を見聞せしめん。かのときの發願いまむなしからず、袈裟を受持せる在家出家の菩薩おほし、歡喜するところなり。受持袈裟のともがら、かならず日夜に頂戴すべし、殊勝最勝の功德なるべし。一句一偈の見聞は、若樹若石の因緣もあるべし、見聞あまねく九道にかぎらざるべし、袈裟正傳の功德は、十方に難遇ならむ、わづかに一日一夜なりとも、最勝最上なるべし。

大宋嘉定十七年癸未冬十月中に、高麗僧、二人ありき、慶元府にきたれり。一人は智玄となづけ、一人は景雲といふ。この二人しきりに、佛經の義を談ずといへども、さらに文學の士なり。しかあれども袈裟なし鉢盂なし、俗人のごとし。あはれむべし、比丘形たりといへども、比丘法なし、小國邊地の、しかあらしむるならん。日本國の比丘形のともがら、他國にゆかんとき、またかの智玄等にひとしからん。釋迦牟尼佛十二年中頂戴して、さしおき、ましまさざりき。すでに遠孫なり、これを學すべし。いたづらに、名利のために、天を拜し神を拜し、王を拜し、臣を拜する頂門をめぐらして、佛衣頂戴に回向せん、よろこぶべきなり。

ときに仁治元年庚子開冬日在觀音導利興聖寶林寺示衆

正法眼藏袈裟功德　畢

正法眼藏傳衣

佛佛正傳の衣法、まさに震旦に正傳することは、少林の高祖のみなり。高祖はすなはち釋迦牟尼佛より第二十八代の祖師なり。西天二十八代嫡嫡あひつたはれ、震旦に六代まのあたり正傳す、西天東地都盧三十三代なり。第三十三代の祖大鑑禪師、この衣法を黄梅の夜半に正傳し、生前護持したる、いまなほ曹谿の寶林寺に安置せり。諸代の帝王、あひつぎて内裏に請入して供養す、神物護持せるものなり、唐朝の中宗、肅宗、代宗しきりに歸内供養しき。請するにも、おくるにも、勅使をつかはし、詔をたまふ、すなはちこれおもくする儀なり。代宗皇帝あるとき、佛衣を曹溪山におくる詔にいはく、『今遣鎭國大將軍劉崇景、頂戴而送。朕爲之國寶。卿可於本寺安置、令僧衆親承宗旨者、嚴加守護、勿令遺墜。』しかあればすなはち、數代の帝者、ともにくにの重寶とせり。まことに無量恆河沙の三千世界を統領せんよりも、この佛衣くにたもてるは、ことにすぐれたる大寶なり、卞璧に準ずべからざるものなり。たとひ傳國璽となるとも、いかでか傳佛の奇寶とならん。大唐よりこのかた、瞻禮せる緇白、かならず信法の大機なり。宿善のたすくるにあらずよりは、いかでか、この身をもちて、まのあたり佛佛正傳の佛衣を瞻禮することあらん。信受することあたはざらんば、みづからなりといふともうらむべし、佛種

【傳衣】宗門正傳の袈裟衣に就いての說示。文多くは袈裟功德の卷に述ぶるところ多し。

【都盧】音釋に云く都盧は猶し總てと云はんが如し

【詔にいはく】永恭元年五月五日代宗六祖大師衣鉢を請するを夢む、七日刺史楊瑊に勅して云く、朕、能大師傳法衣鉢を請するを夢む、乃ち送り奉りて曹溪に歸すと。詔の文は傳燈卷五に上元元年とせり。

【卞璧】卞和三たび璞を楚王に獻じ後趙氏連城の璧となり秦の十五城と代へんとせり。

【傳國璽】國を傳ふる國王の玉璽となれり。

【緇白】緇はくろ道人、僧のこと。白又は素、しろ、俗人、在家の者。

【葉巾】黄巾に作る本あり、好し。

子にあらざることを。俗なほいはく、『その人の行李をみるは、すなはちその人をみるなり。』いま佛衣を瞻禮せんは、すなはち佛をみたてまつるなり。百千萬の塔を起立して、この佛衣に供養すべし。天上海中にもこころあらんば、おもくすべし、人間にも轉輪聖王等のまことをしり、すぐれたるをしらんば、おもくすべきなり。あはれむべし、よに國主となれるやから、わがくにに重寶のあるをしらざること。ままに道士の教にまどはされて、佛法を廢せるおほし、そのとき袈裟をかけず圓頂に葉巾をいただく、講ずるところは、延壽長年の方なり。唐朝にもあり、宋朝にもあり。これらのたぐひは、國主なりといへども、國民よりもいやしかるべきなり。しづかに觀察しつべし、わがくにに佛衣とどまりて現在せり、衣佛國土なるべきかとも思惟すべきなり、舍利等よりもすぐれたるべし。舍利は輪王にもあり、獅子にもあり、人にもあり、乃至辟支佛等にもあり。しかあれども輪王には袈裟なし、獅子に袈裟なし、人に袈裟なし、ひとり諸佛のみに袈裟あり、ふかく信受すべし。いまの愚人、おほく舍利はおもくすといへども、袈裟をしらず、護持すべきとしれるものまれなり。これすなはち先來より袈裟のおもきことをきけるものまれなり、佛法正傳いまだきかざるがゆへにしかあるなり。つらつら、釋尊在世をおもひやればわづかに二千餘年なり、國寶神器のいまにつたはれるも、これよりもすぎて、ふるくなれるもおほし、この佛法佛衣はちかくあらたなり、若田若里に展轉せんこと、たとひ五十轉轉になれりともその益これ妙なるべし。かれなほ功德あらたなり、この佛衣かれとおなじかるべからず。

【四句偈】一句子に對して出でたる語、某の四句を指せるにあらず。

かれは正嫡より正傳せず、これは正嫡より正傳せり。しるべし四句偈をきくに得道す、一句子をきくに得道す。四句偈および一句子、なにとしてか感應の靈驗ある、いはゆる佛法なるによりてなり。いま一頂衣九品衣、まさしく佛法より正傳せり、四句偈よりも劣なるべからず、一句法よりも驗なかるべからず。このゆゑに二千餘年よりこのかた、信行法行の諸機、ともに隨佛學者、みな袈裟を護持して身心とせるものなり。諸佛の正法にくらきたぐひは、袈裟を崇重せざるなり。いま釋提桓因および阿那跋達多龍王等、ともに在家の天主なりといへども、龍王なりといへども、袈裟を護持せり。しかあるに剃頭のたぐひ、佛子と稱するともがら、袈裟におきては、受持すべきものとしらず、いはんや體色量をしらんや、いはんや著用の法をしらんや、いはんやその威儀、ゆめにもいまだみざるところなり。袈裟をば、ふるくよりいはく、除熱惱服となづく、解脱服となづく、おほよそ功德はかるべからざるなり。龍鱗の三熱、よく袈裟の功德より解脱するなり。諸佛成道のときかならず、この衣をもちゐるなり。まことに邊地にむまれ、末法にあふといへども、相傳あると、相傳なきと、たくらぶることあらば、相傳の正嫡なるを信受護持すべし。いづれの家門にか、わが正傳のごとく、まさしく釋迦の衣法ともに正傳せる、ひとり佛道のみにあり。この衣法にあはんとき、たれか恭敬供養をゆるくせん。たとひ一日に無量恆河沙の身命をすてても供養すべし、生生世世値遇頂戴をも發願すべし。われら佛生國をへだつること、十萬億里の山海のほかにむまれて、邊方の愚蒙なりといへども、この正法をきゝて、

【三藏の學者】經律論の三藏に通曉せる學者。

この袈裟を一日一夜なりといへども受持し、一句一偈なりといへども參究する、これただ一佛二佛を供養せる福德のみにはあるべからず、無量百千億のほとけを供養奉覲せる福德なるべし。たとひ自己なりといへども、たふとぶべし。愛すべし、おもくすべし。祖師傳法の大恩、ねんごろに報謝すべし、畜類なほ恩を報ず、人類いかでか恩をしらざらん。もし恩をしらずば、畜類よりも劣なるべし、畜類よりも愚なるべし。この佛衣の功德、その傳佛正法の祖師にあらざる餘人は、ゆめにもいまだしらざるなり。いはんや體色量をあきらむるにおよばんや。諸佛のあとをしたふべくば、まさにこれをしたふべし。たとひ百千萬代ののちも、この正傳を正傳せんは、まさに佛法なるべし、證驗これあらたなり。俗なほいはく『先王の服にあらざれば服せず、先王の法にあらざればおこなはず』佛道もまたしかあるなり、先佛の法服にあらざれば、もちゐるべからず。もし先佛の法服にあらざらんほかは、なにを服してか佛道を修行せん、諸佛に奉覲せん。これを服せざらんは、佛會にいたりがたかるべし。後漢孝明皇帝、永平年中よりこのかた、西天より東地に來到する僧侶、くびすをつぎてたえず。震旦より印度におもむく僧侶、ままにきこゆれども、たれ人にあひて、佛法を面授せりけるといはず、ただいたづらに論師および三藏の學者に習學せる名相のみなり。佛法の正嫡をきかず、このゆへに佛衣正傳すべきといひつたへるにもおよばず、佛衣正傳せりける人にあひあふといはず、傳衣の人を見聞すとかたらず。はかりしりぬ佛家の閫奧にいらざりけるといふことを。これらのたぐひは、ひとへに衣服との

み認じて、佛法を尊重なりとしらず、まことにあはれむべし。佛法藏相傳の正嫡に、佛衣も相傳相承するなり。法藏正傳の祖師は、佛衣を見聞せざるなきむねは、人中天上あまねくしれるところなり。しかあればすなはち佛袈裟の體色量を正傳しきたり。正く見聞しきたり、佛袈裟の大功德を正傳し、佛袈裟の身心骨髓を正傳せることただまさに正傳の家業のみにあり。もろもろの阿笈摩教の家風には、しらざるところなり。おのおの今案に自立せるは、正傳にあらず、正嫡にあらず。わが大師釋迦牟尼如來、正法眼藏無上菩提を、摩訶迦葉に付授するに、佛衣ともに傳授せりしより、嫡嫡相承して、曹谿山大鑑禪師にいたるに、三十三代なり。その體色量を親見親傳せること、家門ひさしくつたはれて、受持いまにあらたなり。すなはち五宗の高祖、おのおの受持せる、それ正傳なり。あるひは五十餘代、あるひは四十餘代、おのおの師資みだることとなし。先佛の法によりて搭し、先佛の法によりて製することも、唯佛與佛の相傳し證契して、代代をふるに、おなじくあらたなり。

嫡嫡正傳する佛訓にいはく、

九條衣	三長一短（或四長一短）	十一條衣	三長一短（或四長一短）
十三條衣	三長一短（或四長一短）	十五條衣	三長一短
十七條衣	三長一短	十九條衣	三長一短
廿一條衣	四長一短	廿三條衣	四長一短
廿五條衣	四長一短	二百五十條衣	四長一短

【阿笈摩教】梵音（Agama）阿含なり傳、教、法歸と譯す。小乘の教なり。

【今案に自立】佛祖正傳の體色量に依らず、新案を企つるなり。暗に南山道宣律師の今案を指すか。

【佛言若有衆生】悲華經第八諸菩薩本受記品の文。袈裟を信受護持すれば必ず受記を得て當來に作佛すべきことを説示す。

八萬四千條衣　八長一短

いま略して擧するなり、このほか諸般の袈裟あるなり、ともにこれ僧伽梨衣なるべし。あるひは在家にしても受持し、あるひは出家にしても受持す。受持するといふは、著用するなり。いたづらに、たたみもちたらんずるにあらざるなり。たとひかみひげをそれども、袈裟を受持せず。袈裟をにくみいとひ、袈裟をおそるるは、天魔外道なり。百丈大智禪師いはく、「宿殖の善種なきものは、袈裟をいむなり、袈裟をいとふなり、正法をおそれいとふなり。」

佛言、『若有衆生、入我法中、或犯重罪、或墮邪見、於一念中、敬心尊重僧伽梨衣、諸佛及我必於三乘授記此人、當得作佛。若天、若龍、若人、若鬼、若能恭敬此人袈裟少分功德、即得三乘不退不轉。若有鬼神及諸衆生、能得袈裟乃至四寸、飮食充足。若有衆生、共相違反、欲墮邪見、念袈裟力、依袈裟力、尋生悲心、還得清淨。若有人、在兵陣、持此袈裟少分、恭敬尊重、當得解脱。』

しかあればしりぬ、袈裟の功德それ無上不可思議なり。これを信受護持するところに、かならず得受記あるべし、得不退あるべし。ただ釋迦牟尼佛のみにあらず、一切諸佛またかくのごとく宣說しましますなり。しるべしただ諸佛の體相、すなはち袈裟なり。かるがゆへに佛言、『當墮惡道者、厭惡僧伽梨。』しかあればすなはち、袈裟を見聞せんところに、厭惡の念おこらんには、當墮惡道のわがみなるべしと、悲心を生ずべきなり、慚

慚愧懺悔すべきなり。いはんや釋迦牟尼佛はじめて王宮をいでて、山にいらんとせしとき、樹神ちなみに僧伽梨衣一條を擧して、釋迦牟尼佛にまをす、この衣を頂戴すれば、もろもろの魔嬈をまぬかるるなり。ときに釋迦牟尼佛この衣をうけて、頂戴して十二年をふるにしばらくもおかずといふ、これ阿含經等の說なり。あるひはいふ、袈裟はこれ吉祥服なり、これを服用するもの、かならず勝位にいたる。おほよそ世界にこの僧伽梨衣の現前せざる時節なきなり、一時の現前は長劫中の事なり、長劫中の事は一時來なり。袈裟を得するは、佛標幟を得するなり。このゆゑに諸佛如來の袈裟を受持せざるいまだあらず、袈裟を受持せんともがらの、作佛せざるあらざるなり。

搭袈裟法　偏袒右肩は常途の法なり、通兩肩搭の法もあり。兩端ともに左の臂肩にかさねかくるに、前頭を表面にかさね、後頭を裏面にかさねること、佛威儀の一時あり。この儀は諸聲聞衆の見聞し相傳するところにあらず、諸阿笈摩敎の經典に、もらしとくにあらず。おほよそ佛道の袈裟を搭する威儀は、現前せる傳正法の祖師かならず受持せるところなり。受持かならずこの祖師に受持すべし。佛祖正傳の袈裟は、これすなはち佛佛正傳みだりにあらず、先佛後佛の袈裟なり、古佛新佛の袈裟なり。道を化し、佛を化す。過去を化し、現在を化し、未來を化するに、過去より現在に正傳し、現在より未來に正傳し、現在より過去に正傳し、過去より過去に正傳し、現在より現在に正傳し、未來より未來に正傳し、未來より現在に正傳し、未來より過去に正傳して唯佛與佛の正傳なり。このゆへに

【傳廣續普燈等】傳は景德傳燈錄三十卷吳僧道原宋の景德中に修錄す、天聖廣は廣燈錄三十卷李遵勗、宋の仁宗天聖中に編す續は禪門續燈錄三十卷大宋東京の法雲佛國禪師徽宗の建中靖國元年著述す。普燈は嘉泰普燈錄三十卷恩光寺沙門雷庵虛中和尙南宋の寧宗嘉泰年中起稿嘉定十七年大成す。

祖師西來このかた、大唐より大宋にいたる、數百歲のあひだ、講經の達者おのれが業を見徹せるものおほく、教家律等のともがら佛法にいるとき、從來舊巢の弊衣なる袈裟を拋却して、佛道正傳の袈裟を正受するなり。かの因緣すなはち傳廣續普燈等の錄につらなれり。教律局量の小見を解脫して、佛祖正傳の大道をたふとみし、みな佛祖となれり。いまの人も、むかしの祖師をまなぶべし。袈裟を受持すべくば、正傳の袈裟を正傳すべし、信受すべし、僞作の袈裟を受持すべからず。その正傳の袈裟といふは、いま少林曹谿より正傳せるは、これ如來より嫡嫡相承すること、一代も斷闕せざるところなり。このゆゑに道業まさしく稟受し、佛衣したしく手にいれるによりてなり。佛道は佛道に正傳す、閑人の傳得に一任せざるなり。俗諺にいはく、「千聞は一見にしかず、千見は一經にしかず。」これをもてかへりみれば、千見萬聞たとひありとも、一得にしかず、佛衣正傳あるにしくべからざるなり。正傳あるをうたがふべくは、正傳をゆめにもみざらんは、いよいようたがふべし。佛經を傳聞せんよりは、佛衣正傳せらんぞ、したしかるべし。千經萬得ありとも一證にしかじ、佛祖は證契なり、教律の凡流にならふべからず。おほよそ祖門の袈裟の功德は、正傳まさしく相承せり、本樣まのあたりつたはれり、受持しあひ嗣法していまにたえず。正受せるひと、みなこれ證契傳法の祖師なり、十聖三賢にもすぐれる、奉覲恭敬し、禮拜頂戴すべし。ひとたびこの佛衣正傳の道理、この身心に信受せられん、すなはち値佛の兆なり、學佛の道なり。不堪受是法ならんば、悲生なるべし。この袈裟をひとたび身體にお

ほはん、決定成菩提の護身符子なりと深信すべし。一句一偈を信心にそめつれば、長劫の光明にして、虧闕せずといふ、一法を身心にそめんも、亦復如是なるべし。かの心念も無所住なり、我有にかかはれずといへども、その功德すでにしかあり。身體も無所住なりといへどもしかあり。袈裟も無所從來なり、亦無所去なり。我有にあらず、他有にあらずといへども、所持のところに現住し、受持の人に加す。所得功德もまたかくのごとくなるべし。作袈裟の作は、凡聖等の作にあらず、その宗旨、十聖三賢の究盡するところにあらず、宿殖の道種なきものは、一生二生、乃至無量生を經歷すといへども、袈裟をみず、袈裟をきかず、袈裟をしらず、いかにいはんや受持することあらんや。ひとたび身體にふるる功德も、うるものあり、えざるものあり。すでにうるは、よろこぶべし、いまだえざらんは、ねがふべし、うべからざらんは、かなしむべし。大千界の內外に、ただ佛祖の門下のみに、佛衣つたはれること、人天ともに見聞普知せり。佛衣の樣子をあきらむることも、ただ祖門のみなり、餘門にはしらず。これをしらざらんものの、自己をうらみざらんは愚人なり。たとひ八萬四千の三昧陀羅尼をしれりとも、佛祖の衣法を正傳せず、袈裟の正傳をあきらめざらんは、諸佛の正嫡なるべからず。他界の衆生は、いくばくかねがふらん、震旦國に正傳せるがごとく、佛衣まさしく正傳せんことを。おのれがくにに、正傳せざること、はづるおもひあるらん、かなしむこころふかかるらん。まことに如來世尊の衣法正傳せる法に値遇する、宿殖般若の大功德種子によるなり。いま末法惡時世は、おの

れが正傳なきことをはぢず、正傳をそねむ魔儻おほし。おのれが所有所住は、眞實のおのれにあらざるなり、ただ正傳を正傳せん、これ學佛の直道なり。おほよそしるべし、袈裟はこれ佛身なり、佛心なり。また解脱服と稱し、福田衣と稱し、忍辱衣と稱し、無相衣と稱し、慈悲衣と稱し、如來衣と稱し、阿耨多羅三藐三菩提衣と稱するなり。まさにかくのごとく受持すべし、いま現在大宋國の律學と名稱するともがら、聲聞の酒に醉狂するによりて、おのれが家門にしらぬいゑを傳來することを慚愧せずうらみず、覺知せず、西天より傳來せる袈裟、ひさしく漢唐につたはれることをあらためて、小量にしたがふる、これ小見によりてしかあり、小見のはづべきなり。もしいまなんぢが小量の衣をもちゐるがごときは、佛威儀おほく虧闕することあらん、佛儀を學傳せることのあまねからざるによりて、かくのごとくあり。如來の身心ただ祖門に正傳して、かれらが家業に流散せざることあきらかなり。もし萬一も佛儀をしらば佛衣をやぶるべからず。文なほあきらめず、宗いまだきくべからず。又ひとへに麤布を衣財にさだむること、ふかく佛法にそむく、ことに佛衣をやぶれり、佛弟子きるべきにあらず。ゆゑはいかん、布見を擧して、袈裟をやぶれり。あはれむべし、小乘聲聞の見、まさに迂曲なることを。なんぢが布見やぶれてのち、佛衣現成すべきなり。いふところの絹布の用は、一佛二佛の道にあらず、諸佛の大法として、糞掃を上品清淨の衣財とせるなり。そのなかにしばらく十種の糞掃をつらぬるに絹類あり、布類あり、餘帛の類もあり。絹類の糞掃をとるべからざるか、もしかくのごとくなら

ば、佛道に相逢す、絹すでにきらはば、布またきらふべし。絹布きらふべき、そのゆゑなにかある、絹絲は殺生より生ぜるときらふ、おほきにわらふべきなり、布は生物の緣にあらざるか、情非情の情、いまだ凡情を解脫せず、いかでか佛袈裟をしらん。又化絲の說をきたして、亂道することあり。又わらふべし、いづれか化にあらざる、なんぢ化をきくみみを信ずといへども、化をみる目をうたがふ、目に耳なし、耳に目なきがごとし、いまの耳目いづれのところにかある。しばらくしるべし、糞掃をひろふなかに、絹にたる布あり、布のごとくなる絹あらん、これをもちゐんには、絹となづくべからず、布と稱すべからず、まさに糞掃と稱すべし、糞掃なるがゆゑに、糞掃にして絹にあらず、布にあらざるなり。たとひ人天の糞掃と生長せるありとも、有情といふべからず、糞掃なるべし。たとひ松菊の糞掃となれるありとも、非情といふべからず、糞掃なるべし。糞掃の絹布にあらず、珠玉をはなれたる道理をしるとき、糞掃衣は、現成するなり、糞掃袈裟にはむまれあふなり。絹布の見いまだ零落せざるは、いまだ糞掃を夢也未見なり。たとひ麤布を袈裟として、一生受持すとも、布見をおぼえらんは、佛衣正傳にあらざるなり。又數般の袈裟のなかに、布袈裟あり、絹袈裟あり、皮袈裟あり。ともに諸佛のもちゐるところ、佛衣佛功德なり。正傳せる宗旨あり。いまだ斷絕せず、しかあるを凡情いまだ解脫せざるともがら、佛法をかろくし、佛語を信ぜず、凡情に隨他去せんと擬する、付佛法の外道といひつべし、壞正法のたぐひなり。あるひはいふ、天人のをしへによりて、佛衣をあらたむと、

【佛言殺父殺母】寶積經の取意文。

しかあらば天佛をねがふべし、又天の流類となれるか。佛弟子は佛法を天人のために、宣説すべし、道を天人にとふべからず。あはれむべし、佛法の正傳なきは、かくのごとくなり、天衆の見と、佛子の見と、大小はかるにことなることあれども、天くだりて法を佛弟子にとぶらふ。そのゆゑは佛見と天見とはるかにことなるがゆゑなり。律宗聲聞の小見をすててまなぶことなかれ、小乘なりとしるべし。佛言、「殺父殺母は懺悔しつべし、謗法は懺悔すべからず。」おほよそ小見狐疑の道は佛の本意にあらず、佛法の大道は、小乘およぶところなきなり。諸佛の大戒を正傳すること、付法藏の祖道のほかには、ありとしれるものなし。むかし黄梅の夜半に、佛の衣法すでに六祖の頂上に正傳す。まことにこれ傳法傳衣の正傳なり、五祖の人をしるによりてなり。四果三賢のやから、および十聖等のたぐひ、教家の論師經師等のたぐひは、神秀にさづくべし、六祖に正傳すべからず。しかあれども佛祖の佛祖を選するに、凡情路を超越するがゆゑに、六祖すでに六祖となれるなり。しるべし佛祖嫡嫡の知人知己の道理、なほざりに測量すべきところにあらざるなり。のちにある僧、すなはち六祖にとふ、「黄梅の夜半の傳衣、これ布なりとやせん、絹なりとやせん、帛なりとやせん、畢竟じてこれなにものとかせん。」六祖いはく、「これ布にあらず、これ絹にあらず、これ帛にあらず、曹谿高祖の道かくのごとし。」しるべし佛衣は絹にあらず、布にあらず、屈眴にあらざるなり。しかあるをいたづらに絹と認じ、布と認じ、屈眴と認ずるは、謗佛法のたぐひなり。いかにしてか佛袈裟をしらん、いはんや善來得戒の機

縁あり、かれらが所得の袈裟、さらに絹布の論にあらざるは、佛道の佛訓なり。また商那和修が衣は、在家の時は俗服なり、出家すれば袈裟となる。この道理しづかに思量功夫すべし。見聞せざるがごとくして、さしおくべきにあらず。いはんや佛佛祖祖正傳しきたれる宗旨あり。文字かぞふるたぐひ、覺知すべからず、測量すべからず、まことに佛道の千變萬化いかでか庸流の境界ならん。三昧あり、陀羅尼あり。算沙のともがら、絹裏の寶珠をみるべからず。いま佛祖正傳せる袈裟の體色量を、諸佛の袈裟の正本とすべし。その例すでに西天東地古往今來ひさしきなり、正邪を分別せし人、すでに超證しき。祖道のほかに、袈裟を稱するありとも、いまだ枝葉とゆるす本祖あらず。いかでか善根の種子をきざさん。いはんや果實あらんや。われらいま曠劫已來いまだあはざる佛法を見聞するのみにあらず、佛衣を見聞し、佛衣を學習し、佛衣を受持することをえたり。すなはちこれまさしく佛を見たてまつるなり。佛音聲をきく、佛光明をはなつ、佛受用を受用す、佛心を單傳するなり、得佛髓なり。袈裟をつくる、衣財かならず清淨なるをもちゐる。清淨といふは、淨信檀那の供養するところの衣財、あるひは市にて買得するもの、あるひは天衆のおくるところ、あるひは龍神の淨施、あるひは鬼神の淨施、あるひは國王大臣の淨施あるひは淨皮、かくのごとく衣財、共にもちゐるべし。また十種の糞掃衣を清淨なりとす。

いはゆる十種糞掃衣

一者牛嚼衣　二者鼠嚙衣　三者火燒衣　四者月水衣　五者産婦衣

六者神廟衣　七者塚間衣　八者求願衣　九者王職衣　十者往還衣

この十種を、ことに清淨の衣財とせるなり。世俗には拋捨す、佛道にはもちゐる、世間と佛道と、その家業はかりしるべし。しかあればすなはち清淨をもとめんときは、この十種をもとむべし、これをえて、淨をしり不淨を辨肯すべし。心をして身を辨肯すべし、この十種をえて、たとひ絹類なりとも、たとひ布類なりとも、その淨不淨を商量すべきなり。この糞掃衣をもちゐることは、いたづらに弊衣にやつれたらんがためと學するは至愚なるべし。莊嚴奇麗ならんがために、佛道に用著しきたれるところなり、佛道にやつれたる衣服とならんことは、錦繡綾羅金銀珍珠等の衣服の不淨よりきたれるを、やつれたるとはいふなり。おほよそ此土他界の佛道に、清淨奇麗をもちゐるには、この十種それなるべし。これ淨不淨の邊際を超越せるのみにあらず、漏無漏の境界にあらず。色心を論ずることなかれ、得失にかかはれざるなり。ただ正傳受持するはこれ佛祖なり、佛祖なるとき正傳稟受するがゆゑに、佛祖としてこれを受持するは、身の現不現によらず、心の學不學によらず、正傳せられゆくなり。ただまさにこの日本國には、近來の僧尼、ひとしく袈裟を著せざりつることをかなしむべし。いま受持せんことをよろこぶべし。在家の男女、なほ佛戒を受持せんは、五條七條九條の袈裟を著すべし、いはんや出家人いかでか著せざらん。はじめ梵王六天より、婬男婬女奴婢にいたるまで、佛戒をうくべし、袈裟を著すべしといふ、比丘比丘尼これを著せざらんや。畜生なほ佛戒をうくべし、袈裟をかくべし

といふ、佛子なにとしてか佛衣を著せざらん。しかあれば佛子とならんは、天上人間國王百官をとはず、在家出家、奴婢畜生を論ぜず、佛戒を受持し、袈裟を正傳すべし、まさに佛位に正入する直道也。

予在宋のそのかみ長連牀に功夫せしとき、齊肩の隣單をみるに、毎曉の開靜のとき、袈裟をさゝげて頂上に安置し、合掌恭敬して、一偈を默誦す、ときに予未曾見のおもひをなし、歡喜みにあまり、感涙ひそかにおちて、衣襟をうるほす。阿含經を披閲せしとき、頂戴袈裟の文をみるといへども不分曉なり。いまはまのあたりみる、歡喜隨喜し、ひそかにおもはく、あはれむべし鄕土にありしには、をしふる師匠なし、かたる善友にあはず、いくばくかいたづらにすぐる光陰をおしまざる、かなしまざらめや、いまこれを見聞す、宿善よろこぶべし。もしいたづらに本國の諸寺に交肩せば、いかでかまさしく佛衣を著せる僧寶と隣肩たることをえん。悲喜ひとかたにあらず、感涙千萬行。ときにひそかに發願す、いかにしてかは、不肖なりといふとも、佛法の正嫡を正傳して、鄕土の衆生をあはれむに、佛佛正傳の衣法を見聞せしめん。かのときの發願いまむなしからず、袈裟を受持せる在家出家の菩薩おほし、歡喜するところなり。受持袈裟のともがら、かならず日夜に頂戴すべし、殊勝最勝の功德なるべし。一句一偈を見聞することは、若樹若石の因緣もあるべし。袈裟正傳の功德は、十方に難遇ならん。大宋嘉定十七年癸未冬十月中、三韓の僧二人ありて慶元府にきたれり、一人はいはく智玄、一人は景雲、この二人ともにしきり

【仁治元年】前卷と同年月日の説示【記于】前例に依る。

【入宋傳法沙門】傳衣の一卷は室内所傳の書の故に特にこの署名あり。袈裟功德卷と異るところなり。辨道話の奥書と同一。

【山水經】盡十方世界を以て一卷の山水經と爲す、雲門大師の謂ゆる山

に佛經の儀を談ず、あまつさへ文學の士なり、しかあれども袈裟なし、鉢盂なし、俗人のごとし。あはれむべし比丘形なりといへども、比丘法なきこと、小國邊地のゆゑなるべし。我朝の比丘形のともがら、他國にゆかんとき、かの二僧のごとくならん。釋迦牟尼佛すでに十二年中頂戴して、さしおきましまさざるなり、すでに遠孫としてこれを學すべし。いたづらに名利のために天を拜し、神を拜し、王を拜し、臣を拜する頂門を、いま佛衣頂戴に廻向せん、よろこぶべき大慶なり。

ときに仁治元年庚子開冬日記二于觀音導利興聖寶林寺一

入宋傳法沙門　道元

袈裟浣濯之時、須下用二衆末香一和上レ水。灑乾之後、疊收安二置高處一、以二香華一而供二養之一。三拜然後踞跪、頂戴合掌、致レ信唱二此偈一。

大哉解脱服、無相福田衣、披奉如來教、廣度諸衆生。

三唱而後、立地披奉。

正法眼藏傳衣

畢

正法眼藏山水經

而今の山水は、古佛の現道成なり。ともに法位に住して、究盡の功德を成ぜり。空劫已

是山水是水の山水經なり、凡見を打破し情量を離脫し來れば佛法の功德山水に現成し窮盡せり、活法身の活說法を眼處に見るべし。

【大陽山楷和尚】法を青原下十一世投子義青禪師に嗣ぐ。諱は道楷、芙蓉山の湖心に庵を結ぶ、故に芙蓉道楷又は芙蓉楷祖と稱す、曾て大陽山に住す故に此稱あり。政和八年五月寂、壽七十六。

前の消息なるがゆゑに、而今の活計なり。朕兆未萠の自己なるがゆゑに、現成の透脫なり。山の諸功德高廣なるをもて、乘雲の道德、かならず山より通達す。順風の妙功、さだめて山より透脫するなり。

大陽山楷和尚示衆云「青山常運步、石女夜生兒。」

山は、そなはるべき功德の虧闕することなし、このゆゑに常安住なり、常運步なり。その運步の功德、まさに審細に參學すべし。山の運步は、人の運步のごとくなるべきがゆゑに、人間の行步におなじくみえざればとて、山の運步をうたがふことなかれ。いま佛祖の說道、すでに運步を指示す、これその得本なり、常運步の示衆を究辨すべし。運步のゆゑに常なり。青山の運步は、其疾如風よりもすみやかなれども山中人は、不覺不知なり、山中とは、世界裏の華開なり。山外人は、不覺不知なり、山をみる眼目あらざる人は、不覺不知、不見不聞這箇道理なり。もし山の運步を疑著するは、自己の運步をもいまだしらざるなり、自己の運步はなきにあらず、自己の運步いまだしらざるなり、あきらめざるなり。自己の運步をしらんがごとき、まさに青山の運步をもしるべきなり。青山すでに有情にあらず非情にあらず、自己すでに有情にあらず非情にあらず、いま青山の運步を疑著せんことうべからず。いく法界を量局として、青山を照鑑すべしとしらず、青山の運步、および自己の運步、あきらかに檢點すべきなり。退步步退、ともに檢點あるべし。未朕兆の正當時、および空王那畔より、進步退步に、運步しばらくもやまざること檢點すべし。運步

【東山も水上行】雲門錄に云く、問ふ如何なるか是れ諸佛出身の處、（雲門）云く東山水上行と。

【艸木土石牆壁】以下の一段を藏通別圓の四教の機にあてて見る說あり、草木以下は藏教、七寶莊嚴以下は通教、諸佛行道の境界以下は別教、諸佛不思議以下各各の依正なりまでを圓教、斯く四教の機に且く當てて見るのみにて定說にはあらず。

もし休することあらば、佛祖不出現なり、運歩もし究極あらば、佛法不到今日ならん。進歩いまだやまず、退歩いまだやまず、進歩のとき退歩に乖向せず、退歩のとき進歩を乖向せず。この功德を山流とし、流山とす。青山も運歩を參究し、東山も水上行を參學するがゆゑに、この參學は山の參學なり。山の身心をあらためず、山の面目ながら、廻途參學しきたれり。青山は運歩不得なり、東山水上行不得なる山を誹謗することなかれ。低下の見處のいやしきゆゑに、青山運歩の句をあやしむなり、小聞のつたなきによりて、流山の語をおどろくなり。いま流水の言も、七通八達せずといへども、小見小聞に沈溺せるのみなり、しかあれば所積の功德を擧せるを、形名とし命脈とせり。運歩あり流行あり、山の山兒を生ずる時節あり、山の佛祖となる道理によりて、佛祖かくのごとく出現せるなり。たとひ艸木土石牆壁の現成する眼睛あらんときも、疑著にあらず、動著にあらず、全現成にあらず。たとひ七寶莊嚴なりと見取せらるる時節現成すとも、實歸にあらず。たとひ諸佛行道の境界と見現成あるも、あながちの愛處にあらず。たとひ諸佛不思議の功德と見現成と頂𩕳をうとも、如實これのみにあらず。各各の見成は、各各の依正なり。これらを佛祖の道業とするにあらず、一隅の管見なり。轉境轉心は、大聖の所呵なり。説心説性は、佛祖の所不肯なり。見心見性は、外道の活計なり。滯言滯句は、解脫の道著にあらず。かくのごとくの境界を透脫せるあり。いはゆる青山常運歩なり、東山水上行なり、審細に參究すべし。石女夜生兒は石女の生兒するときを夜といふ。おほよそ男石女石あり、非男女石

【天を補し】淮南子に云く、共功氏兵強く凶暴、戰破れ力窮りて乃ち頭を以て不周山に觸れて死す、天柱之れが爲めに折れ、女媧氏五色の石を錬つて天を補ふと。

【雲門匡眞大師】雪峰義存禪師の法嗣、雲門宗の祖。諱は文偃、匡眞大師は諡號。韶州雲門山に開法するを以て名あり。後漢の顯帝乾祐二年四月寂、世壽不詳。

【九山迷盧】梵音蘇迷盧（Sumeru）の略、妙高山と譯す、普通に須彌山といふ、須彌山を中心として之を匝れる山海を總稱して九山八海とす。一山腰をめぐりて一海あり、一海の周圍を一山かこみ、順次に斯くの如くして九山八海となる。九山とは須彌、持雙、持輔、撐木、

あり、これよく天を補し地を補す。天石あり地石あり、俗のいふところなりといへども、人のしるところまれなるなり。生兒の道理しるしべし、生兒のときは、親子並化するか。兒の親となるを、生兒現成し參學するのみならんや。親の兒となるときを、生兒現成の修證なりと參學すべし、究徹すべし。雲門匡眞大師いはく、東山水上行。この道現成の宗旨は、諸山は東山なり、一切の東山は水上行なり。このゆゑに九山迷盧等の現成せり、修證せり、これを東山といふ。しかあれども雲門いかでか東山の皮肉骨髓、修證活計に透脱ならん。

いま現在大宋國に杜撰のやから一類あり、いまは群をなせり、小實の撃不能なるところなり。かれらいはく、いまの東山水上行話、および南泉の鎌子話のごときは、無理會話なり。その意旨は、もろもろの念慮にかかはれる語話は、佛祖の禪話にあらず、無理會話これ佛祖の語話なり。かるがゆゑに黄檗の行棒、および臨濟の擧喝、これら理會およびがたく、念慮にかかはれず、これを朕兆未萌已前の大悟とするなり。先德の方便、おほく葛藤斷句をもちゐるといふは、無理會なり。かくのごとくいふやから、かつていまだ正師をみず、參學眼なし、いふにたらざる小獃子なり。宋土ちかく二三百年よりこのかた、かくのごとくの魔子六群禿子おほし、あはれむべし佛祖の大道の廢するなり。これらが所解、なほ小乘聲聞におよばず、外道よりもおろかなり、俗にあらず僧にあらず、人にあらず天にあらず、學佛道の畜生よりもおろかなり。禿子がいふ無理會話、なんぢのみ無理會なり。佛祖はしかあらず、なんぢに理會せられざればとて、佛祖の理會路を參學せざるべからず。

善見、馬耳、象鼻、地邊、鐵圍なり。

【杜撰】野客叢話に云く、杜默詩を爲る、多く律に合はず、衆人竊かに笑つて曰く、是れ誰の作る所ぞ、默自ら誇つて曰く杜が撰なり杜が撰なりと、世名けて格に合はざるを杜撰と爲すと。

【南泉鎌子の話】南泉一日山上にあり僧問ふ南泉の路那の處に向つてか去る、泉茅鎌子を拈起して曰く這の茅鎌子三十文に買ひ得たり、僧曰く茅鎌子を問はず南泉の路那の處に向つてか去る、泉云くわれ使ひ得て正に快しと。

【六群禿子】毘婆沙論に出づ、釋尊在世に群をなして非法を行ひたる六人の比丘、闡提、盧黒、難陀、跋難陀、馬師、滿宿なり。

たとひ畢竟無理會なるべくば、なんぢがいまいふ理會も、あたるべからず、しかのごとき のたぐひ、宋朝の諸方におほし、まのあたり見聞せしところなり。あはれむべしかれら念慮の語句なることをしらず、語句の念慮を透脱することをしらず。在宋のときかれらをわらふに、かれら所陳なし、無語なりしのみなり。かれらがいまの無理會の邪計なるのみなり。たれかなんぢにをしふる天眞の師範なしといへども、自然の外道見なり。しるべしこの東山水上行は、佛祖の骨髓なり、諸水は東山の脚下に現成せり、このゆゑに諸山くもにのり天をあゆむ、諸水の頂顙は諸山なり、向上直下の行歩、ともに水上なり。諸山の脚尖、よく諸水を行歩し、諸水を趯出せしむるゆゑに、運歩七縱八横なり、修證即不無なり。水は強弱にあらず、濕乾にあらず、動靜にあらず、冷暖にあらず、有無にあらず、迷悟にあらざるなり。こりては金剛よりもかたし、たれかこれをやぶらん。融しては乳水よりもやはらかなり、たれかこれをやぶらん。しかあればすなはち現成所有の功德をあやしむことあたはず、しばらく十方の水を十方にして著眼看すべき時節を參學すべし。人天の水をみるときのみの參學にあらず、水の水をみる參學あり。水の水を修證するがゆゑに、水の水を道著する參究あり、自己の自己に相逢する通路を現成せしむべし、他己の他己を參徹する活路を進退すべし、跳出すべし、おほよそ山水をみること種類にしたがひて不同あり。いはゆる水をみるに瓔珞とみるものあり、しかあれども瓔珞を水とみるにはあらず。われらがなにとみるかたちを、かれが水とすらん。かれが瓔珞はわれ水とみる、水を妙華

禿子は藥籠坊主、茂簛。
【おほよそ山水をみること】一水四見の道理を說く。

【佛言一切諸法】大寶積經第七十八卷の文。

とみるあり、しかあれども華を水ともちゐるにあらず。鬼は水をもて猛火とみる、濃血とみる。龍魚は宮殿とみる、樓臺とみる。あるひは七寶摩尼珠とみる、あるひは樹林牆壁とみる、あるひは清淨解脫の法性とみる、あるひは眞實人體とみる、あるひは身相心性とみる。人間これを水とみる、殺活の因緣なり。すでに隨類の所見不同なり。しばらくこれを疑著すべし。一境をみるに諸見しなじなりとやせん、諸象を一境なりと誤錯せりとやせん。功夫の頂𩕳にさらに功夫すべし。しかあればすなはち修證辨道も、一般兩般なるべからず、究竟の境界も、千種萬般なるべきなり。さらにこの宗旨を憶想するに、諸類の水たとひおほしといへども本水なきがごとし、諸類の水なきがごとし。しかあれども隨類の諸水それ心によらず身によらず、業より生ぜず、依自にあらず依他にあらず、依水の透脫あり。しかあれば水は地水火風空識等にあらず、水は青黃赤白黑等にあらず、色聲香味觸法等にあらざれども、地水火風空等の水おのづから現成せり。かくのごとくなれば而今の國土宮殿、なにものの能成所成とあきらめいはんことかたかるべし、空輪風輪にかかれると道著する、わがまことにあらず、他のまことにあらず、小見の測度を擬議するなり。かかれるところなくば、住すべからずとおもふによりて、この道著するなり。

佛言、「一切諸法、畢竟解脫、無有所住。」しるべし解脫にして繫縛なしといへども、諸法住位せり。しかあるに人間の水をみるに、流注してとどまらざるとみる一途あり。その流に多般あり、これ人見の一端なり。いはゆる地を流通し、空を流通し、上方に流通し、

【文子曰】文子巻四の文。隋の王通文中に四巻を作り論語に擬す。

下方に流通す。一曲にもながれ、九淵にもながる。のぼりて雲をなし、くだりてふちをなす。文子曰、『水之道、上レ天爲ニ雨露一、下レ地爲ニ江河一』いま俗のいふところなほかくのごとし、佛祖の兒孫と稱せんともがら、俗よりもくらからんはもともはづべし。いはく水の道は水の所知覺にあらざれども、水よく現行す、水の不知覺にあらざれども、水よく現行するなり。上レ天爲ニ雨露一といふ、しるべし水はいくそばくの上天上方へものぼりて雨露をなすなり、雨露は世界にしたがふてしなじななり。水のいたらざるところあるといふは、小乘聲聞教なり、あるひは外道の邪教なり。水は火焰裏にもいたるなり、心念思量分別裏にもいたるなり、覺知佛性裏にもいたるなり。下レ地爲ニ江河一。しるべし水の下地するとき、江河をなすなり、江河の精よく賢人となる、いま凡愚庸流のおもはくは、水はかならず江河海川にあるとおもへり。しかにはあらず、水のなかに江河をなせり、しかあれば江海ならぬところにも水はあり、水の下地するとき、江海の功をなすのみなり。また水の江海をなしつるところなれば、世界あるべからず、佛土あるべからずと學すべからず、一滴のなかにも無量の佛國土現成なり。しかあれば佛土のなかに水あるにあらず、水裏に佛土あるにあらず。水の所在すでに三際にかかはれず、しかもかくのごとくなりといへども、水現成の公案なり。佛祖のいたるところには水かならずいたる、水のいたるところには、佛祖かならず現成するなり。これによりて佛祖かならず水を拈じて身心とし思量とせり。しかあればすなはち水はかみにのぼらずといふは、内外の典籍にあらず、水之道は、上下

【佛經のなかに】金光明經に云く四大蚖蛇其性各異る地水の二蛇其性沈下す、風火の二蛇は其性上升すと。

縱橫に通達するなり。しかあるに佛經のなかに、火風は上にのぼり、地水は下にくだる、この上下は、參學するところあり、いはゆる佛道の上下を參學するなり、いはゆる地水のゆくところを下とするなり、下を地水のゆくところとするにあらず。火風のゆくところは上なり、法界かならずしも上下四維の量にかかはるべからざれども四大五大六大等の行處によりて、しばらく方隅法界を建立するのみなり。無想天はかみ、阿鼻獄はしもとせるにあらず。阿鼻も盡法界なり、無想も盡法界なり。しかあるに龍魚の水を宮殿とみるとき、人の宮殿をみるがごとくなるべし。さらにながれゆくと知見すべからず。もし傍觀ありて、なんぢが宮殿は流水なりと爲說せんときは、われらがいま山流の道著を聞著するがごとく、龍魚たちまちに驚疑すべきなり。さらに宮殿樓閣の欄階露柱は、かくのごとくの說著ありと保任することもあらん、この料理、しづかにおもひきたりおもひもてゆくべし。この邊表に透脫を學せざれば、凡夫の身心を解脫せるにあらず、佛祖の國土を究盡せるにあらず。凡夫の國土を究盡せるにあらず、凡夫の宮殿を究盡せるにあらず。いま人間には海のこころ江のこころをふかく水と知見せりといへども、龍魚等は、いかなるものをもて、水と知見し水と使用すといまだしらず。おろかにわが水と知見するをいづれのたぐひも水にもちゐるらんと認ずることなかれ。いま學佛のともがら、水をならはんとき、ひとすぢに人間のみにはとどこほるべからず、すすみて佛道の水を參學すべし。佛祖のもちゐるところの水は、われらこれをなにとか所見すると參學すべきなり。佛祖の屋裏、また水ありや水なしやと

參學すべきなり。山は超古超今より、大聖の所居なり。賢人聖人、ともに山を堂奧とせり、山を身心とせり。賢人聖人によりて、山は現成せるなり。おほよそ山はいくそばくの大聖大賢いりあつまれるらんとおぼゆれども、山はいりぬるよりこのかたは、一人にあふ、一人もなきなり。ただ山の活計の現成するのみなり。さらにいりきたりつる蹤跡なほのこらず。世間にて山をのぞむ時節と、山中にて山にあふ時節と、頂顬眼睛はるかにことなり。不流の憶想、および不流の知見も、龍魚の知見と一齊なるべからず。人天の自界にところをうる、他類これを疑著し、あるひは疑著におよばず。しかあれば山流の句を佛祖に學すべし。驚疑にまかすべからず。拈一はこれ流なり、拈一はこれ不流なり、一回は流なり、一回は不流なり。この參究なきがごときは、如來正法輪にあらず。古佛いはく、『欲レ得レ不レ招二無間業一、莫レ謗二如來正法輪一』この道を皮肉骨髓に銘すべし、身心依正に銘すべし、空に銘すべし、色に銘すべし。若樹若石に銘せり。若田若里に銘せり。おほよそ山は、國界に屬せりといへども、山を愛する人に屬するなり。山かならず主を愛するとき、聖賢高德やまにいるなり。聖賢やまにすむとき、やまこれに屬するがゆゑに、樹石鬱茂なり、禽獸靈秀なり、これ聖賢の德をかうぶらしむるゆゑなり。しるべし山は賢をこのむ實あり、聖をこのむ實あり。帝者おほく山に幸して、賢人を拜し大聖を拜問するは、古今の勝躅なり。このとき師禮をもてうやまふ、民間の法に準ずることなし。聖化のおよぶところ、またく山賢を強爲することなし、山の人間をはなれたることしりぬべし。崆

【古佛いはく欲得】永嘉大師證道歌の語。

【崆峒華封のそのかみ】莊子卷四に云く、黄帝立て天子と爲る、十九年令天下に行ふ、聞く廣成子が崆峒の上に在りと、故に往いて之を見る、曰くわれ聞く吾子至道に達すと、敢て至道の精を問ふ乃至黄帝下風に順ひ膝行して進み再拜稽首して問うて曰く聞く吾子至道

に達すと、敢て身を治せんことを問ふ奈何んと云云。

【德誠和尚】藥山惟儼禪師に嗣ぐ。嘗て華亭吳江の船子（船頭なり）故に船子德誠といふ。夾山善會を接して日く、糸千尺を垂る、意深潭に在り、釣三寸を離れて速かに道へ速かに道へと。曾て日く予、性疏野唯山水を好む他後自ら吾が所止の處を知ると、遂に分携して秀州華亭に至り一小舟を泛べて緣に隨ひ口を度す、其高蹤を知る無し、後夾山を接して宗を繼ぎ、乃ち自ら船を覆し水に入りて寂す寂年世壽不詳。

【火中にも有情】述異記に云く火鼠は火の生ずる所にして毛は以て布を作るべし、是を火浣布と謂ふと。

【澤にかくる山】

峒華封のそのかみ、黄帝これを拜請するに、膝行して叩頭して廣成にとひしなり。釋迦牟尼佛、かつて父王の宮をいでゝ山にいれり、しかあれども父王やまをうらみず、父王やまにありて、太子をしふるともがらをあやしまず。十二年の修道おほく山にあり、法王の運啓も在山なり。まことに輪王なほ山を強爲せず。しるべし山は人間のさかひにあらず、上天のさかひにあらず、人慮の測度をもて山を知見すべからず。もし人間の流に比準せずば、たれか山流山不流等を疑著せん。あるひはむかしよりの賢人聖人、まゝに水にすむもあり、水にすむとき、魚をつるあり、人をつるあり。道をつるあり。これともに古來水中の風流なり、さらにすすみて自己をつるあるべし、釣をつるべし、釣につらるゝあるべし、道につらるゝあるべし。むかし德誠和尚、たちまちに藥山をはなれて、江心にすみし、すなはち華亭江の賢聖をえたるなり。魚をつらざらんや、人をつらざらんや、水をつらざらんや、みづからをつらざらんや。人の德誠をみることをうるは德誠なり、德誠の人を接するは、人にあふなり。世界に水ありといふのみにあらず、水界に世界あり。水中のかくのごとくあるのみにあらず、雲中にも有情世界あり、風中にも有情世界あり、火中にも有情世界あり、地中にも有情世界あり、法界中にも有情世界あり、一莖艸中にも有情世界あり、一拄杖中にも有情世界あり。有情世界あるがごときは、そのところかならず佛祖世界あり。かくのごとくの道理、よくよく參學すべし。しかあれば水はこれ眞龍の宮なり、流落にあらず、流のみなりと認ずるは、流のことは水を謗ずるなり、たとへば非流と強爲するがゆ

莊子に舟を壑に藏し山を澤に藏すの語あり。

【古佛いはく山是山】雲門文偃禪師上堂の語。山是山といふにあらずとは世間凡情の限にて見る山是山にあらず。山是山と云ふなりとは佛祖正眼を以て見るとき佛法一巻の山水經山是山なりと。

【爾時仁治元年】說時明なり。

【示衆】對機は大衆。

【佛祖】佛祖の稱號を擧唱して禮拜し奉勤する時佛祖來つて又禮拜し奉勤す、之を能禮所禮性空寂、感應道交難思議と云ふ宗門空中の口傳なり。

【大和尙】梵音鄔波陀耶（Upadhyaya）、依學、依止、親教、力生と譯す、面山大戒訣に釋尊を如來と云はず、

ゑに。水は水の如是實相のみなり、水是水功德なり、流にあらず。一水の流を參究し、不流を參究するに、萬法の究盡、たちまちに現成するなり。山も寶にかくるる山あり、澤にかくるる山あり、空にかくるる山あり、山にかくるる山あり、藏に藏山する參學あり。古佛いはく、山是山水是水。この道取は、山是山といふにあらず、山是山といふなり、しかあれば山を參究すべし、山を參究すれば山に功夫あり。かくのごとくの山水、おのづから賢をなし聖をなすなり。

爾時仁治元年庚子十月十八日在二于觀音導利興聖寶林寺一示衆

正法眼藏山水經 畢

正法眼藏佛祖

宗禮佛祖の現成は、佛祖を擧拈して奉覲するなり、過現當來のみにあらず、佛向上よりも向上なるべし。まさに佛祖の面目を保任せるを拈じて、禮拜し相見す、佛祖の功德を現擧せしめて、住持しきたり、禮拜しきたれり。

毘婆尸佛大和尙（此云二廣說一） 尸棄佛大和尙（此云レ火） 毘舍浮佛大和尙（此云二一切慈一） 拘留孫佛大和尙（此云二金仙人一） 拘那含牟尼佛大和尙（此云二金色仙一） 迦葉佛大和尙（此云二飲光一） 釋迦牟尼佛大和尙（此云二能仁寂默一） 第一摩訶迦葉大和尙 第二阿難陀

大和尚　第三商那和修大和尚　第四優婆毱多大和尚　第五提多迦大和尚　第六彌遮迦大和尚　第七婆須蜜多大和尚　第八佛陀難提大和尚　第九伏駄蜜多大和尚　第十婆栗濕縛大和尚　第十一富那夜奢大和尚　第十二馬鳴大和尚　第十三迦毘摩羅大和尚　第十四那伽閼剌樹那大和尚（又龍樹又龍勝又龍猛）　第十五伽那提婆大和尚、第十六羅睺羅多大和尚、第十七僧伽難提大和尚　第十八伽耶舍多大和尚　第十九鳩摩羅多大和尚　第二十闍夜多大和尚　第二十一婆修盤頭大和尚　第二十二摩奴羅大和尚　第二十三鶴勒那大和尚　第二十四獅子大和尚　第二十五婆舍斯多大和尚　第二十六不如蜜多大和尚　第二十七般若多羅大和尚　第二十八菩提達磨大和尚　慧可大和尚　僧璨大和尚　道信大和尚　弘忍大和尚　慧能大和尚　行思大和尚　希遷大和尚　惟儼大和尚　曇晟大和尚　良价大和尚　道膺大和尚　道丕大和尚　觀志大和尚　緣觀大和尚　警玄大和尚　義青大和尚　道楷大和尚　子淳大和尚　清了大和尚　宗珏大和尚　智鑑大和尚　如淨大和尚

道元大宋國寶慶元年乙酉夏安居時、先師天童古佛大和尚に參侍して、この佛祖を禮拜頂戴することを究盡せり、唯佛與佛なり。

爾時仁治二年辛丑正月三日書于日本國雍州宇治縣觀音導利興聖寶林寺而示衆

正法眼藏佛祖　畢

摩訶迦葉を尊者と云はず、初祖達摩を禪師とよばずして大和尚と云ふは和尚は是れ得戒の稱なりと云へり。

【毘婆尸佛】毘婆尸佛より釋迦牟尼佛に至る七佛、前三佛を過去莊嚴劫の三佛、後四佛を現在賢劫の四佛とも云ひ、又總じて過去七佛とも云ふ。摩訶迦葉を西天の初祖とし、西天廿八代菩提達摩を震旦の初祖と爲す、以下東土に於て相續不斷、天童如淨大和尚に至つて五十代血脈相綿たり。

【寶慶元年】日本嘉祿元年にして道元禪師二十六歳、天童如淨禪師六十二歳なり。

【仁治二年】道元禪師四十二歳。

【書下…而示衆】書して特に座下の衆に示す。

【嗣書】面授嗣法の信として嗣書あり、佛佛祖祖必ず嗣法あり嗣法あるは必ず嗣書あり、師資相承して血脈不斷なるは嗣書あるに由る。傳法は理にして嗣書は事なりと雖も理事不二のところに佛法は現前す。故に傳法を尊重すると共に傳法の儀式及び嗣書の寸法書式必ず佛祖の法に據るべきを示す。

【曹溪あるとき】六祖慧能禪師。六祖法寶壇經の文。

正法眼藏嗣書

佛佛かならず佛佛に嗣法し、祖祖かならず祖祖に嗣法する、これ證契なり。これ單傳なり、このゆへに無上菩提なり、佛にあらざれば佛を印證することあたはず、佛の印證をえざれば、佛となることなし。佛にあらずよりは、たれかこれを最尊なりとし、無上なりと印可することあらん。佛の印證をうるとき無師獨悟するなり、無自獨悟するなり。このゆへに、佛佛證嗣し、祖祖證契すといふなり、この道理の宗旨は、佛佛にあらざれば、あきらむべきにあらず、いはんや十地等覺の所量ならんや、いはんや經師論師等の測度するところならんや。たとひ爲說すとも、かれらきくべからず、佛佛相嗣するがゆへに。しるべし佛道はただ佛佛の究盡にして、佛佛にあらざる時節あらず。たとへば石は石に相嗣し、玉は玉に相嗣することあり。菊も相嗣あり、松も印證するに、みな前菊後菊如如なり、前松後松如如なるがごとし。かくのごとくなるをあきらめざるともがら、佛佛正傳の道にあふといへども、いかにある道得ならんと、あやしむにおよばず。佛佛相嗣し、祖祖證契すといふ領覽あることなし。あはれむべし佛種族に相似なりといへども、佛子にあらざることを、子佛にあらざることを。曹溪あるとき衆にしめしていはく、「七佛より慧能にいたるに四十佛あり、慧能より七佛にいたるに四十祖あり」。この道理あきらかに佛祖正嗣

【釋迦牟尼佛あるとき】五燈會元第一に云く阿難に問はしむ過去の諸佛は是れ甚麼人の弟子ぞ、世尊曰く、是れ吾が弟子なり、阿難曰く應當に是の如くなるべしと。

の宗旨なり。いはゆる七佛は過去莊嚴劫に出現せるもあり、現在賢劫に出現せるもあり。しかあるを四十祖の面授をつらぬるは、佛道なり、佛嗣なり。しかあればすなはち六祖より向上して七佛にいたれば四十祖の佛祖あり。七佛より向下して六祖にいたるに、四十佛の佛嗣なるべし。佛道祖道かくのごとし。證契にあらざれば、佛智慧にあらず、祖究盡にあらず。佛智慧にあらざれば佛信受なし、祖究盡にあらざれば祖證契せず。しばらく四十祖といふは、ちかきをかつ擧するなり。これによりて佛佛の相嗣すること、深遠にして不退不轉なり、不斷不絕なり。その宗旨は、釋迦牟尼佛は、七佛已前に成道すといへども、ひさしく迦葉佛に嗣法せるなり。降生より三十歲、十二月八日に成道すといへども、七佛已前の成道なり。諸佛齊肩同時の同成道なり、諸佛已前の成道なり、一切の諸佛より末上の成道なり。さらに迦葉佛は釋迦牟尼佛に嗣法すると參究する道理あり、この道理をしらざるは、佛道をあきらめず、佛道、あきらめざれば佛嗣にあらず、佛嗣といふは佛子といふことなり。釋迦牟尼佛あるとき阿難にとはしむ、「過去の諸佛はこれたれが弟子なるぞ」釋迦牟尼佛のいはく、「過去の諸佛はこれ我釋迦牟尼佛の弟子なり。」諸佛の佛儀かくのごとし。これ諸佛に奉覲して、佛嗣を成就せん、すなはち佛佛の佛道にてあるべし。この佛道かならず嗣法するとき、さだめて嗣書あり、もし嗣法なきは天然外道なり。佛道もし嗣法を決定するにあらずよりは、いかでか今日にいたらん。これによりて佛佛なるには、さだめて佛嗣佛の嗣書をうるなり。その嗣書の爲體は、日月星辰をあきらめて嗣法す、ある

【西堂】他山前住の來りて化を助くるを云ふ。西は賓位。故に當山の住持を東堂とす。

ひは皮肉骨髓を得せしめて嗣法す、あるひは袈裟を相嗣し、あるひは拄杖を相嗣し、あるひは松枝を相嗣し、あるひは優曇華を相嗣し、あるひは金襴衣を相嗣す、靸鞋の相嗣あり、竹篦の相嗣あり。これらの嗣法を相嗣するとき、あるひは指血をして嗣書し、あるひは舌血をして嗣書す、あるひは油乳をもてかき嗣法する、ともにこれ嗣書なり。嗣せるもの、得せるもの、ともにこれ佛嗣なり。まことにこれ佛祖として現成するとき、嗣法かならず現成す。現成するとき、期せざれどもきたり、もとめざれども嗣法せる佛祖おほし、嗣法あるはかならず佛佛祖祖なり

第二十八祖西來よりこのかた、佛道に嗣法ある宗旨を東土に正聞するなり、それよりさきは、かつていまだきかざりしなり。西天の論師法師等およばざるところなり、および十聖三賢の境界およばざるところ、三藏義學の呪術師等は、あるらんと疑著するにもおよばず。かなしむべし、かれら道器なる人身をうけながら、いたづらに教網にまつはれて、透脫の法をしらず、跳出の期を期せざることを。かるがゆへに學道を審細にすべきなり、參究の志氣をもはらすべきなり。道元在宋のとき、嗣書を禮拜することをえしに、多般の嗣書ありき。そのなかに惟一西堂とて、天童に掛錫せしは、越上の人事なり、前住廣福寺の堂頭なり、先師と同鄉人なり。先師つねにいはく、「境風は一西堂に問取すべし。」あるとき西堂いはく、「古蹟の可觀は人間の珍玩なり、いくばくか見來する。」道元いはく、「見來すくなし。」ときに西堂いはく、「吾那裏に一軸の古蹟あり、甚麼次第なり、與老兄看。」とい

ひて、携來をみれば嗣書なり。法眼下の嗣書にてありけるを、老宿の衣鉢のなかよりえたりけり、惟一長老のにはあらざりけり、かれにかきたりしは、「初祖摩訶迦葉、悟於釋迦牟尼佛、釋迦牟尼佛、悟於迦葉佛」。かくのごとくかきたり。道元これをみしに、正嫡の正嫡に嗣法あることを決定信受す、未曾見の法なり。佛祖の冥感して、兒孫を護持する時節なり、感激不勝なり。

雲門下の嗣書とて、宗月長老の天童の首座職に充せしとき、道元にみせしは、いま嗣書をうる人のつぎかみの師、および西天東地の佛祖をならべつらねて、その下頭に嗣書をうる人の名字あり。諸佛祖より直にいまの新祖師の名字につらぬるなり。しかあれば如來より四十餘代ともに新嗣の名字へきたれり、たとへば各各の新祖にさづけたるがごとし。摩訶迦葉阿難陀等は、餘門のごとくにつらなれり。ときに道元、宗月首座にとふ、「和尚いま五家の宗派をつらぬるに、いささか同異あり、そのこころいかん、西天よりは嫡嫡相嗣せらばたれぞ同異あらんや」。宗月いはく、「たとひ同異はるかなりとも、ただまさに雲門山の佛はかくのごとくなると學すべし。釋迦老師なにによりてか尊重他なる、悟道によりて尊重なり、雲門大師なににょりてか、尊重他なる、悟道によりて尊重なり。」道元この說をきくに、いささか領覽あり。いま江浙に大刹の主とあるは、おほく臨濟雲門洞山等の嗣法なり、しかあるに臨濟の遠孫と自稱するやから、ままにくはだつる不是あり。いはく善知識の會下に參じて、頂相一幅、法語一軸を懇請して、嗣法の標準にそなふ。しかあるに一類の狗

【龍門佛眼】五祖法演禪師に嗣ぐ。諱は淸遠、佛眼禪師は諡號。龍門山に化を張るを以て名あり。

子あり、尊宿のほとりに、法語頂相等を懇請して、かくしたくはふること、あまたあるに、晩年におよびて官家に陪錢し、一院を討得して、住持職に補するときは、法語頂相の師に嗣法せず。當代の名譽のともがら、あるひは王臣に親附なる長老等に嗣法するときは、得法をとはず、名譽をむさぼるのみなり。かなしむべし末法惡時かくのごとくの邪風あることを。かくのごとくのやからのなかに、いまだかつて一人としても、佛祖の道を夢にも見聞せるにあらず。おほよそ法語頂相等をゆるすことは、教家の講師、および在家の男女等にもさづく、行者商客等にもゆるすなり。そのむね諸家の錄にあきらかなり。あるひはそのひとにあらざるが、みだりに嗣法の證據をのぞむによりて、一軸の書をもとむるに、有道のいたむところなりといへども、なまじひに援筆するなり。しかのごときは、古來の書式によらず、いささか嗣書のよしをかく。近來の法は、ただその師の會下にて得力すれば、すなはちかの師を師と嗣法するなり。かつてその師の印をえざれども、ただ入室上堂に咨參して、長連牀にあるともがら、住院のときは、その師承を擧するにいとまあらざれども、大事打開するとき、その師を師とせるのみおほし。また龍門佛眼禪師、清遠和尚の遠孫にて、傳藏主といふものありき、かの傳藏主また嗣書を帯せり。嘉定のはじめに、隆禪上座、日本國の人たりといへども、かの傳藏主やまひしけるに、隆禪よく傳藏主を看病しけるに、勤勞しきりなるによりて、看病の勞を謝せんがために、嗣書をとりいだして、禮拜せしめけり、みがたきものなり、與爾禮拜といひけり。それよりこのかた八年ののち、嘉定十六年

癸未あきのころ、道元はじめて天童山に寓止するに、隆禪上座ねんごろに傳藏主に請して、嗣書を道元にみせしその嗣書の樣は、七佛よりのち臨濟にいたるまで、四十五祖をつらねかきて、臨濟よりのちの師は、一圓相をつくりて、そのなかにめぐらして、法諱と華字とをうつしかけり。新嗣はをはりに年月の下頭にかけり、臨濟下の尊宿に、かくのごとく不同ありとしるべし。

先師天童堂頭、ふかく人のみだりに嗣法を稱することをいましむ。まことに先師の會は、これ古佛の會なり、叢林の中興なり。みづからもまだらなる袈裟をかけず。芙蓉山の道楷禪師の衲法衣つたはれりといへども、上堂陞座にもちゐず。おほよそ住持職として、まだらなる法衣かつて一生のうちにかけず。こころあるも、ものしらざるも、ともにほめき、眞善知識なりと尊重す。先師古佛上堂するに、つねに諸方をいましめていはく、近來おほく祖道に名をかれるやから、みだりに法衣を搭し、長髪をこのみ、師號に署するを出世の舟航とせり、あはれむべしたれかこれをすくはん。うらむらくは諸方長老無道心にして、學道せざることを。嗣書嗣法の因緣を見聞せるものなほまれなり、百千人中一箇也無、これ祖道陵夷なり。かくのごとく、よのつねにいましむるに、天下の長老うらみず。しかあればすなはち、誠心辨道することあらば、嗣書あることを見聞すべし、見聞することあるは學道なるべし。臨濟の嗣書は、まづその名字をかきて、某甲子われに參ずともかき、わが會にきたれりともかき、入吾堂奧ともかき、嗣吾ともかきて、ついでのごとく、前代をつ

らぬるなり、かれもいささかいひきたれる法訓あり。いはゆる宗趣は、嗣は、をはりはじめにかかはれず、ただ眞善知識を相見する、的的の宗旨なり、臨濟にはかくのごとくかけるもあり、まのあたりみしによりてしるす。

了派藏主者、威武人也、今吾子也。德光參侍徑山杲和尚、徑山嗣夾山勤、勤嗣楊岐演、演嗣海會端、端嗣楊岐會、會嗣慈明圓、圓嗣汾陽照、照嗣首山念、念嗣風穴沼、沼嗣南院顒、顒嗣興化奬、奬是臨濟高祖之長嫡也。

これは阿育王山佛照禪師德光、かきて派無際にあたふるを、天童の住持なりしとき、小師僧知庾ひそかにもちきたりて、了然寮にて道元にみせし、ときに大宋嘉定十七年甲申正月二十一日、はじめてこれをみる。喜感いくそばくぞ、すなはち佛祖の冥感なり、燒香禮拜して披看す。この嗣書を請出することは、去年七月のころ、師廣都寺、ひそかに寂光堂にて道元にかたれり。道元ちなみに都寺にとふ、「如今たれ人かこれを帶持せる。」都寺いはく、「堂頭老漢那裏有相似、のちに請出ねんごろにせば、さだめてみすることあらん。」道元このことばをききしより、もとむるこころざし日夜に休せず。このゆへに今年ねんごろに小師の僧智庾を屈請し、一片心をなげて請得せりしなり。そのかける地は、白絹の表背せるにかく。表紙はあかき錦なり、軸は玉なり、長九寸ばかり、濶七尺餘なり。閑人にはみせず、道元すなはち智庾を謝す、さらに卽時に堂頭に參じて燒香し、無際和尚に禮謝す。ときに無際云、「這一段事、少得見知、如今老兄知得、便是學道之實歸也。」

ときに道元喜感無レ勝。のちに寶慶のころ道元台山鴈山等に雲遊するついでに、平田の萬年寺にいたる。ときの住持は福州の元鼒和尚なり。宗鑑長老退院ののち、鼒和尚補す、叢席を一興せり。人事のついでに、むかしより佛祖の家風往來せしむるに、大潙仰山の令嗣話を擧するに、長老いはく、「曾看二我箇裏嗣書一也否。」道元いはく、「いかにしてかみることをえん。」長老すなはちみづからたちて、嗣書をさゝげていはく、「這箇はたとひ親人なりといへども、たとひ侍僧のとしをへたるといへども、これをみせしめず。これすなはち佛祖の法訓なり。しかあれども元鼒ひごろ出城し、見知府のために在城のとき、一夢を感ずるにいはく、大梅山法常禪師とおぼしき高僧ありて、梅華一枝をさしあげていはく、「もしすでに船舷をこゆる實人あらんには、華ををしむことなかれ」といひて、梅華をわれにあたふ。元鼒おぼえずして夢中に吟じていはく「未レ跨二船舷一好與二三十棒一」しかあるに不レ經二五日一、與二老兄一相見。いはんや老兄すでに船舷にまたがりきたる。この嗣書また梅華の綾にかけり、大梅のをしふるところならん。夢想と符合するゆへにとりいだすなり。老兄もしわれに嗣法せんともとむや、たとひもとむとも、をしむべきにあらず。」道元信感おくところなし。嗣書を請すべしといへども、たゞ燒香禮拜して、恭敬供養するのみなり。ときに燒香侍者法寧といふあり、はじめて嗣書をみるといひき、道元ひそかに思惟しき、この一段の事、まことに佛祖の冥資にあらざれば、見聞なほかたし、邊地の愚人として、なにのさいはひありてか數番これをみる、感涙霑袖。ときに維摩室大舍堂等に閑闃無人なり。

【仁治二年】前卷に同じ。

【入宋傳法沙門】傳衣の卷の署名に同じ、共に室内相傳の書なるが故なり。

【寛元癸卯】寛元元年。此年七月初めて越前に徙る其

この嗣書は、落地梅綾のしろきにかけり、長九寸餘、闊一尋餘なり。軸子、黄玉なり、表紙は錦なり。道元台山より天童にかへる路程に、大梅山護聖寺の旦過に宿するに、大梅祖師きたりて、開華せる一枝の梅華をさづくる靈夢を感ず、祖鑑もとも仰憑するものなり。その一枝華の縱横は一尺餘なり、梅華あに優曇華にあらざらんや。夢中と覺中と、おなじく眞實なるべし。道元在宋のあひだ、歸國よりのち、いまだ人にかたらず。

いまわが洞山門下に、嗣書をかけるは臨濟等にかけるにはことなり、佛祖の衣裏にかかれりけるを、青原高祖、したしく曹谿の机前にして、手指より淨血をいだしてかき、正傳せられけるなり。この指血に曹谿の指血を合して、書傳せられけると相傳せり。初祖二祖のところにも、合血の儀おこなはれけりと相傳す。これ吾子參吾などはかかず、諸佛および七佛のかきつたへられける嗣書の儀なり。しかあればしるべし曹谿の血氣は、かたじけなく青原の淨血に和合し、青原の淨血したしく曹谿の親血に和合して、まのあたり印證をうることは、ひとり高祖青原和尚のみなり、餘祖のおよぶところにあらず。この事子をしれるともがらは、佛法はただ青原のみに正傳せると道取す。

正法眼藏嗣書

于時日本仁治二年歲次辛丑三月七日觀音導利興聖寶林寺入宋傳法沙門道元記

寛元癸卯九月二十四日掛錫於越前吉田縣吉峯古寺草庵　華字

先師古佛天童堂上大和尚しめしていはく、『諸佛かならず嗣法あり、いはゆる釋迦牟尼佛

九月廿四日吉峰古寺の草庵に掛錫し、本書を再治して華字を書せられしものか。

は迦葉佛に嗣法す、迦葉佛は拘那含牟尼佛に嗣法す、拘那含牟尼佛は拘留孫佛に嗣法するなり。かくのごとく相嗣して、いまにいたると信受すべし、この學佛の道なり。」ときに道元まうす、「迦葉佛入涅槃ののち、釋迦牟尼佛はじめて出世成道せり、いはんやまた賢劫の諸佛いかにしてか、莊嚴劫の諸佛に嗣法せん、この道理いかん。」先師いはく、「なんぢがいふところは、聽教の解なり、十聖三賢等のみちなり、佛祖嫡嫡のみちにあらず。わが佛佛相傳のみちはしかあらず、釋迦牟尼佛まさしく迦葉佛に嗣法せりとならひきたるなり。釋迦佛の嗣法してのちに、迦葉佛は入涅槃すと參學するなり。釋迦佛もし迦葉佛に嗣法せざらんは、天然外道とおなじかるべし、たれか釋迦佛を信ずるあらん。かくのごとく佛佛相嗣して、いまにおよびきたれるによりて、箇箇佛ともに正嗣なり、つらなれるにあらず、あつまれるにあらず、まさにかくのごとく佛佛相嗣すると學するなり。諸阿笈摩教のいふところの劫量壽量等にかかはれざるべし。もしひとへに釋迦佛よりおこれりといはば、わづかに二千餘年なり、ふるきにあらず。相嗣もわづかに四十餘代なり、あらたなるといひぬべし。この佛嗣は、しかのごとく學するにあらず、釋迦佛は迦葉佛に嗣法すると學し、迦葉佛は釋迦佛に嗣法せりと學するなり。かくのごとく學するとき、まさに諸佛諸祖の嗣法にてあるなり。」このとき道元はじめて佛祖の嗣法あることを稟受するのみにあらず、從來の舊窠をも脫落するなり。

正法眼藏嗣書　畢

【法華轉法華】六祖大鑑慧禪師の法達に示されし心迷法華轉、心悟轉法華の語の法華轉轉法華を拈擧して標題とす。此一卷は法華經の本文を縱橫に錯綜して初中後法華を以て一貫す、但し一部八軸二十八品の法華に非ず天地法華也山川法華也盡十方界法華也宇宙法華也活文字也活法華也能轉所轉を絕したる法華を法華轉法華と開演す。

【十方佛土中】この一段にて法華の大意を盡せり。

【三艸二木】文句に云く、小草は人天に喩へ中草は聲聞に喩へ上草は三藏菩薩に喩ふ。小樹は通教の菩薩に喩へ大草は別教の菩薩に喩ふと。

正法眼藏法華轉法華

十方佛土中は法華の唯有なり、これに十方三世一切諸佛阿耨多羅三藐三菩提衆は、轉法華あり、法華轉あり。これすなはち本行菩薩道の不退不轉なり、諸佛智慧甚深無量なり、難解難入の安詳三昧なり。あるひはこれ文殊師利佛として、大海佛土なる、唯佛與佛の如是相あり。あるひはこれ釋迦牟尼佛として、唯我知是相、十方佛亦然なる、出現於世あり。これすなはち我及十方佛、乃能知是事と、欲令衆生開示悟入せしむる一時なり。あるひはこれ普賢として、不可思議の功德なる、法華轉を成就し、甚大久遠なる、阿耨多羅三藐三菩提を、閻浮提に流布せしむるに、三艸二木、大小諸樹を能生する地なり、能潤する雨なり。法華轉を所不能知に、盡行成就なるのみなり。普賢の流布いまだをはらざるに、靈山の大會きたる、普賢の往來する、釋尊これを白毫光相と證す。釋迦の佛會いまだなかばにあらざるに、文殊の惟忖すみやかに彌勒に授記する法華轉あり。普賢、諸佛、文殊、大會、ともに初中後善の法華轉を知見波羅蜜なるべし。このゆゑに唯以一大事として出現せるなり。この出現すなはち一大事なるがゆゑに、唯佛與佛、乃能究盡、諸法實相とあるなり。その法かならず一佛乘にして、唯佛さだめて唯佛に究盡せしむるなり。諸佛七佛おのおの諸佛に究盡せしめ、釋迦牟尼佛に成就せしむるなり。西天竺、東震旦にいた

【大唐國廣南東路】以下六祖と法達との因緣。六祖壇經に委說す。

る、十方佛土中なり。三十三祖大鑑禪師にいたるも、すなはち究盡にてある唯佛一乘法なり、唯以のさだめて一大事なる一佛乘法なり。いま出現於世なり、出現於此なり。靑原の佛風いまにつたはれ、南嶽の法門、世に開演する、みな如來實知見なり。まことに唯佛與佛の究盡なり、嫡佛佛嫡の開示悟入なりと法華轉すべし。これを妙法蓮華經ともなづく。教菩薩法なり。これを諸法となづけきたれるゆゑに、法華を國土として、靈山もあり、虛空もあり、大海もあり、大地もあり、これすなはち實相なり、如是なり、法住法位なり、一大事因緣なり、佛之知見なり、世相常住なり、如實なり、如來壽量なり、甚深無量なり、諸行無常なり、法華三昧なり、釋迦牟尼佛なり、轉法華なり、法華轉なり、正法眼藏涅槃妙心なり、現身度生なり、授記作佛なる保任あり、住持あり。

大唐國廣南東路韶州曹谿山寶林寺大鑑禪師の會に、法達といふ僧まゐれりき。みづから稱す、「われ法華經を讀誦することすでに三千部なり。」祖いはく、「たとひ萬部におよぶとも經を得ざらんは、とがをしるにもおよばざらん。」法達いはく、「學人は愚鈍なり、從來ただ文字にまかせて誦念す、いかでか宗趣をあきらめん。」祖いはく、「なんぢ、こころみに一遍を誦すべし、われなんぢがために解說せん。」法達すなはち誦經す。方便品にいたりて、祖いはく、『とどまるべし、この經は、もとより因緣出世を宗旨とせり、たとひ多くの譬喩をとくも、これよりこゆることなし。何者因緣といふに唯一大事なり、唯一大事は即佛知見なり、開示悟入なり。おのづからこれ佛之知見なり、已具知見彼既是佛なり、なんぢいま

【三車】法華譬喩品の三車喩又は火宅喩。羊車を聲聞乘（四諦）に、鹿車を緣覺乘（十二因緣）に、牛車を菩薩乘（六度）に喩ふ。この三車は假にして實にあらず、實は唯一大白牛車、即ち唯有一佛乘のみと。

まさに信ずべし、佛知見者、只汝自心なり。」かさねてしめす偈にいはく、「心迷法華轉、心悟轉法華。誦久不レ明レ己、與レ義作二讐家一。無念念即正、有念念成レ邪。有無俱不レ計、長御二白牛車一。」法達すなはち偈をききてかさねて祖にまうす、「經にいはく、諸大聲聞、乃至菩薩、みな盡思度量するに、佛智はかることあたはず。いま凡夫をしてただ自心をさとらしめんを、すなはち佛之知見となづけん。上根にあらずよりは、疑謗をまぬがれがたし。又經に三車をとくに、大牛車と白牛車と、いかなる區別かあらん、ねがはくは和尚ふたたび宣說をたれんことを。」祖いはく、「經意はあきらかなり、なんぢおのづから迷背す、諸三乘人の佛智をはかることあたはざる患は度量にあるなり、たとひかれら盡思共推すとも、うたた懸遠ならん。佛は本爲凡夫說のみなり、不爲佛說なり。この理を信ずること不肯にして、退席すとも、ことにしらず白牛車に坐しながら、さらに門外にして、三車をもとむることを。經文あきらかになんぢにむかひていふ、無二亦無三と、なんぢいかがさとらざる。三車はこれ假なり、昔時なるがゆゑに。一乘はこれ實なり、今時なるがゆゑに。ただなんぢをして假を去とし、實をば歸とせしむ。歸實するには實も名にあらず。しるべし所有はみな珍寶なり、盡くなんぢに屬す、由汝受用なり、さらに父想ならず、また子想ならず、また用想なしといへども、これを法華經となづくるなり。劫より劫にいたり、晝より夜にいたるに、手不釋卷なれども、誦念にあらざるときなきなり。」法達すでに啓發をかうむりて、踊躍歡喜して、偈を呈し贊じていはく、「經誦三千部、曹谿一句亡。未レ明二出世

旨、寧歌衆生狂、羊鹿牛權説、初中後善揚。誰知火宅内、元是法中王」。この偈を呈するに、祖いはく、「なんぢいまよりは念經僧となづけつべし」。法達禪師の曹谿に參せし因緣かくのごとし、これより法華轉と轉法華との法華は開演するなり、それよりさきはきかず。まことに佛之知見をあきらめんことは、かならず正法眼藏ならん、佛祖なるべし、いたづらに沙石をかぞふる文字の學者は、しるべきにあらずといふことを。いまこの法達の從來にてもみるべし。法華の正宗をあきらめんことは、祖師の開示を唯一大事因緣と究盡すべし、餘乘にとぶらはんとすることなかれ。いま法華轉の實相實性實體實力實因實果の如是なる祖師より以前には、震旦國にいまだきかざるところ、いまだあらざるところなり。いはゆる法華轉といふは、心迷なり、心迷すなはち法華轉なり。しかあればすなはち心迷は法華に轉ぜらるるなり。その宗趣は、心迷たとひ萬像なりとも、如是相は法華に轉ぜらるるなり。この轉ぜらるる、よろこぶべきにあらず、まつべきにあらず、得るにあらず、きたるにあらず。しかあれども法華轉は、すなはち無二亦無三なり。唯有一乘にてあれば、如是相の法華にてあれば、能轉所轉といへども、一佛乘なり、一大事なり、唯以の赤心片片なるのみなり。しかあれば心迷をうらむることなかれ。汝等所行、是菩薩道なり。本行菩薩道の、奉觀於諸佛なり、開示悟入みな各各の法華轉なり。火宅に心迷あり、當門に心迷あり、門外に心迷あり、門內に心迷あり。心迷に門內門外、乃至當門火宅等を現成せるがゆゑに、白牛車のうへにも開示悟入あるべし。この車上の莊校として入を存ぜんと

【常寂光土】常は法身、寂は解脫、光は般若、不遷不變を常と名け、離有離無を寂と名け、照俗照眞を光と名く、卽ち妙覺究竟の果佛所居の土なり、これを釋迦牟尼佛の淨土とす。

【四土】常寂光土、十方無障礙土、方便有餘土、凡聖同居土。

き、露地を所入とや期せん、火宅を所出とや認ぜん。當門は經歷のところなるとのみ究盡すべきか。まさにしるべし、くるまのなかに火宅を開示悟入せしむる轉もあり、露地に火宅を開示悟入せしむる轉もあり、當門の全門に開示悟入を轉ずるあり、普門の一門に開示悟入を轉ずるあり、開示悟入の各各に普門を開示悟入する轉あり、門內に開示悟入を轉ずるあり、門外の開示悟入を轉ずるあり、火宅に露地を開示悟入するあり。このゆゑに火宅も不會なり、露地も不識なり、輪轉三界を、たれかくるまと一乘せん、開示悟入をたれか門なりと出入せん。火宅よりくるまをもとむれば、いくばくの輪轉ぞ、露地より火宅をのぞめば、そこばくの深遠のみなり。露地に靈山を安穩せりやと究盡せん、靈山に露地の平坦なるとや修行せん。衆生所遊樂を我淨土不毀と常在せるをも、審細に本行すべきなり。一心欲見佛は、みづからなりとや參究する、他なりとや參究する。分身と成道せしときあり、全身と成道せしときあり。俱出靈鷲山は、身命を自惜せざるによりてなり。常住此說法なる開示悟入あり、方便現涅槃たる開示悟入あり。而不見の雖近なる、たれか一心の會不會を信ぜざらん、天人常充滿のところは、すなはち釋迦牟尼佛、毘盧遮那佛の國土、常寂光土なり。おのづから四土に具するわれら、すなはち如一の佛土に居するなり。微塵をみるとき法界をみざるにあらず、法界を證するに、微塵を證せざるにあらず。諸佛の法界を證するに、われらを證にあらざらしむるにあらず、その初中後善なり。しかあればいまも證の如是相なり、驚疑怖畏も如是にあらざるなし、ただこれ佛之知見をもて、微塵を

みると、微塵に坐するとのことなるのみなり。法界に坐するとき廣にあらず、微塵に坐するとき狹きにあらざるゆゑは、保任にあらざれば坐すべからず、保任するには廣狹に驚疑なきなり。これ法華の體力を究盡せるによりてなり。しかあればわれらがいまの相性、これ法界に不行すとやせん、微塵に不行すとやせん。驚疑なし、怖畏なし、ただ法華轉の本行なる深遠長遠なるのみなり。この微塵をみると法界をみると、有作有量にあらざるなり、有量有作も法華量をならひ法華作をならふべし。開示悟入をきかんには、欲令衆生ときくべし。いはゆる開佛知見の法華轉なる、示佛知見にならふべし。悟佛知見の法華轉なる、入佛知見にならふべし。示佛知見の法華轉なる、悟佛知見にならふべし。かくのごとく開示悟入の法華轉、おのおの究盡のみちあるべし。おほよそこの諸佛如來の知見波羅蜜は、廣大深遠なる法華轉なり。授記はすなはち自己の開佛知見なり、他のさづくるにあらざる法華轉なり、これすなはち心迷法華轉なり。心悟轉法華といふは、法華を轉ずるといふなり、いはゆる法華のわれらを轉ずるちから究盡するときに、かへりてみづから轉ずる如是力を現成するなり。この現成は、轉法華なり。從來の轉いまもさらにやむことなしといへども、おのづからかへりて法華を轉ずるなり。驢事いまだをはらざれども馬事到來する、出現於世の唯以一大事因緣なり。地涌千界の衆、ひさしき法華の大聖尊なりといへども、みづからに轉ぜられて地涌し、他に轉ぜられて地涌す。地涌のみを轉法華すべからず、虛空涌をも轉法華すべし、地空のみにあらず、法華涌とも佛知すべし、おほよそ法華

の時は、かならず父少而子老なり、子の子にあらざるにはあらず、父の父にあらざるにはあらず、まさに子は老なり、父は少なりとならふべし。世の不信にならふて、おどろくことなかれ、世の不信なるは法華の時なり。これをもて一時佛住を轉法華すべし、開示悟入に轉ぜられて地涌し、佛之知見に轉ぜられて地涌す。この轉法華のとき、法華の心悟あるなり、心悟の法華あるなり。あるひは下方といふ、すなはち空中なり。この下この空、すなはち轉法華なり、すなはち佛壽量なり。佛壽と法華と法界と一心とは、下とも現成し、空とも現成すると轉法華すべし。かるがゆゑに下方空といふは、すなはち轉法華の現成なり。おほよそこのとき法華を轉じて三軸ならしむることあり、法華を轉じて二本ならしむることあり。有覺とまつべきにあらず、無覺とあやしむべきにあらず、自轉して發菩提心なるとき、すなはち南方なり、この成道もとより南方に集會する靈山なり、靈山かならず轉法華なり。虚空に集會する十方佛土あり、これ轉法華の分身なり。すでに十方佛土と轉法華す、一微塵のいるべきところなし。色即是空の轉法華あり、若退若出にあらず。空即是色の轉法華あり、無有生死なるべし。在世といふべきにあらず、滅度のみにあらんや。われに親友なるは、われもかれに親友なり、親友の禮勤わするべからざるゆゑに。髻珠をもあたふ、衣珠をもあたふる時節、よくよく究盡すべし。佛前に寶塔ある轉法華あり、高五百由旬なり。塔中に佛坐する轉法華あり、量二百五十由旬なり。從地涌出住在空中の轉法華あり、心も罣礙なし、色も罣礙なし、從空涌出住在地中の轉法華あり、またこにもさへ

【五百塵點】五百塵點劫、極めて永き時間をいふ。五百千萬億那由他阿僧祇の三千世界を抹して微塵となし其微塵を持して五百千萬億那由他阿僧祇の國土を過ぎて一微塵を下しかくして微塵の盡きたる時今迄經過せしすべての國土を碎きて微塵となし其一塵を一劫として數へたる總數をいふ。

らる、身にもさへらる。塔中に靈山あり。靈山に寶塔あり、寶塔は虛空に寶塔し、虛空は寶塔を虛空す。塔中の古佛は、座を靈山の佛にならべ、靈山のほとけは、證を塔中のほとけに證す。靈山のほとけ、塔中へ證入するには、すなはち靈山の依正ながら、轉法華入するなり、塔中のほとけ、靈山に涌出するには、古佛土ながら、久滅度ながら、涌出するなり。涌出も轉入も、凡夫二乘にならはざれ、轉法華を學すべし。久滅度は、佛土にそなはれる證莊嚴なり、塔中と、佛前と、寶塔と、虛空と、靈山にあらず、法界にあらず、半段にあらず、全界にあらず、是法位のみにかかはれず、非思量なるのみなり。或現佛身而爲說法、或現此身而爲說法なる轉法華あり、或現提婆達多なる轉法華あり、或現退亦住矣なる轉法華あり。合掌瞻仰待、かならず六十小劫とはかることなかれ。一心待の量をつゞめて、しばらく無量劫といふとも、なほこれ不能測佛智なり。待なる一心、いく佛智の量とかせん。この轉法華は、本行菩薩道のみなりと認ずることなかれ。法華一座のところ、今日如來說大乘と轉法華なる功德なり。法華のいまし法華なる不覺不知なれども不識不會なり。しかあれば五百塵點は、しばらく一毛許の轉法華なり、赤心片片の佛壽の開演せらるるなり。おほよそ震旦にこの經つたはれ、轉法華してよりこのかた數百歲、あるいは疏釋を作るともがらままにしげし。又この經によりて上人の法を得るもあれども、いまわれらが高祖曹谿古佛のごとく、法華轉の宗旨を得たるなし、轉法華の宗旨つかふあらず。いまこれをきき、いまこれにあふ、古佛の古佛にあふにあへり、古佛土にあらざらんや。よろこぶ

べし、劫より劫にいたるも法華なり、晝より夜にいたるも法華なり。法華これ從劫至劫なるがゆゑに、法華これ乃晝乃夜なるがゆゑに、たとひ自身心を强弱すとも、さらにこれ法華なり。あらゆる如是は珍寶なり、光明なり、道場なり、廣大甚遠なり、甚大久遠なり、心迷法華轉なり、心悟轉法華なり、實にこれ法華轉法華なり。

心迷法華轉、心悟轉法華、究盡能如是、法華轉法華。かくのごとく、供養恭敬尊重讃歎する、法華是法華なるべし。

正法眼藏法華轉法華

仁治二年辛丑、夏安居日、これをかきて慧達禪人にさづく。これ出家修道を感喜するなり。ただ鬢髪をそる、なほ好事なり、かみをそりまたかみをそる、これ眞出家兒なり。今日の出家は、從來の轉法華の如是力の是如果報なり、いまの法華、かならず法華の法華果あらん。釋迦の法華にあらず、諸佛の法華にあらず、法華の法華なり。ひごろの轉法華は、如是相も不覺不知にかくれり。しかあれども、今の法華、さらに不識不會にあらはる、昔時も出息入息なり、今時も出息入息なり。これを妙難思の法華と保任すべし。

道元記 押華字

觀音導利院興聖寶林寺入宋傳法沙門

嘉元三年乙巳孟春於寶慶寺書寫了

正法眼藏法華轉法華 畢

【仁治二年】前卷に同じ。
【慧達禪人】傳不詳。永平此一卷を授けられし程の人なれば定めて眞實の參學人なりしなるべし。
【入宋】以下奥書最も丁寧を極む。
【嘉元三年】道元禪師滅後五十三年。
【寶慶寺書寫了】義雲禪師正安元年四十七歲を以て寶慶寺に開堂せられ正和三年六十二歲を以て永平寺に晉院せらる。嘉元三年は義雲師五十三歲にして其中間に當る、故に署名無しと雖も義雲禪師の書寫なること明かなり。

【心不可得】金剛經の三世心不可得を以て題號とし、心不可得の宗意を示して德山婆子の相見を勘破す。

【使得十二時】趙州錄に云く、僧問ふ、十二時中如何が用心せん、州云く、諸人は十二時に使はる、老僧は十二時を使得すと。

【德山宣鑒禪師】龍潭崇信禪師に嗣ぐ。簡州の人、姓は周氏。初め金剛經を究め、周金剛王と稱す。南方の禪席を尋ねんとして路上の婆子の一問にあひ答ふる能はず、終に龍潭に投じて紙燭吹滅のところに省あり、後德山精舍に在りて宗風を擧ぐ。唐の咸通六年十二月寂、壽八十六。

【金剛般若經】具には金剛般若波羅蜜經、大般若經第九會に同じ。

正法眼藏心不可得

釋迦牟尼佛言、『過去心不可得、現在心不可得、未來心不可得。』これ佛祖の參究なり。不可得裏に過去現在未來の窟籠を剜來せり、しかあれども自家の窟籠をもちゐきたれり。いはゆる自家といふは、心不可得なり。而今の思量分別は、心不可得なり、使得十二時の渾身これ心不可得なり。佛祖の入室よりこのかた心不可得を會取す、いまだ佛祖の入室あらざれば、心不可得の問取なし、道著なし、見聞せざるなり。經師論師のやから、聲聞緣覺のたぐひ、夢也未見在なり、その驗ちかきにあり。いはゆる德山宣鑒禪師、そのかみ金剛般若經をあきらめたりと自稱す、あるひは周金剛王と自稱す。ことに青龍疏をよくせりと稱す。さらに十二擔の書籍を撰集せり、齊肩の講者なきがごとし。しかあれども文字の法師の末流なり。あるとき南方に嫡嫡相承の無上の佛法あることをききて、いきどほりにたへず、經疏をたづさへて山河をわたりゆく。ちなみに龍潭の信禪師の會にあへり、かの會に投ぜんとおもむく、中路に歇息せり。ときに老婆子きたりあひて、みちのかたはらに歇息せり。ときに鑒講師とふ、『なんぢはこれなに人ぞ。』婆子いはく、『われは賣餠の老婆子なり。』德山いはく、『わがためにもちひをうるべし。』婆子いはく、『和尚もちひをかふてなににかせん。』德山いはく、『もちひをかふて點心にすべし。』婆子いはく、『和尚のそこばくたづ

【青龍疏】宋高僧傳五に云く唐の青龍寺道氤、玄宗の詔を承けて金剛疏四卷を造る、四海風に響ふ青龍寺に於て新疏を講ずるに聽く者千に盈つと。

【龍潭の信禪師】青原下三世天皇道悟禪師に嗣ぐ、諱は崇信、澧陽の龍潭に詣って棲止し盛に宗風を唱ふ。寂年壽不詳。

【點心】食を以て空心(すきはら)に點ずること、小食して心(むね)を鎭む。

【そのゆゑは】以下は道元禪師の批判。

さへてあるはそれなにものぞ。」徳山いはく、「なんぢきかずや、われはこれ周金剛王なり、金剛經に長ぜり、通達せずといふところなし、わがいまたづさへたるは、金剛經の解釋なり。」かくいふをききて、婆子いはく、「老婆に一問あり、和尚これをゆるすやいなや。」徳山いはく、「われいまゆるす、なんぢこころにまかせてとふべし。」婆子いはく、「われかつて金剛經をきくにいはく、「過去心不可得、現在心不可得、未來心不可得」いまいづれの心をかもちひをしていかに點ぜんとかする、和尚もし道得ならんには、もちひをうるべし、和尚もし道不得ならんには、もちひをうるべからず。」徳山ときに茫然として祗對すべきところをおぼえざりき。婆子すなはち拂袖していでぬ。つひにもちひを徳山にうらず。うらむべし數百軸の釋主、數十年の講者、わづかに弊婆の一問をうるに、たちまちに負處に墮して、祗對におよばざること、正師をみると正師に嗣承せると、正法をきけると、いまだ正法をきかず正師をみざると、はるかにことなるによりてかくのごとし。徳山このときはじめていはく、「畫にかけるもちひは、うゑをやむるにあたはず。」と。いまは龍潭に嗣すと稱す。つらつらこの婆子と徳山と相見する因縁をおもへば、徳山のむかしあきらめざることは、いまきこゆるところなり。龍潭をみしよりのちも、なほ婆子を怕却しつべし、なほこれ參學の晩進なり、超證の古佛にあらず。婆子そのとき徳山を杜口せしむとも、實にその人なること、いまださだめがたし。そのゆゑは、心不可得のことばをききては、心うべからず心あるべからずとのみおもひて、かくのごとくとふ、徳山もし丈夫なりせば、婆子を

勘破するちからあらまし、すでに勘破せましかば、婆子まことにその人なる道理もあらはるべし。徳山いまだ徳山ならざれば、婆子その人なることもいまだあらはれず。現在大宋國にある雲衲霞袂、いたづらに徳山の對不得をわらひ、婆子が靈利なることをほむるは、いとはかなかるべし、おろかなるなり。そのゆゑは、婆子を疑著するゆゑなきにあらず、いはゆるそのちなみ徳山道不得ならんに、婆子なんぞ徳山にむかふていはざる、和尚いま道不得なり、さらに老婆にとふべし、老婆かへりて和尚のためにいふべし、かくのごとくいひて、徳山の問をえて徳山にむかふていふこと、道是ならば婆子まことにその人なりといふことあらはるべし。問著たとひありとも、いまだ道處あらず、むかしよりいまだ一語をも道著せざるを、その人といふことといまだあらず。いたづらなる自稱の始終、その益なき、徳山のむかしにてみるべし。いまだ道處なきものをゆるすべからざること、婆子にてしるべし。こころみに徳山にかはりていふべし、婆子まさしく恁麼問著せんに、徳山すなはち婆子にむかひていふべし、「恁麼則儞莫與吾賣餠。」もし徳山かくのごとくいはましかば、靈利の參學ならん。婆子もし徳山とはん、「現在心不可得、過去心不可得、未來心不可得、いまもちひをしていづれの心をか點ぜんとかする。」かくのごとくとはんに婆子すなはち徳山にむかふていふべし、「和尚はただもちひの心を點ずべからずとのみしりて、心のもちひを點ずることをしらず、心の心を點ずることをもしらず。」恁麼いはんに、徳山さだめて擬議すべし。當恁麼時、もちひ三枚を拈じて、徳山に度與すべし、徳山とら

【そでのなかに蜂】拂袖して去る所に何等の力量機鋒なきをいふ。

【吹滅紙燭をみる】傳燈卷十五に云く因に龍潭禪師に造る問答皆一語のみ、師(德山)卽時に辭し去る、龍潭之を留む、一夕室外に於て默坐、龍問ふ何ぞ歸り來らざる、對へて云く黑し、龍乃ち燭を點じて師に與ふ師接せんと擬す、龍便ち吹滅す、師乃ち禮拜す、龍云く什麽をか見る、云く今日より向去天下老和尙の舌頭を疑はずと。

【仁治二年】以下皆前例に倣ふ。

【後心不可得】心不可得卷と殆ど同時の撰にして示衆と書との異あるのみ。何れか艸本又

んと擬せんとき、婆子いふべし「過去心不可得、現在心不可得、未來心不可得。」もしまた德山展手擬取せずば、一餅を拈じて德山をうちて、いふべし「無魂屍子、儞莫茫然。」かくのごとくいはんに、德山いふことあらばよし、いふことなからんには婆子さらに德山のためにいふべし、ただ拂袖してさる、そでのなかに蜂ありともおぼえず。德山もわれはいふことあたはず、老婆わがためにいふべしともいはず、しかあればいふべきをいはざるのみにあらず、とふべきをもとはず。あはれむべし婆子德山、過去心、現在心、問著道著、未來心不可得なるのみあり。おほよそ德山それよりのちもさせる發明ありともみえず、ただあらあらしき造次のみなり。ひさしく龍潭にとぶらひせば、頭角觸折することもあらまし、頷珠を正傳する時節にもあはまし。わづかに吹滅紙燭をみる、傳燈に不足なり。しかあれば參學の雲水、かならず勤學なるべし、容易にせしは不是なり、勤學なりしは佛祖なり。おほよそ心不可得とは、畫餅一枚を買弄して、一口に咬著嚼著するをいふ。

爾時仁治二年辛丑夏安居于雍州宇治郡觀音導利興聖寶林寺示衆

正法眼藏心不可得　畢

正法眼藏後心不可得

心不可得は、諸佛なり、みづから阿耨多羅三藐三菩提と保任しきたれり。

は複本にてもありしならん。後日に發見せられし巻に後の字を加へしだけにして、いづれを前後とも定め難し。此巻には大證國師と大耳三藏との他心通に就いての批判精細を極む、是れ前巻に全く無きところとす。然共是亦第八十巻の他心通と殆ど同一なり、考ふべし。

金剛經曰、『過去心不可得、現在心不可得、未來心不可得。』これすなはち諸佛なる心不可得の保任の現成せるなり。三界心不可得なり、諸法心不可得なりと保任しきたれるなり。これをあきらむる保任は、諸佛にならはざれば、證取せず、諸祖にならはざれば、正傳せざるなり。諸佛にならふといふは、丈六身にならひ、一莖艸にならふなり。諸祖にならふといふは、皮肉骨髓にならひ、破顏微笑にならふなり。この宗旨は、正法眼藏あきらかに正傳しきたりて、佛佛祖祖の心印、まさに直指なること嫡嫡單傳せるにとぶらひならふにかならずその骨髓面目つたはれ、身體髮膚うくるなり。佛道をならはず、祖室にいらざらんは、見聞せず會取せず、問取の法におよばず、道取の分ゆめにもいまだみざるところなり、徳山のそのかみ不丈夫なりしとき、金剛經に長ぜりき、ときの人これを周金剛王と稱しき、百餘家のなかに王なり。ことに青龍の疏をよくせるのみにあらず、さらに十二擔の書籍を釋集せり、齊肩の講者あることなし。ちなみに南方に無上道の嫡嫡相承せるありとききて、書をたづさへて山川をわたりゆく、龍潭にいたらんとするみちのひだりに歇息するに、婆子きたりあふ。徳山とふ、『なんぢはこれなにびとぞ。』婆子いはく、『われはもちひうる老婆なり。』徳山いはく、『わがためにもちひをうるべし。』婆子いはく、『和尚かふてなにかせん。』徳山いはく、『もちひをかふて點心にすべし。』婆子いはく、『和尚のそこばくたづさへてあるは、これなにものぞ。』徳山いはく、『汝きかずやわれこれ周金剛王なり、金剛經に長ぜり、通達せずといふところなし、このたづさへてあるは、金剛經の解釋なり。』これを

きゝて、婆子いはく、「老婆に一問あり、和尚これをゆるすやいなや。」徳山いはく、「ゆるす、なんぢがこころにまかせてとふべし。」いはく、「われかつて金剛經をきくにいはく、「過去心不可得、現在心不可得、未來心不可得」いまもちひをしていづれの心をか點ぜんとする、和尚もし道得ならんには、もちひをうるべし、和尚もし道不得ならんには、もちひをうるべからず。」徳山ときに茫然として祗對すべきことをえざりき、婆子すなはち拂袖して出ぬ、つひにもちひを徳山にうらず。うらむべし數百軸の釋主、數十年の講者、わづかに弊婆の一問をうるに、すみやかに負處におちぬること、師承あると師承なきと、正師の室にとぶらふと正師の室にいらざると、はるかにことなるによりてかくのごとし。不可得の言をきゝては、彼此ともにおなじくうることあるべからずとのみ解せり、さらに活路なし。またうべからずといふは、もとよりそなはれるゆゑにいふなんどおもふひともあり、これらいかにもあたらぬことゝなり。徳山、このときはじめて畫にかけるもちひは、うゑをやむるにあたはずとしり、また佛道修行には、かならずそのひとにあふべきとおもひしりき。またいたづらに經書にのみかかはれるがまことのちからをうべからざることをもおもひしりき。つひに龍潭に參じて、師資のみち見成せしより、まさにそのひとなりき。いまは雲門法眼の高祖なるのみにあらず、人中天上の導師なり、この因縁をおもふに、徳山むかしあきらめざることはいまみゆるところなり。婆子いま徳山を杜口せしむればとても、實にそのひとにてあらんこともさだめがたし。しばらく心不可得のことばをきゝて、心あるべ

ありしかば、かんがふるちからもありなまし。かんがふることあらば、婆子がそのひとにてありけることもきこゆべかりしかども、德山の德山にてあらざりしときにてあれば、婆子がそのひとなることもいまだしられずみえざるなり。またいま婆子を疑著すること、ゆゑなきにあらず。德山道不得ならんに、などか德山にむかふていはざる、和尙いま道不得なり、さらに老婆にとふべし、老婆かへりて和尙のためにいふべし、と。このとき德山の問をえて、德山にむかひていふことありせば、老婆がまことにてあるちからもあらはれぬべし。かくのごとく古人の骨髓も、面目も、古佛の光明も、現瑞も、同參の功夫ありて、德山をも、婆子をも、不可得をも、可得をも、餅をも、心をも、把定にわづらはざるのみにあらず、放行にもわづらはざるなり。いはゆる佛心はこれ三世なり、心と三世とあひへだたること、毫釐にあらずといへども、あひはなれあひさることを論ずるには、すなはち十萬八千よりもあまれる深遠なり。いかにあらんかこれ過去心といはばかれにむかひていふべし。これ不可得と。いかにあらんかこれ現在心といはば、かれにむかひていふべし、これ不可得と。いかにあらんかこれ未來心といはば、かれにむかひていふべし。これ不可得と。いはくのこころは心をしばらく不可得となづくる心ありとはいはず、しばらく不可得なりといふ、心うべからずとはいはず、ひとへに不可得といふ。心うべしとはいはず、ひとへに不可得といふなり。またいかなるか過去心不可得といはば、生死去來といふべし。

【應無所住而生其心】金剛經の文。
【大證國師】南陽の慧忠禪師
【大耳三藏】傳燈卷五に、西天大耳三藏、京に到り、他心慧眼を得、帝勅して國師をして試驗せしむる由を載す、傳記を揭げず
【他心通】六通の第三、六通は衆生の心中念ふところを知る通力。
【肅宗皇帝】唐の第七代、大證國師に歸依す。

いかなるか現在心不可得といはば、生死去來といふべし。いかなるか未來心不可得といはば、生死去來といふべし。おほよそ牆壁瓦礫にてある佛心あり、三世諸佛、ともにこれを不可得にてありと證す。佛心にてある牆壁瓦礫のみあり、諸佛三世にこれを不可得なりと證す。いはんや山河大地にてある、不可得のみづからにてあるあり。艸木風水なる不可得のすなはち心なるあり、また應無所住而生其心の不可得なるあり、また十方諸佛の一代の代にて八萬法門をとく、不可得の心、それかくのごとし。

また大證國師のとき、大耳三藏はるかに西天より到京せり、他心通をえたりと稱す。唐の肅宗皇帝、ちなみに國師に命じて試驗せしむるに、三藏わづかに國師をみて、すみやかに禮拜して右にたつ。國師つひにとふ、「なんぢ他心通をえたりやいなや。」三藏まうす、「不敢。」と。國師いはく、「なんぢいふべし老僧いまいづれのところにかある。」三藏まうす、「和尚はこれ一國の師なり、なんぞ西川にゆきて競渡のふねをみる。」國師やゝひさしくして再問す、「なんぢいふべし老僧いまいづれのところにかある。」三藏まうす、「和尚はこれ一國の師なりなんぞ天津橋上にゆきて猢猻を弄するをみる。」國師またとふなんぢいふべし、『老僧いまいづれのところにかある。』三藏ややひさしくあれどもしることなしみるところなし。國師ちなみに叱していはく、「這野狐精、なんぢが他心通いづれのところにかある。」三藏また祗對なし。かくのごとくのことしらざればあしし、きかざればあやしみぬべし。佛祖と三藏と、ひとしかるべからず、天地懸隔なり。佛祖は佛法をあきらめてあり、三藏

はいまだあきらめず。まことにそれ、三藏は在俗も三藏なることあり、たとへば文華にところをえたらんがことし。しかあればひろく竺漢の言音をあきらめてあるのみにあらず、他心通をも修得せりといへども、佛道の身心におきてはゆめにもいまだみざるゆゑに、佛祖の位に證せる國師にまみゆるには、すなはち勘破せらるるなり。いはゆる佛道に心をならふには、萬法即心なり、三界唯心なり、唯心これ唯心なるべし、是佛即心なるべし。たとひ自なりともたとひ他なりとも、佛道の心をあやまらざるべし、いたづらに西川に流落すべからず、天津橋におもひわたるべからず。佛道の身心を保任すべくば、佛道の智通を學習すべし。いはゆる佛道には盡地みな心なり、起滅にあらたまらず、盡法みな心なり、盡心を智通とも學すべし。三藏すでにこれをみず、野狐精のみなり。しかあれば以前兩度もいまだ國師の心をみず、國師の心に通ずることなし。いたづらなる西川と天津と競渡と獼猴とのみにたはぶるる野狐子なり、いかにしてか國師をみん、また國師の在處をみるべからざる道理あきらけし。老僧いまいづれのところにかあるとみたびとふに、このことばをきかず、もしきくことあらば、たづぬべし、きかざれば蹉過するなり。三藏もし佛法をならふことありとせば、國師のことばをきかまし、國師の身心をみることあらまし、ひごろ佛法をならはざるがゆゑに、人中天上の導師にうまれあふといへども、いたづらにすぎぬるなり、あはれむべしなかしむべし。おほよそ三藏の學者、いかでか佛祖の行履におよばん、國師の邊際をしらん。いはんや西天の論師、および竺乾の三藏、たえて國師の行履

【補處】補處の菩薩、等覺の位ありて佛化導を補く。【趙州】趙州從諗禪師。【玄沙】玄沙師備禪師。【海會端】海會守端禪師、白雲の守端ともいふ、揚岐方會禪師に嗣ぐ。宋の神宗熙寧五年寂、壽四十八。【雪竇顯】雪竇重顯禪師、字は隱之智門光祚禪師に嗣ぐ。雪竇山資聖寺に住して開法、三十餘七十餘員の龍象を打出す。百則の頌古を作、圜悟評唱して碧巖集と稱す。宋仁宗皇祐四年六月寂、壽七十三。明覺大師と諡號す。【仰山】仰山慧寂禪師。【興聖】道元禪師自身のこと。興聖寺在住中の故に。

をしるべからず。三藏のしらんことは、天帝もしるべし、論師もしるべし、論師天帝しらんこと、補處の智力およばざらんや、十聖三賢もおよばざらんや。國師の身心は、天帝もしるべからず、補處もいまだあきらめざるなり、身心を佛家に論ずることかくのごとし、しるべし信ずべし。わが大師釋尊の法、いまだ二乘外道等の野狐精にはおなじからざるなり。しかあるにこの一段の因縁、ふるくより諸代の尊宿、おのおの參究するにその話のこれり。「僧ありて趙州にとふ、『三藏なにとしてか第三度に國師の所在をみざる。』趙州いはく、『國師在二三藏鼻孔上一、所以不レ見。』また僧ありて玄沙にとふ、『既在二鼻孔上一、爲レ甚不レ見。』玄沙いはく、『只爲二太近一。』海會端いはく、『國師若在二三藏鼻孔上一、有二什麼難レ見、殊不レ知國師在二三藏眼睛裏一。』また玄沙、三藏を徴していはく、『汝道前兩度還見麼。』雪竇顯いはく、『敗也敗也。』また僧ありて仰山にとふ、『第三度なにとしてか三藏やゝひさしくあれども國師の所在をみざる。』仰山いはく、『前兩度是涉境心、後入二自受用三昧一、所以不レ見。』この五位の尊宿、ともに諦當なれども、國師の行履は蹉過せり、いはゆる第三度しらずとのみ論じて、前兩度はしれりとゆるすににたり、これすなはち古先の蹉過するところなり、晩進のしるべきところなり。興聖いま五位の尊宿を疑著すること、兩般あり、一にはいはく、國師の三藏を試驗する意趣をしらず、二にはいはく、國師の身心をしらず。しばらく國師の三藏を試驗する意趣をしらずといふは、第一番に國師いはく、『汝道老僧即今在二什麼處一』といふこころは、三藏もし佛法をしれりや、いまだしらずやと試問するとき、三藏もし

佛法をきくことあらば、老僧即今在二什麼處一ときくことばを、佛法にならふべきなり。佛法にならふといふは、國師の老僧いまいづれのところにかあるといふは、這邊にあるか、那邊にあるか、無上菩提にあるか、般若波羅蜜にあるか、空にかかれるか、地にたてるか、艸菴にあるか、寶所にあるかととふなり。三藏このこころをしらず、いたづらに凡夫二乘等の見解をたてまつる。國師かさねてとふ、「汝道老僧即今在二什麼處一」。ここに三藏さらにいたづらのことばをたてまつる。國師かさねてとふ、「汝道老僧即今在二什麼處一」ときに三藏ややひさしくあれどもものいはず、こころ茫然なり。ちなみに國師すなはち三藏を叱していはく、「這野狐精、他心通在二甚麼處一」とかくいふに、三藏なほいふことなし。つらつらこの因緣をおもふに、古先ともにおもはくは、いま國師の三藏を叱すること、前兩度は國師の所在をしろといへども、第三度しらざるがゆゑに叱するなりと。しかにはあらず、おほよそ三藏の野狐精のみにして、佛法は夢也未見在なることを叱するなり、前兩度はしれり、第三度はしらざるといはぬなり。叱するは總じて三藏を叱するなり、國師のこころは、まづ佛法に他心通といふことありやいなやともおもふ。またたとひ他心通といふとも、他も佛道にならふ他を擧すべし、心も佛道にならふ心を擧すべし、通も佛道にならふ通を擧すべきに、いま三藏いふところは、かつて佛道にならふところにあらず、いかでか佛法といはんと國師はおもふなり。試驗すといふは、たとひ第三度いふところありとも、前兩度のごとくならば、佛法の道理にあらず、國師の本意にあらざれば、叱すべきなり。三度問著する

は、三藏もし國師のことばをきくことやあると、かさねて問著するなり。二には、國師の身心をしらずといふは、いはゆる國師の身心は、三藏のしるべきにあらず通ずべきにあらず、十聖三賢およばず、補處等覺のあきらむるにあらず、凡夫三藏いかでかしらんと、この道理、あきらかに決定すべし。國師の身心は、三藏もしるべしおよぶべしと擬するは、おのれすでに國師の身心をしらざるによりてなり。他心通をえんともがら、國師をしるべしといはば、二乘さらに國師をしるべきか。しかあるべからず、二乘人は、たえて國師の邊際におよぶべからざるなり。いま大乘經をよむ二乘人おほし、かれらも國師の身心をしるべからず、また佛法の身心、ゆめにもみるべからざるなり。たとひ大乘經を讀誦するにたれども、またくかれは小乘人なりとあきらかにしるべし。おほよそ國師の身心は神通修證をうるともがらのしるべきにあらざるなり。國師の身心は、國師なほはかりがたからん、ゆゑはいかん、行履ひさしく作佛を圖せず、ゆゑに佛眼も覰不見なり、去就はるかに窠窟を脫落せり、籠羅の拘牽すべきにあらざるなり。いま五位の尊宿、ともに勘破すべし。趙州いはく、『國師は三藏の鼻孔上にあるゆゑにみず。』この話なにとかいふ、本をあきらめずして末をいふには、かくのごとくのあやまりあり。國師いかにしてか三藏の鼻孔上にあらん、三藏いまだ鼻孔なし、また國師と三藏と、あひみるよりあるにあひにたれども、あひちかづくみちなし、明眼はまさに辨肯すべし。』玄沙いはく、『只爲ニ太近。』まことに太近はさもあらばあれ、あたりにはあたらず。いかなるをか太近といふ、なにをか太

【小釋迦のほまれ】會元卷九に云く、梵師あり空より至る。師(仰山)云く、近離何の處ぞ。云く、西天。師云く、幾時か彼處を離る。云く、今早なり。師云く、太だ遲し。云く、遊山翫水。師云く、神通遊戲は則ち無きにあらず、佛法は須らく老僧に還して始めて得べし、云く、特に東土に來つて文殊を禮せんとして却つて小釋迦に遇へりと。これより仰山、東土の小釋迦の譽を得たり

近と擧する。玄沙いまだ太近をしらず、太近を參せず、佛法においては遠之遠矣。仰山いはく、「前兩度涉境心、後入二自受用三昧一、所以不レ見」これ小釋迦のほまれ西天にたかくひびくといへども、この不是なきにあらず。祖見のところはかならず涉境なりといはば、佛祖出見のところなきがごとし。授記作佛の功德ならはざるににたり。前兩度は實に三藏よく國師の所在をしれりといふ、國師の一毛の功德をしらずといふべし。玄沙の徵にいはく、「前兩度還見麼」この還見麼の一句、いふべきをいふににたりといへども、見如不見といはんとす、ゆゑに是にあらず。これをききて、雪竇明覺禪師いはく、「敗也敗也」これ玄沙の道を道とするとき、しかいふべし、道にあらずとせんとき、しかいふべからず。海會端いはく、「國師若在二三藏鼻孔上一、有二什麼難一レ見、殊不レ知國師在二三藏眼睛裏一」これまた第三度を論ずるなり、前兩度もみざることを呵すべきを呵せず、いかんが國師の鼻孔上にあり、眼睛裏にありともしらん。五位尊宿、いづれも國師の功德にくらし、佛法の辨道ちからなきににたり、しるべし國師はすなはち一代の佛なり、佛正法眼藏あきらかに正傳せり。小乘の三藏論師等さらに國師の邊際をしらざる、その證これなり。他心通といふこと小乘のいふがごときは、他念通といひぬべし。小乘三藏の他心通のちから、國師の一毛端をも半毛端をもしるべしとおもへるはあやまりなり。小乘の三藏、すべて國師の功德の所在、みるべからずと、一向ならふべきなり。たとひもし國師さきの兩度は所在をしらるといへども、第三度にしらざらんは、三分に兩分の能あらん、叱すべきにあらず、たとひ叱

【仁治二年】　前卷
委說。

すとも全分劇闕にあらず、これを叱せんたれか國師を信ぜん。意趣は、三藏すべていまだ佛法の身心あらざることを叱せしなり。五位の尊宿、すべて國師の行李をしらざるにより て、かくのごとくの不是あり。このゆゑにいま佛道の心不可得をきかしむるなり。この一法を通ずることとえざらんともがら、自餘の法を通ぜりといはんこと信じがたしといへども古先もかくのごとく將錯就錯ありとしるべし。あるとき、僧ありて國師にとふ、『いかにあらんかこれ古佛心。』國師いはく、『牆壁瓦礫。』これも心不可得なり。あるとき僧ありて國師にとふ、『いかにあらんかこれ諸佛常住心。』國師いはく、『幸遇老僧參內。』これも不可得の心を參究するなり。天帝釋あるとき國師にとふ、『いかにしてか有爲を解脫せん。』國師いはく、『天子修道して有爲を解脫すべし。』天帝釋かさねてとふ、『いかならんかこれ道。』國師いはく、『造次心是道。』天帝釋いはく、『いかならんかこれ造次心。』國師ゆびをもてさしていはく、『這箇是般若臺、那箇是眞珠網。』天帝釋禮拜す。おほよそ佛道に身心を談ずること佛佛祖祖の會におほし、ともにこれを參學せんことは、凡夫賢聖の念慮知覺にあらず、心不可得を參究すべし。

仁治二年辛丑夏安居日書于興聖寶林寺

正法眼藏後心不可得　畢

【古鏡】雪峰眞覺大師の示衆に要會此事我這裏如一面古鏡相似胡來胡現漢來漢現の語より古鏡の題出づ。圓鑑、明鏡、圓鏡、靈鑑、寶鏡皆意同じ。一枚の般若を云ふ。古は古今の古に非ず無始無修常住一如の古、鏡は一切諸法を照して毫帯も私なし即ち大圓鏡智とも般若の光明とも寶鏡三昧とも光明藏三昧とも稱すべし古鏡の佛法を開演す

【伽耶舍多】西天付法藏の第十八祖法を僧伽難提尊者に嗣ぐ。

正法眼藏古鏡

諸佛諸祖の受持し單傳するは、古鏡なり。同見同面なり、同像同鑄なり。同參同證す、胡來胡現、十萬八千、漢來漢現、一念萬年なり。古來古現し、今來今現し、佛來佛現、祖來祖現するなり。

第十八祖伽耶舍多尊者は、西域の摩提國の人なり。姓は鬱頭藍、父名天蓋、母名方聖。母氏かつて夢みるにいはく、ひとりの大神おほきなるかがみを持してむかへりと、ちなみに懷胎す。七日ありて師をうめり、師はじめて生せるに、肌體みがける瑠璃のごとし、いまだかつて洗沐せざるに、自然に香潔なり。いとけなくより閑靜をこのむ、言語よのつねの童子にことなり、うまれしより一の淨明の圓鑑おのづから同生せり、圓鑑とは圓鏡なり、奇代の事なり。同生せりといふは、圓鑑も母氏の胎よりうめるにはあらず、師は胎生す、師の出胎する同時に、圓鑑きたりて天眞として師のほとりに現前して、ひごろの調度のごとくありしなり。この圓鑑、その儀よのつねにあらず、童子むかひきたるには、圓鑑を兩手にささげたるがごとし、しかあれども童面かくれず。童子さりゆくには圓鑑をおほふてさりゆくがごとし、しかあれども童身かくれず、童子睡眠するときは、圓鑑そのうへにおほふ、たとへば華蓋のごとし。童子端坐のときは、圓鑑その面前にあり、おほよそ動

【希夷】老子經に云く、之を視て見ざるを名けて夷と曰ひ、之を聽いて聞かざるを名けて希と曰ふと。見聞の及ばざるを云ふ。

容進止にあひしたがふなり。しかのみにあらず古來今の佛事、ことごとくこの圓鑑にむかひてみることをう。また天上人間の衆事諸法、みな圓鑑にうかみてくもれるところなし。たとへば經書にむかひて照古照今をうるよりも、この圓鑑よりみるはあきらかなり。しかあるに童子すでに出家受戒するとき、圓鑑これより現前せず、このゆゑに近里遠方おなじく奇妙なりと讃歎す。まことにこの娑婆世界に、比類すくなしといふとも、さらに他那裏に親族のかくのごとくなる種胤あらんことを莫怪なるべし、遠慮すべし。まさにしるべし若樹若石に化せる經卷あり、若田若里に流布する知識あり、かれも圓鑑なるべし。いまの黄紙朱軸は圓鑑なり、たれか師をひとへに希夷なりとおもはん。あるとき出遊するに、僧伽難提尊者にあふて、直にすすみて難提尊者の前にいたる。尊者とふ、「汝が手中なるはまさに何の所表かある。」「有何所表」を問著にあらずとききて參學すべし。師いはく、「諸佛大圓鑑、内外無瑕翳、兩人同得見、心眼皆相似。」しかあれば諸佛大圓鑑、なにとしてか師と同生せる、師の生來は大圓鑑の明なり。諸佛は、この圓鑑に同參同見なり、諸佛は、大圓鑑の鑄像なり。大圓鑑は、智にあらず理にあらず、性にあらず相にあらず、十聖三賢等の法のなかにも大圓鏡の名あれども、いまの諸佛の大圓鑑にあらず。諸佛かならずしも智にあらざるがゆゑに、諸佛に智慧あり。智慧を諸佛とせるにあらず、參學しるべし、智を說著するは、いまだ佛道の究竟說にあらざるなり。すでに諸佛大圓鑑、たとひわれと同生せりと見聞すといふとも、さらに道理あり。いはゆるこの大圓鑑、この生に接すべから

【依報正報】器世間即ち山河大地衣服飲食等有情の所依となる果報を依報といひ、有情世間即ち有情の身體を正しく受くる果報を正報といふ。

【道眼被眼礙】法眼禪師磐非の公案衆眼の通ぜざるは砂に塞がる、道眼通ぜざるは何の礙ゆる處ぞ、師云く道眼の通ぜざるは眼に礙へらると。

【菩提本無樹】傳燈卷三五祖章に委説す。

ず、他生に接すべからず。玉鏡にあらず。銅鏡にあらず、肉鏡にあらず、髓鏡にあらず。圓鑑の言偈なるか、童子の説偈なるか。童子この四句の偈をとくとも、かつて人に學習せるにあらず、かつて或從經卷にあらず、かつて或從知識にあらず、圓鑑をささげてかくのごとくなり。師の幼稚のときよりかがみにむかふの常儀とせるのみなり、生知の辯慧あるがごとし。大圓鑑の童子と同生せるか、童子の大圓鑑と同生せるか、まさに前後生もあるべし。大圓鑑はすなはち諸佛の功德なり。このかがみ、内外にくもりなしといふは、外にまつ内にあらず、内にくもれる外にあらず。面背あることなし、兩箇おなじく得見あり。心と眼とあひにたり、相似といふは、人の人にあふなり。たとひ内の形像も、心眼あり、同得見あり、たとひ外の形像も、心眼あり、同得見あり。いま現前せる依報正報、ともに内に相似なり外に相似なり、われにあらずたれにあらず、これは兩人の相見なり、兩人相似なり。かれもわれといふ、われもかれとなる、心と眼と皆相似といふは、心は心に相似なり、眼は眼に相似なり、相似は心眼なり、たとへば心眼各相似といはんがごとし。いかならんかこれ心の心に相似せる、いはゆる三祖六祖なり。いかならんかこれ眼の眼に相似なる、いはゆる道眼被眼礙なり。いま師の道得する宗旨かくのごとし、これはじめて僧伽難提尊者に奉覲する本由なり。この宗旨を擧拈して、大圓鑑の佛面祖面を參學すべし、古鏡の眷屬なり。第三十三祖大鑑禪師、かつて黃梅山の法席に功夫せしとき、壁書して祖師に呈する偈にいはく、「菩提本無レ樹、明鏡亦非レ臺、本來無一物、何處有ニ塵埃。」しかあればこ

【稽首曹溪眞古佛】圓悟錄中に出づ。

【如鏡鑄像】傳燈南嶽章に出づ、小異あり。

【要會此事】傳燈卷十八、會元七玄沙章に出づ、大同小異。

の道取を學取すべし。大鑑高祖、よの人これを古佛といふ。圜悟禪師いはく、「稽首曹谿眞古佛。」しかあればしるべし大鑑高祖の明鏡をしめす、本來無一物何處有塵埃なり。明鏡非臺これ命脈あり、功夫すべし。明明はみな明鏡なり、かるがゆゑに明頭來明頭打といふ、いづれのところにあらざればいづれのところなし。いはんやかがみにあらざる一塵の盡十方界にのこれらんや、かがみにあらざる一塵のかがみのこらんや。しるべし盡界は塵刹にあらざるなり、ゆゑに古鏡面なり。

南嶽大慧禪師の會に、ある僧とふ、「如鏡鑄像、光歸何處。」師云、「大德、未出家時相貌、向甚麼處去。」僧曰、「成後爲甚麼不鑑照。」師云、「雖不鑑照、瞞他一點也不得。」いまこの萬像はなにものとあきらめざるに、たづぬれば鏡の鑄成せる證明、すなはち師の道にあり、鏡は金にあらず玉にあらず明にあらず像にあらずといへども、たちまち鑄像なる、まことに鏡の究辦なり。光歸何處は、如鏡鑄像の如鏡鑄像なる道取なり。たとへば像歸像處なり、鑄能鑄鏡なり、大德、未出家時相貌向甚麼處去といふは、鏡をさげて照面するなり。このときいづれの面面かすなはち自己面ならん。師云、「雖不鑑照、瞞他一點也不得」といふは、鑑照不得なり、瞞他不得なり、海枯不到露底を參學すべし。莫打破莫動著なり、しかありといへどもさらに參學すべし、拈像鑄鏡の道理あり、當恁麼時は、百千萬の鑑照にて、瞞瞞點點なり。

雪峯眞覺大師あるとき衆にしめすにいはく、「要會此事、我這裏如一面古鏡相似、

【十二面鏡】事物紀原八云く黄帝內傳に云ふ帝既に王母と王屋に會し乃ち十二面の大鏡を鑄、月に隨つて之を用ふ。

【黄帝膝行】莊子有宥篇の文、小異あり。

胡來胡現、漢來漢現』時、玄沙出問、『忽遇二明鏡來一時如何。』師云、『胡漢俱隱。』玄沙曰、『某甲即不レ然。』峯云、『儞作麼生。』玄沙曰、『請和尚問。』峯云、『忽遇二明鏡來一時如何。』玄沙曰、『百雜碎。』しばらく雪峯道の此事といふは、是什麼事と參學すべし、しばらく雪峯の古鏡をならひみるべし。如一面古鏡の道は、一面とは、邊際ながく斷じて、內外さらにあらざるなり、一珠走盤の自己なり。いま胡來胡現は、一隻の赤鬚なり、漢來漢現は、この漢は、混沌よりこのかた、盤古よりのち、三才五才の現成せるといひきたれるに、いま雪峯の道には、古鏡の功德の漢現せり。いまの漢は漢にあらざるがゆゑに、すなはち漢現なり。いま雪峯道の胡漢俱隱、さらにいふべし鏡也自隱なるべし。玄沙道の百雜碎は、道也須是恁麼道なりとも、比來責儞還吾碎片來、如何還我明鏡來なり。黄帝のとき十二面の鏡あり。家訓にいはく天授なり。また廣成子の崆峒山にて與授せりけるともいふ。その十二面のもちゐる儀は、十二時に、時時に一面をもちゐる、また十二月に毎月毎面にもちゐる、十二年に年年面面にもちゐる。いはく鏡は、廣成子の經典なり、黄帝に傳授するに、十二時等は鏡なり、これより照古照今するなり。十二時もし鏡にあらずよりは、いかでか照古あらん、十二時もし鏡にあらずば、いかでか照今あらん。いはゆる十二時は、十二面なり、十二面は十二鏡なり、古今は十二時の所使なり、この道理を指示するなり。これ俗の道取なりといへども、漢現の十二時中なり。軒轅黄帝膝行進二崆峒一問二道乎廣成子一、于レ時廣成子曰、『鏡是陰陽本、治身長久、自有二三鏡一、曰天、曰地、曰人、此鏡、無視無聽、抱レ神

【魏徵、房玄齡】唐太宗の股肱の臣資治通鑑等に詳し

【太宗の人を鏡】貞觀政要に云く唐の太宗云く銅を以て鏡と爲さば衣冠を正すべし、古を以て鏡と爲さば興替を知るべし、人を以て鏡と爲さば得失を明らむべしと。

【五嶽四瀆】泰（東）、霍（南）、華（西）、恒（北）、嵩（中）の五嶽、江、河、淮、濟の四瀆、禮記に云く五嶽は三公を視、四瀆は諸侯を視ると

【日本國自神代】日本書紀神代卷に詳出

以₂靜₁形將₂自正₁、必靜必淸、無ㇾ勞₂汝形₁、無ㇾ搖₂汝精₁、乃可₂以長生₁。むかしはこの三鏡をもちて、天下を治し。大道を治す。この大道にあきらかなるを、天地の主とするなり。俗のいはく、太宗は人をかがみとせり、安危理亂これによりて照悉するといふ。三鏡のひとつをもちゐるなり。人を鏡とするときゝては、博覽ならん人に古今を問取せば、聖賢の用舍をしりぬべし、たとへば魏徵をえしがごとく房玄齡をえしがごとしとおもふ。これをかくのごとく會取するは、太宗の人を鏡とすると道取する道理にはあらざるなり。人を鏡とするといふは、鏡を鏡とするなり、自己を鏡とするなり、五行を鏡とするなり、五常を鏡とするなり。人物の去來をみるに、來無迹去無方を人鏡の道理といふ。賢不肖の萬般なる、天象に相似なり、まことに經緯なるべし。人面鏡面日面月面なり。五嶽の精、および四瀆の精、世をへて四海をすます、これ鏡の慣習なり。人物をあきらめて經緯をはかるを、太宗の道といふなり、博覽人をいふにあらざるなり。日本國自₂神代₁有₂三鏡₁、璽之與ㇾ劍而共傳來至ㇾ今、一枚在₂伊勢太神宮₁、一枚在₂紀伊國日前社₁、一枚在₂內裏內侍所₁。しかあればすなはち國家みな鏡を傳持することあきらかなり、鏡をえたるは國をえたるなり。人つたふらくは、この三枚の鏡は、神位とおなじく傳來せり、天神より傳來せりと相傳す。しかあれば百練の銅も陰陽の化成なり。今來今現、古來古現ならん。これ古今を照臨するは、古鏡なるべし。雪峯の宗旨は、新羅來新羅現、日本來日本現ともいふべし、天來天現、人來人現ともいふべし。現來をかくのごとく參學すといふとも、この現、いまわれらが

本末をしれるにあらず、ただ現を相見するのみなり。かならずしも來現をそれ知なりそれ會なりと學すべきにあらざるなり。いまいふ宗旨は、胡來は胡現なりといふか、胡來は一條の胡來にて、胡現は一條の胡現なるべし。現のための來にあらず。古鏡たとひ古なりとも、この參學あるべきなり。玄沙いでてとふ、たちまちに明鏡來にあはんにいかん。この道取、たづねあきらむべし。いまいふ明の道得は幾許なるべきぞ、いはくの道は、その來はかならずしも胡漢にはあらざるを、これは明鏡なり、さらに胡漢と現成すべからずと道取するなり。明鏡來はたとひ明鏡來なりとも、二枚なるべからざるなり、たとひ二枚にあらずといふとも、古鏡はこれ古鏡なり、明鏡はこれ明鏡なり。古鏡あり明鏡ある證驗、すなはち雪峯と玄沙と道取せり。これを佛道の性相とすべし、この玄沙の明鏡來の道話の七通八達なるとしるべし。八面玲瓏なるとしるべし。逢人には即出なるべし、出即には接渠なるべし。しかあれば明鏡の明と古鏡の古と、同なりとやせん、異なりとやせん。明鏡に古の道理ありやなしや、古鏡に明の道理ありやなしや。古鏡といふ言によりて明なるべしと學することなかれ。宗旨は吾亦如是あり、汝亦如是あり、西天諸祖亦如是の道理、はやく練磨すべし。祖師の道得に、古鏡は磨ありと道取す、明鏡もしかあるべきか、いかん、まさにひろく諸佛諸祖の道にわたる參學あるべし。雪峯道の胡漢倶隱は、胡も漢も、明鏡來の時は倶隱なりとなり。この倶隱の道理いかにいふぞ。胡漢すでに來現すること、古鏡を相罣礙せざるに、なにとしてかいま倶隱なる。古鏡はたとひ胡來胡現漢來漢現なりとも、

明鏡來は、おのづから明鏡來なるがゆゑに、古鏡現の胡漢は、俱隱なるなり。しかあれば雪峯道にも古鏡一面あり、明鏡一面あるなり。正當明鏡來のとき、古鏡現の胡漢を罣礙すべからざる道理、あきらめ決定すべし。いま道取する古鏡の胡來胡現漢來漢現は、古鏡上に來現すといはず、古鏡裏に來現すといはず、古鏡外に來現すといはず、古鏡と同參來現すといはず、この道を聽取すべし。胡漢來現の時節は、古鏡の胡漢を現來せしむるなり。胡漢俱隱ならん時節も、鏡は存取すべきと道得せるは、現にくらく來におろそかなり、錯亂といふにおよばざるものなり。ときに玄沙いはく、「某甲はすなはちしかあらず。」雪峯いはく、「なんぢ作麼生。」玄沙いはく、「請すらくは、和尚とふべし。」いま玄沙のいふ請和尚問のことば、いたづらに蹉過すべからず。いはゆる和尚問の來なる、和尚問の請なる、父子の投機にあらずは、爲甚如此なり。すでに請和尚問ならん時節は、恁麼人さだめて問處を若會すべし。すでに問處の霹靂するには、無廻避處なり。雪峯いはく、「忽遇明鏡來時如何。」この問處は、父子ともに參究する一條の古鏡なり。玄沙いはく、「百雜碎。」この道取は、百千萬に雜碎するとなり。いはゆる忽遇明鏡來時は、百雜碎なり。百雜碎を參得せんは明鏡なるべし。明鏡を道得ならしむるに、百雜碎なるべきがゆゑに。雜碎のかかれるところ明鏡なり、さきに未雜碎なるときあり、のちにさらに不雜碎ならん時節を管見することなかれ。ただ百雜碎なり。百雜碎の對面は、孤峻の一なり。しかあるにいまいふ百雜碎は、古鏡を道取するか明鏡を道取するか、更請一轉語なるべし。また古鏡を道取する

【萬古碧潭空界月】傳燈廿九同安丁玄談轉位の末句。

【三聖院慧然】臨濟義玄禪師の法嗣鎭州の三聖院に開法、傳詳かならず

【獮猴をみる】禪類二十卷に出づ。

にあらず、明鏡を道取するにあらず。古鏡明鏡はたとひ問來得なりといへども、玄沙の道取を擬議するとき、沙礫牆壁のみ現前せる舌端となりて、百雜碎なりぬべきか。碎來の形段作麼生、萬古碧潭空界月。

雪峯眞覺大師と三聖院慧然禪師と行次に、ひとむれの獮猴をみる。ちなみに雪峯いはく、「この獮猴おのおの一面の古鏡を背せり。」この語よくよく參學すべし。獮猴といふはさるなり、いかならんか雪峯のみる獮猴。かくのごとく問取して、さらに功夫すべし、經劫をかへりみることなかれ。おのおの一面の古鏡を背せりとは、古鏡たとひ諸佛祖面なりとも、古鏡は向上にも古鏡なり。獮猴おのおの面面に背せりといふは、面面に大面小面あらず、一面古鏡なり。背すといふは、たとへば繪像の佛のうらをおしつくるを背すとはいふなり、獮猴の背を背するに、古鏡にて背するなり。使得什麼糊來、こころみにいはばさるのうらは古鏡にて背すべし。古鏡のうらは獮猴にて背するか、古鏡のうらを古鏡にて背す、さるのうらをさるにて背す。各背一面のことば、虛設なるべからず、道得是の道得なり。しかあれば獮猴か、古鏡か、畢竟作麼生道。われらすでに獮猴か獮猴にあらざるか、たれにか問取せん。自己の獮猴にある、自知にあらず他知にあらず。自己の自己にある、摸索およばず。」三聖いはく、「歷劫無名なり、なにのゆゑにかあらはして古鏡とせん。」これは三聖の古鏡を證明せる一面一枚なり。歷劫といふは、一心一念未萌以前なり、劫裏の不出頭なり。無名といふは、歷劫の日面月面古鏡面なり。明鏡面なり、無名眞箇に無名ならんには、歷

【再全の錦】譙周益州志云く成都錦を織る既に成つて江水に濯ふ其文分明初成に勝る、他水に之を濯ふ江水に如かずと。

劫いまだ歴劫にあらず。歴劫すでに歴劫にあらずは、三聖の道得これ道得にあらざるべし。しかあれども一念未萠以前といふは、今日なり、今日を蹉過せしめず練磨すべきなり。まことに歴劫無名、この名たかくきこゆ、なにをあらはしてか古鏡とする、龍頭蛇尾。このとき三聖にむかひて雪峯いふべし古鏡古鏡と。雪峯恁麼いはず、さらに瑕生也といふは、きずいできぬるとなり。いかでか古鏡に瑕生也ならんとおぼゆれども、古鏡の瑕生也は、歴劫無名といふをきずとせるなるべし。古鏡の瑕生也は全古鏡なり、三聖いまだ古鏡の瑕生也の窟をいでざりけるゆゑに、道來せる參究は、一任に古鏡瑕なり。しかあれば古鏡にも瑕生なり、瑕生なるも古鏡なりと參學する、これ古鏡を參學するなり。三聖いはく、「有二什麼死急、話頭也不レ識」。いはくの宗旨は、なにとしてか死急なる。いはゆるの死急は、今日か、明日か、自己か、他門か、盡十方界か、大唐國裏か、審細に功夫參學すべきなり。話頭也不識は、話といふは、道來せる話あり、未道得の話あり。すでに道了也の話あり、いまは話頭なる道理現成するなり、たとへば話頭も大地有情同時成道しきたれるか、さらに再全の錦にはあらざるなり。かるがゆゑに不識なり、對レ朕者不識なり、對面不二相識一なり。話頭はなきにあらず、祇是不識なり。不識は條條の赤心なり、さらにまた明明の不見なり。雪峯いはく、「老僧罪過」。いはゆるはあしくいひにけるといふにも、かくいふともあれども、しかはこころうまじ。老僧といふことは、屋裏の主人翁なり、いはゆる餘事を參學せず、ひとへに老僧を參學するなり。千變萬化あれども、神頭鬼面あれども、參

【兩位の尊宿】

六祖─┬─南嶽─馬祖─百丈─黄檗─臨濟─三聖。
　　　└─青原─石頭─道悟─龍潭─德山─雪峰。

【世界濶一丈】禪類第十六卷に出づ

學は唯老僧一著なり。佛來祖來、一念萬年あれども、參學は唯老僧一著なり。罪過は住持事業なり。おもへばそれ雪峯は德山の一角なり、三聖は臨濟の神足なり。兩位の尊宿おなじく系譜いやしからず、青原の遠孫なり、南嶽の遠派なり、古鏡を住持しきたれる、それかくのごとし、晩進の龜鏡なるべし。

雪峯示衆云、『世界濶一丈、古鏡濶一丈、世界濶一尺、古鏡濶一尺。』時玄沙指火爐云、『且道火爐濶多少。』雪峯云、『似古鏡濶。』玄沙云、『老和尚脚跟未點地在。』一丈これを世界といふ、世界はこれ一丈なり。一尺これを世界とす、世界これ一尺なり。而今の一丈をいふ、而今の一尺をいふ、さらにことなる尺丈にはあらざるなり。この因緣を參學するに、世界のひろさはよのつねにおもはくは、無量無邊の三千大千世界、および無盡法界といふも、ただ小量の自己にして、しばらく隣里の彼方をさすがごとし。この世界を拈じて、一丈とするなり。このゆゑに雪峯いはく、『古鏡濶一丈、世界濶一丈。』この一丈を學せんには、世界濶の一端を見取すべし。また古鏡の道を聞取するにも、一枚の薄氷の見をなす。しかにはあらず、一丈の濶は世界の濶一丈に同參なりとも、形興かならずしも世界の無端に齊肩なりや、同參なりやと功夫すべし。古鏡はさらに一顆珠のごとくにあらず。明珠を見解することなかれ、方圓を見取することなかれ。盡十方界、たとひ一顆明珠なりとも、古鏡にひとしかるべきにあらず。しかあれば古鏡は胡漢の來現にかかはれず、縱橫の玲瓏に條條なり。多にあらず大にあらず、濶はその量を擧するなり、

【動容揚古路】香嚴禪師擊竹悟道の偈の二句。

廣をいはんとにはあらず、闊といふは、よのつねの二寸三寸といひ、七箇八箇とかぞふるがごとし。佛道の算數には、大悟不悟と算數するに、二兩三兩をあきらめ、佛佛祖祖と算數するに、五枚十枚を見成す。一丈は古鏡闊なり、古鏡闊は一枚なり。玄沙のいふ火爐闊多少、かくれざる道得なり、千古萬古にこれを參學すべし。いま火爐をみるたれ人となりてかこれをみる、火爐をみるに七尺にあらず八尺にあらず、これは動執の時節話にあらず、新條特地の現成なり。たとへば是什麼物恁麼來なり。闊多少の言きたりぬれば、向來の多少は、多少にあらざるべし、當處解脱の道理うたがはざりぬべし。火爐の諸相諸量にあらざる宗旨は、玄沙の道をきくべし。現前の一團子、いたづらに落地せしむることなかれ、打破すべし、これ功夫なり。雪峯いはく「一丈如古鏡闊。」この道取、しづかに照顧すべし。火爐闊一丈といふべきにあらざれば、かくのごとく道取するなり。一丈といはんは道得是にて、如古鏡闊は道不是なるにあらず、如古鏡闊の行履をかがみるべし。おほく人のおもはくは、火爐闊一丈といはざるを道不是とおもへり。闊の獨立をも功夫すべし、古鏡の一片をも鑑照すべし、如如の行李をも蹉過せしめざるべし。動容揚古路、不墮悄然機なるべし。玄沙いはく、『老漢脚跟未點地在。』いはくのこころは、老漢といひ、老和尚といへども、かならず雪峯にあらず、雪峯は老漢なるべきがゆゑに、脚跟といふはいづれのところぞと問取すべきなり、脚跟といふはなにをいふぞと參究すべし。參究すべしといふは、脚跟とは正法眼藏をいふか、虚空をいふか、盡地をいふか、命脈をいふか、幾箇あるものぞ、一

箇あるか、半箇あるか、百千萬箇あるか、恁麽勤學すべきなり。未點地在は、地といふは是什麽物なるか、いまの大地といふは、一類の所見に準じてしばらく地といふ。さらに諸類あるひは不思議解脱法門とみるあり、諸佛諸行道とみる一類あり。しかあれば脚跟の點ずる地は、なにものをか地とせる、地は實有なるか、實無なるか。またおほよそ地といふものは、大道のなかに寸許もなかるべきか、問來問去すべし、道他道己すべし。脚跟は點地也是なる、不點地也是なる。作麽生なればか、未點地在と道取する。大地無寸土の時節は、點地也未、未點地也未なるべし。しかあれば老漢脚跟未點地在は、老漢の消息なり、脚跟の造次なり。

【國泰院弘瑫禪師】玄沙師備禪師の嗣　傳燈廿一に出づ

婺州金華山國泰院弘瑫禪師、ちなみに僧とふ、「古鏡未磨時如何。」師云、「古鏡。」僧曰、「磨後如何。」師云、「古鏡。」しるべしいまいふ古鏡は、磨時あり、未磨時あり、磨後あれども、一面に古鏡なり。しかあれば磨時は古鏡の全古鏡を磨するなり。古鏡にあらざる水銀等を和して磨するにあらず。磨自自磨にあらざれども、磨古鏡なり。未磨時は古鏡くらきにあらず、くらしと道取すれども、くらきにあらざるべし、活古鏡なり。おほよそ鏡を磨して鏡となす、甎を磨して鏡となす、塼を磨して塼となす、鏡を磨して塼となす、磨してなさざるあり、なることあれども磨することをえざるあり、おなじく佛祖の家業なり。

江西馬祖むかし南嶽に參學せしに、南嶽かつて心印を馬祖に密授せしむ、磨塼のはじめのはじめなり。馬祖傳法院に住して、よのつねに坐禪することわづかに二十餘歳なり、雨夜の

艸菴おもひやるべし。封雪の寒林におこたるといはず。南嶽あるとき馬祖の菴にいたるに、馬祖侍立す。南嶽とふ、「なんぢ近日作什麼。」馬祖いはく、「近日道一祗管打坐するのみなり。」南嶽いはく、「坐禪なにごとをか圖する。」馬祖いはく、「坐禪は作佛を圖す。」南嶽すなはち一片の塼をもちて、馬祖の菴のほとりの石にあてて磨す。馬祖これをみて、すなはちとふ、「和尚作什麼。」南嶽いはく、「磨塼。」馬祖いはく、「磨塼用作什麼。」南嶽いはく、「磨作鏡。」馬祖いはく、「磨塼豈得成鏡耶。」南嶽いはく、「坐禪豈得作佛耶。」この一段の大事、むかしより數百歳のあひだ、人おほくおもへらくは、南嶽ひとへに馬祖を勸勵せしむると。いまだかならずしもしかあらず、大聖の行履はるかに凡境を出離せるのみなり。大聖もし磨塼の法なくば、いかでか爲人の方便あらん、爲人のちからは佛祖の骨髓なり。たとひ構得すとも、なほこれ家具なり、家具調度にあらざれば、佛家につたはれざるなり、いはんやすでに馬祖を接することすみやかなり。はかりしりぬ佛祖正傳の功德これ直指なることを。まことにしりぬ磨塼の鏡となるとき、馬祖作佛す、馬祖作佛するとき、馬祖すみやかに馬祖となる。馬祖の馬祖となるとき、坐禪すみやかに坐禪となる。かるがゆゑに塼を磨して鏡となすこと、古佛の骨髓に住持せられきたる、しかあれば塼のなれる古鏡あり。この鏡を磨しきたるとき、從來も未染汙なるなり。塼のちりあるにはあらず、ただ塼なるを磨塼するなり。このところに作鏡の功德の現成する、すなはち佛祖の功夫なり、磨塼もし作鏡せずば、磨鏡も作鏡すべからざるなり、たれかはかることあらん、

【磨塼作鏡】傳燈南嶽章に出づ。坐禪箴卷に詳し。

【仁治二年】前卷に倣ふ。

【看經】洞山悟本大師の看轉大藏經の因緣を假りて佛法の看經を擧す看は全自己の全眼睛にして經は遍法界の全經卷なり、全とは無餘の義にして人法一枚の看經能看所看を超えたる全自己の全經卷を看經と爲す。

【於無量國中】法華安樂行品の文。

この作に作佛あり作鏡あることを。また疑著すらくは、古鏡を磨するとき、あやまりて塼と磨しなすことのあるべきか。磨時の消息は、餘時のはかるところにあらず。しかあれども南嶽の道まさに道得を道得すべきがゆゑに、畢竟してすなはちこれ磨塼作鏡なるべし。いまの人もいまの塼を拈じ磨してこころみるべし、さだめて鏡とならん。塼もし鏡とならずば、人ほとけになるべからず、塼を泥團なりとかろしめば、人も泥團なりとかろからん。人もし心あらば、塼も心あるべきなり、たれかしらん塼來塼現の鏡子あることを。またたれかしらん鏡來鏡現の鏡子あることを。

仁治二年辛丑九月九日在觀音導利興聖寶寺示衆

正法眼藏古鏡　畢

正法眼藏看經

阿耨多羅三藐三菩提の修證、あるひは知識をもちゐ、あるひは經卷をもちゐる。知識といふは、全自己の佛祖なり、經卷といふは、全自己の經卷なり。全佛祖の自己、全經卷の自己なるがゆゑに、かくのごとくなり。自己と稱すといへども我儞の拘牽にあらず、これ活眼睛なり、活拳頭なり。しかあれども念經、看經、誦經、書經、受經、持經あり、ともに佛祖の修證なり。しかあるに佛經にあふことたやすきにあらず、於無量國中、

【爲求名聞故】法華勸持品の文。
【藥山…久不陞堂】傳燈十四卷出、小異あり。宏智頌古等七則に見ゆ。
【韶州曹谿山】法華轉法華卷に詳出せり。

乃至名字不可得聞なり。於佛祖中、乃至名字不可得聞なり。佛祖にあらざれば、經卷を見聞讀誦解義せず、佛祖參學よりかつがつ經卷を參學するなり。このとき耳處、眼處、舌處、鼻處、身心塵處、到處、聞處、話處の聞、持、受、說經等の現成あり。爲求名聞故說外道論議の輩、佛經を修行すべからず。そのゆゑは經卷は、若樹若石の傳持あり、若田若里の流布あり、塵刹の演出あり、虛空の開講あり。

藥山曩祖弘道大師、久不二陞堂一。院主白云、「大衆久思二和尚慈誨一。」山云、「打鐘著。」院主打レ鐘、大衆才集。山陞堂、良久、便下座歸二方丈一。院主隨レ後白云、「和尚適來聽レ許爲レ衆說法一、如何不レ垂二一言一。」山云、『經有二經師一、論有二論師一、爭怪二得老僧一。』

曩祖の慈誨するところは、拳頭有拳頭師、眼睛有眼睛師なり。しかあれどもしばらく曩祖に拜問すべし、爭怪二得和尚一はなきにあらず、いぶかし和尚是什麼師。

韶州曹谿山大鑑高祖會下、誦二法華經一僧、法達來山。高祖爲二法達一說レ偈云、「心迷法華轉、心悟轉法華、誦久不レ明レ己、與レ義作二讐家一、無念念卽正、有念念成レ邪、有無俱不レ計、長御二白牛車一。」しかあれば心迷は、法華に轉ぜられ、心悟は、法華を轉ず。さらに迷悟を跳出するときは、法華の法華を轉ずるなり。」法達まさに偈をききて、踊躍歡喜、以レ偈讚曰、「經誦二三千部一、曹谿一句亡、未レ明二出世旨一、寧歇二累生狂一、羊鹿牛權設、初中後善揚、誰知火宅內、元是法中王。」その時、高祖曰、「汝今後方可レ名爲二念經僧一也。」

しるべし佛道に念經僧あることを、曹谿古佛の直指なり。この念經僧の念は、有念無念等

【第二十七祖】舍光に出、宏智頌古第三則に見ゆ。

にあらず、有無俱不計なり。ただこれ從劫至劫、手不釋卷、從晝至夜、無不念なるのみなり、從經至經無不經なるのみなり。

第二十七祖東印度般若多羅尊者、因東印度國王、請尊者齋次、國王乃問、『諸人盡轉經、唯尊者爲甚不轉。』祖曰、『貧道、出息不隨衆縁、入息不居蘊界、常轉如是經、百千萬億卷、非但一卷兩卷。』般若多羅尊者は、天竺國東印度の種艸なり、迦葉尊者より第二十七世の正嫡なり、佛家の調度ことごとく正傳せり。頂𩕳、眼睛、拳頭、鼻孔、拄杖、鉢盂、衣法、骨髓等を住持せり。われらが曩祖なり、われらは雲孫なり。

いま尊者の渾身道は、出息の衆縁に不隨なるのみにあらず、衆縁も出息に不隨なり。衆縁たとひ頂𩕳眼睛にてもあれ、衆縁たとひ渾心にてもあれ、衆縁たとひ渾心にこもあれ、擔來擔去又擔來、ただ不隨衆縁なるのみなり。不隨は渾隨なり、このゆゑに築著磕著なり。出息これ衆縁なりといへども、不隨衆縁なり。無量劫來、いまだ出息入息の消息をしらざれども、而今まさにはじめてしるべき時節到來なるがゆゑに、不居蘊界をきく、不隨衆縁をきく。衆縁はじめて入息等を參究する時節なり。この時節、かつてさきにあらず、さらにのちにあるべからず、ただ而今のみにあるなり。蘊界といふは、五蘊なり、いはゆる色受想行識をいふ。この五蘊に不居なるは、五蘊いまだ到來せざる世界なるがゆゑなり。この關棙子を拈ぜるゆゑに、所轉の經、ただ一卷兩卷にあらず、常轉百千萬億卷なり。百千萬億卷は、しばらく多の一端をあぐといへども、多の量のみにあらざるなり。一息

【趙州觀音院】諸方代別篇中に推す。傳燈趙州章に錄せず。

【益州大隋山】類聚に見ゆ、傳燈、大會元に載せず。大隋法眞は長慶大安（後大潙）和尚に嗣ぐ。神照大師は諡號。

【高祖洞山悟本大師】洞山錄に見ゆ。

出の不居寵界を、百千萬億卷の量とせり。しかあれども有漏無漏智の所測にあらず、有漏無漏法の界にあらず。このゆゑに有智の知の測量にあらず、有知の智の卜度にあらず、無智の知の商量にあらず、無知の智の所到にあらず。佛佛祖祖の修證、皮肉骨髓、眼睛、拳頭、頂𩕳、鼻孔、拄杖、拂子、𨁝跳造次なり。趙州觀音院眞際大師因有二婆子一施二淨財一請三大師轉二大藏經一。師下二禪牀一遶一匝、向二使者一云、『轉藏已畢。』使者回擧二似婆子一。婆子曰、『比來請レ轉二一藏一、如何和尚只轉二半藏一。』あきらかにしりぬ轉一藏半藏は、婆子經三卷なり、轉藏已畢は、趙州經一藏なり。おほよそ轉大藏經のていたらくは、禪牀をめぐる趙州あり、禪牀ありて趙州をめぐる。趙州をめぐる趙州あり、禪牀をめぐる禪牀あり。しかあれども一切の轉藏は、遶禪牀のみにあらず、禪牀遶のみにあらず。

益州大隋山神照大師、法諱法眞、嗣二長慶寺大安禪師一。因有二婆子一施二淨財一請三師轉二大藏經一。師下二禪牀一一匝、向二使者一曰、『轉二大藏經一已畢。』使者歸擧二似婆子一。婆子云、『比來請レ轉二一藏一、如何和尚只轉二半藏一。』いま大隋の禪牀をめぐると學することなかれ、禪牀の大隋をめぐると學することなかれ。拳頭眼睛の團圝のみにあらず、作一圓相せる打一圓相なり。しかあれども婆子それ有眼なりや、未具眼なりや。只轉半藏、たとひ道取を拳頭より正傳すとも、婆子さらにいふべし、『比來請轉大藏經、如何和尚只管弄精魂。』あやまりてもかくのごとく道取せましかば、具眼睛の婆子なるべし。

　高祖洞山悟本大師、因有二官人一設レ齋施二淨財一、請三師看二轉大藏經一。大師下二禪牀一向二

【曩祖藥山弘道大師】傳燈十四卷藥山章に出づ。

官人拜、官人拜大師、引官人俱遶禪牀一帀、向官人拜。良久向官人云、『會麼。』官人云、『不會。』大師云、『我與汝看轉大藏經如何不會。』これ我與汝看轉大藏經あきらかなり、遶禪牀を看轉大藏經と學するにあらず、看轉大藏經を遶禪牀と會せざるなり、しかありといへども高祖の慈誨を聽取すべし。この因緣、先師古佛、天童山に住せりしとき、高麗國の施主、入山施財、大衆看經、請先師陞座のとき擧するところなり。擧しをはりて先師すなはち拂子をもておほきに圓相をつくること一帀していはく、『天童今日與汝看轉大藏經。』便擲下拂子、下座。いま先師の道處を看轉すべし、餘者に比準すべからず。しかありといふとも看轉大藏經には、一隻眼をもちゐるとやせん、半隻眼をもちゐるとやせん。高祖の道處と先師の道處と、用眼睛、用舌頭、いくばくをかもちゐきたれる。究辨看。

曩祖藥山弘道大師、尋常不許人看經、一日將經自看、因僧問、『和尚尋常不許人看經、爲甚麼却自看。』師云、『我只要遮眼。』僧云、『某甲學和尚得麼。』師云、『儞若看、牛皮也須穿。』いま我要遮眼の道は遮眼の自道處なり、遮眼は、打失眼睛なり、打失經なり、渾眼遮なり、渾遮眼なり。遮眼は、遮中開眼なり、遮裏活眼なり、眼裏活遮なり、眼皮上更添一枚皮なり、遮裏拈眼なり、眼自拈遮なり。しかあれば、眼睛經にあらざれば、遮眼の功德いまだあらざるなり。牛皮也須穿は、全牛皮なり、全皮牛なり、拈牛作皮なり。このゆゑに皮肉骨髓頭角鼻孔を、牛牸の活計とせり。學和尚のとき、牛爲眼睛なるを遮眼とす、眼睛爲牛なり。

【冶父道川禪師】會元卷十二出。無爲郡冶父實際道川。崑山狄氏の子。今頌は金剛經能淨業障分の頌。

【雲居山弘覺大師】傳燈卷十七雲居章に載す。

【現在佛祖の會に】以下看經の儀式、即ち事の看經を示す。

【童行】僧堂行者

【庫院】副寺寮。

冶父道川禪師云、『億千供佛福無邊、爭似常將古教看、白紙上邊書墨字、請君開眼目前觀。』しるべし古佛を供すると古教をみると、福德齊肩なるべし、福德超過なるべし。古教といふは、白紙の上に墨字を書せる、たれかこれを古教としらん、當恁麼の道理を參究すべし。

雲居山弘覺大師、因有一僧、在房内念經。大師隔窗問云、『闍梨念底是恁麼經。』僧對曰、『維摩經。』師云、『不問儞維摩經、念底是什麼經。』此僧從此得入。大師道の念底是什麼經は、一條の念底年代深遠なり、不欲舉似於念なり。路にしては死蛇にあふ、このゆゑに什麼經の問著現成せり。人にあふては錯舉せず、このゆゑに維摩經なり。おほよそ看經は、盡佛祖を把拈しあつめて眼睛として看經するなり。正當恁麼時、たちまちに佛祖作佛し說法し、說佛し佛作するなり。この看經の時節にあらざれば、佛祖の頂顙面目いまだあらざるなり。現在佛祖の會に、看經の儀則、それ多般あり、いはゆる施主入山請大衆看經、あるひは常轉請僧看經、あるひは僧衆自發心看經等なり。このほか大衆爲亡僧看經あり。施主入山請僧看經は當日の粥時より、堂司あらかじめ看經牌を僧堂前および諸寮にかく、粥罷に拜席を聖僧前にしく。ときいたりて、僧堂前鐘を三會うつ、あるひは一會うつ、住持人の指揮にしたがふなり。鐘聲罷に首座大衆搭袈裟、入雲堂就被位正面而坐。つぎに住持人入堂し、向聖僧問訊燒香罷、依位而坐。つぎに童行をして經を行せしむ。この經さきより庫院にととのへ安排しまうけて、ときいたりて供達するなり。經はあるひは

【知客】　客を引接する役。

經函ながら行じ、あるひは盤水に安じて行ず。大衆すでに經を誦して、すなはちひらきよむ。このとき知客いまし施主をひきて雲堂にいる。施主まさに雲堂前にて手爐をとりてささげて入堂す。手爐は院門の公界にあり、あらかじめ裝香して行者をして雲堂前にまうけて、施主まさに入堂せんとするとき、めしによりて施主にわたす。手爐をめすことは、知客これをめすなり。入堂するときは、知客はさき施主はのち、雲堂の前門の南頰よりいる。施主聖僧前にいたりて、燒一片香拜三拜あり。拜のあひだ、手爐をもちながら拜するなり、拜のあひだ知客は拜席のきたに、おもてを南にしてすこし施主にむかひて、叉手してたつ、施主の拜をはりて、施主みぎに轉身して住持人にむかひて手爐をささげて曲躬し揖す。住持人は椅子にゐながら經をささげて合掌して揖をうく。施主つぎに北にむかひて揖す、揖をはりて首座のまへより巡堂す。巡堂のあひだ、知客さきにひけり。巡堂一帀して、聖僧前にいたりて、なほ聖僧にむかひて、手爐をささげて揖す、このとき知客は雲堂の門閫のうちに、拜席のみなみに面を北にして叉手してたてり。施主揖聖僧をはりて、知客にしたがひて雲堂前にいでて巡堂前一帀して、なほ雲堂内にいりて、聖僧にむかひて拜三拜す。拜をはりて交椅につきて看經を證明す。交椅は、聖僧のひだりの柱のほとりに南にむかひてこれをたつ、あるひは南柱のほとりに北にむかひてたつ。施主すでに座につきぬれば、知客すべからく施主にむかひて揖してのちくらゐにつくべし。あるひは施主巡堂のあひだ、梵音あり。梵音の座、あるひは聖僧のみぎ、あるひは聖僧のひだり、便宜にしたが

【俵す】分散、分ち與へる、分配。

ふ。手爐には沈香棧香等の名香をさしはさみたくなり。この香は施主みづから辦備するなり。施主巡堂のときは、衆僧合掌す。つぎに看經錢を俵す、錢の多少は、施主のこころにしたがふ。あるひは綿あるひは扇等の物子これを俵す、施主みづから俵す、あるひは知事これを俵す、あるひは行者これを俵す。俵する法は、僧のまへにこれをおくなり。僧の手にいれず、衆僧は、俵錢をまへに俵するとき、おのおの合掌してうくるなり。俵錢あるひは當日の齋時にこれを俵す、もし齋時に俵するがごときは、首座施食ののち、さらに打槌一下して、首座施財す。施主回向の旨趣を紙片にかきて、聖僧のみぎのはしらに貼せり。雲堂裏看經のとき揚聲してよまず、低聲によむ、あるひは經卷をひらきて、文字をみるのみなり、句讀におよばず、看經するのみなり。かくのごとくの看經、おほくは金剛般若經、法華經普門品、安樂行品、金光明經等をいく百千卷となく、常住にまうけおけり、毎僧一卷を行ずるなり。看經をはりぬれば、もとの盤、もしは函をもちて、座のまへをすぐれば、大衆おのおの經を安ず、とるとき、おくとき、ともに合掌するなり。とるときは、まづ合掌して、のちにとる、おくときは、まづ經を安じて、のちに合掌す。そののちおのおの合掌して、低聲に回向するなり。もし常住公界の看經には、都監寺僧、燒香、禮拜、巡堂、俵錢、みな施主のごとし。手爐をささぐることも、施主のごとし。もし衆僧のなかに、施主となりて、大衆の看經を請ずるも、俗施主のごとし、燒香、禮拜、巡堂、俵錢等あり。知客これをひくこと、俗施主のごとくなるべし。「聖節の看經といふことあり、

【今上の聖誕】今上陛下の御誕辰、即ち天長節。

【行す】行布、しき與へること。

【祝聖】聖上の萬歳を祝す。

しかれば今上の聖誕の佳令、もし正月十五日なれば、まづ十二月十五日より聖節の看經はじまる。今日上堂なし、佛殿の釋迦佛のまへに、連牀を二行にしく。いはゆる東西にあひむかへて、おのおの南北行にしく。東西牀のまへに臺盤をたつ、そのうへに經を安ず。金剛般若經、仁王經、法華經、最勝王經、金光明經等なり。堂裏の僧を一日に幾僧と請じて、齋前に點心をおこなふ。あるひは麪一椀、羹一杯を毎僧に行す。あるひは、饅頭六七箇、羹一分、毎僧に行ずるなり。饅頭これも椀にもれり、はしをそへたり、かいをそへず。おこなふときは、看經の座につきながら座をうごかずしておこなふ。點心は、經を安ぜる臺盤に安排せり、さらに棹子をきたせることなし。行點心のあひだ、經は臺盤に安ぜり。點心おこなひをはりぬれば、僧おのおの座をたちて、漱口して、かへりて座につく、すなはち看經す。粥罷より齋時にいたるまで看經す。齋時三下鼓響に座をたつ。今日の看經は、齋時をかぎりとせり。はじむる日より建祝聖道場の牌を、佛殿の正面の簷頭にかく、黄牌なり。また佛殿のうちの正面の東の柱に祝聖の旨趣を障子牌にかきてかく、これ黄牌なり。住持人の名字は、紅紙、あるひは白紙にかく、その二字を小片紙にかきて、牌面の年月日の下頭に貼せり。かくのごとく看經して、その御降誕の日にいたるに住持人上堂し、祝聖するなり、これ古來の例なり。いまにふりざるところなり。また僧のみづから發心して看經するあり、寺院もとより公界の看經堂あり。かの堂につきて看經するなり、その儀、いま清規のごとし。

【高祖藥山弘道大師】傳燈卷十に載す。高沙彌藥山に嗣ぐ傳詳かならず。

【仁治二年】前卷の例に倣ふ。

【佛性】佛性に對する多くの錯會を破し眞箇佛性の宗旨を闡明す、涅槃經迦葉菩薩品に若し衆生中別に佛性ありと言はば是義然らず、何を以ての故に、衆生卽ち佛性、佛性卽ち衆生時異を以ての故に淨不淨ありと、又圓覺經師子吼品に因緣所生法是れ佛性なりと、以て悉有佛性を執して實有の見に墮する者を救ふ、十四章の說示親切を極む。實參實究すべし。

高祖藥山弘道大師、問二高沙彌一云、『汝從二看經一得。從二請益一得。』高沙彌云、『不下從二看經一得上、亦不下從二請益一得上。』師云、『大有レ人不二看經一不二請益一、爲二什麼不得一。』高沙彌云、『不レ道二他無一、只是他不二肯承當一』佛祖の屋裏に承當あり、不承當ありといへども、看經請益は、家常の調度なり。

于時仁治二年辛丑秋九月十五日在雍州宇治縣興聖寶林寺示衆

正法眼藏看經　畢

正法眼藏佛性

（一）釋迦牟尼佛言、『一切衆生、悉有佛性、如來常住、無有變易。』これわれらが大師釋尊の師子吼の轉法輪なりといへども、一切諸佛、一切祖師の、頂顙眼睛なり。參學しきたること、すでに二千一百九十年、當日本仁治二年辛丑歲 正嫡わづかに五十代、至先師天童淨和尚 西天二十八代、代代住持しきたり、東地二十三世、世世住持しきたる、十方の佛祖ともに住持せり。世尊道の一切衆生悉有佛性は、その宗旨いかん。是什麼物恁麼來の道轉法輪なり。あるひは衆生といひ、有情といひ、群生といひ、群類といふは、悉有の言は衆生なり、群有なり、すなはち悉有は佛性なり、悉有の一分を衆生といふ。正當恁麼時は、衆生の內外、すなはち佛性の悉有なり、單傳する皮肉骨髓のみにあらず、汝得吾皮肉骨髓なるがゆゑに。しるべしいま佛

【一】第一章。大般涅槃經第廿七の文。
【正嫡五十代】佛祖の卷參照。

性に悉有せらるる有は、有無の有にあらず。悉有は佛語なり、佛舌なり、佛祖眼睛なり、衲僧鼻孔なり。悉有の言、さらに始有にあらず、本有にあらず、妙有等にあらず。いはんや縁有妄有ならんや、心境性相等にかかはれず。しかあればすなはち衆生悉有の依正、しかしながら業增上力にあらず、妄縁起にあらず、法爾にあらず、神通修證にあらず。もし衆生の悉有、それ業增上力、および縁起法爾等ならんには、諸聖の證道、および諸佛の菩提、佛祖の眼睛も、業增上力、および縁起法爾なるべし。しかあらざるなり、盡界はすべて客塵なし、直下さらに第二人あらず『直截二根源一人未レ識、茫茫業識幾時休』なるがゆゑに、妄縁起の有にあらず。徧界不曾藏のゆゑに。徧界不曾藏といふは、かならずしも滿界是有といふにあらざるなり。徧界我有は、外道の邪見なり。本有の有にあらず、亙古亙今のゆゑに、始起の有にあらず、不受一塵のゆゑに。條條の有にあらず、合取のゆゑに。無始有の有にあらず、是什麼物恁麼來のゆゑに。始起有の有にあらず、平常心是道のゆゑに。まさにしるべし悉有中に衆生快便難逢なり。悉有を會取することかくのごとくなれば、悉有それ透體脱落なり。佛性の言をきて、學者おほく先尼外道の我のごとく邪計せり。それ人にあはず、自己にあはず、師をみざるゆゑなり。いたづらに風火の動著する心意識を佛性の覺知覺了とおもへり、たれかいひし佛性に覺知覺了ありと。覺者知者は、たとひ諸佛なりとも、佛性は覺知覺了にあらざるなり。いはんや諸佛を覺者知者といふ覺知は、なんだちが云云の邪解を覺知とせず、風火の動靜を覺知とするにあらず、ただ一兩

【二】第二章。涅槃經第卅八の次。

の佛面祖面、これ覺知なり。往往に古老先德、あるひは西天に往還し、あるひは人天を化導する、漢唐より宋朝にいたるまで、稻麻竹葦のごとくなる、おほく風火の動著を佛性の知覺とおもへり、あはれむべし學道轉疎なるによりて、いまの失誤あり。いま佛道の晩學初心しかあるべからず、たとひ覺知を學習すとも、覺知は動著にあらざるなり。たとひ動著を學習すとも、動著は恁麽にあらざるなり。もし眞箇の動著を會取することあらば、眞箇の覺知覺了を會取すべきなり。佛之與性、達彼達此なり。佛性かならず悉有なり、悉有は佛性なるがゆゑに。悉有は百雜碎にあらず、悉有は一條鐵にあらず、拈拳頭なるがゆゑに大小にあらず。すでに佛性といふ、諸聖と齊肩なるべからず、佛性と齊肩すべからず。

ある一類おもはく、佛性は草木の種子のごとし、法雨のうるほひしきりにうるほすとき、芽莖生長し、枝葉華果もすことあり、果實さらに種子をはらめり。かくのごとく見解する凡夫の情量なり、たとひかくのごとく見解すとも、種子および華果ともに條條の赤心なりと參究すべし。果裏に種子あり、種子みえざれども根莖等を生ず。あつめざれどもそこばくの枝條大圍となれる、內外の論にあらず、古今の時に不空なり。しかあればたとひ凡夫の見解に一任すとも、根莖枝葉、みな同生し同死し同悉有なる佛性なるべし。佛言、欲レ知二佛性義一、當レ觀二時節因緣一、時節若至、佛性現前。いま佛性義をしらんとおもはばといふは、ただ知のみにあらず、行せんとおもはば、證せんとおもはば、とかんとおもはばとも、わすれんとおもはばともいふなり。かの說、行、證、忘、錯、不錯等も、しかし

【其理自彰】天童淨祖の語。威音世界非闊遠、直至今其理自彰と。
【三】第三章。傳燈卷一馬鳴章。
【第十三祖】迦毘摩羅尊者。

ながら時節の因緣なり。時節の因緣を觀ずるには、時節の因緣をもて觀ずるなり、拂子拄杖等をもて相觀するなり。さらに有漏智、無漏智、本覺、始覺、無覺、正覺等の智をもちゐるには、觀ぜられざるなり。當觀といふは、能觀所觀にかかはれず、正觀邪觀等に準ずべきにあらず、これ當觀なり。當觀なるがゆゑに不自觀なり、不他觀なり、時節因緣聻なり、超越因緣なり、佛性聻なり、脫體佛性なり、佛佛聻なり、性性聻なり。時節若至の道を、古今のやから往往におもはく、佛性の現前する時節の向後にあらんずるをまつなりとおもへり。かくのごとく修行しゆくところに、自然に佛性現前の時節にあふ、時節いたらざれば、參師問法するにも、辨道功夫するにも、現前せずといふ。恁麼見取して、いたづらに紅塵にかへり、むなしく雲漢をまもる。かくのごとくのたぐひ、おそらくは天然外道の流類なり。いはゆる欲知佛性義は、たとへば當知佛性義といふなり。當觀時節因緣といふは、當知時節因緣といふなり。いはゆる佛性をしらんとおもはば、しるべし時節因緣これなり。時節若至といふは、すでに時節いたれり、なにの疑著すべきところかあらんとなり。疑著時節さもあらばあれ、還我佛性來なり。しるべし時節若至は、十二時中不空過なり。若至は既至といはんがごとし、時節若至すれば、佛性不至なり。しかあればすなはち時節すでにいたれば、これ佛性の現前なり、あるひは其理自彰なり。おほよそ時節の若至せざる時節いまだあらず、佛性の現前せざる佛性あらざるなり。

第十二祖馬鳴尊者、第十三祖のために佛性海をとくにいはく、「山河大地、皆依建立、三

【四】第四章。傳燈三、高僧傳。合會して文を成す。

味六通、由茲發現」しかあればこの山河大地みな佛性海なり。皆依建立といふは、建立せる正當恁麼時、これ山河大地なり。すでに皆依建立といふ、しるべし佛性海のかたちはかくのごとし。さらに內外中間にかかはるべきにあらず。恁麼ならば山河をみるは佛性をみるなり。佛性をみるは驢腮馬嘴をみるなり。皆依は全依なり依全なりと會取し不會取するなり。「三昧六通由茲發現」、しるべし諸三昧の發現未現、おなじく皆依佛性なり。全六通の由茲不由茲、ともに皆依佛性なり。六神通は、ただ阿笈摩敎にいふ六神通にあらず。六といふは、前三三後三三を六神通波羅蜜といふ。しかあれば六神通は、明明百艸頭、明明佛祖意なりと參究することなかれ。六神通に滯累せしむといへども、佛性海の朝宗に罣礙するものなり。

(四)五祖大滿禪師、蘄州黃梅人也。無父而生、童兒得道、乃栽松道者也。初在蘄州西山栽松、遇四祖出遊。告道者、吾欲傳法與汝、汝已年邁、若汝再來、吾尚遲汝。師諾、遂往周氏家女托生。因拋濁港中。神物護持、七日不損。因收養矣。至七歲爲童子、於黃梅路上、逢四祖大醫禪師。祖見師雖是小兒、骨相奇秀、異乎常童。祖見問曰、汝何姓。師答曰、姓卽有、不是常姓。祖曰、是何姓。師答曰、是佛性。祖曰、汝無佛性。師答曰、佛性空故、所以言無。祖識其法器、俾爲侍者。後付正法眼藏、居黃梅東山、大振玄風。しかあればすなはち祖師の道取を參究するに、四祖いはく、汝何姓は、その宗旨あり。むかしは何國人の人あり、何姓の姓あり、なんぢは何姓と

【趦趄】行いて進まざる貌、あと退りするなり。

爲説するなり。たとへば吾亦如是、汝亦如是と道取するがごとし。五祖いはく、「姓即有、不是常姓。」いはゆるは有即姓は常姓にあらず、常姓は即有に不是なり。四祖いはく、「是何姓。」は、何は是なり、是を何しきたれり、これ姓なり、何ならしむるは是のゆゑなり、是ならしむるは何の能なり、姓は是也何也。これを蒿湯にも點ず、茶湯にも點ず、家常の茶飯ともするなり。五祖いはく、「是佛性。」いはくの宗旨は、是は佛性なりとなり、何のゆゑに佛なるなり、是は何姓のみに究取しきたらんや、是すでに不是のとき佛性なり、しかあればすなはち是は何なり佛なりといへども、脱落しきたり透脱しきたるに、かならず姓なり、その姓すなはち周なり。しかあれども父にうけず、祖にうけず、母氏に相似ならず、傍觀に齊肩ならんや。四祖いはく、「汝無佛性。」いはゆる道取は、汝はたれにあらず汝に一任すれども、無佛性なりと開演するなり。しるべし學すべし。いまはいかなる時節にして無佛性なるぞ、佛頭にして無佛性なるか、佛向上にして無佛性なるか。七通を逼塞することなかれ、八達を摸索することなかれ。無佛性は一時の三昧なりと修習することもあり。佛性成佛のとき、無佛性なるか、佛性發心のとき、無佛性なるかと問取すべし、道取すべし。露柱をしても問取せしむべし、露柱にも問取すべし、佛性をしても問取せしむべし。しかあればすなはち無佛性の道、はるかに四祖の祖室よりきこゆるものなり、黄梅に見聞し、趙州に流通し、大潙に擧揚す。無佛性の道、かならず精進すべし、趦趄することなかれ。無佛性たどりぬべしといへども、何なる標準あり、汝なる時節あり、是なる投機あり、

【五】第五章。傳燈五に出づ。

周なる同姓あり、直趣なり。五祖いはく、「佛性空故、所以言無。」あきらかに道取す、空は無にあらず、佛性空を道取するに、半斤といはず、八兩といはず、無と言取するなり。空なるゆゑに空といはず、無なるゆゑに無といはず、佛性空なるゆゑに無といふ。しかあれば無の片片は空を道取する標榜なり、空は無を道取する力量なり。いはゆるの空は、色即是空の空にあらず。色即是空といふは、色を強爲して空とするにあらず、空をわかちて色を作家せるにあらず、空是空の空なるべし。空是空の空といふは、空裏一片石なり、しかあればすなはち佛性無と佛性空の佛性有と、四祖五祖、問取道取。

(五)震旦第六祖曹谿山大鑑禪師、そのかみ黄梅山に參せしはじめ、五祖とふ、「なんぢいづれのところよりかきたれる。」六祖いはく、「嶺南人なり。」五祖いはく、「きたりてなにごとをかもとむる。」六祖いはく、「作佛をもとむ。」五祖いはく、「嶺南人無佛性、いかにしてか作佛せん。」この嶺南人無佛性といふ、嶺南人は佛性なしといふにあらず、嶺南人は佛性ありといふにあらず、嶺南人無佛性となり。いかにしてか作佛せんといふは、いかなる作佛をか期するといふなり。おほよそ佛性の道理、あきらむる先達すくなし、諸阿笈摩敎および經論師のしるべきにあらず、佛祖の兒孫のみ單傳するなり。佛性の道理は、佛性は成佛よりさきに具足せるにあらず、成佛よりのちに具足するなり、佛性かならず成佛と同參するなり。この道理、よくよく參究功夫すべし、三二十年も功夫參學すべし。十聖三賢のあきらむるところにあらず。衆生有佛性、衆生無佛性と道取する、この道理なり、成佛已來に具足す

【一隅の搆得】一隅を一隅に牽引する意、搆は牽、餘の方維をひつたくるなり。

る法なりと參學する正的なり。かくのごとく學せざるは、佛法にあらざるべし、かくのごとく學せずば、佛法あへて今日にいたるべからず。もしこの道理あきらめざるには、成佛をあきらめず見聞せざるなり。このゆゑに、五祖は向他道するに嶺南人無佛性と爲道するなり。見佛聞法の最初に、難得難聞なるは、衆生無佛性なり。或從知識、或從經卷するに、きくことのよろこぶべきは、衆生無佛性なり。一切衆生無佛性を、見聞覺知に參飽せざるものは、佛性いまだ見聞覺知せざるなり。六祖もはら作佛をもとむるに、五祖よく六祖を作佛せしむるに、他の道取なし、善巧なし、ただ嶺南人無佛性といふしるべし。無佛性の道取聞取、これ作佛の直道なりといふことを、しかあれば無佛性の正當恁麼時、すなはち作佛なり。無佛性いまだ見聞せず道取せざるは、いまだ作佛せざるなり。六祖いはく、『人有南北なりとも、佛性無南北なり』。この道取を擧して、句裏を功夫すべし。南北の言まさに赤心に照顧すべし、六祖道得の句に宗旨あり、いはゆる人は作佛すとも佛性は作佛すべからずといふ、一隅の搆得あり、六祖これをしるやいなや。四祖五祖の道取する無佛性の道得、はるかに罣礙の力量ある一隅をうけて、迦葉佛および釋迦牟尼佛等の諸佛は、作佛し轉法するに、悉有佛性と道取する力量あるをり。悉有の有、なんぞ無無の無に嗣法せざらん。しかあれば無佛性の語、はるかに四祖五祖の室よりきこゆるなり。このとき、六祖その人ならば、この無佛性の語を功夫すべきなり。有無の無はしばらくおく、いかならんかこれ佛性と問取すべし、なにものかこれ佛性とたづぬべし。いまの人も佛性とききー

【倉卒】物丁寧ならざるなり、仔細の參學なきを排す
【撈摝】撈は沈取なり、摝は沈入水中にして物を取る意、ねんごろに功夫する體なり。
【撈波子】力を入れて視しくす。
【六】第六章。傳燈卷五にあり。

ぬれば、さらにいかなるかこれ佛性と問取せず、佛性の有無等の義をいふがごとし、これ倉卒なり。しかあれば諸無の無は、無佛性の無に學すべし。六祖の道取する人有南北佛性無南北の道、ひさしく再三撈摝すべし、まさに撈波子の力量あるべきなり。六祖の道取する人有南北佛性無南北の道、しづかに拈放すべし。おろかなるやからおもはくは、人間には質礙すれば南北あれども、佛性は虚融にして南北の論におよばずと、六祖は道取せりけるかと推度するは、無分の愚蒙なるべし。この邪解を抛却して、直須勤學すべし。

（六）六祖示門人行昌云、無常者、即佛性也、有常者、即善惡一切諸法分別心也。いはゆる六祖道の無常は、外道二乘等の測度にあらず。二乘外道の鼻祖鼻末、それ無常なりといふとも、かれら窮盡すべからざるなり、しかあれば無常のみづから無常を説著行著證著せんはみな無常なるべし。今以現自身得度者、即現自身而爲説法なり、これ佛性なり。さらに或現長法身、或現短法身なるべし。常聖これ無常なり、常凡これ無常なり。常凡聖ならんには、佛性なるべからず、小量の愚見なるべし、測度の管見なるべし。佛者小量身也、性者小量作也。このゆゑに六祖道取す、無常者佛性也、常者未轉なり。未轉といふは、たとひ能斷と變ずとも、たとひ所斷と化すれども、かならずしも去來の蹤跡にかかはれず、ゆゑに常なり。しかあれば草木叢林の無常なるすなはち佛性なり、人物身心の無常なるこれ佛性なり、國土山河の無常なるこれ佛性なるによりてなり。阿耨多羅三藐三菩提これ佛性なるがゆゑに無常なり、大般涅槃これ無常なるがゆゑに佛性なり。もろもろの二

【七】第七章。傳燈卷一に出づ。龍樹は付法藏の第十四祖。梵音那伽閼羅樹那（Nāgārjuna）龍樹と譯す。龍樹、龍猛、龍勝、第十三祖迦毘摩羅尊者に嗣法す。

乘の小見および經論師の三藏等は、この六祖の道を驚疑怖畏すべし、もし驚疑せんことは魔外の類なり。

〔七〕第十四祖龍樹尊者、梵云ニ那伽閼剌樹那一、唐云ニ龍樹一、亦龍勝、亦云ニ龍猛一、西天竺國人也、至ニ南天竺國一、彼國之人、多信ニ福業一、尊者爲說ニ妙法一、聞者遞相謂曰、「人有ニ福業一、世間第一、徒言ニ佛性一、誰能覩レ之。」尊者曰、「汝欲レ見ニ佛性一、先須レ除ニ我慢一。」彼人曰、「佛性大耶小耶。」尊者曰、「佛性非レ大非レ小、非レ廣非レ狹、無レ福無レ報、不死不生。」彼聞ニ理勝一、悉廻ニ初心一。尊者復於ニ座上一現ニ自在身一如ニ滿月輪一。一切衆會、唯聞ニ法音一、不レ覩ニ師相一。於ニ彼衆中一有ニ長者子迦那提婆一、謂ニ衆會一曰、「識ニ此相一否。」衆會曰、「而今我等目所レ未レ見、耳所レ未レ聞、心無レ所レ識、身無レ所レ住。」提婆曰、「此是尊者現ニ佛性相一、以示ニ我等一。何以知レ之、蓋以ニ無相三昧一、形如ニ滿月一。佛性之義、廓然虛明。」言訖輪相卽隱。復居ニ本座一、而說レ偈言、「身現ニ圓月相一、以表ニ諸佛體一、說法無ニ其形一、用辨ニ非聲色一。」しるべし眞箇の用辨は、聲色の卽現にあらず、眞箇の說法は、無其形なり。尊者かつてひろく佛性を爲說する不可數量なり、いましばらく一隅を略擧するなり。「汝欲見佛性先須除我慢」、この爲說の宗旨、すごさず辨肯すべし。見はなきにあらず、その見これ除我慢なり、我もひとつにあらず慢も多般なり、除法また萬差なるべし。しかあれども、これらみな見佛性なり、眼見目覩にならふべし。佛性非大非小等の道取、よのつねの凡夫二乘に例諸することなかれ、偏枯に佛性は廣大ならんとのみおもへる邪念をたくはへたるなり。大にあらず小にあらざらん、正當恁麽時の道取に罣礙せられん道理、

【迦那提婆】梵音(Kana-deva)龍樹第一の嫡嗣、付法藏の第十五祖。辯論に長じ外道と論議して常に之を悟伏せしむ、爲に五天竺にして提婆宗の名高し。

いま聽取するがごとく思量すべきなり。思量なる聽取を使得するがゆゑに、しばらく尊者の道著する偈を聞取すべし。いはゆる身現圓月相、以表諸佛體なり。すでに諸佛體を以表しきたれる身現なるがゆゑに、圓月相たり。しかあれば一切の長短方圓、この身現に學習すべし。身と現とに轉疎なるは、圓月相にくらきのみにあらず、諸佛體にあらざるなり。愚者おもはくは、尊者かりに化身を現ぜるを圓月相といふとおもふは、佛道を相承せざる黨類の邪念なり、いづれのところかいづれのときか、非身の化現ならん。まさにしるべしこのとき尊者は高座せるのみなり、身現の儀は、いまのたれ人も坐せるがごとくありしなり、この身これ圓月相現なり。身現は方圓にあらず有無にあらず隱顯にあらず、八萬四千蘊にあらず、ただ身現なり。圓月相といふ、這裏是甚麼所在、說細說麤月なり。この身現は先須除我慢なるがゆゑに龍樹にあらず諸佛體なり、以表するがゆゑに諸佛體を透脫す。しかあるがゆゑに佛邊にかかはれず。佛性の滿月を形如する虛明ありとも、圓月相を排列するにあらず。いはんや用辨も聲色にあらず、身現も色身にあらず、蘊處界にあらず。蘊處界に一似なりといへども以表なり、諸佛體なり、これ說法蘊なり、それ無其形なり、無其形さらに無相三昧なるとき身現なり。一衆いま圓月相を望見すといへども、目所未見なるは、說法蘊の轉機なり、現自在身の非聲色なり。即隱即現は輪相の進步退步なり。復於座上現自在身の正當恁麼時は、一切衆會唯聞法音するなり、不覩師相なるなり。尊者の嫡嗣迦那提婆尊者、あきらかに滿月相を識此し、圓月相を識此し、身現を識此し、諸佛性を識

【龍樹未廻心】龍樹初め人生の樂は情欲の滿足にありと爲し、三人の友と謀りて酒色に耽り藏身の術を學びて巧に王宮に出入して姿姬を犯す、事露れて三友命を損す、龍樹獨り免れて飜然欲は却て苦の本たることを悟り迦毘摩羅尊者に投じて眞乘を學ぶ。この亂行の時代を未廻心のときといふ。

比し、諸佛體を譏呲せり。入室瀉瓶の衆たとひおほしといへども提婆と齊肩ならざるべし。提婆は半座の尊なり、衆會の導師なり、全座の分座なり。正法眼藏無上大法を正傳せること、靈山に摩訶迦葉尊者の座元なりしがごとし。龍樹未廻心のさき、外道の法にありしときの弟子おほかりしかども、みな謝遣しきたれり。龍樹すでに佛祖となれりしときは、ひとり提婆を付法の正嫡として、大法眼藏を正傳す、これ無上佛道の單傳なり。しかあるに僭僞の邪群、ままに自稱すらく、われらも龍樹大士の法嗣なり、論をつくり義をあつむるおほく龍樹の手をかれり、龍樹の造にあらず、むかしすてられし群徒の人天を惑亂するなり。佛弟子は、ひとすぢに提婆の所傳にあらざらんは、龍樹の道にあらずとしるべきなり。これ正信得及なり。しかあるに僞なりとしりながら稟受するものおほかり、謗大般若の衆生の愚蒙あはれみかなしむべし。迦那提婆尊者ちなみに龍樹尊者の身現をさして、衆會につげていはく、「此是尊者現二佛性相一以示二我等一、何以知レ之、蓋以二無相三昧一、形如二滿月一、佛性之義、廓然虛明なり。いま天上人間大千法界に流布せる、佛法を見聞せる、前後の皮袋、たれか道取せる、身現相は佛性なり、と。大千界にはただ提婆尊者のみ道取せるなり、餘者はただ佛性は眼見耳聞心識等にあらずとのみ道取するなり。身現は佛性なりとしらざるゆゑに、道取せざるなり。祖師のをしむにあらざれども、眼耳ふさがれて見聞することあたはざるなり、心識いまだおこらずして了別することあたはざるなり。無相三昧の形如滿月なるを望見し禮拜するに、目未所覩なり。佛性之義廓然虛明なり。しかあれば身

現の說佛性なる虛明なり、廓然なり、說佛性の身現なる以表諸佛體なり。いづれの一佛二佛か、この以表を佛體とせざらん。佛體は身現なり、身現なる佛性あり。四大五蘊と道取し會取する、佛量祖量も、かへりて身現の造次なり。すでに諸佛體といふ。蘊處界のかくのごとくなるなり。一切の功德、この功德なり。佛功德は、この身現を究盡し囊括するなり。一切無量無邊の功德の往來は、この身現の一造次なり。しかあるに龍樹提婆師資よりのち、三國の諸方にある、前代後代、ままに佛學する人物、いまだ龍樹提婆のごとく道取せず。いくばくの經師論師等か、佛祖の道を蹉過する。大宋國むかしよりこの因緣を畫せんとするに身に畫し心に畫し空に畫し壁に畫することあたはず。いたづらに筆頭に畫するに、法座上に如鏡なる一輪相を圖して、いま龍樹の身現圓月相とせり、すでに數百歲の霜華を開落して、人眼の金屑をなさんとすれども、あやまるといふ人なし。あはれむべし萬事の蹉跎たることかくのごときなる。もし身現圓月相は一輪相なりと會取せば、眞箇の畫餠一枚なり、弄他せん笑也笑殺人なるべし。かなしむべし大宋一國の在家出家、いづれの一箇も、龍樹のことばをきかずしらず、提婆の道を通ぜずみざること。いはんや身現に親切ならんや、圓月にくらし滿月を虧闕せり、これ稽古のおろそかなるなり、慕古いたらざるなり。古佛新佛、さらに眞箇の身現にあふて、畫餠を賞翫することなかれ。しるべし身現圓月相の相を畫せんには、法座上に身現相あるべし、揚眉瞬目、それ端直なるべし。皮肉骨髓正法眼藏、かならず兀坐すべきなり、破顏微笑つたはるべし、作佛作祖するがゆ

【嘉定十六年】南宋寧宗の年號、日本貞應二年、道元禪師二十四歳。
【阿育王山】支那浙江省寧波府に在り、劉宋元嘉十二年印度曇摩蜜多之を開き寺塔を建て廣利寺と稱す。
【西天東地三十三祖】西天（印度）二十八代、東土（支那）六代、西天四七、東土二三、合せて三十三代、六祖大鑑慧能禪師に至る（達磨大師を西天二十八代と東土の初祖と重ねて數ふ）。
【寶慶元年】日本嘉祿元年、道元禪師二十六歳。

ゑに。この畫いまだ月相ならざるには、形如なし、說法せず、聲色なし、用辨なきなり。もし身現をもとめば、圓月相を圖すべし、圓月相を圖せば、圓月相を圖すべし。身現圓月相なるがゆゑに、圓月相を畫せんとき、滿月相を圖すべし、滿月相を現ずべし。しかあるを身現を畫せず、圓月を畫せず、滿月相を畫せず、諸佛體を圖せず、以表を體せず、說法を圖せず、いたづらに畫餅一枚を圖す、用作什麼。これを急著眼看せん、たれか直至如今飽不飢ならん。月は圓形なり。圓は身現なり、圓を學するに一枚錢のごとく學することなかれ、一枚餅に相似することなかれ。身相圓月身なり、形如滿月形なり。一枚錢一枚餅は、圓に學習すべし。予雲遊のそのかみ、大宋國にいたる、嘉定十六年癸未秋のころ、はじめて阿育王山廣利禪寺にいたる。西廊壁間に、西天東地三十三祖の變相を畫せるをみる、このとき領覽なし。のちに寶慶元年乙酉夏安居のなかにかさねていたるに、西蜀の成桂知客と廊下を行歩するついでに、予知客にとふ「這箇是什麼變相。」知客いはく、「龍樹身現圓月相。」かく道取する顏色に鼻孔なし、聲裏に語句なし。予いはく、「眞箇是一枚畫餅相似。」ときに知客大笑すといへども、笑裏無刀、破畫餅不得なり。すなはち知客と予と舍利殿および六殊勝地等にいたるあひだ、數番擧揚すれども、疑著するにもおよばず。おのづから下語する僧侶も、おほく都不是なり。予いはく、「堂頭にとふてみん。」ときに堂頭は大光和尚なり。知客いはく、「他無鼻孔對不得、如何得知。」ゆゑに光老にとはず、恁麼道取すれども、桂兄も會すべからず、聞說する皮袋も道取せるなし。前後の粥飯頭、みるにあやしま

【笑裏無刀】無意味の阿呆笑ひ。
【粥飯頭】一寺の住持。主人なり。
【八】第八章。鹽官縣齊安國師、馬祖道一禪師の嗣法、杭州鹽官の鎭國護聖院に住す、行化の年時明かならず。此語古尊宿錄に載す。

ず、あらためなほさず、また畫することうべからざらん。法はすべて畫せざるべし、畫すべくは端直に畫すべし、しかあるに身現の圓月相なるかつて畫せるなきなり。おほよそ佛性はいまの慮知念覺ならんと見解することさめざるによりて、有佛性の道にも、無佛性の道にも、通達の端を失せるがごとくなり、道取すべきと學習するもまれなりしるべし。この疎怠は廢せるによりてなり、諸方の粥飯頭すべて佛性といふ道得を一生いはずしてやみぬるもあるなり。あるひはいふ聽教のともがら佛性を談ず、參禪の雲衲はいふべからず。かくのごとくのやからは眞箇是畜生なり、なにといふ魔黨のわが佛如來の道にまじはりけがさんとするぞ。聽教といふことの佛道にあるか、參禪といふことの佛道にあるか、いまだ聽教參禪といふこと佛道にはなしとしるべし。

（八）杭州鹽官縣齊安國師は、馬祖下の尊宿なり。ちなみに衆にしめしていはく、一切衆生有佛性。いはゆる一切衆生の言、すみやかに參究すべし、一切衆生、その業道依正ひとつにあらず、その見まちまちなり、凡夫外道、三乘五乘等、おのおのなるべし。いま佛道にいふ一切衆生は、有心者みな衆生なり。心是衆生なるがゆゑに、無心者おなじく衆生なるべし、衆生是心なるがゆゑに。しかあれば心みなこれ衆生なり、衆生みなこれ有佛性なり、艸木國土これ心なり。心なるがゆゑに衆生なり、衆生なるがゆゑに有佛性なり、日月星辰これ心なり、心なるがゆゑに衆生なり、衆生なるがゆゑに有佛性なり。國師の道取する有佛性、それかくのごとし、もしかくのごとくにあらずば、佛道に道取する有佛性にあらざ

【九】第九章。大潙山大圓禪師の語
出處未考。

るなり。いま國師の道取する宗旨は、一切衆生有佛性のみなり、さらに衆生にあらざらんは有佛性にあらざるべし。しばらく國師にとふべし、『一切諸佛有佛性也無。』かくのごとく問取し試驗すべきなり。一切衆生卽佛性といはず、一切衆生有佛性といふと參學すべし。有佛性の有、まさに脫落すべし。脫落は一條鐵なり、一條鐵は、鳥道なり。しかあれば一切佛性有衆生なり。これその道理は、衆生を說透するのみにあらず、佛性をも說透するなり。國師たとひ會得を得道に承當せずとも、承當の期なきにあらず、今日の道得、いたづらに宗旨なきにあらず、また自己に具する道理、いまだかならずしもみづから會取せざれども、四大五蘊もあり、皮肉骨髓もあり、しかあるがごとく、道取も一生に道取することもあり、道取にかかれる生生もあり。

(九)大潙山大圓禪師、あるとき衆にしめしていはく、『一切衆生無佛性。』これをきく人天のなかに、よろこぶ大機あり、驚疑のたぐひなきにあらず。釋尊の說道は、一切衆生悉有佛性なり、大潙の說道は、一切衆生無佛性なり、有無の言理はるかにことなるべし、道得の當不うたがひぬべし。しかあれども一切衆生無佛性のみ佛道に長なり、鹽官有佛性の道、たとひ古佛とともに一隻の手をいだすににたりとも、なほこれ一條拄杖兩人舁なるべし。いま大潙はしかあらず、一條拄杖呑兩人なるべし。いはんや國師は馬祖の子なり、大潙は馬祖の孫なり。しかあれども法孫は師翁の道に老大なり、法子は師父の道に年少なり。いま大潙道の理致は、一切衆生無佛性を理致とせり、いまだ曠然繩墨外といはず、自家

【一〇】第十章。百丈示衆出處未考。

屋裏の經典、かくのごとくの受持あり、さらに摸索すべし、一切衆生なにとしてか佛性ならん佛性あらん。もし佛性あるは、これ魔黨なるべし。魔子一枚を將來して、一切衆生にかさねんとす。佛性これ佛性なれば、衆生これ衆生なり、衆生もとより佛性を具足せるにあらず、たとひ具せんともとむとも、佛性はじめてきたるべきにあらざる宗旨なり。張公喫酒李公醉といふことなかれ。もしおのづから佛性あらんは、さらに衆生にあらず、すでに衆生あらんは、つひに佛性にあらず。このゆゑに百丈いはく、『說衆生有佛性、亦謗佛法僧、說衆生無佛性、亦謗佛法僧』しかあればすなはち有佛性といひ、無佛性といふ、ともに謗となる、謗となるといふとも、道取せざるべきにはあらず。且問儞大潙百丈、しばらくきくべし、謗はすなはちなきにあらず、佛性は說得すやいまだしや。たとひ說得せば說著を罣礙せん、說著あらば聞著と同參なるべし。また大潙にむかひていふべし、一切衆生無佛性は、たとひ道得すといふとも、一切佛生無衆生といはず、一切佛性無佛性といはず、いはんや一切諸佛無佛性は、夢也未見在なり、試擧看。

〔一〇〕百丈山大智禪師示衆云、『佛是最上乘、是上上智、是佛道立此人、是佛有佛性、是導師、是使得無所礙風、是無礙慧、於後能使得因果、福智自由、是作車運載因果、處於生不被生之所留、處於死不被死之所礙、處於五陰如門開、不被五陰礙、去住自由、出入無難、若能恁麼、不論階梯勝劣、乃至蟻子之身、但能恁麼、盡是淨妙國土不可思議』これすなはち百丈の道處なり、いはゆる五蘊は、いまの不壞身な

【二】第十一章。黄檗在南泉茶堂の文傳燈卷八南泉章に載す。

【定慧等學】涅槃經師子吼品に云く諸佛世尊定慧等しきが故に明かに佛性を見らると。

り。いまの造次は、門閫なり、不被左陰礙なり。生を使得するに、生にとどめられず、死を使得するに、死にさへられず。いたづらに生を愛することなかれ、みだりに死を恐怖することなかれ。すでに佛性の所在なり、動著し厭却するは外道なり、現前の衆縁と認ずるは、使得無礙風なり、これ最上乘なる是佛なり、この是佛の所在すなはち淨妙國土なり。

（二）黄檗在ニ南泉茶堂内一坐、南泉問ニ黄檗一、『定慧等學、明見佛性、此理如何。』黄檗曰、『十二時中不レ依ニ倚一物一始得。』南泉云、『莫ニ便是長老見處一麼。』黄檗曰、『不敢。』南泉云、『醬水錢且致、草鞋錢敎ニ什麼人還一。』黄檗便休。いはゆる定慧等學の宗旨は、定學の慧學をさへざれば、等學するところに明見佛性のあるにはあらず、明見佛性のところに定慧等學の學あるなり、此理如何と道取するなり。たとへば明見佛性はたれが所作なるぞと道取せんもおなじかるべし、佛性等學明見佛性此理如何と道取せんも道得なり。黄檗いはく、十二時中不依倚一物といふ宗旨は、十二時中たとひ十二時中に所在せりとも、不依倚なり。不依倚一物、これ十二時中なるがゆゑに、佛性明見なり。この十二時中いづれの時節到來なりとかせん、いづれの國土なりとかせん。いまいふ十二時は、人間の十二時なるべきか、他那裏に十二時のあるか、白銀世界の十二時のしばらくきたれるか。たとひ此土なりとも、たとひ他界なりとも、不依倚なり。すでに十二時中なり、不依倚なるべし、莫便是長老見處麼といふは、これを見處とはいふまじやといふがごとし。長老見處麼と道取すとも、自己なるべしと回頭すべからず。自己に的當なりとも、黄檗に

あらず、黄檗かならずしも自己のみにあらず。長老見處は、露迥迥なるがゆゑに。」黄檗いはく、『不敢。』この言は、宋土におのれにある能を問取せらるるには、能を能といはんとても、不敢といふなり。しかあれば不敢の道は不敢にあらず、この道得は、この道取なることはかるべきにあらず。長老見處たとひ長老なりとも、長老見處たとひ黄檗なりとも、道取するには不敢なるべし。一頭水牯牛出來道吽吽なるべし。かくのごとく道取するは、道取なり。道取する宗旨、さらにまた道取たる道取、こころみに道取してみるべし。南泉いはく、『漿水錢且致、草鞋錢教二什麼人還一。』いはゆるは、こんづのあたひはしばらくおく、草鞋のあたひは、たれをしてかかへさしめんなり。この道取の意旨、まさしく生生をつくして參究すべし。漿水錢いかなればしばらく不管なる、留心勤學すべし。草鞋錢なにとしてか管得する、行脚の年月に、いくばくの草鞋をか踏破しきたれるとなり。いまいふべし『若不レ還レ錢、未レ著二草鞋一。』またいふべし、『兩三緉。』この道得なるべし、この宗旨なるべし。黄檗便休。これは休するなり、不肯せられて休し、不肯にて休するにあらず、本色衲子しかあらず。しるべし休裏有道は、笑裏有刀のごとくなり。これ佛性明見の粥足飯足なり。この因縁を擧して、潙山、仰山にとふていはく、『莫下是黄檗搆二他南泉一不上得麼。』仰山いはく、『不レ然、須レ知黄檗有二陷虎之機一。』潙山いはく、『子見處得二恁麼長一。』大潙の道は、そのかみの黄檗は南泉を搆不得なりやといふ。仰山いはく、『黄檗は陷虎の機あり、すでに陷虎することあらば、捋虎頭なるべし。』陷虎捋虎異類中行、明見

【一二】第十二章。趙州錄上卷に出づ。

【鐵漢また學道】李遵勗の偈に、學道須是鐵漢、著手心頭便判、直趣無上菩提、一切是非莫管と。

【消石の日】那先問經に小石を持して世間の火中に著くが如き、暮に至るも消せず、大石を取りて泥犁の火中に著けば即ち消すと無にとろけこむなり。

【一三】第十三章。同上。

佛性也闕一隻眼、佛性明見也失一隻眼、速道速道、佛性見處、得恁麼長」なり。このゆゑに半物全物、これ不依倚なり、百千物不依倚なり、百千時不依倚なり。このゆゑにいはく、「籮籠一枚、時中十二、依倚不依倚、如葛藤倚樹、天中及全天、後頭未有語」なり。

(一二)趙州眞際大師に、ある僧とふ、「狗子還有佛性也無。」この問の意趣あきらむべし。狗子とはいぬなり、かれに佛性あるべしと問取せず、なかるべしと問取するにあらず、これは鐵漢また學道するかと問取するなり。あやまりて毒手にあふうらみふかしといへども、三十年よりこのかた、さらに半箇の聖人をみる風流なり。趙州いはく、「無。」この道をききて習學すべき方路あり。佛性の自稱する無も、恁麼道なるべし、狗子の自稱する無も、恁麼道なるべし、傍觀者の喚作の無も、恁麼道なるべし。その無わづかに消石の日あるべし。僧いはく、「一切衆生皆有佛性、狗子爲甚麼無。」いはゆる宗旨は一切衆生無ならば、佛性も無なるべし、狗子も無なるべしといふ、その宗旨作麼生となり。狗子佛性、なにとして無をまつことあらん。趙州いはく、「爲他有業識在。」この道旨は、爲他有は業識なり、業識有、爲他有なりとも、狗子無、佛性無なり。業識いまだ狗子を會せず、狗子いかでか佛性にあはん、たとひ雙放雙收すとも、なほこれ業識の始終なり。

(一三)趙州有僧問、「狗子還有佛性也無。」この問取は、この僧搆得趙州の道理なるべし。しかあれば佛性の道取問取は、佛祖の家常茶飯なり。」趙州いはく、「有。」この有の樣子は、教家の論師等の有にあらず、有部の論有にあらざるなり。すすみて佛有を學すべし、佛有

【入之一字】類聚の八に仰山拂子を竪てて云く這箇の如きんば作麼生か入らん、郎中云く入の一字亦明め難しと。

【欲識菴中】石頭艸菴歌の末句。

【一四】第十四章。傳燈卷十長沙章に出づ。

は趙州有なり、趙州有は狗子有なり、狗子有は佛性有なり。」僧いはく、『既有、爲二甚麼一却撞二入這皮袋一。』この僧の道得は、今有なるが古有なるか既有なるかと問取するに、既有は諸有に相似せりといふとも、既有は孤明なり既有は撞入すべきか、撞入すべからざるか、撞入這皮袋の行履、いたづらに蹉過の功夫ならず。」趙州いはく、『爲二他知而故犯一。』この語は世俗の言語として、ひさしく途中に流布せりといへども、いまは趙州の道得なり。いふところは、しりてことさらをかすとなり。この道得は、疑著せざらん、すくなかるべし。いま一字の入あきらめがたしといへども、入之一字も、不用得なり。いはんや欲識菴中不死人、豈離只今這皮袋なり。不死人はたとひ阿誰なりとも、いづれのときか皮袋に莫離なる、故犯はかならずしも入皮袋にあらず。撞入這皮袋、かならずしも知而故犯にあらず、知而のゆゑに故犯あるべきなり。しるべしこの故犯、すなはち脫體の行履を覆藏せるならん、これ撞入と說著するなり、脫體の行履、その正當覆藏のとき、自己にも覆藏し、他人にも覆藏す。しかもかくのごとくなりといへども、いまだのがれずと、いふことなかれ、『驢前馬後漢。』いはんや雲居高祖いはく、『たとひ佛法邊事を學得する、はやくこれ錯用心了也。』しかあれば、半枚學佛法邊事、ひさしくあやまりきたること、日深月深なりといへどもこれ這皮袋に撞入する狗子なるべし、知而故犯なりとも、有佛性なるべし。

(一四)長沙景岑和尙の會に、竺尙書とふ、『蚯蚓斬爲二兩段一、兩頭俱動、未審佛性在二阿那箇頭一。』師云、『莫二妄想一。』書曰、『爭二奈動一何。』師云、『只是風火未レ散。』いま尙書

いはくの蚯蚓斬爲兩段には、未斬時は一段なりと決定するか、佛祖の家常に不恁麼なり、蚯蚓もとより一段にあらず、蚯蚓きれて兩段にあらず、一兩の道取、まさに功夫參學すべし。兩頭俱動といふ兩頭は、未斬よりさきを一頭とせるか、佛向上を一頭とせるか、兩頭の語、たとひ尙書の會不會にかかはるべからず、語話をすつることなかれ。きれたる兩段は一頭にして、さらに一頭のあるか、その動といふに俱動といふ、定動智拔ともに動なるべきなり。未審、佛性在阿那箇頭、佛性斬爲兩段、未審蚯蚓在阿那箇頭といふべし、この道得は審細にすべし。兩頭俱動佛性在阿那箇頭といふは、俱動ならば佛性の所在に不堪なりといふか、俱動なれば動はともに動ずといふとも、佛性の所在は、そのなかにいづれなるべきかといふか。師いはく、「莫妄想」この宗旨は、作麼生なるべきぞ、妄想することなかれといふなり、しかあれば兩頭俱動するに妄想なし、妄想にあらずといふか、ただ佛性は妄想なしといふか、佛性の論におよばず、兩頭の論におよばず、ただ妄想なしと道取するかとも參究すべし。動ずるはいかがせんといふは、動ずればさらに佛性一枚をかさぬべしと道得するか、動ずれば佛性にあらざらんと道著するか。風火未散といふは、佛性を出現せしむるなるべし、佛性なりとやせん風火なりとやせん。佛性と風火と俱出すといふべからず。一出一不出といふべからず、風火すなはち佛性といふべからず、ゆゑに長沙は蚯蚓有佛性といはず、蚯蚓無佛性といはず、ただ莫妄想と道取す、風火未散と道取す。佛性の活計は、長沙の道を卜度すべし。風火未散といふ言語、しづかに功夫すべし、未散

といふは、いかなる道理かある、風火のあつまれりけるが散ずべき期いまだしきと道取するに、未散といふか、しかあるべからざるなり。風火未散はほとけ法をとく、未散風火は法ほとけをとく、たとへば一音の法をとく時節到來なり、說法の一音なる到來の時節なり。法は一音なり。一音の法なるゆゑに、また佛性は生のときのみにありて死のときはなかるべしとおもふ、もとも少聞薄解なり、生のときも有佛性なり、無佛性なり、死のときも有佛性なり、無佛性なり、風火の散未散を論ずることあらば、佛性の散不散なるべし。たとひ散のときも佛性有なるべし、佛性無なるべし、たとひ未散のときも有佛性なるべし、無佛性なるべし。しかあるを佛性は動不動によりて在不在し、識不識によりて神不神なり。知不知は性不性なるべきと邪執せるは、外道なり。無始劫來は、癡人おほく識神を認じて、佛性とせり、本來人とせる、笑殺人なり。さらに佛性を道取するに、拕泥滯水なるべきにあらざれども、牆壁瓦礫なり。向上に道取するとき、作麼生ならんかこれ佛性、還委悉麼、三頭八臂。

爾時仁治二年辛丑十月十四日在雍州觀音導利興聖寶林寺示衆

正法眼藏佛性　畢

【無始劫來は癡人】長沙竺尙書に偈を示して云く學道之人不識眞、只爲從前認識神、無始劫來生死本、癡人喚作本來人と。

【仁治二年】前卷の如し。

【行佛威儀】諸佛の威儀は自行化他なり、又行住坐臥の四威儀なり。諸佛は能行の人にして威儀は所行の法なりと謂はば佛法に非ず、諸佛必ず威儀を行足し、諸佛をおいて威儀無く、威儀をおいて諸佛無きを行佛威儀といふ、佛と威儀と隙間無きを行佛と爲す、威儀卽佛法、作法是宗旨の純一無雜なるを闡演する一卷なり。分つて二段となし前段を十一章、後段を三章と爲す。【一】以下第一段十一章の中の第一章。行佛の超越無邊なるを明す。【二】第二章。佛の佛縛法縛を離却するを明す、【無繩自縛】高僧傳の誌公章に云く相に著する者は蠶の繩無くして自ら縛するが如しと。

正法眼藏行佛威儀

(一)諸佛かならず威儀を行足す、これ行佛なり。行佛それ報佛にあらず、化佛にあらず。自性身佛にあらず、他性身佛にあらず。始覺本覺にあらず、性覺無覺にあらず。如是等佛たえて行佛に齊肩することうべからず。しるべし諸佛の佛道にある、覺をまたざるなり、佛向上の道に行履を通達せること、唯行佛のみなり、自性佛等夢也未見在なるところなり。この行佛は、頭頭に威儀現成するゆゑに、身前に威儀現成す。道前に化儀漏泄すること、亙時なり亙方なり、亙佛なり亙行なり。(二)行佛にあらざれば、佛縛法縛いまだ解脫せず、佛魔法魔に黨類せらるるなり。佛縛といふは、菩提を菩提と知見解會する、卽知見卽解會に卽縛せられぬるなり。一念を經歷するに、なほいまだ解脫の期を期せず、いたづらに錯解す、菩提をすなはち菩提なりと見解せん、これ菩提相應の知見なるべし、たれかこれを邪見といはん。想憶す、これすなはち無繩自縛なり。縛縛綿綿として、樹倒藤枯にあらず、いたづらに佛邊の窠窟に活計せるのみなり。法身のやまふをしらず、報身の窮をしらず。教家經師論師等の、佛道を遠聞せるなほしいはく、『卽於法性、起法性見、卽是無明。』この教家のいはくは、法性に法性の見おこるに、法性の縛をいはず、さらに無明の縛をかさぬ、法性の縛あることをしらず、あはれむべしといへども、無明縛のかさなれるをしれるは、

【我本行菩薩道】法華壽量品の文。

【三】第三章。修證の不染汙を明す

【曹溪いはく祇此】傳燈南嶽章に出づ

【明行足】如來十號の一。如來は明行を圓かに具足するが故に。

【四】第四章。行佛の佛量心量を超越することを明す

發菩提心の種子となりぬべし。いま行佛かつてかくのごとくの縛に縛せられざるなり、かるがゆゑに我本行菩薩道、所成壽命、今猶未盡、復倍上數なり。しるべし菩薩の壽命いまに連綿とあるにあらず、佛壽命の過去に布徧せるにあらず。いまいふ上數は、全所成なり、いひきたる今猶は全壽命なり。我本行、たとひ萬里一條鐵なりとも、百年抛却任縱橫なり。しかあればすなはち修證は無にあらず、修證は有にあらず、修證は染汙にあらず。無佛無人の所在に、百千萬ありといへども、行佛を染汙せず、ゆゑに行佛の修證に染汙せられざるなり。修證の不染汙なるにはあらず、この不染汙、それ不無なり。(三)曹谿いはく、「祇此不染汙、是諸佛之所護念、汝亦如是、吾亦如是、乃至西天諸祖亦如是。」しかあればすなはち汝亦如是のゆゑに諸佛なり、吾亦如是のゆゑに諸佛なり、まことにわれにあらずなんぢにあらず。この不染汙に、如吾是吾、諸佛所護念、これ行佛威儀なり。如汝是汝、諸佛所護念、これ行佛威儀なり。吾亦のゆゑに師勝なり、汝亦のゆゑに資強なり、師勝資強、これ行佛の明行足なり。しるべし、是諸佛之所護念と、吾亦なり、汝亦なり、曹谿古佛の道得、たとひわれにあらずとも、なんぢにあらざらんや。行佛之所護念、行佛之所通達、それかくのごとし。かるがゆゑにしりぬ修證は性相本末等にあらず、行佛の去就、これ果然として佛を行ぜしむるに、佛すなはち行ぜしむ。さらに爲法捨身あり、爲身捨法あり、不惜身命あり、但惜身命なり。法のために法をすつるのみにあらず、心のために法をすつる威儀あり、捨は無量なることわするべからず。(四)佛量を拈來して、大道を測量し度

【五】第五章。這頭那頭の兩頭を超越することを明す

量すべからず。佛量は一隅なり、たとへば華開のごとし。心量を擧來して、威儀を摸索すべからず、擬議すべからず。心量は一面なり、たとへば世界のごとし、一莖艸量あきらかに佛祖心量なり、これ行佛の蹤跡を認ぜる一片なり。一心量、たとひ無量佛量を包含せりと見徹すとも、行佛の容止動靜を量せんと擬するには、もとより過量の面目あり、過量の行履なるがゆゑに、即不中なり、使不得なり、量不及なり。しばらく行佛威儀に一究あり、即佛即自と、恁麼來せるに、吾亦汝亦の威儀、それ唯我能にかかはれりといふとも、すなはち十方佛然の脫落、これ同條のみにあらず。かるがゆゑに古佛いはく、體取那邊事、却來這裏行履。すでに恁麼保任するに、諸法、諸身、諸行、諸佛、これ親切なり。この行法身佛、おのおの承當に罣礙あるのみなり、承當に罣礙あるがゆゑに、承當に脫落あるのみなり。眼礙の明明百艸頭なる不見一法、不見一物と動著することなかれ。這法に若至なり、那法に若至なり。拈來拈去出入同門に行履する、徧界不曾藏なるがゆゑに、世尊の密語密證、密行密付等あるなり。出門便是艸、入門便是艸、萬里無寸艸なり。入之一字、出之一字、這頭也不用得、那頭也不用得なり。いまの把捉は、放行をまたざれども、これ夢幻空華なり。たれかこれを夢幻空華と將錯就錯せん。進歩也錯、退歩也錯、一歩也錯兩歩也錯なるがゆゑに錯錯なり。天地懸隔するがゆゑに、至道無難なり、威儀儀威大道體寛と究竟すべし。しるべし出生合道出なり、入死合道入なり。その頭正尾正に、玉轉珠廻の威儀現前するなり。佛威儀の一隅を遣有するは、盡乾坤大地なり、盡生死去來なり、

【六】第六章。四生を超越することを明す。

【七】第七章。生死を超越することを明す。

塵刹なり、蓮華なり、これ塵刹蓮華おのおの一隅なり。學人おほくおもはく盡乾坤といふは、この南贍部洲をいふならんと擬せられ、またこの一四洲をいふならんと擬せられ、ただまた神丹一國おもひにかかり、日本一國おもひめぐるがごとし。また盡大地といふも、ただ三千大千世界とおもふがごとし、わづかに一州一縣をおもひにかくるがごとし。盡大地盡乾坤の言句を參學せんこと、三次五次もおもひめぐらすべし、ひろきにこそはとてやみぬることなかれ。この得道は、極大同小極小同大の超佛越祖なるなり、大の有にあらざる、小の有にあらざる、疑著にたりといへども、威儀行佛なり。佛佛祖祖の道取する、盡乾坤の威儀、盡大地の威儀、ともに不曾藏の徧界と參學すべし。徧界不曾藏なるのみにはあらざるなり、これ行佛一中の威儀なり。佛道を說著するに、胎生化生等は、佛道の行履なりといへども、いまだ濕生卵生等を道取せず。いはんやこの胎卵濕化生のほかに、なほ生あること、夢也未見在なり、いかにいはんや胎卵濕化生のほかに、胎卵濕化生あることを見聞覺知せんや。いま佛佛祖祖の大道には、胎卵濕化生のほかの胎卵濕化生あること、不曾藏に正傳せり、親密に正傳せり。この道得、きかず、ならはず、しらず、あきらめざらんは、なにの黨類なりとかせん。すでに四生はきくところなり、死はいくばくかある。四生には四死あるべきか、また三死二死あるべきか、また五死六死、千死萬死あるべきか。この道理、わづかに疑著せんも參學の分なり。しばらく功夫すべし。この四生衆類のなかに、生はありて、死なきものあるべしや、また死のみ單傳にして、生を單傳せざる

【八】第八章。佛土の無邊なることを明す。

ありや。單生單死の類の有無、かならず參學すべし。わづかに無生の言句をききて、あきらむることなく、身心の功夫をさしおくがごとくするものもあり、これ愚鈍のはなはだしきなり、信法頓漸の論にもおよばざる畜類といひぬべし。ゆゑいかんとなれば、たとひ無生ときくといふとも、この道得の意旨作麼生なるべし。さらに無佛無道無心無滅なるべしや、無有生なるべしや、無法界無法性なるべしや、無死なるべしやと功夫せず、いたづらに水艸の但念なるがゆゑなり。しるべし生死は佛道の行履なり、生死は佛家の調度なり、使也要使なり、明也明得なり。ゆゑに諸佛はこの通達に明明なり、この要使に得得なり。この生死の際にくらからん、たれかなんぢをなんぢといはん、たれかなんぢを了生達死の漢といはん。生死にしづむときくべからず、生死にありとしるべからず、生死を生死なりと信受すべからず、不會すべからず、不知すべからず。(八)あるひはいふ、ただ人道のみに諸佛出世す、さらに餘方餘道には出現せずとおもへり。いふがごとくならば佛在のところ、みな人道なるべきか。これは人佛の唯我獨尊の道得なり、さらに天佛もあるべし、佛佛もあるべきなり。諸佛は唯人間のみに出現すといはんは、佛祖の閫奥にいらざるなり。祖宗いはく、釋迦牟尼佛、自ニ從迦葉佛所ニ傳ニ正法一、往ニ兜率天一、化ニ兜率陀天一、于レ今有レ在。まことにしるべし人間の釋迦は、このとき滅度現の化をしけりといへども、上天の釋迦は、于今有在にして、化天するものなり。學人しるべし人間の釋迦の千變萬化の道著あり、行取あり、説著あるは、人間一隅の放光現瑞なり。おろかに上天の釋迦、その化さらに千品

【九】第九章。凡聖を超越することを明す。

萬門ならん、しらざるべからず。佛佛正傳する、大道の斷絶を超越し、無始無終を脫落せる宗旨、ひとり佛道のみに正傳せり、自餘の諸類、しらずきかざる功德なり。行佛の設化するところには、四生にあらざる衆生あり、天上人間にあらざるところあるべし。行佛の威儀を覷見せんとき、天上人間のまなこをもちゐるべからず、天上人間の情量をもちゐるべからず、これを擧して測量せんと擬することなかれ。十聖三賢なほこれをしらずあきらめず、いはんや人中天上の測量のおよぶことあらんや。人量短小なるには、識智も短小なり、壽命短促なるには、思慮も短促なり、いかにして行佛の威儀を測量せん。しかあればすなはちただ人間を擧して佛法とし、人法を擧して佛法を局量せる家門、かれこれともに佛子と許可することなかれ。これただ業報の衆生なり、いまだ身心の聞法あるにあらず、いまだ行道せる身心なし、從法生にあらず、從法滅にならず、從法見にあらず、從法聞にあらず、從法行住坐臥にあらず。かくのごとくの黨類かつて法の潤益なし。行佛は、本覺を愛せず、始覺を愛せず、無覺にあらず、有覺にあらずといふ、すなはちこの道理なり。いま凡夫の活計する、有念無念、有覺無覺、始覺本覺等、ひとへに凡夫の活計なり、佛佛相承せるところにあらず。凡夫の有念と、諸佛の有念と、はるかにことなり、比擬することなかれ。凡夫の本覺と活計すると、諸佛の本覺を證せると、天地懸隔なり、比論の所及にあらず。十聖三賢の活計、なほ諸佛の道におよばず、いたづらない算沙の凡夫、いかでかはかることあらん。しかあるをわづかに凡夫外道の本末の邪見を活計して、諸佛

【二〇】第十章。妙出修の無邊なることを明す。

の境界とおもへるやからおほし。諸佛いはく、「此輩罪根深重なり、可憐愍者なり」深重の罪根たとひ無端なりとも、此輩の深重擔なり。この深重擔、しばらく放行して著眼看すべし、把定して自己を礙すといふとも、起首にあらず。いま行佛威儀の無礙なる、ほとけに擬せらるるに拕泥滯水の活路を通達しきたるゆゑに、無罣礙なり。上天にしては化天す、人間にしては化人す、華開の功德あり、世界起の功德あり。かつて間隙なきものなり。このゆゑに自他に迥脱あり、往來に獨拔あり。即往兜率天なり、即來兜率天なり。即即兜率天なり、即往安樂なり、即來安樂なり、即即安樂なり、即迥脱兜率なり、即迥脱安樂なり、即打破百雜碎安樂兜率なり、即把定放行安樂兜率なり、一口呑盡なり。しるべし安樂兜率といふは淨土天堂、ともに輪廻することの同般なるとなり。行履なれば淨土天堂、おなじく行履なり、大悟なればおなじく大悟なり、大迷なればおなじく大迷なり。これしばらく行佛の鞋裏の動指なり。あるときは、一道の放屁聲なり、放屎香なり。鼻孔あるは嗅得す、耳處身處行履處あるに聽取するなり。また得吾皮肉骨髓するときあり、さらに行得に他よりえざるものなり。了生達死の大道すでに豁達するに、ふるくよりの道取あり。大聖は、生死を心にまかす、生死を身にまかす、生死を道にまかす、生死を生死にまかす。この宗旨あらはるる、古今のときにあらずといへども、行佛の威儀、忽爾として行盡するあり、道環として生死身心の宗旨すみやかに辦肯するなり。行盡明盡、これ強爲の爲にあらず、迷頭認影に大似なり、迴光返照の一如なり、その明上又明の明は、行佛の彌綸なり、こ

【二】第十一章は透脱無礙なることを明す。第一段終り。

れ行取に一任せり。この任任の道理、すべからく心を參究すべきなり。その參究の兀爾は、萬囘これ心の明白なり、三界ただ心の大隔なりと知及し會取す。この知及會取、さらに萬法なりといへども、自己の家鄕の行取せり、當人の活計を便是なり。しかあれば句中取則し、言外求巧する、再三撈摝、それ把定にあまれる把定あり、放行にあまれる放行あり。その功夫は、いかなるかこれ生、いかなるかこれ死、いかなるかこれ身心、いかなるかこれ與奪、いかなるかこれ任違、それ同門出入の不相逢なるか、一著落在に藏身露角なるか、大慮而解なるか、老思而知なるか、一顆明珠なるか、一大藏教なるか、一條拄杖なるか、一枚面目なるか、三十年後なるか、一念萬年なるか、子細に檢點し、檢點を子細にすべし。檢點の子細にあたりて、滿眼聞聲滿耳見色、さらに沙門一隻眼の開明なるに、不是目前法なり、不是目前事なり、雍容の破顏あり、瞬目あり、これ行佛の威儀の暫爾なり、被物牽にあらず、不牽物なり、緣起の無生無作にあらず、本性法性にあらず、住法位にあらず、本有然にあらず、如是を是するのみにあらず、ただ威儀行佛なるのみなり。

(二)しかあればすなはち爲法爲身の消息、よく心にまかす、脫生脫死の威儀、しばらくほとけに一任せり、ゆゑに道取あり、萬法唯心、三界唯心、さらに向上に道得するに、唯心の道得あり、いはゆる牆壁瓦礫なり、唯心にあらざるがゆゑに、牆壁瓦礫にあらず、これ行佛の威儀なる、任心任法、爲法爲身の道理なり、さらに始覺本覺等の所及にあらず、いはんや外道二乘三賢十聖の所及ならんや、この威儀ただこれ面面の不會なり、枚枚の不會なり。

【一】第二段の第一章。雪峰玄沙の火焰裏説法及び圜悟の頌古。
【二】第二章。道元禪師雪峰玄沙の本則を拈提す。

たとひ活鱍鱍地も、條條聻なり。一條鐵か、兩頭動か、一條鐵は長短にあらず、兩頭動は自他にあらず。この展事投機のちから功夫をうるに、威掩萬法なり、眼高一世なり。收放をさへざる光明あり、僧堂佛殿厨庫三門なり、さらに十方通のまなこあり、大地全收のまなこあり、心のまへあり、心のうしろあり。かくのごとくの眼耳鼻舌身意光明功德の熾然なるゆゑに、不知有を保任せる三世諸佛あり、却知有を投機せる貍奴白牯あり、この巴鼻あり、この眼睛あるは、法の行佛をとき法の行佛をゆるすなり。

(二)雪峯山眞覺大師、示衆云「三世諸佛、在火焰裏、轉大法輪。」玄沙院宗一大師曰「火焰爲三世諸佛説法、三世諸佛立地聽。」圜悟禪師曰「將謂侯白、更有侯黑。互換投機、神出鬼沒。烈焰亙天佛説法、亙天烈焰法説佛。風前剪斷葛藤窠、一言勘破維摩詰。」(三)いま三世諸佛といふは、一切諸佛なり、行佛はすなはち三世諸佛なり。十方諸佛、ともに三世にあらざるなし、佛道は三世をとくにかくのごとく説盡するなり。いま行佛をたづぬるにすなはち三世諸佛なり、たとひ知有なりといへども、たとひ不知有なりといへども、かならず三世諸佛なる行佛なり。しかあるに三位の古佛、おなじく三世諸佛を道得するに、かくのごとくの道あり。しばらく雪峯のいふ三世諸佛在火焰裏轉大法輪といふ、この道理ならふべし、三世諸佛の轉法輪の道場は、かならず火焰裏なるべし、火焰裏かならず佛道場なるべし、經師論師きくべからず、外道二乘しるべからず。しるべし諸佛の火焰は諸類の

火焔なるべからず、また諸類は火焔あるかなきかとも照顧すべし、三世諸佛の在火焔裏の化儀ならふべし。火焔裏に處在するときは、火焔と諸佛と、親切なるか、轉疎なるか、依正一如なるか、依報正報あるか、依正同條なるか、依正同隔なるか。轉大法輪は、轉自轉機あるべし、展事投機なり轉法法轉あるべし、すでに轉法輪といふ、たとひ盡大地これ盡火焔なりとも、轉火輪の法輪あるべし、轉諸佛の法輪あるべし、轉法輪の法輪あるべし、轉三世の法輪あるべし。しかあればすなはち火焔は、諸佛の轉大法輪の大道場なり。これを界量、時量、人量、凡聖量等をもて、測量するはあたらざるなり。これらの量に量せられざれば、すなはち三世諸佛在火焔裏轉大法輪なり。すでに三世諸佛といふ、これ量を超越せるなり、三世諸佛、轉法輪の道場なるがゆゑに、火焔あるなり、火焔あるがゆゑに諸佛の道場あるなり。玄沙いはく、「火焔の三世諸佛のために說法するに、三世諸佛は、立地聽法す」この道をききて、玄沙の道は、雪峯の道よりも道得是なりといふか、かならずしもしかあらざるなり。しるべし雪峯の道は、玄沙の道と別なり。いはゆる雪峯は三世諸佛の轉大法輪の處在を道取し、玄沙は三世諸佛の聽法を道取するなり。雪峯の道、まさしく轉法を道取すれども、轉法の處在かならずしも聽法不聽法を論ずるにあらず、しかあれば轉法にかならず聽法あるべしときこえず、また三世諸佛爲火焔說法といはず、三世諸佛爲三世諸佛轉大法輪といはず、火焔爲火焔轉大法輪といはざる宗旨あるべし。轉法輪といふ、轉大法輪といふ、その別あるか、轉法輪は說法にあらず、說法かならずしも爲他あら

んや。しかあれば雪峯の道の道取すべき道を道取しつくさざる道にあらず、雪峯の在火焰裏、轉大法輪、かならず委悉に參學すべし、玄沙の道に混亂することなかれ、雪峯の道を通ずるは、佛威儀を威儀するなり。火焰の三世諸佛を在裏せしむる。一無盡法界、二無盡法界の周徧のみにあらず、一微塵二微塵の通達のみにあらず。轉大法輪を量として、大小廣狹の量に擬することなかれ、轉大法輪は、爲自爲他にあらず、爲説爲聽にあらず、玄沙の道に、火焰爲三世諸佛説法、三世諸佛立地聽といふ。これは火焰たとひ爲三世諸佛説法すとも、いまだ轉法輪すといはず、また三世諸佛の法輪を轉ずといはず、三世諸佛は立地聽すとも、三世諸佛の法輪いかでか火焰これを轉ずることあらん。爲三世諸佛説法する火焰、また轉大法輪すや、いなや、玄沙もいまだいはず轉法輪はこのときなりと、轉法輪なしといはず、しかあれども想料すらくも、玄沙おろかに轉法輪は説法輪ならんと會取せるか、もししかあらばなほ雪峯の道にくらし。火焰の三世諸佛のために説法のとき、三世諸佛立地聽法すとはしれりといへども、火焰轉法輪のところに、火焰立地聽法すとしらず、火焰轉法輪のところに火焰同轉法輪すといはず。三世諸佛の聽法は、諸佛の法なり、他よりかうぶらしむるにあらず、火焰を法と認ずることなかれ、火焰を佛と認ずることなかれ、火焰を火焰と認ずることなかれ。まことに師資の道なほざりなるべからず、將謂赤鬚胡のみならんや、さらにこれ胡鬚赤なり。玄沙の道かくのごとくなりといへども、參學の力量とすべきところあり、いはゆる經師論師の大乘小乘の局量の性相にかかはれず、佛

【若說此經】法華寶塔品の文。

【三】第三章。道元禪師圜悟の頌古を拈提す。

佛祖祖正傳せる性相を參學すべし。いはゆる三世諸佛の聽法なり、これ大小乘の性相にあらざるところなり、諸佛は機緣に逗する說法ありとのみしりて、諸佛聽法すといはず、諸佛修行すといはず、諸佛成佛すといはず。いま玄沙の道には、すでに三世諸佛立地聽法といふ、諸佛聽法する性相あり。かならずしも能說をすぐれたりとし、能聽是法者を劣なりといふことなかれ。說者尊なれば、聽者も尊なり。『釋迦牟尼佛言若說此經、則爲見我、爲一人說、是則爲難。』しかあれば能說法は、見釋迦牟尼佛なり、則爲見我は、釋迦牟尼佛なるがゆゑに。またいはく『於我滅後、聽受此經、問其義趣、是則爲難。』しるべし聽受者もおなじく是則爲難なり、勝劣あるにあらず、立地聽これ最尊なり諸佛なりといふとも立地聽法あるべきなり、立地聽法、これ三世諸佛なるがゆゑに。諸佛は果上なり、因中の聽法をいふにあらず、すでに三世諸佛とあるがゆゑに。しるべし三世諸佛は、火焰の說法を立地聽して諸佛なり。一道の化儀たどるべきにあらず、たどらんとするに箭鋒相拄せり。火焰は決定して三世諸佛のために說法す、赤心片片として、鐵樹華開世界香なるなり。且道すらくは、火焰の說法を立地聽しもてゆくに、畢竟して現成箇什麼、いはゆるは智勝于師なるべし、智等于師なるべし。さらに師資の閫奧に參究して、三世諸佛なるなり。(三)圜悟いはくの侯白と將謂する、さらに侯黑をさへざる、互換の投機それ神出鬼沒なり。これは玄沙と同條出すれども、玄沙に同條入せざる一路もあるべしといへども、火焰の諸佛なるか、諸佛を火焰とせるか、黑白互換のこころ、玄沙の神鬼に出沒すといへども、雪峯の聲色、

【得者不輕微】會元十二雲居章に云く、得者不輕微、明者不賤用、識者不吝嗟、解者無厭惡と。【仁治二年】前巻の例に據る。

いまだ黒白の際にのこらず、しかもかくのごとくなりといへども、玄沙に道是あり道不是あり、雪峯に道拈あり道放あることをしるべし。いま圜悟さらに玄沙に同ぜず、雪峯に同ぜざる道あり。いはゆる烈焔亙天はほとけ法をとくなり、亙天烈焔は法ほとけをとくなり。この道は、眞箇これ晩進の光明なり。たとひ烈焔にくらしといふとも、亙天におほはれば、われその分あり、他この分あり。亙天のおほふところすでにこれ烈焔なり、這箇をきらふて用那頭は作麼生なるのみなり。よろこぶべしこの皮袋子、うまれたるところは去聖方遠なり、いけるいまは去聖時遠なりといへども、亙天の化導なほきこゆるにあへり。いはゆるほとけ法をとくことは、きくところなりといへども、法ほとけをとくことは、いくかさなりの不知をかわづらひこし。しかあればすなはち三世の諸佛は、三世に法にとかれ、三世の諸法は、三世に佛にとかるるなり。葛藤葉の風前に剪斷する亙天のみあり。一言はかくるることなく擲破しきたる、維摩詰をも非維摩詰をも。しかあればすなはち法説佛なり、法行佛なり、法證物なり、佛説法なり、佛行佛なり、佛作佛なり。かくのごとくなるともに行佛の威儀なり、亙天亙地、亙古亙今にも、得者不輕微、明者不賤用なり。

仁治二年辛丑十月中旬記于觀音導利興聖寶林寺沙門道元

正法眼藏行佛威儀　畢

【佛教】佛が教、教が佛、佛教一面教佛一體の道理を説いて教外別傳の謬説を破す。

【上乘一心の法】馬祖錄に云く達磨大師南天竺國より來つて中國に至り上乘一心の法を傳へて汝等をして開悟せしむと。

正法眼藏佛教

諸佛の道現成、これ佛教なり、これ佛祖の佛祖のためにするゆゑに、教の教のために正傳するなり、これ轉法輪なり。この法輪の眼睛裏に諸佛祖を現成せしめ、諸佛祖を般涅槃せしむ。その諸佛祖かならず、一塵の出現あり、一塵の涅槃あり、盡界の出現あり、盡界の涅槃あり、一須臾の出現あり、多劫海の出現あり。しかあれども一塵一須臾の出現、さらに不具足の功德なし、盡界多劫海の出現、さらに補闕の經營にあらず。このゆゑに朝に成道して、夕に涅槃する諸佛、いまだ功德かけたりといはず、もし一日は功德すくなしといはば、人間の八十年ひさしきにあらず。人間の八十年をもて、十劫二十劫に比せんとき、一日と八十年とのごとくならん、此佛彼佛の功德わきまへがたからん。長劫壽量の所有と功德と、八十年の功德とを擧して比量せんとき、疑著するにもおよばざらん。このゆゑに佛教はすなはち教佛なり、佛祖究盡の功德なり。諸佛は廣高にして、法教は狹少なるにあらず。まさにしるべし佛大なれば教大なり、佛小なれば教小なり。このゆゑにしるべし、佛および教は大小の量にあらず、善惡無記等の性にあらず、自教教他のためにあらず。ある漢いはく釋迦老漢、かつて一代の教典を宣説するほかに、さらに上乘一心の法を摩訶迦葉に正傳す、嫡嫡相承しきたれり。しかあれば教は赴機の戲論なり、心は理性の

【教外別傳】明教大師の正宗記に云く、所謂教外別傳にして黄卷赤軸の間に聲色機然の有狀を謂ふには非ず、直に實相無相と、・なりと。

【直指人心】藥山惟儼禪師、初め石頭に參ず、問ふ三乘十二分教は、某甲粗知る、嘗て聞く南方に直指人心見性成佛と、實に未だ明了ならず、伏して望むらくは和尚慈悲指示したまへと。

【大藏】佛祖統記五十四に、開元十八年西京崇福寺沙門智昇開元釋教錄二十卷を撰し五千四十八卷を以て定數と爲す、勅して大藏に附入すと。

【小藏】北磵東延慶院經藏記に云く般若寶積華嚴涅槃合して八百四十卷之を小藏と謂ふと。

眞實なり、この正傳せる一心を、教外別傳といふ、三乘十二分教の所談にひとしかるべきにあらず、一心上乘なるゆゑに、直指人心見性成佛なりといふ。この道取いまだ佛法の家業にあらず、出身の活路なし、通身の威儀あらず。かくのごとくの漢、たとひ數百千年のさきに先達と稱すとも、恁麼の說話あらば、佛法佛道はあきらめず通ぜざりけるとしるべし。ゆゑはいかん、佛をしらず、教をしらず、心をしらず、内をしらず、外をしらざるがゆゑに、そのしらざる道理は、かつて佛法をきかざるによりてなり。いま諸佛といふ本末いかなるとしらず、去來の邊際すべて學せざれば、佛弟子と稱するにたらず、ただ一心を正傳して、佛教を正傳せずといふは佛法をしらざるなり。佛教の一心をしらず、一心の佛教をきかず、一心のほかに佛教ありといふ、なんぢが一心いまだ一心ならず、佛教のほかに一心ありといふ、なんぢが佛教いまだ佛教ならざらん。たとひ教外別傳の謬說を相傳すといふもなんぢいまだ内外をしらざれば、言理の符合あらざるなり。佛正法眼藏を單傳する佛祖、いかでか佛教を單傳せざらん。いはんや釋迦老漢なにとしてか佛家の家業にあるべからざらん教法を施設することあらん。釋迦老漢すでに單傳の教法をあらしめん、いづれの佛祖かなからしめん。このゆゑに上乘一心といふは、三乘十二分教これなり、大藏小藏これなり。しるべし佛心といふは、佛の眼睛なり、破木杓なり、諸法なり、三界なるがゆゑに、山海國土、日月星辰なり。佛教といふは、萬像森羅なり、外といふは、這裏なり、這裏來なり。正傳は自己より自己に正傳するがゆゑに、正傳のなかに自己あるな

【道有道無】有といひ無といひ、空といひ色といふ。
【巴陵円僧問】傳燈廿二に巴陵顥鑑は雲門文偃に嗣ぐと。此語は投子靑の頌古（類聚）に出づ。

り、一心より一心に正傳するなり、正傳に一心あるべし。上乘一心は、土石砂礫なり、土石砂礫は、一心なるがゆゑに、土石砂礫は、土石砂礫なり。もし上乘一心の正傳といはば、かくのごとくあるべし。しかあれども教外別傳を道取する漢、いまだこの意旨をしらず、かるがゆゑに教外別傳の謬説を信じて佛教をあやまることなかれ。もしなんぢがいふがごとくならば、教をば心外別傳といふべきか、もし心外別傳といはば、一句半偈つたはるべからざるなり、もし心外別傳といはずば、教外別傳といふべからざるなり。摩訶迦葉すでに釋尊の嫡子として法藏の教主たり、正法眼藏を正傳して、佛道の住持なり。しかあれども佛教は正傳すべからずといふは、學道の偏局なるべし。しるべし、一句を正傳すれば、一法の正傳せらるるなり、一句を正傳すれば、山傳水傳なり、不能離却這裏傳なり。釋尊の正法眼藏無上菩提は、ただ摩訶迦葉に正傳せしなり、餘子に正傳せず、正傳はかならず摩訶迦葉なり。このゆゑに古今に佛法の眞實を學する箇箇、ともにみな從來の教學を決擇するには、かならず佛祖に參究するなり、決を餘輩にとぶらはず。もし佛祖の正決をえざるは、いまだ正決にあらず、依教の正不を決せんとおもはんは、佛祖に決すべきなり。そのゆゑは、盡法輪の本主は佛祖なるがゆゑに、道有道無道空道色ただ佛祖のみこれをあきらめ正傳しきたりて古佛今佛なり。

巴陵因僧問、「祖意教意、是同是別。」師云、「鷄寒上樹、鴨寒入水。」この道取を參學して、佛道の祖宗を相見し、佛道の教法を見聞すべきなり、いま祖意教意と問取するは、

【玄沙因僧問】傳燈廿五百丈道常ノ章に出づ、文異ナ

祖意は祖意と是同是別と問取するなり。いま「一鶏寒上樹、鴨寒入水」といふは、同別を道取すといへども、同別を見取するともがらの見聞に一任する同別にあらざるべし。しかあればすなはち同別の論にあらざるがゆゑに、同別と道取しつべきなり、このゆゑに同別と問取すべからずといふがごとし。

玄沙因僧問、「三乘十二分教即不要、如何是祖師西來意。」師云、「三乘十二分教總不要。」いはゆる僧問の三乘十二分教即不要、如何是祖師西來意といふ、よのつねにおもふがごとく、三乘十二分教は、條條の岐路なり、そのほか祖師西來意あるべしと問するなり。三乘十二分教これ祖師西來意なりと認ずるにあらず、いはんや八萬四千法門藴すなはち祖師西來意としらんや。しばらく參究すべし、三乘十二分教なにとしてか即不要なる、もし要せんときは、いかなる規矩かある、三乘十二分教を不要なるところに、祖師西來意の參學を現成するか、いたづらにこの門の出現するにあらざらん。玄沙いはく、「三乘十二分教總不要。」この道取は法輪なり、この法輪の轉ずるところ、佛教の佛教に處在することを參究すべきなり。その宗旨は、三乘十二分教は佛祖の法輪なり。有佛祖の時處にも轉ず、無佛祖の時處にも轉ず、祖前祖後おなじく轉ずるなり、さらに佛祖を轉ずる功徳あり。祖師西來意の正當恁麼時は、この法輪を總不要なり。總不要といふはもちゐるにあらず、やぶるにあらず、この法輪このとき總不要輪の轉ずるのみなり。三乘十二分教なしといはず、總不要の時節を覷見すべきなり。總不要なるがゆゑに、三乘十二分教なり、三乘十二分教なる

【吾有箇斧子】傳燈五青原章に、師(青原)希遷(石頭)をして書を持して南嶽讓和尙に與へて曰く汝書を達し了らば速に廻れ、吾有箇鈍斧子、與ゝ

がゆゑに、三乘十二分教にあらず、このゆゑに三乘十二分教總不要と道取するなり、その三乘十二分教そこばくあるなかの一隅をあぐるにはすなはちこれなり。

三乘

一者聲聞乘。四諦によりて得道す、四諦といふは、苦諦、集諦、滅諦、道諦なり。これをききこれを修行するに、生老病死を度脫し、般涅槃を究竟す。この四諦を修行するに、苦集は俗なり、滅道は第一義なりといふは、論師の見解なり。もし佛法によりて修行するがごときは、四諦ともに唯佛與佛なり、四諦ともに法住法位なり、四諦ともに實相なり、四諦ともに佛性なり。このゆゑにさらに無性無作等の論におよばず、四諦ともに總不要なるゆゑに。

二者緣覺乘。十二因緣によりて般涅槃す、十二因緣といふは、一者無明、二者行、三者識、四者名色、五者六入、六者觸、七者受、八者愛、九者取、十者有、十一者生、十二者老死。この十二因緣を修行するに、過去現在未來に因緣せしめて、能觀所觀を論ずといへども、一一の因緣を擧して參究するに、すなはち總不要輪轉なり、總不要因緣なり。しるべし無明これ一心なれば、行識等も一心なり、無明これ滅なれば、行識等も滅なり、無明これ涅槃なれば、行識等も涅槃なり、生も滅なるがゆゑに恁麽いふなり、無明も道著の一句なり、識名色等もまたかくのごとし、しるべし無明行等は、吾有箇斧子與汝住山なり、無明行識等は、發時蒙和尙許斧子便請取なり。

汝住山と、遷彼處に至り未だ書を呈せざるに便ち問ふ乃至遷前話を擧し了りて卽て云く復時蒙和尙許箇斧子、便請取、師一足を垂る遷禮拜すと。

【經云利根】　經名未考。

【三十六波羅蜜】　六波羅蜜に各六波羅蜜を具す、故に六六三十六波羅蜜

三者菩薩乘。六波羅蜜の敎行證によりて、阿耨多羅三藐三菩提を成就す、その成就といふは、造作にあらず、無作にあらず、始起にあらず、新成にあらず、久成にあらず、本行にあらず、無爲にあらず、ただ成就阿耨多羅三藐三菩提なり。六波羅蜜といふは、檀波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜なり。これはともに無上菩提なり、無生無作の論にあらず、かならずしも檀をはじめとし般若ををはりとせず。經云、利根菩薩、般若爲初檀爲終、鈍根菩薩、檀爲初般若爲終。しかあれども羼提もはじめなるべし、禪那もはじめなるべし、三十六波羅蜜の現成あるべし、羅籠より羅籠をうるなり。波羅蜜といふは、彼岸到なり、彼岸は去來の相貌蹤跡にあらざれども、到は現成するなり、到は公案なり、修行の彼岸へいたるべしとおもふことなかれ、彼岸に修行あるがゆゑに、修行すれば彼岸到なり。この修行、かならず徧界現成の力量を具足せるがゆゑに。

十二分敎　修多羅亦云契經

一者素呾纜、此云契經、二者祇夜、此云重頌、以偈頌修多羅也　三者和伽羅那、此云授記、四者伽陀、此云諷頌、此云不重頌如此間詩頌　五者優陀那、此云無問自說、無問自說經者聖人說法皆待請問然爲衆生作不請之師故無問自說又佛法難知名無能問若不自說衆則不知爲說又復不知爲說何法故無問自說乃所以彰所說甚深唯證是以寄無問自說以彰所顯也　六者尼陀那、此云因緣、因緣經者欲明戒法亦因犯彰過過相彰現方得立制此亦託因緣以引所顯也。七者波陀那、此云譬喩、阿波陀那　八者伊帝目多伽、此云本事、此云如是語亦云本事　九者闍陀伽、此云本生、本生事者謂說前生菩薩行事　本事事者謂前世諸相應事。十者毘佛略、此云方廣、十一者

【青原の垂一足】吾有箇斧子の項の末句を看よ。

阿浮陀達磨、此云未曾有。十二者優婆提舍、此云論議。

如來則爲直說陰界入等假實之法、是名修多羅。或四五六七八九言偈、重頌世界陰入等事、是名祇夜。或直記衆生未來事、乃至記鴿雀成佛等、是名和伽羅那。或孤起偈記世界陰入等事、是名伽陀。或無人問、自說世界事、是名優陀那。或約世界不善事、而結禁戒、是名尼陀那。或以譬喩說世界事、是名阿波陀那。或說本昔世界事、是名伊帝目多伽。或說本昔受生事、是名闍陀伽。或說世界廣大事、是名毗佛略。或說世界未曾有事、是名阿浮陀達磨。或問難世界事、是名優婆提舍。此是世界悉檀、爲悅衆生故、起十二部經。

十二部經の名をきくことまれなり、佛法のよのなかにひろまれるときこれをきく、佛法すでに滅するときはきかず、佛法いまだひろまらざるときまたきかず、ひさしく善根をうゑて、佛をみたてまつるべきもののこれをきく。すでにきくものはひさしからずして阿耨多羅三藐三菩提をうべきなり。この十二おのおの經と稱す、十二分教ともいひ、十二部經ともいふなり。十二分教、おのおの十二分教を具足せるゆゑに、一百四十四分教なり、十二分教おのおの十二分教を兼含せるゆゑに、ただ一分教なり。しかあれども億前億後の數量にあらず、これみな佛祖の眼睛なり、佛祖の骨髓なり、佛祖の家業なり、佛祖の光明なり、佛祖の莊嚴なり、佛祖の國土なり。十二分教をみるは、佛祖をみるなり、佛祖を道取するは、十二分教を道取するなり。しかあればすなはち青原の垂一足、すなはち三乘十二

【南嶽の說似一物】六祖什麼物恁麼來の問難に苦修すること八年、終に說似一物卽不中に於て佛法を領會せり

【我此九部法】法華方便品の文。

分教なり、南嶽の說似一物卽不中、すなはち三乘十二分教なり。いま玄沙の道取する總不要の意趣それかくのごとし、この宗旨擧拈するときは、ただ佛祖のみなり、さらに半人なし、一物なし、一事未起なり。正當恁麼時如何、いふべし總不要。あるひは九部といふあり、九部教といふべきなり。

九部

一者修多羅　二者伽陀　三者本事　四者本生　五者未曾有
六者因緣　七者譬喩　八者祇夜　九者優婆提舍

この九部、おのおの九部を具足するがゆゑに、八十一部なり、九部おのおの一部を具足するゆゑに九部なり。歸一部の功德あらずば、九部なるべからず。歸一部の功德あるがゆゑに、一部歸一部なり。このゆゑに八十一部なり、此部なり、我部なり、拂子部なり、拄杖部なり、正法眼藏部なり。

釋迦牟尼佛言、我此九部法、隨順衆生說、入大乘爲本、以故說是經。しるべし我此は如來なり、面目身心あらはれきたる、この我此すでに九部法なり、九部法すなはち我此なるべし。いまの一句一偈は、九部法なり、我此なるがゆゑに隨順衆生說なり。しかあればすなはち一切衆生の生從這裏生、すなはち說是經なり、死從這裏死は、すなはち說是經なり。乃至造次動容すなはち說是經なり、化一切衆生、皆令入佛道、すなはち說是經なり。この衆生は、我此九部法の隨順なり、この隨順は、隨他去なり、隨自去なり、隨

【仁治二年】前卷の例に倣ふ。【示衆】對機は大衆。

衆去なり、隨生去なり、隨我去なり、隨此去なり。その衆生かならず我此なるがゆゑに、九部法の條條なり。入大乘爲本といふは、證大乘といひ、行大乘といひ、聞大乘といひ、說大乘といふ。しかあれば衆生は天然として得道せりといふにあらず、その一端なり。入は本なり、本は頭正尾正なり、ほとけ法をとく、法ほとけをとく。法ほとけにとかる、ほとけ法にとかる、火焰ほとけをとき法をとく、ほとけ火焰をとき、法火焰をとく。是經すでに說故の良以あり、故說の良以あり、是經とかざらんと擬するに不可なり、このゆゑに以故說是經といふ。故說は互天なり、互天は故說なり、此佛彼佛ともに是經と一稱し、自界他界、ともに是經と故說す。このゆゑに說是經なり、是經これ佛教なり。しるべし恆沙の佛教は竹篦拂子なり、佛教の恆沙は、拄杖拳頭なり。おほよそしるべし三乘十二分教等は、佛祖の眼睛なり、これを開明せざらんもの、いかでか佛祖の兒孫ならん、これを拈來せざらんもの、いかでか佛祖の正眼を單傳せん、正法眼藏を體達せざるは、七佛の法嗣にあらざるなり。

于時仁治二年辛丑十一月十四日在雍州興聖精舍示衆

正法眼藏佛教　畢

【神通】瓔珞本業經に云く神は天心に名け通は慧性に名く、天然の慧は照徹して無礙なりと故に神通と名くと道元禪師は外道或は小乘の神通の如く斷續ある神通を排して大乘の神通の徹照無礙、佛家の神通の茶裏飯裏十二時中問著無き大神通を提示せらる。

【袈裟をささげて】感通袈裟傳に云く佛文殊及諸比丘、天龍八部等に告ぐ、此れは是れ迦葉の蘊有僧伽梨、大成德ありわれ佛眼を以て觀るに諸天鬼神及十地の菩薩等末だ此大衣を動かすこと毛髮許りの如くなること能はず、唯如來この衣塔を擎ぐるあり、三匝して戒壇を遶ぐると。

【諸佛神通】法華神力品の文。

正法眼藏神通

かくのごとくなる神通は、佛家の茶飯なり、諸佛いまに懈倦せざるなり。これに六神通あり、一神通あり、無神通あり、最上神通あり。朝打三千なり、暮打八百なるを爲體とせり。與佛同生せりといへども、佛にしられず、與佛同滅すといへども、佛をやぶらず。上天に同條なり、下天にも同條なり、修行取證みな同條なり。同雪山なり、如木石なり。過去の諸佛は、釋迦牟尼佛の弟子なり。袈裟をささげてきたり、塔をささげてきたるこのとき、釋迦牟尼佛いはく、『諸佛神通不可思議なり。』しかあればしりぬ、現在未來も、亦復如是なり。

（一）大潙禪師は、釋迦如來より、直下三十七世の祖なり、百丈大智の嗣法なり、いまの佛祖、おほく十方に出興せる、大潙の遠孫にあらざるなし、すなはち大潙の遠孫なり。大潙あるとき臥せるに、仰山來參す、大潙すなはち轉面向壁臥す。仰山いはく、『慧寂これ和尚の弟子なり、形迹もちゐざれ。』大潙おくる勢をなす。仰山すなはち、いづるに、大潙召して寂子とめす。仰山かへる。大潙いはく、『老僧ゆめをとかんをきくべし。』仰山かうべをたれて聽勢をなす。大潙いはく、『わがために原夢せよみん。』仰山一盆の水、一條の手巾を、とりてきたる。大潙つひに洗面す、洗面しをはりて、わづかに坐するに、香嚴きたる。

【大潙禪師】以下神通の例六則を擧ぐ。【大潙仰山香嚴神通】傳燈潙山章に載す。其一。【原夢】事物紀原の註に夢を判ずるを原と云ふと、夢判斷なり。【鶖子目連】鶖子は舍利弗の譯語、舍利弗は智慧第一、目連は目犍連にして神通第一。

大潙いはく、『われ適來寂子と一上の神通をなす、不同小小なり。』香嚴いはく、『智閑下面にありて、了了に得知す。』大潙いはく、『子こころみに、道取すべし。』香嚴すなはち一甌の茶を點來す。大潙ほめていはく、『二子の神通智慧、はるかに鶖子目連よりもすぐれたり。』

○佛家の神通を、しらんとおもはば、大潙の道取を參學すべし。不同小小のゆゑに、作是學者、名爲佛學、不是學者、不名佛學なるべし。嫡嫡相傳せる、神通智慧なり。さらに西天竺國の外道二乘の神通、および論師等の所學を學することなかれ。いま大潙の神通を學するに、無上なりといへども、一上の見聞あり。いはゆる臥次よりこのかた、轉面向壁臥あり、起勢あり、召寂子あり、說箇夢あり、洗面了纔坐あり、仰山又低頭聽あり、盆水來、手巾來あり。しかあるを、大潙いはく、『われ適來寂子と一上の神通をなす。』と。この神通を學すべし、佛法正傳の祖師かくのごとくいふ、說夢洗面といはざることなかれ、一上の神通なりと決定すべし。すでに不同小小といふ、小乘小量小見におなじかるべからず、十聖三賢等に同ずべきにあらず。かれらみな小神通をならひ、小身量のみをえたり、佛祖の大神通におよばず、これ佛神通なり、佛向上神通なり。この神通をならはん人は、魔外にうごかさるべからざるなり、經師論師いまだきかざるところ、きくとも信受しがたきなり。二乘外道經師論師等は、小神通をならふ、大神通をならはす。諸佛は大神通を住持す、大神通を相傳す、これ佛神通なり、佛神通にあらざれは、盆水來手巾來せず、轉面向壁臥なし、洗面了纔坐なし、この大神通のちからにおほはれて、小神通等もあるなり、大神通

【毛呑巨海芥納須彌】維摩經不思議品に云く須彌の高廣を以て芥子中に內る增減する所無し、須彌山の本相故の如しと。又云く四大海水を以て一毛孔に入る、魚鼈黿鼉、水性の屬を嬈さず、而して彼の大海の本相故の如しと。

【出水出火】法華妙莊嚴王品に出づ

小神通を接す、小神通は大神通をしらず、小神通といふは、いはゆる毛呑巨海、芥納須彌なり、また身上出水身下出火等なり。また五通六通みな小神通なり、これらのやから、佛神通は夢也未見聞在なり。五通六通を小神通といふことは、五通六通は修證に染汙せられ、際斷を時處にうるなり。在生にありて身後に現ぜず、自己にありて他人にあらず、此土に現ずといへども、他土に現ぜず、不現に現ずといへども、現時に現ずることをえず。この大神通はしかあらず、諸佛の教行證、おなじく神通に現成せしむるなり。ただ諸佛の邊に現成するのみにあらず、佛向上にも現成するなり。神通佛の化儀、まことに不可思議なるなり。有身よりさきに現ず、現の三際にかかはらぬあり、佛神通にあらざれば、諸佛の發心修行菩提涅槃いまだあらざるなり。いまの無盡法界海の常不變なる、みなこれ佛神通なり、毛呑巨海のみにあらず、毛保任巨海なり、毛現巨海なり毛吐巨海なり、毛使巨海なり、一毛に盡法界を呑却し吐却するとき、ただし一盡法界かくのごとくなれば、さらに盡法界あるべからずと學することなかれ。芥納須彌等もまたかくのごとし。芥吐須彌および芥現法界無盡藏海にてもあるなり。毛吐巨海、芥吐巨海するに、一念にも吐却す、萬劫にも吐却するなり。萬劫一念、おなじく毛芥より吐却せるがゆゑに、毛芥はさらになにより か得せる、すなはちこれ神通より得せるなり。この得すなはち神通なるがゆゑに、ただまさに神通の神通を出生するのみなり、さらに三世の存沒あらずと學すべきなり、諸佛はこの神通のみに遊戯するなり。

【龐居士】傳燈龐蘊章に石頭禪師に呈する偈を載す云く日用事無レ別、唯吾自偶諧、頭頭非二取舍一、處處勿二張乖一、朱紫誰爲レ號、丘山絕二點埃一、神通并妙用、運水及搬柴と。其二。

【六祖のむかし】盧氏の家尤も貧窶師樵采して母に給す、故にいふ。

【价子神通妙用】洞山錄に出づ。其三。

(二)龐居士蘊公は、祖席の偉人なり。江西石頭の兩席に參學せるのみにあらず、有道の宗師におほく相見し相逢しきたる。あるときいはく、「神通並妙用、運水及搬柴。」○この道理、よくよく參究すべし、いはゆる運水とは、水を運載しきたるなり、自作自爲あり、他作教他ありて、水を運載せしむ。これすなはち神通佛なり。しることは有時なりといへども、神通はこれ神通なり。人のしらざるには、その法の廢するにあらず、その法の滅するにあらず、人はしらざれども、法は法爾なり。運水の神通なりとしらざれども、神通の運水なるは、不退なり。搬柴とは、たきぎをはこぶなり、たとへば六祖のむかしのごとし。朝打三千にも神通としらず、暮打八百にも神通とおぼへざれども、神通の現成なり。まことに諸佛如來の神通妙用を見聞するは、かならず得道すべし。このゆゑに一切諸佛の得道、かならずこの神通力に成就せるなり。しかあればいま小乘の出水、たとひ小神通なりといふとも、運水の大神通なることを學すべし。運水搬柴はいまだすたれざるところ、人さしおかず、ゆゑにむかしよりいまにおよぶ、これよりかれにつたはれり、須臾も退轉せざるは、神通妙用なり。これは大神通なり、小小とおなじかるべきにあらず。

(三)洞山悟本大師、そのかみ雲巖に侍せりしとき、雲巖とふ、「いかなるかこれ价子神通妙用。」ときに洞山叉手近前而立。また雲巖とふ、「いかならんか神通妙用。」洞山ときに珍重而出。○この因縁まことに神通の承言會宗なるあり、神通の事存函蓋合なるあり。まさにしるべし神通妙用は、まさに兒孫あるべし、不退なるものなり。まさに高祖あるべし、不進

【薩婆若海水】梵音サルバヂュニャー(Sarvajña)一切智と譯す。諸佛果上の智慧、海は廣大なる義を現はす

【仙人とふ】涅槃經の三に出づ今一則會元世尊章類聚の神異部に載す。其四。

なるものなり。いたづらに外道二乘にひとしかるべきとおもはざれ、佛道に身上身下の神變神通あり、いま盡十方界は、沙門一隻の眞實體なり。九山、八海、乃至性海、薩婆若海水、しかしながら身上身下身中の出水なり、また非身上非身下非身中の出水なり、乃至出火もまたかくのごとし。ただ水火風等のみにあらず、身上出佛なり、身下出佛なり、身上出祖なり、身下出祖なり、身上出無量阿僧祇劫なり、身下出無量阿僧祇劫なり、身上出法界海なり。身上大法界海なるのみにあらず、さらに世界國土を吐却七八箇し、呑却兩三箇せんことも、またかくのごとし。いま四大五大六大諸大無量大、おなじく出なり沒なる神通なり、呑なり吐なる神通なり。いまの大地虛空の面面なる、呑却なり吐却なり。芥に轉せらるるを力量とせり、毛にかかれるを力量とせり。識知のおよばざるより同生して、識知のおよばざるを住持し、識知のおよばざるに實歸す。まことに短長にかかはれざる佛神通の變相、ひとへに測量を擧して擬するのみならんや。

（七）むかし五通仙人、ほとけに事奉せしとき、仙人とふ、「佛有六通、我有五通、如何是那一通。」ほとけときに仙人を召していふ、「五通仙人。」仙人應諾す。佛言、「那一通、爾問我。」この因緣よくよく參究すべし。仙人いかでか佛有六通としる。佛有無量神通智慧なり、ただ六通のみにあらず、たとひ六通のみをみるといふとも、六通もきはむべきにあらず、いはんやその餘の神通におきて、いかでかゆめにもみん。しばらくとふ、仙人たとひ釋迦老子をみるといふとも、見佛すやいまだしやといふべし。たとひ見佛すといふとも、釋迦老子を

【臨濟云古人云】臨濟錄に詳出。其五。

【入藕孔中】觀佛三昧經に時に修羅佛通れ去るに處無く藕絲孔中に入るとす。

【業通】狐狸妖怪化して神異を作す者。

【位通】符を傳へ咒を書して神異變を現ずる者。

みるやいまだしや。たとひ釋迦老子をみることをえ、たとひ見佛すといふとも、五通仙人をみるやいまだしやと問著すべきなり。この問處に用葛藤を學すべし、葛藤斷を學すべし。いはんや佛有六通、しばらく隣珍を算數するにおよばざるなり。いま釋迦老子道の那一通爾問我のこころいかん、仙人に那一通ありといはず、仙人になしといはず。那一通の通塞は、たとひとくとも、仙人いかでか那一通を通ぜん。いかんとなれば、仙人に五通あれど、佛有六通のなかの五通にあらず、仙人通は、たとひ佛通の所通に通破となるとも、仙通いかでか佛通を通ずることをえん。もし仙人、佛の一通をも通ずることあらば、この通より佛を通ずべきなり。仙人をみるに、佛通に相似せるあり、佛儀をみるに、仙通に相似せることあるは、佛儀なりといへども、佛神通にあらずとしるべきなり。通ぜざれば、五通みな佛とおなじからざるなり。たちまちに那一通をとふ、なにの用かあるとなり。釋迦老子のこころは、一通をもとふべしとなり。那一通をとひ、那一通をとふべし、一通も仙人はおよぶところなしとなり。しかあれば佛神通と餘者通とは、神通の名字おなじといへども神通の名字、はるかに殊異なり。ここをもて

(五)臨濟院慧照大師云、古人云、如來擧身相、爲レ順二世間情一、恐三人生二斷見一、權且立二虛名一。假言二三十二一、八十也空聲、有身非二覺體一、無相乃眞形、儞道、佛有二六通一、是不可思議、一切諸天神仙、阿修羅、大力鬼、亦有二神通一、應二是佛一否。道流莫レ錯、祇如下阿修羅與二天帝釋一戰上、戰敗領二八萬四千眷屬一、入二藕孔中一藏、莫二是聖一否。如二山僧所一レ擧皆是業通位通。夫如二佛六

【百丈云眼耳】古尊宿錄に載す。其六。

【六般神用】永嘉大師證道歌の句。

通者不然、入色界不被色惑、入聲界不被聲惑、入香界不被香惑、入味界不被味惑、入觸界不被觸惑、入法界不被法惑、所以達六種色聲香味觸法、皆是空相、不能繫縛、此無依道人、雖是五蘊漏質、便是地行神通、道流、眞佛無形、眞法無相、儞祇麼幻化上頭作模作樣、設求得者皆是野狐精魅、並不是眞佛、是外道見解」〇しかあれば諸佛の六神通は、一切諸天鬼神、および二乘等のおよぶべきにあらず、はかるべきにあらざるなり。佛道の六通は、佛道の佛弟子のみ單傳せり、餘人の相傳せざるところなり、佛六通は佛道に單傳す、單傳せざるは、佛六通をしるべからざるなり、佛六通を單傳せざらんは、佛道人なるべからずと參學すべし。

(六)百丈大智禪師云、「眼耳鼻舌、各各不貪染一切有無諸法、是名受持四句偈、亦名四果、六入無迹、亦名六神通、祇如今但不被一切有無法礙、亦無不依住知解、是名神通、不守此神通、是名無神通、如云無神通菩薩、蹤跡不可得尋、是佛向上人、最不可思議人、是自己天。」いま佛佛祖祖、相傳せる神通かくのごとし、諸佛神通は、佛向上人なり、最不可思議人なり、是自己天なり、無神通菩薩なり、知解不依住なり、神通不守此なり、一切諸法不被礙なり、いま佛道に六神通あり、諸佛の傳持しきたれることひさし、一佛も傳持せざるなし、傳持せざれば諸佛にあらず。その六神通は、六入を無迹にあきらむるなり。無迹といふは、古人のいはく、「六般神用空不空、一顆圓光非內外」、非內外は無迹なるべし、無迹に修行し參學し證入するに、六入を動著せざるなり、動著するもの三十棒分ある

【仁治示衆】前卷に同じ。

【大悟】凡聖の邊際を離れ迷悟の情量を超ゆるを大悟といふ。悟了同未悟の談、認得眼横鼻直空手還鄕の消息なり。

なり、しかあればすなはち六神通かくのごとく參究すべきなり。佛家の嫡嗣にあらざらん、たれかこのことはりあるべしともきかん、いたづらに内外の馳走を歸家の行履とあやまれるのみなり。また四果は佛道の調度なりといへども、正傳せる三藏なし。算沙のやから、跉跰のたぐひ、いかでかこの果實をうることあらん。得小爲足の類、いまだ參究の達せるにあらず、ただまさに佛佛相承せるのみなり。いはゆる四果は、受持四句偈なり、受持四句偈といふは、一切有無諸法におきて、眼耳鼻舌各各不貪染なるなり。不貪染は、不染汙なり、不染汙といふは、平常心なり、吾常於此切なり。六通四果を佛道に正傳せる、かくのごとし、これと相違せんは、佛法にあらずとしるべきなり。しかあれば佛道はかならず神通より達するなり、その達する涓滴の巨海を呑吐する微塵の高嶽を拈放する、たれか疑著することをえん、これすなはち神通なるのみ。

爾時仁治二年辛丑十一月十六日在觀音導利興聖寶林寺示衆

正法眼藏神通　畢

正法眼藏大悟

佛佛の大道、つたはれて綿密なり、祖祖の功業、あらはれて平展なり。このゆゑに大悟現成し、不悟至道し、省悟弄悟し、失悟放行す。これ佛祖家常なり、擧拈する使得十二時

【人根に多般】生知、學而知、佛知者、無師知者の四段あることを明す。共に是れ大悟の全皮渾になり。

【臨濟院大師云】古德の公案三則を擧げて大悟を拈提す。其一。古尊宿錄中に載す。

あり、拋却する被使十二時あり、さらにこの關棙子を跳出する弄泥團もあり、弄精魂もあり。大悟より佛祖かならず恁麼現成する參學を究竟すといへども、大悟の渾悟を佛祖とせるにはあらず、佛祖の渾佛祖を渾大悟なりとにはあらざるなり。佛祖は大悟の邊際を跳出し、大悟は佛祖より向上に跳出する面目なり。しかあるに人根に多般あり、いはく生知、これは生じて生を透脱するなり、いはゆるは生の初中後際に體究なり。いはく學而知、これは學して自己を究竟す。いはゆるは學の皮肉骨髓を體究するなり。いはく佛知者あり、これは生知にあらず、學知にあらず、自他の際を超越して、遮裏に無端なり、自他知に無拘なり。いはく無師知者あり、善知識によらず、經卷によらず、性によらず、相によらず、自を撥轉せず、他を回互せざれども、露堂堂なり。これらの數般、ひとつを利と認じ、ふたつを鈍と認ぜざるなり、多般ともに多般の功業を現成するなり。しかあればいづれの情無情か生知にあらざらんと參學すべし。生知あれば生悟あり、生證明あり、生修行あり。しかあれば佛祖すでに調御丈夫なる、これを生悟と稱しきたれり。悟を拈來せる生なるがゆゑにかくのごとし、參飽大悟する生悟なるべし。拈悟の學なるゆゑにかくのごとし。しかあればすなはち三界を拈じて大悟す。百艸を拈じて大悟す。四大を拈じて大悟す、佛祖を拈じて大悟す、公案を拈じて大悟す。みなもとに大悟を拈來して、さらに大悟するなり、その正當恁麼時は、而今なり。

臨濟院慧照大師云、大唐國裏、覓二一人不悟者一難レ得。いま慧照大師の道取するところ、

【京兆華嚴寺】其二。華嚴の休靜、寶智大師と諡す。洞山悟本大師に嗣ぐ。傳燈休靜章に出づ。

正脈しきれたる皮肉骨髓なり、不足あるべからず。大唐國裏といふは、自己眼睛裏なり、盡界にかかはれず、塵刹にとどまらず、遮裏に不悟者の一人をもとむるに難得なり。自己の昨自己も不悟者にあらず、他己の今自己も不悟者にあらず、山人水人の古今もとめて不悟を要するにいまだえざるべし。學人かくのごとく臨濟の道を參學せん、虛度光陰なるべからず。しかもかくのごとくなりといへども、さらに祖宗の懷業を參學すべし。いはく、しばらく臨濟に問すべし、不悟者難得のみをしりて、悟者難得をしらずば、未足爲是なり、不悟者難得をも參究せるといひがたし。たとひ一人の不悟者をもとむるには難得なりとも、半人の不悟者ありて面目雍容巍巍堂堂なる、相見しきたるやいまだしや。たとひ大唐國裏に一人の不悟者をもとむるに難得なるを究竟とすることなかれ、一人半人のなかに兩三箇の大唐國をもとめこころみるべし。難得なりや、難得にあらずや、この眼目をそなへんとき、參飽の佛祖なりとゆるすべし。

京兆華嚴寺寶智大師、嗣洞山、諱休靜因僧問、大悟底人、却迷時如何。師曰、破鏡不重照、落華難上樹。いまの問處は、問處なりといへども示衆のごとし。華嚴の會にあらざれば開演せず。洞山の嫡子にあらざれば、加被すべからず、まことにこれ參飽佛祖の方席なるべし。いはゆる大悟底人は、もとより大悟なりとにはあらず、餘外に大悟してたくはふるにあらず。大悟は公界におけるを、末上の老年に相見するにあらず、自己より號爲して牽挽出來するにあらざれども、かならず大悟するなり。不迷なるを大悟とするにあらず、大

【認賊爲子】楞嚴經二に云く汝無始より今生に至る、賊を認めて子と爲し汝か元常を失ふ故に輪廻を受くと

悟の種艸のためにはじめて迷者とならん。擬すべきにもあらず。大悟人さらに大悟す、大迷人さらに大悟す。大悟人あるがごとく、大悟佛あり、大悟地水火風空あり、大悟露柱燈籠あり、いまは大悟底人と問取するなり。大悟底人却迷時如何の問取、まことに問取すべきを問取するなり。華嚴きらはず叢席に蘇古す、佛祖の勳業なるべし。しばらく功夫すべし。大悟底人の却迷は、不悟底人と一等なるべしや。大悟底人却迷の時節は、大悟を拈來して迷を造作するか他那裏より迷を拈來して大悟を蓋覆して却迷するか、また大悟底人、一人にして大悟、やぶらずといへども、さらに却迷を參ずるか、また大悟底人の却迷といふは、さらに一枚の大悟を拈來するを却迷とするかと、かたがた參究すべきなり。また大悟也一隻手なり、却迷也一隻手なるか、いかやうにても大悟底人の却迷ありと、聽取するを、參來の究徹なりとしるべし。却迷を親曾ならしむる大悟ありとしるべきなり。しかあれば認賊爲子を却迷とするにあらず、認子爲賊を却迷とするにあらず。大悟は認賊爲賊なるべし。却迷は認子爲子なり。多處添些子を大悟とす、少處減些子これ却迷なり。しかあれば却迷者を摸著して、把定了に大悟底人に相逢すべし。而今の自己、これ却迷なるか、不迷なるか、檢點將來すべし、これを參見佛祖とす。師云、「破鏡不重照、落華難上樹。」この示衆は、破鏡の正當恁麼時を道取するなり。しかあるを未破鏡の時節にこころをつかはして、しかも破鏡のことばを參學するは、不是なり。いま華嚴道の破鏡不重照、落華難上樹の宗旨は、大悟底人不重照といひ、大悟底人難上樹といひて、大悟底人さらに却迷せず

【京兆米胡和尙】具に米胡又米七師といふ。潙山に嗣ぐ、傳燈十一に出づ。

と道取すると會取しつべし。しかあれども恁麼の參學にあらず、人のおもふがごとくならば、大悟底人家常如何と問取すべし。これを答話せんに行却迷時といはん、而今の因緣しかにはあらず、大悟底人却迷時如何と問取するがゆゑに、正當却迷時を未審するなり、恁麼時節の道取現成は、破鏡不重照なり。落華難上樹なり。落華のまさしく落華なるときは、百尺の竿頭に昇進するとも、なほこれ落華なり。破鏡の正當破鏡なるゆゑに、そこばくの活計、見成すれども、おなじくこれ不重照の照なるべし、破鏡と道取し落華と道取する宗旨を拈來して、大悟底人却迷時の時節を參取すべきなり。これは大悟は作佛のごとし、却迷は衆生のごとし、還作衆生といひ、從本垂迹といふがごとく學すべきにはあらざるなり。かれは大覺をやぶりて衆生となるごとくいふ、これは大悟やぶるといはず、大悟うせぬるといはず迷きたるといはざるなり。かれらにひとしむべからず、まことに大悟無端なり。却迷無端なり。大悟を罣礙する迷あらず、大悟三枚を拈來して、小迷半枚をつくるなり。ここをもて雪山の雪山のために大悟するあり、木石は木石をかりて大悟す。諸佛の大悟は、衆生のために大悟す、衆生の大悟は、諸佛の大悟を大悟す、前後にかかはれざるべし。而今の大悟は、自己にあらず他己にあらず、きたるにあらざれども塡溝塞壑なり、さるにあらざれども切忌隨他覓なり。なにとしてか恁麼なる、いはゆる隨他去なり。

京兆米胡和尙令僧問仰山云、今時人還假悟否。仰山云、悟卽不無、爭奈落第二頭

【今我念過去】法華學記品の文。

【悟道是本期】大悟を得ずんば恐らくは本期を失せんといふの類。

何ニ一僧廻擧ニ似米胡、深背ヽ之。いはくの今時は、人人の而今なり、今我念過去未來現在、いく千萬なりとも今時なり、而今なり、人の分上はかならず今時なり。あるいは眼睛を今時とせるあり、あるいは鼻孔を今時とせるあり。『還假悟否。』この道をしづかに參究して胸襟にも換却すべし、頂顙にも換却すべし。近日大宋國禿子等いはく、『悟道是本期。』かくのごとくいひていたづらに待悟す、しかあれども佛祖の光明にてらされざるがごとし。ただ眞善知識に參取すべきを、懶墮にして蹉過するなり、古佛の出世にも度脫せざりぬべし。いまの還假悟否の道取に、さとりなしといはずありといはず、きたるといはず、なるやいなやといふ。今時人のさとりは、いかにしてさとれるぞと道取せんがごとし。たとへばさとりをうといはば、ひごろはなかりつるかとおぼゆ。さとりきたれりといはば、ひごろはそのさとりいづれのところにありけるぞとおぼゆ。さとりとなれりといはば、さとりはじめありとおぼゆ。かくのごとくいはず、かくのごとくならずといへども、さとりのありやうをいふときに、さとりをかるやとはいふなり。しかあるをさとりといふは第二頭へおつるをいかんがすべきといひつれば、第二頭もさとりなりといふなり。第二頭といふは、さとりになりぬるといふや、さとりをうといふや、さとりきたれりといはんがごとし。なりぬといふも、きたれりといふも、さとりなりといふなり。しかあれば第二頭におつることをいたみながら第二頭をなからしむるがごとし。さとりのなれらん第二頭は、またまことの第二頭なりともおぼゆ。しかあればたとひ第二頭なりとも、たとひ百千頭なりともさ

とりなるべし。第二頭あれば、これよりかみに第一頭のあるをのこせるにあらぬなり。たとへば昨日のわれをわれとすれども、昨日はけふを第二人といはんがごとし。而今のさとり昨日にあらずといはず、いまはじめたるにあらず、かくのごとく參取するなり、しかあれば大悟頭黑なり、大悟頭白なり。

爾時仁治三年壬寅春正月二十八日住觀音導利院興聖寶林寺示衆

而今寬元二年甲辰春正月二十七日駐二錫越宇吉峯古寺一而書二示於人天大衆一

同二年甲辰春三月二十日侍二越宇吉峯精舍堂奥一次書二寫之一　懷奘

正法眼藏大悟　畢

正法眼藏坐禪箴

【一】藥山弘道大師坐次、有レ僧問、「兀兀地思二量什麼一」師云、「思二量箇不思量底一」僧曰、「不思量底、如何思量。」師云、「非思量。」大師の道かくのごとくなるを證して、兀坐を參學すべし、兀坐正傳すべし、兀坐の佛道につたはれる參究なり。兀兀地の思量、ひとりにあらずといへども、藥山の道は其一なり。いはゆる思量箇不思量底なり、思量の皮肉骨髓なるあり、不思量の皮肉骨髓なるあり。僧のいふ、不思量底如何思量、まことに不思量底たとひふるくとも、さらにこれ如何思量なり。兀兀地に、思量なからんや、兀兀地の向上なに

【仁治三年】道元禪師四十三歳、以下同年十六卷説示したまふ。正月二十八日は二の字衍か、建撕記補に正月十八日に作る。

【寛元二年】道元禪師四十五歳、再度の説示か。

【駐錫吉峰古寺】此年十一月六日まで吉峰古寺駐錫、

【示於人天大衆】前後ともに對機は大衆。

【坐禪箴】箴は、いしばり、病を治する具。今の箴は禪病を治癒する意。正傳の坐禪に宋朝ごろ種種の病弊を生ぜしを以て之を箴治し達磨正宗に挽回せんとするの一卷とす。分つて十一段と爲す。

【一】第一段。藥山弘道大師僧と問答、兀兀地思量什麼の事。

【兀兀地】坐禪の姿をいふ。
【思量不思量】坐禪の姿を思量とも不思量ともいはる。
【非思量】脫落の思量、坐禪の當體佛の境界なり。
【佛量法量悟量會量】兀兀地の諸量に量せられず。兀兀地の獨尊無比なるが故に。佛三身の量を以ても、八萬四千の法藏量を以ても、迷悟、超越の量を以ても、會不會超過の量を以ても量せられず。
【しかあるに近年】宋代の禪弊をあぐ。
【杜撰】野客叢書に、杜默詩を爲る、多く律に合はず、故に事の格に合はざる者を言つて杜撰と爲すと。深く詮索せず事を踈かに取り扱ひ又は言動する者をいふ。

によりてか通ぜざる、賤近の愚にあらずば、兀兀地を問著する力量あるべし、思量あるべし。」大師いはく、「非思量。」いはゆる非思量を使用すること玲瓏なりといへども、不思量底を思量するには、かならず非思量をもちゐるなり、非思量にたれあり、たれわれを保任す、兀兀地たとひ我なりとも、思量のみにあらず、兀兀地を擧頭するなり、兀兀地たとひ兀兀地なりとも、兀兀地いかでか兀兀地を思量せん。しかあればすなはち兀兀地は、佛量にあらず、法量にあらず、悟量にあらず、會量にあらざるなり。藥山かくのごとく單傳すること、すでに釋迦牟尼佛より直下三十六代なり、藥山より向上をたづぬるに、三十六代に釋迦牟尼佛あり。かくのごとく正傳せる、すでに思量箇不思量底あり、しかあるに近年おろかなる杜撰いはく、「功夫坐禪、得胸襟無事了、便是平穩地也。」この見解なほ小乘の學者におよばず、人天乘よりも劣なり。いかでか學佛法の漢といはん。見在大宋國に、恁麼の功夫人おほし、祖道の荒蕪かなしむべし。又一類の漢あり、坐禪辦道は、これ初心晩學の要機なり、かならずしも佛祖の行履にあらず。行亦禪坐亦禪、語默動靜體安然なり、ただいまの功夫のみにかかはることなかれ。臨濟の餘流と稱するともがら、おほくこの見解なり、佛法の正命つたはれることおろそかなるによりて恁麼道するなり。なにかこれ初心、いづれか初心にあらざる、初心いづれのところにかおく。しるべし學道のさだまれる參究には、坐禪辦道するなり、この榜樣の宗旨は、作佛をもとめざる行佛あり、行佛さらに作佛にあらざるがゆゑに、公案見成なり。身佛さらに作佛にあらず、羅籠を打破

【二】第二段。江西馬祖と南嶽との問答。圖箇什麼の事。

【眞龍】葉公愛龍の故事に出づ。

【遠を貴する】文選七に、遠を貴び近を賤しむは人の常情、耳を重んじ目を輕んずるは人の恒弊と。

すれば、坐佛さらに作佛をさへず、正當恁麼のとき、千古萬古ともにもとより佛にいり魔にいるちからあり。進歩退歩、したしく溝にみち壑にみつ量あるなり。

（二）江西大寂禪師、ちなみに南嶽大慧禪師に參學するに、密受心印よりこのかた、つねに坐禪す。南嶽あるとき、大寂のところにゆきてとふ、「大德坐禪圖箇什麼。」この問、しづかに功夫參究すべし。そのゆゑは、坐禪より向上にあるべき圖のあるか、坐禪より格外に圖すべき道のいまだしきか、すべて圖すべからざるか、當時坐禪せるにいかなる圖か現成すると問著するか、審細に功夫すべし。彫龍を愛するより、すすみて眞龍を愛すべし、彫龍、眞龍ともに雲雨の能あること、學習すべし。遠を貴することなかれ遠を賤することなかれ、遠に慣熟なるべし。近を賤することなかれ近を貴することなかれ、近に慣熟なるべし。目をかろくすることなかれ、目をおもくすることなかれ、耳をおもくすることなかれ、耳をかろくすることなかれ、耳目をして聰明ならしむべし。江西いはく、「圖作佛。」この道、あきらむべし。作佛と道取するは、いかにあるべきぞ。佛に作佛せらるるを作佛と道取するか、佛を作佛するを、作佛と道取するか。佛の一面出、兩面出なるを作佛と道取するか。圖作佛は脫落にして、脫落なる圖作佛か。作佛たとひ萬般なりとも、この圖に葛藤しもてゆくを圖作佛と道取するか。しるべし大寂の道は、坐禪かならず圖作佛なり、坐禪かならず作佛の圖なり、圖は作佛より前なるべし、作佛より後なるべし、作佛の正當恁麼時なるべし。且問すらくは、この一圖いくそばくの作佛を葛藤すとかせん。この葛藤さらに葛

【二】第三段、磨塼作鏡の事。

藤をまつふべし。このとき盡作佛の條條なる葛藤、かならず盡作佛の端的なる、みなともに條條の圖なり。一圖を廻避すべからず、一圖を廻避するときは、喪身失命するなり、喪身失命するとき一圖の葛藤なり。南嶽ときに一塼をとりて、石上にあててとぐ。大寂つひにとふにいはく、「師作二什麼一」まことにたれかこれを磨塼とみざらん、たれかこれを磨塼とみん、しかあれども磨塼は、かくのごとく作什麼と問せられきたるなり。作什麼なるは、かならず磨塼なり、此土他界ことなりといへども、磨塼いまだやまざる宗旨あるべし。自己の所見を自己の所見と決定せるのみにあらず、萬般の作業に參學すべき宗旨あることを一定するなり。しるべし佛をみるに佛をしらず會せざるがごとく、水をみるもしらず、山をみるをもしらざるなり。眼前の法さらに通路あるべからずと倉卒なるは、佛學にあらざるなり。」南嶽いはく、「磨作レ鏡。」この道旨あきらむべし。磨作鏡は、道理かならずあり、見成の公案あり、虚設なるべからず。塼はたとひ塼なりとも、鏡はたとひ鏡なりとも、磨の道理を力究するに許多の榜樣あることをしるべし。古鏡も明鏡も、磨塼より作鏡をうるなるべし。もし諸鏡は磨塼よりきたるとしらざれば、佛祖の道得なし、佛祖の開口なし、佛祖の出氣を見聞せず。「大寂いはく、「磨塼豈得レ成レ鏡耶。」まことに磨塼の鐵漢なる、他の力量をからざれども、磨塼は成鏡にあらず、成鏡たとひ聻なりとも、すみやかなるべし。」南嶽いはく、「坐禪豈得レ作二佛一耶。」あきらかにしりぬ坐禪の作佛をまつにあらざる道理あり、作佛の坐禪にかかはれざる宗旨かくれず。」大寂いはく、「如何即是。」いまの

【四】如人駕車、車若不行の事。

【五】南嶽汝學坐禪爲學坐佛の事。

道取、ひとすぢに者頭の問著に相似せりといへども、那頭の即是をも問著するなり。たとへば親友の親友に相見する時節をしるべし。われに親友なるは、かれに親友なり。如何即是、すなはち一時の出現なり。(四)南嶽いはく、『如二人駕一車、車若不レ行、打レ車即是、打レ牛即是。』しばらく車若不行といふは、いかならんかこれ車行、いかならんかこれ車不行。たとへば、水流は車行なるか、水不流は車行なるか。流は水の不行といふつべし、水の行は流にあらざるもあるべきなり。しかあれば車若不行の道を參究せんには、不行ありとも參ずべし、不行なしとも參ずべし。時なるべきがゆゑに、若不行の道、ひとへに不行と道取せるにあらず。打車即是、打牛即是といふ、打車もあり打牛もあるべきか、打車と打牛と、ひとしかるべきか、ひとしからざるべきか。世間に打車の法なし、凡夫に打車の法なくとも、佛道に打車の法あることをしりぬ。參學の眼目なり。たとひ打車の法あることを學すとも、打牛と一等なるべからず、審細に功夫すべし。打牛の法たとひよのつねにありとも、佛道の打牛は、さらにたづね參學すべし。水牯牛を打牛するか、鐵牛を打牛するか、泥牛を打牛するか。鞭打なるべきか、盡界打なるべきか、盡心打なるべきか、打併髓なるべきか、拳頭打なるべきか。拳打拳あるべし、牛打牛あるべし。」大寂無對なる、いたづらに蹉過すべからず、抛塼引玉あり、回頭換面あり。この無對、さらに攙奪すべからず。(五)南嶽またしめしていはく、『汝學二坐禪一、爲學二坐佛一。』この道取を參究して、まさに祖宗の要機を辨取すべし。いはゆる學坐禪の端的いかなりとしらざるに、學坐佛としりぬ、正嫡の兒孫に

【六】第六段。若學坐禪、禪非坐臥の事。

【七】第七段。若學坐佛、佛非定相の事。

【八】第八段。汝若坐佛即是殺佛の事。

【九】第九段。若執坐相非達理の事。

あらずよりは、いかでか學坐禪の學坐佛なると道取せん。まことにしるべし、初心の坐禪は、最初の坐禪なり、最初の坐禪は、最初の坐佛なり。坐禪を道取するにいはく、「若學坐禪、禪非坐臥」。いまいふところは、坐禪は坐禪なり、坐臥にあらず。坐臥にあらずと單傳するよりこのかた、無限の坐臥は自己なり、なんぞ親疎の命脈をたづねん、いかでか迷悟を論ぜん、たれか智斷をもとめん。南嶽いはく、「若學坐佛、佛非定相」。いはゆる道取を道取せんには恁麼なり。坐佛の一佛二佛のごとくなるは、非定相を莊嚴とせるによりてなり、いま佛非定相と道取するは、佛相を道取するなり、非定相佛なるがゆゑに、坐佛さらに廻避しがたきなり、しかあればすなはち佛非定相の莊嚴なるゆゑに、若學坐禪、すなはち坐佛なり。たれか無住法におきて、ほとけにあらずと取捨し、ほとけなりと取捨せん、取捨さきより脱落せるによりて、坐佛なるなり。南嶽いはく、「汝若坐佛、即是殺佛」。いはゆるさらに坐佛を參究するに、殺佛の功德あり。坐佛の正當恁麼時は、殺佛なり、殺佛の相好光明は、たづねんとするに、かならず坐佛なるべし。殺の言、たとひ凡夫のことにひとしくとも、ひとへに凡夫と同ずべからず、また坐佛の殺佛なるは、有什麼形段と參究すべし。佛功德すでに殺佛あるを拈擧して、われらが殺人未殺人をも參學すべし。「若執坐相、非達其理」。いはゆる執坐相とは、坐相を捨し坐相を觸するなり。この道理は、すでに坐佛するには不執坐相なることとえざるなり、不執坐相なることとえざるがゆゑに、執坐相はたとひ玲瓏なりとも、非達其理なるべし。恁麼の功夫を、脱落身心といふ、いまだ

かつて坐せざるものにこの道のあるにあらず、打坐時にあり、打坐人にあり、打坐佛にあり、學坐佛にあり。ただ人の坐臥する坐のこの打坐佛なるにあらず。人坐のおのづから坐佛佛坐に相似なりといへども、人作佛あり、作佛人あるがごとし。作佛人ありといへども、一切人は作佛にあらず、ほとけは一切人にあらず、一切佛は一切人のみにあらざるがゆゑに、人かならず佛にあらず、佛かならず人にあらず、坐佛もかくのごとし。南嶽江西の師勝資强かくのごとし。坐佛の作佛を證する、江西これなり、作佛のために坐佛をしめす、南嶽これなり。南嶽の會に恁麼の功夫あり、藥山の會に向來の道取あり。しるべし佛佛祖祖の要機とせるは、これ坐佛なりといふことを。すでに佛佛祖祖とあるはこの要機を使用せり、いまだしきは、夢也未見在なるのみなり。おほよそ西天東地に、佛法つたはるるといふは、かならず坐佛のつたはるるなり、それ要機なるによりてなり。佛法つたはれざるには、坐禪つたはれず。嫡嫡相承せるは、この坐禪の宗旨のみなり。この宗旨いまだ單傳せざるは佛祖にあらざるなり。この一法あきらめざれば、萬法あきらめざるなり。萬行あきらめざるなり。法法あきらめざらんば、明眼といふべからず、得道にあらず、いかでか佛祖の今古ならん。ここをもて佛祖かならず坐禪を單傳すると一定すべし。佛祖の光明に照臨せらるるといふは、この坐禪を功夫參究するなり。おろかなるともがらは、佛光明をあやまりて日月の光明のごとく、珠火の光耀のごとくあらんずるとおもふ。日月光耀はわづかに、六道輪廻の業相なり、さらに佛光明に比すべからず。佛光明といふは、

【坐禪銘】鵝湖大義の撰、佛眼志遠の撰各一篇、緇門寶訓に載す。天台大靜の撰、同安常察の撰各一篇、諸祖偈頌に載す。【坐禪儀】長蘆宗賾の撰一篇、勅修清規に、佛心才の撰一篇、普燈錄に載す。【坐禪箴】杭州五雲逢和尚の撰一篇、景德傳燈錄三十卷に載す。天童宏智禪師撰、宏智語錄第六卷に、即ち本篇の末尾に載す。【景德傳燈錄】三十卷、吳僧道原纂

一句を受持聽聞し、一法を保任護持し、坐禪を單傳するなり。光明にてらさるるにおよばざれば、この保任なし、この信受なきなり。しかあればすなはち古來なりといへども、坐禪を坐禪なりとしれるすくなし。いま現在大宋國の諸山に甲刹の主人とあるもの、坐禪をしらず學せざるおほし、あきらめしれるありといへどもすくなし。諸寺にもとより坐禪の時節さだまれり、住持より諸僧ともに、坐禪するを本分の事とせり、學者を勸誘するにも坐禪をすすむ、しかあれどもしれる住持人はまれなり。このゆゑに古來より近代にいたるまで、坐禪銘を記せる老宿一兩位あり、坐禪儀を撰せる老宿一兩位あり、坐禪箴を記せる老宿一兩位あるなかに、坐禪銘ともにとるべきところなし、坐禪儀いまだその行履にくらし、坐禪をしらず、坐禪を單傳せざるともがらの記せるところなり。景德傳燈錄にある、坐禪箴、および嘉泰普燈錄にあるところの坐禪銘等なり、あはれむべし、十方の叢林に經歷して一生をすごすといへども、一坐の功夫あらざることを、打坐すでになんぢにあらず、功夫さらにおのれと相見せざることを。これ坐禪のおのが身心をきらふにあらず、眞箇の功夫をこころざさず、倉卒に迷醉せるによりてなり。かれらが所集は、ただ還源返本の樣子なり、いたづらに息慮凝寂の經營なり。觀練薰修の階級におよばず、十地等覺の見解におよばず。いかでか佛佛祖祖の坐禪を單傳せん、宋朝の錄者あやまりて錄せるなり、晚學すててみるべからず。坐禪箴は、大宋國慶元府太白名山天童景德寺宏智禪師正覺和尚の撰せるのみ、佛祖なり、坐禪箴なり、道得是なり、ひとり法界の表裏に光明なり、

古今の佛祖に佛祖なり、前佛後佛、この箴に箴せられもてゆき、今祖古祖、この箴より現成するなり、かの坐禪箴はすなはちこれなり。

坐禪箴　　勅諡宏智禪師正覺撰

佛佛要機、祖祖機要、不レ觸レ事而知、不レ對レ縁而照、不レ觸レ事而知、其知自微、不レ對レ縁而照、其照自妙、其知自微、曾無二分別之思一、其照自妙、曾無二毫忽之兆一、曾無二分別之思一、其知無レ偶而奇、曾無二毫忽之兆一、其照無レ取而了、水淸徹レ底兮魚行遲遲、空闊莫レ涯兮鳥飛杳杳。

いはゆる坐禪箴の箴は、大用現前なり、聲色向上の威儀なり、父母未生前の節目なり。莫謗佛祖好なり、未免喪身失命なり、頭長三尺頸短二寸なり。『佛佛要機。』佛佛はかならず佛佛を要機とせる、その要機現成せり、これ坐禪なり。『祖祖機要。』先師無此語なり、この道理これ祖祖なり、法傳衣傳あり。おほよそ回頭換面の面面、これ佛佛の要機なり、換面回頭の頭頭、これ祖祖の機要なり。『不レ觸レ事而知。』知は、覺知にあらず、覺知は小量なり、了知の知にあらず、了知は造作なり。かるがゆゑに知は不觸事なり、不觸事は知なり。遍知と度量すべからず、自知と局量すべからず。その不觸事といふは、明頭來明頭打、暗頭來暗頭打なり、坐破孃生皮なり。『不レ對レ縁而照。』この照は照了の照にあらず、靈照にあらず、不對縁を照の縁と化せざるなり、縁これ照なるがゆゑに。不對といふは、遍界不曾藏なり、破界不出頭なり、微なり、妙なり、回互不回互なり。『其知自微、

景德年中藏に入る故に名く。【嘉泰普燈錄】三十卷、報恩光寺雷庵虛中撰、嘉泰年中着手、嘉定十六年大成す。【還源返本】梁山師遠の十牛圖頌の第九を返本還源と云ひ、傳燈の同安十玄談に返本還源事亦差、本來無住不名家と共に是れ妙處に非さるなり。【息慮凝寂】枯木死灰の禪。【觀練薰修】八背捨、九次第定、師子奮迅三昧、超越三昧等の出世間禪。【二】第十段、宏智禪師坐禪箴の事。【佛佛要機】每句支徹條暢の讚を交押せる進退讚の體にして讚交として尤も妙を極む。宏智の宗乘歲に洞上の宗風此一篇に攝す。【明頭來明頭打】普化禪師の語。

【直須旨外明宗】夾山和尚の語。

曾無分別之思、思の知なし、かならずしも他力をからず。其知は形なり、形は山河なり、この山河は微なり、この微は妙なり、使用するに活鱍鱍なり。龍を作するに禹門の內外にかかはれず、いまの一知わづかに使用するは、盡界山河を拈來し盡力して知するなり。山河の親切にわが知なくば、一知半解あるべからず、分別思量のおそく來到するとなげくべからず、已曾分別なる佛佛、すでに現成しきたれり。曾無は已曾なり、已曾は現成なり。しかあればすなはち曾無分別は、不逢一人なり。「其照自妙、曾無毫忽之兆。」毫忽といふは、盡界なり、しかあるに自妙なり、自照なり、このゆゑにいまだ將來せざるがごとし、目をあやしむことなかれ、耳を信ずべからず。「直須旨外明宗、莫向言中取則」なるは、照なり、このゆゑに無偶なり、このゆゑに無取なり、これを奇なりと住持しきたり、了なりと保任しきたるに、我却疑著なり。「水清徹底兮、魚行遲遲」水清といふは、空にかかれる水は清水に不徹底なり、いはんや器界に泓澄する、水清の水にあらず、邊際に涯岸なき、これを徹底の清水とす。魚もしこの水をゆくは行なきにあらず、行はいく萬程となくすすむといへども、不測なり、不窮なり。はかる岸なし、うかぶ空なし、しづむそこなきがゆゑに、測度するたれなし。測度を論ぜんとすれば、徹底の清水のみなり、坐禪の功德、かの魚行のごとし、千程萬程、たれか卜度せん。徹底の行程は、擧體の不行鳥道なり。「空闊莫涯兮、鳥飛杳杳」空闊といふは、天にかかれるにあらず、天にかかれる空は、闊空にあらず、いはんや彼此の普徧なるは、闊空にあらず、隱顯に表裏

【紹興二十七年】十月八日は宏智禪師遷化の年月日。

【二】第十一段。永平道元禪師自撰の坐禪箴、形は宏智禪師のそれに倣へるも押韻せず、用語の自由を貴ぶが爲なり。

なき、これを闊空といふ、鳥もしこの空をとぶは、飛空の一法なり、飛空の行履はかるべきにあらず。飛空は盡界なり、盡界飛空なるがゆゑに、この飛いくそばくといふことしらずといへども、卜度のほかの道取を道取するに、杳杳と道取するなり、直須足下無絲去なり。空の飛去するとき、鳥も飛去するなり、鳥の飛去するに、空も飛去するなり。飛去を參究する道取にいはく、只在這裏なり、これ兀兀地の箴なり、いく萬程か只在這裏をきほひいふ「宏智禪師の坐禪箴かくのごとし」諸代の老宿のなかに、いまだいまのごとくの坐禪箴あらず、諸方の臭皮袋、もしこの坐禪箴のごとく道取せしめんに、一生二生のちからをつくすとも、道取せんことうべからざるなり。いま諸方にみえず、ひとりこの箴のみあるなり。先師上堂のとき、よのつねにいはく、宏智古佛なり、自餘の漢を恁麼いふこと、すべてなかりき。知人の眼目あらんとき、佛祖をも知音すべきなり。まことにしりぬ洞山に佛祖あることを。いま宏智禪師よりのち、八十餘年なり、かの坐禪箴をみて、この坐禪箴を撰す、いま仁治三年壬寅三月十八日なり、今年より紹興二十七年十月八日にいたるまで、前後を算數するに、わづかに八十五年なり、いま撰する坐禪箴これなり。

(二)坐禪箴

佛佛要機、祖祖機要、不思量而現、不回互而成、不思量而現、其現自親、不回互而成、其成自證、其現自親、曾無染汙、其成自證、曾無正偏、曾無染汙之親、其親無委而脱落、曾無正偏之證、其證無圖而功夫、水清徹地兮魚行似魚、空闊透天兮

【仁治三年】興聖寺にて記せられし年紀、歳四十三。

【同四年】二月廿六日改元、十一月は寛元元年、卽ち四十四歳、示衆の時處を明す。

【佛向上事】佛向上事とは、佛の頂顚上の事、向上、向下の邊際を超ふ、凡夫の情識を離れ佛見法見を脱すれば喫茶喫飯これ佛向上事なり、「茶裡飯裡に別處に向はざる着行術用族の三昧をいふ。分つて九段と爲す。

【一】第一段、洞山悟本大師示衆、佛向上の語話不語話不聞卽聞を示す。

鳥飛如ㇾ鳥。

宏智禪師の坐禪箴、それ道未是にあらざれども、さらにかくのごとく道取すべきなり。

おほよそ佛祖の兒孫、かならず坐禪を一大事なりと參學すべし、これ單傳の正印なり。

仁治三年壬寅三月十八日記ニ于興聖寶林寺一

同四年癸卯冬十一月在ニ越州吉田縣吉峰精舍一示衆

正法眼藏坐禪箴　畢

正法眼藏佛向上事

（一）高祖筠州洞山悟本大師は、潭州雲巖山無住大師の親嫡嗣なり、如來より三十八位の祖向上なり、自己より向上三十八位の祖なり。大師有時示ㇾ衆云、「體ニ得佛向上事一方有ニ些子語話分一。」僧便問、「如何是語話。」大師云、「語話時闍黎不聞。」僧曰、「和尚還聞否。」大師云、「待ニ我不語話時一卽聞。」いまいふところの佛向上事の道、大師その本祖なり、自餘の佛祖は、大師の道を參學しきたり、佛向上事を體得するなり。まさにしるべし佛向上事は、在因にあらず果滿にあらず、しかあれども語話時の不聞を體得し參徹することあるなり。佛向上にいたらざれば、佛向上を體得することなし、語話にあらざれば、佛向上事を體得せず。相顯にあらず相隱にあらず、相與にあらず相奪にあらず。このゆゑに語話現成のとき、これ

【高祖道の】洞山大師を高祖と尊稱す、道のは、いはくの意。

佛向上事なり。佛向上事現成のとき、闍黎不聞なり。闍黎不聞といふは、佛向上事自不聞なり。すでに語話時闍黎不聞なり、しるべし語話それ聞に染汙せず、不聞に染汙せず。このゆゑに聞不聞に不相干なり。不聞裏藏闍黎なり。語話裏藏闍黎なりとも、逢人不逢人、恁麼不恁麼なり。闍黎語話時、すなはち闍黎不聞なり。その不聞たらくの宗旨は、舌骨に罣礙せられて不聞なり、耳裏に罣礙せられて不聞なり、眼睛に照穿せられて不聞なり、身心に塞却せられて不聞なり。しかあるゆゑに不聞なり。これらを拈じてさらに語話とすべからず、不聞すなはち語話なるにあらず、語話時不聞なるのみなり。高祖道の語話時闍黎不聞は、語話の道頭道尾は、如藤倚藤なりとも、語話纏語話なるべし。語話に罣礙せらる、僧曰、和尚還聞否。いはゆるは和尚を擧して聞語話と擬するにあらず。擧聞さらに和尚にあらず、語話にあらざるがゆゑに。しかあれどもいま僧の擬議するところは、語話時に卽聞を參學すべしやいなやと咨參するなり。たとへば語話すなはち語話なりやと聞取せんと擬し、還聞これ還聞なりやと聞取せんと擬するなり。しかもかくのごとくいふとも、なんぢが舌頭にあらず。洞山高祖道の待二我不語話時一卽聞、あきらかに參究すべし。いはゆる正當語話のとき、さらに卽聞あらず。卽聞の現成は、不語話のときなるべし、いたづらに不語話のときをさしおきて、不語話をまつにはあらざるなり。卽聞のとき語話を傍觀とするにあらず。眞箇に傍觀なるがゆゑに。卽聞のとき語話さりて一邊の那裏に存取せるにあらず、語話のとき、卽聞したしく語話の眼睛裏に藏身して霹靂するにあらず。しかあれ

【二】第二段。高祖洞山大師の佛向上人非佛、雲門保福法眼三師の註脚

ばすなはちたとひ闍黎にても語話時は不聞なり、たとひ我にても不語話時即聞なる、これ方有二些子語話分一なり、これ體得佛向上事なり。たとへば語話時即聞を體得するなり、このゆゑに待二我不語話時一即聞なり。しかありといへども佛向上事は、七佛已前事にあらず、七佛向上事なり。

（一）高祖悟本大師示衆云、「須レ知レ有二佛向上人一。」時有レ僧問、「如何是佛向上人。」大師云、「非佛。」雲門云、「名不得、狀不得、所以言レ非。」保福曰「佛非。」法眼曰、「方便呼爲レ佛。」おほよそ佛祖の向上に佛祖なるは、高祖洞山なり。そのゆゑは、餘外の佛面祖面おほしといへども、いまだ佛向上の道は、夢也未見なり。德山臨濟等には、僞證すとも承當すべからず、巖頭雪峰等は、粉碎其身すとも、喫拳すべからず。高祖道の體二得佛向上事一、方有二些子語話分一。および須レ知レ有二佛向上人一等をば、ただ一二三四五の三阿僧祇百大劫の修證のみにては、證究すべからず、まさに玄路の參學あるもののその分ありぬべし。すべからく佛向上人ありとしるべし、いはゆるは弄精魂の活計なり。しかありといへども古佛を擧してしり、拳頭を擧起してしる。すでに恁麼見得するがごときは、有佛向上人をしり、無佛向上人をしる。而今の示衆は、佛向上人となるべしとにはあらず、佛向上人と相見すべしとにあらず、ただしばらく佛向上人ありとしるべしとなり。この關棙子を使得するがごときは、まさに有佛向上人を不知するなり、無佛向上人を不知するなり。その佛向上人、これ非佛なり。いかならんか非佛と疑著せられんとき、思量すべし。佛より以前なるゆゑに非

【三】第三段。拈木法成示衆。六根不具七識不全の事。

【四】第四段。雲居道膺禪師の不名道膺の話。

佛といはず、佛よりのちなるゆゑに非佛といはず、佛をこゆるゆゑに非佛なるにあらず、ただひとへに佛向上なるゆゑに非佛なり。その非佛といふは、脱落佛面目なるゆゑにいふ、脱落佛身心なるゆゑにいふ。

(三)東京淨因枯木禪師諱法成、嗣芙蓉、示衆曰、知有佛祖向上事、方有說話分。諸禪德且道、那箇是佛祖向上事。有箇人家兒子、六根不具、七識不全、是大闡提、無佛種性。逢佛殺佛、逢祖殺祖、天堂收不得、地獄攝無門。大衆還識此人麼。良久曰、對面不仙陀、睡多饒寐語。いはゆる六根不具といふは、眼睛被人換却木槵子了、鼻孔被人換却竹筒了、髑髏被人借作屎杓子了。作麼生是換却底道理。このゆゑに六根不具なり、不具六根なるがゆゑに、爐鞴裏を透過して金佛となれり、大海裏を透過して泥佛となれり、火焔裏を透過して木佛となれり。七識不全といふは、破木杓なり、殺佛すといへども逢佛す、逢佛せるゆゑに殺佛す。天堂にいらんと擬すれば、天堂すなはち崩壞す、地獄にむかへば、地獄たちまちに破裂す。このゆゑに對面すれば破顏す、さらに仙陀なし。睡多なるにもなほ寐語おほし。しるべしこの道理は、擧山而地兩知已、玉石全身百雜碎なり。枯木禪師の示衆、しづかに參究功夫すべし、卒爾にすることなかれ。

(四)雲居山弘覺大師、問洞山、山問、闍黎名什麼。雲居曰、道膺。高祖又問、向上更道。雲居曰、向上道即不名道膺。洞山道、吾在雲巖時祇對無異。いま師資の道、かならず審細にすべし。いはゆる向上不名道膺は、道膺の向上なり、適來の道膺に向上の

【五】第五段、曹山本寂禪師の不名本寂の話。

【六】第六段。盤山寶積禪師の向上の一路。

【七】第七段。智門光祚禪師の拄杖頭上。

不名道膺あることを參學すべし。向上不名道膺の道理現成するよりこのかた、眞箇道膺なり。しかあれども向上にも道膺なるべしといふことなかれ、たとひ高祖道の向上更道をきかんとき、領話を呈するに向上更名道膺と道著すとも、すなはち向上道なるべし。なにとしてかかくいふ、いはく道膺たちまちに頂𩕳に跳入して藏身するなり、藏身すといへども露影なり。

(五)曹山本寂禪師參二高祖洞山一、山問、「闍黎名什麽。」曹山曰、「本寂。」高祖云、「向上更道。」曹山曰、「不レ道。」高祖云、「爲二甚麽一不レ道。」師曰、「不二名本寂一。」高祖然レ之。いはく向上に道なきにあらず、これ不道なり、甚麽としてか不道、いはゆる不名本寂なり。しかあれば向上の道は不道なり、向上の不道は不名なり、不名の本寂は、向上の道なり。このゆゑに本寂不名なり、しかあれば非本寂あり、脫落の不名あり、脫落の本寂あり。

(六)盤山寶積禪師云く、「向上一路、千聖不傳。」いはくの向上一路は、ひとり盤山の道なり、向上事といはず、向上人といはず、向上一路といふなり。その宗旨は、千聖競頭して出來すといへども、向上一路は、不傳なり。不傳といふは、千聖は不傳の分を保護するなり、かくの如くも學すべし。さらにまたいふべき處あり、いはゆる千聖千賢はなきにあらず、たとひ賢聖なりとも、向上一路は、賢聖の境界にあらず。

(七)智門山光祚禪師、因僧問、「如何是佛向上事。」師云、「拄杖頭上挑二日月一。」いはく拄杖の日月に罣礙せらるる、これ佛向上事なり。日月の拄杖を參學するとき、盡乾坤くらし、これ

【八】第八段　石頭と道悟の向上の轉處

佛向上事也。日月これ拄杖とにあらず、拄杖頭上は、全拄杖なり。

石頭無際大師の會に、天皇寺の道悟禪師とふ、「如何是佛法大意。」師云、「不得不知。」道悟曰、「向上更有二轉處一也無。」師云、「長空不レ礙二白雲飛一。」いはく石頭は、曹谿の二世なり。天皇寺の道悟和尚は、藥山の師弟なり。あるときとふ、「いかならんか佛法大意。」この問は、初心晩學の所堪にあらざるなり、大意をきかば大意を會取しつべき時節にいふなり。石頭いはく、「不得不知。」しるべし佛法は初一念にも大意あり、究竟位にも大意あり、その大意は不得なり、發心修行取證はなきにあらず、不得なり。その大意は不知なり、修證は無にあらず、修證は有にあらず、不知なり、不得なり。またその大意は、不得不知なり、聖諦修證なきにあらず、不得不知なり、聖諦修證あるにあらず、不得不知なり。」道悟いはく、「向上更有二轉處一也無。」いはゆるは轉處もし現成することあらば、向上現成す。轉處といふは、方便なり、方便といふは、諸佛なり、諸祖なり。これを道取するに更有なるべし。たとひ更有なりとも更無をもらすべきにあらず、道取あるべし。「長空不レ礙二白雲飛一」は、石頭の道なり、長空さらに長空を不礙なり。長空これ長空飛を不礙なりといへども、さらに白雲みづから白雲を不礙なり、白雲飛不礙なり。白雲飛さらに長空飛を礙せず、他に不礙なるは自にも不礙なり。面面の不礙を要するにはあらず、各各の不礙を存するにあらず、このゆゑに不礙なり。長空不礙白雲飛の性相を擧拈するなり。正當恁麼時、この參學眼を揚眉して、佛來をも覩見し、祖來をも相見す、自來をも相見し、他來をも相

【問一答十】 香嚴の語。論語に回也聞一知十の語勢

【九】 黄檗禪師の向上の關棙子

【黄檗は百丈の】 道元禪師大いに黄檗を稱讚す。

見すこれを問一答十の道理とせり、いまいふ問一答十は、問一もその人なるべし、答十もその人なるべし。

黄檗云く、「夫出家人、須知有從上來事分、且如四祖下牛頭山法融大師、横說竪說、猶未知向上關棙子、此有眼腦方辨得邪正宗黨。」黄檗恁麼道の從上來事は、從上佛佛祖祖正傳しきたる事なり、これを正法眼藏涅槃妙心といふ。自己にありといふとも須知なるべし、自己にありといへども猶未知なり。佛佛正傳せざるは、夢也未見なり。黄檗は百丈の法子として、百丈よりもすぐれ、馬祖の法孫として、馬祖よりもすぐれたり。おほよそ祖宗三門のあひだ、黄檗の齊肩なるなし、ひとり黄檗のみありて、牛頭の兩角なきことをあきらめたり、自餘の佛祖いまだしらざるなり。牛頭山の法融禪師は、四祖下の尊宿なり、横說竪說、まことに經師論師に比するには、西天東地のあひだ、不爲不足なりといへども、うらむらくはいまだ向上の關棙子をしらず、向上の關棙子を道取せざることを、もし從上來の關棙子をしらざらんば、いかでか佛法の邪正を辨會することあらん、ただこれ學言語の漢なるのみなり。しかあれば向上の關棙子をしること、向上の關棙子を修行すること、向上の關棙子を證すること、庸流のおよぶところにあらざるなり。眞箇の功夫あるところには、かならず現成するなり。いはゆる佛向上事といふは、佛にいたりてすすみてさらに佛をみるなり、衆生の佛をみるにおなじきなり。しかあればすなはち見佛も衆生の見佛とひとしきは見佛にあらず、見佛もし衆生の見佛のごとくなるは見佛錯なり。

【仁治三年】御齢四十三歳、興聖寺に於ける示衆。

【恁麼】雲居弘覺大師の四恁麼を擧して如是の法を開演す、天は恁麼に高く、地は恁麼に低し、如是の法なり。段を分つこと五。【一】第一段。雲居の示衆、四恁麼を明す。

いはんや佛向上事ならんや。しるべし黄檗道の向上事は、いまの杜撰のともがら、領覽におよばざらん、ただまさに法道もし法融におよばざるあり。法道おのづから法融にひとしきありとも、法融に法兄弟なるべし、いかでか向上の關棙子をしらん。自餘の十聖三賢等いかにも向上の關棙子をしらざるなり、いはんや向上の關棙子を開閉せんや。この宗旨は、參學の眼目なり、もし向上の關棙子をしるを、佛向上人とするなり、佛向上事を體得せるなり。

爾時仁治三年壬寅三月二十三日在二觀音導利興聖寶林寺一示衆

正法眼藏佛向上事 畢

正法眼藏恁麼

（一）雲居山弘覺大師は、洞山の嫡子なり、釋迦牟尼佛より、第三十九世の法孫なり、洞山宗の嫡祖なり。一日示レ衆云、『欲レ得二恁麼事一、須レ是恁麼人、既是恁麼人、何愁二恁麼事一』いはゆるは恁麼事をえんとおもふは、すべからくこの恁麼人なるべし、すでにこれ恁麼人なり、なんぞ恁麼事をうれへん。この宗旨は、直趣無上菩提、しばらくこれを恁麼といふ。この無上菩提の體たらくは、すなはち盡十方界も無上菩提の少許なり、さらに菩提の盡界よりもあまるべし。われらもかの盡十方界のなかにあらゆる調度なり。なにによりてか恁

【若因地倒】　西域記の語。

麼あるとしる、いはゆる身心ともに盡界にあらはれて、われにあらざるゆゑにしかありとしるなり。身すでにわたくしにあらず、いのちは光陰にうつされてしばらくもとどめがたし、紅顏いづくへかさりにし、たづねんとするに蹤跡なし。つらつら觀ずるところに往事のふたたびあふべからざるおほし。赤心もとどまらず、片片として往來す。たとひまことありといふとも、吾我のほとりにとどこほるものにはあらず、恁麼なるに無端に發心するものあり。この心おこるより、向來もてあそぶところをなげすてて、所未聞をきかんとねがひ、所未證を證せんともとむる、ひとへにわたくしの所爲にあらず、しるべし恁麼人なるゆゑにしかあるなり。なにをもてか恁麼人にてありとしる、すなはち恁麼事をえんとおもふによりて、恁麼人なりとしるなり。すでに恁麼人の面目あり、いまの恁麼事をうれふべからず、うれふるもこれ恁麼事なるがゆゑにうれへにあらざるなり。また恁麼事の恁麼あるにもおどろくべからず、たとひおどろきあやしまるる恁麼ありとも、さらにこれ恁麼なり、おどろくべからずといふ恁麼あるなり。これただ佛量にて量すべからず、心量にて量すべからず、法界量にて量すべからず、盡界量には量すべからず。ただまさに『既是恁麼人、何愁恁麼事。』なるべし、このゆゑに聲色の恁麼は恁麼なるべし。身心の恁麼は恁麼なるべし、諸佛の恁麼は恁麼なるべきなり。たとへば因地倒者のときを恁麼なりと恁麼會なるに、必因地起の恁麼のとき、因地倒をあやしまざるなり。古昔よりいひきたり、西天よりいひきたり、天上よりいひきたれる道あり。いはゆる、若因レ地倒、還因レ地起、離レ地

求レ起、終無ニ其理ー。』いはゆる道は地によりてたふるるものは、かならず地によりておく、地によらずしておきんことをもとむるは、さらにうべからずとなり。しかあるを擧拈して大悟をうるはしとし、身心をもぬくる道とせり。このゆゑにもしいかなるか諸佛成道の道理なると問著するにも、地にたふるるものの、地によりておくるがごとしといふ。これを參究して向來をも透脫すべし、末上をも透脫すべし、正當恁麼時をも透脫すべし。大悟不悟、却迷失迷、被ニ悟礙ー被ニ迷礙ー。』ともにこれ地にたふるるものの、地によりておくる道理なり。これ天上天下の道得なり、西天東地の道得なり、古往今來の道得なり、古佛新佛の道得なり。この道得さらに道未盡あらず、道虧闕あらざるなり。しかあれども恁麼會のみにしてさらに不恁麼會なきは、このことばを參究せざるがごとし。たとひ古佛の道得は、恁麼つたはれりといふとも、さらに古佛として古佛の道を聞著せんとき、向上の聞著あるべし。いまだ西天に道取せず、天上に道取せずといへども、さらに道著の道理あるなり。いはゆる地によりてたふるるもの、もし地によりておきんことをもとむるには、無量劫をふるに、さらにおくべからず、まさにひとつの活路よりおくることをうるなり。いはゆる地によりてたふるるものは、かならず空によりておき、空によりてたふるるものは、かならず地によりておくるなり。もし恁麼あらざらんば、つひにおくることあるべからず。諸佛諸祖、みなかくのごとくありしなり。もし人ありて恁麼とはん、空と地と、あひさることといくばくぞ。恁麼問著せんに、かれにむかひて恁麼いふべし。空と地と、あひさるこ

【二】第二段。第七代の祖僧伽難提尊者の我心鳴の話

【依主隣近】六合釋中の二。依主は梵語（Tatpuruṣa）の譯名、二個の名辭が連結して一語となりたる場合に二語の間に主伴の關係あることを顯はす法なり、山中の寺を山寺と云ふが如し。隣近釋は梵語（Avyayībhāva）の譯語、副合詞中の副詞にして各處に一樣に云ふが如き副合詞をいふ。持業、有財、相違、帶數、之を六合釋といふ。

と十萬八千里なり、「若因レ地倒、必因レ空起、離レ空求レ起、終無二其理一、若因レ空倒、必因レ地起、離レ地求レ起、終無二其理一」もしいまだかくのごとく道取せざらんば、佛道の地空の量いまだしらざるなり、いまだみざるなり。

（二）第十七代の祖師、僧伽難提尊者、ちなみに伽耶舍多これ法嗣なり。あるとき殿にかけてある鈴鐸の風にふかれてなるをきゝて、伽耶舍多にとふ、「風のなるとやせん、鈴のなるとやせん。」伽耶舍多まふさく、「風の鳴にあらず、鈴の鳴にあらず、我心の鳴なり。」僧伽難提尊者いはく、「心はまたなにぞや。」伽耶舍多まふさく、「ともに寂靜なるがゆゑに。」僧伽難提尊者いはく、「善哉善哉、わが道をつぐべきこと子にあらずよりはたれぞや。」つひに正法眼藏を傳付す。これを風の鳴にあらざるところに、我心鳴を學す、鈴のなるにあらざるとき、我心鳴を學す。我心鳴はたとひ恁麼なりといへども、倶寂靜なり。西天より東地につたはれ、古代より今日にいたるまで、この因緣を學道の標準とせるに、あやまるたぐひおほし。伽耶舍多の道取する、風のなるにあらず鈴のなるにあらず、心のなるなりといふは、能聞の恁麼時の正當に念起あり、この念起を心といふ、この心念もしなくば、いかでか鳴響を緣せん。この念によりて聞を成ずるによりて、聞の根本といひぬべきによりて、心のなるといふなり。これは邪解なり、正師のちからをえざるによりてかくのごとし。たとへば依主隣近の論師の釋のごとし、かくのごとくなるは佛道の玄學にあらず。しかあるに佛道の嫡嗣に學しきたれるには、無上菩提正法眼藏、これを寂靜といひ、無爲といひ、三

【陀羅尼】梵音は(Dharani)一言に多功能を含む故に譯せず、總持、能持、能遮等といふ。

【三】第三段。六祖大鑑禪師風幡の話。

味といひ、陀羅尼といふ。道理は一法わづかに寂靜なれば、萬法ともに寂靜なり、風吹寂靜なれば、鈴鳴寂靜なり、このゆゑに倶寂靜といふなり。心鳴は風鳴にあらず、心鳴は鈴鳴にあらず、心鳴は心鳴にあらずと道取するなり。親切の恁麼なるを究辨せんよりは、さらにただいふべし、風鳴なり、鈴鳴なり、吹鳴なり、鳴鳴なりともいふべし。何愁恁麼事のゆゑに恁麼あるにあらず、何關恁麼事なるによりて、恁麼なるなり。

(三)第三十三祖大鑑禪師未剃髮のとき、廣州法性寺に宿するに、二僧ありて相論ずるに、一僧いはく、『幡の動ずるなり。』一僧いはく、『風の動ずるなり。』かくのごとく相論往來して休歇せざるに、六祖いはく、『風動にあらず、幡動にあらず、仁者心動なり。』二僧ききてすみやかに信受す。この二僧は西天よりきたれりけるなり、しかあればすなはちこの道著は風も幡も動もともに心にてあると、六祖は道取するなり。まさにいま六祖の道をきくといへども、六祖の道をしらず、いはんや六祖の道得を道取することをえんや。『爲甚麼恁麼道。』いはゆる仁者心動の道をききて、すなはち仁者心動といはんとしては、仁者心動と道取するは、六祖をみず、六祖をしらず、六祖の法孫にあらざるなり。いま六祖の兒孫として、六祖の道を道取し、六祖の身體髮膚をえて道取するには、恁麼いふべきなり。いはゆる仁者心動はさもあらばあれ、さらに仁者動といふべし。『爲甚麼恁麼道、』いはゆる動者動なるがゆゑに、仁者仁者なるによりてなり、旣是恁麼人なるがゆゑに、恁麼道なり。六祖のむかしは新州の樵夫なり、山をもきはめ水をもきはむ。たとひ靑松の下に功夫して根

【有智若聞】法華譬喩品の語。
【五百の蝙蝠】西域記卷二に出づ。
【十千の游魚】北涼曇無讖譯金光明經第四流水長者品に出づ。

源を截斷せりとも、なにとしてか明窓のうちに從容して照心の古教ありとしらん、澡雪たれにかならふ。いちにありて經をきく、これみづからまちしところにあらず、他のすすむるにあらず。いとけなくして父を喪し、長じては母をやしなふ、しらずこのころもにかかれりける一顆珠の乾坤を照破することを。たちまちに發明せしより老母をすてて知識をたづぬ、人のまれなる儀なり、恩愛のたれかかろからん。法をおもくして恩をかろくするによりて、棄恩せしなり。これすなはち『有智若聞、即能信解』の道理なり。いはゆる智は人に學せず、みづからおこすにあらず、智よく智につたはれ、智すなはち智をたづぬるなり。五百の蝙蝠は、智おのづから身をつくる、さらに身なし心なし。十千の游魚は、智したしく身にてあるゆゑに、縁にあらず因にあらずといへども、聞法すれば即解するなり、來にあらず入にあらず、たとへば東君の春にあふがごとし。智は有念にあらず、智は無念にあらず、智は有心にあらず、智は無心にあらず、いはんや大小にかかはらんや、いはんや迷悟の論ならんや。いふところは佛法はいかにあることともしらず、さきより聞取するにあらざれば、したふにあらずねがふにあらざれども、聞法するに恩をかろくし身をわするるは、有智の身心、すでに自己にあらざるがゆゑにしかあらしむるなり、これを即能信解といふ。しらずいくめぐりの生死にかこの智をもちながらいたづらなる塵勞にめぐる、なほし石の玉をつつめるが、玉も石につつまれりともしらず、石も玉をつつめりともしらざるがごとし。人これをしる、人これをとる、すなはち玉の期せざるところ、石のまたざると

【無智疑怪】法華藥草喩品の話。

【四】第四段。石頭無際大師に藥山問ふ三乘十二分敎粗知の話。

ころ、有の知見によらず、玉の思量にあらざるなり。すなはち人と智とあひしらざれども、道かならず智にきかるるがごとし。無智疑怪即爲永失といふ道あり、智かならずしも有にあらず、智かならずしも無にあらざれども、一時の春松なる有あり、秋菊なる無あり、この無智のとき、三菩提みな疑怪となる、盡諸法みな疑怪なり、このとき永失即爲なり。所聞すべき道、所證なるべき法、しかしながら疑怪なり、われにあらず徧界かくるるところなし　たれにあらず萬里一條鐵なり。たとひ恁麼して拄杖なりとも、『十方佛土中、唯有一乘法』なり。たとひ恁麼して葉落すとも『是法住法位、世間相常住』なり、既是恁麼事なるによりて、有智と無智と、日面と月面となり。恁麼人なるがゆゑに、六祖も發明せり。つひにすなはち、黄梅山に參じて、大滿禪師を拜するに、行堂に投下せしむ。晝夜に米を碓こと、わづかに八箇月をふるほどに、あるとき夜ふかく更たけて、大滿みづからひそかに碓坊にいりて六祖にとふ、「米白也未」と。六祖いはく、「白也未レ有レ篩在」と。大滿つゑにて臼をうつこと三下するに、六祖箕にいるる米をみたび簸、このときを師資の道あひかなふといふ。みづからもしらず他も不會なりといへども、傳法傳衣、まさしく恁麼の正當時節なり

　南嶽山無際大師、ちなみに藥山とふ、『三乘十二分敎某甲粗知、嘗聞南方直指人心、見性成佛、實未明了、伏望和尚慈悲指示。』これ藥山の問なり、藥山は本爲講者なり、三乘十二分敎は、通利せりけるなり、しかあれば佛法さらに昧然なきがごとし。むかしは別

【五】第五段曹溪高祖南嶽に示す是什麼物恁麼來

【仁治三年】祖師四十三。興聖寺に於ける示衆

【行持上】行は卽ち修行、持は卽ち護持、行は佛行、行佛の行なり、持は實相の總持。御抄に云く此行持の行

宗いまだおこらず、ただ三乘十二分教をあきらむるを、教學の家風とせり。いまの人おほく錯致にして各各の宗旨をたてて、佛法を度量する、佛道の法度にあらず。大師いはく、「恁麼也不得、不恁麼也不得、恁麼不恁麼總不得、汝作麼生」。これすなはち大師の藥山のためにする道なり、まことにそれ恁麼不恁麼總不得なるゆゑに、恁麼不得なり、不恁麼不得なり。恁麼は恁麼をいふなり、有限の道用にあらず、無限の道用にあらず、恁麼は不得に參學すべし、不得は恁麼に問取すべし。」這箇の恁麼および不得、ひとへに佛量のみにかかはれるにあらざるなり、會不得なり、悟不得なり。

曹谿山大鑑禪師、ちなみに南嶽大慧禪師にしめすにいはく、「是什麼物恁麼來。」この道は、恁麼はこれ不疑なり、不會なるがゆゑに、是什麼物なるがゆゑに、萬物まことにかならず、什麼物なると參究すべし、一物まことにかならず什麼物なると參究すべし、什麼物は疑著にはあらざるなり、什麼來なり。

爾時仁治三年壬寅三月二十六日在二觀音導利興聖寶林寺一示衆

正法眼藏恁麼　畢

正法眼藏行持(上)

(一)佛祖の大道、かならず無上の行持あり、道環して斷絶せず、發心修行、菩提涅槃、しば

の字、教行證の行にあらず、證を不待、ゆゑに所詮以佛祖名行持也と此一篇高祖の活骨髓、文文句句血滴滴、一點一劃光明の片片なり。此一巻を信受體得すれば一生參學の事畢ると習つべし。本篇大段を分つて三と爲す、第一行持の總說、第二佛祖の行持、第三行持の總結。

【佛祖の大道】以下第一行持の總說。此中段を分つ五。

【一】行持の道環。第一段。

【二】行持の宗旨第二段。

【三】行持の功德。第三段。

【四】行持の見成、第四段。

らくの間隙あらず、行持道環なり。このゆゑに、みづからの強爲にあらず、他の強爲にあらず、不曾染汚の行持なり。この行持の功德、われを保任し、他を保任す。(二)その宗旨は、わが行持、すなはち十方の帀地漫天みなその功德をかうぶる。他もしらず、われもしらずといへども、しかあるなり。このゆゑに諸佛諸祖の行持によりて、われらが行持見成し、われらが大道通達するなり。われらが行持によりて、諸佛の行持見成し、諸佛の大道通達するあり。われらが行持によりて、この道環の功德あり。これによりて、佛佛祖祖、佛住し佛非し佛心し佛成して、斷絶せざるなり。この行持によりて、日月星辰あり、行持によりて、大地虛空あり、行持によりて、依正身心あり、行持によりて、四大五蘊あり。行持これ世人の愛處にあらざれども、諸人の實歸なるべし。過去現在未來の諸佛の行持によりて、過去現在未來の諸佛は現成するなり。(三)その行持の功德、ときにかくれず、かるがゆゑに發心修行す。その功德ときにあらはれず、かるがゆゑに見聞覺知せず。あらはれざれども、かくれずと參學すべし、隱顯存沒に染汚せられざるがゆゑに。われを見成する行持、いまの當隱に、これいかなる緣起の諸法ありて行持すると不會なるは、行持の會取、さらに新條の特地に、あらざるによりてなり。(四)緣起は行持なり、行持は緣起せざるがゆゑに、功夫參學を審細にすべし。かの行持を見成する行持は、すなはちこれわれらがいまの行持なり。行持のいまは、自己の本有元住にあらず、行持のいまは、自己に去來出入するにあらず。いまといふ道は、行持よりさきに、あるにはあらず、行持現成するを、いまといふ。しか

【五】第五段　行持は懈倦なき法なり。

【他國踰跡の窮子】法華信解品の大意なり。踰跡は行不正なり、又伶俜に作る、孤獨の貌、さまよふこと。窮子は困窮せる者にて乞食する者。

【慈父大師】以下、第二佛祖の行持、此中章を分つこと二十四。

【一】第一、釋尊章、釋迦牟尼佛。

【外道の訕謗】佛に九惱ある中、外道謗佛四あり、孫陀利謗佛、婆羅門女謗佛、旃陀女謗佛、及び調達謗毀なり。

【二】第二、迦葉章、摩訶迦葉。八祖

あればすなはち、一日の行持これ、諸佛の種子なり、諸佛の行持なり。この行持に諸佛見成せられ、行持せらるるを行持せざるは、諸佛をいとひ、諸佛を供養せず、行持をいとひ、諸佛と同生同死せず、同學同參せざるなり。いまの華開葉落、これ行持の見成なり、磨鏡破鏡、それ行持にあらざるなし。(五)このゆゑに行持をさしおかんと擬するは、行持をのがれんとする邪心をかくさんがために、行持をさしおくも行持なるによりて、行持におもむかんとするは、なほこれ行持をこころざすににたれども、眞父の家郷に寶財をなげすてて、さらに他國踰跡の窮子となる、踰跡のときの風水、たとひ身命を喪失せしめずといふとも、眞父の寶財なげすつべきにあらず、眞父の法財、なほ失誤するなり、このゆゑに行持は、しばらく懈倦なき法なり。

この慈父大師、釋迦牟尼佛、十九歳の佛壽より、深山に行持して、三十歳の佛壽にいたりて、大地有情同時成道の行持あり。八旬の佛壽にいたるまで、なほ山林に行持し、精藍に行持す。王宮にかへらず、國利を領せず、布僧伽梨を依持し、在世に一經するに、互換せず。一盂、在世に互換せず、一時一日も獨處することなし。人天の閑供養を辭せず、外道の訕謗を忍辱す。おほよそ一化は行持なり、淨衣乞食の佛儀、しかしながら行持にあらずといふことなし。

第八祖摩訶迦葉尊者は、釋尊の嫡嗣なり。生前もはら十二頭陀を行持して、さらにおこたらず。十二頭陀といふは、一者不レ受ニ人請一、日行ニ乞食一、亦不レ受ニ比丘僧一飯食分錢

は初祖の誤り

【頭陀】梵音（Dhuta）陶汰、抖藪、修法洗浣の義。煩惱の塵垢を洗ひ去りて佛道を求むることと又淨行ともいふ。

【辟支佛】梵音（Pratyeka-Buddha）無佛世界に於ける二乘の獨覺佛なり

【三】第三、脇尊者章　波栗濕縛

財、二者止宿山上、不宿人舍郡縣聚落、三者不得從人乞衣被、人與衣被亦不受、但取丘塚間死人所棄衣、補治衣之、四者止宿野田中樹下、五者一日一食、一名僧迦僧泥、六者晝夜不臥、但坐睡經行、一名僧泥沙者傴、七者有三領衣、無有餘衣、亦不臥被中、八者在塚間、不在佛寺中、亦不在人間、目視死人骸骨坐禪求道、九者但欲獨處、亦不欲見人、亦不欲與人共臥、十者先食果蓏、卻食飯、食已不得復食果蓏、十一者但欲露臥、不在樹下屋宿、十二者不食肉、亦不食醍醐、麻油不塗身。これを十二頭陀といふ、摩訶迦葉尊者、よく一生に不退不轉なり。如來の正法眼藏を正傳すといへども、この頭陀を退することなし。あるとき佛言すらく、なんぢすでに年老なり、僧食を食すべし。摩訶迦葉尊者いはく、われもし如來の出世にあはずば、辟支佛となるべし、生前に山林に居すべし、さいはひに如來の出世にあふ、法のうるほひあり、しかありといふとも、つひに僧食を食すべからず。如來稱讚しまします。あるいは迦葉頭陀行持のゆゑに、形體憔悴せり。衆みて輕忽するがごとし。ときに如來ねんごろに迦葉をめして、半座をゆづりまします。迦葉尊者、如來の座に坐す、しるべし摩訶迦葉は、佛會の上座なり、生前の行持、ことごとくあるべからず。

（三）第十祖波栗濕縛尊者は、一生脇不至席なり。これ八旬老年の辦道なりといへども、當時すみやかに大法を單傳す。これ光陰をいたづらにもらさざるによりて、わづかに三箇年の功夫なりといへども、三菩提の正眼を單傳す。尊者の在胎六十年なり、出胎白髮なり、誓

【不屍臥】身を横にして臥寢せず。
【三藏理】經律論の三藏、戒定慧三學の道理。
【六神通】天眼、天耳、他心、宿命、神足、漏盡の六通。
【八解脫】八背捨ともいふ。一内有色想觀外色解脫、二内無色想觀外色解脫、三淨解脫身作證具足住、四空無邊處解脫、五識無邊處解脫、六無所有處解脫、七非想非非想處解脫、八滅受想定身作證具足住。
【三界欲】見惑八十八使、思惑八十一品。
【三明智】羅漢聖者の具足する三種の智。一宿住智證明、二死生智證明、三漏盡智證明。

不屍臥、名脇尊者、乃至、暗中手放光明、以取經法。」これ生得の奇相なり。脇尊者生年八十、垂捨家染衣。域中少年便誚之曰、『愚夫朽老、一何淺智。夫出家者有二業、一則習定、二乃誦經。而今衰耄無所進取、濫迹淸流、徒知飽食。』時脇尊者聞諸譏議、因謝時人而自誓曰、「我若不通三藏理、不斷三界欲、不得六神通、不具八解脫、終不以脇而至於席。」自爾後、唯日不足、經行宴坐、住立思惟、晝則研習理教、夜乃靜慮凝神、綿歷三歲、通學三藏、斷三界欲、得三明智。時人敬仰、因號脇尊者。しかあれば脇尊者處胎六十年はじめて、出胎せり、胎内に功夫なからんや。出胎よりのち、八十にならんとするに、はじめて出家學道をもとむ。託胎よりのち、一百四十年なり、まことに不群なりといへども、朽老は阿誰よりも朽老ならん、處胎にて老年なり、出胎にても老年なり。しかあれども時人の譏嫌をかへりみず、誓願の一志不退なれば、わづかに三歲をふるに、辦道現成するなり、たれか見賢思齊をゆるくせん。年老耄及をうらむることなかれ。この生しりがたし、生か生にあらざるか、老か老にあらざるか。四見すでにおなじからず、諸類の見おなじからず、ただ志氣を專修にして辦道功夫すべきなり。辦道に生死をみるに相似せりと參學すべし、生死に辦道するにはあらず。いまの人あるひは五旬六旬におよび、七旬八旬におよぶに、辦道をさしおかんとするは至愚なり。生來たとひいくばくの年月と覺知すとも、これはしばらく人間の精魂の活計なり、學道の消息にあらず。壯齡耄及をかへりみることなかれ、學道究辦を一志すべし、脇尊者に齊肩なるべきなり。塚間の一堆の塵

【見賢思齊】論語里仁第四に「子曰見賢思齊焉、見不賢而内自省也」と。

【斷臂】二祖慧可大師の故事。

【四】第四、六祖章。大鑑慧能。

【五】第五、馬祖章。馬祖道一。

【六】第六、雲巖章。雲巖曇晟。

土、あながちにをしむことなかれ、あながちにかへりみることなかれ。一志に度取せずば、たれかたれをあはれまん。無主の形骸、いたつらに徧野せんとき、眼睛をつくるごとく正觀すべし。

（四）六祖は新州の樵夫なり、有識と稱しがたし、いとけなくして父を喪す、老母に養育せられて長ぜり、樵夫の業を養母の活計とす。十字の街頭にして一句の聞經よりのち、たちまちに老母をすてて、大法をたづぬ、これ奇代の大器なり、拔群の辨道なり。斷臂たとひ容易なりとも、この割愛は大難なるべし、この棄恩はかろかるべからず。黄梅の會に投じて八箇月ねぶらずやすまず、晝夜に米をつく、夜半に衣鉢を正傳す。得法已後、なほ石臼をおひありきて、米をつくこと八年なり、出世度人說法するにも、この石臼をさしをかず、希世の行持なり。

（五）江西馬祖の坐禪することは、二十年なり、これ南嶽の密印を稟受するなり、傳法濟人のとき、坐禪をさしおくと道取せず。參學のはじめていたるには、かならず心印を密受せしむ、普請作務のところにかならず先赴す、老にいたりて懈惓せず、いまの臨濟は、江西の流なり。

（六）雲巖和尚は、道吾とおなじく藥山に參學して、ともにちかひをたてて四十年わきを席につけず、一味參究す。法を洞山の悟本大師に傳付す。洞山いはく、「われ欲打成一片坐禪辨道已二十年なり。」いまその道をあまねく傳付せり。

(七)雲居山弘覺大師、そのかみ三峯に菴住せしとき、天厨送食す。大師あるとき、洞山に參じて、大道を決擇してさらに菴にかへる、天使また食を再送して師を尋見するに、三日をへて師をみることをえず、天厨をまつことなし、大道を所宗とす、辨肯の志氣おもひやるべし。

(八)百丈山大智禪師、そのかみ馬祖の侍者とありしより、入寂のゆふべにいたるまで、一日も爲衆爲人の勤仕なき日あらず。かたじけなく一日不作、一日不食のあとをのこすといふは、百丈禪師、すでに年老臘高なり、なほ普請作務のところに、壯齡と同勵力す、衆これをいたむ、人これをあはれむ、師やまざるなり。つひに作務のとき、作務の具をかくして、師にあたへざりしかば、師その日一日不食なり、衆の作務にくははらざることをうらむる意旨なり。これを百丈の一日不作、一日不食のあとといふ。いま大宋國に流傳せる臨濟の玄風、ならびに諸方叢林、おほく百丈の玄風を行持するなり。

(九)鏡清和尚住院のとき、土地神かつて師顏をみることをえず、たよりをえざるによりてなり。

(一〇)三平山、義忠禪師、そのかみ天厨送食す、大顛をみてのちに、天神また師をもとむるにみることあたはず。

(一一)後大潙和尚いはく、我二十年在潙山、喫潙山飯、屙潙山屎、不參潙山道、只牧得一頭水牯牛、終日露迴迴也。しるべし、一頭の水牯牛は二十年在潙山の行持より牧得せり。この

【七】第七、雲居章。雲居道膺。

【八】第八、百丈章。百丈懷海。

【九】第九、鏡清章。鏡清道怤。

【一〇】第十、三平章。三平義忠。

【大顛】石頭下潮州大顛、三平義忠の師なり。

【一一】第十一、後大潙章。潙山第三世大安懶安、後長慶に住す、百丈に嗣ぐ。

【露迴迴】迴は光り輝くこと、露迴迴はむき出し、洗ひ上げたるが如く奇麗にして一點の染汙なきなり。

【三】第十二、趙州章、趙州從諗。

師かつて百丈の會下に參學しきたれり、しづかに二十年中の消息おもひやるべし、わするるときなかれ。たとひ參潙山道する人ありとも、不參潙山道の行持は、まれなるべし。

〔三〕趙州、觀音院、眞際大師、從諗和尚、とし六十一歳なりしに、はじめて發心求道をこころざす。瓶錫をたづさへて行脚し、遍歷諸方するに、つねにみづからいはく、『七歳童兒若勝レ我者、我即問レ伊、百歳老翁不レ及レ我者、我即敎レ他。』かくのごとくして南泉の道を學得する、功夫すなはち二十年なり。年至六十のとき、はじめて趙州城東觀音院に住して、人天を化導すること四十年來なり。いまだかつて一封の書をもて檀那につげず、僧堂おほきならず、前架なし、後架なし。あるとき牀脚をれき、一隻の燒斷の燼木を、繩をもてこれをゆひつけて、年月を經歷し修行するに、知事この牀脚をかへんと請するに、趙州ゆるさず。古佛の家風きくべし。趙州の趙州に住することは、八旬よりのちなり、傳法よりこのかたなり、正法正傳せり。諸人これを古佛といふ。いまだ正法正傳せざらん餘人は、師よりもかろかるべし、いまだ八旬にいたらざらん餘人は、師よりも强健なるべし。壯年にして輕爾ならんわれら、なんぞ老年の崇重なるとひとしからん、はげみて辨道行持すべきなり。四十年のあひだ、世財をたくはへず、常住に米穀なし、あるいは栗子椎子をひろふて、食物にあつ、あるいは、旋轉飯食す、まことに上古龍象の家風なり、戀慕すべき操行なり。あるとき衆にしめしていはく、『儞若一生不離叢林、不語十年五載、無ニ人喚レ儞作ニ啞漢一、已後諸佛也不ニ奈レ儞何一。』これ行持をしめすなり。しるべし十年五

【一三】第十三、大梅章。大梅法常。

栽の不語、おろかなるに相似せりといへども、不離叢林の功夫によりて、不語なりといへども、啞漢にあらざらん、佛道かくのごとし。佛道聲をきかざらんは、不語の不啞漢なる道理あるべからず。しかあれば、行持の至妙は、不離叢林なり、不離叢林は、脱落せる全語なり。至愚のみづからには、不啞漢をしらず、不啞漢をしらせず、阿誰か遮障せざれども、しらせざるなり。不啞漢なるを、得恁麼なりときかず、得恁麼なりとしらざらんは、あはれむべき自己なり。不離叢林の行持、しづかに行持すべし、東西の風に東西することなかれ。十年五載の春風秋月しられざれども、聲色透脱の道あり、その道得、われに不知なり、われに不會なり、行持の寸陰を可惜許なりと參學すべし。不語を空然なるとあやしむことなかれ、入之一叢林なり、出之一叢林なり、鳥路一叢林なり、徧界一叢林なり。

〔一三〕大梅山は、慶元府にあり、この山に護聖寺を草創す、法常禪師その本元なり。禪師は、襄陽人なり、かつて馬祖の會に參じてとふ、「如何是佛。」と。馬祖云く「即心是佛。」と。法常このことばをききて言下大悟す。因に大梅山の絶頂にのぼりて、人倫に不群なり、草庵に獨居す、松實を食じ、荷葉を衣とす、かの山に小池あり、池に荷おほし。坐禪辨道すること三十餘年なり、人事たえて見聞せず、年曆おほよそおぼえず、四山青又黄のみをみる、おもひやるにはあはれむべき風霜なり。師の坐禪には、八寸の鐵塔一基を頂上におく、如戴寶冠なり、この塔を落地却せしめざらんと功夫すれば、ねぶらざるなり、その塔いま本山にあり、庫下に交割す。かくのごとく辨道すること、死にいたりて懈倦なし。かくの

ごとくして年月を經歴するに、鹽官の會より一僧きたりて、山にいりて拄杖をもとむるちなみに、迷山路して、はからざるに、師の菴所にいたる、不期のなかに師をみる。すなはちとふ、「和尚この山に住してよりこのかた、多少時也。」師いはく、「只見四山青又黄。」この僧またとふ、「出山路向ニ什麼處一去。」師いはく、「隨流去。」この僧あやしむところあり、かへりて鹽官に擧似するに、鹽官いはく、「そのかみ江西にありしとき、一僧を曾見す、それよりのち消息をしらず、莫ニ是此僧一否。」つひに僧に令して、師を請するに出山せず、偈をつくりて答するにいはく、「摧殘枯木倚ニ寒林一、幾度逢レ春不レ變レ心、樵客遇レ之猶不レ顧、郢人那得ニ何苦追尋一。」つひにおもむかず、これよりのち、なほ山奥へいらんとせしちなみに、有頌するにいはく、「一池荷葉衣無レ盡、數樹松華食有レ餘、剛被ニ世人知一住處一、更移ニ茅舍一入ニ深居一。」つひに菴を山奥にうつす。あるとき、馬祖ことさら、僧をつかはしてとはしむ、「和尚そのかみ馬祖を參見せしに、得ニ何道理一便住ニ此山一なる。」師いはく、「馬祖われにむかひていふ、即心是佛、すなはちこの山に住す。」僧いはく、「近日佛法また別なり。」師いはく、「作麼生別なる。」僧いはく、「馬祖いはく、非心非佛」とあり。師いはく、「這老漢、ひとを惑亂すること、了期あるべからず、任他非心非佛、我祇管即心是佛。」この道をもちて馬祖に擧似す。馬祖云、「梅子熟也。」この因緣は、人天みなしれるところなり、天龍は師の神足なり、俱胝は師の法孫なり。高麗の迦智は、師の法を傳持して、本國の初祖なり、いま高麗の諸師は、師の遠孫なり、生前には一虎一象よのつねに給侍す、あひあらそはず、

【四】第十四、五祖法演章　五祖山の法演

【師翁】楊岐の方會禪師、石霜慈明に嗣ぐ。

【我佛有言】續未檢。

【履空の玄風】樹下石上等行履の高きをいふ。前後書に衣鉢寢空以瓦器飯食の語あり。

師の圓寂ののち、虎像石をはこび、泥をはこびて、師の塔をつくる、その塔いま護聖寺に現在せり。師の行持、むかしいまの知識とあるは、おなじくほむるところなり。劣慧のものは、ほむべしとしらず、貪名愛利のなかに、佛法あらましと強爲するは、小量の愚見なり。

五祖の法演禪師いはく、「師翁はじめて楊岐に住せしとき、老屋敗椽して、風雨の敝はなはだし。ときに冬暮なり、殿堂ことごとく舊損せり、そのなかに、僧堂ことにやぶれ、雪霰滿牀、居不遑處なり、雪頂の耆宿なほ澡雪し、厖眉の尊年皺眉のうれへあるがごとし、衆僧やすく坐禪することなし、衲子投誠して修造せんことを請せしに、師翁却レ之いはく、「我佛有レ言、時當二減劫一、高岸深谷遷變不レ常、安得二圓滿如意一、自求二稱足一。」ならん。古往の聖人、おほく樹下露地に經行す、古來の勝躅なり、履空の玄風なり。なんだち出家學道する、做手脚なほいまだおだやかならず、わづかにこれ四五十歳なり、たれかいたづらなるいとまありて、豐屋をこととせん、つひに不從なり。翌日に上堂して衆にしめしていはく、「楊岐乍住屋壁疎、滿牀盡撒雪珍珠、縮二卻項一暗嗟噓、翻憶二古人樹下居一。」つひにゆるさず。しかあれども、四海五湖の雲衲霞袂、この會に掛錫するを、ねがふところとせり。耽道の人おほきことをよろこぶべし、この道こころにそむべし、この語みに銘ずべし。

演和尚あるときしめしていはく、「行無レ越レ思、思無レ越レ行。」この語おもくすべし、『日夜思レ之、朝夕行レ之』、いたづらに、東西南北の風にふかるるがごとくなるべからず。いはんや

【合宮總章】政治堂なり。

【崆峒】山の洞、何も無きところ。

【塵勞中人】塵勞は煩惱のこと、世間在俗の人。

この日本國は、王臣の宮殿、なほその豐屋あらず、わづかにおろそかなる白屋なり。出家學道のいかでか、豐屋に幽棲するあらん、もし豐屋をえたるは、邪命にあらざるなし、清淨なるまれなり、もとよりあらんは論にあらず、はじめてさらに經營することなかれ。艸菴白屋は、古聖の所住なり、古聖の所愛なり、晩學したひ參學すべし、たがゆることなかれ。黄帝堯舜等は、俗なりといへども、艸屋に居す、世界の勝躅なり。尸子曰、「欲レ觀二黄帝行一於二合宮一、欲レ觀二堯舜行一於二總章一、黄帝明堂以レ艸蓋レ之、名曰二合宮一、舜明堂以レ艸蓋レ之、名曰二總章一。」しるべし合宮總章は、ともに艸をふくなり。いま黄帝堯舜をもて、われらにならべんとするに、なほ天地の論にあらず、これなほ艸蓋を明堂とせり、俗なほ艸屋に居す、出家人いかでか高堂大觀を所居に擬せん、慚愧すべきなり。古人の樹下に居し、林間にすむ、在家出家ともに愛する所住なり。黄帝は崆峒道人廣成の弟人なり、廣成は崆峒といふ巖のなかにすむ、いま大宋國の國王大臣、おほくこの玄風をつたふるなり。しかあればすなはち、塵勞中人なほかくのごとし、出家人いかでか塵勞中人よりも劣ならん、塵勞中人よりも、にごれらん。向來の佛祖のなかに、天の供養をうくるおほし、しかあれども、すでに得道のとき、天眼およばず、鬼神たよりなし、そのむねあきらむべし。天衆神道、もし佛祖の行履をふむときは、佛祖にちかづくみちあり、佛祖あまねく天衆神道を超證するには、天衆神道はるかに見上のたよりなく、佛祖のほとりに、ちかづきがたきなり。南泉いはく、「老僧修行のちからなくして、鬼神に覰見せらる。」

【一五】第十五、天童宏智章。天童山宏智禪師正覺和尚。太白は天童の異名。

しるべし無修の鬼神に覰見せらるるは、修行のちからなきなり。

（一五）大白山宏智禪師正覺和尚の會に、護伽藍神いはく、「われきく覺和尚この山に住すること十餘年なり、つねに寢堂にいたりて、みんとするに不能前なり、未之識也、まことに有道の先蹤にあひあふなり。」この天童山は、もとは小院なり、覺和尚の住裏に、道士觀、尼寺、教院等を掃除して、いまの景德寺となせり。師遷化の後、左朝奉大夫侍御史王伯庠、因に師の行業記を記するに、ある人いはく、「かの道士觀、尼寺、教寺をうばひて、いまの天童寺となせることを記すべし。」御史いはく、「不可なり、此事非僧德矣。」ときの人おほく侍御史をほむ。しるべし、かくのごとくの事は、俗の能なり、僧の德にあらず。おほよそ佛道に登入する最初より、はるかに三界の人天をこゆるなり、三界の所使にあらず、三界の所見にあらざること、審細に咨問すべし、身口意および依正をきたして、功夫參究すべし、佛祖行持の功德、もとより人天を濟度する巨益ありとも、人天さらに佛祖の行持にたすけらるると覺知せざるなり。いま佛祖の大道を行持せんには、大隱小隱を論ずることなく、聰明鈍癡をいふことなかれ、ただながく名利をなげすてて、萬緣に繋縛せらるることなかれ、光陰をすごさず、頭然をはらふべし。大悟をまつことなかれ、大悟は家常の茶飯なり、不悟をねがふことなかれ、不悟は髻中の寶珠なり。ただまさに家鄕あらんは家鄕をはなれ、恩愛あらんは恩愛をはなれ、名あらんは名をのがれ、利あらんは利をのがれ、田園あらんは田園をのがれ、親族あらんは親族をはなるべし。名利等なからんも、またはなるべし、

すでにあるをはなる、なきをもはなるべき道理あきらかなり。それすなはち一條の行持なり、生前に名利をなげすてて、一事を行持せん、佛壽長遠の行持なり。いまこの行持、さだめて行持に行持せらるるなり、この行持あらん身心、みづからも愛すべし、みづからもうやまふべし。

(一六)大慈寰中禪師いはく、「說ニ得一丈一、不レ如レ行ニ取一尺一。說ニ得一尺一、不レ如レ行ニ取一寸一。」これは時人の行持おろそかにして佛道の通達をわすれたるがごとくなるをいましむるにたりといへども、一丈の說は不是とにはあらず、一尺の行は一丈の說よりも大功なりといふなり、なんぞただ丈尺の度量のみならん、はるかに須彌と芥子との論功もあるべきなり、須彌に全量あり、芥子に全量あり、行持の大節これかくのごとし、いまの道得は、寰中の自爲道にあらず、寰中の自爲道なり。

(一七)洞山悟本大師道、「說ニ取行不ニ得底一、行ニ取說不ニ得底一。」これ高祖の道なり、その宗旨は、行は說に通ずるみちをあきらめ、說の行に通ずるみちあり。しかあれば終日とくところに、終日おこなふなり、その宗旨は、行不得底を行取し、說不得底を說取するなり。

(一八)雲居山弘覺大師、この道を七通八達するにいはく、「說時無ニ行路一、行時無ニ說路一。」この道得は行說なきにあらず、その說時は一生不離叢林なり。その行時は洗頭到雪峯前なり。說時無行路、行時無說路、さしおくべからず、みだらざるべし。古來の佛祖いひきたれることあり、いはゆる「若人生百歲不レ會ニ諸佛機一、未レ若ニ生一日而能決ニ了之一。」これは

【一六】第十六、大慈章。大慈寰中百丈に嗣ぐ。

【一七】第十七、洞山章。洞山悟本大師良价和尚。

【一八】第十八、雲居章。雲居弘覺大師道膺。再出。

【若人生百歲】付法藏因緣經の文と小異。若人生百歲、不會生滅法、不如生一日而得解了之。

【尺璧は】淮南子原道に云く聖人不寶尺之璧而貴寸之陰と。

【紀事の書】歴史の書物。

一佛二佛のいふところにあらず、諸佛の道取しきたれるところ、諸佛の行取しきたれるところなり、百千萬劫の囘生囘死のなかに、行持ある一日は、髻中の明珠なり、同生同死の古鏡なり、よろこぶべき一日なり、行持力、みづからよろこばるるなり、行持のちからいまだいたらず、佛祖の骨髓うけざるがごときは、佛祖の身心ををしまず、佛祖の面目をよろこばざるなり、佛祖の面目骨髓、これ不去なり如去なり如來なり不來なりといへども、かならず一日の行持に稟受するなり。しかあれば一日はおもかるべきなり。いたづらに百歳いけらんは、うらむべき日月なり、かなしむべき形骸なり。たとひ百歳の日月は、聲色の奴婢と馳走すとも、そのなか一日の行持を行取せば、一生の百歳を行取するのみにあらず、百歳の他生をも度取すべきなり、この一日の身命は、たふとぶべき身命なり、たふとぶべき形骸なり。かるがゆゑにいけらんこと一日ならんば、諸佛の機を會せば、この一日を曠劫多生にもすぐれたりとするなり、このゆゑにいまだ沒了せざらんときは、一日をいたづらにつかふことなかれ。この一日は、をしむべき重寶なり。尺璧の價値に擬すべからず、驪珠にかふることなかれ。古賢をしむこと身命よりもすぎたり、しづかにおもふべし、驪珠はもとめつべし、尺璧はうることもあらん、一生百歳のうちの一日は、ひとたびうしなはん、ふたたびうることなからん、いづれの善巧方便ありてか、すぎにし一日をふたたびかへしえたる、紀事の書にしるさざるところなり。もしいたづらにすごさざるは、日月を皮袋に包含して、もらさざるなり。しかあるを古聖先賢は、日月ををしみ、光

【一九】第十九、南嶽章、南嶽山懷讓。

陰をしむこと、眼睛よりもをしむ。國土よりもをしむ。そのいたづらに蹉過するといふは、名利の浮世に濁亂しゆくなり、いたづらに蹉過せずといふは、道にありながら道のためにするなり、すでに決了することをえたらん、また一日をいたづらにせざるべし。ひとへに道のために行取し、道のために說取すべし。このゆゑにしりぬ、古來の佛祖いたづらに、一日の功夫をつひやさざる儀、よのつねに觀想すべし。遲遲華日も、明窗に坐しておもふべし、蕭蕭雨夜も、白屋に坐してわするることなかれ。光陰なにとしてかわが功夫をぬすむ、一日をぬすむのみにあらず、多劫の功德をぬすむ、光陰とわれと、なんの怨家ぞ、うらむべし、わが不修のしかあらしむるべし。われわれとしたしからず、われわれをうらむるなり、佛祖も恩愛なきにあらず、しかあれどもなげすてきたる。佛祖も諸緣なきにあらず、しかあれどもなげすてきたる。たとひをしむとも、自他の因緣、をしまるべきにあらざるがゆゑに、われもし恩愛をなげすてずば、恩愛かへりてわれをなげすつべき云爲あるなり、恩愛をあはれむべくば、恩愛をあはれむべし、恩愛をあはれむといふは、恩愛をなげすつるなり。

（一九）南嶽大慧禪師、懷讓和尚、そのかみ曹谿に參じて執侍すること十五秋なり。しかうして傳道受業すること、一器水瀉一器なることをえたり。古先の行履、もとも慕古すべし。十五秋の風霜、われをわづらはすおほかるべし、しかあれども純一に究辦す。これ晩進の龜鏡なり。寒爐に炭なく、ひとり虛堂にふせり。涼夜に燭なく、ひとり明窗に坐する、たと

ひ一知半解なくとも、無爲の絕學なり、これ行持なるべし。おほよそひそかに貪名愛利をなげすてきたりぬれば、日日に行持の積功のみなり。このむねわするることなかれ。說似一物卽不中は、八箇年の行持なり。古今まれなりとするところ、賢不肖ともにこひねがふ行持なり。

【二〇】香嚴の智閑禪師は、大潙に耕道せしとき、一句を道得せんとするに數番つひに道不得なり。これをかなしみて書籍を火にやきて、行粥飯僧となりて、年月を經歷しき。のちに武當山にいりて、大證の舊跡をたづねて、結草爲菴し、放下幽棲す。一日わづかに道路を併淨するに、礫のほとばしりて、竹にあたりて聲をなすによりて、忽然として悟道す。のちに香嚴寺に住して一盂一衲を、平生に不換なり。奇巖淸泉をしめて、一生偃息の幽棲とせり。行跡おほく本山にのこれり。平生に山をいでざりけるといふ。

【二一】臨濟院、慧照大師は、黃檗の嫡嗣なり。黃檗の會にありて三年なり、純一に辨道するに、睦州陳尊宿の敎訓によりて、佛法の大意を黃檗にとふこと三番するに、かさねて六十棒を喫す。なほ勵志たゆむことなし。大愚にいたりて大悟することも、すなはち黃檗睦州、兩尊宿の敎訓なり。祖席の英雄は、臨濟德山といふ。しかあれども德山いかにしてか臨濟におよばん。まことに臨濟のごときは、群に群せざるなり。そのときの群は、近代の拔群よりも拔群なり。行業純一にして、行持拔群せりといふ。幾枚幾般の行持なりとおもひ擬せんとするに、あたるべからざるものなり。師在二黃檗一與二黃檗一栽二杉松一次、黃檗問レ

【二〇】第二十、香嚴章。香嚴智閑襲燈大師、大潙山靈祐に嗣ぐ。

【二一】第廿一、臨濟章。臨濟院慧照大師慧玄。

【噓噓聲】噓口出氣なり、口を猶口にして息を吹き出す時の音。

【栽松道者】五祖弘忍禪師先に破頭山中に在て松を栽ゆ、四祖道信禪師に法道を請ふや汝既に老ゆ、若し能く再來せば吾尚ほ汝を待つべしと、依て水邊に行き周氏の女に宿り再來して法を得て五祖と爲ると。

【大安精舍】洪州の大安寺、黃檗後に此に住す。

【裴相國】裴は姓、相國は官名宰相、名は休、字は公美、大安に黃檗に參ず。

【三】第廿二、唐宣宗。大中の天子なり。

師曰、『深山裏栽許多樹作麼。』師曰、『一與山門爲境致、二與後人作標榜。』乃將钁拍地兩下。黃檗拈起拄杖曰、『雖然如是、汝已喫我三十棒了。』師作噓噓聲。黃檗曰、『吾宗到汝大興於世。』しかあればすなはち得道ののちも杉松などをうゑけるに、てづからみづから钁柄をたづさへけるとしるべし。『吾宗到汝大興於世。』これによるべきものならん。栽松道者の古蹤、まさに單傳直指なるべし。黃檗も臨濟とともに栽樹するなり。黃檗のむかしは、捨衆して大安精舍の勞侶に混迹して、殿堂を掃灑する行持あり。佛殿を掃灑し、法堂を掃灑す。心を掃灑すると行持をまたず。ひかりを掃灑すると行持をまたず。裴相國と相見せし、この時節なり。

唐宣宗皇帝は、憲宗皇帝第二の子なり。少而より敏黠なり、よのつねに結跏趺坐を愛す。宮にありてつねに坐禪す。穆宗は宣宗の兄なり。穆宗在位のとき、早朝罷に、宣宗すなはち戲而して龍牀にのぼりて、揖群臣の勢をなす。大臣これをみて心風なりとす。すなはち穆宗に奏す。穆宗みて宣宗を撫而していはく、『我弟乃吾宗之英胄也。』ときに宣宗としはじめて十三なり。穆宗は長慶四年晏駕あり。穆宗に三子あり、一は敬宗、二は文宗、三は武宗なり。敬宗父位をつぎて、三年に崩ず。文宗繼位するに一年といふに、內臣謀而これを易す。武宗即位するに、宣宗いまだ即位せずしてをひのくににあり。武宗つねに宣宗をよぶに癡叔といふ。武宗は會昌の天子なり、佛法を廢せし人なり。武宗あるとき宣宗をめして、昔日ちちのくらゐにのぼりしことを罰して、一頓打殺して、後華園のなかにお

憲宗[11]
├穆宗[12]
└宣宗[16]（羅叔）
穆宗の子：敬宗[13]（在位三年）、文宗[14]（在位十年）、武宗[15]（會昌天子）
懿宗[17]

【志閑】智閑の誤。香嚴の名。

きて、不淨を灌するに復生す、つひに父王の邦をはなれて、ひそかに香嚴禪師の會に參じて、剃頭して沙彌となりぬ。しかあれどもいまだ不具戒なり。志閑禪師をともとして、遊方するに廬山にいたる。因に志閑、みづから瀑布を題していはく、『穿レ崖透レ石不レ辭レ勞、遠地方知出處高。』この兩句をもて、沙彌を釣他して、これいかなる人ぞとみんとするなり。沙彌これを續していはく、『谿澗豈能留得住、終歸二大海一作二波濤一。』この兩句をみて、沙彌はこれつねの人にあらずとしりぬ。のちに杭州鹽官齊安國師の會にいたりて、書記に充するに、黄檗禪師、ときに鹽官の首座に充す。ゆゑに黄檗と連單なり。黄檗ときに佛殿にいたりて禮佛するに、書記いたりてとふ、『不レ著二佛求一、不レ著二法求一、不レ著二僧求一、長老用レ禮何爲。』かくのごとく問著するに、黄檗便掌して、沙彌書記にむかひて道す、『不レ著二佛求一、不レ著二法求一、不レ著二僧求一、常禮二如是事一。』かくのごとく道しをはりて、又掌すること一掌す。書記いはく、『太麁生なり。』黄檗いはく、『這裏是什麼所在、更說二什麼麁細一。』また書記を掌すること一掌す。書記ちなみに休去す。武宗ののち、書記つひに還俗して即位す。武宗の廢佛法を發して、宣宗すなはち佛法を中興す。宣宗は即位在位のあひだ、つねに坐禪をこのむ。未即位のとき、父王のくにをはなれて遠地の谿澗に遊方せしとき、純一に辦道す。即位ののち、晝夜に坐禪すといふ。まことに父王すでに崩御す、兄弟また宴駕す、をひのために打殺せらる。あはれむべき窮子なるがごとし、しかあれども勵志うつらず。辦道功夫す。奇代の勝躅なり、天眞の行持なるべし。

【三】第廿三、雪峰章。雪峰眞覺大師義存和尙。

【九上洞山】雪峰遍參の親切を示す語、九たび洞山(良价)に上り三たび投子(大同)に到る い

雪峯山眞覺大師、義存和尙かつて發心よりこのかた、掛錫の叢林、および行程の接待、みちはるかなりといへども、ところをきらはず、日夜の坐禪おこたることなし。雪峯草創の露堂堂にいたるまで、おこたらずして坐禪と同死す。咨參のそのかみは九上洞山、三到投子する、奇世の辦道なり。行持の淸操をすすむるには、いまの人おほく雪峯高行といふ。雪峯の昏昧は、諸人とひとしといへども、雪峯の伶俐は、諸人のおよぶところにあらず。これ行持のしかあるなり。いまの道人、かならず雪峯澡雪をまなぶべし。しづかに雪峯の諸方を參學せし筋力をかへりみれば、まことに宿有靈骨の功德なるべし。いま有道の宗匠の會をのぞむに、眞實に請參せんとするとき、そのたよりもとも難辨なり。ただ二十三十箇の皮袋にあらず、百千人の面面なり。おのおの實歸をもとむ、授手の日くれなんとす、打舂の夜あけなんとす。あるいは師の普說するときは、わが耳目なくして、いたづらに見聞をへだつ。耳目そなはるときは、師また道取をはりぬ。耆宿尊年の老古錐、すでに拊掌笑呵呵のとき、新戒晩進のおのれとしては、むしろのすゑを接するたより、なほまれなるがごとし。堂奧にいるといらざると、師決をきくときかざるとあり。光陰は矢よりもすみやかなり、身命は露よりももろし。師はあれどもわれ參不得なるうらみあり、參ぜんとするに師不得なるかなしみあり。かくのごとくの事まのあたり、見聞せしなり。大善知識、かならず人をしる德あれども、耕道功夫のとき、あくまで親近する良緣まれなるものなり。雪峯のむかし、洞山にのぼれりけんにも、投子にのぼれりけんにも、さだめてこの事煩を

しかびけん。この行持の法操あらはれむべし。參學せざらんはかなしむべし。

正法眼藏行持　畢

正法眼藏行持（下）

震旦初祖の西來東土は、般若多羅尊者の教勅なり。航海三載の霜華、その風雪いたましきのみならんや。雲煙いくかさなりの嶮浪なりとかせん。不知のくににいらんとす、身命ををしまん凡類、おもひよるべからず。これひとへに傳法救迷情の大慈よりなれる行持なるべし。傳法の自己なるがゆゑにしかあり。傳法の徧界なるがゆゑにしかあり。盡十方界は眞實道なるがゆゑにしかあり。盡十方界自己なるがゆゑにしかあり。盡十方界、盡十方界なるがゆゑにしかあり。いづれの生縁か王宮にあらざらん。いづれの王宮か道場をさへん。このゆゑにかくのごとく西來せり。救迷情の自己なるゆゑに、驚疑なく怖畏せず。救迷情の徧界なるゆゑに、驚疑せず怖畏なし。ながく父王の國土を辭して、大舟をよそほふて、南海をへて廣州にとつぐ。使船の人おほく、巾瓶の僧あまたありといへども、史者失錄せり。著岸よりこのかた、しれる人なし。すなはち梁代の普通八年丁未歳九月二十一日なり。廣州の刺史蕭昂といふもの、主禮をかざりて迎接したてまつる。ちなみに表を修して武帝にきこゆる、蕭昂が勤恪なり。武帝すなはち奏を覽して欣悅して、使に詔をもた

【行持下】行持もと一卷なりしが嘉曆四年義雲禪師六十卷本編集の砌上下の二種に分てりといふ。今の九十五卷本又其例に倣ふ。

【三四】第廿四。達磨章。震旦初祖圓覺大師菩提達磨大和尚。

【航海三載】傳に師泛重溟凡三周寒暑達于南海といふ。

【梁代の普通八年】景德傳燈錄に依る。

【魏主】孝明皇帝

【刹利種】印度の王族、香至王の第三子なればなり。

【菩提流支】南印度の人、唐高宗に迎へられて大寶積經等を譯す。

【光統律師】慧光國統の略、四分律の祖、十地論を校合疏釋して四宗を開す、鄴都に召されて國統に任ぜらる。

【訕謗、嫉心】傳に競起害心數加毒藥至第六度以化緣已畢といふ、恐らく訛傳ならん。

せて迎請したてまつる。すなはちそのとし十月一日なり。初祖金陵にいたりて、梁武と相見するに梁武とふ、『朕即位已來、造寺寫經度僧不可勝紀、有何功德。』師曰、『並無功德。』帝曰、『以何無功德。』師曰、『此但人天小果有漏之因、如影隨形、雖有非實。』帝曰、『如何是眞功德。』師曰、『淨智妙圓、體自空寂、如是功德、不以世求。』帝又問、『如何是聖諦第一義諦。』師曰、『廓然無聖。』帝曰、『對朕者誰。』師曰、『不識。』帝不領悟。師知機不契。ゆゑにこの十月十九日、ひそかに江北にゆく。そのとし十一月二十三日、洛陽にいたりぬ。嵩山少林寺に寓止して、面壁而坐、終日默然なり。しかあれども魏主も不肖にしてしらず。はぢつべき理もしらず。師は南天竺の刹利種なり、大國の皇子なり。大國の王宮、その法ひさしく慣熟せり。小國の風俗は、大國の帝者に爲見のはぢつべきあれども、初祖うごかしむるこころあらず。くにをすてず、人をすてず、ときに菩提流支の訕謗を救せずにくまず。光統律師が邪心をうらむるにたらず。きくにおよばず、かくのごとくの功德おほしといへども、東地の人物、ただ尋常の三藏および經論師のごとくにおもふは、至愚なり。小人なるゆゑなり。あるいはおもふ、禪宗とて一途の法門の開演するなり、自餘の論師等の所云も初祖の正法もおなじなるべきとおもふ。これを佛法を濫穢せしむる小畜なり。初祖は釋迦牟尼佛より二十八世の嫡嗣なり。父王の大國をはなれて、東地の衆生を救濟する、たれのかたをひとしくするかあらん。もし祖師西來せずば、東地の衆生いかにしてか佛正法を見聞せん。いたづらに名相の沙石にわづらふのみならん。いまわれら

【史者習禪の列】梁高僧傳、慧皎編に十科を立て第三に習禪篇に初祖達磨を列す。

【石門林間錄】慧洪覺範編、石門業德寺に住す、法を寶峰克文に嗣ぐ。

【犬あり堯を吠ゆ】史記韓信傳に云く、跖之狗吠堯、非堯不仁、狗因非其主吠と。

がごときの邊地遠方の披毛戴角までも、あくまで正法をきくことをえたり。いまは田夫農父、野老村童までも見聞する。しかしながら祖師航海の行持にすくはるるなり。西天と中華と、風土はるかに勝劣せり。方俗はるかに邪正あり。大忍力の大慈にあらずよりは、傳持法藏の大聖むかふべき處在にあらず。住すべき道場なし、知人の人まれなり。しばらく嵩山に掛錫すること九年なり、人これを壁觀婆羅門といふ、史者これを習禪の列に編集すれどもしかにはあらず、佛佛嫡嫡相傳する正法眼藏、ひとり祖師のみなり、石門の林間錄に云く、『菩提達磨初自梁之魏、經行嵩下、倚杖少林、面壁燕坐而已、非習禪也、久之人莫測其故、因以達磨爲習禪、夫禪那諸行之一耳、何足以盡聖人、而當時之人、以之爲史者、又從傳於習禪之列、使與枯木死灰之徒爲伍、雖然聖人非止於禪那而不違禪那、如易出於陰陽而亦不違乎陰陽、梁武初見達磨之時、即問「如何是聖諦第一義、」答曰、「廓然無聖、」進曰、「對朕者誰、」又曰、「不識、」使達磨不通方言、則何於是時便能爾』しかあればすなはち、梁より魏へゆくことあきらけし、嵩山に經行して、少林に倚杖す、面壁燕坐すといへども、習禪にはあらざるなり、一卷の經書を將來せざれども、正法傳來の正主なり、しかあるを史者あきらめず、習禪の篇につらぬるは至愚なり、かなしむべし。かくのごとくして嵩山に經行するに、犬あり堯をほゆ、あはれむべし至愚なり、たれのこころあらんかこの慈恩をかろくせん、たれのこころあらんかこの恩を報ぜざらん、世恩なほわすれず、おもくする人おほし、これを人といふ。祖師の大恩は、父

【二柄三才】文武の二柄、天地人の三才。文武は日月の如し、才は材と同じ用なり。質なり力なり。

【五才】左傳に天生五材、所謂木火土金水也と。

【魏太祖】一本漢の太祖に作る佳なり。

母にもすぐるべし、祖師の慈愛は、親子にもたくらべざれ、われらが卑賤、おもひやれば驚怖しつべし、中土をみず、中華にうまれず、聖をしらず、賢をみず、天上にのぼれる人いまだなし、人心ひとへにおろかなり、開闢よりこのかた、化俗の人なし、國をすますときをきかず、いはゆるはいかなるか清、いかなるか濁としらざるによる。二柄三才の本末にくらきによりて、かくのごとくなり、いはんや五才の盛衰をしらんや。この愚は眼前の聲色にくらきによりてなり、くらきことは經書をしらざるによりてなり、經書に師なきによりてなり。その師なしといふは、この經書いく十卷といふことをしらず、この經いく百偈いく千言としらず、ただ文の說相をのみよむ、いくゝ千偈いく萬言といふことをしらざるなり、すでに古經をしり古書をよむがごときは、すなはち慕古の意旨あるなり、慕古のこころあれば、古經きたり現前するなり。漢高祖、および魏太祖、これら天象の偈をあきらめ、地形の言をつたへし帝者なり、かくゝのごときの經典あきらむるとき、いささか三才をあきらめきたるなり、いまだかくのごとくの聖君の化にあはざる百姓のともがらは、いかなる事君とならひ、いかなるを事親とならふとしらざれば、君子としてもあはれむべきものなり、親族としてもあはれむべきなり。臣となれるも、子となれるも、尺璧もいたづらにすぎぬ、寸陰もいたづらにすぎぬるなり、かくのごとくなる家門にうまれて、國土のおもき職、なほさづくる人なし、かろき官位なほをしむ、にごれるときなほしかあり、すめらんときは見聞もまれならん。かくのごときの邊地、かくのごときの卑賤の身命をもち

ながら、あくまで如來の正法をきかんみちにいかでかこの卑賤の身命ををしむこころあらん、をしんでのちになにもののためにすてんとする。おもくかしこからんなほ法のためにをしむべからず、いはんや卑賤の身命をや、たとひ卑賤なりといふとも、爲道爲法のところにをしまずすつることあらば、上天よりは貴なるべし、輪王よりも貴なるべし、おほよそ天神地祇、三界衆生よりも貴なるべし。しかあるに初祖は南天竺國、香至王の第三皇子なり、すでに天竺國の帝胤なり、皇子なり、高貴のうやまふべき、東地邊國には、かしづきたてまつるべき儀もいまだしらざるなり、香なし華なし、坐褥おろそかなり、殿臺つたなし、いはんやわがくには遠方の絶岸なり、いかでか大國の皇をうやまふ儀をしらん、たとひならふとも迂曲してわきまふべからざるなり。諸侯と帝者と、その儀ことなるべし、その禮も輕重あれどもわきまへしらず、自己の貴賤をしらざれば、自己を保任せず、自己を保任せざれば、自己の貴賤もともあきらむべきなり、初祖は釋尊第二十八世の付法なり、道にありてよりこのかたいよいよおもし。かくのごとくなる大聖至尊なほ師勅によりて、身命ををしまざるは、傳法のためなり、救生のためなり。眞丹國にはいまだ初祖西來よりさきに、嫡嫡單傳の佛子をみず、嫡嫡面授の祖面を面授せず、見佛いまだしかりき、のちにも初祖の遠孫のほか、さらに西來せざるなり。曇華の一現はやすかるべし、年月をまちて算數しつべし、初祖の西來は、ふたたびあるべからざるなり。しかあるに祖師の遠孫と稱するともがらも、楚國の至愚にゑふて玉石いまだわきまへず、經師論師も齊肩すべきと

【曇華の一現】優曇華此に靈瑞華といふ、三千年に一現す。

【楚國の至愚】後漢書の應劭傳に云く、宋愚夫實燕石緹紺十重、夫視之者掩口胡盧而笑藏之愈固守之彌謹と。楚は宋の誤か。

【黑業】地獄等の法を名けて黑業とす、惡業のこと。

おもへり、少聞薄解によりてしかあるなり、宿殖般若の正種なきやからは、祖道の遠孫とならず、いたづらに名相の邪路に跉跰するものあはれむべし、梁の普通よりのち、なほ西天にゆくものあり、それなにのためぞ、至愚のはなはだしきなり、惡業のひくによりて、他國に跉跰するなり、歩歩に謗法の邪路におもむく、歩歩に親父の家鄕を逃逝す。なんだち西天にいたりて、なんの所得かある、ただ山水に辛苦するのみなり、西天の東來する宗旨を學せず、佛法の東漸をあきらめざるによりて、いたづらに西天に迷路するなり。佛法をもとむる名稱ありといへども、佛法をもとむる道念なきによりて、西天にしても正師にあはず、いたづらに論師經師にのみあへり。そのゆゑは、正師は西天にも現在せんとも、正法をもとむる正心なきによりて、正法なんだちが手にいらざるなり、西天にいたりて正師をみたるといふ、たれかその人、いまだきこえざるなり。もし正師にあはば、いくそばくの名稱をも自稱せん、なきによりて自稱いまだあらず。また眞丹國にも、祖師西來よりのち、經論に倚解して、正法をとぶらはざる僧侶おほし、これ經論を披閲すといへども、經論の旨趣にくらし、この黑業は今日の業力のみにあらず、宿生の惡業力なり、今生つひに如來の眞訣をきかず、如來の正法をみず、如來の面授にてらされず、如來の佛心を使用せず、諸佛の家風をきかざる、かなしむべき一生ならん、隋唐宋の諸代、かくのごときのたぐひおほし。ただ宿殖般若の種子ある人は、不期に入門せるものあるは、算沙の業を解脫して、祖師の遠孫となれりしは、ともに利根の機なり、上上の機なり、正人の正種な

【暗頭の雲霧】冥より冥に入る、畢竟實無きをいふ。

り、愚蒙のやから、ひさしく經論の艸菴に止宿するのみなり、しかあるにかくのごとくの險難あるさかひを辭せずといはず、初祖西來する玄風、いまなほあふぐところに、われらが臭皮袋をしんで、つひになにかせん。香嚴禪師いはく、「百計千方只爲レ身、不レ知身是塚中塵、莫レ言白髮無二言語一、此是黃泉傳語人。」しかあればすなはち、をしむにたとひ百計千方をもてすといふとも、つひにこれ塚中一堆の塵と化するものなり、いはんやいたづらに小國の王臣につかはれて、東西に馳走するあひだ、千辛萬苦いくばくの身心をかくるしむる、義によりては身命をかろくす、殉死の禮わすれざるがごとし、恩につかはるる前途ただ暗頭の雲霧なり、小臣につかはれ、民間に身命をすつるもの、むかしよりおほし、をしむべき人身なり、道器となりぬべきゆゑに、いま正法にあふ、百千恆沙の身命をすてても、正法を參學すべし。いたづらなる小人と、廣大深遠の佛法と、いづれのためにか身命をすつべき、賢不肖ともに進退にわづらふべからざるものなり。しづかにおもふべし、正法よに流布せざらんときは、身命を正法のために放捨せんことをねがふとも、あふべからず、正法にあふ今日のわれらをねがふべし。正法にあふて、身命をすてざるわれらを慚愧せん、はづべくばこの道理をはづべきなり。しかあれば祖師の大恩を報謝せんことは、一日の行持なり、自己の身命をかへりみることなかれ、禽獸よりもおろかなる恩愛、をしんですてざることなかれ、たとひ愛惜すとも長年のともなるべからず。あくたのごとくなる家門、たのみてとどまることなかれ、たとひとどまるともつひの幽棲にあら

【七寶千子】因果經に若在家爲轉輪聖王七寶千子具足と、あらゆる財寶なり。

【病雀なほ恩を】後漢の揚寶なる者性慈愛に富む年九歲の時華陰山の北にて一黄雀の鴟鳥の爲に搏たれて地に墮ち螻蟻に困しめらる、寶之を取りて箱中に飼ひ養ふ、百餘日過ぎて羽毛整ひ數年の後飛び去る、其の夜黄衣の童子來つて寶を再拜して曰く我は是れ西王母の使者なり、君が仁愛に感ずと白環四枚を以て寶に與へて君が子孫位三公に登らんこと當に此環の如くなるべしと。果して楊寶の後、震、秉、賜、彪の四代三公の位に登れりと、蒙求中卷に出づ。

【窮龜なほ恩を】蒙求の下に云く、

ず、むかし佛祖のかしこかりし、みな七寶千子をなげすて、玉殿朱樓をすみやかにすつ。涕唾のごとくみる、糞土のごとくみる。これらみな古來の佛祖の、古來の佛祖を報謝しきたれる、知恩報恩の儀なり。病雀なほ恩をわすれず、三府の環よく報謝あり、窮龜なほ恩をわすれず、餘不の印よく報謝あり、かなしむべし人面ながら畜類よりも愚劣ならんことは、いまの見佛聞法は、佛祖面面の行持よりきたれる慈恩なり、佛祖もし單傳せずば、いかにしてか今日にいたらん。一句の恩、なほ報謝すべし、一法の恩、なほ報謝すべし、いはんや正法眼藏無上大法の大恩、これを報謝せざらんや。一日に無量劫河沙の身命をすてんことねがふべし、法のためにすてんかばねは、世世のわれら、かへりて禮拜供養すべし、諸天龍神ともに恭敬尊重し守護讚歎するところなり。道理それ必然なるがゆゑに、西天竺國には、髑髏をうり髑髏をかふ、婆羅門の法ひさしく風聞せり。これ聞法の人の、髑髏形骸の、功德おほきことを尊重するなり。いま道のために身命をすてざれば、聞法の功德いたらず、身命をかへりみず、聞法するがごときは、その聞法成熟するなり。この髑髏は、尊重すべきなり、いまわれら道のためにすてざらん髑髏は、他日にさらされて野外にすてらるとも、たれかこれを禮拜せん、たれかこれを賣買せん、今日の精魂、かへりてうらむべし、鬼の先骨をうつありき、天の先骨を禮せしあり、いたづらに塵土に化するときをおもひやれば、いまの愛惜なし、のちのあはれみあり、もよほさるところは、みん人のなみだのごとくなるべし。いたづらに塵土に化して、人にいとはれん髑髏をもて、よく

晋書に乳[illegible]字は敬康なる者、[illegible]不亭僕に封ぜらる、[illegible]不亭を經、常に、て[illegible]を[illegible]中に[illegible]しむる者を[illegible]り、中に[illegible]買つつ[illegible]中[illegible]に[illegible]し[illegible]放顧にすること數[illegible]左後に[illegible]の[illegible]を[illegible]捨に[illegible]たび[illegible]印る左する、[illegible]の知しか、[illegible]印る、制めてむ[illegible]けし[illegible]には以てち[illegible]ての[illegible]之捨乃ぶといふ。を佩

【[illegible]】あ珠[illegible]に[illegible]寶るに[illegible]の[illegible]て[illegible]を[illegible]せて[illegible]因[illegible]をなす[illegible]し

【鬼ノ先けたとうつ】青王[illegible]に昔日行一人あり[illegible]路[illegible]に下り[illegible]神じて[illegible]散問ふに、[illegible]人[illegible]身、前生の[illegible]故に孝[illegible]し[illegible]ほに[illegible]忠信しての君に事ふ、[illegible]

さいはひに佛正法を行持すべし、このゆゑに、寒苦を、おづることなかれ、寒苦いまだ人をやぶらず、寒苦いまだ道をやぶらず、ただ不修を、おづべし、不修それ人をやぶり道をやぶる。暑熱を、おづることなかれ、暑熱いまだ人をやぶらず、暑熱いまだ道をやぶらず、不修よく人をやぶり道をやぶる。麥をうけ蕨をとるは、道俗の勝躅なり。血をもとめ乳をもとめて、鬼畜にならはざるべし、ただまさに行持なる一日は、諸佛の行履なり。

(二五)眞丹第二祖、大祖正宗普覺大師は、神鬼ともに敬慕す、道俗おなじく尊重せし高德の師なり、曠達の士なり、伊洛に久居して、群書を博覽す。くにのまれなりとするところ、人のあひがたきなり。法高德重のゆゑに、神物倏見して、祖にかたりていふ、「將欲レ受レ果何滯レ此耶、大道匪レ遠、汝其南之」あくる日、にはかに頭痛すること刺がごとし、其師洛陽龍門香山、寳靜禪師、これを治せんとする、ときに、空中有レ聲曰、「此乃換レ骨、非二常痛一非也」祖遂以二見神事一白二師、師視二其頂骨一卽如二五峯一秀出。乃曰、「汝相吉祥、當レ有レ所レ證一、神、汝南者、斯則少林寺達磨大士、必汝之師也」この教をききて祖すなはち少室峯に參ず、神はみづからの久遠傳道の、守道神なり、このとき窮臘寒天なり、十二月初九夜といふ、天大雨雪ならずとも、深山高峯の冬夜は、おもひやるに人物の窓前に立地すべきにあらず、竹節なほ破す、おそれつべき時候なり、しかあるに大雪市地埋山沒峯なり、破雪して道をもとむ、いくばくの嶮難なりとかせん。つひに祖室にとつぐといへども、入室ゆるされず、顧眄せざるがごとし。この夜ねぶらず、坐せず、やすむことなし。堅立不

賛を敬し師父の敎を受け我をして天に生ぜしむ、故に天來つて恩を報ずるのみと、又一年人あり異鬼之に鞭うつ、問ふに、云く、是れ我故身なり、存生の日忠なら孝ならず福德の非爲我をして惡報を得しむ。故に來つて鞭うつなりと。

【麥をうけ】佛與僧と共に三月馬麥を食し給ふこと中本起經下卷に佛食馬麥品第十五に出づ。

【薇をとる】伯夷叔齊、周の粟を食はず首陽山に隱れて薇を采つてこれを食ふと、史記伯夷傳に委し。

【二五】第廿五、二祖慧可章、大祖正宗普覺大師禪光慧可。

【十二月初九夜】後魏孝明帝太和十年十二月九日夜也と傳燈の說誤り多し信じ難し。

頭にして、あくるをまつに、夜半なさけなきがごとし。ややつもりて腰をうづむあひだ、おつるなみだ滴滴こぼる。なみだをみるに、なみだをかさね、身をかへりみて、身をかへりみる。自惟すらく、「昔人求レ道、敲レ骨取レ髓、刺レ血濟レ飢、布レ髮掩レ泥、投レ崖飼レ虎、古尚若レ此、我又何人。」かくのごとくおもふに、志氣いよいよ勵志あり、いまいふ「古尚若此、我又何人」を、晩進もわすれざるべきなり、しばらくこれをわするるとき、永劫の沈溺あるなり、かくのごとく自惟して、法をもとめ道をもとむる志氣のみかさなる、澡雪の操を操とせざるによりて、しかありけるなるべし。遲明のよるの消息、はからんとするに肝膽もくだけぬるがごとし。ただ身毛の寒怕せらるるのみあり。初祖あはれみて、昧旦にとふ、「汝久立二雪中一、當レ求二何事一。」かくのごとくきくに、二祖悲淚ますますおとしていはく、「惟願和尚慈悲、開二甘露門一、廣度二群品一。」かくのごとくまうすに、初祖曰、「諸佛無上妙道、曠劫精勤、難レ行能行、非レ忍而忍。豈以二小德小智、輕心慢心一、欲レ冀二眞乘一、徒勞二勤苦一。」このとき二祖きゝていよいよ誨勵す。ひそかに利刀をとりて、みづから左臂を斷って置二于師前一するに、初祖ちなみに、二祖これ法器なりとしりぬ。乃曰、「諸佛最初求レ道、爲レ法忘レ形、汝今斷二臂吾前一、求亦可レ在。」これより堂奧にいる、執侍八年、勤勞千萬、まことにこれ人天の大依怙なるなり、人天の大導師なるなり。かくのごときの勤勞は、西天にもきかず、東地はじめてあり。破顏は古をきく、得髓は祖に學す。しづかに觀想すらくは、初祖いく千萬の西來ありとも、二祖もし行持せずば、今日の飽學措大あ

ろべからず。今日われら正法を見聞するたぐひとなれり、祖の恩かならず報謝すべし。その報謝は餘外の法はあたるべからず、身命も不足なるべし。國城もおもきにあらず。國城は他人にもうばはる、親子にもゆづる。身命は無常にもまかす、主君にもまかす、邪道にもまかす、しかあれば、これを擧して、報謝に擬するに、不道なるべし。ただまさに日日の行持、その報謝の正道なるべし。いはゆるの道理は、日日の生命を等閑にせず、わたくしに、つひやさざらんと、行持するなり。そのゆゑはいかん。この生命を等閑にせず、わたくしに、つひやさざらんと、行持するなり。そのゆゑはいかん。この生命は、前來の行持の大恩なり、いそぎ報謝すべし、かなしむべしはづべし、佛祖行持の功德分より生成せる形骸の、いたづらなる妻子のつぶねとなし、妻子のもちあそびにまかせて、破落ををしまざらんことは、邪狂にして身命を名利の羅刹にまかす、名利は一頭の大賊なり、名利をおもくせば、名利をあはれむべし、名利をあはれむといふは、佛祖となりぬべき身命を、名利にまかせてやぶらしめざるなり、妻子親族あはれまんことも、またかくのごとくすべし、名利は夢幻空華と學することなかれ、衆生のごとく學すべし。名利をあはれまず、罪報をつもらしむることなかれ、參學の正眼、あまねく諸方をみんこと、かくのごとくなるべし。世人のなさけある、金銀珍玩の蒙惠、なほ報謝す、好語好聲のよしみ、こころあるはみな報謝のなさけをはげむ。如來無上の正法を見聞する大恩、たれの人面かわするるときあらん、これをわすれざらん一生の珍寶なり。この行持を不退轉ならん形骸髑髏は、生

時死時、おなじく七寶塔にをさめ、一切人天、皆應供養の功德なり。かくのごとく大恩ありとしりなば、かならず艸露の命を、いたづらに零落せしめず、如山の德をねんごろに報ずべし、これすなはち行持なり。この行持の功は、祖佛として行持するわれありしなり。おほよそ初祖二祖、かつて精藍を草創せず、薙艸の繁務なし、および三祖四祖もまたかくのごとし。五祖六祖の寺院を自草せず、青原南嶽もまたかくのごとし。(二六)石頭大師は、艸菴を大石にむすびて、石上に坐禪す。晝夜にねぶらず、坐せざるときなし、衆務を虧闕せずといへども、十二時の坐禪、かならずつとめきたれり。いま青原の一派の、天下に流通すること、人天を利潤せしむることは、石頭大力の、行持堅固のしかあらしむるなり。いまの雲門法眼の、あきらかなるところある、みな石頭大師の法孫なり。

(二七)第三十一祖、大醫禪師は、十四歳のそのかみ、三祖大師をみしより、服勞九載なり。すでに佛祖の祖風を嗣續するより、攝心無寐にして、脇不至席なること、僅六十年なり。化怨親にかうぶらしめ、德人天にあまねし、眞丹の四祖なり。貞觀癸卯歳、太宗嚮二師道味一、欲レ瞻二風彩一、詔二赴京一。師上レ表遜謝、前後三返、竟以レ疾辭。第四度命レ使曰、如果不レ赴、卽取二首來一。使至レ山諭レ旨、師乃頸レ引就レ刃、神色儼然、使異レ之、迴以レ狀聞、帝彌加二歎慕一、就賜二珍繒一、以遂二其志一。しかあればすなはち四祖禪師は、身命を身命とせず、王臣に親近せざらんと行持せる行持、これ千歲の一遇なり。太宗は有義の國主なり。相見のものうかるべきにあらざれども、かくのごとく先達の行持はありけると參學すべき

【二六】第廿六、石頭大師章。石頭無際大師希遷禪師。【石頭大師の法孫】六祖—青原—石頭—藥山—雲巖—洞山。—道悟—龍潭—德山—雪峰—雲門。—玄沙—地藏—法眼。

【二七】第廿七、大醫道信章。四祖大醫禪師道信禪師。【貞觀癸卯】唐の太宗貞觀十七年(西紀六四三)。

【永徽辛亥】唐の高宗永徽二年（西紀六五一）。

【三八】第廿八、玄沙章、玄沙宗一大師師備。

【象骨山】雪峰山の別峰、雪峰の異名に用ふ。

なり。人主としては引頸就刃して、身命ををしまざる人物をも、なほ歎慕するなり。これいたづらなるにあらず、光陰ををしみ、行持を専一にするなり。上表三返、奇代の例なり。いま澆季には、もとめて帝者にまみえんとねがふあり。高祖永徽辛亥歳、閏九月四日、忽垂二誡門人一曰、『一切諸法、悉皆解脱、汝等各自護念流二化未來一。』言訖、安坐而逝、壽七十有二、塔二于本山一、明年四月八日塔戸無レ故自開、儀相如レ生、爾後門人不二敢復閉一。しるべし一切諸法、悉皆解脱なり、諸法の空なるにあらず、諸法の諸法ならざるにあらず、悉皆解脱なる諸法なり。いま四祖には、未入塔時の行持あり、既在塔時の行持あるなり。生者かならず滅ありと見聞するは小見なり、滅者は無思覺と知見するは小聞なり。學道にはこれらの小聞小見をならふことなかれ。生者の滅なきもあるべし、滅者の有思覺なるもあるべきなり。

（三八）福州玄沙宗一大師、法名師備、福州閩縣人也。姓謝氏、幼年より垂釣をこのむ。小艇を南臺江にうかめて、もろもろの漁者になれきたる。唐の咸通のはじめ、年甫三十なり。たちまちに出塵をねがふ、すなはち釣舟をすてゝ、芙蓉山、靈訓禪師に投じて落髪す。豫章開元寺道玄律師に、具足戒をうく。布衲芒履、食纔接レ氣、常終日宴坐、衆皆異レ之、與二雪峯義存一本法門昆仲、而親近若二師資一。雪峯以二其苦行一呼爲二頭陀一。一日雪峯問曰、『阿那箇是備頭陀。』師對曰、『終不三敢誑二於人一。』異日雪峯召曰、『備頭陀何不二徧參去一。』師曰、『達磨不レ來二東土一、二祖不レ往二西天一。』雪峯然レ之。つひに象骨山にのぼるにおよんで、すなは

【二九】第廿九、長慶章。長慶の慧稜、諡號超覺大師、雪峰に嗣ぐ。

【三〇】第三十、大溈章。大溈山大圓禪師靈祐大和尚。

ち師と同力締構するに、玄徒臻萃せり、師の入室咨決するに、晨昏にかはることなし、諸方の玄學のなかに、所未決あるは、かならず師にしたがひて請益するに、雪峰和尚いはく、（二八）備頭陀にもいふべし。師まさに仁にあたりて、不讓にしてこれをつとむ。拔群の行持にあらずよりは、恁麼の行履あるべからず。終日宴坐の行持、まれなる行持なり。いたづらに聲色に馳騁することはおほしといへども、終日の宴坐はつとむる人まれなるなり、いま晩學としては、のこりの光陰の、すくなきことをおそれて、終日宴坐、これをつとむべきなり。

（二九）長慶の慧稜和尚は、雪峰下の尊宿なり。雪峰と玄沙とに往來して、參學すること僅に二十九年なり、その年月に蒲團二十枚を坐破す、いまの人の坐禪を愛するあるは、長慶をあげて慕古の勝躅とす。したふはおほし、およぶすくなし、しかあるに三十年の功夫むなしからず。あるとき涼簾を卷起せしちなみに、忽然として大悟す。三十年來かつて鄕土にかへらず、親族にむかはず、上下肩と談笑せず、專一に功夫す。師の行持は三十年なり、疑滯を疑滯とせること三十年、さしおかざる利機といふべし、大根といふべし、勵志の堅固なる、傳聞するは或從經卷なり。ねがふべきをねがひ、はづべきをはぢとせん、長慶に相逢すべきなり。實を論ずればただ道心なく、操行つたなきによりて、いたづらに名利には繫縛せらるるなり。

（三〇）大溈山大圓禪師は、百丈の授記より、直に溈山の峭絕にゆきて、鳥獸爲伍して、結艸

修練す、風飡を辭勞することなし、橡栗充食せり、堂宇なし常住なし、しかあれども行持の見成すること、四十來年なり、かつては海内の名藍として、龍象蹴踏するものなり。梵刹の現成を願ぜんにも、人情をめぐらすことなかれ、佛法の行持を堅固にすべきなり。修練ありて堂閣なきは、古佛の道場なり。露地樹下の風とほくきこゆるなり、この處在ながく結界となる、まさに一人の行持あれば、諸佛の道場につたはるべきなり。末世の愚人、いたづらに堂閣の結構につかるることなかれ、佛祖いまだ堂閣をねがはず。自己の眼目いまだあきらめず、いたづらに殿堂精藍を結構する、またく諸佛に佛宇を供養せんとにはあらず、おのれが名利の窟宅とせんがためなり。潙山のそのかみの行持、しづかにおもひやるべきなり、おもひやるといふは、わがいま潙山にすめらんがごとくおもふべし。深夜のあめの聲、こけをうがつのみならんや、巖石を穿却するちからもあるべし。冬天のゆきの夜は、禽獸もまれなるべし、いはんや人煙のわれをしるあらんや。命をかろくし法をおもくする行持にあらずば、しかあるべからざる活計なり。薙艸すみやかならず、土木いとなまず、ただ行持修練し、辨道功夫あるのみなり。あはれむべし、正法傳持の嫡祖、いくばくか山中の嶮岨にわづらふ。潙山をつたへきくには、池あり水あり、こほりかさなりきりかさならん、人物の堪忍すべき幽棲にあらざれども、佛道と玄奥と化成することあらたなり。かくのごとく行持しきたれりし道得を見聞す。身をやすくしてきくべきにあらざれども、行持の勤勞すべき報謝をしらざれば、たやすくきくといふともこころあらん晩學、い

【風輪うごかず】風水金の三輪能く大地を持つ、風輪は最下、潙山の道力によりて佛法の世界を保持す。
【看牛三年】潙山水牯牛の因緣よりいふ。
【三二】第三十一、芙蓉山道楷禪師。
【夫出家者】緇門警訓下卷、普燈錄に出づ小異あり。
【隱山】馬祖下の人、一名龍山。
【匾擔】六祖下の人、曉了禪師。
【紙衣道者】臨濟下の人、諱は克符。
【玄太上座】石霜下の人。

かでかそのかみの潙山を、目前のいまのごとくおもひやりて、あはれまざらん。この潙山の行持の道力化功によりて、風輪うごかず、世界やぶれず、天衆の宮殿おだやかなり。人間の國土も保持せるなり。潙山は遠孫にあらざれども、潙山は祖宗なるべし。のちに仰山きたり侍奉す。仰山もとは百丈先師のところにして、問十答百の鶖子なりといへども、潙山に參侍して、さらに看牛三年の功夫となる。近來は斷絕し、見聞することなき行持なり。三年の看牛、よく道得を人にもとめざらしむ。

（三二）芙蓉山の楷祖、もはら行持見成の本源なり。國主より定照禪師號ならびに紫袍をたまふに、祖うけず、修表具辭す。國主とがめあれども、師つひに不受なり。米湯の法味つたはれり。芙蓉山に庵せしに、道俗の川湊するもの僅數百人なり。日食粥一杯なるゆゑに、おほく引去す。師ちかふて赴齋せず。あるとき衆にしめすにいはく、夫出家者、爲レ厭ニ塵勞一求レ脫ニ生死一、休レ心息レ念、斷ニ絕攀緣一、故名ニ出家一。豈可下以ニ等閑利養一、埋中沒平生上。直須下兩頭撒開、中間放下、遇レ聲遇レ色、如ニ石上栽一レ華。見レ利見レ名、似中眼中著上レ屑。況從ニ無始已來、不ニ是不ニ曾經歷一、又不ニ是不レ知ニ次第一、不レ過ニ翻レ頭作一レ尾。止ニ於レ如レ此、何須ニ苦苦貪戀一。如今不レ歇、更待ニ何時一。所以先聖教ニ人只要レ盡ニ却今時一。能盡ニ今時一、更有ニ何事一。若得ニ心中無事一、佛祖猶ニ是冤家一。一切世事、自然冷淡、方始那邊相應。儞不レ見、隱山至レ死不ニ肯見一レ人、趙州至レ死不ニ肯告一レ人、匾擔拾ニ橡栗一爲レ食、大梅以ニ荷葉一爲レ衣、紙衣道者只披レ紙、玄太上座只著レ布、石霜置ニ枯木堂一與レ衆坐臥、只要レ死ニ了儞心一。

【投子】投子山の義青禪師

【古人偈】投子大同の嗣牛頭微禪師の語、會元六に出づ。

投子使人拼米、同煮共餐、要得省取繁事、且從上諸聖、有如此榜樣、若無長處、如何甘得、諸仁者、若也於斯體究、的不虧人、若也不肯承當、向後深恐費力、山僧行業無取、忝主山門、豈可坐費常住、頓忘先聖付囑、今者輙欲略斅古人爲住持體例、與諸人議定、更不下山、不赴齋、不發化主、唯將本院莊課、一歳所得、均作三百六十分、日取一分用之、更不隨人添減、可以備飯則作飯、作飯不足則作粥、作粥不足則作米湯、新到相見茶湯而已、更不煎點、唯置一茶堂、自去取用、務要省緣、專一辦道、又況活計具足、風景不疎、華解笑、鳥解啼、木馬長鳴、石牛善走、天外之青山寡色、耳畔之鳴泉無聲、嶺上猿啼、露濕中霄之月、林間鶴唳、風迴淸曉之松、春風起時、枯木龍吟、秋葉凋而寒林華散、玉階鋪苔蘚之紋、人面帶煙霞之色、音塵寂爾、消息完然、一味蕭條、無可趣向、山僧今日、向諸人面前、說家門、已是不著便、豈可更去陞堂入室、拈槌竪拂、東喝西棒、張眉怒目、如癇病發相似、不唯屈沈上座、況亦辜負先聖、儞不見、達磨西來、到少室山下、面壁九年、二祖至於立雪斷臂、可謂受艱辛、然而達磨不曾措了一詞、二祖不曾問著一句、還喚達磨作不爲人得麼、喚二祖做不求師得麼、山僧每至說著古聖做處、便覺無地容身、慚愧後人軟弱、又況百味珍饈、遞相供養、道我四事具足、方可發心、只恐做手腳不迭、便是隔生隔世去也、時光似箭、深爲可惜、雖然如是、更在他人從長相度、山僧也強敎不得、諸仁者、還見古人偈麼、山田脫粟飯、野菜淡黃虀、喫

則從二君喫一不レ喫、任二東西一。代維同道、各自努力、珍重。」これすなはち、祖宗單傳の骨髓なり。高祖の行持おほしといへども、しばらくこの一枚を擧するなり、いまわれらが、晩學なる。芙蓉高祖の芙蓉山に修練せし行持、したひ參學すべし、それすなはち祇園の正儀なり。

(三二)洪州江西、開元寺、大寂禪師、諱道一、漢州十方縣人なり。南嶽に參侍すること十餘載なり。あるとき郷里にかへらんとして、半路にいたる。半路よりかへりて燒香禮拜するに南嶽ちなみに偈をつくりて馬祖にたまふにいはく、「勸レ君莫レ歸レ郷、歸レ郷道不レ行、並舍老婆子、說二汝舊時名一。」この法語をたまふに、馬祖うやまひたまはりて、ちかひていはく、「われ生生にも漢州にむかはざらん。」と。誓願して漢州にむかひて一歩をあゆまず、江西に一住して、十方を往來せしむ。わづかに即心即佛を道得するほかに、さらに一語の爲人なし。しかありといへども、南嶽の嫡嗣なり、人天の命脈なり、いかなるかこれ莫歸郷、莫歸郷とはいかにあるべきぞ。東西南北の歸去來、ただこれ自己の倒起なり。まことに歸郷道不行なり。道不行なる歸郷なりとや行持する、歸郷にあらざるとや行持する、歸郷なにによりてか道不行なる、不行にさへらるとやせん、自己にさへらるとやせん、並舍老婆子は、說汝舊時名なりとはいはざるなり。並舍老婆子、說汝舊時名なりといふ道得なり。南嶽いかにしてか、この道得ある、江西いかにしてかかの法語をうる、その道理は、われ向南行するときは、大地おなじく向南行するなり、餘方もまたしかあるべし、須彌大

【祇園の正儀】祇園精舍を以て釋尊の代語と爲す。「正儀」は正傳の儀式。
【三二】第三十二大寂禪師章。第五に馬祖章あるを以て特に大寂章とす。或は莫歸郷章ともいふ。

【三三】第三十三大満禪師章、五祖大満禪師弘忍。

【三四】第五十代天童淨祖章、天童長翁如淨禪師。

【嘉定の皇帝】南宋の寧宗皇帝。

【付佛法の外道】牽強附會の佛法、こじつけ佛法、天眞の正傳の佛法に非ざるをいふ、故に外道とす。

海を量として、しかあらずと疑殆し、日月星辰に格量して、猶滯するは小見なり。

(三三)第三十二祖、大満禪師は、黄梅人なり、俗姓は周氏なり、母の姓を稱なり、師は無父而生なり、たとへば李老君のごとし。七歳傳法よりのち、七十有四にいたるまで、佛祖正法眼藏、よくこれを住持し、ひそかに衣法を慧能行者に付屬する、不群の行持なり。衣法を神秀にしらせず、慧能に付屬するゆゑに、正法の壽命不斷なるなり。

(三四)先師天童和尚は、越上人事なり。十九歳にして、教學をすてて參學するに、七旬におよんでなほ不退なり。(三五)嘉定の皇帝より紫衣師號をたまはるといへども、つひにうけず、修表辭謝す。十方の雲衲ともに崇重す、遠近の有識ともに隨喜するなり。皇帝大悦して御茶をたまふ。しれるものは奇代の事と讃歎す。まことにこれ眞實の行持なり。そのゆゑに愛名は犯禁よりもあし、犯禁は一時の非なり、愛名は一生の累なり。おろかにしてすてざることなかれ、くらくしてうくることなかれ。うけざるは行持なり、すつるは行持なり。六代の祖師、おのおの師號あるは、みな滅後の勅諡なり、在世の愛名にあらず。しかあればすみやかに生死の愛名をすてて、佛祖の行持をねがふべし。貪愛して禽獸にひとしきことなかれ、おもからざる、吾我をむさぼり愛するは、禽獸もそのおもひあり、畜生もそのこころあり、名利をすつることは人天もまれなりとするところ、佛祖いまだすてざるはなし。あるがいはく、「一衆生利益のために、貪名愛利す」といふ、おほきなる邪説なり、付佛法の外道なり、謗正法の魔黨なり、なんぢいふがごとくならば、不貪名利の佛祖は、利生なき

【徑山】浙江省杭州府、興聖萬壽禪寺。
【光佛照】德光佛照禪師、大慧宗杲の嗣、初め育王に住し後徑山に移る。
【粥飯頭】堂頭和尚。

か、わらふべしわらふべし。又不貪の利生あり、いかん、又そこばくの利生あることを學せず、利生にあらざるを利生と稱する魔類なるべし。なんぢに利益せられん衆生は、墮獄の種類なるべし。一生のくらきことをかなしむべし、愚蒙を利生に稱することなかれ。しかあれば師號を恩賜すとも、上表辭謝する、古來の勝躅なり、晩學の參究なるべし、まのあたり先師をみる、これ人にあふなり。先師は十九歳より、離郷尋師、辦道功夫すること、六十五載にいたりて、なほ不退不轉なり。帝者に親近せず、帝者にみえず、丞相と親厚ならず、官員と親厚ならず、紫衣師號を表辭するのみにあらず、一生まだらなる袈裟を搭せず、よのつねに上堂入室、みなくろき袈裟裰子をもちゐる。衲子を教訓するにいはく、參禪學道は第一有道心、これ學道のはじめなり。いま二百來年、祖師道すたれたり。かなしむべし。いはんや一句を道得せる皮袋すくなし。某甲そのかみ徑山に掛錫するに、光佛照そのときの粥飯頭なりき。上堂していはく『佛法禪道、かならずしも他人の言句をもとむべからず、ただ各自理會。』かくのごとくいひて、僧堂裏都不管なりき、雲水兄弟也都不管なり、祇管與官客相見追尋するのみなり、佛照ことに佛法の機關をしらず、ひとへに貪名愛利のみなり。佛法もし各自理會ならば、いかでか尋師訪道の老古錐あらん。眞箇是光佛照不曾參禪也。いま諸方長老無道心たる、ただ光佛照箇兒子也、佛法那得他手裏有、可惜可惜、かくのごとくいふ。佛照兒孫、おほくきくものあれどもうらみず。又いはく、『參禪者身心脱落也、不レ用二燒香禮拜念佛修懺看經一、祇管打坐始得。』まことにいま大宋國の諸方

【四海五湖】四海は天地四方皆海水相連り地其中に在り、博物志に七戎六蠻八狄九夷之を四海と謂ふと。五湖は大湖周五百里別名なり。又大湖射貴湖、洮湖、上湖、滆湖の總稱也といふ。湖滿天下のこと。

に、參禪に名字をかけ、禪宗の遠孫と稱する皮袋、ただ一二百のみにあらず、稻麻竹葦なりとも、打坐を打坐に、勸誘するともがら、たえて風聞せざるなり。ただ四海五湖のあひだ、先師天童のみなり。諸方もおなじく天童をほむ、天童諸方をほめず、又すべて天童をしらざる大刹の主もあり、これは中華にうまれたりといへども、禽獸の流類ならん、參ずべきを參ぜず、いたづらに光陰を蹉過するがゆゑに、あはれむべし、天童をしらざるやからは、胡說亂道をかまびすしくするを、佛祖の家風と錯認せり、先師よのつねに普說す、われ十九歳よりこのかた、あまねく諸方の叢林をふるに、爲人師なし、十九歳よりこのかた、一日一夜も、不礙蒲團の日夜あらず。某甲未住院よりこのかた、鄕人とものがたりせず、光陰をしきによりてなり。掛錫の所在にあり、菴裏寮舍すべていりてみることなし。いはんや遊山翫水に功夫をつひやさん。雲堂公界の坐禪のほか、あるひは閣上、あるひは屏處をもとめて、獨子ゆきて穩便のところに坐禪す、つねに袖裏に蒲團をたづさへて、あるひは巖下にも坐禪す、つねにおもひき金剛座を坐破せんと。これもとむる所期なり、臀肉の爛壞するときどきもありき。このときいよいよ坐禪をこのむ。某甲今年六十五載、老骨頭懶、不會坐禪なれども、十方兄弟をあはれむによりて、住持山門、曉諭方來、爲衆傳道なり。諸方長老、那裏有什麼佛法なるゆゑに、かくのごとく上堂し、かくのごとく普說するなり。又諸方の雲水の人事の產をうけず。趙提擧は、嘉定聖主の胤孫なり、知明州軍州事管內勸農使なり、先師を請して州府につきて陞座せしむるに、銀子一萬鋌を布施す。

【先公】寧宗の父光宗なり。

【小嚫】嚫は噠嚫にて布施のこと。わづかなる布施。

【平侍者】廣平常に近侍して所用を辨ず、故に廣平侍者といふ、福州の人。

【金銀珠玉糞土】晋語に玉帛酒食猶糞土と。禪月の詩に誰言黃金如糞土と。

先師陞座了に、提擧にむかふて謝していはく、『某甲依レ例出山陞座、開演正法眼藏涅槃妙心、謹以薦二福先公冥府一。但是銀子不二敢拜領一。僧家不レ要二這般物子一。千萬賜恩、依レ舊拜還。』提擧いはく、『和尚、下官忝以二皇帝陛下親族一、到處且貴、寶貝見レ多。今以二先父冥福之日一、欲レ資二冥府一、和尚如何不レ納。今日多幸、大慈大悲、卒留二小嚫一。』先師曰、『提擧台命且嚴、不二敢遜謝一。只有二道理一。某甲陞座說法、提擧還聽得否。』提擧曰、『下官只聽歡喜。』先師いはく、『提擧聰明、照二鑑山語一、不レ勝二惶恐一。更望台臨鈞候萬福。山僧陞座時、說二得甚麼法一。試道看。若道得、拜二領銀子一一萬鋌。若道不レ得、便府使收二銀子一。』提擧起向二先師一曰、『即辰伏惟和尚法候動止萬福。』先師いはく、『這箇是擧來底、那箇是聽得底。』提擧擬議。先師いはく、『先公冥福圓成なり。捨施は且待二先公台判一。』かくのごとくいひて、すなはち請暇するに、提擧いはく、『未レ恨二不領一、且喜見レ師。』かくのごとくいひて、先師をおくる。浙東浙西の道俗、おほく讃歎す。このこと平侍者が日錄にあり。平侍者いはく、『這老和尚不レ可レ得人、那裏容易得レ見。』たれか諸方にうけざる人あらん、一萬鋌の銀子、ふるき人のいはく、金銀珠玉、これをみんこと糞土のごとくみるべし。たとひ金銀のごとくみるとも、不受ならんは衲子の風あり。先師にこの事あり、餘人にこのことなし。先師つねにいはく、『三百年よりこのかた、わがごとくなる知識いまだいでず、諸人審細に辨道功夫すべし。』先師の會に西蜀の綿州人にて、道昇とてありしは道家流なり。徒黨五人ともにちかふていはく、『われら一生に佛祖の大道を辨取すべし、さらに郷土にかへるべから

【しづかにおもふべし】以下第三行持の總結。

【仁治三年】祖師四十三歳、興聖寺に於ける示衆。

ず。先師ことに隨喜して、經行道業ともに、衆僧と一如ならしむ、その排列のときは、比丘尼のしもに排立す、奇代の勝躅なり。又福州の僧、その名善如、ちかひていはく、「善如平生さらに一歩をみなみにむかひてうつすべからず、もはら佛祖の大道を參ずべし。」先師の會に、かくのごときのたぐひあまたあり、まのあたり、みしところなり。餘師のところになしといへども、大宋國の僧家の行持なり。われらにこの心操なし、かなしむべし。佛法にあふときなほしかあり。佛法にあはざらんときの身心、はぢてもあまりあり。

しづかにおもふべし、一生いくばくにあらず、佛祖の語句、たとひ三三兩兩なりとも、道得せんは佛祖を道得せるならん。ゆゑはいかん、佛祖は身心如一なるがゆゑに、一句兩句みな佛祖のあたたかなる身心なり。かの身心きたりてわが身心を道得す。正當道取時、これ道得きたりて、わが身心を道取するなり。此生道取累生身なるべし。かるがゆゑに、ほとけとなり、祖となるに、佛をこゑ祖をこゆるなり。三三兩兩の行持の句それかくのごとし。いたづらなる聲色の名利を馳騁することなかれ、馳騁せざれば佛祖單傳の行持なるべし、すすむらくは大隱小隱一箇半箇なりとも、萬事萬緣をなげすてて、行持を佛祖に行持すべし。

仁治三年壬寅四月五日書于觀音導利興聖寶林寺。

正法眼藏行持　畢

【海印三昧】海は無邊にして利さざるの義、印は一切の影象をうつして而も自性無きの意。三昧は坐禪に透天徹地するをいふ。故に海印三昧は正傳の三昧王三昧なり。維摩經の文に據る。
【游泳】海字の條より來る。詩經に游は浮行順水流下、泳は潛行水底四泳と。
【佛言】維摩經問疾の文。

正法眼藏海印三昧

諸佛諸祖とあるにかならず、海印三昧なり。この三昧の游泳に、說時あり、證時あり、行時あり、海上行の功德、その徹底行あり、これを深深海底行なりと海上行するなり、流浪生死を還源せしめんと願求する、是什麼心行にはあらず。從來の透關破節、もとより諸佛諸祖の面面なりといへども、これ海印三昧の朝宗なり。

佛言、『但以二衆法一、合二成此身一、起時唯法起、滅時唯法滅、此法起時、不レ言二我起一、此法滅時、不レ言二我滅一、前念後念、念念不二相待一、前法後法、法法不二相對一、是即名爲二海印三昧一』この佛道を、くはしく參學功夫すべし。得道入證は、かならずしも多聞によらず、多語によらざるなり。多聞の廣學は、さらに四句に得道し、恆沙の徧學、つひに一句偈に證入するなり。いはんやいまの道は、本覺を前途にもとむるにあらず、始覺を證中に拈來するにあらず。おほよそ本覺等を現成せしむるは、佛祖の功德なりといへども、始覺本覺等の諸覺を佛祖とせるにはあらざるなり。佛言、『但以二衆法一、合二成此身一、起時唯法起、滅時唯法滅、此法起時、不レ言二我起一、此法滅時、不レ言二我滅一、前念後念、念念不二相待一、前法後法、法法不二相對一、是即名爲二海印三昧一』いはゆる海印三昧の時節は、すなはち但以衆法の時節なり、但以衆法の道得なり、このときを合成此身といふ。衆法を合成せる一合

法 「古佛いはく」忽然火起の語。「古佛言」羅山問巖頭の語

相すなはち、此身なり。此身を一合相とせるにあらず、衆法合成なり。合成此身を此身と道得せるなり。起時唯法起、この法起かつて起をのこすにあらず、このゆゑに起は知覺にあらず知見にあらず。これを不言我起といふ。我起を不言するに、別人は此法起と見聞覺知し思量分別するにはあらず。さらに向上の相見のとき、まさに相見の落便宜あるなり。起はかならず時節到來なり、時は起なるがゆゑに。いかならんかこれ起なる、起也なるべし。すでにこれ時なる起なり、皮肉骨髓を獨露せしめずといふことなし、起すなはち合成の起なるがゆゑに、起の此身なる、起の我起なる、但以衆法なり。聲色と見聞するのみにあらず、我起なる衆法なり、不言なる我起なり、不言は不道にはあらず、道得は言得にあらざるがゆゑに。起時は此法なり、十二時にあらず、此法は起時なり三界の競起にあらず。古佛いはく、『忽然火起。』この起の相待にあらざるを火起と道取するなり。古佛言、『起滅不停時如何。』しかあれば起滅は我我起我我滅なるに不停なり。この不停の道取かれに一任して辨肯すべし、この起滅不停時を、佛祖の命脈として、斷續せしむ、起滅不停時は、是誰起滅なり。是誰起滅は、應以此身得度者なり。卽現此身なり、而爲說法なり。過去心不可得なり、汝得吾髓なり、汝得吾骨なり。是誰起滅なるゆゑに。此法滅時、不言我滅、まさしく不言我滅のときは、これ此法滅時なり。滅は法の滅なり、滅なりといへども法なるべし。法なるゆゑに客塵にあらず、客塵にあらざるゆゑに不染汙なり、ただこの不染汙、すなはち諸佛諸祖なり、汝もかくのごとしといふ。たれか汝にあらざらん、前念後念あるは、

みな汝なるべし。吾もかくのごとしといふ、たれか吾にあらざらん、前念後念はみな吾なるがゆゑに、この滅に多般の手眼を莊嚴せり。いはゆる無上大涅槃なり。いはゆる謂之死なり、いはゆる執爲斷なり。いはゆる爲所住なり。いはゆるかくのごとくの許多手眼、しかしながら滅の功德なり。滅の我なる時節に不言なると、起の我なる時節に不言なるとは不言の同生ありとも、同死の不言にはあらざるべし。すでに前法の滅なり、後法の滅なり、法の前念なり、法の後念なり。爲法の前後法なり。爲法の前後念なり、不相待は爲法なり。不相對は法爲なり、不相對ならしめ、不相待ならしむるは、八九成の道得なり。滅の四大五蘊を手眼とせる、拈あり收あり、滅の四大五蘊を行程とせる、進歩あり相見あり。このとき、通身是手眼還是不足なり、遍身是手還是不足なり。おほよそ滅は、佛祖の功德なり、いま不相對と道取あり。不相待と道取あるは、しるべし起は初中後起なり。官不レ容レ針私通二車馬一なり。滅を初中後に相待するにあらず、相對するにあらず、從來の滅處に忽然として起法すとも、滅の起にはあらず。法の起なり、法の起なるゆゑに、不對待相なり。また滅と滅と相待するにあらず、相對するにあらず。滅も初中後滅なり。相逢不拈出、擧意便知有なり。從來の起處に忽然として滅すとも、起の滅にあらず。法の滅なり、法の滅なるがゆゑに不相對待なり。たとひ滅の是卽にもあれ、たとひ起の是卽にもあれ、但以海印三昧名爲衆法なり、是卽の修證はなきにあらず、只此不染汚名爲海印三昧なり。三昧は現成なり、道得なり、背手摸枕子の夜間なり、夜間のかくのごとく背手摸枕子なる、摸枕

【曹山元證大師】曹山本寂禪師の語曹山錄に出づ。
【大海不宿死屍】華嚴の海の十德を明す第二、涅槃經の海の八德を明す中に之を出す。大論廿二に破戒者不在僧中喩如海水不共死屍宿と云へり

子は億億萬劫のみにあらず。我於海中、唯常宣説妙法華經なり。不言我起なるがゆゑに、我於海中なり。前面も一波纔動萬波隨なる常宣説なり。後面も萬波纔動一波隨の妙法華經なり。たとひ千尺萬尺の絲綸を卷舒せしむとも、うらむらくはこれ直下垂なることを、いはゆる前面後面は、我於海面なり。前頭後頭といはんがごとし、前頭後頭といふは、頭上安頭なり。海中は有人にあらず、我於海は世人の住處にあらず。聖人の愛處にあらず。我於ひとり海中にあり。これ唯常の宣説なり。この海中は中間に屬せず、内外に屬せず。鎭常在説法華經なり、東西南北に不居なりといへども、滿船空載月明歸なり。この實歸は便歸來なり。たれかこれを滯水の行履なりといはん、ただ佛道の劑限に現成するのみなり、これを印水の印とす。さらに道取す印空の印なり、さらに道取す印泥の印なり、印水の印かならずしも印海の印にはあらず、向上さらに印海の印なるべし。これを海印といひ、水印といひ、泥印といひ、心印といふなり、心印を單傳して、印水し印泥し印空するなり。曹山元證大師、因僧問、「承レ教有レ言、大海不レ宿ニ死屍一、如何是海。」師云、『包ニ含萬有一』僧曰、『爲ニ什麼一不レ宿ニ死屍一。』師云、『絶氣者不レ著。』僧曰、『既是包ニ含萬有一、爲ニ什麼一絶氣者不レ著。』師云、『萬有非ニ其功一絶氣。』この曹山は、雲居の兄弟なり。洞山の宗旨、このところに正的なり、いま承教有言といふは、佛祖の正教なり。凡聖の教にあらず、付佛法の小教にあらず。大海不宿死屍、いはゆる大海は内海外海等にあらず。八海等にはあらざるべし。これらは學人のうたがふところにあらず。海にあらざるを海と認ずるの

【八功德水】俱舍論に出づ、甘、冷、軟、輕、清淨、不臭、飲時不損喉、飲已不傷腹の八德を具へたる水、稱讚淨土經には澄淨、清冷、甘美、輕軟、潤澤、安和、除患、增益の八となせり。

【毗盧藏海】毗盧佛の法身にして如來の換語、佛性海、法性海、如來藏といふに同じ、一は萬有を包含して一物を餘さざる義、海は法として現ぜざる無きこと海の影を現ずるが如し。

【多福一叢竹】趙州の嗣に杭州多福禪師あり、僧問ふ、如何なるか、是れ多福一叢の竹、師云く一莖兩莖斜なり、僧云く學人不會、師云く三莖四莖曲れりと。

みにあらず。海なるを海と認ずるなり、たとひ海と強爲すとも大海といふべからざるなり、大海はかならずしも、八功德水の重淵にあらず。大海はかならずしも鹹水等の九淵にあらず、衆法は合成なるべし、大海かならずしも深水のみにてあらんや、このゆゑにいかなるか海と問著するは、大海のいまだ人天にしられざるゆゑに、大海を道著するなり。これを問著せん人は、海執を動著せんとするなり。不宿死屍といふは、不宿は、明頭來明頭打、暗頭來暗頭打なるべし。死屍は死灰なり、幾度逢レ春不レ變心なり。死屍といふは、すべて人人いまだみざるものなり。このゆゑにしらざるなり。師いはくの包含萬有は、海を道著するなり。宗旨の道得するところは、阿誰なる一物の萬有を包含するとはいはず。包含萬有なり。大海の萬有を包含するといふにあらず、包含萬有を道著するは、大海なるのみなり。なにものとしれるにあらざれども、しばらく萬有なり。佛面祖面と相見することも、しばらく萬有を錯認するなり。包含のときは、たとひ山なりとも高高峯頭立のみにあらず。たとひ水なりとも深深海底行のみにあらず、收はかくのごとくなるべし、放はかくのごとくなるべし。佛性海といひ、毗盧藏海といふ、ただこれ萬有なり。海面みえざれども、游泳の行履に疑著することなし。たとへば多福一叢竹を道取するに、一莖兩莖曲なり、三莖四莖斜なり、萬有を錯失せしむる行履なりとも、なにとしてかいまだいはざる千曲萬曲なりと、なにとしてかいはざる千叢萬叢なりと、一叢の竹かくのごとくある道理わすれざるべし。曹山の包含萬有の道著、すなはちなほこれ萬有なり。僧曰、爲ニ什麼ニ絕氣者不

著ニ」は、あやまりて疑著の面目なりといふとも、是什麼心行なるべし、從來疑ニ著這漢ーなるときは、從來疑著這漢に相見するのみなり、什麼處在に、爲ニ什麼ー絕氣者不著なり、爲ニ什麼ー不宿死屍なり、這頭にすなはち既是包含萬有、爲ニ什麼ー絕氣者不著なり。しるべし包含は著にあらず、包含は不宿なり、萬有、たとひ死屍なりとも不宿の直須萬年なるべし。不著の這老僧一著子なるべし。曹山の道すらく、『萬有非ニ其功ー絕氣。』いはゆるは萬有はたとひ絕氣なりとも、たとひ不絕氣なりとも、不著なるべし。死屍たとひ死屍なりとも、萬有に同參する行履あらんがごときは、包含すべし、包含なるべし、萬有なる前程後程その功あり、これ絕氣にあらず、いはゆる一盲引衆盲なり、一盲引衆盲の道理はさらに、一盲引一盲なり、衆盲引衆盲なり。衆盲引衆盲なるとき、包含萬有包ニ含于包含萬有ーなり。さらにいく大道にも萬有にあらざるは、いまだその功夫現成せず、海印三昧なり。

仁治三年壬寅孟夏二十日記ニ于觀音導利興聖寶林寺ー

正法眼藏海印三昧　畢

正法眼藏授記

佛祖單傳の大道は、授記なり、佛祖の參學なきものは、夢也未見なり。その授記の時節は、いまだ菩提心をおこさざるものにも授記す、無佛性に授記す、有佛性に授記す。有身

【仁治三年】祖齡四十三歲。四月廿日興聖寺にての記なり。

【授記】聖言說與するを授と日ひ、果と心を期するを記と日ふ。法華に授記品あり、思益經に菩薩授記品あり。宗門に授記而

授嗣書の三これ堂奥の事最も尊重すべきなり。法華經の一念信解即得究竟金剛經に一念清淨信者如來悉知悉見といふもの是れ授記の當體なり。機の佛知見を開くを見て佛力を授記せらるるなり、故に授記は開佛知見のことと知るべし

【その授記の時節】四種の授記は大藏法數第十八には菩提資糧論を引いて云く、一未發菩提心、二共發菩提心、三隱覆、四現前授記云云と。

【要略八種云云】菩薩瓔珞經第八卷無著品第二十六に明す。又華嚴經五十五離世間品に十種の得授記を出す

に授記し、無身に授記す、諸佛に授記す、諸佛は諸佛の授記を保任するなり。得授記ののちに作佛すと參學すべからず、作佛ののちに得授記すと參學すべからず。授記時に作佛あり、授記時に修行あり。このゆゑに諸佛に授記あり、佛向上に授記あり、自己に授記す、身心に授記す。授記に飽學措大なるとき、佛道に飽學措大なり。身前に授記あり、身後に授記あり、自己にしらるる授記あり、自己にしられざる授記あり、他をしてしらしむる授記あり。他をしてしらしめざる授記あり。まさにしるべし授記は自己を現成せり、授記これ現成の自己なり。このゆゑに佛佛祖祖嫡嫡相承せるは、これただ授記のみなり、さらに一法としても授記にあらざるなし、いかにいはんや、山河大地須彌巨海あらんや、さらに一箇半箇の張三李四なきなり。かくのごとく參究する授記は、道得一句なり、聞得一句なり、不會一句なり、會取一句なり、行取なり、說取なり、退步を教令せしめ、進步を教令せしむ。いま得坐披衣、これ古來の得授記にあらざれば、現成せざるなり。合掌頂戴なるがゆゑに、現成は授記なり。佛言、それ授記に多般あれども、しばらく要略するに八種あり、いはゆる一者、自己知、他不知。已知他不知者發心自誓未廣及人未得四無所畏未得善權故 二者、衆人盡知、自己不知。衆人盡知已不知者發心廣大得無畏善權故 三者、自己衆人俱知。皆知者位在七地無畏善權得空觀故 四者、自己衆人俱不知。皆不知者未入七地未得無著之行故 五者、近覺、遠不覺。遠者不覺者彌勒是也諸根具足不捨如來無著之行故 六者、遠覺、近不覺。近者不覺者此人未能演說賢聖之行師子膺是也 七者、俱覺。近遠俱覺者諸根具足不捨無著之行柔順菩薩是也 八者、俱不覺。近遠俱不覺者

【玄沙院宗一大師】傳燈玄沙章に載す

未得善權不能知如來藏等行菩薩是故、餘經又云、近知者。從現佛得記也如彌勒等遠知者。不從今佛從當佛得記如佛語弊魔彌勒當與汝記遠近倶知者。今當佛倶與記也近遠倶不知者。今當佛倶不記也かくのごとくの授記あり、しかあればいまこの臭皮袋の精魂に識度せられざるには、授記あるべからずと活計することなかれ、未悟の人面にたやすく授記すべからずといふことなかれ。よのつねにおもふには修行功滿じて作佛決定するとき、授記すべしと學しきたるといへども、佛道はしかにはあらず。或從知識して一句をきき、或從經卷して一句をきくことあるは、すなはち得授記なり。これ諸佛の本行なるがゆゑに、百艸の善根なるがゆゑに、もし授記を道取するには、得記人みな究竟人なるべし。しるべし一塵なほ無上なり、一塵なほ向上なり。授記なんぞ一塵ならざらん、授記なんぞ一法ならざらん、授記なんぞ萬法ならざらん、授記なんぞ修證ならざらん、授記なんぞ佛祖ならざらん、授記なんぞ功夫辦道ならざらん。授記なんぞ大悟大迷ならざらん。授記はこれ吾宗到汝大興于世なり、授記はこれ汝亦如是吾亦如是なり、授記これ標榜なり、授記これ何必なり、授記これ破顔微笑なり、授記これ生死去來なり、授記これ盡十方界なり、授記これ遍界不曾藏なり。

玄沙院宗一大師、侍雪峯行次、雪峯指面前地云、這一片田地、好造箇無縫塔。玄沙曰、高多少。雪峯乃上下顧視。玄沙曰、人天福報即不無、和尚靈山授記未夢見在。雪峯云、儞作麼生。玄沙曰、七尺八尺。いま玄沙のいふ和尚靈山授記未夢見在は、雪峯に靈山の授記なしといふにあらず。雪峯に靈山の授記ありといふにあらず、和尚靈

【古佛いはく古今】傳燈廿九雲頂山德敷、古今大意を頌して云く古今擧拂示二東西一、大意幽微肯易レ參、動レ指掩レ頭元是二、斜レ眸擠レ掌同非レ三、道悟雖レ殊同人會、石鞏彎レ弓作者諳、此理若無二師印授一、欲下將二何見一語中玄談上。

山授記未夢見在といふなり。靈山の授記は、高著眼なり、吾有正法眼藏、涅槃妙心、付屬摩訶迦葉なり。しるべし靑原の石頭に授記せしときの同參は、摩訶迦葉も靑原の授記をうく、靑原も釋迦の授記をさづくるがゆゑに、佛佛祖祖の面面に正法眼藏付屬有在なることあきらかなり。ここをもて曹谿すでに靑原に授記す、靑原すでに六祖の授記をうくるとき、授記に保任せる靑原なり、このとき六祖諸祖の參學、正直に靑原の授記によりて行取しきたれるなり。これを明明百艸頭、明明佛祖意といふ。しかあればすなはち佛祖いづれか百艸にあらざらん、百艸なんぞ吾汝にあらざらん、至愚にしておもふことなかれ、みづからに具足する法は、みづからかならずしるべしみるべしと、低惡にあらざるなり。自己の知する法、かならずしも自己の有にあらず、自己の有かならずしも自己のみるところたらず、自己のしるところならず。しかあればいまの知見思量分別にあたはざれば自己にあるべからずと疑著することなかれ。いはんや靈山の授記といふは、釋迦牟尼佛の授記なり。この授記は釋迦牟尼佛の釋迦牟尼佛に授記しきたれるなり。授記の未合なるには授記せざる道理なるべし。その宗旨は、すでに授記あるに授記するに罣礙なし、授記なきに授記するに剩法せざる道理なり。罣礙なく剩法にあらざる、これ諸佛祖の諸佛祖に授記しきたれる道理なり。このゆゑに古佛いはく、古今擧拂示二東西一、大意幽微肯易レ參、此理若無二師教一授、欲下將二何見一語中玄談上。いま玄沙の宗旨を參究するに、無縫塔の高多少を量するに、高多少の道得あるべし。さらに五百由旬にあらず、八萬由旬にあらず。これにより上下を顧視するをき

【相繼得成佛】法華五百弟子品の語

らふにあらず、ただこれ人天の福報は即不無なりとも、無縫塔高を顧視するは、釋迦牟尼佛の授記にはあらざるのみなり。釋迦牟尼佛の授記をうるは、七尺八尺の道得あるなり、眞箇の釋迦牟尼佛の授記を點檢することは、七尺八尺の道得をもて檢點すべきなり。しかあればすなはち七尺八尺の道得を是不是せんことはしばらくおく、授記はさだめて雪峯の授記あるべし、玄沙の授記あるべきなり。いはんや授記を擧して無縫塔高の多少を道得すべきなり、授記にあらざらんを擧して佛法を道得するは、道得にはあらざるべきなり。自己の眞箇に自己なるを會取し聞取し道取すれば、さだめて授記の現成する公案あるなり。授記の當陽に授記と同參する功夫きたるなり。授記を究竟せんために如許多の佛祖は、現成正覺しきたれり、授記の功夫するちから、諸佛を推出するなり。このゆゑに唯以一大事因緣故出現といふなり。その宗旨は、向上には非自己かならず非自己の授記をうるなり。このゆゑに諸佛は諸佛の授記をうるなり。おほよそ授記は一手を擧して授記し、兩手を擧して授記し、千手眼を擧して授記し、授記せらる。あるひは優曇華を擧して授記す、あるひは金襴衣を拈じて授記する、ともにこれ強爲にあらず、授記の云爲なり。內よりうる授記あるべし、外よりうる授記あるべし、內外を參究せん道理は、授記に參學すべし。授記の學道は、萬里一條鐵なり、授記の兀坐は、一念萬年なり。古佛いはく、「相繼得成佛、轉次而授記」いはくの成佛はかならず、相繼するなり、相繼する少許を成佛するなり。これを授記の轉次するなり。轉次は轉得轉なり、轉次は次得次なり、たとへば造次なり、造次

【我今從佛聞】法華五百弟子品の文

は施爲なり、その施爲は局量の造身にあらず、局量の造境にあらず、度量の造作にあらず、造心にあらざるなり。まさに造境不造境、ともに轉次の道理に一任して究辨すべし。造作不造作ともに、轉次の道理に一任して究辨すべし。いま諸佛諸祖の現成するは、施爲に轉次せらるるなり、五佛六祖の西來する施爲に轉次せらるるなり、いはんや運水般柴は轉次しきたるなり、即心是佛の現生する轉次なり。即心是佛の滅度する、一滅度二滅度をめづらしくするにあらず、如許多の滅度を滅度すべし、如許多の成道を成道すべし、如許多の相好を相好すべし、これすなはち相繼得成佛なり、相繼得滅度等なり、相繼得授記なり、相繼得轉次なり。轉次は本來にあらず、ただ七通八達なり、いま佛面祖面の面面に相見し、面面に相逢するは相繼なり、佛授記祖授記の轉次する廻避のところ、間隙あらず。

古佛いはく、「我今從㆑佛、聞㆓授記莊嚴事、及轉次受決㆒、身心徧歡喜。」といふところは授記莊嚴事、かならず我今從佛聞なり、我今從佛聞の及轉次受決するといふは、身心徧歡喜なり。及轉次は我今なるべし、過現當の自他にかかはるべからず、從佛聞なるべし。從他聞にあらず、迷悟にあらず、衆生にあらず。艸木國土にあらず、從佛聞なる授記莊嚴事なり、及轉次受決なり、轉次の道理、しばらくも一隅にとどまりぬることなし、身心徧歡喜しもてゆくなり。歡喜なる及轉次受決、かならず身と同參して徧參し、心と同參して徧參す。さらにまた身はかならず心に徧す。心はかならず身に徧するゆゑに、身心徧といふ、すなはちこれ徧界徧方徧身徧心なり、これすなはち特地一條の歡喜なり。その歡喜、あらはに未

【因藥王菩薩】法華法師品の文。

【佛告藥王又如來】同上法師品の文。

【四十九年】涅槃經に云く世尊四十九年應世說法三百餘會度脫衆生と。

【八十年中】涅槃後分に云く世尊七十有九、於二月十五夜示寂。衆已右脇而臥と。傳燈に云く世尊三十成道說法度生四十九年乃知佛壽七十有九今大呼日八十年耳と。

寤を歡喜せしむるに、おのおの親切なりといへども、おのおのと不染汙なり、かるがゆゑに轉次而受決なる、授記莊嚴事なり。

釋迦牟尼佛、因藥王菩薩、告八萬大士、藥王、汝見是大衆中、無量諸天、龍王、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、人與非人、及比丘比丘尼、優婆塞優婆夷、求聲聞者、求辟支佛者、求佛道者、如是等類、咸於佛前聞妙法華經一偈一句、乃至一念隨喜者、我皆與授記、當得阿耨多羅三藐三菩提。しかあればすなはちいまの無量なる衆會、あるいは天王龍王、四部八部、所求所願ことなりといへども、たれか妙法にあらざらん一句一偈をきかしめん、いかならんなんぢが乃至一念、他法を隨喜せしめん、如是等類といふは、これ法華類なり、咸於佛前といふは、咸於佛中なり、人與非人の萬像に錯認するなりとも、百草に下種せるありとも、如是等類なるべし。如是等類は、我皆與授記なり、我皆與授記の頭正尾正なる、すなはち當得阿耨多羅三藐三菩提なり。

釋迦牟尼佛告藥王、又如來滅度之後、若有人聞妙法華經乃至一偈一句、一念隨喜者、我亦與授阿耨多羅三藐三菩提記。いまいふ如來滅度之後は、いづれの時節到來なるべきぞ、四十九年なるか、八十年中なるか、しばらく八十年中なるべし。若有人聞妙法華經、乃至一偈一句一念隨喜といふは、有智の所聞なるか、無智の所聞なるか、あやまりてきくか、あやまらずしてきくか、爲他道せば若有人の所聞なるべし、さらに有智無智等の諸類なりとすることなかれ。いふべし聞法華經はたとひ甚深無量なる、いく諸佛智慧なりともきく

にはかならず一句なり、きくにはかならず一偈なり、きくにはかならず一念隨喜なり、このとき我亦與授阿耨多羅三藐三菩提記なるべし。亦與授記あり、皆與授記あり、嗟過の張三に一任せしむることなかれ、綿細の功夫に同參すべし。何偈隨喜を若有人聞なるべし、皮肉骨髓を頭上安頭するにいとまあらず、見授阿耨多羅三藐三菩提記は、我願既滿なり、如許皮袋なるべし、衆望亦足なり、如許若有人聞ならん。拈松枝の授記あり、拈優曇華の授記あり、拈瞬目の授記あり、拈破顏の授記あり、靸鞋を轉授せし蹤跡あり、そこばくの是法非思量分別之所能解なるべし、我身是也の授記あり、汝身是也の授記あり、この道理よく過去現在未來を授記するなり。授記中の過去現在未來なるがゆゑに、自授記に現成し他授記に現成するなり。

【維摩詰問彌勒】維摩經菩薩品彌勒章の文。

維摩詰謂二彌勒一曰、世尊授二仁者記一、一生當レ得二阿耨多羅三藐三菩提一、爲下用二何生一得中受記上乎、過去耶、未來耶、現在耶。若過去生、過去生已滅、若未來生、未來生未レ至、若現在生、現在生無レ住、如二佛所說一、比丘、汝今卽時亦生亦老亦滅、若以二無生一得二受記一者、無生卽是正位、於二正位中一亦無二受記一、亦無レ得二阿耨多羅三藐三菩提一、云何彌勒受二一生記一乎。爲下從二如生一得中受記上耶、爲下從二如滅一得中受記上耶、若以二如生一得二受記一者、如無レ有レ生、若以二如滅一得二受記一者、如無レ有レ滅、一切衆生皆如也、一切法亦如也、衆聖賢亦如也、至二於彌勒一亦如也、若彌勒得二受記一者、一切衆生亦應二受記一。所以者何、夫如者、不二不異、若彌勒得二阿耨多羅三藐三菩提一者、一切衆生皆亦應レ得。所以者何、一切衆生、卽菩提相。維摩詰の道取

【仁治三年】祖壽四十三歲、興聖寺に於ける記なり。

するところ、如來これを不是といはず、しかあるに彌勒の得受記すでに決定せり、かるがゆゑに一切衆生の得受記、おなじく決定すべし、衆生の受決あらずば、彌勒の受記あるべからず。すでに一切衆生、卽菩提相なり、菩提の菩提の受記をうるなり、受記は今日の命なり、しかあらば一切衆生は、彌勒と同發心するゆゑに、同受記なり、同成道なるべし。ただし維摩道の於正位中亦無受記は、正位卽授記をしらざるがごとし、正位卽菩提といはざるがごとし。また過去生已滅、未來生未至、現在生無住といふ、過去かならずしも已滅にあらず、未來かならずしも未至にあらず、現在かならずしも無住にあらず、無住未至已滅等を、過未現を學すといふとも、未至のすなはち過現未なる道理、かならず道取すべし。しかあれば生滅ともに得記する道理あるべし、生滅ともに得菩提の道理あるなり。一切衆生の授記をうるとき彌勒も受記をうるなり、しばらくなんぢ維摩にとふ、彌勒は衆生と同なりや異なりや、試道看。すでに若彌勒得記せば、一切衆生も得記せんといふ、彌勒は衆生にあらずといはば、衆生は衆生にあらず、彌勒も彌勒にあらざるべし、いかん。正當恁麼時、また維摩にあらざるべし、維摩にあらずば、この道得用不著ならん。しかあればいふべし授記の一切衆生をあらしむるとき一切衆生および彌勒はあるなり、授記よく一切をあらしむべし。

仁治三年壬寅夏四月廿五日記二于觀音導利興聖寶林寺一

寬元二年甲辰正月二十日書二寫于越州吉峯寺侍者寮一

【觀音】雲巖道の遍身是の觀音、道吾道の通身是の觀音を拈來應現せしむる一篇なり。觀其音聲皆得解脫なる觀音、觀は觀照、音は一切諸法皆解兀脫の作用なり、兀兀地の非思量底を思量する當體、觀音の大智慧大慈悲の手眼なり。

【雲巖無住大師】雪竇頌古第八十九則、宏智頌古第五十四則に出す。傳燈會元ともに道吾問雲巖に作る、佳なり。雲巖曇晟、道吾圓智ともに藥山惟儼の嗣、晟は兄、智は弟。

【觀世音、觀自在】觀世音は舊譯、觀自在は新譯。原音は婆婁吉低舍婆羅(Avalokiteśvara)の異譯。

正法眼藏觀音

雲巖無住大師、問道吾山修一大師、『大悲菩薩、用許多手眼作麼。』道吾云、『如人夜間背手摸枕子。』雲巖曰、『我會也我會也。』道吾云、『汝作麼生會。』雲巖曰、『遍身是手眼。』道吾云、『道也太殺道、祇道得八九成。』雲巖曰、『某甲祇如此、師兄作麼生。』道吾云、『通身是手眼。』

道得觀音は、前後の聞聲、ままにおほしといへども、雲巖道吾にしかず。觀音を參學せんとおもはば、雲巖道吾のいまの道取を參究すべし。いま道取する大悲菩薩といふは、觀世音菩薩なり、觀自在菩薩ともいふ。諸佛の父母とも參學す、諸佛よりも未得道なりと學することなかれ、過去正法明如來なり。しかあるに雲巖道の大悲菩薩用許多手眼作麼の道を擧拈して參究すべきなり。觀音を保任せしむる家門あり、觀音を未夢見なる家門あり。雲巖に觀音あり道吾と同參せり、ただ一兩の觀音のみにあらず、百千の觀音おなじく雲巖に同參す。觀音を眞箇に觀音ならしむるは、ただ雲巖會のみなり。所以はいかん、雲巖道の觀音と餘佛道の觀音と、道得道不得なり。餘佛道の觀音は、ただ十二面なり、雲巖しかあらず、餘佛道の觀音は、わづかに千手眼なり、雲巖しかあらず、餘佛道の觀音は、しばらく八萬四千手眼なり、雲巖しかあらず、なにをもてかしかありとしる、いはゆる雲巖道の大

【過去正法明如來】千手千眼廣大圓滿大悲心經に云く「此菩薩已於過去作佛竟、號正法明如來、大悲願力現作菩薩」と。

【十一面】心密言念誦儀軌經に云く「觀自在菩薩白佛言、我有心密語名十一面（十一俱胝、此云百萬）如來同共宣說」と、又密家有十一面、加本正面爲十二面、加日乃十地加二覺之相也。傳燈七に耽源問、麻谷、十二面觀音、是凡是聖と。

【八萬四千手眼】楞嚴經六觀音章に「一百八首千首萬首八萬四千爍迦囉首二臂四臂六臂八臂乃至八萬四千母陀羅臂、二目三目四目九目乃至八萬四千清淨寶目」と。

【三十二三】普門品に三十二應、加ふるに菩薩身を以てす、故に三十二

悲菩薩用許多手眼は、許多の道、ただ八萬四千手眼のみにあらず、いはんや十二および三十二三の數般のみならんや。許多はいくそばくといふなり、如許多の道なり、種般かぎらず、種般すでにかぎらずば、無邊際量にもかぎるべからざるなり。用許多のかず、その宗旨かくのごとく參學すべし。すでに無量無邊の邊量を超越せるなり。いや雲巖道の許多手眼の道を拈來するに、道吾さらに道不著といはず、宗旨あるべし。雲巖道吾は、かつて藥山に同參の齊行よりすでに四十年の同行として古今の因緣を商量するに、不是處は剗却し、是處は證明す、恁麼しきたれるに、今日は許多手眼と道取するに、雲巖道取し、道吾證明する。しるべし兩位の古佛おなじく道取せる許多手眼なり、許多手眼は、あきらかに雲巖道吾同參なり、いまは用作麼を道吾に問取するなり。この問取を經師論師ならびに十聖三賢等の問取にひとしめざるべし、この問取は、道取を擧來せり、いま用許多手眼作麼と道取するに、この功業をちからとして成佛する古佛新佛あるべし、使許多手眼作麼とも道取しつべし、作什麼とも道取し、動什麼とも道取し、道什麼とも道取ありぬべし。道吾いはく、「如人夜間背手摸枕子」いはゆる宗旨はたとへば人の夜間に手をうしろにして枕子を摸索するがごとし、摸索するといふは、さぐりもとむるなり。夜間は、くらき道得なり、なほ日裏看山と道取せんがごとし。用手眼は、如人夜間背手摸枕子なり、これをもて用手眼を學すべし、夜間を日裏よりおもひやると、夜間にして夜間なるときと撿點すべし、すべて晝夜にあらざらんときと撿點すべきなり。人の摸枕子せん、たとひこの儀す

三といふ。
【剗却、證明】會元第七雪峰章に、巖頭曰儞若實如此據汝見處一一通來是處爲汝證明不通是處爲汝剗却と。

なはち觀音の用手眼のごとくなる會取せざれども、かれがごとくなる道理のがれのがるべきにあらず。いまいふ如人の人は、ひとへに譬諭の言なるべきか、またこの人は平常の人にして平常の人なるべからざるか、もし佛道の平常人なりと學して譬諭のみにあらずば、模枕子に學すべきところあり。枕子も咨問すべき何形段あり、夜間も人天晝夜の夜間のみなるべからず。しるべし、いま道取するは道得枕子にあらず、牽挽枕子にあらず、推出枕子にあらず、夜間背手模枕子と道取する道吾の道底を撿點せんとするに、眼の夜間をうる、みるべしすごさざれ、手のまくらをさぐる、いまだ劑限を著手せず、背手の機要なるべくは、背眼すべき機要のあるか、夜間をあきらむべし。手眼世界なるべきか、人手眼のあるか、ひとり手眼のみ霹靂するか、頭正尾正なる手眼の一條兩條なるか、もしかくのごとくの道理を撿點すれば、用許多手眼はたとひありとも、たれかこれ大悲菩薩、ただ手眼菩薩のみきこゆるがごとし。恁麼いはば、手眼菩薩用許多大悲菩薩作麼と問取しつべし、しるべし手眼はたとひあひ罣礙せずとも、用作麼は恁麼用なり、用恁麼なり、恁麼道得するがごときは、徧手眼の不會藏なりとも、徧手眼と道得する期をまつべからず。不會藏の那手眼ありとも、這手眼ありとも、自己にはあらず、山海にはあらず、日面月面にあらず、卽心是佛にあらざるなり。雲巖道の我會也我會也は、道吾の道を我會するといふにあらず、用恁麼の手眼を道取に道得ならしむるには、我會也我會也なり、無端用這裏なるべし、無端須入今日なるべし。道吾道の儞作麼生會は、いはゆる我會也、たとひ我會也なるを罣

礙するにあれざれども、道著に佛作麼生會の道取あり、すでにこれ我會佛會なり、眼會手會なからんや、現成の會なるか、未現成の會なるか、我會也の會を我なりとすとも、佛作麼生會に佛あることを功夫ならしむべし、雲巖道の徧身是手眼の出現せるは、夜間背手摸枕子を講誦するに、徧身これ手眼なりと道取せると參學する觀音のみおほし、この觀音たとひ觀音なりとも、未道得なる觀音なり。雲巖道の徧身是手眼といふは、手眼是身徧といふにあらず、徧はたとひ徧界なりとも身手眼の正當恁麼は、徧の所徧なるべからず。身手眼にたとひ徧の功德ありとも、攙奪行市の手眼にあらざるべし、手眼の功德は、是と認ずる見取行取說取あらざるべし。手眼すでに許多といふ、千にあまり、萬にあまり、八萬四千にあまり、無量無邊にあまる。ただ徧身是手眼のかくのごとくあるのみにあらず、度生說法もかくのごとくなるべし、國土放光もかくのごとくなるべし、かるがゆゑに雲巖道は徧身是手眼なるべし、手眼を徧身ならしむるにはあらずと參學すべし、徧身是手眼を使用すといふとも、動容進止せしむといふとも、動著することなかれ。道著道取す道也太煞道、祇道得八九成といはくの宗旨は、道得は太煞道なり、太煞道といふは、いひあらはすのこれる未道得なしといふなり。いますでに未道得のつひに道不得なるべきのこりあらざるを道取するときは、祇道得八九成なり、いふ意旨の參學は、たとひ十成なりとも道未盡なる力量にてあらば、參究にあらず。道得は八九成なりとも、道取すべきを、八九成に道取すると、十成に道取するとなるべし。當恁麼の時節に、百千萬の道得に道取すべきを、力量の

【仁治三年】祖齡四十三歲、説處の記載無しと雖前後より推して興聖寺に於ける示衆なること明かなり。
【不見一法】永嘉玄覺作、證道歌の句。
【麻谷臨濟に】臨濟錄に云く麻谷問ふ大悲千手眼那箇是正眼、濟曰大悲千手眼那箇是正眼速道速道、麻谷拽師下座自却坐、濟

妙なるがゆゑに、些子の力量を擧して、わづかに八九成に道得するなり、たとへば盡十方界を百千萬力に拈來するあらんも、年來せざるにはすぐるべし、しかあるを一力に年來せんは、よのつねの力量なるべからず、いま八九成のこころかくのごとし。しかあるを佛祖の祇道得八九成の道をききては、道得十成なるべきに、道得いたらずして、八九成といふと會取す、佛法もしかくのごとくならば、今日にいたるべからず。いはゆるの八九成は、百千といはんがごとし、許多といはんがごとく參學すべきなり。すでに八九成と道取す、はかりしりぬ八九にかぎるべからずといふなり、佛祖の道話、かくのごとく參學するなり。雲巖道の某甲祇如是、師兄作麼生は、道吾のいふ道得八九成の道を道取せしむるがゆゑに、祇如是と道取するなり、これ不留朕跡なりといへども、すなはち臂長衫袖短なり、わが適來の道を道未盡ながらさしおくを、某甲祇如是といふにはあらず。道吾いはく、『通身是手眼。』いはゆる道は、手眼たがひに手眼として通身なりといふにあらず、手眼の通身を、通身是手眼といふなり。しかあれば身はこれ手眼なりといふにはあらず。用許多手眼は、用手用眼の許多なるには、手眼かならず通身是手眼なるなり、用許多身心作麼と問取せんには、通身是作麼なる道得もあるべし。いはんや雲巖の徧と道吾の通と、道得盡、道未盡にはあらざるなり、雲巖の徧と道吾の通と、比量の論にあらずといへども、おのおの許多手眼は恁麼の道取あるべし。しかあれば釋迦老子の道取する觀音は、わづかに千手眼なり、十二面なり、三十三身、八萬四千なり、雲巖道吾の觀音は、許多手眼なり、しかあれども

進前曰不徐、谷擬議、濟拽下麻谷却自坐、谷便出去と。

【雲門見色明心】會元雲門章に云く上堂云聞聲悟道見色明心、遂擧起手曰觀世音菩薩將錢來買胡餅、放下手曰元來是饅頭と。

【百丈入理】傳燈百丈章に普請钁地次有一僧聞鐘鼓聲擧起钁頭大笑便歸、丈曰俊哉此是觀音入理之門と。

【楞嚴會に圓通】楞嚴經第六觀音圓通章に詳し。

【法華會に普門】法華經第八觀音普門品に詳出。

【阿羅漢】聲聞の阿羅漢には非ず、佛十號中の應供の阿羅漢なり。諸漏已盡なる神通大阿羅漢の心得自在を活現せしむる是れ

多少の道にはあらず、雲巖道吾の許多手眼の觀音を參學するとき一切諸佛は觀音の三昧を成八九成するなり。

正法眼藏觀音

爾時仁治三年壬寅四月二十六日示衆

いま佛法西來よりこのかた、佛祖おほく觀音を道取すといへども、雲巖道吾におよばざるゆゑに、ひとりこの觀音を道取す。永嘉眞覺大師に、不見一法名如來、方得名爲觀自在の道あり、如來と觀音と、即現此身なりといへども、他身にはあらざる證明なり。麻谷臨濟に、正手眼の相見あり、許多の一二なり。雲門に、見色明心聞聲悟道の觀音あり、いづれの聲色か見聞の觀世音菩薩にあらざらん。百丈に入理の門あり、楞嚴會に圓通觀音あり、法華會に普門示現觀音あり。みな與佛同參なり、與山河大地同參なりといへども、なほこれ許多手眼の一二なるべし。

正法眼藏觀音　畢

正法眼藏阿羅漢

『諸漏已盡、無復煩惱、逮得己利、盡諸有結、心得自在。』これ大阿羅漢なり、學佛者の極果なり、第四果となづく、佛阿羅漢なり。諸漏は沒柄破木杓なり、用來すでに多時な

一篇の宗旨なり。

【諸漏已盡】法華序品の文。諸漏とは有漏、欲漏、無明漏、煩惱漏。

【第四果】須陀洹向須陀洹果（初果、預流果）、斯陀含向斯陀含果（第二果、一來果）、阿那含向阿那含果（第三果、不還果）、阿羅漢向阿羅漢果（第四果、阿羅漢果）。

【我等今日】法華信解品の文。

【若我弟子】同上方便品の文。

りといふとも、已盡は木杓の渾身跳出なり。逮得已利は、頂𩕳に出入するなり、盡諸有結は、盡十方界不曾藏なり、心得自在の形段、これを高處自高平、低處自低平と參究す。このゆゑに牆壁瓦礫あり、自在といふは、心也全機現なり。無復煩惱は、未生煩惱なり、煩惱被煩惱礙をいふ。阿羅漢の神通智慧、禪定說法、化導放光等、さらに外道天魔等の論にひとしかるべからず、見百佛世界等の論、かならず凡夫の見解に準ずべからず。將謂胡鬚赤、更有赤鬚胡の道理なり、入涅槃は、阿羅漢の入拳頭裏の行業なり、このゆゑに涅槃妙心なり、無廻避處なり、入鼻孔の阿羅漢を、眞阿羅漢とす、いまだ鼻孔に出入せざるは、阿羅漢にあらず。

古云、我等今日、眞阿羅漢、以佛道聲、令一切聞。いま令一切聞といふ宗旨は、令一切諸法佛聲なり、あにただ諸佛及弟子のみを擧拈せんや、有識有知、有皮有肉、有骨有髓のやからみなきかしむるを、令一切といふ。有識有知といふは、國土草木牆壁瓦礫なり、搖落盛衰、生死去來、みな聞著なり。以佛道聲、令一切聞の由來は、渾界を耳根と參學するのみにあらず。釋迦牟尼佛言、若我弟子、自謂阿羅漢辟支佛者、不聞不知諸佛如來但教化菩薩事、此非佛弟子、非阿羅漢、非辟支佛。佛言の但教化菩薩事は、我及十方佛、乃能知是事なり、唯佛與佛、乃能究盡諸法實相なり。阿耨多羅三藐三菩提なり。しかあれば菩薩諸佛の自謂も、自謂阿羅漢辟支佛者に一齊なるべし。そのゆゑはいかん、自謂すなはち聞知諸佛如來、但教化菩薩事なり。

【聲聞經中】玄義四之二に云く、阿羅漢地、於聲聞法即是佛地、何者三藏、御三十四心發眞斷三界結盡與羅漢齊、故名佛地、於菩薩法中獨名無生と。

【四向四果】其の名第四果の項に出す。向とは成實論に未至本位、不稱爲果、但稱爲向、言從是向下也と。

【不是心、佛、物】會元南泉章に上堂云、不是心不是佛不是物と。

【是諸比丘】法華方便品の文。

【夾山得旨之後】圜悟廣錄卷十四に出づ。

古云、聲聞經中、稱阿羅漢、名爲佛地。いまの道著、これ佛道の證明なり、論師胸臆の說のみにあらず、佛道の通軌あり。阿羅漢を稱して佛地とする道理をも參學すべし、佛地を稱して阿羅漢とする道理をも參學すべきなり、阿羅漢果のほかに、一塵一法の剩法あらず、いはんや三藐三菩提あらんや、阿耨多羅三藐三菩提のほかに、さらに一塵一法の剩法あらず、いはんや四向四果あらんや、阿羅漢の擔來する諸法の正當恁麼時、この諸法、まことに八兩にあらず半斤にあらず。不是心、不是佛、不是物なり、佛眼也覰不見なり、八萬劫の前後を論ずべからず、抉出眼睛の力量を參學すべし、剩法は渾法剩なり。

釋迦牟尼佛言、是諸比丘比丘尼、自謂已得阿羅漢、是最後身究竟涅槃、便不復志求阿耨多羅三藐三菩提、當知此輩皆是增上慢人、所以者何、若有比丘實得阿羅漢、若不信此法、無有是處、といはゆる阿耨多羅三藐三菩提を、能信するを阿羅漢と證す、必信此法は、付囑此法なり、單傳此法なり、修證此法なり。實得阿羅漢は、是最後身究竟涅槃にあらず、阿耨多羅三藐三菩提を志求するがゆゑに、志求阿耨多羅三藐三菩提は弄眼睛なり。壁面打坐なり面壁開眼なり、徧界なりといへども、神出鬼沒なり。互時なりといへども互換投機なり、かくのごとくなるを志求阿耨多羅三藐三菩提といふ。このゆゑに志求阿羅漢なり、志求阿羅漢は、粥足飯足なり。

夾山圜悟禪師曰、古人得旨之後、向深山茆茨石室、折脚鐺子煮飯喫十年二十年、大忘人世、永謝塵寰、今時不敢望如此、但只韜名晦迹守本分作箇骨律錐老

【百丈山眼耳鼻】古尊宿錄中の百丈錄の文。

【羅漢在凡】以下の文羅漢の結文。

衲、以自契所證、隨己力量受用、消遣舊業、融通宿習、或有餘力、推以及人、結般若緣、練磨自己脚跟純熟、譬如荒艸裏撥剔一箇半箇、同知有、共脫生死、轉益未來、以報佛祖深恩、抑不得已、霜露果熟、推將出世、應緣順適、開托人天、終不操心於有求、何況依倚貴勢、作流俗阿師、擧止欺凡罔聖、苟利圖名、作無間業、縱無機緣、只恁度世、亦無業果、眞出塵羅漢耶。しかあればすなはち而今の本色の衲僧。これ眞出塵阿羅漢なり、阿羅漢の性相をしらんことは、かくのごとくしるべし、西天の論師等のことばを妄計することなかれ、東地の圓悟禪師は正傳の嫡嗣ある佛祖なり。

洪州百丈山大智禪師云、『眼耳鼻舌身意、各各不貪染一切有無諸法、是名受持四句偈、亦名四果。』而今の自他にかかはれざる眼耳鼻舌身意、その頭正尾正、はかりきはむべからず。このゆゑに渾身おのれづから不貪染なり、渾一切有無諸法に不貪染なり、受持四句偈おのれづからの渾渾を、不貪染といふ、これをまた四果となづく、四果は阿羅漢なり。しかあれば而今現成の眼耳鼻舌身意すなはち阿羅漢なり、搆本宗末おのづから透脫なるべし、始到牢關なるは、受持四句偈なり、すなはち四果なり。透頂透底全體現成、さらに絲毫の遺漏あらざるなり、畢竟して道取せん、作麼生道、いはゆる羅漢在凡、諸法敎他罣礙、羅漢在聖、諸法敎他解脫、須知羅漢與諸法同參也、既證阿羅漢、被阿羅漢礙也、所以空王已前老拳頭也。

【仁治三年】祖齢四十三歳、興聖寺に於ける示衆。

【栢樹子】趙州庭前栢樹子を拈來して祖師西來意を直指し、正法眼藏を全擧し全現す。

【瑞像院】南泉山の院號。

【孟春】孟は始なり。正月にあたる。

【別處安排】常なみにあしらふな、叮嚀にせよと云ふこと。

爾時仁治三年壬寅夏五月十五日住于雍州宇治郡觀音導利興聖寶林寺示衆

正法眼藏阿羅漢　畢

正法眼藏栢樹子

趙州眞際大師は、釋迦如來より第三十七世なり。六十一歳にして、はじめて發心しいへをいでて學道す。このときちかひていはく、「たとひ百歳なりとも、われよりもおとれらんは、われかれををしふべし、たとひ七歳なりともわれよりもすぐれば、われかれにとふべし。」恁麼ちかひて南方へ雲遊す。道をとぶらひゆくちなみに、南泉にいたりて願和尚を禮拜す。ちなみに南泉もとより方丈内にありて臥せるついでに、師來參するに、すなはちとふ、「近離什麼處。」師いはく、「瑞像院。」南泉いはく、「還見瑞像麼。」師いはく、「瑞像即不見、即見臥如來。」ときに南泉いましひ起してとふ、「儞はこれ有主沙彌なりや、無主沙彌なりや。」師對していはく、「有主沙彌。」南泉いはく、「那箇是儞主。」師いはく、「孟春猶寒、伏惟和尚尊體起居萬福。」南泉すなはち維那をよんでいはく、「此沙彌別處安排。」

かくのごとくして南泉に寓直し、さらに餘方にゆかず、辨道功夫すること三十年なり。寸陰をむなしくせず、雜用あることなし。つひに傳道受業よりのち、趙州の觀音院に住すること、また三十年なり。その住持の事形、つねの諸方にひとしからず、あるときいはく、

【煙火徒勞】趙州十二時歌中食時の歌。

【思量天下】是は半夜子之時の歌。

【解齋粥米】是は平旦寅之時の歌。荒村破院實難レ論、解二齋粥米一全無レ粒、空對二閑窓與一レ隙塵一、唯雀噪勿二人親一、獨坐時聞葉葉頻、誰道出家憎愛斷、思量不レ覺淚沾レ巾。

『煙火徒勞望二四隣一、饅頭鎚子前年別、今日思量空嚥レ津、持念少嗟歎頻、一百家中無二善人一、來者祇見レ覓レ茶喫、不レ得レ茶喫一去又嗔。』あはれむべし煙火まれなり、一味すくなし、雜味は前年よりあはず、一百家人きたれば茶をもとむ、茶をもとめざるはきたらず、將來茶人は、一百家人にあらざらん、これ見賢の雲水ありとも、思齊の龍象なからん。あるときまたいはく、『思量天下出家人、似二我住持一能有レ幾、土榻牀破蘆簾、老楡木枕全無レ被、尊像不レ燒安息、香灰裏唯聞牛糞氣。』これらの道得をもて、院門の潔白しりぬべし、いまこの蹤跡を學習すべし、僧衆おほからず、不滿二十衆といふは、よくすることのかたきによりてなり、僧堂おほきならず、前架後架なし、夜間は燈光あらず、冬天には炭火なし、あはれむべき老後の生涯といひぬべし、古佛の操行それかくのごとし。あるとき連牀のあしのをれたりけるに、燼木をなはにてゆひつけて、年月をふるに、知事つくりかへんと報ずるに、師ゆるさざりけり、希代の勝躅なり。よのつねには、『解二齋粥米一全無レ粒、空對二閑窓與一レ隙塵一』なり、あるひはこのみをひろひて、僧衆もわがみも、茶飯の日用に活計す、いまの晩進、この操行を讃頌する、師の操行におよばざれども、慕古を心術とするなり。あるとき衆にしめしていはく、『われ南方にありしこと三十年、ひとすぢに坐禪す、なんだち諸人この一段の大事をえんとおもはば、究理坐禪してみるべし、三年、五年、二十年、三十年せんに、道をえずといはば、老僧が頭をとりて杓につくりて小便をくむべし。』かくのごとくちかひける、まことに坐禪辨道は、佛道の直路なり、究理坐看すべし。のち

【大師因有僧問】趙州錄上卷に出づ

に人いはく、「趙州古佛なり。」「大師因有僧問、「如何是祖師西來意。」師云、『庭前栢樹子。』僧曰、「和尚莫以境示人。」師云、「吾不以境示人。」僧曰、「如何是祖師西來意。」師云、「庭前栢樹子。」」この一則公案は、趙州より起首せりといへども、畢竟じて諸佛の渾身に作家しきたれるところなり、たれかこれ主人公なり。いましるべき道理は、庭前栢樹子、これ境にあらざる宗旨なり、祖師西來意、これ境にあらざる宗旨なり、栢樹子これ自己にあらざる宗旨なり。和尚莫以境示人なるがゆゑに、吾不以境示人なるがゆゑに、いづれの和尚か和尚にさへられん、さへられずば吾なるべし、いづれの吾が吾にさへられん、たとひさへらるとも人なるべし、いづれの境か西來意に罣礙せられざらん、境はかならず西來意なるべきがゆゑに、しかあれども西來意の境をもちて相待せるにあらず、祖師西來意、かならずしも正法眼藏涅槃妙心にあらざるなり、不是心なり、不是佛なり、不是物なり。いま如何是祖師西來意と道取せるは、問取のみにあらず。兩人同得見のみにあらざるなり、正當恁麼問時は、一人也未可相見なり、自己也能得機なり、さらに道取するに渠無不是なり。このゆゑに錯錯なり、錯錯なるがゆゑに將錯就錯なり、承虚接響にあらざらんや。豁達靈根無向背なるがゆゑに、庭前栢樹子なり。境にあらざれば栢樹子にあるべからず、たとひ境なりとも吾不以境示人なり。和尚莫以境示人なり。古祠にあらず、すでに古祠にあらざれば、埋沒しもてゆくことあれば、還吾功夫來なり、還吾功夫來なるがゆゑに、吾不以境示人なり、さらになにをもてか示人する、吾亦如是なるべし。

【栢樹還有佛性】
趙州錄中卷に出づ

大師有僧問、『栢樹還有佛性也無。』大師云、『有。』僧曰、『栢樹幾時成佛。』大師云、『待虚空落地。』僧曰、『虚空幾時落地。』大師云、『待栢樹子成佛。』いま大師の道取を聽取し、這僧の問取をすてざるべし、大師道の虚空落地時、および栢樹成佛時は、互相の相待なる道得にあらざるなり。栢樹を問取し、佛性を問取す、成佛を問取し、時節を問取す、虚空を問取し、落地を問取するなり。いま大師の向僧道するに、有と道取するは、栢樹佛性有なり、この道を通達して、佛祖の命脈を通暢すべきなり、いはゆる栢樹に佛性ありといふこと、尋常に道不得なり、未曾道なり、すでに有佛性なり、その爲體あきらむべし、有佛性なる栢樹いまその地位の高低いかん。壽命身量の長短たづぬべし、種姓類族きくべし、さらに百千の栢樹みな同種姓なるか、別種胤なるか、成佛する栢樹あり、修行する栢樹あり、發心する栢樹あるべきか、栢樹は成佛あれども、修行發心等を具足せざるか。栢樹と虚空と、有甚麼因縁なるぞ。栢樹の成佛、さだめて待儞落地時ならば、栢樹の樹功、かならず虚空なるか、栢樹の地位は、虚空それ初地か果位か、審細に功夫參究すべし。我還問汝趙州老、儞亦一根枯栢樹なれば、恁麼の活計を消息せるか、およそ栢樹有佛性は、外道二乘等の境界にあらず、經師論師等の見聞にあらざるなり。いはんや枯木死灰の言華に開演せられんや、ただ趙州の種類のみ參學參究するなり。いま趙州道の栢樹有佛性は、栢樹被栢樹礙也無なり、佛性被佛性礙也無なり。この道取、いまだ一佛二佛の究盡するところにあらず、佛面あるもの、かならずしもこの道得を究盡することうべからず、

【仁治三年】祖齢四十三歳、興聖寺に於ける示衆。

【光明】自己の光明蓋天蓋地にして能照所照を絶したる盡界一光明を赫灼たらしむ。

【長沙上堂示衆】傳燈卷十、玄沙章に出づ。

たとひ諸佛のなかにも、道得する諸佛あるべし、道不得なる諸佛あるべし。いはゆる待虚空落地は、あるべからざることをいふにあらず、栢樹子の成佛する毎度に、虚空落地するなり。その落地響かくれざること、百千の雷よりもすぎたり。栢樹成佛の時は、しばらく十二時中なれども、さらに十二時中なり、その落地の虚空は、凡聖所見の虚空のみにはあらず、このほかに一片の虚空あり、餘人所不見なり、趙州一箇見なり、虚空のおつるところの地、また凡聖所領の地にあらず、さらに一片の地あり、陰陽不到なり、趙州一箇到なり、虚空落地の時節、たとひ日月山河なりとも待なるべし。たれか道取せん佛性かならず成佛すべしと、佛性は成佛以後の莊嚴なり、さらに成佛と同生同參する佛性もあるべし、しかあればすなはち栢樹と佛性と異音同調にあらず、爲道すらくは何必なり、作麼生と參究すべし。

仁治三年壬寅五月菖節二十一日在雍州宇治郡觀音導利院示衆

正法眼藏栢樹子　畢

正法眼藏光明

大宋國湖南長沙招賢大師、上堂、示衆云、「盡十方界、是沙門眼。盡十方界、是沙門家常語。盡十方界、是沙門全身。盡十方界、是自己光明。盡十方界、在自己光明裏。盡十方界、

【永平十年】後漢の孝明皇帝の永平七年明帝夢を感じ永平十年摩騰竺法蘭入京、十四年道士上表、十五年正月望焚經して驗を取る左義長是に始まるといふ。普通に佛教東漸の紀元と爲す。

無一人不是自己。佛道の參學、かならず勤學すべし、轉疎轉遠なるべからず、これによりて光明を學得せる作家まれなるものなり。震旦國、後漢の孝明皇帝、帝諱は莊なり、廟號は顯宗皇帝とまうす、光武皇帝の第四の御子なり　孝明皇帝の御宇、永平十年戊辰のとし、摩騰迦、竺法蘭、はじめて佛教を漢國に傳來す。焚經臺のまへに道士の邪徒を降伏し、諸佛の神力をあらはす。それよりのち梁武帝の御宇、普通年中にいたりて、初祖みづから西天より南海の廣州に幸す、これ正法眼藏正傳の嫡嗣なり、釋迦牟尼佛より二十八世の法孫なり。ちなみに嵩山の少室峯少林寺に掛錫しまします、法を二祖大祖禪師に正傳せりし、これ佛祖光明の親曾なり。それよりさきは佛祖の光明を見聞せるなかりき、いはんや自己の光明をしれるあらんや。たとひその光明は頂顙より擔來して相逢すといへども、自己の眼睛に參學せず、このゆゑに光明の長短方圓をあきらめず、光明の卷舒斂放をあきらめず、光明の相逢を厭却するゆゑに、光明と光明と、轉疎轉遠なり。この疎遠たとひ光明なりとも、疎遠に罣礙せらるるなり、轉疎轉遠の臭皮袋おもはくは、佛光も自己光明も、赤白青黄にして、火光水光のごとく、珠光玉光のごとく、龍天の光のごとく、日月の光のごとくなるべしと見解す。或從知識し、或從經卷すといへども、光明の言教をきくには、螢光のごとくならんとおもふ、さらに眼睛頂顙の參學にあらず。漢より隋唐宋および而今にいたるまで、かくのごとくの流類おほきのみなり、文字の法師に習學することなかれ、禪師胡亂の說、きくべからず。いはゆる佛祖の

【此光照東方】法華序品の語。

【光明の八兩】一斤を十六兩とす故に八兩は半斤なり東方の半斤は光明の八兩にして光明の全體にあらざるをいふ。

【佛……入内供養】稽古略に云く唐憲宗元和十四年己亥正月遣二中使杜英奇一持二香華一往二鳳翔府法雲寺護國眞身塔處一請二釋迦文佛指骨一入レ内帝御二安福門一迎拜留二禁中一供養、五色光現百僚稱レ賀云云。

【韓愈文公】韓愈字は退之、鄧州南陽の人、長慶四年

光明は、盡十方界なり、盡佛盡祖なり、唯佛與佛なり、佛光なり、光佛なり、佛祖は佛祖を光明とせり、この光明を修證して、作佛し、坐佛し、證佛す。このゆゑに此光照東方萬八千佛土の道著あり、これ話頭光なり、此光は佛光なり、照東方は東方照なり、東方は彼此の俗論にあらず、法界の中心なり、拳頭の中央なり。東方を罣礙すといへども、光明の八兩なり、此土に東方あり、他土に東方あり、東方に東方ある宗旨を參學すべし。萬八千といふは、萬は半拳頭なり、半即心なり、かならずしも十千にあらず、萬萬百萬等にあらず。佛土といふは、眼睛裏なり、照東方のことばを見聞して、一條白練去を東方えひきわたらせんがごとくに、憶想參學するは、學道にあらず。盡十方界は、東方のみなり、東方を盡十方界といふ、このゆゑに盡十方界あるなり、盡十方界と開演する話頭、すなはち萬八千佛土の聞聲するなり。唐憲宗皇帝は、穆宗、宣宗、兩皇帝の帝父なり。敬宗、文宗、武宗、三皇帝の祖父なり。佛舍利を拜請して、入内供養のちなみに、夜放光明あり、皇帝大悅し、早朝の群臣、みな賀表をたてまつるにいはく、「陛下の聖德聖感なり」。ときに一臣あり、韓愈文公なり、字は退之といふ。かつて佛祖の席末に參學しきたれり。文公ひとり賀表せず、憲宗皇帝宣問す、「群臣みな賀表をたてまつる、卿なんぞ賀表せざる」。文公奏對す、「微臣かつて佛書をみるにいはく、佛光は青黃赤白にあらず、いまのはこれ龍神衞護の光明なり」。皇帝宣問す、「いかにあらんかこれ佛光なる」。文公無對なり。いまこの文公、これ在家の士俗なりといへども、丈夫の志氣あり、回天轉地の才といひぬべし、

卒、壽五十七。韓愈賀表せざりしこと禪類第一に詳し。

【佛書をみるに】梵網心地品に云く光光非ニ青黄赤白黑ニ非レ色非レ心非レ有非レ無非ニ因果一法一

【雲門上堂示衆云】

かくのごとく參學せん、學道の初心なり、不如是學は、非道なり、たとひ講經して、天華をふらすとも、いまだこの道理にいたらずばいたづらの功夫なり、たとひ十聖三賢なりとも、文公と同口の長舌を保任せんとき、發心なり修證なり、しかありといへども韓文公なほ佛書を見聞せざるところあり。いはゆる佛光非青黄赤白等の道、いかにあるべしとか學しきたれる、卿もし青黄赤白をみて、佛光にあらずと參學するちからあらばさらに佛光をみて青黄赤白とすることなかれ。憲宗皇帝、もし佛祖ならんには、かくのごとくの宣問ありぬべし。しかあれば明明の光明は百艸なり、百艸の光明、すでに根莖枝葉華果光色、いまだ與奪あらず、五道の光明あり、六道の光明あり、這裏是什麼處在なればか、說光說明する、云何忽生山河大地なるべし。長沙道の盡十方界是自己光明の道取を、審細に參學すべきなり。光明自己盡十方界を參學すべきなり。生死去來は、光明の去來なり。超凡越聖は、光明の藍朱なり。作佛作祖は光明の玄黄なり。修證はなきにあらず、光明の染汚なり、艸木牆壁、皮肉骨髓、これ光明の赤白なり。煙霞水石、鳥道玄路、これ光明の囘環なり。自己の光明を見聞するは、諸佛の證驗なり、見佛の證驗なり、盡十方界は、是自己なり。是自己は、盡十方界なり、囘避の餘地あるべからず。たとひ囘避の餘他ありとも、これ出身の活路なり。而今の髑髏七尺、すなはち盡十方界の形なり、象なり。佛道に修證する、盡十方界は、髑髏形骸皮肉骨髓なり。

雲門山大慈雲匡眞大師は、如來世尊より、三十九世の兒孫なり。法を雪峯眞覺大師に嗣

す佛衆の晩進なりといへども祖席の英雄なり。たれか雲門山に光明佛の未曾出世と道取せん。あるとき上堂示衆云、「人人盡有光明在、看時不見暗昏昏、作麼生是諸人光明在。」衆無對。自代云、「僧堂佛殿、廚庫三門。」いま大師道の人人盡有光明在は、のちに出現すべしといはず。往世にありしといはず。傍觀の現成といはず。人人自有光明在と道取するを、あきらかに聞持すべきなり。百千の雲門をあつめて同參せしめ、一口同音に道取せしむるなり。人人盡有光明在は、雲門の自構にあらず、人人の光明みづから拈光爲道なり。人人盡有光明とは、渾人自是光明在なり。光明といふは人人なり。光明を拈得して、依報正報とせり。光明盡有人人在なるべし。光光自是人人在なり。人人自有人人在なり、光光自有光光在なり、有有盡有有有在なり、盡盡有有盡盡在なり。しかあればしるべし、人人盡有の光明は現成の人人なり、光光盡有の人人なり。しばらく雲門にとふ、なんぢなにをよんでか人人とする、なにをよんでか光明とする。雲門みづからいはく、「作麼生是諸人光明在。」この問著は、疑殺話頭の光明なり。しかあれども恁麼道著すれば、人人光光なり。ときに衆無對、たとひ百千の道得ありとも、無對を拈じて道著するなり、これ佛祖正傳の、正法眼藏涅槃妙心なり。雲門自代云、「僧堂佛殿廚庫三門。」いま道取する自代は、雲門に自代するなり、大衆に自代するなり、光明に自代するなり、僧堂佛殿廚庫三門に自代するなり。しかあれども雲門なにをよんでか僧堂佛殿廚庫三門とする、大衆および人人をよんで、僧堂佛殿廚庫三門とすべからず。いくばくの僧堂佛殿廚庫三門か

雲門錄重代、雲竇頌古第八十八則に出す。

【四七、二三】四七廿八代は西天に於ける祖師の數、二三は六代東土に於ける達磨大師より六祖大鑑禪師までの數なり。

【雪峰示衆】傳燈

ある、雲門なりとやせん、七佛なりとやせん、四七なりとやせん、二三なりとやせん、拳頭なりとやせん、鼻孔なりとやせん、いはくの僧堂佛殿廚庫三門、たとひいづれの佛祖なりとも、人人をまぬかれざるものなり。このゆゑに人人にあらず、しかありしよりこのかた、有佛殿の無佛なるあり、無佛殿の有佛なるあり、有光佛あり、無光佛あり、無佛光あり、有佛光あり。

雪峯山眞覺大師、示衆云、『僧堂前與二諸人一相見了也。』これすなはち雪峯の通身是眼睛のときなり。雪峯の雪峯を覰見する時節なり、僧堂の僧堂と相見するなり。『保福擧問二鵝湖一、僧堂前且置、什麼處望州亭、烏石嶺相見、鵝湖驟步歸二方丈一、保福便入二僧堂一。』いま歸方丈入僧堂、これ話頭出身なり、相見底の道理なり、相見了也僧堂なり。

地藏院眞應大師云、『典座入二庫堂一。』この話頭は、七佛已前事なり。

仁治三年壬寅夏六月二日夜三更四點示二衆于觀音導利興聖寶林寺一于時梅雨霖霖簷頭滴滴

作麼生是光明在大衆、未レ免雲門道覰破

正法眼藏光明　畢

卷十九、保福章に載す。小異あり。

【保福】保福從展、雪峯の嗣。漳州の刺史王公保福禪院を營み迎へて請す。接化利物衆常に七百を下らずといふ。唐の天成三年三月寂。

【鵝湖】鵝湖の大義、馬祖の嗣。嘗て唐の憲宗の詔を拜して入內、麟德殿に諸法師と宗要を論議し衆をして杜せしむ。元和十三年歸寂。

【地藏院眞應大師】地藏桂琛、眞應大師は謚號なり。玄沙師備の嗣、閩の牧王公地藏院を建て請す。後遷つて漳州の羅漢院に止まり大いに玄要を說く。學徒輻輳す。淸泰二年寂、壽六十二。

【仁治三年】祖師四十三歲、興聖寺に於ける示衆。

【身心學道】三業純密にして學道に趣向するなり、身心は即ち三業に依て標榜す、三業純眞にして身も菩提、語も菩提、意も菩提なるとき學道と身心と二あること無し、身心即學道にして三業即菩提なり、故に身心を擧措して學道するあり、放下して學道するありといふ。

【南嶽大慧】修證不無の語、前に屢出づ。

【闡提】一闡提伽又は一闡底柯、略して闡提といふ、梵音(Icchantika)斷善信不具と譯す、本來解脫の因を缺き到底成佛する能はざる有情をいふ。

【質多心等】質多(Citta)は分別慮知の心、汗栗駄、矣栗駄は梵音(Hṛdaya)にして有情非情に積集して肉團の心なり、若し分つて

正法眼藏身心學道

佛道は、不道を擬するに不得なり。不學を擬するに轉遠なり。南嶽大慧禪師のいはく、修證はなきにあらず、染汙することえじ。佛道を學せざれば、すなはち外道闡提等の道に墮在す。このゆゑに、前佛後佛、かならず佛道を修行するなり。佛道を學習するに、しばらくふたつあり、いはゆる心をもて學し、身をもて學するなり。心をもて學するとは、あらゆる諸心をもて學するなり、その諸心といふは、質多心、汗栗駄心、矣栗駄心等なり、また感應道交して、菩提心をおこしてのち、佛祖の大道に歸依し、發菩提心の行李を習學するなり。たとひいまだ眞實の菩提心おこらずといふとも、さきに菩提心をおこせりし佛祖の法をならふべし、これ發菩提心なり、赤心片片なり、古佛心なり、平常心なり、三界一心なり、これらの心を放下して學道するあり、拈擧して學道するあり、このとき、思量して學道す、不思量して學道す、あるひは金襴衣を正傳し、金襴衣を稟受す。あるひは汝得吾髓あり、三拜依位而立あり、碓米傳衣する以心學心あり、剃髮染衣、すなはち回心なり、明心なり。踰城し入山する、出一心入一心なり。山の所入なる思量箇不思量底なり、世の所捨なる非思量なり。これを眼睛に團しきたること二三斛、これを業識に弄しきたること千萬端なり、かくのごとく學道するに、有功に賞おのづからきたり、有賞に功いまだ

之を云へは前者は草木心後者は積集精要心と譯す。質多は普通に心と名くるもの、八識に通ずる心なり、汗栗駄、牟栗駄は有情非情に通ずれども有情に於いて云へば心識にあたる。【佛心道交】衆生の衆と佛の應と互に通じて融合すること、佛心よく衆生の心中に入りて衆生よく之を感じて能化所化に互に通じて交るなり。「牛頭法融禪師の心銘に、寂靜虚明菩提影現、心水常清感身在、應機現由感、謂之道交」又華嚴離世間品に菩薩清涼月遊於畢竟空云云と云ふ皆同じ。【四大河】印度に於ける四大河、殑伽（Gangā）信度、（Sindhu）縛芻（Vakṣu）徙多（Sītā）【北倶盧洲】須彌四洲の中北方に位

いたらざれども、ひそかに佛祖の鼻孔をかりて出氣せしめ、驢馬の脚蹄を拈じて印證せしむる、すなはち萬古の榜樣なり。しばらく山河大地、日月星辰これ心なり、この正當恁麼時、いかなる保任か現前する。山河大地といふは、山河はたとへば山水なり、大地はこのところのみにあらず、山もおほかるべし、大須彌小須彌あり、横に處せるあり、竪に處せるあり、三千界あり、無量國あり、色にかかるあり、空にかかるあり。河もさらにおほかるべし、天河あり、地河あり、四大河あり、無熱池あり、北倶盧洲には四阿耨達池あり、海あり、池あり、地はかならずしも土にあらず、土かならずしも地にあらず、土地もあるべし、心地もあるべし、寶地もあるべし、萬般なりといふとも地なかるべからず、空を地とせる世界もあるべきなり。日月星辰は、人天の所見不同あるべし、諸類の所見おなじからず。恁麼なるがゆゑに、一心の所見、これ一齊なるなり、これらすでに心なり。内なりとやせん、外なりとやせん、來なりとやせん、去なりとやせん。生時は一點を増するか、増せざるか、死には一塵をさるか、さらざるか。この生死、および生死の見、いづれのところにかおかんとする。向來はただこれ心の一念二念なり、一念二念は、一山河大地なり、二山河大地なり、山河大地等、これ有無にあらざれば、大小にあらず、得不得にあらず、識不識にあらず、通不通にあらず、悟不悟に變ぜず、かくのごとくの心、みづから學道することを慣習するを、心學道といふと決定信受すべし。この信受、これ大小有無にあらず、いまの『知家非家、捨家出家』の學道、それ大小の量にあらず、遠近の量にあら

ず、鼻祖鼻末にあまる、向上向下にあまる。展事あり七尺八尺なり、投機あり爲自爲他なり、恁麼なるすなはち學道なり、學道は恁麼なるがゆゑに、牆壁瓦礫これ心なり、さらに三界唯心にあらず、法界唯心にあらず、牆壁瓦礫あり。咸通年前につくり、咸通年後にやぶる、拖泥滯水なり、無繩自縛なり、玉をひくちからあり、水にいる能あり、とくる日あり、くだくる時あり、極微にきはまるときあり、露柱と同參せず、燈籠と交肩せず、かくのごとくなるゆゑに赤脚走して學道するなり、たれか著眼看せん、翻巾斗して學道するなり、おのおの隨他去あり。このとき、壁落これ十方を學せしむ、無門これ四面を學せしむ、發菩提心は、あるひは生死にしてこれをうることあり、あるひは涅槃にしてこれをうることあり、あるひは生死涅槃のほかにしてこれをうることあり、ところをまつにあらざれども發心のところにさへられざるなり、境發にあらず智發にあらず。菩提心發なり發菩提心なり、發菩提心は、有にあらず無にあらず、善にあらず惡にあらず、無記にあらず、報地によりて緣起するにあらず、天有情はさだめてうべからざるにあらず、ただまさに時節とともに發菩提心するなり、依にかかはれざるがゆゑに、發菩提心の正當恁麼時には、法界ことごとく發菩提心なり、依を轉ずるに相似なりといへども、依にしらるるにあらず、共出一隻手なり、自出一隻手なり、異類中行なり、地獄、餓鬼、畜生、修羅等のなかにしても發菩提心するなり、赤心片片といふは、片片なるはみな赤心なり、一片兩片にあらず、片片なるなり。荷葉團團團似レ鏡、菱角尖尖尖似レ錐、かがみににたりといふとも

する洲、（梵音鬱怛羅越樓（Uttarakuru）北の勝處、勝生と譯す、壽一千歲、中夭あることなく、快樂極りなきを以て名く。

【四河耨達池】阿耨達池（Anavatapta）無熱惱、清涼と譯す、四大河の合する大池、長阿含に、贍單越上四面有四河耨達池、各縱廣一百由旬其水澄清無レ有垢穢一と。

【出家非家】僧祇律一に云く、佛言舍利弗當來有正法、善男子於佛法中、信家非レ家捨レ家出家云々と。

【鼻祖鼻末】始終といふこと。

【咸通年前後】會元、疎山章上堂云、病僧咸通年前會得法身邊事、咸通年後會得法身向上事と。咸通は唐の懿宗の年號、且く之を假り用ふ。

【極微】物質を最

後不可分の點まで分割したる分子なり。

【荷葉團團】夾山善會の語。

【大證國師】南陽の慧忠、六祖の嗣。

【赤肉團】色塵集に云く、赤肉團は心臟也と、名義集には四種心、心とは一は肉團心、心は火に屬す、照亮を以て用と爲す、其色赤しと。

【八戒】一不殺生、二不偸盜、三不婬、四不妄語、五不飲酒、六不坐高座大床、七不著華鬘瓔珞、八不習歌舞戲樂。

【百丈若執本清淨】古尊宿錄第一百丈章の文。

片片なり、錐にたりといふとも片片なり。古佛心といふは、むかし僧ありて大證國師にとふ、「いかにあらんかこれ古佛心。」ときに國師いはく、「牆壁瓦礫。」しかあればしるべし古佛心は、牆壁瓦礫にあらず、牆壁瓦礫を古佛心といふにあらず、古佛心、それかくのごとく學するなり、平常心といふは、此界他界といはず、平常心なり。昔日はこのところよりさり、今日はこのところよりきたる、さるときは漫天さり、きたるときは盡地きたる、これ平常心なり、平常心この屋裡に開閉す、千門萬戸一時開閉なるゆゑに平常なり、いまこの蓋天蓋地は、おぼえざることばのごとし、噴地の一聲のごとし。語等なり、心等なり、法等なり、壽行生滅の刹那に生滅するあれども、最後身よりさきはかつてしらず、しらざれども、發心すればかならず菩提の道にすすむなり、すでにこのところあり、さらにあやしむべきにあらず、すでにあやしむことあり、すなはち平常なり。身學道といふは、身にて學道するなり、赤肉團の學道なり、身は學道よりきたり、學道よりきたれるは、ともに身なり。盡十方界、是箇眞實人體なり、生死去來、眞實人體なり、この身體をめぐらして、十惡をはなれ八戒をたもち、三寶に歸依して、捨家出家する、眞實の學道なり、このゆゑに眞實人體といふ。後學かならず自然見の外道に同ずることなかれ。百丈大智禪師のいはく、「若執二本清淨本解脫自是佛、自是禪道解一者、即屬二自然外道一。」これら閑家の破具にあらず、學道の積功累德なり、跨跳して玲瓏八面なり、脫落して如藤倚樹なり、或現此身得度而爲說法なり、或現他身得度而爲說法なり、或不現此身得度而爲說法なり、或不現

【揚聲止響】傳燈錄向居士章に云く影を弄して形を勞す形は影の本たることを識らず、聲を揚げて響を止む聲は是れ響の根なることを知らずと。

他身得度而爲說法なり、乃至不爲說法なり、しかあるに棄身するところに揚聲止響することあり、捨命するところに斷臂得髓することあり。たとひ威音王よりさきに、發足學道すれども、なほこれみづからが兒孫として增長するなり、盡十方世界といふは、十方面ともに盡界なり、東西南北四維上下を、十方といふ。かの表裏縱橫の究盡なる時節を思量すべし、思量するといふは、人體はたとひ自他に罣礙せらるといふとも、盡十方なりと諦觀し決定するなり。これ未曾聞をきくなり、方等なるゆゑに、界等なるゆゑに、人體は四大五蘊なり、大塵ともに凡夫の究盡するところにあらず、聖者の參究するところなり。また一塵に十方を諦觀すべし、十方は一塵に囊括するにあらず、あるひは一塵に僧堂佛殿を建立し、あるひは僧堂佛殿に、盡界を建立せり、これより建立せり、建立これよりなれり。恁麼の道理、すなはち盡十方界眞實人體なり、自然天然の邪見をならふべからず、界量にあらざれば廣狹にあらず、盡十方界は、八萬四千の說法蘊なり、八萬四千の三昧なり、八萬四千の陀羅尼なり、八萬四千の說法蘊、これ轉法輪なるがゆゑに、法輪の轉處は、互界なり、互時なり、方域なきにあらず、眞實人體なり。いまのなんぢいまのわれ、盡十方界眞實人體なる人なり、これらを蹉過することなく學道するなり。たとひ三大阿僧祇劫、十三大阿僧祇劫、無量阿僧祇劫までも、捨身受身しもてゆく、かならず學道の時節なる進步退步學道なり、禮拜問訊する、すなはち動止威儀なり、枯木を畫圖し、死灰を磨塼す、しばらくの間斷あらず、曆日は短促なりといへども、學道は幽遠なり、捨家出家せる風流、た

【二種七種】生死の種類、二種は一に分斷生死、二に變易生死、分は分限、段は形段、即ち六道の衆生その業力に隨つて感ずる所の果報、身に長短あり命に壽夭ありて皆生死に流轉す故に分段生死といふ。變易生死とは初位を門とし、後位を果と爲す、又後位を門と爲し、後後位を果と爲す、其因移り果易るを以ての故に變易と名く。七種生死は一分段、二變易、三流入、四反出、五因緣、六有後、七無後是なり。

【圜悟生也】圜悟實錄卷十六拈古の語。生也全機現、死也全機現、不道不道、箇中無背面、直下便承當、不滯一條線、通寒大虛空、赤心常片片と。

【非想非非想】無

とひ蕭然なりとも、樵夫に混同することなかれ、活計たとひ競頭すとも、佃戸に一齊なるにあらず、迷悟善惡の論に比することなかれ、邪正眞僞の際にとどむることなかれ。生死去來眞實人體といふは、いはゆる生死は凡夫の流轉なりといへども、大聖の所脫なり、超凡越聖せんこれを眞實體とするのみにあらず、これに二種七種のしなあれども、究盡するに、面面みな生死なるゆゑに、恐怖すべきにあらず。ゆゑいかんとなれば、いまだ生をすてざれどもいますでに死をみる、いまだ死をすてざれどもいますでに生をみる、生は死を罣礙するにあらず、死は生を罣礙するにあらず、生死ともに凡夫のしるところにあらず。生は栢樹子のごとし、死は鐵漢のごとし、栢樹はたとひ栢樹に礙せらるとも、生はいまだ死に礙せられざるがゆゑに學道なり。生は一枚にあらず、死は兩匹にあらず、死の生に相對するなし、生の死に相待するなし。圜悟禪師曰、「生也全機現、死也全機現、逼塞太虛空、赤心常片片」。この道著、しづかに功夫點撿すべし。圜悟禪師かつて恁麼いふといへども、なほいまだ生死の全機にあまれることをしらず、去來を參學するに、去に生死あり、來に生死あり、生に去來あり、死に去來あり、去來は盡十方界を兩翼三翼として飛去飛來し、盡十方界を三足五足として、進步退步するなり。生死を頭尾として盡十方界眞實人體は、よく翻身回腦するなり、翻身回腦するに、如一錢大なり、似微塵裡なり、平坦坦地、それ壁立千仞なり、壁立千仞處、それ平坦坦なり、このゆゑに南洲北洲の面目あり、これを撿して學道す、非想非非想の骨髓あり、これを抗して學道するのみなり。

爾時仁治三年壬寅重陽日在于寶林寺示衆

正法眼藏身心學道　畢

正法眼藏夢中說夢

諸佛諸祖、出興の道、それ朕兆已前なるゆゑに、舊窠の所論にあらず、これによりて佛祖邊佛向上等の功德あり、時節にかかはれざるがゆゑに、壽者命者なほ長遠にあらず、頓速にあらず、はるかに凡界の測度にあらざるべし。法輪轉また朕兆已前の規矩なり、このゆゑに、大功不賞千古榜樣なり。これを夢中說夢す、證中見證なるがゆゑに、夢中說夢なり、この夢中說夢處、これ佛祖國なり、佛祖會なり、佛國佛會、祖道祖席は、證上而證、夢中說夢なり。この道取說取にあひながら佛會にあらずとすべからず、これ佛轉法輪なり。この法輪十方八面なるがゆゑに、大海須彌國土諸法現成せり、これすなはち諸夢已前の夢中說夢なり、偏界の偏露は夢なり、この夢すなはち明明なる百艸なり、擬著せんとする正當なり、紛紜なり正當なり。このとき夢艸中艸說艸等なり、これを參學するに根莖枝葉華果光色、ともに大夢なり。夢然たりとあやまるべからず。しかあれば佛道をならはざらんと擬する人は、この夢中說夢にあひながら、いたづらにあるまじき夢艸のあるにもあらぬをあらしむるをいふならしとおもひ、まどひにまどひをかさぬるがごとくにあらんとおも

色界の第四天の名

【仁治三年】祖師四十三歳、興聖寺に於ける示衆。

【重陽日】九月九日。

【夢中說夢】佛教、八萬四千の法門、祖師一千七百の公案、悉く是れ夢中說夢なり、夢中の夢、法論なり、興見の不能語なり、無生にして一切諸法又無性なり、無自性に實して是生なり、法華に無諸法實相といひ般若に諸法皆空といふ皆是なり。

【大功不賞】老子の語

【大夢】莊子齊物論に「且有大覺而後知此其大夢」と又李白の詩に「處世若大夢」の語あり。

【夢然】夢音茫なり不明の貌、茫然なり

【乘此寶乘】法華譬喩品の語。

【逞風流】淨瓶清涼錄に放行把住逞風流、總是怨家笑點頭の句あり。

へり。しかにはあらず、たとひ迷中又迷といふとも、まどひのうへのまどひを道取せられゆく、道取の通霄の路、まさに功夫參學すべし。夢中說夢は諸佛なり、諸佛は風雨水火なり。この名號を受持し、かの名號を受持す。夢中說夢は古佛なり、乘此寶乘、直至道場なり。直至道場は、乘此寶乘中なり、夢曲夢直把定放行逞風流なり、正當恁麼の法輪、あるひは大法輪界を轉ずること、無量無邊なり、あるひは一微塵にも轉ず、塵中に消息不休なり。この道理、いづれの恁麼事を轉法するにも、怨家笑點頭なり、いづれの處所も、恁麼事を轉法するゆゑに、轉風流なり、このゆゑに盡地みな蓋地の無端なる法輪なり。徧界みな不昧の因果なり、諸佛の無上なり、しるべし諸佛化道、および說法蘊、ともに無端に建化し、無端に住位せり、去來の端をもとむることなかれ、盡從這裏去なり、盡從這裏來なり、このゆゑに葛藤をうゑて葛藤をまつふ、無上菩提の性相なり、菩提の無端なるがごとく、衆生無端なり、無上なり。籠羅無端なりといへども、解脫無端なり、公案現成は放你三十棒、これ見成の夢中說夢なり。しかあればすなはち無根樹、不陰陽地喚不響谷、すなはち、見成の夢中說夢なり、これ人天の境界にあらず、凡夫の測度にあらず、夢の菩提なるたれか疑著せん。疑著の所管にあらざるがゆゑに、認著するたれかあらん、認著の所轉にあらざるがゆゑに、この無上菩提、これ無上菩提なるがゆゑに、夢これを夢といふ。中夢あり夢說あり說夢あり夢中あるなり、夢中にあらざれば說夢なし、說夢にあらざれば夢中なし、說夢にあらざれば諸佛なし、夢中にあらざれば諸佛出世し轉妙法輪することな

【賣金須是買金人】續傳燈十九、西京白馬の江禪師の語。

【玄之玄】老子の字。

【妙之妙】止觀の語。

【百千日月】顯揚偏に云く「一日月之所ニ照臨一一須彌二鐵圍七金八海四洲爲ニ一世界一、乃至百千世界百千日月」

【一切諸佛及諸佛】金剛般若經の文。

し、その法輪は、唯佛與佛なり、夢中說夢なり、ただまさに夢中說夢に、無上菩提衆の諸佛諸祖あるのみなり、さらに法身向上事、すなはち夢中說夢なり、ここに唯佛與佛の奉覲あり、頭目髓腦身肉手足を愛惜することあたはず、愛惜せられざるがゆゑに、賣金須是買金人なるを、玄之玄といひ、妙之妙といひ、證之證といひ、頭上安頭ともいふなり。これすなはち佛祖の行履なり、これを參學するに、頭をいふには人の頂上とおもふのみなり、さらに毘盧の頂上とおもはず、いはんや明明百艸頭とおもはんや、頭聻をしらず、むかしより頭上安頭の一句、つたはれきたれり。愚人これをききて、剩法をいましむる言語とおもふ、あるべからずといはんとては、いかでか頭上安頭することあらんといふを、よのつねのならひとせり。まことにそれあやまらざるか。說と現成する、凡聖ともにもちゐるに相違あらず、このゆゑに凡聖ともに夢中說夢なるきのふにても、生ずべし、今日にても長ずべし、しるべしきのふの夢中說夢は、夢中說夢を、夢中說夢と認じきたる、如今の夢中說夢は、夢中說夢を、夢中說夢と參ずる、すなはちこれ値佛の慶快なり。かなしむべし佛祖明明百艸の夢あきらかなること、百千の日月よりも、あきらかなりといへども、生盲のみざることをあはれむべし。いはゆる頭上安頭といふ、その頭はすなはち百艸頭なり、千種頭なり萬般頭なり、通身頭なり、全界不曾藏頭なり、盡十方界頭なり、一句合頭なり、百尺竿頭なり。安も上も頭頭なると參ずべし究すべし。しかあればすなはち一切諸佛及諸佛阿耨多羅三藐三菩提、皆從此經出も、頭上安頭しきたれの夢中說夢なり、

【我今爲汝夢中】普燈の瀑泉集に云く有時云三世諸佛說ㇾ夢、六代祖師說ㇾ夢、翠峰今日說ㇾ夢、還有二夢見底一麼云云と。

此經すなはち夢中說夢するに、阿耨菩提の諸佛を出興せしむ。菩提の諸佛、さらに此經をとく、さだまれる夢中說夢なり、夢因くらからざれば、夢果不昧なり、ただまさに一權千當萬當なり、千權萬權は、一當半當なり、かくのごとくなるによりて恁麼事なる夢中說夢なり、恁麼人なり夢中說夢あり、不恁麼事なる夢中說夢あり、不恁麼人なる夢中說夢ありとしるべし、しられきたる道理顯赫なり。いはゆるひめもすの夢中說夢、すなはち夢中說夢なり。このゆゑに古佛いはく、「我今爲汝夢中說夢、三世諸佛也夢中說夢、六代祖師也夢中說夢。」この道あきらめ學すべし。いはゆる拈華瞬目、すなはち夢中說夢なり、禮拜得髓、すなはち夢中說夢なり。おほよそ道得一句、不會不識、夢中說夢なり。千手千眼用許多作麼なるがゆゑに、見色見聲、聞色聞聲の功德具足せり現身なる夢中說夢あり。說夢說法蘊なる夢中說夢あり、把定放行なる夢中說夢なり、直指は說夢なり、的當は說夢なり。把定しても放行しても、平常の秤子を學すべし、學得するにかならず目機銖兩あらはれて夢中說夢しいづるなり。銖兩を論ぜず平にいたらざれば、平の見成なし、平をうるに平をみるなり、すでに平をうるところ、物によらず、秤によらず、機によらず、空にかかれりといへども、平をえざれば、平をみずと參究すべし。みづから空にかかれるがごとく、物を接取して空に遊化せしむる夢中說夢なり、空裏に平を現身す、平は秤子の大道なり、空をかけ物をかく、たとひ空なりとも、たとひ色なりとも、平にあふ夢中說夢なり、解脫の夢中說夢にあらずといふことなし。夢これ盡大地なり、盡大地は平なり、このゆゑに回頭轉腦の

【釋迦牟尼佛言】
法華安樂行品ノ偈

無窮盡すなはち夢裏證夢する信受奉行なり。

釋迦牟尼佛言、「諸佛身金色、百福相莊嚴、聞レ法爲レ人說、常有二是好夢一、又夢作二國王一、捨二宮殿眷屬、及上妙五欲一、行二詣於道場一、在二菩提樹下一、而處二師子座一、求レ道過二七日一、得二諸佛之智一、成二無上道一已、起而轉二法輪一、爲二四衆一說レ法、經二千萬億劫一、說二無漏妙法一、度二無量衆生一、後當入二涅槃一、如二煙盡燈滅一、若後惡世中、說二是第一法一、是人得二大利一、如二上諸功德一。」而今の佛言を參學して、諸佛の佛會を究盡すべし、これ譬喩にあらず、諸佛の妙法は、ただ唯佛與佛なるゆゑに、夢覺の諸法、ともに實相なり、覺中の發心修行菩提涅槃あり、夢裏の發心修行菩提涅槃あり、夢覺おのおの實相なり、大小せず、勝劣せず、しかあるを又夢作國王等の前後の道著を見聞する古今おもはくは、說是第一法のちからによりて、夜夢のかくのごとくなると錯會せり、かくのごとく會取するは、いまだ佛說を曉了せざるなり、夢覺もとより如一なり、實相なり、佛法はたとひ譬喩なりとも實相なるべし、すでに譬喩にあらず、夢作これ佛法の眞實なり、釋迦牟尼佛および一切の諸佛諸祖みな夢中に發心修行し、成等正覺するなり。しかあるゆゑに而今の娑婆世界の、一化の佛道すなはち、夢作なり、七日といふは、得佛智の量なり、轉法輪、度衆生すでに、經千萬億劫といふ、夢中の消息たどるべからず。諸佛身金色、百福相莊嚴、聞法爲人說、常有是好夢といふ、あきらかにしりぬ好夢は諸佛なりと證明せらるるなり。常有の如來道あり、百年の夢のみにあらず、爲人說は現身なり、聞法は眼處聞聲なり、心處聞聲なり、

【仁治三年】祖齢四十三歳、興聖寺に於ける示衆。

【道得】道得は、言得なり説法なり、言端語端、行住坐臥、運水搬柴、開單展鉢、これ七縦八横の道得なり。諸佛諸祖は道得也といふ、道得を離れて諸佛諸祖なきを知るべし。

舊巣處聞聲なり、空劫已前聞聲なり。諸佛身金色、百福相莊嚴といふ。好夢は諸佛身なりといふこと、直至如今更不レ疑なり、覺中に佛化やまざる道理ありといへども、佛祖現成の道理かならず夢作夢中なり、莫謗佛法の參學すべし、莫謗法の參學するとき、而今の如來道たちまちに現成するなり。

爾時仁治三年壬寅秋九月二十一日在二雍州宇治郡觀音導利興聖寶林寺一示衆

正法眼藏夢中說夢　畢

正法眼藏道得

諸佛諸祖は道得なり、このゆゑに佛祖の佛祖を選するには、かならず道得也未と問取するなり、この問取、こころにても問取す、身にても問取す、拄杖拂子にても問取す、露柱燈籠にても問取するなり。佛祖にあらざれば問取なし、道得なし、そのところなきがゆゑに、その道得は、他人にしたがひてうるにあらず、わがちからの能にあらず、ただまさに佛祖の究辨あれば、佛祖の道得あるなり。かの道得のなかに、むかしも修行し證究す、いまも功夫し辨道す、佛祖の佛祖を功夫して、佛祖の道得を辨肯するとき、この道得おのづから三年八年三十年四十年の功夫となりて、盡力道得するなり（裏書云三十年二十年は道得のなれる年月なりこの年月ちからをあはせて道得せしむるなり。）このときはそのなん十年のあひだも道得の間隙なかりけるなり。しか

あればすなはち證究のときの見得、それまことなるべし。かのときの見得をまこととするがゆゑに、いまの道得なることは、不疑なり、ゆゑにいまの道得かのときの見得をそなへたるなり、かのときの見得いまの道得をそなへたり。このゆゑにいま道得あり、いま見得あり、いまの道得と、かのときの見得と一條なり、萬里なり。いまの功夫、すなはち道得と見得とに功夫せられゆくなり、この功夫の把定の月ふかく年おほくかさなりて、さらに從來の年月の功夫を脱落するなり、脱落せんとするとき、皮肉骨髓おなじく脱落を辨肯す。國土山河、ともに脱落を辨肯するなり。このとき脱落を究竟の寶所として、いたらんと擬しゆくところに、この擬到はすなはち現出にてあるゆゑに、正當脱落のとき、またざるに現成する道得あり。心のちからにあらず身のちからにあらずといへども、おのづから道得あり、すでに道得せらるるに、めづらしくあやしくおぼえざるなり。しかあれどもこの道得を道得するとき、不道得を不道するなり、道得に道得すると認得せるも、いまだ不道得底を不道得底と證究せざるは、なほ佛祖の面目にあらず、佛祖の骨髓にあらず。しかあれば三拜依位而立の道得底、いかにしてか皮肉骨髓のやからの道得底とひとしからん、皮肉骨髓のやからの道得底、さらに三拜依位而立の道得に接するにあらず、そなはれるにあらず、いまわれと他と異類中行と相見するは、いまかれと他と異類中行と相見するなり。われに道得底あり、不道得底あり、かれに道得底あり、不道得底あり、道底に自他あり、不道得不底に自他あり。

【趙州眞際大師】趙州從諗禪師語の既に行持卷に出づ

趙州眞際大師示衆云、『儞若一生不レ離ニ叢林一、兀坐不道、十年五載、無ニ人喚ニ作儞啞漢一、已後諸佛也不レ及レ儞哉。』しかあれば十年五載の在叢林、しばしば霜華を經歴するに、一生不離叢林の功夫辨道をおもふに、坐斷せし兀坐は、いくばくの道得なり、不離叢林の經行坐臥、そこばくの無人喚作儞啞漢なるべし。一生は所從來をしらずといへども、不離叢林ならしむれば不離叢林なり、一生と叢林と、いかなる通霄路かある。ただ兀坐を辨肯すべし、不道をいとふことなかれ、不道は道得の頭正尾正なり。兀坐は一生二生なり、一時二時にあらず、兀坐して不道なる十年五載あれば、諸佛も儞をないがしろにせんことあるべからず、まことにこの兀坐不道は、佛眼也覰不見なり、佛力也牽不及なり、諸佛也不ニ奈儞何一なるがゆゑに。趙州のいふところは、兀坐不道の道取は、諸佛もこれを啞漢といふにおよばず、不啞漢といふにおよばず、しかあれば一生不離叢林は、一生不離道得なり、兀坐不道十年五載は、道得十年五載なり、一生不離不道得なり、道不得十年五載なり、坐斷百千諸佛なり、百千諸佛坐斷儞なり。しかあればすなはち佛祖の道得底は、一生不離叢林なり、たとひ啞漢なりとも道得底あるべし、啞漢は道得なかるべしと學することなかれ、道得あるものかならずしも啞漢にあらざるにあらず、啞漢また道得あるなり、啞聲きこゆべし、啞語きくべし、啞にあらずばいかでか啞と相見せん、いかでか啞と相談せん。すでにこれ啞漢なり、作麼生相見、作麼生相談。かくのごとく參學して、啞漢を辨究すべし。

雪峯の眞覺大師の會に、一僧ありて山のほとりにゆきて、艸をむすびて菴を卓す、とし

【道得不剃汝頭】傳燈、南泉章に出づ。

【七聖】法數二十九に小乘七種聖、聖は正なり、凡性を捨てて正性に入る故に名けて聖と爲すと。

【十聖】十地は三賢に對する時之を十聖といふ。法數に十地とは謂く菩薩所證の地位、一切の佛法此に依て發生す、而して地位に淺深あるが故に始め歡喜より法雲に至る分つて十と爲すと云云。

つゝりぬれどもかみをそらざりけり、菴裏の活計たれかしらん、山中の消息悄然なり。みづから一柄の木杓をつくりて谿のほとりにゆきて水をくみてのむ、まことにこれ飲谿のたぐひなるべし。かくて日往月來するほどに、家風ひそかに漏泄せりけるによりて、あるとき僧きたりて菴主にとふ、「いかにあらんかこれ祖師西來意。」菴主いはく、「谿深杓柄長。」といふ。僧おくことゝあらず、禮拜せず、請益せず、山にのぼりて雪峯に擧似す。雪峯ちなみに擧をきゝていはく、「也甚奇怪、雖然如是、老僧自去勘過始得。」雪峯のいふこゝろは、よさはすなはちあやしきまでによし、しかあれども老僧みづからゆきてかんがへみるべしとなり。かくてあるにある日、雪峯たちまちに侍者に剃刀をもたせて率しゆく、直に菴にいたりぬ。わづかに菴主をみるにすなはちとふ、「道得ならばなんぢが頭をそらじ。」この問こゝろうべし、道得不剃汝頭とは、不剃頭は道得なりときこゆ、いかん。この道得もし道得ならんには、畢竟して不剃ならん、この道得きくちからありてきくべし、きくべきちからあるもののために開演すべし。」ときに菴主かしらをあらひて雪峯のまへにきたれり。これも道得にてきたれるか、不道得にてきたれるか、雪峯すなはち菴主のかみをそる。この一段の因緣まことに優曇の一現のごとし、あひがたきのみにあらず、ききがたかるべし。七聖十聖の境界にあらず、三賢七賢の觀見にあらず、經師論師のやから、神通變化のやから、いかにもはかるべからざるなり。佛出世にあふといふはかくのごとくの因緣をきくをいふなり。しばらく雪峯のいふ道得不剃汝頭、いかにあるべきぞ、未道得

【三賢】三賢は十住と十行と十回向との位にある者をいふ。

【七賢】七賢又は七方便と名く、一に五停心、二に別想念處、三に總想念處、四に煖位、五に頂位、六に忍位、七に世第一法位。

【仁治三年】祖師四十三歳、興聖寺に於ける示衆。

の人これをききて、ちからあらんは驚疑すべし、ちからあらざらんは茫然ならん。佛と問著せず、道といはず、三昧と問著せず、陀羅尼といはず、かくのごとく問著する、問に相似なりといへども道に相似なり、審細に參學すべきなり。しかあるに菴主まことあるによりて道得に助發せられて、茫然ならざるなり、家風かくれず洗頭してきたる。これ佛自智慧、不得共邊の法度なり。現身なるべし、說法なるべし、度生なるべし、洗頭來なるべし。ときに雪峯もしその人にあらずば剃刀を放下して呵呵大笑せん。しかあれども雪峯そのちからありその人なるによりて、すなはち菴主のかみをそる。まことにこれ雪峯と菴主と唯佛與佛にあらずよりは、かくのごとくならじ。一佛二佛にあらずよりは、かくのごとくならじ、龍と龍とにあらずよりは、かくのごとくならじ。驪珠は驪龍のをしむところ擲偬なしといへども、おのづから解收の人の手にいるなり。しるべし雪峯は菴主を勘過す。庵主は雪峯をみる。道得不道得かみをそられかみをそる、しかあればすなはち道得の良友は期せざるにとぶらふみちあり、道不得のとも、またざれども知己のところありき、知己の參學あれば、道得の現成あるなり。

仁治三年壬寅十月五日書于觀音導利興聖寶林寺示衆

正法眼藏道得　畢

【畫餅】畫餅は猶し空華のごとし。一切の諸法猶し畫餅の如く、十界の依正恰も空華に似たり、一も取るべきなく一も捨つべき無し、有の如く無の如く非有の如く非空の如し、又有にあらず空にあらず非爲にあらず非空に非ざる道理を悟了すべし。

【畫餅不充飢】傳燈卷十一香嚴智閑章に乃自歎曰畫餅不レ可レ充レ飢、於レ是盡焚レ之と。

正法眼藏畫餅

諸佛これ證なるゆゑに、諸佛これ證なり。しかあれども一性にあらず一心にあらず、一性にあらず一心にあらざれども、證のとき證證さまたげず現成するなり、現成のとき現現あひ接することなく、現成すべし。これ祖宗の端的たり、一異の測度を擧して參學の力量とすることなかれ。このゆゑにいはく、『一法纔通萬法通』といふところの一法通は、一法の從來せる面目を奪却するにあらず、一法を相對せしむるにあらず、一法を無對ならしむるにあらず。無對ならしむるはこれ相礙なり、通をして通の礙なからしむるに、一通これ萬通なり、一通は一法なり、一法通これ萬法通なり。

古佛言、『畫餅不レ充レ飢。』この道を參學する雲衲霞袂、この十方よりきたれる、菩薩聲聞の名位をひとつにせず、かの十方よりきたれる、神頭鬼面の皮肉あつくうすし、これ古佛今佛の學道なりといへども、樹下草庵の活計なり。このゆゑに家業を正傳するに、あるひはいはく、『經論の學業は、眞智熏修せしめざるゆゑにしかのごとくいふ』といひ、あるひは、『三乘一乘の教學さらに三菩提のみちにあらずといはんとして、恁麼いふなり』と見解せり。おほよそ假立なる法は、眞に用不著なるをいはんとして、恁麼の道取ありと見解する、おほきにあやまるなり。祖宗の功業を正傳せず、佛祖の道取にくらし、この一言を

【丹雘】善丹なり雘は彩色のいろ。繪の具のこと。

あきらめざらん、たれか餘餅の道取を參究せりと聽許せん。『畫餅不能充飢。』と道取するは、たとへば『諸惡莫作、衆善奉行。』と道取するがごとし。『是什麼物恁麼來。』と道取するがごとし、『吾常於是切。』といふがごとし、しばらくかくのごとく參學すべし。『畫餅』といふ道取、かつて見來せるともがらすくなし、知及せるものまたくあらず、なにとして、恁麼なる、從來の一枚二枚の臭皮袋を勘過するに、疑著におよばず、親覲におよばず、ただ隣談に側耳せずして不管なるがごとし。畫餅といふは、しるべし父母所生の面目あり、父母未生の面目あり、米麪をもちゐて作法せしむる正當恁麼、かならずしも生不生にあらざれども、現成道成の時節なり、去來の見聞に拘牽せらるると參學すべからず。餅を畫する丹雘は、山水を畫する丹雘とひとしかるべし。いはゆる山水を畫するには青丹をもちゐる、畫餅を畫するには米麪をもちゐる、恁麼なるゆゑにその所用おなじく、功夫ひとしきなり。しかあればすなはち、いま道著する畫餅といふは、一切の糊餅菜餅乳餅燒餅糍餅等、みなこれ畫圖より現成するなり。しるべし畫等餅等法等なり。このゆゑにいま現成するところの諸餅、ともに畫餅なり。このほかに畫餅をもとむるには、つひにいまだ相逢せず未拈出なり。一時現なりといへども、一時不現なり。しかあれども老少の相にあらず、去來の跡にあらざるなり。しかあるに道頭に畫餅國土あらはれ成立するなり。不充飢といふは、飢は十二時使にあらざれども、畫餅に相見する便宜あらず、畫餅を喫著するにつひに飢をやむる功なし。飢に相待せらるる餅なし、餅に相待せらるる餅あらざるがゆゑに、

【四寶】華嚴經に四熾然光明大寶あり、一日藏光明大寶、二離潤光明大寶、三火餤光明大寶、四盡無餘光明大寶。

【石烏龜】傳燈龍牙章に僧問、如何是祖師西來意、師曰待ニ石烏龜解語一即向ㇾ汝道、僧曰石烏龜解語也、師曰向ㇾ汝道什麼云云と華陽洞口の石烏龜と稱して老子を祭るところの祠前にある駒犬なり。

【道成白雪】御抄に是は古き祖師の悟道の詞也といひて出處未考なり。

【雲門糊餅】雲門錄の語

活計つたはれず、家風つたはれず。飢も一條拄杖なり、横擔竪擔千變萬化なり。餅も一身心現なり、青黄赤白長短方圓なり。いま山水を畫するには青綠丹臒をもちゐ、奇巖怪石をもちゐ、七寶四寶をもちゐる。餅を畫する經營もまたかくのごとし。人を畫するには四大五蘊をもちゐる、佛を畫するには泥龕土塊をもちゐるのみにあらず、三十二相をもちゐる、一莖艸をもちゐる、三祇百劫の熏修をもちゐる。かくのごとくして一軸の畫佛を圖しきたれるがゆゑに、一切諸佛はみな畫佛なり、一切畫佛はみな諸佛なり。畫佛と畫餅と檢點すべし、いづれか石烏龜、いづれか鐵拄杖なる。いづれか色法、いづれか心法なると審細に功夫參學すべきなり。恁麼功夫するとき生死去來は、ことごとく畫圖なり、無上菩提すなはち畫圖なり、おほよそ法界虛空、いづれも畫圖にあらざるなし。

古佛言、『道成白雪千扁去、畫得青山數軸來。』これ大悟話なり、辦道功夫の現成せし道底なり。しかあれば得道の正當恁麼時は、青山白雪を數軸となづく、畫圖しきたれるなり。一動一靜、しかしながら畫圖にあらざるなし、われらがいまの功夫ただ畫よりえたるなり。十號三明、これ一軸の畫なり、根力覺道これ一軸の畫なり。もし畫は實にあらずといはば、萬法みな實にあらず、萬法みな實にあらずば佛法も實にあらず。佛法もし實なるには、畫餅すなはち實なるべし。

雲門匡眞大師、ちなみに僧とふ、「いかにあらんかこれ超佛越祖之談。」師いはく、「糊餅。」この道取、しづかに功夫すべし。糊餅すでに現成するには、超佛越祖の談を說著する祖師

【先師道脩竹】淨祖淨慈寺に再住して上堂に云く六月連ニ天伏ノ入間似ニ談爐ノ、且道如何是衲僧行履處、依ニ舊寒氷玉ノ彷ニ彿冷秋菰ノ脩竹芭蕉入ニ畫圖ト。

【一老一不老】洞山悟本大師の偈に道無心合ノ人、人無心合ノ道、要ニ識ニ箇中意ヲ、一老一不老と

あり、聞著せざる鐵漢あり、聽得する學人あるべし、現成する道著あり。いま糊餅の展事投機、かならずこれ畫餅の一二枚三枚なり、超佛越祖の談あり、入佛入魔の分あり。

先師道、「脩竹芭蕉入ニ畫圖ニ」この道取は、長短を超越せるものの、ともに畫圖の參學ある道取なり。脩竹は長竹なり。陰陽の運なりといへども、陰陽をして運ならしむるに、脩竹の年月あり。その年月陰陽、はかることうべからざるなり。大聖は陰陽を覷見すといへども、大聖陰陽を測度することあたはず、陰陽ともに法等なり、測度等なり、道等なるがゆゑに。いま外道二乘等の心目にかかはる陰陽にはあらず、これは脩竹の陰陽なり、脩竹の歩暦なり、脩竹の世界なり、脩竹の眷屬として十方諸佛あり。しるべし天地乾坤は、脩竹の根莖枝葉なり、このゆゑに天地乾坤をして長久ならしむ。大海須彌盡十方界をして堅牢ならしむ。拄杖竹篦をして一老一不老ならしむ。芭蕉は地水火風空心意識智慧を、根莖枝葉華果光色とせるゆゑに、秋風を帶して秋風にやぶる。のこる一塵なし、淨潔といひぬべし。眼裏に筋骨なし、色裏に膠膩あらず、當處の解脱あり。なほ速疾に拘繫せられざれば須臾刹那等の論におよばず、この力量を擧して、地水火風を活計ならしめ、心意識智を大死たらしむ。かるがゆゑにこの家業に春秋冬夏を調度として受業しきたる。いま脩竹芭蕉の全消息これ畫圖なり。これによりて竹聲を聞著して大悟せんものは、龍蛇ともに畫圖なるべし。凡聖の情量と疑著すべかとず、那竿得恁麼長なり、遮竿得恁麼短なり、遮竿得恁麼長なり、那竿得恁麼短なり。これみな、畫圖なるがゆゑに、長短の圖かならず相符するた

【仁治三年】祖師四十三歲、興聖寺に於ける示衆。

【全機】全は全體全闘にして無見無餘なり、機は活機機用にして活作用なり、有無色空に動ぜず六根六塵を超越せる衲僧分上の全機大用なり。

【機關】物を容れて動く處之を名けて機と爲す。中に

り。長畫あれば短畫なきにあらず、この道理あきらかに參究すべし。ただまさに盡界盡法は畫圖なるがゆゑに、人法は畫より現じ、佛祖は畫より成ずるなり。しかあればすなはち畫餅にあらざれば充飢の藥なし、畫飢にあらざれば人に相逢せず、畫充にあらざれば力量あらざるなり。おほよそ飢に充し不飢に充し、飢を充せず不飢を充せざること、畫飢にあらざれば不得なり不道なるなり。しばらく這箇は畫餅なることを參學すべし。この宗旨を參學するとき、いささか轉物物轉の功德を身心に究盡するなり、この功德いまだ現前せざるがごときは學道の力量いまだ現成せざるなり、この功德を現成せしむる、證畫現成な

爾時仁治三年壬寅十一月初五日在于觀音導利興聖寶林寺示衆。

正法眼藏畫餅　畢

正法眼藏全機

諸佛の大道、その究盡するところ、透脫なり、現成なり。その透脫といふは、あるいは生も生を透脫し死も死を透脫するなり。このゆゑに、出生死あり、入生死あり、ともに究盡の大道なり、捨生死あり、度生死あり、ともに究盡の大道なり。現成これ生なり、生これ現成なり、その現成のとき、生の全現成にあらずといふことなし、死の全現成にあら

於て轉ずるは說いて以て關と爲す。韓康伯曰く機は卽ち樞機用て轉動を資く、關は謂く關鍵、密に在りて能く轉ずと。俗にからくりと云ふ。諸法の滯り無きなり

【圜悟生也全機現】圜悟語錄卷十七、道吾漸源一家弔慰の話の拈古也。師拈云、銀山鐵壁有ニ什麼階昇處一、山僧今夜節上鋪レ華、八字打開商ニ量這公案ニ去也、生也全機現、死也全機現、不レ道復不レ道、簡中無ニ背面一、直下便承當、不レ滯ニ一條線一、通ニ塞大虚空一、赤心常片片と。全機の標號茲に出づ

【壯士の臂屈伸】無量壽經に云く百歲命終猶如ニ壯士屈ニ伸臂一頃上と。

【仁治三年】祖師四十三歲。說處は以下に示す。

【雍州】山城國の

ずといふことなし。この機關よく生ならしめ、よく死ならしむ。この機關の現成する、正當恁麼時、かならずしも大にあらず、かならずしも小にあらず、遍界にあらず、局量にあらず、長遠にあらず、短促にあらず、いまの生はこの機關にあり、この機關はいまの生にあり、生は來にあらず、生は去にあらず、生は現にあらず、生は成にあらざるなり。しかあれども、生は全機現なり、死は全機現なり。しるべし自己の無量の法あるなかに、生あり死あるなり。しづかに思量すべし、いまこの生、および生と同生せるところの衆法は、生にともなりとやせん、生にともならずとやせん。一時一法としても、生にともならざることなし、一事一心としても、生にともならざるなし。生といふは、たとへば人のふねにのれるときのごとし、このふねは、われ帆をつかひ、われかぢをとれり、われさほをさすといへども、ふねわれをのせて、ふねのほかにわれなし、われふねにのりてこのふねをも、ふねならしむ、この正當恁麼時を功夫參學すべし。この正當恁麼時は、舟の世界にあらざることなし、天も水も岸も、みな舟の時節となれり、さらに舟にあらざる時節とおなじからず。このゆゑに、生はわが生せしむるなり、われをば生のわれならしむるなり。舟にのれるには、身心依正ともに舟の機關なり、盡大地、盡虛空ともに、舟の機關なり、生たるわれ、われなる生、それかくのごとし。

圜悟禪師克勤和尚云、「生也全機現、死也全機現。」この道取あきらめ參究すべし。參究すといふは、生也全機現の道理、はじめをはりにかかはれず、盡大地盡虛空なりといへども、

こと：支那の洛陽都の所在地雍州なるが故に之に擬す。

【六波羅蜜寺】京都古記に云く、村上天皇天慶（暦？）五年、京畿疫死、骸相枕、空也上人光勝憐之自刻十一面大悲像、而祈、疫止、勸四衆延寺於洛東、號六波羅蜜寺と。

【雲州刺史】東鑑三十八に云く、承久三年五月十五日、相州泰時、武州時房十九萬騎を率ゐて京都に赴く、尾州莚田の合戰に、波多野五郎義重、先發の處に進むや、矢石右目に中れり、心神逆亂すと雖も、則ち答矢を射ると。武家正系補四に、大織冠鎌足七代田原藤太秀郷十四代と。雲州は出雲守。刺史は今の縣知事の如く郡縣を牧する役。

【幕下】陣中なり

生也全機現をあひ罣礙せざるのみにあらず、死也全機現をも罣礙せざるなり。死也全機現のとき、盡大地盡虚空なりといへども、死也全機現をあひ罣礙せざるのみにあらず、生也全機現をも罣礙せざるなり。このゆゑに生は死を罣礙せず、死は生を罣礙せざるなり。盡大地盡虚空、ときに生にもあり、死にもあり。しかあれども一枚の盡大地、一枚の盡虚空を、生にも全機し、死にも全機するにはあらざるなり。一にあらざれども異にあらず、異にあらざれども即にあらず、即にあらざれども多にあらず、このゆゑに、生にも全機現の衆法あり、死にも全機現の衆法あり、生にあらず死にあらざるにも全機現あり。全機現に生あり、死あり、このゆゑに、生死の全機は、壯士の臂を屈伸するがごとくにもあるべし、如人夜間背手摸枕子にてもあるべし。これに許多の神通光明ありて現成するなり、正當現成のときは、現成に全機せらるるによりて、現成よりさきに現成あらざりつると見解するなり。しかあれどもこの現成よりさきは、さきの全機現なり。さきの全機現ありといへども、いまの全機現を罣礙せざるなり。このゆゑに、しかのごとくの見解、きほひ現成するなり。

爾時仁治三年壬寅十二月十七日在雍州六波羅蜜寺側雲州刺史幕下示衆

同四年癸卯正月十九日書寫之　懷奘

正法眼藏全機　畢

【都機】都機は萬葉假名にて月の音をうつせしなり月は圓成にして無礙圓滿を標示す、光明放開萬八千土を照す、照用亦無礙光也、都機は體、光明は用、體用不二圓滿無礙光明を説いて自己の光明を蓋天蓋地ならしむ

【前三三後三三】傳燈無著文喜章に無著問文殊、此間如何住持、殊云凡聖同居龍蛇混雜、著云多少衆、殊云前三三後三三と云。雪竇頌古第三十五則に見ゆ、

【佛眞法身】金光明經第二、四天王品偈の文。

【盤山心月孤圓】傳燈卷七幽州盤山寶積章に出づ、

正法眼藏都機

諸月の圓成すること前三三のみにあらず、後三三のみにあらず、圓成の諸月なる、前三三のみにあらず、後三三のみにあらず。このゆゑに釋迦牟尼佛言、佛眞法身猶若二虚空一、應レ物現レ形、如二水中月一。いはゆる如水中月の如如は、水月なるべし、水如月如如中中如なるべし、相似を如と道取するにあらず、如は是なり。佛眞法身は、虚空の猶若なり、この虚空は猶若の佛眞法身なり、佛眞法身たるがゆゑに盡地盡界盡法盡現みづから虚空なり、現成せる百艸萬像の猶若なる、しかしながら佛眞法身なり、如水中月なり。月のときはかならず夜にあらず、夜かならずしも暗にあらず、ひとへに人間の小量にかかはることなかれ、日月なきところにも晝夜あるべし、日月は晝夜のためにあらず、日月ともに如如なるがゆゑに、一月兩月にあらず、千月萬月にあらず。月の自己たとひ一月兩月の見解を保任すといふとも、これは月の見解なり、かならずしも佛道の道取にあらず、佛道の知見にあらず。しかあれば、昨夜たとひ月ありといふとも、今夜の月は昨月にあらず、今夜の月は初中後ともに今夜の月なりと參究すべし。月は月に相嗣するがゆゑに、月ありといへども新舊にあらず。

盤山寶積禪師云、心月孤圓、光呑二萬象一、光非レ照レ境、境亦非レ存、光境倶亡、復是何

【一心一切法】止觀に出づ、又境經に出す。

【日面佛月面佛】雪竇頌古第三則、馬大師不安、院主問、和尚近日尊候如何、大師曰日面佛月面佛と。

【投子山月未圓】禪類卷十四に出づ

物といまいふところは佛祖佛子かならず心月あり、月を心とせるがゆゑに、月にあらざれば心にあらず、心にあらざる月なし。孤圓といふは、虧闕せざるなり。兩三にあらざるを萬象といふ。萬象これ月光にして萬象にあらず、このゆゑに光吞萬象なり。萬象おのづから月光を吞盡せるがゆゑに、光の光を吞却するを光吞萬象といふなり。たとへば月吞月なるべし、光吞月なるべし。ここをもて『光非照境境亦非存』と道取するなり。得恁麼なるがゆゑに、應以佛身得度者のとき、即現佛身而爲說法なり。應以普現色身得度者のとき、即現普現色身而爲說法なり。これ月中の轉法輪にあらずといふことなし。たとひ陰精陽精の光象するところ、火珠水珠の所成なりとも、即現現成なり。この心すなはち月なり、この月おのづから心なり、佛祖佛子の、心を究理究事することかくのごとし。古佛いはく、『一心一切法、一切法一心。』しかあれば心は一切法なり、一切法は心なり。心は月なるがゆゑに月は月なるべし、心なる一切法、これことごとく月なるがゆゑに、徧界は徧月なり、通信ことごとく通月なり。たとひ直須萬年の前後三三、いづれか月にあらざらん。いまの身心依正なる、日面佛月面佛おなじく月中なるべし。生死去來ともに月にあり、盡十方界は、月中の上下左右なるべし。いまの日用、すなはち月中の明明百艸頭なり、月中の明明祖師心なり。

舒州投子山慈濟大師、因僧問、『月未圓時如何。』師云、『吞却三箇四箇。』僧曰、『圓後如何。』師云、『吐却七箇八箇。』いま參究するところは、未圓なり、圓後なり、ともにそれ月の造

【釋迦牟尼佛告】大圓覺經金剛藏菩薩章の文。

【第二月】圓覺經に云く、譬彼病目見空中華及第二月と。雲駛掃地の語に此語を用ふ。

【正好修行】傳燈錄卷六、百丈章に云く、百丈與南泉西堂同侍馬祖翫月次、馬祖曰正當

次なり。月に三箇四箇あるなかに、未圓の一枚あり、月に七箇八箇あるなかに、圓後の一枚あり。呑却は三箇四箇なり、このとき月未圓時の見成なり、吐却は七箇八箇なり、このとき圓後の見成なり。月の月を呑却するに三箇四箇なり、呑却に月ありて現成す、月は呑却の見成なり。このゆゑに呑却盡なり、吐却盡なり、盡地盡天吐却なり、蓋天蓋地呑却なり、呑自呑他すべし、吐自吐他すべし。釋迦牟尼佛告金剛藏菩薩言、譬如動目能搖湛水、又如定眼猶廻轉火、雲駛月運、舟行岸移、亦復如是。いま佛演說の雲駛月運舟行岸移あきらめ參究すべし、倉卒に學すべからず、凡情に順ずべからず。しかあるにこの佛說を佛說のごとく見聞するものまれなり。もしよく佛說のごとく學習するといふは、圓覺かならずしも身心にあらず、菩提涅槃にあらず、菩提涅槃かならずしも圓覺にあらず、身心にあらざるなり。いま如來道の雲駛月運舟行岸移は、雲駛のとき月運なり、舟行のとき岸移なり。いふ宗旨は、雲と月と同時同道して同歩同運すること、始終にあらず、前後にあらず。舟と岸と同時同道して同歩同運すること、起止にあらず、流轉にあらず。たとひ人の行を學すとも、人の行は起止にあらず、起止の行は人にあらざるなり、起止を擧揚して人の行に比量することなかれ。雲の駛も月の運も舟の行も岸の移もみなかくのごとし。おろかに小量の見に局量することなかれ。雲の駛は東西南北をとはず、月の運は晝夜古今に休息なき宗旨わすれざるべし。舟の行および岸の移、ともに三世にかかはれず、よく三世を使用するものなり。このゆゑに直至如今飽不飢なり。しかあるを愚人おもはく

恁麼時如何、西堂曰正好供養、師曰正好修行、南泉拂袖便去、祖曰經入藏、禪歸海、唯有普願獨超物外」と。

【圓尖去來】卷十四、石室善道與仰山翫月、山問月尖時圓相甚處去、圓時尖相甚處去、師曰、尖時圓相隱、圓時尖相有、雲巖曰、尖時圓相有、圓時無尖相、道吾曰、尖時亦不尖、圓時亦不圓、石室若話喫交平地」と。

【仁治癸卯】仁治四年なり、師齡四十四歳、興聖寺に於ける示衆。是年二月廿六日改元、寛元元年なり。端月は一月なり。

【空華】一切諸法は空中の開華なり、華あれ共空、空なれども華あり、因縁生、因縁滅、有の

は、雲のはしるにようてうごかざる月をうごくとみる、舟のゆくによりてうつらざる岸をうつるとみゆると、見解せり。もし愚人のいふがごとくならんば、いかでか如來の道ならん。佛法の宗旨いまだ人天の小量にあらず、ただ不可量なりといへども、逐機の修行あるのみなり。たれか舟岸を再三撈攄せざらん、たれか雲月を急著眼看せざらん。しるべし、如來道は雲を什麼法に譬せず、月を什麼法に譬せず、舟を什麼法に譬せず、岸を什麼法に譬せざる道理、しづかに功夫參究すべきなり。月の一歩は如來の圓覺なり、如來の圓覺は、月の運爲なり。動止にあらず進退にあらず、すでに月運は譬喩にあらざれば、孤圓の性相なり。しるべし、月の運度はたとひ駛なりとも、初中後にあらざるなり。このゆゑに第一月第二月あるなり。第一第二おなじくこれ月なり、正好修行これ月なり、正好供養これ月なり、拂袖便行これ月なり。圓尖は去來の輪轉にあらざるなり、去來輪轉を使用し、使用せず、放行し把定し、逞風流するがゆゑに、かくのごとくの諸月なるなり。

正法眼藏都機　第

仁治癸卯端月六日書于觀音導利興聖寶林寺　　沙門道元

正法眼藏空華

高祖道、一華開五葉、結果自然成。この華開の時節、および光明色相を參學すべし。

【註】如く空の如く、如如にして無到無爲なり、有も有ならず空も空ならず、有無を離れて功夫あり。

【高祖道一華】傳燈三、達磨章に「吾本來此土、傳法救迷情、一華開五葉、結果自然成」と。

【公界】公儀に定めたる境界にて私の入れられぬところなり。

【優鉢羅華】梵音(Utpala)にて青蓮華のこと。

【鑽火】華嚴經の偈に如鑽求火、未出而數息と。

【いよよか】揃うてりつぱなること。

一華の重は五葉なり、五葉の開は一華なり。一華の道理の通ずるところ、吾本來此土、傳法救迷情なり。光色の尋處は、この參學なるべきなり。結果任儞結果なり、自然成をいふ。自然成といふは、修因感果なり、公界の因あり、公界の果あり、この公界の因果を修し、公界の因果を感ずるなり。自は己なり、己は必定これ儞なり、四大五蘊をいふ。使得無位眞人のゆゑに、われにあらずたれにあらず、このゆゑに不必なるを自といふなり。然は聽許なり、自然成すなはち華開結果の時節なり、傳法救迷の時節なり。たとへば優鉢羅華の開敷の時處は、火裏火時なるがごとし、鑽火焰火みな優鉢羅華の開敷處なり、開敷時なり。もし優鉢羅華の時處にあらざれば、一星火の出生するなし、一星火の活計なきなり。しるべし一星火に百千朶の優鉢羅華ありて、空に開敷し、地に開敷するなり。過去に開敷し、現在に開敷するなり。火の現時現處を見聞するは、優鉢羅華を見聞するなり、優鉢羅華の時處をすごさず見聞すべきなり。古先云、「優鉢羅華火裏開。」しかあれば優鉢羅華は、かならず火裏に開敷するなり、火裏をしらんとおもはば、優鉢羅華開敷のところなり、人見天見を執して、火裏をならはざるべからず。疑著せんことは水中の蓮華の生ぜるも疑著しつべし、枝條に諸華あるをも疑著しつべし、また疑著すべくは、器世間の安立も疑著しつべし、しかあれども疑著せず、佛祖にあらざれば、華開世界起をしらず。華開といふは、前三三後三三なり、この員數を具足せんために、森羅をあつめていよよかにせるなり。この道理を到來せしめて、春秋をはかりしるべし。ただ春秋に華果あるにあらず、有

【如來道ノ翳眼所見】大圓覺經卷一に云く妄認二四大一爲二自身相一、六塵緣影爲二自身相一、譬如二病目見二空中華及第二月一、善男子空實無レ華、病者妄執、由二妄執一故、非三唯惑二此虛空自性一、亦復迷二彼空華生處一、由レ此妄有二輪二轉生死一、故名二無明一と。【衣座室】法華法師品に云く入二如來室一著二如來衣一

時かならず華果あるなり。華果ともに時節を保任せり、時節ともに華果を保任せり。このゆゑに百艸みな華果あり、諸樹みな華果あり、金銀銅鐵珊瑚頗瓈樹等、みな華果あり、地水火風空樹、みな華果あり。人樹に華あり、人華に華あり、枯木に華あり。かくのごとくあるなかに、世尊道虛空華あり。しかあるを少聞少見のともがら、空華の彩光葉華いかなるとしらず、わづかに空華と聞取するのみなり。しるべし佛道に空華の談あり、外道は空華の談をしらず、いはんや覺了せんや。ただし諸佛諸祖、ひとり空華地華の開落をしり、世界華等の開落をしれり、空華地華世界華等の經典なりとしれり、これ學佛の規矩なり。佛祖の所乘は、空華なるがゆゑに、佛世界および諸佛の法、すなはちこれ空華なり。しかあるに如來道の翳眼所見は空華とあるを傳聞する凡愚おもはくは、翳眼といふは、衆生の顚倒のまなこをいふ、病眼すでに顚倒なるゆゑに、淨虛空に空華を見聞するなりと消息す。この理致を執するによりて、三界六道有佛無佛、みなあらざるをありと妄見するとおもへり。この迷妄の眼翳もしやみなば、この空華みゆべからず。このゆゑに空本無華と道取すると活計するなり。あはれむべしかくのごとくのやから如來道の空華の時節始終をしらず、諸佛道に翳眼空華の道理、いまだ凡夫外道の所見にあらざるなり。諸佛如來、この空華を修行して、衣座室をうるなり、得道得果するなり。拈華し瞬目する、みな翳眼空華の現成する公案なり。正法眼藏涅槃妙心いまに正傳して斷絕せざるを翳眼空華といふなり。菩提涅槃、法身自性等は、空華の開五葉の兩三葉なり。釋迦牟尼佛言、亦如下翳人見二空中華一翳

坐ニ如來座ニ爾乃應ド爲ニ四衆ニ廣說ヒ此經ヲ、如來室者一切衆生中大慈悲心是如來衣者柔和忍辱心是如來座者一切法空是と。

【釋迦牟尼佛言】、楞嚴經第四の文、

【種熟脫】種は初發心に種子を下し中間の三祇劫に熟するなり、而して究竟に度脫して成道す。

病若除、華於ㇾ空滅」この道著あきらむる學者いまだあらず。空をしらざるがゆゑに、空華をしらず、空華をしらざるがゆゑに、翳人をしらず、翳人をみず、翳人にあはず、翳人ならざるなり。翳人と相見して、空華をもしり、空華をもみるべし。空華をみてのちに華於空滅をもみるべきなり。ひとたび空華やみなば、さらにあるべからずとおもふは、小乘の見解なり、空華みえざらんときは、なににてあるべきぞ。ただ空華は所捨となるべしとのみしりて、空華ののちの大事をしらず、空華の種熟脫をしらず。いま凡夫の學者、おほくは陽氣のすめるところこれ空ならんとおもひ、日月星辰のかかれるところを空ならんとおもへるによりて、假令すらくは空華といはんは、この清氣のなかに浮雲のごとくして、飛華の風にふかれて東西しおよび昇降するがごとくなるを、彩色のいできたらんとするを、空華といはんずるとおもへり。能造所造の四大、あはせて器世間の諸法、ならびに本覺本性等を空華といふとは、ことにしらざるなり。また諸法によりて能造の四大等ありとしらず、諸法によりて器世間は住法位なりとしらず、器世間によりて諸法ありとばかり知見するなり。眼翳によりて空華ありとのみ覺了して、空華によりて眼翳あらしむる道理を覺了せざるなり。しるべし佛道の翳人といふは、本覺人なり、妙覺人なり、諸佛人なり、三界人なり、佛向上人なり。おろかに翳を妄法なりとして、このほかに眞法ありと學することなかれ、しかあらんは小量の見なり。翳華もし妄法ならんは、これを妄法と邪執する、能作所作、みな妄法なるべし。ともに妄法ならんがごときは、道理の成立すべきなし、成立する

道理なくば、瞖華の妄法なることしかあるべからざるなり。悟の瞖なるには、悟の衆法ともに瞖莊嚴の法なり、迷の瞖なるには、迷の衆法ともに瞖莊嚴の法なり、しばらく道取すべし、瞖眼平等なれば、空華平等なり。瞖眼無生なれば、空華無生なり、諸法實相なれば、瞖華實相なり。過現來を論ずべからず、初中後にかかはれず、生滅に罣礙せざるゆゑに、よく生滅をして生滅せしむるなり。空中に生じ、空中に滅す。瞖中に生じ、瞖中に滅す。華中に生じ、華中に滅す、乃至諸餘の時處も、またまたかくのごとし。空華を學せんこと、まさに衆品あるべし。瞖眼の所見あり、明眼の所見あり、佛眼の所見あり、祖眼の所見あり、道眼の所見あり、瞎眼の所見あり、三千年の所見あり、八百年の所見あり、百劫の所見あり、無量劫の所見あり。これらともにみな、空華をみるといへども、空すでに品品なり、華また重重なり。まさにしるべし空は一艸なり、この空かならず華さく、百艸に華さくがごとし。この道理を道取するとして、如來道は、空本無華と道取するなり。本無華なりといへども、今有華なることは、桃李もかくのごとし、梅柳もかくのごとし、梅昨無華梅春有華と道取せんがごとし。しかあれども時節到來すればすなはち華さく、華時なるべし、華到來なるべし。この華到來の正當恁麼時、みだりなることいまだあらず、梅柳の華はかならず梅柳にさく、華をみて梅柳をしる、梅柳をみて華をわきまふ。桃李の華いまだ梅柳にさくことなし、梅柳の華は梅柳にさき、桃李の華は桃李にさくなり。空華の空にさくも、またまたかくのごとし、さらに餘艸にさかず、餘樹にさかざるなり。空華の諸色を

【祖師いはく】傳燈三の三祖章に、云く、本來緣有レ地、因レ地種華生、本來無レ有レ種、華亦不ニ曾生一と。

【張拙秀才】會元卷六に云く、張拙秀才、禪月大師に因て指して石霜に參ず、霜云く、秀才何の姓ぞ、曰く姓は張、名は拙、霜云く巧を覓めて尙得べからず、拙何より來る、公忽ち省あり、偈を呈して云く、光明寂照遍河沙等の七言八句なり、この八句禪類第一偈子門に出づ。

【石霜】傳燈十五、潭州石霜山慶諸禪師、道吾圓智に嗣ぐ。光啓四年寂、諡して普會大師と號す。

みて、空果の無窮なるを測量するなり。空華の開落をみて空華の春秋を學すべきなり。空華の春と餘華の春とひとしかるべきなり、空華のいろいろなるがごとく、春時もおほかるべし。このゆゑに古今の春秋あるなり、空華は實にあらず、餘華はこれ實なりと學するは、佛教を見聞せざるものなり。空本無華の說をききて、もとよりなかりつる空華のいまあると學するは、短慮少見なり、進步して遠慮あるべし。祖師いはく、「華亦不曾生」、この宗旨の現成、たとへば華亦不曾生華亦不曾滅なり、華亦不曾華なり空亦不曾空の道理なり。華時の前後を胡亂して、有無の戲論あるべからず。華はかならず諸色にそめたるがごとし、諸色かならずしも華にかぎらず、諸時また靑黃赤白等のいろあるなり、春は華をひく、華は春をひくものなり

張拙秀才は、石霜の俗弟子なり、悟道の頌をつくるにいはく、「光明寂照遍河沙」この光明あらたに僧堂佛殿廚庫山門を現成せり 遍河沙は、光明現成なり、現成光明なり。「凡聖含靈共我家」凡夫賢聖なきにあらず、これによりて凡夫賢聖を謗することなかれ。「一念不生全體現」念念一一なりこれはかならず不生なり、これ全體全現なり、このゆゑに一念不生と道取す。「六根纔動被雲遮」六根はたとひ眼耳鼻舌身意なりとも、かならずしも二三にあらず、前後三三なるべし、動は如須彌山なり、如大地なり、如六根なり、如纔動なり。動すでに如須彌山なるがゆゑに、不動また如須彌山なり。たとへば雲をなし水をなすなり。「斷ニ除煩惱一重增レ病」從來やまふなきにあらず、佛病祖病あり、

【芙蓉山靈訓禪師】傳燈卷十、前歸宗寺智常禪師ノ嗣、福州芙蓉山に住す、依て名あり。

【歸宗寺至眞】盧山歸宗寺に住せし智常禪師、馬祖道一に嗣法す、滅後勅して至眞禪師と諡す。唐の憲宗より文宗頃の人。

いまの智圓は、やまふをかさねやまふをます。斷除の正當恁麼時かならずそれ煩惱なり、同時なり、不同時なり、煩惱かならず斷除の法を帶せるなり『趣ニ向眞如ニ亦是邪、』眞如を背するこれ邪なり、眞如に向するこれ邪なり、眞如は向背なり、向背の各々にこれ眞如なり。たれかしらん、この邪の亦是眞如なることを『隨ニ順世縁ニ無ニ罣礙ニ』世縁と世縁と隨順し、隨順と隨順と世縁なり、これを無罣礙といふ、罣礙不罣礙は、被眼礙に慣習すべきなり。『涅槃生死是空華、』涅槃といふは、阿耨多羅三藐三菩提なり、佛祖および佛祖の弟子の所住これなり。生死は、眞實人體なり、この涅槃生死は、その法なりといへどもこれ空華なり。空華の根莖枝葉華果光色ともに空華の華開なり、空華かならず空果をむすぶ、空種をくだすなり。いま見聞する三界は、空華の五葉開なるゆゑに、不如三界見於三界なり。この諸法實相なり、この諸法華相なり、乃至不測の諸法ともに空華空果なり、梅柳桃李とひとしきなりと參學すべし。

大宋國福州芙蓉山靈訓禪師、初參ニ歸宗寺至眞禪師ニ而問、『如何是佛。』歸宗云、『我向ㇾ汝道、汝還信否。』師曰、『和尚誠言何敢不ㇾ信。』歸宗云、『卽汝便是。』師曰、『如何保任。』歸宗云、『一瞖在ㇾ眼、空華亂墜。』いま歸宗道の一瞖在眼空華亂墜は、保任佛の道取なり。しかあればしるべし、瞖華の亂墜は、諸佛の現成なり、眼空の華果は諸佛の保任なり。瞖をもて眼を現成せしむ、眼中に空華を現成し、空華中に眼を現成せり、空華在眼。一瞖亂墜。一眼在空衆瞖亂墜なるべし。ここをもて瞖也全機現、眼也全機現、空也全機現、華

寂年等不詳。此文は芙蓉山靈訓禪師章に出づ。

【奇哉十方佛】傳燈第一、瑯瑘廣照大師章に出づ。

【石門山慧徹】會元十四卷、襄州石門山慧徹、石門の蘊に嗣ぐ、蘊は青林師虔に嗣ぐ、青林は洞山悟本大師の嗣。梁山下に石門の徹無し、洞山下の誤ならんか。

也全機現なり。亂墜は千眼なり、通身眼なり。おほよそ一眼の在時在處かならず空華あり、眼華あるなり。眼華を空華とはいふ、眼華の道取かならず開明なり。このゆゑに、瑯瑘山廣照大師云、「奇哉十方佛、元是眼中華、欲識眼中華、元是十方佛、欲識十方佛、不是眼中華、欲識眼中華、不是十方佛、於此明得、過在十方佛、若未明得、聲聞作舞、獨覺臨粧。」しるべし十方佛の實ならざるにあらず、もとこれ眼中の華なり、十方諸佛の住位せるところは眼中なり。眼中にあらざれば諸佛の住處にあらず。眼中華は無にあらず有にあらず、空にあらず實にあらず、おのづからこれ十方佛なり。いまひとへに十方諸佛と欲識すれば、眼中華にあらず、ひとへに眼中華と欲識すれば、十方諸佛にあらざるがごとし。」かくのごとくなるゆゑに明得未明得、ともに眼中華なり、十方佛なり、欲識および不是、すなはち現成の奇哉なり、太奇なり。佛佛祖祖の道取する、空華地華の宗旨、それ恁麼の逞風流なり。空華の名字は、經師論師もなほ聞及すとも、地華の命脈は、佛祖にあらざれば見聞の因緣あらざるなり、地華の命脈を知及せる佛祖の道取あり。

大宋國石門山の慧徹禪師は、梁山下の尊宿なり、ちなみに僧ありてとふ、「如何是山中寶。」「この問取の宗旨は、たとへば如何是佛と問取するにおなじ、如何是道と問取するがごとくなり。」師云、「空華從地發、蓋國買無門。」「この道取ひとへに自餘の道取に準的すべからず。よのつねの諸方は空華の空華を論ずるには、於空に生じてさらに於空に滅するとのみ道取す。從空しれるなほいまだあらず、いはんや從地としらんや。ただひとり石門の

【寛元元年】祖齡四十四歲、興聖寺に於ける示衆。

【古佛心】身心ともに寂靜處に住するを古佛といふ、三世諸佛歷代祖師古佛心也、燈籠露柱、牆壁瓦礫古佛心也、有情非情草木國土古佛心也。古佛を身心に參ずべし。

みしれり。從地といふは、初中後つひに從地なり、發は開なり、この正當恁麼のとき、從盡大地發なり、從盡大地開なり。盡國買無門は、盡國買はなきにあらず、買無門なり。從地發の空華あり、從華開の盡地あり。しかあればしるべし空華は地空ともに開發せしむる宗旨あり。

于時寛元元年癸卯三月十日在觀音導利興聖寶林寺示衆

正法眼藏空華　畢

正法眼藏古佛心

祖宗の嗣法するところ、七佛より曹谿にいたるまで四十祖なり、曹谿より七佛にいたるまで四十佛なり。七佛ともに向上向下の功德あるがゆゑに、曹谿にいたり七佛にいたる、曹谿に向上向下の功德あるがゆゑに、七佛より正傳し、曹谿より正傳し、後佛に正傳す、ただ前後のみにあらず。釋迦牟尼佛のとき、十方諸佛あり、青原のとき南嶽あり、南嶽のとき青原あり、乃至石頭のとき江西あり、あひ罣礙せざるは、不礙にあらざるべし。かくのごとくの功德あること、參究すべきなり。向來の四十位の佛祖、ともにこれ古佛なりといへども心あり身あり、光明あり國土あり、過去久矣あり、未曾過去あり。たとひ未曾過去なりとも、たとひ過去久矣なりとも、おなじくこれ古佛の功德なるべし。古佛の道を

【先師曰與宏智】先師は天童如淨禪師。宏智は天童正覺宏智禪師。淨祖天童錄に云く正當恁麼、且與宏智古佛相見、擧拂子曰相見了也云云。

【圜悟禪師曰】圜悟眞錄六祖讚に云く稽首曹溪眞古佛八十生爲善智識、示現不識世文字、信心成章徹法窟と、曹溪は曹溪山寶林寺六祖大鑑慧能禪師。

【疎山曰大庾嶺】禪類卷三に出づ。疎山は疎山光仁、洞山悟本大師に嗣ぐ、大庾嶺とは羅山の道閑法寶大師のこと德山の孫巖頭の子。疎山具威儀望大嶺禮拜曰將謂無人大嶺古佛放光射此間と。

參學するは、古佛の道を證するなり、代代の古佛なり。いはゆる古佛は、新古の古に一齊なりといへども、さらに古今を超出せり、古今に正直なり。

先師曰「與宏智古佛相見。」はかりしりぬ天童の屋裏に古佛あり、古佛の屋裏に天童あることを。圜悟禪師曰「稽首曹谿眞古佛。」しるべし釋迦牟尼佛より第三十三世はこれ古佛なりと稽首すべきなり。圜悟禪師に、古佛の莊嚴光明あるゆゑに、古佛と相見しきたるに、恁麼の禮拜あり。しかあればすなはち曹谿の頭正尾正を草料して、古佛はかくのごとくの巴鼻なることをしるべきなり、この巴鼻あるはこれ古佛なり。

疎山曰「大庾嶺頭有古佛、放光射到此間。」しるべし疎山すでに古佛と相見すといふことを。ほかに參尋すべからず、古佛の在處は、大庾嶺頭なり。古佛にあらざる自己は、古佛の出處をしるべからず、古佛の在處をしるは、古佛なるべし。

雪峯曰「趙州古佛。」しるべし趙州たとひ古佛なりとも、雪峯もし古佛の力量を分奉せられざらんば、古佛に奉覲する骨法を了達しがたからん。いまの行履は古佛の加被によりて、古佛に參學するには、不答話の功夫あり。いはゆる雪峯老漢大丈夫なり。古佛の家風、および古佛の威儀は、古佛にあらざるには相似ならず一等ならざるなり　しかあれば趙州の初中後善を參學して、古佛の壽量を參學すべし。

西京光宅寺大證國師は、曹谿の法嗣なり、人帝天帝、おなじく恭敬尊重するところなり、まことに神丹國に見聞まれなるところなり、四代の帝師なるのみにあらず、皇帝てづ

【雪峰曰趙州】禪類水火門古淵寒泉の話、雪峰聞二趙州答話一云、趙州古佛、遂作レ禮自レ此不二答話一云云。
【加被】加恩に從ふ之を被と謂ふ加は益也又及也、益を以て相及すを謂ふと。
【四代の帝師】兩代の說なり。代宗肅宗の兩帝なり。
【皇帝てづから】碧巖十八則評に師退レ朝、帝自攀レ輦而送レ之、朝臣皆有二慍色一と。
【帝釋のために說法】碧巖十八則評に國師曰く我在二天帝釋前一見二粟散天子一如二閃電光一相似と。
【盡大地覓一箇】玄沙師備の語。

からみづから車をひきて參內せしむ、いはんやまた帝釋宮の請をえてはるかに上天す、諸天衆のなかにして、帝釋のために說法す。國師因僧問、「如何是古佛心。」師云、「牆壁瓦礫。」いはゆる問處は、這頭得恁麼といひ、那頭得恁麼といふなり。この道得を擧して、問處とせるなり、この問處、ひろく古今の道得となれり。このゆゑに、華開の萬木百艸、これ古佛の道得なり、古佛の問處なり、世界起の九山八海、これ古佛の日面月面なり、古佛の皮肉骨髓なり。さらにまた古心の行佛なるあるべし、古心の證佛なるあるべし、古心の作佛なるあるべし。佛古の爲心なるあるべし、古心といふは、古心なるがゆゑなり。心佛はかならず古なるべきがゆゑに、古心は椅子竹木なり、盡大地覓一箇會佛法人不可得なり、和尙喚這箇作甚麼なり。いまの時節因緣、および塵刹虛空、ともに古心にあらずといふことなし。古心を保任する、古佛を保任する、一面目にして兩頭保任なり、兩頭畫圖なり。師いはく、『牆壁瓦礫。』いはゆる宗旨は牆壁瓦礫にむかひて道取する一進あり、牆壁瓦礫なり、道出する一途あり、牆壁瓦礫の牆壁瓦礫の許裏に道著する一退あり。これらの道取の現成するところの圓成十成に千仭萬仭の壁立あり、市地市天の牆立あり、一片半片の瓦蓋あり、乃大乃小の礫尖あり。かくのごとくあるは、ただ心のみにあらず、すなはちこれ身なり、乃至依正なるべし。しかあれば作麼生是牆壁瓦礫と問取すべし、道取すべし、答話せんには、古佛心と答取すべし。かくのごとく保任してさらに參究すべし、いはゆる牆壁はいかなるべきぞ、なにをか牆壁といふ、いまいかなる形段をか具足せると、審

【漸源仲興】傳燈十一、末山了然尼の章に出づ、僧問如何是古佛心、然曰世界倒壞、曰世界爲二什麼一倒壞、然曰寧無二我身一と漸源仲興の章に無し。

【寛元元年】祖齡四十四歲、六波羅蜜寺に於ける示衆

【菩提薩埵四攝法】菩提薩埵は菩薩の正音、菩提は佛道、薩埵は大心有情、大心ありて佛道に

細に參究すべし。造作より牆壁を出現せしむるか、牆壁より造作を出現せしむるか、造作か造作にあらざるか、有情なりとやせん、無情なりや、現前すや、不現前なりや、かくのごとく功夫參學して、たとひ天上人間にもあれ、此土他界の出現なりとも、古佛心は牆壁瓦礫なり。さらに一塵の出頭して染汙するいまだあらざるなり。

漸源仲興大師、因僧問「如何是古佛心。」師云「世界崩壞。」僧曰「爲二甚麼一世界崩壞。」師云「寧無二我身一。」』いはゆる世界は、十方みな佛世界なり、非佛世界いまだあらざるなり。崩壞の形段は、この盡十方界に參學すべし、自己に學することなかれ、自己に參學せざるゆゑに崩壞の正當恁麼時は、一條兩條三四五條なるがゆゑに、無盡條なり。かの條條それ寧無我身なり。我身は寧無なり。而今を自惜して我身を古佛心ならしめざることなかれ、まことに七佛以前に古佛心壁豎す、七佛以後に古佛心才生す、諸佛以前に古佛心華開す、諸佛以後に古佛心結果す、古佛心以前に古佛心脫落なり。

爾時寬元元年癸卯四月二十九日在二六波羅蜜寺一示衆

正法眼藏古佛心　畢

正法眼藏菩提薩埵四攝法

『一者布施、二者愛語、三者利行、四者同事。』その布施といふは、不貪なり、不貪といふ

人るを菩提薩埵と名く、四攝法は此四通じて攝と爲す、攝は攝受、菩薩衆生を化導せんと欲せば必ず此四法を以て攝受し其をして大乘の正道に入らしむ。菩薩大悲攝受門の說示なり。

【一布施二愛語】維摩經に云く、先以欲鉤牽、後令入佛智是也、一布施攝、謂菩薩以財法二種布施攝衆生也、二愛語攝、謂隨衆生根性、善言慰喩、三利行攝、謂菩薩起身口意善行、利益一切衆生、四同事攝、謂菩薩以法眼明見衆生根性、隨其所樂分形示現、同其所作、使其各霑利益云云。

【佛のたまはく】大寶積經に云く、樂施之人獲五種名利、一常得親近一切賢聖、二一切

は、むさぼらざるなり。むさぼらずといふは、よのなかにいふへつらはざるなり。たとひ四洲を統領すれども、正道の教化をほどこすには、かならず不貪なるのみなり。たとへばすつるたからをしらぬ人にほどこさんがごとし、遠山のはなを如來に供じ、前生のたからを衆生にほどこさん、法におきても物におきても、面面に布施に相應する功德を本具せり。我物にあらざれども、布施をさへざる道理あり、そのもののかろきをきらはず、その功の實なるべきなり。道を道にまかするとき得道す、得道のときは、道かならず道にまかせられゆくなり、財のたからにまかせらるるとき、財かならず布施となるなり、自を自にほどこし、他を他にほどこすなり、この布施因緣力、とほく天上人間までも通じ、證果の賢聖までも通ずるなり。そのゆゑは、布施の能受となりて、すでに緣をむすぶがゆゑに。ほとけののたまはく、布施する人の衆會のなかにきたるときは、まづその人を諸人のぞみみる。しるべし、ひそかにそのこころの通ずるなりと。しかあればすなはち一句一偈の法をも布施すべし、此生他生の善種となる、一錢一草の財をも布施すべし、此世他世の善根をきざす、法もたからなるべし、財も法なるべし、願樂によるべきなり、まことにすなはちひげをほどこしてはもののこころをととのへ、いさごを供じては王位をうるなり、ただかれが報謝をむさぼらず、みづからがちからをわかつなり、舟をおき、橋をわたすも、布施の檀度なり。もしよく布施を學するときは、受身捨身、ともにこれ布施なり。治生產業もとより布施にあらざることなし。はなを風にまかせ、鳥をときにまかするも、布施の功業なるべし、

衆生所ニ樂見ー、三入ニ大衆ニ時人所ニ崇敬ー、四好名善譽流ニ聞十方ー、五能爲ニ菩提ニ作ニ淨妙因ーと。

【ひげを施す】本草に云く宋の呂夷簡疾む、仁宗曰く古人言へり、鬚疾を治すべしと、今朕髭を剪て之を與へん藥に合して朕が意を表はせと。白樂天の詩に剪レ鬚燒レ藥賜ニ功臣ーと。

【いさごを供じて】阿育王經第一生因緣品に大路に二兒あり二兒沙中に戲る、一は闍耶二は毘闍耶、この二兒世尊を見て第一兒沙を以て頂と爲し佛鉢に入る、第二兒合掌隨喜偈を說く、佛福田の爲の故に慈悲心を以てこの沙を受くと。

【舟をおき橋を】福田經に七法廣施を說く、一興ニ立佛圖僧房堂閣ー、二園

阿育大王の半菴羅果、よく數百の僧衆に供養せし、廣大の供養なりと證明する道理、よくよく能受の人も學すべし、身力をはげますのみにあらず、便宜をすごさざるべし。まことにみづからに布施の功德の本具なるゆゑに、いまのみづからにえたるなり。ほとけののたまはく、於ニ其自身ー、尙可ニ受用ー、何況能與ニ父母妻子ー。しかあればしりぬ、みづからもちゐるも布施の一分なり、父母妻子にあたふるも布施なるべし。もしよく布施に一塵を捨せんときは、みづからが、所作なりといふとも、しづかに隨喜すべきなり。諸佛のひとつの功德を、すでに正傳しつくれるがゆゑに、菩薩の一法を、はじめて修行するがゆゑに。轉じがたきは衆生のこころなり、一財をきざして衆生の心地を轉じはじむるより、得道にいたるまでも轉ぜんとおもふなり、そのはじめかならず布施をもてすべきなり。かるがゆゑに六波羅蜜のはじめに檀波羅蜜あるなり。心の大小ははかるべからず、物の大小もはかるべからざれども、心轉物のときあり。物轉心の布施あるなり。「愛語といふは、衆生をみるにまづ慈愛の心をおこし、顧愛の言語をほどこすなり。おほよそ暴惡の言語なきなり。世俗には安否をとふ禮儀あり、佛道には珍重のことばあり、不審の孝行あり。慈念衆生猶如赤子のおもひをたくはへて、言語するは愛語なり。德あるはほむべし、德なきはあはれむべし。愛語をこのむよりは、やうやく愛語を增長するなり。しかあればひごろしられずみえざる愛語も現前するなり、現在の身命の存せらんあひだ、このんで愛語すべし、世世生生にも不退轉ならん。怨敵を降伏し、君子を和睦ならしむること、愛語を根本とするなり。

林浴池樹下淸涼、三常施醫藥療救衆病、四作堅牢船濟渡人民、五安設橋梁過渡羸弱、六近道作井渴乏得飲、七造作圊廁施便利處」と。

【阿育半菴羅果】阿育王經第五、時に阿育王復物あること無し唯半菴羅果其の手中に在り、時に王鷄寺に送與して是れ我が最後の所行の布施願くば僧之を受けよと、この物小なりと雖も福德廣大也と」

【慈念衆生】法華提婆品の語」

【廻天の力】增補書言故事卷の一に「唐の張玄素諫議となる、太宗洛陽宮を修治せんとす、玄素力めて諫む、魏徵歎じて云く張公事を論ずる廻天の力あり謂つべし仁人の言其の利博い哉と。天子の意思

むかひて愛語をきくは、おもてをよろこばしめ、こころをたのしくす、むかはずして愛語をきくは、肝に銘じ、魂に銘ず。しるべし愛語は愛心よりおこる、愛心は慈心を種子とせり、愛語よく廻天のちからあることを學すべきなり、ただ能を賞するのみにあらず。利行といふは、貴賤の衆生におきて、利益の善巧をめぐらすなり。たとへば遠近の前途をまもりて、利他の方便をいとなむ。窮亀をあはれみ、病雀をやしなひし、窮亀をみ病雀をみしとき、かれが報謝をもとめず、ただひとへに利行にもよほさるるなり。愚人おもはくは利他をさきとせば、みづからが利はぶかれぬべしと。しかにはあらざるなり、利行は一法なり、あまねく自他を利するなり。むかしの人ひとたび沐浴するにみたびかみをゆひ、ひとたび飡食するにみたびはきいだせしは、ひとへに他を利せしこころなり。ひとのくにの民なればをしへざらんとにはあらざりき。しかあれば怨親ひとしく利すべし、自他おなじく利するなり。もしこのこころをうれば、艸木風水にも利行のおのれづから不退不轉なる道理、まさに利行せらるるなり。ひとへに愚をすくはんといとなむべし。同事といふは、不違なり、自にも不違なり、他にも不違なり、たとへば人間の如來は人間に同ぜるがごとし。人界に同ずるをもてしりぬ、同餘界なるべし。同事をしるとき、自他一如なり。かの琴詩酒は、人をともとし天をともとし神をともとす、人は琴詩酒をともとす、琴詩酒は琴詩酒をともとし、人は人をともとし、天は天をともとし、神は神をともとすることわりあり、これ同事の習學なり。たとへば事といふは、儀なり、威なり、態なり。他をして自に同ぜしめての

をもて左右するといふ意。

【窮龜病雀】行持卷に詳出す。

【ひとたび沐浴】史記世家周公傳に出づ、然我一沐三捉レ髮、一飯三吐レ哺起以待レ士猶恐レ失二天下賢人一。子之レ魯愼勿三以レ國驕二人と。

【琴詩酒】唐書白居易傳に云く以二琴詩酒一爲二三友一。樂天寄二殷州漢一詩云、琴詩酒友皆抛レ我、雪月華時最憶レ君と。

【管子云】管仲字夷吾、著はす所八十六篇あり、此文其篇を考へず。

【仁治癸卯】寛元元年なり、二月廿六日改元の故に。端午は五月五日。提要錄に云く日月會二于鶉首一、律中二蕤賓一と。說處は明示無しと雖も前後により推して興聖寺にての記なるべし

ちに、自をして他に同せしむる道理あるべし。自他はときにしたがふて、無窮なり。管子云、海不レ辭レ水、故能爲二其大一、山不レ辭レ土、故成二其高一、明主不レ厭レ人、故能成二其衆一。しるべし海の水を辭せざるは同事なり、さらにしるべし水の海を辭せざる德も具足せるなり。このゆゑによく水あつまりて海となり、土かさなりて山となるなり。ひそかにしりぬ海は海を辭せざるがゆゑに、海をなしおほきなることをなす、山は山を辭せざるがゆゑに、山をなしたかきことをなすなり。明主は人をいとはざるがゆゑに、その衆をなす。衆とは國なり。いはゆる明主は、帝王をいふなるべし。帝王は、人をいとはざるなり。人をいとはずといへども、賞罰なきにあらず、賞罰ありといへども、人をいとふことなし。むかしすなほなりしときは國に賞罰なかりき、かのときの賞罰は、いまとひとしからざればなり。いまも賞をまたずして道をもとむる人もあるべきなり、愚夫の思慮のおよぶべきにあらず。明主はあきらかなるがゆゑに人をいとはず、人かならず國をなし、明主をもとむるこころあれども、明主の明主たる道理をことごとくしることまれなるゆゑに、明主にいとはれずとのみよろこぶといへども、わが明主をいとはざるとしらず。このゆゑに明主にも、暗人にも、同事の道理あるがゆゑに、同事は薩埵の行願なり、ただまさにやはらかなる容顏をもて一切にむかふべし、この四攝おのおの四攝を具足せるがゆゑに、十六攝なるべし。

仁治癸卯端午日入宋傳法沙門道元記

正法眼藏菩提薩埵四攝法　畢

【葛藤】佛祖の命脈を葛藤といふ。佛佛祖祖嫡嗣して綿綿不斷なるを葛藤纏葛藤と爲す。佛法は釋尊に無始にして迦葉に無終なり、心佛及衆生是三無差別の葛藤あり、唯佛與佛乃能窮盡の葛藤あり、葛藤の佛法を擧拈する一篇。

【祖儀】初祖として來儀す。

【第二十八祖謂門人】傳燈三卷達磨章に詳し。

【尼總持】事苑の八に總持は號なり、名は明練、梁の武帝の女也、初祖に事へて悟道し滅を示す、塔少林を去ること五里許と。

正法眼藏葛藤

釋迦牟尼佛の正法眼藏無上菩提を證傳せること、靈山會には迦葉大士のみなり。嫡嫡正證二十八世菩提達磨尊者にいたる。尊者みづから震旦國に祖儀して正法眼藏無上菩提を大祖正宗普覺大師に付屬し二祖とせり。第二十八祖はじめて震旦國に祖儀あるを初祖と稱す、第二十九祖を二祖と稱するなり。すなはちこれ東土の俗なり。初祖かつて般若多羅尊者のみもとにして佛訓道骨まのあたり證傳しきたれり、根源をもて根源を證取しきたれり、枝葉の本とせるところなり。おほよそ諸聖ともに葛藤の根源を截斷する參學に趣向すといへども、葛藤をきるを截斷といふと參學せず。葛藤をもて葛藤をまつふとしらず、いかにいはんや葛藤をもて葛藤に嗣續することをしらんや。嗣法これ葛藤としれるまれなり、きけるものなし、道著せるいまだあらず、證著せるおほからんや。先師古佛云、「胡蘆藤種纏胡蘆。」この示衆かつて古今の諸方に見聞せざるところなり、はじめて先師ひとり道示せり。胡蘆藤の胡蘆藤をまつふは、佛祖の佛祖を參究し、佛祖の佛祖を證契するなり、たとへばこれ以心傳心なり。

第二十八祖謂二門人一云、「時將レ至矣、汝等蓋レ言二所得一乎。」時門人道副曰、「如二我今所見一、不レ執二文字一、不レ離二文字一、而爲二道用一。」祖云、「汝得二吾皮一。」尼總持曰、「如二我今所解一、

如下慶喜見二阿閦佛國一、一見更不中再見上」。祖云、「汝得二吾肉一。」道育曰、「四大本空、五陰非レ有、而我見處、無二一法可一レ得。」祖云、「汝得二吾骨一。」最後慧可禮三拜後、依レ位而立。」祖云、「汝得二吾髓一。」果爲二二祖一傳法傳衣。」いま參學すべし、初祖道の汝得吾皮肉骨髓は、祖道なり。門人四員、ともに得處あり、聞著あり、その聞著ならびに得處、ともに跳出身心の皮肉骨髓なり、脫落身心の皮肉骨髓なり。知見解會の一著子をもて祖師を見聞すべきにあらざるなり、能所彼此の十現成にあらず。しかあるを正傳なきともがらおもはく、四子おのおの所解に親疎あるによりて、祖道また皮肉骨髓の淺深不同なり、皮肉は骨髓よりも疎なりとおもひ、二祖の見解すぐれたるによりて得髓の印をえたりといふ。かくのごとくいふいひは、いまだかつて佛祖の參學なく祖道の正傳あらざるなり。しるべし祖道の皮肉骨髓は、淺深に非ざるなり。たとひ見解に殊劣ありとも、祖道は得吾なるのみなり。その宗旨は、得吾髓の爲示、ならびに得吾骨の爲示、ともに爲人接人、拈師落艸に足不足あらず、たとへば拈華のごとし、たとへば傳衣のごとし。四員のために道著するところ、はじめより一等なり、祖道は一等なりといへども、四解かならずしも一等なるべきにあらず。四解たとひ片片なりとも、祖道はただ祖道なり。おほよそ道著と見解と、かならずしも相委なるべからず。たとへば祖師の四員の門人にしめすには、なんぢわが皮等をえたりと道取するなり。もし二祖よりのち百千人の門人あらんにも、百千道の說著あるべきなり、窮盡あるべからず。門人ただ四員あるがゆゑに、しばらく皮肉骨髓の四道取ありとも、のこりていまだ道

【慶喜見阿閦佛國】大品般若經囑累品に云く「說二是般若波羅蜜多一時、佛在二四衆中一、乃至現二神足變化一。一切大衆皆見二阿閦佛比丘僧圍繞說一レ法、乃至比丘僧時佛攝二神足一。一切大衆不三復見二阿閦佛、四衆及世界一。不下與二眼作一レ對、何以故、佛攝二神足一故。爾時佛告二阿難一、如レ是阿難、一切法不レ與二眼作一レ對、法不レ見レ法、法不レ知レ法」。法不二相見一と云ふと。慶喜は阿難の譯語、阿閦佛は東方に成佛しその土を妙喜と名く今現に世に在りて說法すと。

【相委】相異なり。

取せず、道取すべき道取おほし、しるべしたとひ二祖に爲道せんにも、汝得吾皮の道取とすべきなり、たとひ汝得吾皮なりとも、二祖として正法眼藏を傳付すべきなり。得皮得髓の殊劣によれるにあらず、また道副道育總持等に爲道せんにも、汝得吾髓と道取すべきなり。吾皮なりとも傳法すべきなり。祖師の身心は、皮肉骨髓ともに祖師なり、髓はしたしく皮はうときにあらず。いま參學の眼目をそなへたらんに、汝得吾皮の印をうるは、祖師をうる參究なり。通身皮の祖師あり、通身肉の祖師あり、通身骨の祖師あり、通身髓の祖師あり、通身心の祖師あり、通身身の祖師あり、通心心の祖師あり、通祖師の祖師あり、通身得吾汝等の祖師あり。これらの祖師ならびに現成して、百千の門人に爲道せんとき、いまのごとく汝得吾皮と說著するなり。百千の說著、たとひ皮肉骨髓なりとも、傍觀いたづらに皮肉骨髓の說著と活計すべきなり。もし祖師の會下に、六七の門人あらば、汝得吾心の道著すべし、汝得吾佛の道著すべし、汝得吾眼睛の道著すべし、汝得吾證の道著すべし。いはゆる汝は、祖なる時節あり、慧可なる時節あり、得の道理を審細に參究すべきなり。しるべし汝得吾あるべし、吾得汝あるべし、得吾汝あるべし、得汝吾あるべし。祖師の身心を參見するに、內外一如なるべからず、渾身は通身なるべからずといはば、佛祖現成の國土にあらず、皮をえたらんは、骨肉髓をえたるなり、骨肉髓をえたるは、皮肉面目をえたるなり。ただこれを盡十方界の眞實體と曉了するのみならんや。さらに皮肉骨髓なり、このゆゑに得吾衣なり、汝得法なり。これによりて道著も跳出の條條なり、師資同參す、

【趙州示衆】趙州錄の上卷に出づ。今二章に分つて掲ぐ。

【趙睦二州】趙州は韶陽縣の趙州從諗禪師、睦州は新定縣の睦州陳道明

【宋雲が所見】傳燈三初祖章に云く

開著も跳出の條條なり、師資同參す、師資同參究は佛祖の葛藤なり、佛祖の葛藤は、皮肉骨髓の命脈なり。拈華瞬目、すなはち葛藤なり、破顏微笑、すなはち皮肉骨髓なり、さらに參究すべし、葛藤種子すなはち脫體の力量あるによりて、葛藤を纏遶する枝葉華果ありて回互不回互なるがゆゑに佛祖現成し、公案現成するなり。趙州眞際大師示衆云、「迦葉傳ニ與阿難一、且道、達磨傳ニ與什麼人一。」因僧問、「且如ニ二祖得髓一、又作麼生。」師云、「莫レ謗ニ二祖一。」師又云、「達磨也有レ語、在外者得レ皮、在裏者得レ骨、且道更在レ裏者得ニ什麼一。」僧問、「如何是得髓底道理。」師云、「但識ニ取皮一、老僧者裏髓也不立。」僧問、「如何是髓。」師云、「與麼即皮也摸未著。」しかあればしるべし皮也摸未著のときは髓也摸未著なり、皮を摸得するは髓もうるなり。與麼即皮也摸未著の道理を功夫すべし。如何是得髓底道理と問取するに、但識取皮、老僧者裏髓也不立と道取現成せり。識取皮のところ、髓也不立なるを眞箇の得髓底の道理とせり。かるがゆゑに二祖得髓又作麼生の問取現成せり、迦葉傳與阿難の時節を當觀するに、阿難藏身於迦葉なり、迦葉藏身於阿難なり。しかあれども傳與裏の相見時節には、換面目皮肉骨髓の行履をまぬかれざるなり、これによりて且道達磨傳ニ與什麼人一としめすなり、達磨すでに傳與するときは達磨なり、二祖すでに得髓するには達磨なり、この道理の參究によりて、佛法なほ今日にいたるまで佛法なり。もしかくのごとくならざらんは、佛法の今日にいたるにあらず。この道理、しづかに功夫參究して、自道取すべし、教他道取すべし。在外者得皮、在裏者得骨、且道、更在裏者得ニ什麼一といまいふ外いまいふ裏、

傳レ法得レ人、遂端坐而逝、即後魏孝明帝太和十九年丙辰年十月五日也、其年十二月廿八日葬ニ熊耳山一、起ニ塔定林寺一、後三年魏宋雲奉レ使西域一回、遇ニ師于葱嶺一、見下手携ニ隻履一翩翩獨逝上、雲問師何往、師曰西天去、又謂雲曰汝主已厭レ世、雲聞レ之茫然、別レ師復命、明帝已登遐矣、雲遂ニ孝莊即一レ位、雲具奏ニ其事一、帝令レ啓レ壙、惟空棺一隻革履存矣、擧朝爲驚歎、奉レ詔取ニ遺履一於ニ少林寺一供養と。

【熊耳山にをさめたてまつりぬ】熊耳山は河南府、盧氏縣に在り山永寧に兩峰相並ぶこと熊耳の如しと。北山に達磨大師を葬れりと決定すべしと。

【寛元元年】祖師四十四歳、興聖寺に於ける示衆。

その宗旨もとも端的なるべし。外を論ずるとき皮肉骨髓ともに外あり、裏を論ずるとき皮肉骨髓ともに裏あり、しかあればすなはち四員の達磨、ともに百千萬の皮肉骨髓の向上を條條に參究せり。髓よりも向上あるべからずとおもふことなかれ、さらに三五枚の向上あるなり。趙州古佛のいまの示衆、これ佛道なり、自餘の臨濟德山大潙雲門等のおよぶべからざるところ、いまだ夢見せざるところなり。いはんや道取あらんや。近來の杜撰の長老等、ありとだにもしらざるところなり、かれらに爲説せば、驚怖すべし。雪竇明覺禪師云、「趙州古佛也。」しかあれば古佛の道は佛法の證驗なり、自己の曾道取なり。雪峯眞覺大師云、「趙州古佛。」さきの佛祖も、古佛の讃歎をもて讃歎す、のちの佛祖も、古佛の讃歎をもて讃歎す。しりぬ古今の向上に超越の古佛なりといふことを。しかあれば皮肉骨髓の葛藤する道理は、古佛の示衆する汝得吾の標準なり、この標準を功夫參究すべきなり。また初祖は西歸するといふこれ非なりと參學するなり、宋雲が所見かならずしも實なるべからず、宋雲いかでか祖師の去就をみん、ただ祖師歸寂ののち熊耳山にをさめたてまつりぬるとならひしるを、正學とするなり。

爾時寛元元年癸卯七月七日在ニ雍州宇治郡觀音導利興聖寶林寺一示衆

正法眼藏葛藤　畢

【三界唯心】三界は欲色無色の世界にあらず、唯心の世界なり、迷情有苦の世界にあらず、唯心の世界なり、故に三界は三界にあらず唯心の世界なり。世界を唯心とするにはあらず唯心を世界とするにあらず、唯唯心也三界也、並べるにあらず重なれるに非ざるなり、

【釋迦大師曰】佛經說取意、華嚴離世間品に三界所有唯是一心とあり、晋華嚴第十一巻に心佛及衆生是三無差別の語あり。この四句台家實相義問答中に出す、四句聯續の文とも見えずと云へり。

【今此三界】法華譬喩品の文。

【衆生】摩訶衍論第一に云く、還數の故に衆也、受生の故に生也と。

正法眼藏三界唯心

釋迦大師道、「三界唯一心、心外無別法、心佛及衆生、是三無差別。」一句の道著は、一代の擧力なり、一代の擧力は、擧力の全擧なり、たとひ强爲の爲なりとも、云爲の爲なるべし。このゆゑにいま如來道の三界唯心は、全如來の全現成なり、全一代は全一句なり三界は全界なり。三界すなはち心といふにあらず。そのゆゑは、三界は、いく玲瓏八面も、なほ三界なり、三界にあらざらんと誤錯すといふとも、總不著なり。內外中間、初中後際、みな三界なり、三界は三界の所見のごとし、三界にあらざるものの所見は、三界を見不正なり。三界には三界の所見を舊窠とし、三界の所見を新條とす。舊窠也三界見、新條也三界見なり。このゆゑに釋迦大師道、「不如三界、見於三界。」この所見すなはち三界なり、この三界は所見のごとくなり。三界は本有にあらず、三界は今有にあらず、三界は新成にあらず、三界は因緣生にあらず、三界は初中後際にあらず。出離三界あり、今此三界あり、これ機關の機關と相見するなり、葛藤の葛藤を生長するなり。今此三界は、三界の所見なり。いはゆる所見は、見於三界なり、見於三界は、見成三界なり、三界見成なり、見成公案なり。よく三界をして發心修行菩提涅槃ならしむ、これすなはち皆是我有なり。このゆゑに釋迦大師道、「今此三界、皆是我有、其中衆生、悉是吾子。」いまこの三界は、如來の

【父少子老】法華涌出品に父少而子老の語あり。

【令嗣】令は佳なり。よいあとつぎをいふ。

我有なるがゆゑに、盡界みな三界なり。三界は盡界なるがゆゑに、今此は過現當來なり、過現當來の現成は、今此を罣礙せざるなり、今此の現成は、過現當來を罣礙するなり。我有は、盡十方界眞實人體なり、盡十方界沙門一隻眼なり。衆生は、盡十方界眞實體なり、一一衆生の生衆なるゆゑに衆生なり。悉是吾子は、子也全機現の道理なり。しかあれども吾子かならず身體髮膚を慈父にうけて、毀破せず虧闕せざるを、子現成とす。而今は父前子後にあらず、子前父後にあらず、父子あひならべるにあらざるを、吾子の道理といふなり。與授にあらざれどもこれをうく、奪取にあらざれどもこれをえたり、去來の相にあらず、大小の量にあらず、老少の論にあらず、老少を佛祖老少のごとく保任すべし。父少子老あり、父老子少あり、父老子老あり、父少子少あり、父の老を學するは子にあらず、子の少をへざらんは父にあらざらん。子の老少と、父の老少と、かならず審細に功夫參究すべし、倉卒なるべからず。父子同時に生現する父子あり、父子同時に現滅する父子あり、父子不同時に現生する父子あり、父子不同時に現滅する父子あり。慈父を罣礙せざれども、吾子を現成せり、吾子を罣礙せずして、慈父現成せり。有心衆生あり、無心衆生あり、有心吾子あり、無心吾子あり。かくのごとく吾子子吾ことごとく、釋迦慈父の令嗣なり。十方盡界にあらゆる過現當來の諸衆生は、十方盡界の過現當の諸佛なり、諸佛の吾子は衆生なり、衆生の慈父は諸佛なり。しかあればすなはち百艸の華果は、諸佛の我有なり、巖石の大小は、諸佛の我有なり、安處は林野なり、林野は已離なり。しかもかくのごとくなり

【諸佛應化法身】仁王般若經第一に出づ。

【造次顚沛】論語里仁に云く、君子無レ終レ食之間違レ仁、造次必於レ是、顚沛必於レ是と。

【玄沙問眞應】玄沙師備とその師地藏桂琛禪師との問答。傳燈玄沙章に出づ。

といふとも、如來道の宗旨は、吾子の道のみなり、其父の道いまだあらざるなりと參究すべし。釋迦牟尼佛道、「諸佛應化法身、亦不レ出二三界一、三界外無二衆生一、佛何所レ化、是故我言三界外別有二一衆生界藏一者、外道大有經中說、非二七佛之所一レ說。」あきらかに參究すべし、諸佛應化法身は、みなこれ三界なり、三界は無外なり。たとへば如來の無外なるがごとし、牆壁の無外なるがごとし。三界の無外なるがごとく、衆生無外なり。無衆生のところ、佛何所レ化なり、佛所化はかならず衆生なり。しるべし三界外は一衆生界藏を有せしむるは、外道大有經なり、七佛經にあらざるなり。唯心は一二にあらず、三界にあらず、出三界にあらず。無有錯謬なり、有慮知念覺なり、無慮知念覺なり、牆壁瓦礫なり、山河大地なり、心これ皮肉骨髓なり、心これ拈華破顏なり。有心あり、無心あり、有身の心あり、無身の心あり、身先の心あり、身後の心あり。身を生ずるに胎卵濕化の種品あり、心を生ずるに胎卵濕化の種品あり。青黃赤白これ心なり、長短方圓これ心なり、生死去來これ心なり、年月日時これ心なり、夢幻空華これ心なり、水沫泡焰これ心なり、春華秋月これ心なり、造次顚沛これ心なり。しかあれども毀破すべからず、かるがゆゑに諸法實相心なり、唯佛與佛心なり。

玄沙院宗一大師、問二地藏院眞應大師一云、「三界唯心、汝作麼生會。」眞應指二椅子一曰、「和尚喚二遮箇一作二什麼一。」大師云、「椅子。」眞應曰、「和尚不レ會二三界唯心一。」大師云、「我喚二遮箇一作二竹木一、汝喚作二什麼一。」眞應云、「桂琛亦喚作二竹木一。」大師云、「盡大地覓下一箇會二佛法一人上

【道趙州東門南門】傳燈趙州章に僧趙州に問ふ、如何なるか是れ趙州、師云く東門南門西門北門と。

不可得」といま大師の問取する「三界唯心汝作麼生會」は、作麼生會未作麼生會、おなじく三界唯心なり。このゆゑに、未三界唯心なるべし。眞應このゆゑに椅子をさしていはく、「和尚喚遮箇什麼。」しるべし汝作麼生會は、喚遮箇作什麼なり。大師道の椅子は、且道すべし、これ會三界語なりや、不會三界語なりや、三界語なりや、非三界語なりや、椅子道なりや、大師道なりや、かくのごとく試道看の參究すべし、試會看の會取あり、試參看の參究あるべし。眞應いはく、「和尚不會三界唯心。」この道、たとへば道趙州するなかの東門南門なりといへども、さらに西門北門あり、さらに東趙州南趙州あり。たとひ會三界唯心ありとも、さらに不會三界唯心を參究すべきなり。さらにまた會不會にあらざる三界唯心あり。大師道、「我喚遮箇作竹木。」この道取かならず聲前句後に光前絶後の節目を參徹すべし、いはゆる我喚遮箇作竹木、いまの喚作よりさきは、いかなる喚作なりとかせん、從來の八面玲瓏に、初中後ともに竹木なりとやせん、いまの喚作竹木は、道三界唯心なりとやせん、不道三界唯心なりとやせん、しるべしあしたに三界唯心を道取するには、たとひ椅子なりとも、たとひ唯心なりとも、たとひ三界なりとも、暮に三界唯心を道取するには、我喚遮箇作竹木と道取せらるるなり。眞應道の「桂琛亦喚作竹木。」しるべし師資の對面道なりといふとも、同參の頭正尾正なるべし、しかありといへども大師道の喚遮箇作竹木と、眞應道の亦喚作竹木と同なりや不同なりや、是なりや不是なりやと參究すべきなり。大師云、「盡大地覓一箇會佛法人不可得。」この道取をも、審細に辨肯すべし。しるべし大師もた

だ喚作竹木なり、さらにいまだ三界唯心を會取せず、三界唯心を不會取せず、三界唯心を不會取せず、三界唯心を道取せず、三界唯心を不道取せず。しかもかくのごとくなりといへども、宗一大師に問著すべし、覓一箇會佛法人不可得はたとひ道著すとも、試道看なにを喚作してか盡大地とする、おほよそ恁麼參究功夫すべきなり。

爾時寛元元年癸卯閏七月初一日在二越宇禪師峯頭一示衆

正法眼藏三界唯心　畢

正法眼藏說心說性

神山僧密禪師、與二洞山悟本大師一行次、悟本大師指二傍院一曰、「裏面有レ人說レ心說レ性。」僧密師伯曰、「是誰。」悟本大師曰、「被二師伯一問、直得去死十分。」僧密師伯曰、「說レ心說レ性底誰。」悟本大師曰、「死中得レ活。」說心說性は、佛道の大本なり。これより佛佛祖祖を現成せしむるなり。說心說性にあらざれば、轉妙法輪することなし。發心修行することなし。大地有情同時成道することなし、一切衆生無佛性なることなし。拈華瞬目は、說心說性なり、破顔微笑は、說心說性なり、禮拜依位而立は、說心說性なり、祖師入梁は、說心說性なり、夜半傳衣は、說心說性なり。拈拄杖これ說心說性なり、横拂子これ說心說性なり、おほよそ佛佛祖祖のあらゆる功德は、ことごとくこれ說心說性なり。平常の說心說性あり、牆壁

【寛元元年】祖齡四十四歲、越前禪師峰にての示衆。

【禪師峰】越前平泉寺の南二十餘町に在り、舊に山師峰と稱す、今禪師峰村に禪師峰寺あり、その當時は天台宗に屬す、今は曹洞宗なり。黄泉師曰く、黄泉昔從二玄透師一、訪二祖迹於祖山之南北一、世二年予今一夢寐恍惚矣と。

【說心說性】說心說性、は佛祖の慧命なり、世尊一代の教說、祖師三國の普說、唯是れ說心說性のみ、祖佛所說の說心說性を六根身心に謹取行取すべし。

【神山僧密】雲巖曇晟禪師の嗣、洞山大師と同道行脚すること二十年、洞山の從敬して密師伯と云へり、傳詳ならず。この公案傳燈十五、又洞

山錄に載す。

【大慧禪師宗杲】圜悟克勤の嗣、俗姓は奚氏宣城の人、十七初め儒を學び十七歲佛門に投じ曹洞の門を叩き後湛堂準禪師に侍す、一日圜悟の上堂に會ひ忽然省悟、育王徑山に住して看話の禪を唱ふ。隆興元年八月寂、壽七十五。

【いまのともがら】大慧廣錄三十卷に大都是等の語あり。取意文なり。

【縑緗】縑は並絲繒也、緗は淺黃也、參本云く縑緗は猶し莊飾と言はんが如しと、佛祖の百福莊嚴なり。

【列璧】辟は璧也、列璧は猶し璧玉を陳列すと言はんが如し、參本に此外比類稀なるを謂ふと佛祖の智慧莊嚴に喩ふ。

瓦礫の說心說性あり、いはゆる心生種種法生の道理現成し、心滅種種法滅の道理現成する、しかしながら心の說なる時節なり。性の說なる時節なり。しかあるに心を通ぜず性に達せざる庸流、くらくして說心說性をしらず、談玄談妙をしらず、佛祖の道にあるべからざるといひ、あるべからざるとをしふ。說心說性を說心說性としらざるによりて、說心說性を說心說性とおもふなり。これことに大道の通塞を批判せざるによりてなり。後來徑山大慧禪師宗杲といふありていはく、「いまのともがら說心說性をこのみ、談玄談妙をこのむによりて、得道おそし。ただまさに心性ふたつながらなげすてきたり、玄妙ともに忘じきたりて、二相不生のとき證契するなり。」この道取いまだ佛祖の縑緗をしらず、佛祖の列璧をきかざるなり。これによりて心はひとへに慮知念覺なりとしりて、慮知念覺も心なることを學せざるによりて、かくのごとくいふ。性は澄湛寂靜なるとのみ妄計して、佛性法性の有無をしらず、如是性をゆめにもいまだみざるによりて、しかのごとく佛法を僻見せるなり。佛祖の道取する心は、皮肉骨髓なり。佛祖の保任せる性は、竹篦拄杖なり。佛祖の證契する玄は、露柱燈籠なり。佛祖の擧拈する妙は、知見解會なり。佛祖の眞實に佛祖なるは、はじめよりこの心性を聽取し、說取し行取し證取するなり。この玄妙は保任取し、參學取するなり。かくのごとくなるを學佛祖の兒孫といふ、しかのごとくにあらざれば學道にあらず。このゆゑに得道のとき、得道せず、不得道のとき、不得道ならざるなり。得不の時節ともに蹉過するなり。たとひなんぢがいふがごとく、心性ふたつながら忘ずといふ

【爾時初祖謂二二祖一】傳燈三、初祖章夾註に此文あり。

は、心の說あらしむる分なり、百千萬億の小分なり、玄妙ともになげすてきたるといふ、談玄の談ならしむる分なり、この闗棙子を擧せず、おろかに忘ずといはば、手をはなれんするとおもひ、身にのがれぬるとしれり、いまだ小乘の局量を解脫せざるなり。いかでか大乘の奧玄におよばん。いかにいはんや向上の闗棙子をしらんや。佛祖の茶飯を喫しきたるといひがたし。參師勤恪するは、ただ說心說性を身心の正當恁麼時に體究するなり、身先身後に參究するなり、さらに二三のことなることなし。爾時初祖謂二二祖一曰、「汝但外息二諸緣一、內心無レ喘、心如二牆壁一、可二以入一レ道。」二祖種種說心說性、俱不二證契一。一日忽然省得。果白二初祖一曰、「弟子此回始息二諸緣一也。」初祖知二其已悟一、更不二窮詰一、只曰、「莫レ成二斷滅一否。」二祖曰、「無。」初祖曰、「子作麼生。」二祖曰、「了了常知故言レ之不レ可レ及。」初祖曰、「此乃從上諸佛諸祖、所傳心體、汝今既得、善自護持。」この因緣、疑著するものあり、擧拈するあり。二祖の初祖に參侍せし因緣のなかの、一因緣かくのごとし。二祖しきりに說心說性するに、はじめは相契せず、やうやく積功累德して、つひに初祖の道を得道しき。庸愚おもふらくは二祖はじめに說心說性せしときは證契せず、そのとが說心說性するにあり、のちには說心說性をすてて證契せりとおもへり。「心如二牆壁一、可二以入一レ道」の道を參徹せざるによりて、かくのごとくいふなり、これことに學道の區別にくらし。ゆゑいかんとなれば、菩提心をおこし、佛道修行におもむくのちよりは、難行をねんごろにおこなふとき、おこなふといへども百行に一當なし、しかあれども或從知識、或從經卷して、や

うやくあたることをうるなり。いまの一當は、むかしの百不當のちからなり、百不當の一老なり、聞教修道得證、みなかくのごとし。きのふの說心說性は、百不當なりといへども、きのふの說心說性の百不當、たちまちに今日の一當なり。行佛道の初心のとき、未練にして通達せざればとて、佛道をすてて餘道をへて佛道をうることなし。佛道修行の始終に達せざるともがら、この通塞の道理なることをあきらめがたし。佛道は初發心のとき、佛道なり、成正覺のときも佛道なり、初中後ともに佛道なり。たとへば萬里をゆくものの、一步も千里のうちなり、千步も千里のうちなり。初一步と千步とことなれども、千里のおなじきがごとし。しかあるを至愚のともがらはおもふらく、『學佛道の時は、佛道にいたらず、果上の時のみ佛道なり』と。學道說道をしらず、學道行道をしらず、學道證道をしらざるによりてかくのごとし。迷人のみ佛道修行して大悟すと學して、不迷人も佛道修行して大悟すとしらずきかざるともがら、かくのごとくいふなり。證契よりさきの說心說性は、佛道なりといへども、說心說性して證契するなり。證契は迷者のはじめて大悟するをのみ證契といふと參學すべからず。迷者も大悟し、悟者も大悟し、不悟者も大悟し、不迷者も大悟し、證契者も證契するなり。しかあれば說心說性は、佛道の正直なり。杲公この道理に達せず、說心說性すべからずといふ、佛法の道理にあらず。いまの大宋國には、杲公におよべるもなし。高祖悟本大師、ひとり諸祖のなかの尊として、說心說性の說心說性なる道理に通達せり。いまだ通達せざる諸方の祖師、いまの因緣のごとくなる道取なし。いはゆ

【臨濟無位眞人】臨濟錄に云く臨濟示衆云、有二一無位眞人一、常向二汝等面門一出入、初心未證據者看看と。

る僧密師伯と大師と行次に、傍院をさしていはく「裏面有レ人、說心說性。」この道取は、高祖出世よりこのかた、法孫かならず祖風を正傳せり、餘門の夢にも見聞せるところにあらず、いはんや夢にも領覽の方をしらんや、ただ嫡嗣たるもの正傳せり。この道理、もし正傳せざらんは、いかでか佛道に達本ならん。いはゆるいまの道理は、或裏或面、有人人有說心說性なり、面裏心說、面裏性說なり、これを參究功夫すべし。性にあらざる說いまになし、說にあらざる心いまだあらず。佛性といふは、一切の說なり、無佛性といふは、一切の說なり。佛性の性なることを參學すといふとも、有佛性を參學せざらんは、學道にあらず、無佛性を參學せざらんは、參學にあらず。說の性なることを參學する、これ佛祖の嫡孫なり、性は說なることを信受する、これ嫡孫の佛祖なり。心は疎動し、性は恬靜なりと道取するは、外道の見なり。性は澄湛にして、相は遷移すると道取するは、外道の見なり、佛道の學心、學性しかあらず。佛道の行心、行性は、外道にひとしからず、佛道の明心明性は、外道その分あるべからず。佛道には有人の說心說性あり、無人の說心說性あり、有人の不說心不說性あり、無人の不說心不說性あり。說心未說心、說性未說性あり。無人のときの說心を學せざれば、說心未到田地なり。有人のときの說心を學せざれば、說心未到田地なり。說心無人を學し、無人說心を學し、說心是人を學し、是人說心を學するなり。臨濟の道取する盡力は、わづかに無位眞人なりといへども、有位眞人をいまだ道取せず。のこれる參學、のこれる道取、いまだ現成せず、未到參徹地といふべし。說心說性は、說

【張三李四】張公李公と謂はんが如し、三四は複數を表はす語、支那に多くある姓、日本の加藤小林の如し【萬期】期は周年をいふ。猶し萬年と言はんが如し、

佛說祖なるがゆゑに、耳處に相見し、眼處に相見すべし。ちなみに僧密師伯いはく、「是誰。」この道取を現成せしむるに、僧密師伯さきにもこの道取に乘ずべし、のちにもこの道取に乘ずべし。是誰は、那裏の說心說性なり。しかあれば是誰と道取せられんとき、是誰と思量取せられんときは、すなはち說心說性なり。この說心說性は餘方のともがら、かつてしらざるところなり。子をわすれて賊とするゆゑに賊を認じて子とするなり。大師いはく、「被二師伯一問直得去死十分。」この道をきく參學の庸流おほく、おもふ、說心說性する有人の是誰といはれて、直得去死十分なるべし、そのゆゑは、是誰のことは對面不相識なり、全無所見なるがゆゑに死句なるべし、かならずしもしかにはあらず。この說心說性は、徹者まれなりぬべし。十分の去死は、一二分の去死にあらず。このゆゑに去死の十分なり。被問の正當恁麼時たれかこれを遮天蓋地にあらずとせん。照古也際斷なるべし、照今也際斷なるべし、照來也際斷なるべし、照正當恁麼時也際斷なるべし。僧密師伯いはく、「說心說性底誰。」さきの是誰といまの是誰と、その名は張三なりとも、その人は李四なり。大師いはく、「死中得活。」この死中は、直得去死を直指すとおもひ、說心說性底を直指して是誰とはみだりに道取するにあらず。是誰は說心說性の有人を差排す、かならず十分の去死を萬期せずといふと參學することありぬべし。大師道の死中得活は、有人說心說性の聲色現前なり、またさらに十分の去死のなかの一兩分なるべし。活はたとひ全活なりとも、死の變じて活と現ずるにあらず、得活の頭正尾正に脫落なるのみなり。おほよそ佛道祖道には

【寛元元年】祖齢四十四歳、吉峰寺に於ける示衆。月日無しと雖も閏七月一日以後なり。【吉峰寺】永平主山の背に在り松岡溪の奥に舊趾あり

【佛道】無上の法王是を佛といふ。其履踐するところ是れ菩提道なり。佛を離れて道無く道を措いて佛無し佛道は人人の脚跟下に在り、歩歩踏著するところ是れ佛道、人人を離れ佛道無し、箇箇是れ佛道の端的なり佛道それ看よ。【曹谿古佛衆にしめし】六祖壇經の語。

かくのごとくの説心説性ありて、參究せらるるなり。又且のときは十分の死を死して、得活の活計を現成するなり。しるべし唐代より今日にいたるまで、説心説性の佛道なることをあきらめず、教行證の説心説性にくらくて、胡説亂道する、可憐憫者おほし。身先身後にすくふべし、爲道すらくは説心説性は、これ七佛祖師の要機なり。

爾時寛元元年癸卯在二于日本國越州吉田縣吉峰寺一示衆

正法眼藏説心説性　畢

正法眼藏佛道

曹谿古佛、あるとき衆にしめしていはく『慧能より七佛にいたるまで四十祖あり。』この道を參究するに七佛より慧能にいたるまで四十佛なり。佛佛祖祖を算數するには、かくのごとく算數するなり。かくのごとく算數すれば、七佛は七祖なり、三十三祖は三十三佛なり、曹谿の宗旨かくのごとし。これ正嫡の佛訓なり。正傳の嫡嗣のみ、その算數の法を正傳す、釋迦牟尼佛より曹谿にいたるまで、三十四祖あり。この佛祖相承、ともに迦葉の如來にあひたてまつれりしがごとく、如來の迦葉をえましますがごとし。釋迦牟尼佛、迦葉佛に參學しましますがごとく。師資ともに于今有在なり、このゆゑに正法眼藏まのあたり嫡嫡相承しきたれり。佛法の正命ただこの正傳のみなり。佛法は、かくのごとく正傳する

【みだりに禪宗と】以下佛道を謾りに禪宗と稱するの非を呵責せらる。宋朝にては臨濟宗最も盛にして之を一般に禪宗と稱せしによる。

【石門林間錄】行持卷に委出す。

がゆゑに、付屬の嫡嫡なり。しかあれば佛道の功德要機、もらさずそなはれり。西天より東地につたはれて、十萬八千里なり。在世より今日につたはれて、二千餘載。この道理を參學せざるともがら、みだりにあやまりていはく、佛祖正傳の正法眼藏、涅槃妙心、みだりにこれを禪宗と稱す、祖師を禪祖と稱す、學者を禪子と號す。あるひは禪和子と稱し、あるひは禪家流の自稱あり。これみな僻見を根本とせる枝葉なり。西天東地、從古至今、いまだ禪宗の稱たらざるを、みだりに自稱するは、佛道をやぶる魔なり、佛祖のまねかざる怨家なり。

石門林間錄云、菩提達磨、初自レ梁之レ魏、經二行於嵩山之下一、倚二杖於少林一、面壁燕坐而已、非二習禪一也。久之人莫レ測二其故一、因以二達磨一爲二習禪一。夫禪那諸行之一耳、何足三以盡二聖人一。而當時之人、以レ之爲レ史者、又從而傳二於習禪之列一、使下與二枯木死灰之徒一爲上レ伍、雖レ然聖人非レ止二於禪那一、而亦不レ違二禪那一、如下易出二乎陰陽一、而亦不上レ違二乎陰陽一。

第二十八祖と稱するは、迦葉大士を初祖として稱するなり。毗婆尸佛よりは、第三十五祖なり。七佛および二十八代、かならずしも禪那をもて證道つくすべからず。このゆゑに古先いはく、禪那は諸行のひとつならくのみ。なんぞもて聖人をつくすにたらん。この古先、いささか人をみきたれり、祖宗の堂奧にいれり。このゆゑにこの道あり。近日は大宋國の天下に難得なるべし、ありがたかるべし。たとひ禪那なりとも禪宗と稱すべからず、いはんや禪那いまだ佛法の總要にあらず、しかあるを佛佛正傳の大道を、ことさら禪宗と

【世尊靈山百萬】大梵天王問佛決疑經に此文あり。此經眞僞未判なり。

【諸佛無上妙道】傳燈三、初祖章の文。

稱するともがら、佛道は未夢見在なり、未夢聞在なり、未夢傳在なり。禪宗を自號するともがらにも佛法あるらんと聽許することなかれ。禪宗の稱たれか稱しきたる、諸佛祖師の禪宗と稱するいまだあらず。しるべし禪宗の稱は魔波旬の稱するなり、魔波旬の稱を稱したらんは、魔黨なるべし、佛祖の兒孫にあらず。

世尊靈山百萬衆前、拈二優曇華一瞬目、衆皆默然、唯迦葉尊者、破顏微笑。世尊云、吾有二正法眼藏、涅槃妙心一、竝以二僧伽梨衣一、付二屬摩訶迦葉一。」世尊の迦葉大士に付屬しましますは、吾有正法眼藏涅槃妙心なり。このほかさらに吾有禪宗付屬摩訶迦葉にあらず、竝付僧伽梨衣といひて、竝付禪宗といはず。しかあればすなはち世尊在世に禪宗の稱またくきこえず。

初祖そのとき二祖にしめしていはく、「諸佛無上妙道、曠劫精勤、難行苦行、難忍能忍、豈以二小德小智、輕心慢心一、欲レ冀二眞乘一。」またいはく、「諸佛法印、匪二從レ人得一。」またいはく、「如來以二正法眼藏一付二屬迦葉大士一。」

いましめすところ、諸佛無上妙道、および正法眼藏、ならびに諸佛法印なり。當時すべて禪宗と稱することなし、禪宗と稱すべき因緣きこえず。いまこの正法眼藏は、揚眉瞬目して面授しきたる、身心骨髓をもてさづけきたる。身心骨髓に稟受しきたるなり、身先身後に傳授し稟受しきたり、心上心外に傳授し稟授するなり。世尊迦葉の會に禪宗の稱きこえず、初祖二祖の會に禪宗の稱きこえず、五祖六祖の會に禪宗の稱きこえず、青原南嶽の會

【示大衆言吾之】傳燈十四、石頭章上堂の語。

に禪宗の稱きこえず、いづれのときよりたれ人の稱しきたるとなし、學者のなかに學者のかずにあらずして、ひそかに壞法盜法のともがら稱しきたるならん。佛祖いまだ聽許せざるを、晩學みだりに稱するは、佛祖の家門を損するならん。また佛佛祖祖の法のほかに、さらに禪宗と稱する法のあるににたり。もし佛祖の道のほかにあらんは、外道の法なるべし。すでに佛祖の兒孫としては、佛祖の骨髓面目を參學すべし、佛祖の道に投せるなり、這裏を逃逝して外道を參學すべからず。まれに人間の身心を保任せり古來の辦道力なり。この恩力をうけて、あやまりて外道を資せん、佛祖を報恩するにあらず。大宋の近代、天下の庸流、この妄稱禪宗の名をききて、俗徒おほく禪宗と稱し、達磨宗と稱し、佛心宗と稱する妄稱きほひ風聞して、佛道をみだらんとす。これは佛祖の大道いまだかつてしらず、正法眼藏ありとだにも見聞せず、信受せざるともがらの亂道なり。正法眼藏をしらん、たれか佛道をあやまり稱することあらん。このゆゑに

南嶽山石頭庵無際大師上堂、示ニ大衆ニ言、吾之法門、先佛傳受、不レ論ニ禪定精進ニ、唯達ニ佛之知見ニ。しるべし七佛諸佛より、正傳ある佛祖、かくのごとく道取するなり。ただ吾之法門、先佛傳受と道現成す、吾之禪宗先佛傳受と道現成なり、禪定 精進の條條をわかず、佛之知見を唯達せしむ、精 進禪 定をきらはず唯達せる佛之知見なり。これを吾有正法眼藏付屬とせり。吾之は吾有なり、法門は正法なり。吾之、吾有、吾髓は、汝得の付屬なり。無際大師は、靑原高祖の一子なり、ひとり堂奧にいたれり。曹谿古佛の剃髮の法

【有宗空宗】有宗は法相宗、空宗は三論宗。

【先師古佛上堂】淨祖行錄の語。云く「師常嫌諸方競五家宗風。示衆云、近年祖師道廢、魔黨畜生多、頻頻擧五家名目、苦哉、箇箇祇管道五家家風有別者、不是佛法也、不是祖師道也」と。

子なり。しかあれば曹谿古佛は祖なり、父なり。青原高祖は、兄なり。師なり。佛道祖席の英雄は、ひとり石頭菴無際大師のみなり。佛道現成の果果條條、みな古佛の不古なり、古佛の長今なり、これを正法眼藏の眼睛とすべし。自餘に比準すべからず、しらざるもの江西大寂に比するは非なり、しかあればしるべし先佛傳受の佛道は、なほ禪定といはず、いはんや禪宗の稱論ならんや、あきらかにしるべし禪宗と稱するは、あやまりのはなはだしきなり。つたなきともがら有宗空宗のごとくならんと思量して、宗の稱なからんは、所學なきがごとくなげくなり。佛道かくのごとくなるべからず、かつて禪宗と稱せずと一定すべきなり。しかあるに近代の庸流、おろかにして古風をしらず、先佛の傳受なきやからあやまりていはく「佛法のなかに五宗の門風ありといふ、これ自然の衰微なり、これを拯濟する一箇半箇いまだあらず。先師天童古佛はじめてこれをあはれまんとす、人の運なり、法の達なり。

先師古佛上堂、示衆云「如今箇箇祇管道宗門佛法眼藏潙仰臨濟曹洞等家風有別者、不是佛法也、不是祖師道也。この道現成は、千歳にあひがたし。先師ひとり道取す、十方にききがたし、圓席ひとり聞取す。しかあれば一千の雲水のなかに、聞著する耳朶なし、見取する眼睛なし。いはんや心を擧してきくあらんや、いはんや身處に聞著するあらんや。たとひ自己の渾身心に聞著する、億萬劫にありとも、先師の通身心を擧拈して、聞著し、證著し信著し、脱落著するなかりき。あはれむべし大宋一國の十方ともに先師をもて諸方の

【三玄三要】臨濟接化の手段、玄中玄、體中玄、句中玄、之を三玄と謂ふ、三玄は第一要第二要第三要、指是に句あり略す。夫臨濟上堂の語に一句語須ク具ニ三玄ヲ、一玄門須ク具ニ三要ヲと。

【四料簡】有時奪人不奪境、有時奪境不奪人、有時人境兩俱奪、有時人境俱不奪。

【四照用】先照後用、先用後照、照用同時、照用不同時也。皆是れ臨濟接化の機關なり。

【九帶】會元十二浮山遠章に一正法眼藏帶、二佛法藏帶、三理貫帶、四事貫帶、五理事縱横帶、六屈曲垂帶、七妙叶兼帶、八金針双鎖帶、九平懷常實帶といふ。

【三句】人天眼目に云く雲門文偃の三句、函蓋乾坤、

長老等に齊肩なりとおもへり、かくのごとくおもふともがらを、具眼なりとやせん、未具眼なりとやせん。またあるひは先師をもて臨濟德山に齊肩なりとおもへり。このともがらも、いまだ先師をみずいまだ臨濟にあはずといふべし。先師古佛を禮拜せざりしさきは、五宗の玄旨を參究せんと擬す。先師古佛を禮拜せしよりのちは、あきらかに五宗の亂稱なるむねをしりぬ。しかあればすなはち大宋國の佛法さかりなりしときは、五宗の稱なし、また五宗の稱を擧揚して家風をきこゆる古人いまだあらず。佛法の澆薄よりこのかた、みだりに五宗の稱あるなり。これ人の參學おろかにして辨道を親切にせざるによりてかくのごとし。雲箇水箇、眞箇の參究を求覓せんに、切忌すらくは、五家の亂稱を記持することなかれ、五家の門風を記號することなかれ。いはんや三玄、三要、四料簡、四照用、九帶等あらんや。いはんや三句、五位、十同眞智あらんや。釋迦老子の道、しかのごとくの小量ならず、しかのごとくを大量とせず、道現成せず、少林曹谿にきこえず。あはれむべしいま末代の不聞法の禿子等、その身心眼睛くらくしていふところなり、佛祖の兒孫種子、かくのごとくの言語なかれ、佛祖の住持に、この狂言かつてきこゆることなし、後來の阿師等かつて佛法の全道をきかず、祖道の全靠なく、本分にくらきともがら、わづかに一兩の少分に矜高して、かくのごとく宗稱を立するなり。立宗稱よりこのかたの小兒子等は、本をたづぬべき道を學せざるによりて、いたづらに末にしたがふなり。慕古の志氣なく混俗の操行あり。俗なほ世俗にしたがふことをいやしとしていやしむるなり。文王問ニ太公ニ

自機銖兩、不渉世緣後に德山圓明別に三句を爲す云く函蓋乾坤句、截斷衆流句、隨波逐浪句と。

【五位】曹山錄中に五位の五頌を載す、其目を擧ぐれば正中偏、偏中正、兼中至、偏中至、兼中到なり。又功勳五位、向、奉、功、共功、功功と。

【十同眞智】十智同眞也、會元十一汾陽上堂に云く夫說ㇾ法須ㇾ具二十智同眞一、若不ㇾ具二十智同眞一、邪正不ㇾ分緇素不ㇾ辨、不ㇾ能下與二人天一爲中眼目上決中斷是非上云云、十智同眞とは一同一質、二同大事、三總同參、四同眞志、五同偏普、六同具足、七同得失、八同生殺、九同音吼、十同得入。

【文王問太公】七書第二、六韜擧賢

曰、「君務ㇾ擧ㇾ賢、而不ㇾ獲二其功一。世亂愈甚、以致二危亡一者何也。」太公曰、「擧ㇾ賢而不ㇾ用、是以有二擧ㇾ賢之名一也、無ㇾ得ㇾ賢之實一也。」文王曰、「其失安在。」太公曰、「其失在ㇾ好ㇾ用二世俗之所ㇾ譽、不ㇾ得二其眞賢一。」文王曰、「好ㇾ用二世俗之所ㇾ譽者何也。」太公曰、「好ㇾ聽二世俗之所ㇾ譽者、以二非賢一爲ㇾ賢、或以二非智一爲ㇾ智、或以二非忠一爲ㇾ忠、或以二非信一爲ㇾ信。君以二世俗所ㇾ譽者一爲二賢智一、以二世俗之所ㇾ毀者一爲二不肖一、則多ㇾ黨者進、少ㇾ黨者退。是以群邪比周而蔽ㇾ賢、忠臣死二於無罪一、邪臣虛譽以求二爵位一、是以世亂愈甚、故其國不ㇾ免二於危亡。」俗なほその國その道の危亡することをなげく、佛法佛道の危亡せん、佛子かならずなげくべし。危亡のもとゐは、みだりに世俗にしたがふなり。世俗にほむるところをきく時は、眞賢をうることなし。眞賢をえんとおもはゞ、照後觀前の智略あるべし。世俗のほむるところ、いまだかならずしも賢にあらず聖にあらず。世俗のそしるところ、いまだかならずしも賢にあらず聖にあらず。しかありといへども賢にしてそしりをまねくと僞にしてほまれあると、觀察するところ混ずべからず。賢をもちゐざらんは國の損なり、不肖をもちゐんは國のうらみなり。いま五宗の稱を立するは、世俗の混亂なり。この世俗にしたがふものはおほしといへども、俗を俗としれる人すくなし。俗を化するを聖人とすべし、俗にしたがふは至愚なるべし。この俗にしたがはんともがら、いかでか佛正法をしらん。いかにしてか佛となり祖とならん。七佛嫡嫡相承しきたれり、いかでか西天にある依文解義のともがら、律の五部を立するがごとくならん。しかあればしるべし佛法の正命を正命とせる祖師は、

篇の文。
【七佛】毘婆尸佛、尸棄佛、毘沙浮佛、拘留孫佛、拘那含牟尼佛、迦葉佛、釋迦牟尼佛、之を七佛と謂ふ。
【律の五部】五部とは曇無德部、薩婆多部、彌沙塞部、迦葉遺部、婆麁富羅部、これなり。
【先師近年祖道】前章の前文なり、前出。

五宗の家門あるとかつていはざるなり。佛道に五宗ありと擧するは、七佛の正嗣にあらず、先師示衆云、「近年祖師道廢、魔黨畜生多、頻頻擧五家門風、苦哉苦哉。」

しかあればはかりしりぬ西天二十八代、東地二十二祖、いまだ五宗の家門を開演せざるなり。祖師とある祖師はみなかくのごとし。五宗を立して、各各の宗旨ありと稱するは、誑惑世間人のともがら、少聞薄解のたぐひなり。佛道におきて各各の道を自立せば、佛道いかでか今日にいたらん。迦葉も自立すべし、阿難も自立すべし。もし自立する道理を正道とせば、佛法はやく西天に滅しなまし。各各自立せん宗旨、たれかこれを慕古せん。各各自立せん宗旨、たれか正邪を決擇せん。正邪いまだ決擇せずば、たれかこれを佛法なりとし、佛法にあらずとせん。この道理あきらめずば、佛道と稱しがたし。五宗の稱は、各各祖師の現在に立せるにあらず。五宗の祖師と稱する祖師、すでに圓寂ののち、あるひは門下の庸流、まなこいまだあきらかならずあしいまだあゆまざるもの、父にとはず祖に違して立稱したるなり、そのむねあきらかなり、たれ人もしりぬべし。

大潙山大圓禪師は、百丈大智の子なり、百丈と同時に潙山に住す、いまだ佛法を潙仰宗と稱すべしといはず。百丈もなんぢがときより潙山に住して潙仰宗と稱すべしといはず。師を祖と稱せず、しるべし妄稱といふことを。たとひ宗號をほしきままにするといふとも、あながちに仰山をもとむべからず、自稱すべくは自稱すべし。自稱すべからざるによりて、前來も、自稱せず、いまも自稱なし。曹谿宗といはず、南嶽宗といはず、江西

宗といはず、百丈宗といはず。潙山にいたりて、曹谿にことなるべからず、曹谿よりもすぐるべからず、曹谿におよぶべからず。大潙の道取する一言半句、かならずしも仰山と一條拄杖兩人舁せず。宗の稱を立せんとき、潙山宗といふべし。大潙宗といふべし、潙仰宗と稱すべき道理いまだあらず。潙仰宗と稱すべくは、兩位の尊宿の在世に稱すべし。在世に稱すべからんを稱せざらんは、なにのさはりによりてか稱せざらん。すでに兩位の在世に稱せざるを、父祖の道を違して、潙仰宗と稱するは、不孝の兒孫なり。これ大潙禪師の本懷にあらず、仰山老人の素意にあらず。正師の正傳なし、邪黨の邪稱なることあきらけし。これを盡十方界に風聞することなかれ。

慧照大師は、講經の家門をなげすてて、黃檗の門人となれり。黃檗の棒を喫すること三番、あはせて六十拄杖なり、大愚のところに參じて省悟せり。ちなみに鎭州臨濟院に住せり、黃檗のこころを究盡せずといへども、相承の佛法を臨濟宗となづくべしといふ一句の道取なし、半句の道取なし。竪拳せず、拈拂せず。しかあるを門人のなかの庸流、たちまちに父業をまもらず、佛法をまもらず、あやまりて臨濟宗の稱を立す、慧照大師の平生に結構せん、たとひ曩祖の道に違せばその稱を立せんこと豫議あるべし、いはんや臨濟將レ示レ滅、屬二三聖慧然禪師一云、「吾遷化後、不レ得レ滅二卻吾正法眼藏一。」慧然云、「爭敢滅二卻和尙正法眼藏一。」臨濟云、「忽有レ人問レ汝、作麼生對。」慧然便喝。臨濟云、「誰知吾正法眼藏、向二這瞎驢邊一滅卻。」かくのごとく師資道取するところなり、臨濟いまだ吾禪宗

【豫議】事に先だつて討議するを豫議といふ。
【臨濟將示滅】傳燈十二臨濟章の文

【理象】象は形なり、又肖似なり、事理差ふなきを理象といふ。

【陳尊宿】黄檗希運禪師に嗣ぐ。初め睦州の龍興寺に居り後跡を晦まし用を藏め草履を作りて密に道上に置く歳久うして人之を知り乃ち稱して陳蒲鞋といふ。尊宿は敬稱、陳は俗姓傳詳ならず。

を滅却することとえざれといはず、吾臨濟宗を滅却することとえざれといはず、吾宗を滅却することえざれといはず、ただ吾正法眼藏を滅却することとえざれといふ。あきらかにしるべし佛祖正傳の大道を、禪宗と稱すべからず、臨濟宗と稱すべからずといふことを。さらに禪宗と稱することゆめゆめあるべからず、たとひ滅却は正法眼藏の理象なりとも、かくのごとく付屬するなり。「向這瞎驢邊滅却」、まことに付屬の誰知なり、臨濟門下にはただ、三聖のみなり、法兄法弟におよぼし一列せしむべからず。まさに明窗下安排なり、臨濟三聖の因縁は、佛祖なり。今日臨濟の付屬は、昔日靈山の付屬なり、しかあれば臨濟宗と稱すべからざる、道理あきらけし。

雲門山匡眞大師、そのかみは陳尊宿に學す、黄檗の兒孫なりぬべし。のちに雪峯に嗣す。この師、また正法眼藏を雲門宗と稱すべしといはず、門人また潙仰臨濟の妄稱を妄稱としらず、雲門宗の稱を新立せり。匡眞大師の宗旨、もし立宗の稱をこころざさば、佛法の身心なりとゆるしがたからん、いま宗を稱するときは、たとへば帝者を匹夫と稱せんがごとし。

清凉院大法眼禪師は、地藏院の嫡嗣なり、玄沙院の法孫なり、宗旨ありあやまりなし。大法眼は、署する師號なり、これを正法眼藏の號として、法眼宗の稱を立すべしといへることを、千言のなかに一言なし、萬句のうちに一句なし。しかあるを門人また法眼宗の稱を立す。法眼もしいまを化せば、いまの妄稱法眼宗の道をけづるべし。法眼禪師すでにゆきて、この患をすくふ人なし。たとひ千萬年ののちなりとも、法眼禪師に孝せん人は、この

【尋思去】思は青原行思なり、吾が滅後行思禪師を尋ねて師とせよとなり。

法眼宗の稱を稱とすることなかれ。これ本孝大法眼禪師なり。おほよそ雲門法眼等は、青原高祖の遠孫なり。道骨つたはれ、法髓つたはれり。

高祖悟本大師は、雲巖に嗣法す。雲巖は、藥山大師の正嫡なり。藥山は、石頭大師の正嫡なり。石頭大師は、青原高祖の一子なり、齊肩の二三あらず、道業ひとり正傳せり。佛道の正命なほ東地にのこれるは、石頭大師もらさず正傳せりしちからなり。青原高祖は、曹谿古佛と同時に、曹谿の化儀を青原に化儀せり。在世に出世せしめて、出世を一世に見聞するは、正嫡のうへの正嫡なるべし、高祖のなかの高祖なるべし、雄參學雖出世にあらず。そのときの齊肩、いま拔群なり、學者ことにしるべきところなり。曹谿古佛ちなみに現般涅槃をもて人天を化せし席末に、石頭すすみて所依の師を請す。古佛ちなみに尋思去としめして、尋讓去といはず。しかあればすなはち古佛の正法眼藏、ひとり青原高祖の正傳なり。たとひ同得道の神足をゆるすとも、高祖はなほ正神足の獨歩なり。曹谿古佛、すでに青原をわが子を子ならしむ、子の父の父の父とある、得髓あきらかなり、祖宗の正嗣なることあきらかなり。洞山大師、まさに青原四世の嫡嗣として、正法眼藏を正傳し、涅槃妙心開明す、このほかさらに別傳なし別宗なし。大師かつて曹洞宗と稱すべしと示衆する拳頭なし瞬目なし、また門人のなかに庸流まじはらざれば、洞山宗と稱する門人なし、いはんや曹洞宗といはんや。曹洞宗の稱は、曹山を稱しくはふるならん、もししかあらば雲居同安をもくはへのすべきなり。雲居は、人中天上の導師なり、曹山よりも尊崇なり。はかりし

りぬこの曹洞の稱は、傍輩の臭皮袋おのれに齊肩ならんとて、曹洞宗の稱を稱するなり、まことに白日あきらかなれども浮雲しもをおふがごとし。先師いはく「いま諸方獅子の座にのぼるものおほし、人天の師とあるものおほしといへども、知得佛法道理箇渾無」このゆゑにきほふて五宗の宗を立し、あやまりて言句の句にとどこほれるは、眞箇に佛祖の怨家なり、あるひは黄龍の南禪師の一派を稱して、黄龍宗と稱しきたれりといへども、その派とほからず、あやまりをしるべし。おほよそ世尊在世かつて佛宗と稱しましまさず、靈山宗と稱せず、祇園宗といはず、我心宗といはず、佛心宗といはず。いづれの佛語にか佛宗と稱する、いまのひとなにをもてか佛心宗と稱する。世尊なにのゆゑにかあながちに心を宗と稱せん、宗なにによりてかかならずしも心ならん、もし佛心宗あらば、佛身宗あるべし、佛眼宗あるべし、佛耳宗あるべし、佛鼻舌等宗あるべし、佛髓宗、佛骨宗、佛脚宗、佛國宗等あるべし、いまこれなし、しるべし佛心宗の稱は僞稱なりといふこと。釋迦牟尼佛、ひろく十方佛土中の諸法實相を擧拈し、十方佛土中をとくとき、十方佛土のなかに、いづれの宗を建立せりとかず。宗の稱もし佛祖の法ならば、佛國にあるべし、佛國にあらば、佛說すべし、佛不說なり、しりぬ佛國の調度にあらず、祖道せず、しりぬ祖域の家具にあらずといふことを。ただ人にわらはるるのみにあらざらん、諸佛のために制禁せられん。また自己のためにわらはれん、つつしんで宗稱することなかれ、佛法に五家ありといふことなかれ。後來智聰といふ小兒子ありて、祖師の一道兩道をひろひあつめて、五家の宗派

【人天眼目】晦巖智聰撰、三卷、宋の淳熙十五年戊申冬刊行、天台山萬年寺にて編集す。

【太公謂文王曰】六韜初文。太公曰、天下非一人之天下、乃天下之天下也、同天下之利者則得天下、擅天下之利者失天下、天有時地有財、能與人共之者仁也、仁之所在天下歸之と。

といひ、人天眼目となづく。人これをわきまへず、初心晩學のやからまこととおもひて衣領にかくしもてるもあり。人天眼目にあらず、人天の眼目をくらますなり、いかでか瞎却正法眼藏の功德あらん。かの人天眼目は、智聰上座、淳熙戊申十二月のころ、天台山萬年寺にして編集せり。後來の所作なりとも、道是あらば聽許すべし。これは狂亂なり、愚暗なり、參學眼なし、行脚眼なし、いはんや見佛祖眼あらんや、もちゐるべからず。智聰といふべからず、愚蒙といふべし。その人をしらず、人にあはざるが、言句をあつめて、その人とある人の言句をひろはず、しりぬ人をしらずといふことを。震旦國の教學のともがら、宗稱するは、齊肩の彼彼あるによりてなり、いま佛祖正法眼藏の付屬嫡嫡せり、齊肩あるべからず、混ずべき彼彼なし。かくのごとくなるに、いまの杜撰の長老等、みだりに宗の稱をもはらする自專のくはだて、佛道をおそれず。佛道はなんぢが佛道にあらず、諸佛祖の佛道なり、佛道の佛道なり。太公謂文王曰、『天下者、非一人之天下、天下之天下也。』しかあれば俗士なほこれ智あり、この道あり、佛祖屋裏兒、みだりに佛祖の大道をほしきままに愚蒙にしたがへて立宗の自稱することなかれ、おほきなるをかしなり、佛道人にあらず。宗稱すべくば世尊みづから稱しましますべし、世尊すでに自稱しましまさず、兒孫としてなにゆゑか滅後に稱することあらん。たれ人か世尊よりも善巧ならん、善巧あらずば、その益なからん。もしまた佛祖古來の道に違背して自宗を自立せば、たれかなんぢが宗を宗とする佛兒孫あらん、照古觀今の參學すべし、みだりなることなかれ。世尊在世に、一毫もたがは

【寛元元年】祖齢四十四歳、吉峰寺に於ける示衆。

【諸法實相】龍樹菩薩云く三世の諸佛は諸法實相を以て師と爲すと、即ち是れ現成公案の異名なり、佛子憶はざるべけんや。

【如是】法華に十

ざらんとする、なほ百千萬分の一分にをよばざることをうれへ、およべるをよろこび達せざらんとねがふを、遺弟の畜念とせるのみなり。これをもて多生の値遇不覯をうらむるべし、これをもて多生の見佛聞法をねがふべし。ことさら世尊在世の化儀にそむきて、宗の稱を立せん、如來の弟子にあらず、祖師の兒孫にあらず、重逆よりもおもし。たちまちに如來の無上菩提をおもくせず、自宗を自專する、前來を輕忽し、前來をそむくなり。前來もしらずといふべし。世尊在日の功徳を信ぜざるなり、かれらが屋裏に佛法あるべからず、しかあればすなはち學佛の道業を正傳せんには、宗の稱を見聞すべからず。佛佛祖祖付屬し正傳するは、正法眼藏無上菩提なり。佛祖所有の法は、みな佛付屬しきたれり、さらに剩法のあらたなるあらず、この道理すなはち法骨道髓なり。

爾時寛元元年癸卯九月十六日在二越州吉田縣吉峯寺一示衆

正法眼藏佛道　畢

正法眼藏諸法實相

佛祖の現成は究盡の實相なり、實相は諸法なり。諸法は如是相なり、如是性なり、如是身なり、如是心なり、如是世界なり、如是雲雨なり、如是行住坐臥なり、如是憂喜動靜なり、如是拄杖拂子なり、如是拈華破顔なり、如是嗣法授記なり、如是參學辦道なり、如是松操竹節なり。

如是を明す、如是は法體を指す、辭畢竟空を如といひ、當體即是を是といふ。如是相といへば有無に落ちず兩位を圓かにする相なり。如來一代の所説は如是なり、如是これ一大事因縁なり。

【唯佛與佛究竟等】法華方便品の文。

釋迦牟尼佛言、「唯佛與佛、乃能究盡、諸法實相、所謂諸法如是相、如是性、如是體、如是力、如是作、如是因、如是緣、如是果、如是報、如是本末究竟等。」

いはゆる如來道の本末究竟等は、諸法實相の自道取なり、闍黎自道取なり、一等の參學なり。參學は一等なるがゆゑに、唯佛與佛は諸法實相なり、諸法實相は唯佛與佛なり。唯佛は實相なり、與佛は諸法なり。諸法の道を聞取して、一と參じ多と參ずべからず。實相の道を聞取して、虛にあらずと學し、性にあらずと學すべからず。實は唯佛なり、相は與佛なり。乃能は唯佛なり、究盡は與佛なり、諸法は唯佛なり、實相は與佛なり。諸法のまさに諸法なるを唯佛と稱す、諸法のいまし實相なるを與佛と稱す。しかあれば諸法のみづから諸法なる如是相あり、如是性あり、實相のまさしく實相なる如是相あり、如是性あり。唯佛與佛と出現於世するは、諸法實相の説取なり、行取なり、證取なり。その説取は、乃能究盡なり、究盡なりといへども乃能なるべし。初中後にあらざるゆゑに、如是相なり、如是性なり、このゆゑに初中後善といふ。乃能究盡といふは、諸法實相なり、諸法實相は、如是相なり、如是相は乃能究盡如是性なり、如是性は乃能究盡如是體なり、如是體は乃能究盡如是力なり、如是力は乃能究盡如是作なり、如是作は乃能究盡如是因なり、如是因は乃能究盡如是緣なり、如是緣は乃能究盡如是果なり、如是果は乃能究盡如是報なり、如是報は乃能究盡本末究竟等なり。本末究竟等の道取、まさに現成の如是なるがゆゑに、果果の果は、因果の果にあらず、このゆゑに因果の果はすなはち果果の果なるべし。

【因果の果は果果】涅槃經師子吼品に、佛性者有因有因因、有果有果果、有因者十二因緣、因因即是智慧、有果者即是阿耨菩提、果果者即是無上大涅槃と。

この果すなはち相性體力をあひ罣礙するがゆゑに、諸法の相性體力等、いく無量無邊も實相なり、この果すなはち相性體力を罣礙せざるがゆゑに、諸法の相性體力等ともに實相なり。この相性體力等を、果報因緣等のあひ罣礙するに一任するとき、八九成の道あり、この相性體力等を、果報因緣等のあひ罣礙せざるに一任するとき、十成の道あり。いはゆるの如是相は一相にあらず、如是相は一如是にあらず、無量無邊不可道不可測の如是なり。百千の量を量とすべからず、諸法の量を量とすべし、實相の量を量とすべし。そのゆゑは唯佛與佛乃能究盡諸法實相なり、唯佛與佛乃能究盡諸法實性なり、唯佛與佛乃能究盡諸法實體なり、唯佛與佛乃能究盡諸法實力なり、唯佛與佛乃能究盡諸法實作なり、唯佛與佛乃能究盡諸法實因なり、唯佛與佛乃能究盡諸法實緣なり、唯佛與佛乃能究盡諸法實果なり、唯佛與佛乃能究盡諸法實報なり、唯佛與佛乃能究盡諸法實本末究竟等なり、かくのごとくの道理あるがゆゑに、十方佛土は唯佛與佛のみなり、さらに一箇半箇の唯佛與佛にあらざるなし。唯と與とは、たとへば體に體を具し相の相を證せるなり。また性を體として性を存せるがごとし、このゆゑにいはく、我及十方佛乃能知是事。しかあれば乃能究盡の正當恁麼時と、乃能知是事の正當恁麼時と、おなじくこれ面面の有時なり。我もし十方佛に同異せば、いかでか及十方佛の道取を現成せしめん。道頭に十方なきがゆゑに、十方は道頭なり。ここをもて實相の諸法に相見すといふは、春は華にいり、人は春にあふ。月は月をてらし、人はおのれにあふ。あるひは人の水をみる、おなじくこれ相見底の道理なり。この

【轉凡入聖】宗鏡錄に云く還丹一粒點レ鐵爲レ金、至理一言轉レ凡爲レ聖と。

【爲說實相印】法華方便品偈なり。

【日月燈明佛言】法華序品偈なり。

【十八界】六根六境六識を名けて十八界と爲す、一切諸法を分類しての總名なり。界は種族の義。

【一切菩薩阿】法華法師品の文。

ゆゑに實相に參學するを、佛祖の佛祖に嗣法するとす、これ諸法の諸法に授記するなり。唯佛の唯佛のために傳法し、與佛の與佛のために嗣法するなり。このゆゑに生死去來あり、このゆゑに發心修行菩提涅槃あり。發心修行菩提涅槃を擧して、生死去來眞實人體を參究し接取するに、把定し放行す。これを命脈として華開結果す、これを骨髓として迦葉阿難あり。風雨水火の如是相、すなはち究盡なり、靑黃赤白の如是性、すなはち究盡なり。この體力によりて轉凡入聖す、この果報によりて超佛越祖す、この因緣によりて握土成金あり、この果報によりて傳法付衣あり。如來道、「爲說實相印」、いはゆるをいふべし。「爲行實相印」、「爲聽實性印」、「爲證實體印」、かくのごとく參究し、かくのごとく究盡すべきなり。その宗旨たとへば珠の盤をはしるがごとく、盤の珠をはしるがごとし。「日月燈明佛言、「諸法實相義、已爲汝等說」。この道取を參學して、佛祖はかならず說實相義を一大事とせりと參究すべし。佛祖は十八界ともに實相義を開說す。身心先、身心後、正當身心時、說實相性體力等あり。實相を究盡せず、實相をとかず、實相を會せず、實相を不會せざらんは、佛祖にあらざるなり、魔黨畜生なり。

釋迦牟尼佛曰、「一切菩薩阿耨多羅三藐三菩提、皆屬二此經一、此經開二方便門一、示二眞實相一」。

いはゆる一切菩薩は、一切諸佛なり。諸佛と菩薩と異類にあらず、老少なし、勝劣なし。此菩薩と彼菩薩と、二人にあらず、自他にあらず。過現當來箇箇にあらざれども、作佛は行菩薩道の法儀なり。初發心に成佛し、妙覺地に成佛す。無量百千萬億度作佛せる菩薩あ

【雪峰いはく】傳燈十六雪峰章に「盡大地是箇解脫門、把レ手拽レ伊而不ニ肯入一。時僧出曰、用レ入爲レ甚。師乃打と。」

【開方便門】法華法師品の語。

り。作佛よりのちは行を廢してさらに所作あるべからずといふは、いまだ佛祖の道をしらざる凡夫なり。いはゆる一切菩薩は、一切諸佛の本祖なり、一切諸佛は、一切菩薩の本師なり。この諸佛の無上菩提、たとひ過去に修證するも、現在に修證するも、未來に修證するも、身先に修證するも、心後に修證するも、初中後ともに此經なり、能屬所屬おなじく此經なり。この正當恁麼時、これ此經の一切菩薩を證するなり。經は有情にあらず、經は無情にあらず、經は有爲にあらず、經は無爲にあらず。しかあれども菩提を證し人を證し實相を證し此經を證するとき、開方便門するなり。方便門は、佛果の無上功德なり、法住法位なり世相常住なり。方便門は暫時の伎倆にあらず、盡十方界の參學なり、諸方實相を拈じ參學するなり。この方便門あらはれて、盡十方界に蓋十方界すといへども、一切菩薩にあらざればその境界にあらず。雪峯いはく、「盡大地是解脫門、曳人不肯入。」しかあればしるべし盡地盡界たとひ門なりとも、出入たやすかるべきにあらず、出入箇のおほきにあらず。曳人するにいらずいでず、不曳にいらずいでず、進步のものあやまりぬべし、退步のものとどこほりぬべし。又且いかん。人を擧して門に出入せしむれば、いよいよ門とほざかる。門を擧して人にいるるには、出入の分あり。開方便門といふは、示眞實相なり。示眞實相は蓋時にして初中後際斷なり。その開方便門の正當開の道理は、盡十方界に開方便門するなり。この正當時、まさしく盡十方界を覷見すれば、未曾見の樣子あり。いはゆる盡十方界を一枚二枚三箇四箇拈來して、開方便門ならしむるなり。これによりて一等に開

【しかあるを近來】以下に近代宋朝杜撰の輩、佛祖の大道と老莊等の俗說と相一致すといふの妄を破す。淸涼云く貪二一時虛名一論二三教於一致一と

方便門とみゆといへども、如許多の盡十方界は、開方便門の少許を得分して、現成の面目とせりとみゆるなり。かくのごとくの風流、しかしながら屬經のちからなり。示眞實相といふは、諸佛實相の言句を盡界に風聞するなり、盡界に成道するなり。實相諸法の道理を盡人に領覽せしむるなり、盡法に現出せしむるなり。しかあればすなはち四十佛四十祖の無上菩提、みな此經に屬せり、屬此經なり、此經屬なり。蒲團禪版の阿耨菩提なる、みな此經に屬せり。拈華破顏禮拜得髓、ともに皆屬此經なり、此經之屬なり、開方便門示眞實相なり。しかあるを近來大宋國杜撰のともがら、落處をしらず、寶所をみず、實相の言を虛設のごとくし、さらに老子莊子の言句を學す。これをもて佛祖の大道に一齊なりといふ。また三教は一致なるべしといふ。あるひは三教は鼎の三脚のごとし、ひとつもたければくつがへるべしといふ。愚癡のはなはだしき、たとへをとるに物あらず。かくのごときのことばあるともがらも、佛法をきけりとゆるすべからず。ゆゑいかんとなれば、佛法は、西天を本とせり、在世八十年、說法五十年、さかりに人天を化す、化一切衆生皆令入佛道なり。それよりこのかた、二十八祖正傳せり、これをさかりなるとし、微妙最尊なるとせり。もろもろの外道天魔、ことごとく降伏せられをはりぬ、成佛作祖する人天かずをしらず、しかあれどもいまだ儒教道教を震旦國にとぶらはざれば佛道の不足といはず。もし決定して三教一致ならば、佛法出現せんとき、西天に儒宗道教等も、同時に出現すべし。しかあれども佛法は、天上天下、唯我獨尊なり、かのときの事をおもひやるべし、わすれあ

【應菴曇華】虎丘紹隆に嗣ぐ、大慧宗杲と相對して當代の二大甘露門と稱せらる、南宋の孝宗帝隆興元年六月寂、此語應庵錄七法語上にあり。

やまるべからず。三教一致のことば、小兒子の言音におよばず、壞佛法のともがらなり。かくのごとくのともがらのみおほきなり、あるひは人天の導師なるよしを現じ、あるひは帝王の師匠となれり、大宋佛法衰薄の時節なり、先師古佛ふかくこのことをいましめき。かくのごときのともがら、二乘外道の種子なり。しかのごときの種類は、實相のあるべしとだにもしらずしてすでに二三百年をへたり、佛祖の正法を參學しては、流轉生死を出離すべしとのみいふ。あるひは佛祖の正法を參學するは、いかなるべしとしらざるおほし、ただ住院の稽古とおもへり。あはれむべし祖師道廢せることを、有道の尊宿おほきになげくところなり。しかのごときのともがら所出の言句をきくべからず、あはれむべし。」圜悟禪師いはく、「生死去來眞實人體。」この道取を拈擧して、みづからをしり佛法を商量すべし。長沙いはく、「盡十方界、眞實人體、盡十方界、自己光明裏。」かくのごとくの道取、いまの大宋國の諸方長老等おほよそ參學すべき道理となほしらず、いはんや參學せんや。もし擧しきたりしかば、ただ赤面無言するのみなり。先師古佛いはく、「いま諸方長老は、照古なし照今なし、佛法道理不會有なり、盡十方界等恁麼擧、那得レ知、他那裏也未ニ曾聽一相似。」これをききてのち、諸方長老に問著するに、眞箇に聽來せるすくなし、あはれむべし虛說にして職をけがせることを。應菴曇華禪師ちなみに德徽大德にしめしていはく、「若要レ易レ會、祇向ニ十二時中起心動念處一、但即ニ此動念一、直下頓豁了不可得、如ニ大虛空一、亦無ニ虛空形段一、表裏一如、智境雙泯、玄解俱亡、三際平等、到ニ此田地一、謂ニ之絶學無爲閑道

【まなこはうげなんとすとも】眼は穿けなん、俗に穴のあくほど見つめてもといふ意。

人也。』これは應菴老人盡力道得底句なり。これただ影をおふて、休歇をしらざるがごとし。表裏一如ならざらんときは、佛法あるべからざるか。なにかこれ表裏。また虛空有形段を、佛祖の道取とす。なにをか虛空とする、おもひやるに應菴いまだ虛空をしらざるなり、虛空をみざるなり、虛空をとらざるなり、虛空をうたざるなり。起心動念といふ、心はいまだ動ぜざる道理あり、いかでか十二時中に起心あらん。十二時中には心きたりいるべからず、十二心中に十二時きたらず、いはんや起心あらんや。動念とはいかん、念は動不動するか、動不動せざるか。作麼生なるか動、また作麼生なるか不動。なにをよんでか念とする、念は十二時中にあるか、念裏に十二時あるか、兩頭にあらざらんときあるべきか。十二時中に祇向せば易會ならんといふ、なにごとを易會すべきぞ。易會といふ、もし佛祖の道をいふか。しかあらば佛道は易會難會にあらざるゆゑに。南嶽江西、ひさしく師にしたがひて辦道するなり。頓豁了不可得といふ、佛祖道未夢見なり。恁麼の力量、いかでか要易會の所堪ならん。はかりしりぬ、佛祖の大道をいまだ參究しきたらずといふことを。佛法もしかくのごとくならば、いかでか今日にいたらん。應菴なほかくのごとし、いま現在せる諸山の長老のなかに、應菴のごとくなるものをもとめんに、歷劫にもあふべからず。まなこはうげなんとすとも、應菴とひとしき長老をばみるべからざるなり。ちかくの人はおほく應菴をゆるす、しかあれども應菴に佛法およべりとゆるしがたし。ただ叢席の晚進なり、尋常なりといふべし。ゆゑはいかん、應菴は人をしりぬべき氣力あるゆゑな

【天童今夜有牛兒】此語天童錄中に載せず、高祖の諸記したまふところか。
【寶慶二年】日本嘉祿二年、祖齡二十七歲。
【寂光堂等】妙高臺は大方丈、寂光堂は西方丈、大光明藏は東方丈なるものの如し。

り。いまあるともがらは人をしるべからず、みづからをしらざるゆゑに。應菴は未達なりといへども學道あり、いまの長老等は學道あらず、應菴はよきことばをきくといへども、みみにいらず、みみにみず、まなこにいらず、まなこにきかざるのみなり。應菴そのかみは恁麼なりともいまは自悟在なるらん。いまの大宋諸山の長老等は、應菴の內外をうかがはず、音容すべて境界にあらざるなり。しかのごとくのともがら、佛祖の道取せる、實相は、佛祖の道なり。佛祖の道にあらずともしるべからず。このゆゑに二三百年來の長老杜撰のともがら、すべて不見道來實相なり。先師天童古佛、ある夜間に方丈にして普說するにいはく、『天童今夜有二牛兒一、黃面瞿曇拈二實相一、要レ買那堪二無定價一、一聲杜宇孤雲上。』かくのごとくあれば尊宿の佛道に長ぜるは實相をいふ、佛法をしらず、佛道の參學なきは、實相をいはざるなり。この道取は大宋寶慶二年丙戌春三月のころ、夜間やや四更になりなんとするに、上方に鼓聲三下きこゆ。坐具をとり搭袈裟して雲堂の前門よりいづれば、入室牌かかれり。まづ衆にしたがふて法堂上にいたる。法堂の西壁をへて、寂光堂の西階をのぼる、寂光堂の西壁のまへをすぎて、大光明藏の西階をのぼる、大光明藏は方丈なり、西の屛風のみなみより香臺のほとりにいたりて、燒香禮拜す。入室このところに雁列すべしとおもふに、一僧もみえず、妙高臺は下簾せり、ほのかに堂頭大和尙の法音きこゆ。ときに西川の祖坤維那きたりて、おなじく燒香禮拜しをはりて、妙高臺をひそかにのぞめば、滿衆たちかさなれり、東邊西邊をいはず。ときに普說あり、ひそかに衆のうしろ

【衣荷食松】行持卷大梅章に偈あり

にいりたちて聽取す。大梅の法常禪師住山の因緣擧せらる。衣荷食松のところに、衆家おほくなみだをながす。靈山釋迦牟尼佛の安居の因緣、くはしく擧せらる、きくものなみだをながすおほし。天童山安居ちかきにあり、『如今春間、不寒不熱、好坐禪時節也、兄弟如何不坐禪。』かくのごとく普說していまの頌あり。頌をはりて、右手にて禪椅のみぎのほとりをうつこと一下していはく『入室すべし。』入室話にいはく『杜鵑啼山竹裂。』かくのごとく入室話あり、別の話なし。衆家おほしといへども下語せず、ただ惶恐せるのみなり。この入室の儀は、諸方にいまだあらず、ただ先師天童古佛のみ、この儀を儀せり。普說の時節は、椅子屛風を周帀して、大衆雲立せり。そのままにて雲立しながら、便宜の僧家より入室すれば、入室をはりぬる人は、例のごとく方丈門をいでぬ。のこれる人は、ただもとのごとくたてれば、入室する人の威儀進止、ならびに堂頭和尙の容儀、および入室話、ともにみな見聞するなり。この儀いまだ他那裏の諸方にあらず、他長老は儀不得なるべし、他時の入室には、人よりはさきに入室せんとす、この入室には、人よりものちに入室せんとす、人心道別、わすれざるべし。それよりこのかた、日本寬元元年癸卯にいたるに、始終一十八年、すみやかに風光のなかにすぎぬ。天童よりこのやまにいたるに、いくそばくの山水とおぼえざれども、美言奇句の實相なる、身心骨髓に銘しきたれり。かのときの普說入室は、衆家おほくわすれがたしとおぼえり。この夜は微月わづかに樓閣よりもりきたり、杜鵑しきりになくといへども、靜閑の夜なりき。

【玄沙聞燕子聲】禪類卷二十に出づ

【寛元元年】祖齡四十四歳、吉峰寺に於ける示衆。

玄沙院宗一大師參次、聞二燕子聲一云『深談二實相一、善説二法要一。』下座。尋後有レ僧請益曰、『某甲不會。』師云、『去、無二人信一レ汝。』いはゆる深談實相といふは、燕子ひとり實相を深談すると玄沙の道ききぬべし。しかあれどもしかにはあらざるなり、參次に聞燕子聲あり、燕子の實相を深談するにあらず、玄沙の實相を深談するにあらず。兩頭にわたらざれども、正當恁麼、すなはち深談實相なり、しばらくこの一段の因緣を參究すべし。參次あり、聞燕子聲あり、深談實相善説法要の道取あり、下座あり。『尋後有レ僧請益曰、某甲不會。師云、去、無二人信一レ汝。某甲不會。』かならずしも請益實相なるべからざれども、これ佛祖の命脈なり、正法眼藏の骨髓なり。しるべしこの僧たとひ請益して某甲會得と道取すとも、某甲說得と道取すとも、玄沙はかならず去無人信汝と爲道すべきなり。會せるを不會と請益するゆゑに、去無人信汝といふにはあらざるなり。まことにこの僧にあらざらん張三李四なりとも、諸法實相なりとも、佛祖の命脈の正直に通ずる時處には、實相の參學かくのごとく現成するなり。靑原の會下にこれすでに現成せり、しるべし實相は嫡嫡相承の正脈なり、諸法は究盡參究の唯佛與佛なり、唯佛與佛は、如是相好なり。

爾時寛元元年癸卯九月日在二于日本越州吉峯寺一示衆

正法眼藏諸法實相　畢

【密語】世尊密語あり迦葉覆藏せず遍界不覆藏を密語といふ。如來親密語の語、萬象にあまりてゆたかなり微塵裏に大法輪を轉ず誰か覆藏せん。

【雲居官人送供】傳燈雲居章に出づ

【四十六佛】雲居を七佛より通計するなり、西天二十八祖、東土の六代、青原より六代、通計四十六代にあたる。

正法眼藏密語

諸佛之所護念の大道を見成公案するに、「汝亦如是、吾亦如是、善自護持。」いまに證契せり。

雲居山弘覺大師、因官人送供問曰、「世尊有密語、迦葉不覆藏、如何是世尊密語。」大師召云、「尙書。」其人應諾。大師云、「會麼。」尙書曰、「不會。」大師云、「汝若不會、世尊密語、汝若會、迦葉不覆藏。」大師は、靑原五世の嫡孫として、天人師なり。盡十方界の大善知識なり、有情を化し無情を化す、四十六佛の佛嫡として佛祖のために說法す、三峯菴主の住裏には、天厨送供す、傳法得道のときより、送供の境界を超越せり。いまの道取する世尊有密語、迦葉不覆藏は、四十六佛の相承といへども、四十六代の本來面目として、匪從人得なり、不從外來なり、不是本得なり、未曾新條なり。この一段事の密語の現成なる、ただ釋迦牟尼世尊のみ密語あるにあらず、諸佛祖みな密語あり。すでに世尊なるは、かならず密語あり、密語あればさだめて迦葉不覆藏あり。百千の世尊あれば、百千の迦葉ある道理をわすれず參學すべきなり。參學すといふは、一時會取せんとおもはず。百回千回も審細功夫して、かたきものをきらんと經營するがごとくすべし。かたる人あらばたちどころに會取すべしとおもふべからず。いま雲居山すでに世尊

ならんに、密語となはり、不覆藏の迦葉あり「喚二尚書一、尚書應諾」はすなはち密語なりと參學することなかれ、大師ちなみに尚書にしめすにいはく、「汝若不會、世尊密語、汝若會、迦葉不覆藏」いまの道取、かならず多劫の辦道功夫を立志すべし。なんぢもし不會なるは、世尊の密語なりといふ、いまの茫然とあるを不會といふにあらず、不知を不會といふにあらず。なんぢもし不會といふ道理、しづかに參學すべき處分を聽許するなり、功夫辦道すべし。さらにまたなんぢもし會ならんばと道取する、いますでに會なるとにはあらず。佛法を參學するに多途あり、そのなかに佛法を會し佛法を不會する關棙子あり。正師をみざればありとだにもしらず、いたづらに絶見聞の眼處耳處におほせて、密語ありと亂會せり。なんぢもし會なるゆゑに、迦葉不覆藏なるといふにあらず。不會の不覆藏もあるなり、不覆藏はたれ人も見聞すべしと學すべからず。すでにこれ不覆藏なり、無處不覆藏ならん、正恁麼時、こころみに參究すべし。しかあれば、みづからしらざらん境界を密語と參學しきたるにあらず。佛法を不會する正當恁麼時、これ一分の密語なり。これかならず世尊有なり、有世尊なり。しかあるを正師の訓教をきかざるともがら、たとひ師子座上にあれども、夢也未見者箇道理なり。かれらみだりにいはく、「世尊有密語とは、靈山百萬衆前に、拈華瞬目せしなり。そのゆゑは、有言の佛說は淺薄なり、名相にわたれるがごとし。無言說にして拈華瞬目する、これ密語施設の時節なり、百萬衆は不得領覽なり。このゆゑに百萬衆のために密語なり。迦葉不覆藏といふは、世尊の拈華瞬目を迦葉さきよりし

れるがごとく破顏微笑するゆゑに、迦葉におほせて不覆藏といふなり。これ眞訣なり、箇箇相傳しきたれるなり。「これをききてまこととおもふともがら、稻麻竹葦のごとく、九州に叢林をなせり。あはれむべし佛祖の道の破廢せること、もととしてこれよりおこる明眼漢まさに一一に撿破すべし。もし世尊の有言を淺薄なりとせば、拈華瞬目も淺薄なるべし。世尊の有言、もし名相なりとせば、學佛法の漢にあらず。有言は名相なることをしれりといへども、世尊の名相なきことをいまだしらず、凡情の未脱なるなり。佛祖は身心の所通、みな脱落なり、説法なり、有言説なり。轉法輪す、これを見聞して得益するものおほし。信行・法行のともがら、有佛祖處に化をかうぶり、無佛祖處に化にあづかるなり。百萬衆かならずしも拈華瞬目を拈華瞬目と見聞せざらんや。迦葉と齊肩なるべし、世尊と同生なるべし、百萬衆と同參なるべし、同時發心なるべし。同道なり、同國土なり。有知の智をもて見佛聞法し、無智の智をもて見佛聞法す。はじめて一佛をみるより、すすみて恒沙佛をみる。一一の佛會上、ともに百萬億衆なるべし、各各の諸佛ともに拈華瞬目の開演おなじときなるを見聞すべし。眼處くらからず、耳處聰利なり。心眼あり、身眼あり。心耳あり、身耳あり、迦葉の破顏微笑、儞作麼生會。試道看。なんだちがいふがごとくならば、これも密語といひぬべし。しかあれどもこれを不覆藏といふ、至愚のかさなれるなり。

のちに世尊いはく、「吾有正法眼藏涅槃妙心、付囑摩訶迦葉」。かくのごとくの道取、これ有言なりや、無言なりや。世尊もし有言をきらひ、拈華を愛せば、のちにも拈華すべし、迦葉

【密却在汝邊】傳燈錄豪山道明章に六祖曰我今爲汝說者卽非密、汝若返照自己面目密在汝邊とあり。

なんぞ會取せざらん、聚會なんぞ聽取せざらん。かくのごときともがらの說話もちゐるべからず。おほよそ世尊に密語あり、密行あり、密證あり。しかあるを愚人おもはく、『密は他人のしらず、みづからはしり、しれる人あり、しらざる人あり』と。西天東地、古往今來、おもひいふは、いまだ佛道の參學あらざるなり。もしかくのごとくいはば、世間出世間の學業なきもののうへには密はおほく、遍學のものは密はすくなかりぬべし。廣聞のともがらは密あるべからざるか。いはんや天眼、天耳、法眼、法耳、佛眼、佛耳等を具せんときは、すべて密語密意あるべからずといふべし。佛法の密語、密意、密行等は、この道理にあらず、人にあふ時節、まさに密語をきき密語をとく、おのれをしるとき密行をしるなり。いはんや佛祖よく上來の密意密語を究辨す。しるべし佛祖なる時節、まさに密語密行、きほひ現成するなり。いはゆる密は親密の道理なり、無間斷なり、蓋佛祖なり、蓋汝なり、蓋行なり、蓋代なり、蓋功なり、蓋密なり。密語の密人に相逢する、佛眼也覰不見なり。密行は自他の所知にあらず、密我ひとり能知す、密他おのおの不會す。密却在汝邊のゆゑに、全葉密なり、一半葉密なり。かくのごとくの道理、あきらかに功夫參學すべし。おほよそ爲人の處所、辨背の時節、かならず擧似密なる、それ佛佛祖祖の正嫡なり。而今是甚麼時節のゆゑに、自己にも密なり、他已にも密なり、佛祖にも密なり、異類にも密なり。このゆゑに密頭上あらたに密なり、かくのごとくの教、行、證、すなはち佛祖なるがゆゑに、透過佛祖密なり、しかあれば透過密なり。

雪竇師翁示衆曰、『世尊有二密語一、迦葉不二覆藏一、一夜落華雨、滿城流水香。』而今雪竇道の一夜落華雨、滿城流水香。それ親密なり。これを擧似して、佛祖の眼睛鼻孔を檢點すべし、臨濟德山のおよぶべきところにあらず、眼睛裏の鼻孔を參開すべし、耳處の鼻頭を尖聰ならしむるなり。いはんや耳鼻眼睛裏ふるきにあらず、あらたなるにあらざる渾身心ならしむ。これを華雨世界起の道理とす。師翁道の滿城流水香、それ藏身影彌露なり。

かくのごとくあるがゆゑに、佛祖家裏の家常には世尊有密語、迦葉不覆藏を參究透過するなり。七佛世尊、ほとけごとに而今のごとく參學す、迦葉、釋迦、おなじく而今のごとく究辨しきたれり。

爾時寛元元年癸卯九月二十日在二越州吉田縣吉峯古精舍一示衆

正法眼藏密語　畢

正法眼藏佛經

このなかに教菩薩法あり、教諸佛法あり。おなじくこれ大道の調度なり、調度ぬしにしたがふ、ぬし調度をつかふ。これによりて西天東地の佛祖、かならず或從知識、或從經卷の正當恁麼時、おのおの發意、修行、證果かつて間隙あらざるものなり。發意も經卷知識により、修行も經卷知識による、證果も經卷知識に一親なり。機先句後おなじく

【雪竇師翁】雪竇山資聖寺智鑑禪師は高祖の師天童如淨禪師の本師なり。故に師翁といふ。文は續傳燈三十、明州雪竇智鑑章に出づ。

【寛元元年】祖師四十四歲、吉峰寺に於ける示衆。

【佛經】一句一偈の功德最尊無上也薄福少德の者歷劫にも聞くべからず佛經を滿眼滿耳に聞き通身遍身に轉じ行住坐臥に威儀すべし。

【このなか】法華法師品に不レ須三復安二舍利一所以者何

此中已有如來全身とあり。佛經のこと。

【教菩薩法】法華序品に說大乘教名妙法蓮華教菩薩法佛所護念とあり、教菩薩法は法華經の異名なり大乘教の異名なり佛經の異名なり。

【調度】史記索隱什器註に曰く、人家常に用ふるの器一にあらず、故に人什を數と爲す。又漢書の註に軍に從うて役を作す、若干人を火と爲す、共に調度を畜ふる也と。道具のこと。

經卷知識に同參なり。機中句裏おなじく經卷知識に同參なり。知識はかならず經卷を通利す、通利すといふは、經卷を國土とし、經卷を身心とす。經卷を爲他の施設とせり、經卷を坐臥經行とせり、經卷を父母とし、經卷を兒孫とせり、經卷を行解とせるがゆゑに、これ知識經卷を參究せるなり。知識の洗面喫茶、これ古經なり。經卷の知識を出生するといふは、黃梅の六十拄杖、よく兒孫を生長せしめ、黃梅の打三杖よく傳衣付法せしむるのみにあらず、桃華をみて悟道し、竹響をきて悟道する、および見明星悟道、みなこれ經卷の知識を生長せしむるなり。あるひはまたことをえて經卷をうる皮袋拳頭あり、あるひは經卷をえてまたことをうる木杓漆桶あり。いはゆる經卷は、盡十方界これなり、經卷にあらざる時處なし、勝義諦の文字をもちゐ、世俗諦の文字をもちゐ、あるひは天上の文字をもちゐ、あるひは人間の文字をもちゐ、あるひは畜生道の文字をもちゐ、あるひは修羅道の文字をもちゐ、あるひは百艸の文字をもちゐ、あるひは萬木の文字をもちゐる。このゆゑに盡十方界に、森森として羅列せる長短、方圓、青、黃、赤、白、しかしながら經卷の文字なり、經卷の表面なり。これを大道の調度とし、佛家の經卷とせり。この經卷、よく蓋時に流布し、蓋國に流通す。教人の門をひらきて、盡地の人家をすてず、教物の門をひらきて、盡地の物類をすくふ。教諸佛し、教菩薩するに、盡地盡界なるなり。開方便門し、開住位門して、一箇半箇をすてず、示眞實相するなり。この正恁麼時、あるひは諸佛、あるひは菩薩の慮知念覺と、無慮知念覺と、

【通利】法華序品に諸根通利、智慧明了とあり。

みづからおのおの强爲にあらざれども、この經卷をうるを、各面の大期とせり。必得是經のときは、古今にあらず、古今の得經の時節なるがゆゑに盡十方界の目前に現前せるは、これ得是經なり、この經を讀誦通利するに、佛智、自然智、無師智、こころよりさきに現成し、身よりさきに現成す。このとき新條の特地とあやしむことなし。この經のわれらに受持讀誦せらるるは、經のわれらを攝取するなり。文先句外、向下節上の消息、すみやかに散華貫華なり、この經をすなはち法となづく。これに八萬四千の說法蘊あり、この經のなかに成等正覺の諸佛なる文字あり、現住世間の諸佛なる文字あり、入般涅槃の諸佛なる文字あり。如來如去ともに經中の文字なり、法上の法文なり。「拈華瞬目、微笑破顏。」すなはち七佛正傳の古經なり。「腰雪斷臂、禮拜得髓。」まさしく師資相承の古經なり。つひにすなはち、傳法付衣する。これすなはち廣文全卷を付屬せしむる時節至なり。みたび臼をうち、みたび箕の米をひる、經の經を出手せしめ、經の經に正嗣するなり。しかのみならず、「是什麼物恁麼來。」これ敎諸佛の千經なり、敎菩薩の萬經なり。「說似一物即不中。」よく八萬蘊をとき、十二部をとく。いはんや拳頭脚跟、拄杖拂子、すなはち古經新經なり、有經空經なり。在衆辨道、功夫坐禪もとより。頭正也佛經なり、尾正也佛經なり。菩提葉に經し、虛空面に經す。おほよそ佛祖の一動兩靜あはせて把定放行、おのれづから佛經の卷舒なり。窮極あらざるを、窮極の標準と參學するゆゑに、鼻孔より受經出經す、脚尖よりも受經出經す。父母未生前にも受經出經あり、威音王以前にも受經出經あり。

【第廿七祖】傳燈廿七祖般若多羅尊者章に出づ。

【不用燒香禮拜】御抄に云く此天童の御詞は燒香禮拜念佛修懺看經等を嫌て不用と制して只管打坐辨道功夫身心脫落とて坐禪許を被勸たるやうに聞ゆ、非爾、此燒香禮拜念佛修懺看經等の參悉經卷なるべし、不用の詞嫌にはあらずと

山河大地をもて、經をうけ經をとく、日月星辰をもて、經をうけ經をとく。あるひは空劫以前の自己をして經を持し經をさづく。あるひは面目以前の身心をもて、經を持し經をさづく。かくのごとくの經は微塵を破して出現せしむ、法界を破していださしむるなり。

第二十七祖般若多羅尊者道、貧道出息不隨衆縁、入息不居蘊界、常轉如是經、百千萬億卷、非但一卷兩卷。かくのごとくの師祖道を聞取して、出息入息のところに轉經せらるることを參學すべし。轉經をしるがごときは、在經のところをしるべきなり。能轉所轉、轉經經轉なるがゆゑに、悉知悉見なるべきなり。

先師請常道、我箇裏、不用燒香禮拜念佛修懺看經、祗管打坐、辦道功夫、身心脫落。かくのごとくの道取あきらむるともがらまれなり。ゆゑはいかん、看經をよんで看經とすれば觸す、よんで看經とせざればそむく。不得有語、不得無語、速道速道。この道理參學すべし。この宗旨あるゆゑに、古人云、看經須具看經眼。まさにしるべし古今にもし經なくば、かくのごときの道取あるべからず。脫落の看經あり、不用の看經あること參學すべきなり。しかあればすなはち參學の一箇半箇、かならず佛經を傳持して佛子なるべし、いたづらに外道の邪見をまなぶことなかれ。いま現成せる正法眼藏は、すなはち佛經なるがゆゑに、あらゆる佛經は正法眼藏なり。一異にあらず、自他にあらず。しるべし正法眼藏そこばくおほしといへども、なんだちことごとく開明せず、しかあれども正法眼藏を開演す。信ぜざることとなし、佛經もしかあるべし。そこばくおほしといへども、信受奉行せ

【しかあるに大宋國の一二百餘年】以下宋朝に於ける杜撰禪和子佛經を會せざるの弊を痛破す。

んこと、一偈一句なるべし、八萬解會すべからず。佛經の達者にあらざればとて、みだりに佛經は佛法にあらずといふことなかれ。なんだちが佛祖の骨髓を稱しきこゆるも、正眼をもてこれをみれば、依文の晩進なり。一句一偈を受持せるにひとしかるべし、一句一偈の受持におよばざることもあるべし。この薄解をたのんで佛正法を謗することなかれ、聲色の佛經より功德なるあるべからず。聲色のなんぢを惑亂するなほもとめむさぼる、佛經のなんぢを惑亂せざる、信ぜずして謗することなかれ。しかあるに大宋國の一二百餘年の前後にあらゆる杜撰の臭皮袋いはく、祖師の言句、なほこころにおくべからず、いはんや經教は、ながくみるべからず、もちゐるべからず、ただ身心をして枯木死灰のごとくなるべし、破木杓脫底桶のごとくなるべし。かくのごとくのともがら、いたづらに外道天魔の流類となれり、もちゐるべからざるをもとめてもちゐる、これによりて佛祖の法むなしく狂顚の法となれり、あはれむべしかなしむべし。たとひ破木杓脫底桶も、すなはち佛祖の古經なり。この經の卷數部帙、きはむる佛祖まれなるなり。佛經を佛法にあらずといふは、佛祖の經をもちゐし時節をうかがはず、佛祖の從經出の時節を參學せず、佛祖と佛經との親疎の量をしらざるなり。かくのごとくの杜撰のやから、稻麻竹葦のごとし、獅子の座にのぼり人天の師として天下の叢林をなせり。杜撰は杜撰に學せるがゆゑに、杜撰にあらざる道理をしらず、しらざればねがはず、從レ冥入ニ於冥一あはれむべし。いまだかつて佛法の身心なければ、身儀心操、いかにあるべしとしらず、有空のむねあきらめざれば、人も

【洞山の三路】洞山悟本大師爲人の機關、一鳥道、二玄路、三展手、是を三路といふ。四料簡、四照用、三句、五位等佛道卷に出づ。

し問取するとき、みだりに拳頭をたつ、しかあれどもたつる宗旨にくらし。正邪のみちあきらめざれば、人もし問取すれば、拂子をあぐ、しかあれどもあぐる宗旨にあきらかならず。あるひは爲人の手をさづけんとするには、臨濟の四料簡、四照用、雲門の三句、洞山の三路、五位等を擧して、學道の標準とせり。先師天童和尚、よのつねにこれをわらふていはく、學佛あにかくのごとくならんや、佛祖正傳する大道、おほく心にかうぶらしめ身にかうぶらしむ。これを參學するに、參究せんと擬するにいとまあらず、なんの閑暇ありてか、晩進の言句をいれん。まことにしるべし諸方長老無道心にして、佛法の身心を參學せざることあきらけし。先師の示衆かくのごとし、まことに臨濟は黄檗の會下に後生なり、六十拄杖をかうぶりて、つひに大愚に參ず。老婆心話のしたに從來の行履を照顧して、さらに黄檗にかへる。このこと雷聞せるゆゑに、黄檗の佛法は臨濟ひとり相傳せりとおもへり、あまりさへ黄檗にもすぐれたりとおもへり、またくしかにはあらざるなり。臨濟はわづかに黄檗の會にありて、隨衆すといへども、陳尊宿すすむるとき、なにごとをとふべしとしらずといふ。大事未明のとき、參學の玄侶として、立地聽法せんに、あにしかのごとく茫然とあらんや、しるべし上上の機にあらざることを。また臨濟かつて勝師の志氣あらず、過師の言句きこえず。黄檗は勝師の道取あり、過師の大智なり、佛未道の道を道得せり、祖未會の法を會得せり、黄檗は超越古今の古佛なり、百丈よりも尊長なり、馬祖よりも英俊なり。臨濟にかくのごとくの秀氣あらざるなり。ゆゑはいかん、古來未道の句ゆ

【また杜撰の輩】以下再び三教一致を說くの非を痛罵して正眼を開かしめんとす。

めにもいまだいはず、ただ多を會して一をわすれ、一を達して多にわづらふがごとし。あに四料簡等に、道味ありとして學法の指南とせんや。雲門は雪峯の門人なり、人天の大師に堪爲なりとも、なほ學地といふつべし。これらをもて得本とせん、ただこれ梢末なるべし。臨濟いまだきたらず。雲門いまだいでざりしときは、佛祖なにをもてか學道の標準とせし。かるがゆゑにしるべし、かれらが屋裏の、佛家の道業つたはれざるなり。憑據すべきところなきがゆゑに、みだりにかくのごとく胡亂說道するなり。このともがら、みだりに佛經をさみす、人これにしたがはざれ。もし佛經なげすつべくば、臨濟雲門をもなげすつべし、佛經もしもちゐるべからずば、のむべき水もなし、くむべき杓もなし。また高祖の三路五位は節目にて、杜撰のしるべき境界にあらず。宗旨正傳し、佛業直指せり、あへて餘門にひとしからざるなり。また杜撰のともがらいはく、道教儒教釋教ともにその極致は一揆なるべし、しばらく入門の別あるのみなり。あるひはこれを鼎の三脚にたとふ。これいまの大宋國の諸僧のさかりに談ずるむねなり。もしかくのごとくいはば、これらのともがらがうへには、佛法すでに地をはらふて滅沒せり、また佛法かつて微塵のごとくばかりもきたらずといふべし。かくのごとくのともがら、みだりに佛法の通塞を道取せんとして、あやまりて佛經は不中用なり、祖師の門下に別傳の宗旨ありといふ。小量の機根なり、佛道の邊際をうかがはざるゆゑなり。佛經もちゐるべからずといはば、祖經あらんとき、もちゐるやもちゐるべからずや。祖道に佛經のごとくなる法おほし、用捨いかん。もし佛

道のほかに祖道ありといはば、たれか祖道を信ぜん、祖師の祖師とあることは、佛道を正傳するによりてなり、佛道を正傳せざらん祖師、たれか祖師といはん。初祖を崇敬することは、第二十八祖なるゆゑなり。佛道のほかに祖道をいはば、十祖二十祖たてがたからん。嫡嫡相承するによりて、祖師を恭敬するゆゑは佛道のおもきによりてなり。佛道を正傳せざらん祖師は、なんの面目ありてか人天と相見せん。いはんやほとけをしたふ、ふかきこころざしをひるがへして、あらたに佛道にあらざらん祖師にしたがひがたきなり。いま杜撰の狂者、いたづらに佛道を輕忽するは、佛道所有の法を決擇することあたはざるによりてなり。しばらくかの道教儒教をもて佛教に比する愚癡のかなしむべきのみにあらず、罪業の因緣なり、國土の衰弊なり。三寶の陵夷なるがゆゑに、孔老の道いまだ阿羅漢に同ずべからず、いはんや等覺妙覺におよばんや。孔老の教は、わづかに聖人の視聽を天地乾坤の大象にわきまふとも、大聖の因果を一生多生にあきらめがたし。わづかに身心の動靜を無爲の爲にわきまふとも、盡十方界の眞實を無盡際斷にあきらむべからず。おほよそ孔老の教の佛教よりも劣なること、天地懸隔の論におよばざるなり、これをみだりに一揆に論ずるは、謗佛法なり、謗孔老なりたとひ孔老の教に精微ありとも、近來の長老等、いかにしてかその少分をもあきらめん、いはんや萬期の大柄をとらんや。かれにも教訓あり修練あり、いまの庸流たやすくすべきにあらず、修しこころむるともがらたほあるべからず、一微塵なほ他塵に同ずべからず。いはんや佛經の奥玄ある、いまの晩進いかでか辨肯する

ことあらん、兩頭ともにあきらかならざるに、いたづらに一致の胡說亂道するのみなり。大宋いまかくのごとくのともがら、師號に署し師職にをり、古今に無慚なるをもて、おろかに佛道を亂辨す、佛法ありと聽許しがたし。かくのごとくの長老等、かれこれともにいはく、佛經は佛道の本意にあらず、祖傳これ本意なり、祖傳に奇特玄妙つたはれり。かくのごとくの言句は、至愚のはなはだしきなり、狂顚のいふところなり。祖師の正傳に、またく一言半句としても佛經に違せる奇特あらざるなり、佛經と祖道と、おなじくこれ釋迦牟尼佛より、正傳流布しきたれるのみなり。ただし祖傳は、嫡嫡相承せるのみなり。しかあれども佛經をいかでかしらざらん、いかでかあきらめざらん、いかでか讀誦せざらん。古德いはく、「なんぢ經にまどふ、經なんぢをまよはさず。」古德看經の因緣おほし。杜撰にむかふていふべし、なんぢがいふがごとく、佛經もしなげすつべくば、佛心なげすつべし、佛身もなげすつべし。佛身心なげすつべくは、佛子なげすつべし、佛子なげすつべくは、佛道なげすつべし、佛道なげすつべくは、祖道なげすてざらんや、佛道祖道ともになげすてば、一枚の禿子の百姓ならん、たれかなんぢを喫棒の分なしといはん。ただ王臣の驅使のみにあらず、閻老のせめあるべし。近來の長老等、わづかに王臣の帖をたづさへて、梵刹の主人といふをもて、かくのごとくの狂言あり、是非を辨ずるに人なし、ひとり先師のみこのともがらをわらふ、餘山の長老等すべてしらざるところなり。おほよそ異域の僧侶なればあきらむる道かならずあるらんとおもひ、大國の帝師なれば達せるところさだめ

【簾】薄簾なり、乃ち御前内の簾、みすのこと。

てあるらんとおもふべからず。異域の衆生、かならずしも僧種にたへず、善衆生は善なり惡衆生は惡なり。法界のいく三界も、衆生の種品おなじかるべきなり。また大國の帝師となること、かならずしも有道をえらばず、帝者また有道をしりがたし。わづかに臣の擧をききて、登用するのみなり。古今に有道の帝師あり、有道にあらざる帝師おほし。にごれる代に登用せらるるは、無道の人なり。にごれる世に登用せられざるは、有道の人なり、そのゆゑはいかん、知人のとき不知人のときあるゆゑなり、黄梅のむかし神秀あることをわすれざるべし。神秀は帝師なり、簾前に講法す、簾前に説法す、しかのみにあらず、七百高僧の上座なり。黄梅のむかし盧行者あることを信ずべし、樵夫より行者にうつる、搬柴をのがるとも、なほ碓米を職とす。卑賤の身うらむべしといへども、出俗越僧、得法傳衣かつていまだむかしもきかざるところ、西天にもなし。ひとり東地にのこれる、希代の高躅なり。七百の高僧もかたを比せず、天下の龍象あとをたづぬる分なきがごとし。まさしく第三十三代の祖位を嗣續して佛嫡なり、五祖知人の知識にあらずば、いかでかかくのごとくならん。かくのごとくの道理、しづかに思惟すべし、卒爾にすることなかれ。知人のちからをえんことをこひねがふべし、人をしらざるは自他の大患なり、天下の大患なり。廣學措大は要にあらず、知人のまなこ、知人の力量、いそぎてもとむべし。もし知人のちからなくば、曠劫に沈淪すべきなり。しかあればすなはち佛道にさだめて佛經あることをしり、廣文深義を山海に參學して、辨道の標準とすべきなり。

爾時寬元元年癸卯秋九月庵居于越州吉田縣吉峯寺示衆

正法眼藏佛經　畢

正法眼藏無情說法

說法於說法するは、佛祖付屬於佛祖の見成公案なり。この說法は法說なり、有情にあらず、無情にあらず、有爲にあらず、無爲にあらず、有爲無爲の因緣にあらず、從緣起の法にあらず。しかあれども鳥道に不行なり、佛衆に爲與す。大道十成するとき、說法十成す、法藏付屬するとき、說法付屬す。拈華のとき拈說法あり、傳衣のとき、傳說法あり。このゆゑに諸佛諸祖、おなじく威音王以前より、說法に奉覲しきたり、諸佛以前より、說法に本行しきたれるなり。說法は佛祖の理しきたるとのみ參學することなかれ、佛祖は說法に理せられきたるなり。この說法わづかに八萬四千門の法蘊を開演するのみにあらず、無量無邊門の說法蘊あり。先佛の說法を後佛は說法すと參學することなかれ、先佛きたりて後佛なるにあらざるがごとく、說法も先說法を後說法とするにはあらず。このゆゑに釋迦牟尼佛道、「如三世諸佛、說法之儀式、我今亦如是、說無分別法。」しかあればすなはち諸佛の說法を使用するがごとく、諸佛は說法を使用するなり。諸佛の說法を正傳するがごとく、諸佛は諸佛の說法を正傳するによりて、古佛より七佛に正傳し、七佛よりいまに正傳

【寬元元年】祖齡四十四歲、古峰寺に於ける示衆。

【無情說法】山聲水聲鳥語雀噪を無情說法といふにはあらず、一切諸法悉皆解脫の當體、有情非情の沙汰あること無し、解脫の上の說法也。說法とて口業の上の能のみをいふに非ず身を以て說き心を以て說く、塵塵刹刹無間斷の說法也。佛祖の言語行業皆無情說法なり。

【理しきたる】料理、こしらへ立てること。

【如三世諸佛】法華方便品の文。

【大唐國大證國師】傳燈二十、師の章詳出。文小異あり。

して、無情說法あり。この無情說法に、諸佛あり諸祖あるなり。我今說法は、正傳にあらざる新條と學することなかれ、古來正傳は舊窠の鬼窟と發することなかれ。

大唐國西京光宅寺大證國師、因僧問、無情還解說法否。國師云、常說熾然、說無間歇。僧曰、某甲爲甚麼不聞。國師云、汝自不聞、不可妨他聞者也。僧曰、未審什麼人得聞。國師云、諸聖得聞。僧曰、和尙還聞否。國師云、我不聞。僧曰、和尙既不聞、爭知無情解說法。國師云、賴我不聞、我若聞則齊於諸聖、汝卽不聞我說法。僧曰、恁麼則衆生無分也。國師云、我爲衆生說、不爲諸聖說。僧曰、衆生聞後如何。國師云、卽非衆生。

直須勸學すべし。常說熾然說無間歇とあり、常は諸時の一分時なり。說無間歇は、說すでに現出するがごときは、さだめて無間歇なり。無情說法の儀、かならずしも有情のごとくにあらんずると參學すべからず、有情の音聲および有情說法の儀のごとくなるべきがゆゑに。有情界の音聲をうばふて、無情界の音聲に擬するは、佛道にあらず。無情說法、かならずしも聲塵なるべからず。たとへば有情の說法、それ聲塵にあらざるがごとくなり。しばらくいかなるか有情、いかなるか無情と問自問他功夫參學すべし。しかあれば無情說法の儀、いかにかあるらんと審細に留心參學すべきなり。愚人おもはくは、樹林の鳴條する、葉華の開落するを、無情說法と認ずるは、學佛法の漢にあらず、もししかあらばたれか無情說法をしらざらん、たれか無情說法をきかざらん。しばらく回光すべし、無情界には、

草木樹林ありやなしや、無情界は有情界にまじはれりやいなや。しかあるを草木瓦礫を認じて無情とするは、不徧學なり。無情を認じて草木瓦礫とするは、不參飽なり。たとひいま人間の所見の草木等を認じて無情に擬せんとすとも、草木等も凡慮のはかるところにあらず。ゆゑいかんとなれば、天上人間の樹林、はるかに殊異あり、中國邊地の所生ひとしきにあらず、海裏山間の草木、みな不同なり。いはんや空におふる樹木あり、雲におふる樹木あり。風火等のなかに、所生長の百草萬樹、おほよそ有情と學しつべきあり、無情と認ぜられざるあり、草木の人畜のごとくなるあり、有情無情いまだあきらめざるなり。いはんや仙家の樹石華果湯水等、みるに疑著およばずとも、說著せんにかたからざらんや。ただわづかに神州一國の草木をみ、日本一州の草木を慣習して、萬方盡界もかくのごとくあるべしと擬議商量することなかれ。國師道諸聖得聞、いはく無情說法の會下には、諸聖立地聽するなり。諸聖と無情と、聞を現成し說を現成せしむ。無情すでに諸聖のために說法す、聖なりや凡なりや。あるひは無情說法の儀をあきらめをはりなば、諸聖の所聞かくのごとくありと體達すべし。すでに體達することをえては、聖者の境界をはかりしるべし、さらに超凡越聖の通霄路の行履を參學すべし。國師いはく「我不聞。」この道も容易會なりと擬することなかれ、超凡越聖にして、不聞なりや、擘破凡聖窠窟のゆゑに不聞なりや、恁麼功夫して、道取を現成せしむべし。國師いはく、「賴我不レ聞、我若聞則齊ニ於諸聖。」この學似、これ一道兩道にあらず、賴我は凡聖にあらず、賴我は佛祖なるべきか。佛

【洞山參雲巖】傳燈第十五卷洞山章に出づ。

【三秋四月】三秋は秋期の三ヶ月、即ち七八九月をいふ、四月は西域記に云く西天歳分三際。謂兩際熱際寒際。四月即一際也と。意は猶し一夏の工夫と言はんが如し。

祖は超凡越聖するゆゑに、諸聖の所聞には一齊ならざるべし。國師道の汝即不聞我說法の理道を修理して、諸佛諸聖の菩提を料理すべきなり。その宗旨は、いはゆる無情說法、諸聖得聞、國師說法、這僧得聞なり。この理道を參學功夫の日深月久とすべし。しばらく國師に問著すべし、衆生聞後はとはず、衆生正當聞說法時如何。

高祖洞山悟本大師、參曩祖雲巖大和尚問曰、「無情說法什麼人得聞。」雲巖曩祖云、「無情說法、無情得聞。」高祖曰、「和尚聞否。」曩祖曰、「我若聞汝即不得聞吾說法也。」高祖曰、「若恁麼即某甲不聞和尚說法也。」曩祖云、「我說法汝尚不聞、何況無情說法也。」高祖乃述偈呈曩祖曰、「也太奇也太奇、無情說法不思議、若將耳聽終難會、眼處聞聲方得知。」いま高祖道の無情說法什麼人得聞の道理、よく一生多生の功夫を審細にすべし。いはゆるこの問著、さらに道著の功德を具すべし。この道著の皮肉骨髓あり、以心傳心のみにあらず、以心傳心は、初心晩學の辦肯なり、衣を擧して正傳し、法を拈じて正傳する關棙子あり。いまの人いかでか三秋四月の功夫に究竟することあらん。高祖かつて大證道の無情說法諸聖得聞の宗旨を見聞せりといへども、いまさらに無情說法什麼人得聞の問著あり。これ肯大證道なりとやせん、不肯大證道なりとやせん、問著なりとやせん、道著なりとやせん。もし總不肯大證爭得恁麼道、もし總肯大證爭解恁麼道なり。曩祖雲巖云、「無情說法、無情得聞。」この血脈を正傳して、身心脫落の參學あるべし。いはゆる無情說法、無情得聞は、諸佛說法諸佛得聞の性相なるべし。無情說法を聽取せん衆會、たとひ有

情無情なりとも、たとひ凡夫賢聖なりとも、これ無情なるべし。この性相によりて古今の眞僞を批判すべきなり。たとひ西天より將來すとも、正傳まことの祖師にあらざらんば、もちゐるべからず。たとひ千萬年より習學すること聯綿なりとも、嫡嫡相承にあらずば、嗣續しがたし。いま正傳すでに東土に通達せり、眞僞の通塞わきまへやすからん。たとひ衆生說法衆生得聞の道取を聽取しても、諸佛諸祖の骨髓を稟受しつべし。雲巖曩祖の道を聞取し、大證國師の道を聽取して、まさに與奪せば、諸聖得聞の道取する諸聖は無情なるべし、無情得聞と道取する無情は諸聖なるべし。無情所說無情なり、無情說法卽無情なるがゆゑにしかあればすなはち無情說法なり、說法無情なり。高祖道の若恁麼則某甲不レ聞二和尙說法一也。いまきくところの若恁麼は、無情說法無情得聞の宗旨を擧拈するなり。無情說法無情得聞の道理によりて、某甲不聞和尙說法也なり。高祖このとき無情說法の席末に接するのみにあらず、爲無情說法の志氣あらはれて衝天するなり。ただ無情說法を體達するのみにあらず、無情說法の聞不聞を體究せり、すすみて有情說法の說不說、已說今說當說にも體達せしなり。さらに聞不聞の說法の、これは有情なりこれは無情なる道理はあきらめをはりぬ。おほよそ聞法は、ただ耳根耳識の境界のみにあらず、父母未生已前、威音以前、乃至盡未來際、無盡未來際にいたるまでの擧力、擧心、擧體、擧道をもて聞法するなり。身先心後の聞法あるなり、これらの聞法ともに得益あり。心識に緣ぜられざれば、聞法の益あらずといふことなかれ。心滅身沒のもの、聞法得益すべし。無心無身のも

【不敢】思ひきつて進むこと。

の、聞法得益すべし。諸佛諸祖、かならずかくのごとくの時節を經歷して、作佛し成祖するなり。法力の身心を接する、凡慮いかにしてか覺知しつくさん。身心の際限、みづからあきらめつくすことえざるなり。聞法功德の、身心の田地に下種する、くつる時節あらず。つひに生長とときともにして、果成必然なるものなり。愚人おもはくば、たとひ聞法おこたらずとも、解路に進歩なく、記持に不敢ならんは、その益あるべからず。人天の身心を擧して、博記多聞ならん、これ至要なるべし。即座に忘記し、退席に茫然とあらん、なにの益かあらんとおもひ、なにの學功かあらんといふは、正師にあはず、その人をみざるゆゑなり。正傳の面授あらざるを、正師にあらずとはいふ。佛佛正傳しきたれるは、正師たり。愚人のいふ心識に記持せられて、しばらくわすれざるは、聞法の功いささか心識にも蓋心蓋識する時節なり。この正當恁麼時は、蓋身、蓋身先、蓋心、蓋心先、蓋心後、蓋因緣報業相性體力、蓋佛、蓋祖、蓋自他、蓋皮肉骨髓等の功德あり。蓋言說、蓋坐臥等の功德現成して、彌綸彌天なるなり。まことにかくのごとくある聞法の功德、たやすくしるべきにあらざれども、佛祖の大會に會して、皮肉骨髓を參究せん、說法の功力ひかざる時節あらず、聞法の法力かうぶらしめざるところあるべからず。かくのごとくして時節劫波を頓漸ならしめて、結果の現成をみるなり。かの多聞博記も、あながちになげすつべきにあらざれども、その一隅をのみ要機とするにはあらざるなり。參學これをしるべし。高祖これを體達せしなり。曩祖道、我說法汝尚不ㇾ聞、何況無情說法也。これは高祖たちまち

【也太奇】また甚だ奇なり、めづらしい。

【壁上耳】莊子に「牆有レ耳伏寇在レ側」と。

に證上になほ證契を證しもてゆく現成を、曩祖ちなみに開襟して父祖の骨髓を印證するなり。なんぢなほ我說に不聞なり、これ凡流のしかあるにあらず、無情說法たとひ萬端なりとも、爲慮あるべからずと證明するなり。このときの嗣續まことに秘要なり、凡聖の境界たやすくおよびうかがふべきにあらず。高祖ときに偈を理して雲巖曩祖に呈するにいはく、『無情說法不思議』は『也太奇也太奇』なり。しかあれば無情および無情說法、ともに思議すべきことかたし。いはくの無情、なにものなりとかせん。凡聖にあらず情無情にあらずと參學すべし。『凡聖情無情』は、說不說ともに、思議の境界およびぬべし。いま不思議にして、太奇なり、また太奇ならん。凡夫賢聖の智慧心識およぶべからず、天衆人間の籌量にかかはるにあらざるべし。『若將レ耳聽終難レ會』は、たとひ天耳なりとも、たとひ彌界彌時の法耳なりとも、將耳聽を擬すには、終難會なり。壁上耳棒頭耳ありとも、無情說法を會すべからず。聲塵にあらざるがゆゑに、若將耳聽はなきにあらず、百千劫の功夫をつひやすとも、終難會なり。すでに聲色のほかの一道の威儀なり、凡聖のほとりの窠窟にあらず。『眼處聞聲方得レ知。』この道取を箇箇おもはくは、いま人間の所見する艸木華鳥の往來を、眼處の聞聲といふならんとおもふ。この見處はさらにあやまりぬ、またく佛法にあらず、佛法はかくのごとくいふ道理なし。高祖道の眼處聞聲の參學するには、聞無情說法聲のところ、これ眼處なり、現無情說法聲のところ、これ眼處なり、眼處さらにひろく參究すべし。眼處の聞處は、耳處の聞聲にひとしかるべきがゆゑに、眼處の聞聲

【舒州投子山】投子大同、翠微無學に嗣ぐ。傳燈十五投子章に出づ。莫惡口の三字惡一字に作れり。

【法謨】漢書に先聖之大謨と、註に定㆓其法㆒曰ㇾ謨とあり。變改無きの義にして正法の定謨といふ意。

は、耳處の聞聲にひとしからざるなり。眼處に耳根ありと參學すべからず、眼即耳と參學すべからず、眼裏聲現と參學すべからず。古云、『盡十方界是沙門一隻眼。』この眼處に聞聲せば、高祖道の眼處聞聲ならんと擬議商量すべからず。たとひ古人道の盡十方界一雙眼の道を學すとも、盡十方はこれ一隻眼なり。さらに千手頭眼あり、千正法眼あり、千耳眼あり、千舌頭眼あり、千心頭眼あり、千通心眼あり、千通身眼あり、千棒頭眼あり、千身先眼あり、千心先眼あり、千死中死眼あり、千活中活眼あり、千自眼あり、千他眼あり、千眼頭眼あり、千參學眼あり、千竪眼あり、千横眼あり。しかあれば盡眼を盡界と學すとも、なほ眼處に體究あらず、ただ聞無情說法を眼處に參究せんことを急務すべし。いま高祖道の宗旨は、耳處は無情說法に難會なり、眼處は聞聲す、さらに通身處の聞聲あり、偏身處の聞聲あり。たとひ眼處聞聲を體究せずとも、無情說法無情得聞を體達すべし、脫落すべし、この道理つたはれるゆゑに。

先師天童古佛道、『胡蘆藤種纏㆓胡蘆㆒。』これ曩祖の正眼のつたはれ、骨髓のつたはれる、說法無情なり。一切說法無情なる道理によりて、無情說法なり、いはゆる典故なり。無情は爲無情說法なり。喚什麼作無情、しるべし聽無情說法者是なり。喚什麼作說法、しるべし不知吾無情者是なり。

舒州投子山慈濟大師同明覺云投子古佛、因僧問、『如何是無情說法。』師云、『莫㆓惡口㆒。』いまこの投子の道取するところ、まさしくこれ古佛の法謨なり、祖宗の治象なり。無情說法、

【寛元元年】祖齢四十四歳、吉峰寺に於ける示衆。

【法性】法性は眞如の異名、又佛性の異名。大論に有情數中に在るを佛性と爲し無情數中に在るを法性と爲すと、有情無情の見解を超え、佛と法との差別を離るる時性の性とすべきもの亦無し、無自性任運無作の妙用、發心修行菩提涅槃なる法性の活三昧を提示す。

【無師獨悟】抄に云く自己も法性なり師も法性なるべし、この道理が無師獨悟と云はるるなり、施爲とは法性のなす也と云なり否亦如是の道理

ならびに說法無情等、おほよそ莫惡口なり。しるべし無情說法は、佛祖の總章これなり、臨濟德山のともがらしろべからず、ひとり佛祖なるのみ參究す。

爾時寛元元年癸卯十月二日在越州吉田縣吉峯寺示衆

正法眼藏無情說法　畢

正法眼藏法性

あるひは經卷にしたがひ、あるひは知識にしたがひて、參學するに、無師獨悟するなり。無師獨悟は、法性の施爲なり。たとひ生知なりとも、かならず尋師訪道すべし、たとひ無生知なりとも、かならず功夫辨道すべし。いづれの箇箇か生知にあらざらん。佛果菩提にいたるまでも、經卷知識にしたがふなり。しるべし經卷知識にあふて法性三昧をうるを、法性三昧にあふて法性三昧をうる生知といふ、これ宿住智をうるなり、これ三明をうるなり、これ阿耨菩提を證するなり、生知にあふて生知を習學するなり、無師智自然智にあふて無師智自然智を正傳するなり。もし生知にあらざれば、經卷知識にあふといへども、法性をきくことをえず、法性を證することえざるなり。大道は、如人飮水冷暖自知の道理にはあらざるなり。一切諸佛および一切菩薩、一切衆生は、みな生知のちからにて、一切法性の大道をあきらむるなり。經卷知識にしたがひて、法性の大道をあきらむるを

みづから法性をあきらむるとす。經卷これ法性なり、自己なり、知識これ法性なり、自己なり。法性これ知識なり、法性これ自己なり。法性自己なるがゆゑに、外道魔黨の邪計せる自己にはあらざるなり。法性には外道魔黨なし、ただ喫粥來、喫飯來、點茶來のみなり。しかあるに三二十年の久學と自稱するもの、法性の談を見聞するとき、茫然のなかに一生を蹉過す。飽叢林と自稱して、曲木の牀にのぼるもの、法性の聲をきき、法性の色をみるに、身心依正、よのつねに紛然の窟坑に昇降するのみなり。そのていたらくは、いま見聞する三界十方撲落してのち、さらに法性あらはるべし。かの法性はいまの萬象森羅にあらずと邪計するなり。法性の道理、それかくのごとくなるべからず。この森羅萬象と法相と、はるかに同異の論を超越せり、離卽の談を超越せり。過現當來にあらず、斷常にあらず、色受想行識にあらざるゆゑに法性なり。

洪州江西馬祖大寂禪師云、「一切衆生、從無量劫來、不出法性三昧、長在法性三昧中、著衣喫飯、言談祇對、六根運用、一切施爲、盡是法性。」馬祖道の法性は、法性道の法性なり、馬祖と同參す、法性と同參なり。すでに聞著あり、なんぞ道著なからん。法性騎馬祖なり、人喫飯、飯喫人なり。法性よりこのかたかつて法性三昧をいでず、法性よりのち法性をいでず、法性よりさき法性をいでず。法性とならびに無量劫は、これ法性三昧なり。法性を無量劫といふ。しかあれば卽今の者裏は法性なり、法性は卽今の者裏なり。著衣喫飯は、法性三昧の著衣喫飯なり。衣法性現成なり、飯法性現成なり、喫法性現成な

を無師獨悟とはいふなりと。

【生知】孔子の生而知之、學而知之、困而知之、及其知之一也、及其成功一也と之を假り用ひて生知不生知といふ。

【法性三昧】馬祖の語、後に出づ。

【宿住智】三明の一、宿住智證明、過去のことに通達する智。

【如人飲水】六祖壇經行由第一、明上座の語にあり。

【馬祖云一切衆生】古尊宿語錄卷一、馬祖章の語。

【依模】違背せざるをいふ。

り、著法性現成なり。もし著衣喫飯せず、言談祇對せず、六根運用せず、一切施爲せざれば、法性三昧にあらず、不入法性あり、即今の道現成は、諸佛相授して、釋迦牟尼佛にいたり、諸祖正傳して、馬祖にいたれり。佛佛祖祖、正傳授手して。法性三昧に正傳せり。佛佛祖祖不入にして、法性を活鱍鱍ならしむ。文字の法師、たとひ法性の言ありとも、馬祖道の法性にはあらず。不出法性の衆生、さらに法性あらざらんと擬するちから、たとひ得處ありとも、あらたにこれ法性の三四枚なり。法性にあらざらんと言談祇對運用施爲する、これ法性なるべきなり。無量劫の日月は、法性の經歴なり、現在未來もまたかくのごとし、身心の量を身心の量として、法性にとぼしと思量するこの思量これ法性なり。身心量を身心量とせずして、法性にあらずと思量する、この思量これ法性なり。思量不思量、ともに法性なり。性といひぬれば水も流通すべからず、樹も榮枯なかるべしと學するは、外道なり。釋迦牟尼佛道、如是相、如是性。しかあれば開華葉落、これ如是性なり。しかあるに愚人おもはくは、法性界には開華葉落あるべからずと。しばらく他人に擬問すべからず、なんぢが疑著を道著に依模すべし。他人の說著のごとく擧して、三復參究すべし。さきより脫出あらん、向來の思量、それ邪思量なるにあらず、ただあきらめざるときの思量なり。あきらめんときこの思量をして失せしむるにあらず。開華葉落おのれづから開華葉落なり、法性に開華葉落あるべからずと思量せらるる思量これ法性なり、依模脫落しきたれる思量なり。このゆゑに如法性の思量なり、思量法性の渾思量かくのごとくの面目な

り。馬祖道の盡是法性、まことに八九歳の道なりといへども、馬祖いまだ道取せざるところおほし。いはゆる一切法性不出法性といはず、一切法性盡是法性といはず、一切衆生不出衆生といはず、一切衆生法性之少分といはず、一切衆生一切衆生之少分といはず、一切法性是衆生之少分といはず、半箇衆生半箇法性といはず、無衆生是法性といはず、法性不是衆生といはず、法性脱出法性といはず、衆生脱落衆生といはず、ただ衆生は法性三昧をいでずとのみきこゆ。法性は衆生三昧をいづべからずといはず、法性三昧の衆生三昧に出入する道著なし。いはんや法性の成佛きこえず、衆生證法性きこえず、法性證法性きこえず、無情不出法性の道なし。しばらく馬祖にとふべし、なにをよんでか衆生とする、もし法性をよんで衆生とせば、是什麼物恁麼來なり、もし衆生をよんで衆生とせば、説似一物卽不中なり、速道速道。

于時日本寛元元年癸卯孟冬在越州吉峰精舍示衆

正法眼藏法性　畢

【寛元元年】祖齡四十四歳、吉峰寺に於ける示衆。

正法眼藏陀羅尼

參學眼あきらかなれば、正法眼あきらかなり。正法眼あきらかなるゆゑに、參學眼あきらかなることをうるなり。この關棙子を正傳すること、必然として大善知識に奉覲するち

【陀羅尼】陀羅尼は梵音、深義の故に譯せず、總持といひ遮持といひ能持と能遮といひ又咒といひ眞言といふ、皆深義の中の一分なり、佛法の

深淵根源なり陀羅尼は諸佛の母なり祖師の依怙なり。此根源より流出するところ人事あり、行禮あり、禮佛あり禮師あり、得髓あり得道あり、親參實究すべきなり

【大陀羅尼】覺經に云く、善男子、無上法王有大陀羅尼門、名爲圓覺、流出一切清淨眞如菩提涅槃及波羅蜜、教授菩薩、一切如來本起因地、皆依圓照清淨覺相、永斷無明、方成佛道と。

【擎茶來點茶來】潙山と仰山及香嚴の神通、神通卷に詳し。盥水來、瀉水來同じ。

【人事】日常の威儀より佳節慶弔の禮儀を盡すに至る一定の行禮をいふ。大陀羅尼は人事のこれなり甚深微妙の無上法が擧手投足に活現するなり。

からなり。これ大因緣なり、これ大陀羅尼なり。いはゆる大善知識は、佛祖なり、かならず巾瓶に勤恪すべし。しかあればすなはち擎茶來、點茶來、心要現成せり、神通現成せり。盥水來、瀉水來、不動著境なり、下面了知なり、佛祖の心要を參學するのみにあらず、心要裏の一兩位の佛祖に相逢するなり。佛祖の神通を受用するのみにあらず、神通裏の七八員の佛祖をえたるなり。これによりてあらゆる佛祖の神通は、この一束に究盡せり。あらゆる佛祖の心要は、この一拈に究盡せり。このゆゑに佛祖を奉覲するに、天華天香をもてする不是にあらざれども、三昧陀羅尼を拈じて、奉覲供養する、これ佛祖の兒孫なり。いはゆる大陀羅尼は、人事これなり。人事は大陀羅尼なるがゆゑに、人事の現成に相逢するなり。人事の言は、震旦の言音を依模して、世諦に流通せることひさしといふとも、梵天より相傳せず、西天より相傳せず、佛祖より正傳せり。この聲色の境界にあらざるなり、威音王佛の前後を論ずることなかれ。その人事は、燒香禮拜なり。あるひは出家の本師、あるひは傳法の本師、すなはち出家の本師なるもあり、これらの本師にかならず依止奉覲する、これ咨參の陀羅尼なり。いはゆる時時をすごさず、參侍すべし。安居のはじめをはり、冬年および月旦月半、さだめて燒香禮拜す。その法は、あるひは粥前、あるひは粥罷を、その時節とせり。威儀を具して師の堂に參ず。威儀を具すといふは、袈裟を著し、坐具をもち、鞋襪を整理して、一片の沈香箋香等を帶して參ずるなり。師前にいたりて問訊す、侍僧ちなみに香爐を裝し燭をたて、師もしさきより椅子に坐せば、すなはち

【燒香禮拜】人事の一つを擧ぐ。

【安居のはじめをはり】結制と解制との式禮嚴肅に行はる、行持軌範に詳し。

【冬年月日月半】冬年は歳暮、年賀等、月日は一日、月半は十五日、即ち朔望の人事なり

【問訊】立つて叉手して低頭するなり。

燒香すべし、師もし帳裏にあらば、すなはち燒香すべし、師もしは臥し、もしは食し、かくのごときの時節ならば、すなはち燒香すべし、師もし地にたちてあらば、請和尚坐と問訊すべし、請和尚穩便とも請す、あまた請坐の辭あり、和尚を椅子に請し坐せしめて、のちに問訊す、曲躬如法なるべし。問訊しをはりて、香臺の前面にあゆみよりて、帶せる一片香を香爐にたつ。香をたつるには、香あるひは衣襟にさしはさめることもあり、あるひは懷中にもてるもあり、あるひは袖裏に帶せることもあり、おのおの人のこころにあり。問訊ののち香を拈出して、もしかみにつつみたらば、右手へむかひて肩を轉じて、つつめる紙をさげて、兩手に香をささげて香爐にたつるなり、すぐにたつべし、かたぶかしむることなかれ。香をたてをはりて叉手して、みぎへめぐりてあゆみて正面にいたりて、和尚にむかひ曲躬如法問訊しをはりて、展坐具禮拜するなり。拜は、九拜、あるひは十二拜するなり、拜しをはりて收坐具して問訊す、あるひは一展坐具禮三拜して、寒喧をのぶることもあり、いまの九拜は寒喧をのべず、たゞ一展三拜を、三度あるべきなり。その儀はるかに七佛よりつたはれるなり、宗旨正傳しきたれり、このゆゑにこの儀をもちゐる、かくのごとくの禮拜、そのときをむかふるごとに廢することなし、そのほか法益をかうぶるたびごとには禮拜す、因緣を請益せんとするにも禮拜するなり。二祖そのかみ見處を初祖にたてまつりしとき、禮三拜するがごときこれなり、正法眼藏の消息を開演するに三拜す。しるべし禮拜は、正法眼藏なり、正法眼藏は大陀羅尼なり。請益のときの拜は、近來おほ

【小師】小師は小僧なり、小より師とし事ふる義。

く頓一拜をもちゐる、古儀は三拜なり。法益の謝拜、かならずしも九拜十二拜にあらず、あるひは三拜、あるひは觸禮一拜なり、あるひは六拜あり、ともにこれ稽首拜なり。西天にはこれらを最上禮拜となづく、あるひは六拜あり、頭をもて地をたたく、いはく額をもて地にあててうつなり、血のいづるまでもす、これにも展坐具せるなり。一拜三拜六拜ともに額をもて地をたたくなり、あるひはこれを頓首拜となづく、世俗にもこの拜あるなり、世俗には九品の拜あり。法益のときまた不住拜あり、いはゆる禮拜してやまざるなり、百千拜までもいたるべし。ともにこれら佛祖の會にもちゐきたれる拜なり、おほよそこれらの拜、ただ和尚の指揮をまもりて、その拜を如法にすべし。おほよそ禮拜の住世せるとき佛法住世す、禮拜もしかくれぬれば、佛法滅するなり。傳法の本師を禮拜することは、時節をえらばず、處所を論ぜず、拜するなり。あるひは臥時食時にも拜す、行大小時にも拜す、あるひは牆壁をへだて、あるひは山川をへだてても、遙望禮拜するなり、あるひは劫波をへだてて禮拜す、あるひは生死去來をへだてて禮拜す、あるひは菩提涅槃をへだてて禮拜す。弟子小師しかのごとく種種の拜をいたすといへども、本師和尚は答拜せず、ただ合掌するのみなり。おのづから寄拜をもちゐることあれども、おぼろけの儀にはもちゐず。かくのごとくの禮拜のとき、かならず北面禮拜するなり。本師和尚は、南面して端坐せり。弟子は本師和尚の面前に立地して、おもてをきたにして本師にむかひて本師を拜するなり、これ本儀なり。みづから歸依の正信おこれば、かならず北面の禮拜そのはじめに

【背然】任運の如し、當然、あたりまへのこと。

【字母】悉曇章に問ふべし、梵字は阿字を母とす、阿は悉曇十二韻の一にして四十二字門、五十字門の一、一切語言の根本にして衆字の母なりといふ。

おこなはると正傳せり。このゆゑに世尊の在世に、歸佛の人衆天衆龍衆、ともに北面にして世尊を恭敬禮拜したてまつる。最初には阿若憍陳如（亦曰拘隣）阿濕卑（亦曰阿陛）摩訶摩南（亦曰摩訶拘利）波提（亦曰跋提）婆敷（亦曰十力迦葉）この五人のともがら、如來成道ののち、おぼえずして起立し、如來にむかひたてまつれて北面の禮拜を供養したてまつる。外道魔黨、すでに邪をすてて歸佛するごときは、必定して自搆他搆せざれども、北面禮拜するなり。それよりこのかた西天二十八代、東土の諸代の祖師の會にきたりて正法に歸する、みなおのづから北面の禮拜するなり、これ正法の背然なり、師弟の搆意にならず、これすなはち大陀羅尼なり。有大陀羅尼、名爲圓覺、有大陀羅尼、名爲人事、有大陀羅尼、現成禮拜なり、有大陀羅尼、其名袈裟なり、有大陀羅尼、是名正法眼藏なり、これを誦呪して盡大地を鎭護しきたる盡方界を鎭成しきたる盡時界を鎭現しきたる、盡佛界を鎭作しきたる、菴中菴外を鎭通しきたる。大陀羅尼かくのごとくなると參學究辨すべきなり。一切の陀羅尼は、この陀羅尼を字母とせり、この陀羅尼の眷屬として一切の陀羅尼は現成せり。一切の佛祖、かならずこの陀羅尼門より、發心、辨道、成道、轉法輪あるなり。しかあればすでに佛祖の兒孫なり、この陀羅尼を審細に參究すべきなり。おほよそ爲釋迦牟尼佛衣之所覆は、爲十方一切佛祖衣之所覆なり。爲釋迦牟尼佛衣之所覆は、爲袈裟之所覆なり。袈裟は標職の佛衆なり。この辨肯、難値難遇なり。まれに邊地の人身をうけて愚蒙なりといへども、宿殖陀羅尼の善根力現成して、釋迦牟尼佛の法にうまれあふ、たとひ百艸のほとりに自成他成の諸佛祖を禮拜すとも、

これ釋迦牟尼佛の成道なり、釋迦牟尼佛の辨道功夫なり、陀羅尼神變なり。たとひ無量億千劫に、古佛今佛を禮拜する、これ釋迦牟尼佛衣之所覆時節なり。ひとたび袈裟を身體におほふは、すでにこれ得釋迦牟尼佛之身肉手足頭目髓腦光明轉法輪なり。かくのごとくして袈裟を著するなり、これは現成著袈裟功德なり、これを保任し、これを好樂して、ときとともに守護の搭著して禮拜供養釋迦牟尼佛したてまつるなり。このなかにいく三阿僧祇劫の修行をも辨肯究盡するなり。釋迦牟尼佛を禮拜したてまつり、供養したてまつるといふは、あるひは傳法の本師を禮拜し、供養し、剃髪の本師を禮拜し供養するなり。これすなはち見釋迦牟尼佛なり、以法供養釋迦牟尼佛なり。陀羅尼をもて、釋迦牟尼佛を供養したてまつるなり。先師天童古佛しめすにいはく、「あるひは雪のうへにきたりて禮拜し、あるひは碓のなかにありて禮拜する勝躅なり、先蹤なり、大陀羅尼なり。」

爾時寛元元年癸卯在越宇吉峯寺示衆

正法眼藏陀羅尼　畢

正法眼藏洗面

法華經云、「以油塗身、澡浴塵穢、著新淨衣、內外俱淨。」いはゆるこの法は、如來まさに法華會上にして、四安樂行の行人のためにときましますところなり、餘會の說にひとし

【雪のうへにきたり】二祖慧可の達磨大師に參ずる勝躅。

【碓のなかに】六祖の黄梅五祖の碓房にありし先蹤なり。

【寛元元年】祖齡四十四歲、吉峰寺に於ける示衆。

【洗面】面目を洗淨する也、本來清淨にして垢膩の洗ふべき無しと雖も之を拂拭し洗淨するを佛法とす。衲子は須らく本來の

面目を洗ふべし、身心内外六根悉く清淨なるべし。水にても洗ひ火にても洗ひ理にても洗ひ事にても洗ひ淨むべし。

【以油塗身】法華安樂行品の文。

からず、餘經におなじかるべからず。しかあれば身心を澡浴して、香油をぬり、塵穢をのぞくは、第一の佛法なり。新淨の衣を著する、ひとつの淨法なり。塵穢を澡浴し、香油を身に塗するに、内外倶淨なるとき、依報正報清淨なり。しかあるに佛法をきかず、佛道を参せざる愚人いはく、「澡浴はわづかにみのはだへをすすぐといへども、身内に五臓六腑あり、かれらを一一に澡浴せざらんは、清淨なるべからず、しかあればあながちに身表を澡浴すべからず。」かくのごとくいふともがらは、佛法いまだしらずきかず、いまだ正師にあはず、佛祖の兒孫にあはざるなり。」しばらくかくのごとくの邪見のともがらのことばをなげすてて佛祖の正法を參學すべし。いはゆる諸法の邊際いまだ決斷せず、諸大の内外また不可得なり、かるがゆゑに身心の内外また不可得なり。しかあれども最後身の菩薩、すでにいまし道場に坐し成道せんとするとき、まづ袈裟を洗浣し、つぎに身心を澡浴す、これ三世十方の諸佛の威儀なり。最後身の菩薩と餘類と、諸事みなおなじならず。その功德智慧、身心莊嚴、みな最尊最上なり。澡浴洗浣の法も、またかくのごとくなるべし。いはんや諸人の身心、その邊際、ときにしたがふてことなることあり。いはゆる一坐のとき、三千界みな坐斷せらるる、このときかくのごとくなりといへども、自他の測量にあらず、佛法の功德なり。その身心量、また五尺六尺にあらず、五尺六尺はさだまれる五尺六尺にあらざるゆゑなり。所在も此界他界盡界無盡界等の有邊無邊にあらず。遮裏是什麽所在、説細説麁のゆゑに、心量また思量分別のよくしるべきにあらず。不思量不分別のよくきは

【いまだ染汙せざれども澡浴し】此一語古佛未だ說かざるの妙法なり信受奉行すべし。

【佛言三沐三薰】此經文未考。

むべきにあらず。身心量かくのごとくなるがゆゑに、澡浴量もかくのごとし。この量を拈得して修證する、これ佛佛祖祖の護念するところなり、計我をさきとすべからず、計我を實とすべからず。しかあればすなはちかくのごとく澡浴し洗浣するに、身量、心量を究盡して淸淨ならしむるなり。たとひ四大なりとも、たとひ五蘊なりとも、たとひ不壞性なりとも、澡浴するみな淸淨なることをうるなり。これすなはちただ水をきたしすすぎてのち、そのあとは淸淨なるとのみしるべきにあらず。水なにとして本淨ならん、本不淨ならん。本淨本不淨なりとも、來著のところをして淨不淨ならしむといはず。ただ佛祖の修證を保任するとき用水洗浣、以水澡浴等の佛法つたはれり。これによりて修證するに、淨を超越し、不淨を透脫し、非淨非不淨を脫落するなり。しかあればすなはちいまだ染汚せざれども澡浴し、すでに大淸淨なるにも澡浴する法は、ひとり佛祖道のみに保任せり、外道のしるところにあらず。もし愚人のいふがごとくならば、五臟六腑を細塵に抹して卽空ならしめて大海水をつくしてあらふとも、塵中なほあらはずば、いかでか淸淨ならん、空をあらはずば、いかでか內外の淸淨を成就せん。愚夫また空を澡浴する法いまだしらざるべし。空を拈來して空を澡浴し、空を拈來して身心を澡浴す。澡浴を如法に信受するもの佛祖の修證を保任すべし。いはゆる佛佛祖祖嫡嫡正傳する正法には、澡浴をもちゐるに、身心內外、五臟六腑、依正二報、法界虛空の內外中間、たちまちに淸淨なり。香華をもちゐてきよむるとき、過去、現在、未來、因緣行業、たちまちに淸淨なり。佛言『三

【三毒四倒】三毒とは貪瞋癡也、毒とは害也、皆能破二壞出世善心一故、四倒は一身起二淨倒一、二受起二樂倒一、三心起二常倒一、四法起二我倒一、即ち身受心法に就いて不淨不樂無常無我なる實相を倒想して淨樂常我の見を有す故に四顚倒といふ。

【大小二行】大小便のいづるところ。

【摩黎山】華嚴經に云く摩羅耶山出二栴檀香一、名曰二牛頭一、若以塗レ身設入二火坑一不レ能レ燒と、智論に摩羅耶山、此曰二離垢一、在二南天竺國一と。

【阿那婆達池】袈裟功德偈に出づ。

沐三薫、身心清淨す。しかあれば身をきよめ心をきよむる法は、かならず一沐しては一薫し。かくのごとくあひつらなれて、三沐三薫して、禮佛し轉經し、坐禪し經行するなり。經行をはりて、さらに端坐坐禪せんとするには、かならず洗足するといふ。足けがれ觸せるにあらざれども、佛祖の法それかくのごとし。それ三沐三薫すといふは、一沐とは、一沐浴なり、通身みな沐浴す。しかうしてのちつねのごとくして衣裳を著してのち、小爐に名香をたきて、ふところのうちおよび袈裟坐處等に薫ずるなり。しかうしてのちまた沐浴してまた薫ず、かくのごとく三番するなり。これ如法の儀なり。このとき、六根六塵あらたにきたらざれども、清淨の功德ありて現前す、うたがふべきにあらず。三毒四倒いまだのぞからざれども、清淨の功德たちまちに現前するは、佛法なり。たれか凡慮をもて測度せん、なにびとか凡眼をもて覰見せん。たとへは沈香をあらひきよむるとき、片片にをりてあらふべからず、塵塵に抹してあらふべからず、體をあらひて清淨をうるなり。佛法にかならず浣洗の法さだまれり、あるひは身をあらひ心をあらひ、足をあらひ面をあらひ、目をあらひ口をあらひ、大小二行をあらひ、手をあらひ、鉢盂をあらひ、袈裟をあらひ、頭をあらひ、これらみな三世の諸佛諸祖の正法なり。佛法僧を供養したてまつらんとするには、もろもろの香をとりきたりては、まづみづからが兩手をあらひ、澡口洗面してきよきころもを著し、きよき盤に淨水をうけて、この香をあらひきよめて、しかうしてのちに佛法僧の境界には供養したてまつるなり。ねがはくば摩黎山の栴檀香を、阿那婆達池

【八功德水】稱讚淨土經に八功德水とは一澄淨二清冷三甘美四輕輭五潤澤六安和七除患八增益、功德者施レ物曰レ功、歸レ已曰レ德といふ

【照堂】僧堂の背後に在り、天窓より照明をとれる建物なり。

の八功德水にてあらひて三寶に供養したてまつらんことを。

洗面は西天竺國よりつたはれて、東震旦國に流布せり。諸部の律にあきらかなりといふとも、なほ佛祖の傳持、これ正嫡なるべし。數百歲の佛佛祖祖おこなひきたれるのみにあらず、億千萬劫の前後に流通せり。ただ垢膩をのぞくのみにあらず、佛祖の命脈なり。いはく、もしおもてをあらはざれば、禮をうけ他を禮する、ともに罪あり、自禮禮他、能禮所禮、性空寂なり、性脫落なり。かるがゆゑにかならず洗面すべし。洗面の時節、あるひは五更、あるひは昧旦、その時節なり。先師の天童に住せしときは、三更の三點を、その時節とせり、裙褊衫たづさへて洗面架におもむく。手巾は一幅の布ながさ一丈二尺なり、そのいろしろかるべからす、しろきは制す。三千威儀經云、『當下用二手巾一有中五事上。一者當レ拭二上下頭一、二者當下用二一頭一拭レ手、以二一頭一拭上レ面、三者不レ得二持拭一レ鼻、四者以用拭二膩汗一、當二即浣一レ之、五者不レ得レ拭二身體一、若澡浴各當二自有一レ巾。』まさに手巾を持せんにかくのごとく護持すべし。手巾をふたつにをりて、左のひぢにあたりてそのうへにかく、手巾は半分はおもてをのごひ、半分にては手をのごふ。はなをのごふべからずとは、はなのうち、および鼻涕をのごはず、わき、せなか、はら、へそ、もも、はぎを手巾もてのごふべからず。垢膩にけがれたらんには洗浣すべし。ぬれしめれらんは火に烘し日にほしてかはすべし。手巾をもて沐浴のときもちゐるべからず。雲堂の洗面處は、後架なり、後架は照堂の西なり。その屋圖つたはれり。庵內および單寮は、便宜のところにかまふ、住持人は

【褊衫】現在の法衣は褊衫と裙子とつなぎ合せある故直綴と稱せり、腰より上袷ある方を褊衫と名く。

方丈にて洗面す。耆年老宿居處に、便宜に洗面架をおけり。住持人、もし雲堂に宿するときは、後架にして洗面すべし。洗面架にいりて、手巾の中分をうなぢにかく。ふたつのはしを左右のかたより、まへにひきこして、左右の手にて左右のわきより、手巾の左右のはしをうしろへいだして、うしろにておのおのひきちがへて左のはしは右へきたし、右のはしは左にきたして、むねのまへにあたりてむすぶなり。かくのごとくすれば褊衫のくびは、手巾におほはれ、兩袖は手巾にゆひあげられて、ひぢよりかみにあがりぬるなり。ひぢよりしも、うでたなごころあらはなり。たとへばたすきかけたらんがごとし。そののちもし後架ならば面桶をとりて、かまのほとりにいたりて一桶の湯をとりて、かへりて洗面架のうへにおく、もし餘處にては、打湯桶の湯を面桶にいる。つぎに楊枝をつかふべし、今大宋國諸山には、嚼楊枝の法ひさしくすたれてつたはれざれば、嚼楊枝のところなしといへども、今吉祥山永平寺、嚼楊枝のところあり、すなはち今案なり。これによればまづ嚼楊枝すべし、楊枝を右手にとりて、呪願すべし。華嚴經淨行品云、「手執楊枝、當願衆生、心得正法、自然清淨。」この文を誦しをはりて、さらに楊枝をかまんとするに、すなはち誦すべし「晨嚼楊枝、當願衆生、得調伏牙、噬諸煩惱。」この文を誦しをはりて、また嚼楊枝すべし。楊枝のながさあるひは四指、あるひは八指、あるひは十二指、あるひは十六指なり。摩訶僧祇律第三十四云、「齒木應量用、極長十六指、極短四指。」しるべし四指よりもみぢかくすべからず、十六指よりもながき、量に應ぜず、ふとさは手小指大なり。しかいへどもそれよ

【佛在王舍城】賢愚因緣經二降六師品の文。

【波斯匿王】舍衛國の王、祇陀太子の父、釋尊の說法に依つて深く佛教に歸依せり。

りほそきさまたげなし、そのかたち手小指形なり、一端はふとく、一端ほそし。」ふときはしを微細にかむなり。三千威儀經云、『嚼頭不レ得レ過二三分一。』よくかみて、はのうへ、はのうら、みがくがごとくときあらふべし、たびたびとぎみがきあらひすすぐべし、はのもとのししのうへ、よくみがきあらふべし、はのあひだよくかきそろへ、きよくあらふべし。嗽口たびたびすれば、すすぎきよめらる。しかうしてのちしたをこそぐべし。三千威儀經云、『刮舌有二五事一、一者不レ得レ過二三返一、二者舌上血出當レ止、三者不レ得三大振レ手、汙二僧伽梨衣若足一、四者棄二楊枝一莫レ當二人道一、五者常當二屏處一。』いはゆる刮舌三返といふは、水を口にふくみて、舌をこそげきよむること三返するなり。三刮にはあらず、血いでばまさにやむべしといふにこころうべし。よくよく刮舌すべしといふことは、三千威儀經云、『淨口者嚼楊枝、漱口、刮舌。』しかあれば楊枝は、佛祖ならびに佛祖兒孫の護持しきたれるところなり。

『佛在二王舍城竹園之中一、與二千二百五十比丘一俱、臘月一日、波斯匿王、是日設レ食、淸晨躬手授二佛楊枝一、佛受嚼竟、擲レ殘著レ地、便生蓊鬱而起、根莖涌出、高五百由旬、枝葉雲布、周帀亦爾、漸復生レ華、大如二車輪一、遂復有レ果、大如二五斗瓶一、根莖枝葉、純是七寶、若干種色、映殊麗妙、隨レ色發レ光、掩二蔽日月一、食二其果一者、美越二甘露一、香氣四塞、聞者情悅、香風來吹、更相撐角、枝葉皆出二和雅之音一、暢二演法要一、聞者無レ厭、一切人民、覩二茲樹變一、敬信之心、倍益純厚、佛乃說レ法、應二適其意一、心皆開

【六師】釋尊當時の婆羅門教團中最も勢力ありし六人の教派、一富蘭那迦葉、二末伽黎瞿倶睒黎子、三刪闍耶毘羅胝子、四阿耆多翅舍欽婆羅、五迦羅鳩駄迦旃延、六尼乾陀若提子なり。

解、志求佛者、得果生天、數甚衆多。』佛および衆僧を供養する法は、かならず晨旦に楊枝をたてまつるなり。そののち種種の供養をまうく、佛に楊枝をたてまつれることおほく、ほとけ楊枝をもちゐさせたまふことおほけれども、しばらくこの波斯匿王みづからてづから供養しましますの因縁、ならびにこの高樹の因縁、しるべきゆゑに擧するなり。またこの日すなはち外道六師、ともにほとけに降伏せられたてまつりて、おどろきおそりてにげはしる。つひに六師ともに『投河而死、六師徒類九億人、皆來師佛求爲弟子、佛言善來比丘、鬚髮自落、法衣在身、皆成沙門、佛爲説法、示其法要、漏盡結解、悉得羅漢。』しかあればすなはち如來すでに楊枝をもちゐましますゆゑに、人天これを供養したてまつるなり。あきらかにしりぬ嚼楊枝これ諸佛菩薩、ならびに佛弟子の、かならず所持なりといふことを。もしもちゐざらんは、その法失墜せり、かなしまざらんや。梵網菩薩戒經云、『若佛子、常應二時頭陀、冬夏坐禪、結夏安居、常用楊枝、澡豆、三衣、瓶、鉢、坐具、錫杖、香爐、漉水囊、手巾、刀子、火燧、鑷子、繩牀、經律、佛像菩薩形像。而菩薩行頭陀時、及遊方時、行來百里千里、此十八種物、常隨其身。頭陀者從正月十五日至三月十五日、八月十五日至十月十五日、是二時中、此十八種物、常隨其身、如鳥二翼。』この十八種物、ひとつも虧闕すべからず、もし虧闕すれば、鳥の一翼おちたらんがごとし。一翼のこれりとも、飛行することあたはじ、鳥道の機緣にあらざらん。菩薩もまたかくのごとし、この十八種の羽翼そなはらざれば、行菩薩道あたはず。

【嘉定十六年】日本の貞應二年、高祖二十四歳の時。

【白法】甘露の白法といひ、大乘の法門のこと。

十八種のうち、楊枝すでに第一に居せり、最初に具足すべきなり。この楊枝の用不をあきらめんともがら、すなはち佛法をあきらむる菩提薩埵なるべし、いまだかつてあきらめざらんは、佛法也未夢見在ならん。しかあればすなはち見楊枝は見佛祖なり、「或有人問意旨如何、幸値永平老漢嚼楊枝。」この梵網菩薩戒は、過去現在未來の諸佛菩薩、かならず過現當に受持しきたれり、しかあれば楊枝また過現當に受持しきたれり。禪苑清規云、「大乘梵網經、十重四十八輕、並須讀誦通利、善知持犯開遮、但依金口聖言、莫擅隨於庸輩。」まさにしるべし、佛佛祖祖正傳の宗旨それかくのごとし、これに違せんは佛道にあらず、佛法にあらず、祖道にあらず。しかあるに大宋國、いま楊枝たえてみえず、嘉定十六年癸未四月のなかに、はじめて大宋に諸山諸寺をみるに、僧侶の楊枝をしれるなく、朝野の貴賤おなじくしらず。僧家すべてしらざるゆゑに、もし楊枝の法を問著すれば、失色して度を失す。あはれむべし白法の失墜せることを。わづかにくちをすすぐともがらは、馬の尾を寸餘にきりたるを、牛の角のおほきさ三分ばかりにて方につくりたるがながさ六七寸なる、そのはし二寸ばかりに、うまのたちがみのごとくにうゑて、これをもちて牙齒をあらふのみなり。僧家の器にもちゐがたし、不淨の器ならん、佛法の器にあらず、俗人の祠天するにも、なほきらひぬべし。かの器、また俗人僧家、ともにくつのちりをはらふ器にもちゐる、また梳鬢のときもちゐる。いささかの大小あれども、すなはちこれひとつなり。かの器をもちゐるも、萬人が一人なり。しかあれば天下の出家、在

【僧正榮西】建仁寺の開山、號明庵、建保元年六月權僧正を賜ふ、同三年五月五日鎌倉壽福寺に寂す、壽七十五。千光祖師の稱あり。

家ともにその口氣はなはだくさし、二三尺をへだてゝものいふとき、口臭きたる、かぐものたへがたし。有道の尊宿と稱し、人天の導師と號するともがらも、漱口刮舌嚼楊枝の法ありとだにもしらず。これをもて推するに、佛祖の大道いま陵夷をみるらんこといくそばくぞといふことをしらず。いまわれら露命を萬里の蒼波にをしまず、異域の山川をわたりしのぎて、道をとぶらふとすれども、澆運かなしむべし、いくばくの白法かさきだちて滅沒しぬらん、をしむべしをしむべし。しかあるに日本一國朝野の道俗、ともに楊枝を見聞す、佛光明を見聞するならん。しかあれども嚼楊枝それ如法ならず、刮舌の法つたはれず、倉卒なるべし。しかあれども宋人の楊枝をしらざるにたくらぶれば、楊枝をもちゐるべしとしれるは、おのづから上人の法をしれり。仙人の法にも楊枝をもちゐる、しるべしみな出塵の器なり、清淨の調度なりといふことを。三千威儀經云、用二楊枝一有二五事一、一者斷當レ如レ度、二者破當レ如レ法、三者嚼レ頭不レ得レ過二三分一、四者疎齒當レ中二齒、五者當二汁澡レ目用一。いま嚼楊枝漱口の水を、右手にうけてもて目をあらふこと、みなもと三千威儀經の說なり。いま日本國の往代の庭訓なり、刮舌の法は、僧正榮西つたふ。楊枝つかひてのち、すてんとするとき、兩手をもて楊枝のかみたるかたより二片に擘破す。その破口のときかたを、よこさまに舌上にあててこそぐ。すなはち右手に水をうけて、口にいれて漱口し刮舌す。漱口刮舌、たびたびし、擘楊枝の角にてこそげこそげして血出を度とせんとするがごとし、漱口のときこの文を密誦すべし。華嚴經云、澡二漱口齒一、當願衆生、向

淨法門、究竟解脱。』たびたび漱口して、くちびるのうちと、したのした、あぎにいたるまで、右手の第一指、第二指、第三指等をもて、指のはらにてよくよくなめりたるがごとくなるをあらひのぞくべし、油あるもの食せらんことちかからんには、皂莢をもちゐるべし。楊枝つかひをはりて、すなはち屏處にすつべし、楊枝すてゝのち、三彈指すべし。後架にしては棄楊枝をうくる事あるべし、餘處にては屏處にすつべし、漱口の水は面桶のほかにはきすつべし。」つぎにまさしく洗面す、兩手に面桶の湯を掬して、額より兩眉毛、兩目、鼻孔、耳中、顱、頬、あまねくあらふ、まづよくよく湯をすくひかけて、しかうしてのち摩沐すべし、涕唾鼻涕を面桶の湯におとしいるることなかれ、かくのごとくあらふとき、湯を無度につひやして、面桶のほかにもらしおとしちらして、はやくうしなふことなかれ。あかおちあぶらのぞかうりぬるまであらふなり。耳裏あらふべし、著水不得なるがゆゑに、眼裏あらふべし、著沙不得なるがゆゑに。あるひは頭髪頂顫までもあらふ、すなはち威儀なり。」洗面をはりて面桶の湯をすてゝのちも、三彈指すべし。つぎに手巾のおもてをのごふ、はしにてのごひかはかすべし。しかうしてのち手巾もとのごとく脱し、とりてふたへにして、左臂にかく。雲堂の後架には、公界の拭面あり。いはゆる一兩布をまうけたり、烘櫃あり、衆家ともに拭面するに、たらざるわづらひなし、かれにても頭面のごふべし。また自己の手巾をもちゐるもともにこれ法なり。洗面のあひだ、桶杓ならしておとをなすことかまびすしくすることなかれ、湯水を狼藉にして近邊をぬらすことなかれ。ひそかに

【延應元年】祖師四十歳興聖寺に於ける第一回の示衆なり。

【寛元元年】祖師四十四歳後文を增補して吉峰寺に於いて第二回の示衆【建長二年】祖師五十一歳、永平寺に於ける第三回の

觀想すべし、後五百歳にうまれて、邊地遠島に處すれども、宿善くちずして、古佛の威儀を正傳し、染汙せず、修證する、隨喜歡喜すべし。雲堂にかへらんに、輕歩低聲なるべし。耆年宿德の草庵、かならず洗面架あるべし。洗面せざるは非法なり。洗面のとき、面藥をもちゐる法あり。おほよそ嚼楊枝、洗面、これ古佛の正法なり。道心辦道のともがら、修證すべきなり。あるひは湯をえざるには、水をもちゐる舊例なり、古法なり。湯水すべてえざらんときは、早晨よくよく拭面して、香草抹香等をぬりてのち、禮佛誦經燒香坐禪すべし、いまだ洗面せずば、もろもろのつとめともに無禮なり。

正法眼藏洗面

延應元年己亥十月二十三日在觀音導利興聖寶林寺示衆

天竺國、震旦國者、國王、王子、大臣、百官、在家、出家、朝野男女、百姓萬民、みな洗面す。家宅の調度にも面桶あり、あるひは銀、あるひは鑞なり。天祠神廟にも、毎朝に洗面を供す。佛祖の塔頭にも、洗面をたてまつる。在家出家洗面ののち、衣裳をただしくして、天をも拜し、神をも拜し、祖宗をも拜し、父母をも拜す。師匠を拜し、三寶を拜し、三界萬靈十方眞宰を拜す。いまは農夫田夫、漁樵翁まで、洗面わするることなし、しかあれども嚼楊枝なし。日本國は、國王、大臣、老少、朝野、在家出家の貴賤、ともに嚼楊枝、漱口の法をわすれず。しかあれども洗面せず一得一失なり。いま洗面、嚼楊枝、ともに護持せん。補虧闕の興隆なり、佛祖の照臨なり。

示衆也。最後永平寺の示衆には本文は大に添除せられたるところあるものの如し。本文に「今」吉祥山永平寺嚼楊枝のところありと知るべし。

【面授】面はまのあたり、面前なり、師は面り資(弟子)に授け、資は面り師に稟く、之を面授面稟といふ。嫡嫡佛法を正傳するに必ず師資相承あり之を傳法といひ嗣法といふ。師は資を得て之を傳授し資は師に依て之を稟受す、授受必ず面稟相對し手手相付す是れ三世諸佛同道の儀式なり故に面授にあらずんば嫡嗣にあらず面稟にあらずんば眞師にあらず、面授面稟之を一師印證といふ。面授は實に嗣法正傳の本據にして佛法住持の根源なり。

寛元元年癸卯十月二十日在越州吉田縣吉峯寺重示衆
建長二年庚戌正月十一日越州吉田郡吉祥山永平寺示衆

正法眼藏洗面　畢

正法眼藏面授

「爾時、釋迦牟尼佛、西天竺國靈山會上、百萬衆中、拈優曇華瞬目、於時摩訶迦葉尊者、破顏微笑、釋迦牟尼佛言、吾有正法眼藏、涅槃妙心、付屬摩訶迦葉」これすなはち佛佛祖祖面授正法眼藏の道理なり。七佛の正傳して迦葉尊者にいたる、迦葉尊者より二十八授して、菩提達磨尊者にいたる。菩提達磨尊者、みづから震旦國に降儀して、正宗太祖普覺大師慧可尊者に面授す、五傳して曹谿山大鑑慧能大師にいたる。一十七授して先師大宋國慶元府太白名山天童古佛にいたる。大宋寶慶元年乙酉五月一日、道元はじめて先師天童古佛を妙高臺に燒香禮拜す。先師古佛、はじめて道元をみる。そのとき道元に指授面授するにいはく、「佛佛祖祖、面授の法門現成せり。」これすなはち靈山の拈華なり、嵩山の得髓なり、黃梅の傳衣なり、洞山の面授なり。これは佛祖の眼藏面授なり、吾屋裏のみあり、餘人は夢也未見聞在なり。この面授の道理は、釋迦牟尼佛、まのあたり迦葉佛の會下にして、面授し護持しきたれるがゆゑに、佛祖面なり。佛面より面授せざれば、諸佛にあ

らざるなり。釋迦牟尼佛、まのあたり迦葉尊者をみること親付なり。阿難羅睺羅といへども、迦葉の親付におよばず。諸大菩薩といへども、迦葉の親付におよばず。迦葉尊者の座に坐することえず。世尊と迦葉と、同座し同衣したるを、一代の佛儀とせり。迦葉尊者、したしく世尊の面授を面授せり、心授せり、身授せり、眼授せり。釋迦牟尼佛を供養恭敬禮拜奉覲したてまつれり。その粉骨碎身、いく千萬變といふことをしらず、自己の面目は面目にあらず、如來の面目を面授せり。釋迦牟尼佛、まさしく迦葉尊者をみまします、迦葉尊者、まのあたり阿難尊者をみる、阿難尊者まのあたり、迦葉尊者の佛面を禮拜す、これ面授なり。阿難尊者この面授を住持して、商那和修を接して面授す。商那和修尊者、まさしく阿難尊者を奉覲するに、唯面與面面受し面授す。かくのごとく代代嫡嫡の祖師、ともに弟子は師にまみえ、師は弟子をみるによりて、面授しきたれり。一祖一師一弟子としても、あひ面授せざるは、佛佛祖祖にあらず。たとへば水を朝宗せしめて、宗派を長ぜしめ、燈を續して光明つねならしむるに、億千萬法するにも、本枝一如なるなり、また啐啄の迅機なるなり。しかあればすなはちまのあたり釋迦牟尼佛をまもりたてまつりて、一期の日夜をつめり。佛面に照臨せられたてまつりて、一代の日夜をつめり。これいく無量劫を往來せりとしらず、しづかにおもひやりて隨喜すべきなり。釋迦牟尼佛の佛面を禮拜したてまつり、釋迦牟尼佛の佛眼をわがまなこにうつしたてまつり、わがまなこを佛眼にうつしたてまつりし佛眼睛なり、佛面目なり。これをあひつたへていまにいたるまで一世

【爾時釋迦牟尼佛】釋尊と迦葉と面授付法、これその本源なり、之を佛佛祖祖面授正法眼藏の道理也と云ふ。

【寶慶元年】日本嘉祿元年、高祖二十六歲。

【親付】付は手より手にさづくる也。師親しく資の手に授く、資親しく師の手より受く、之を親付といふ。

【燈を續して】四十二章經に云く、如一炬燈之火、數千百人各以炬來分取、熟食除冥、此炬如故と。傳燈の意知るべし。

【啐啄の迅機】雛兒が卵殼の內部より破るを子啐といひ、母鳥の機を見て卵殼の外部より破るを母啄といふ、子啐と母啄と同時同位にして迅速機敏なるを啐啄の迅機といふ。「鏡淸啐啄の機の話あり。

【五十一世】摩訶迦葉尊者を初祖として高祖道元禪師五十一代の正傳なり。

も間斷せず面授しきたれるは、この面授なり。而今の數十代の嫡嫡は、面面なる佛面なり、本初の佛面に面授なり、この正傳面授を禮拜する、まさしく七佛釋迦牟尼佛を禮拜したてまつるなり。迦葉尊者等の二十八佛祖を禮拜供養したてまつるなり。佛祖の面目眼睛かくのごとし。この佛祖にまみゆるは、釋迦牟尼佛等の七佛にみえたてまつるなり。佛祖したしく自己を面授する正當恁麼時なり。面授佛の面授佛に面授するなり。葛藤をもて葛藤に面授して、さらに斷絕せず。眼を開して眼に眼授し、眼受す。面をあらはして、面に面授し、面受す。面授は、面處の受授なり。心を拈じて心に心授し、心受す。身を現じて身を身授するなり。他方他國も、これを本祖とせり。震旦國以東、ただこの佛正傳の屋裏のみ、面授面受あり。あらたに如來をみたてまつる正眼をあひつたへきたれり。釋迦牟尼佛面を禮拜するとき、五十一世、ならびに七佛祖宗、ならべるにあらずつらなるにあらざれども、倶時の面授あり。一世も師をみざれば、弟子にあらず、弟子をみざれば、師にあらず。さだまりてあひみあひみえて、面授しきたれり、嗣法しきたれるは、祖宗の面授處道現成なり。このゆゑに如來の面光を直拈しきたれるなり。しかあればすなはち千年萬年百劫億劫といへども、この面授これ釋迦牟尼佛の面現面授現なり、この佛祖現成せるには、世尊、迦葉、五十一世、七代祖宗の影現成なり、光現成なり、身現成なり、心現成なり、尖脚來なり、尖鼻來なり。一言いまだ領覽せず、半句いまだ不會せずといふとも、師すでに裏頭より弟子をみ、弟子すでに頂𩕳より師を拜しきたれるは、正傳の面授なり。かくのごと

【八塔を禮拜】八大靈塔名號經の諸説也、爾時世尊告ニ諸苾芻ニ我今稱ニ揚八大靈塔名號ニ汝等諦聽當ニ爲レ汝說ニ何爲ニ八ト所謂第一迦毘羅城龍彌儞園是佛生處、第二摩伽陀國尼連河邊菩提樹下佛證ニ道果ニ處、第三迦尸國波羅奈城轉ニ大法輪ニ處、第四舍衞國祇陀園現ニ大神通ニ處、第五曲女城從ニ忉利天ニ降下處、第六王舍城聲聞分別佛爲ニ化度ニ處、第七廣嚴城靈塔思念壽量處、第八拘尸那城娑羅林内大雙林間入ニ涅槃ニ處、如レ是八大靈塔也と。

くの面授を尊重すべきなり。わづかに心跡を心田にあらはせるがごとくならん、かならずしも大尊貴生なるべからず。換面に面授し回頭に面授あらんは、面皮厚三寸なるべし、面皮薄一丈なるべし。すなはちの面皮それ諸佛大圓鏡なるべし。大圓鑑を面皮とせるがゆゑに、内外無瑕翳なり。大圓鑑の大圓鑑を面授しきたれるなり。まのあたり釋迦牟尼佛をみたてまつる正法を正傳しきたれるは、釋迦牟尼佛よりも親曾なり。眼尖より前後三三の釋迦牟尼佛を見出現せしむるなり、かるがゆゑに釋迦牟尼佛をおもくしたてまつり、釋迦牟尼佛を戀慕したてまつらんは、この面授正傳をおもくし尊崇し、難値難遇の敬重禮拜すべし。すなはち如來を禮拜したてまつるなり、如來に面授せられたてまつるなり。あらたに面授如來の正傳參學の宛然なるを拜見するは、自己なりとおもひきたりつる自己なりとも、他己なりとも、愛惜すべきなり、護持すべきなり。屋裏の正傳にいはく、八塔を禮拜するものは、罪障解脱し道果感得す。これ釋迦牟尼佛の道現成處を、生處に建立し、轉法輪處に建立し、成道處に建立し、涅槃處に建立し、曲女城邊にのこり、菴羅衞林にのこれる、大地を成じ、大空を成ぜり。乃至聲香味觸法色處等に塔成せるを禮拜するによりて、道果現成す。この八塔を禮拜するを、西天竺國のあまねき勤修として、在家出家天衆人衆きほふて禮拜供養するなり。これすなはち一卷の經典なり。佛經はかくのごとし、いはんやまた三十七品の法を修行して、道果を箇箇生生に成就するは、釋迦牟尼佛の亙古亙今の修行修治の蹤跡を處處の古路に流布せしめて、古今に歷然せるがゆゑに成道す。しるべし

【曲女城】同經の第五、佛忉利天より降下したまひし處、故に塔を建てて以て供養す、三藏法數に此城往昔大樹仙人九十九女を咒して一時に腰曲せしむるに由て曲女城と名くと。

【三十七品】三十七道品也、四念處、四正勤、四如意足、五根、五力、七覺分、八正道なり。

【根力覺道】前の五根五力七覺分八正道をいふ。

かの八塔の層層なる、霜華いくばくかあらたまる。風雨しばしばをかさんとすれど、空にあとせり色にあとせる、その功德をいまの人にをしまざること減少せず。かの根力覺道、いま修行せんとするに、煩惱あり惑障ありといへども、修證するにそのちからなほいまあらたなり。釋迦牟尼佛の功德、それかくのごとし。いはんやいまの面授は、かれらに比準すべからず。かの三十七品菩提分法は、この佛面佛心佛身佛道佛光佛舌等を根元とせり、かの八塔の功德聚また佛面等を本基とせり、いま學佛法の漢として、透脫の活路に行履せんに、閑靜の晝夜つらつら思量功夫すべし、歡喜隨喜すべきなり。いはゆるわがくには他國よりもすぐれ、わが道はひとり無上なり、他方にはわれらがごとくならざるともがらおほかり、わがくにわが道の無上獨尊なるといふは、靈山の衆會あまねく十方に化導すといへども、少林の正嫡まさしく震旦の敎主なり。曹谿の兒孫、いまに面授せり。このときこれ佛法あらたに入泥入水の好時節なり。このとき證果せずば、いづれのときか證果せん、このとき斷惑せずば、いづれのときか斷惑せん。このとき作佛ならざらんは、いづれのときか作佛ならん。このとき坐佛ならざらんは、いづれのときか行佛ならん。審細の功夫なるべし、釋迦牟尼佛、かたじけなく迦葉尊者に付囑面授するにいはく、「吾有正法眼藏付囑摩訶迦葉。」とあり。嵩山會上には、菩提達磨尊者、まさしく二祖にしめしていはく、「汝得吾髓。」はかりしりぬ正法眼藏を面授し、汝得吾髓の面授なるは、ただこの面授のみなり。この正當恁麼時、なんぢがひごろの骨髓を透脫するとき、佛祖面授あり、大悟を面授し、

【寛元元年】祖齡四十四歳、吉峰寺に於ける示衆。

【薦福寺の承古】續傳燈、僧寶傳、會元等に出づ、薦福承古は西州の人、其郷氏を失す、雲居弘覺大師の塔に居て棲止す、人呼んで古塔司と爲す。初め法を芝山に説く、雲門錄を看て所悟あり、自から雲門に嗣ぐと。

心印を面授するも、一隅の特地なり。傳盡にあらずといへども、いまだ欠悟の道理を參究せず。おほよそ佛祖大道は、唯面授面受、受面授面のみなり、さらに剩法あらず、虧闕あらず。この面授のあふにあへる自己の面目をも隨喜歡喜信受奉行すべきなり、道元大宋寶慶元年乙酉五月一日、はじめて先師天童古佛を禮拜面授す、やや堂奧を聽許せらる、わづかに身心を脱落するに面授を保任することありて、日本國に本來せり。

正法眼藏面授

爾時寛元元年癸卯十月二十日在ニ越州吉田縣吉峯精舍ニ示衆

奧段云。佛道の面授、かくのごとくなる道理を、かつて見聞せず、參學なきともがらあるなかに、大宋國仁宗皇帝の御宇、景祐年中に、薦福寺の承古禪師といふものあり。上堂曰、雲門匡眞大師、如今現在、諸人還見麼、若也見得、便是山僧同參、見麼見麼。此事直須ニ諦當ニ始得、不レ可ニ自謾ニ、且如ニ往古黄檗、聞ニ百丈和尚擧ニ馬大師下レ喝因緣ニ、他因大省。百丈問子向後莫レ承ニ嗣大師ニ否。黄檗云、某雖レ識ニ大師ニ、要且不レ見ニ大師ニ、若承ニ嗣大師ニ、恐喪ニ我兒孫ニ。大衆、當時馬大師遷化、未レ得ニ五年ニ、黄檗自言レ不レ見、當レ知黄檗見所レ不レ圓、要且祇具ニ一隻眼ニ、山僧卽不レ然、識ニ得雲門大師ニ、亦見ニ得雲門大師ニ、方可レ承ニ嗣雲門大師ニ、祇如ニ雲門入滅ニ、已得ニ一百餘年ニ、如今作麼生說ニ箇親見底道理ニ、會麼。通人達士、方可ニ證明ニ、眇劣之徒、心生ニ疑謗ニ、見得不レ在レ言レ之、未レ見者如今看取不、請久立珍重。』いまなんぢ雲門大師をしり雲門大師をみることをたとひゆるすと

【師子奮迅話】法界次第に云く所レ謂師子奮迅者借レ譬以顯レ法也、如ニ

も、雲門大師、まのあたりなんぢをみるやいまだしや。雲門大師なんぢをみずば、なんぢ承嗣雲門大師不得ならん。雲門大師、いまだなんぢをゆるさざるがゆゑに、なんぢもまた雲門大師われをみるといはず。しりぬなんぢ雲門大師といまだ相見せざるといふことを。七佛諸佛の過去現在未來に、いづれの佛祖か師資相見せざるに嗣法せる。なんぢ黄檗を見處不圓といふことなかれ。なんぢいかでか黄檗の行履をはからん、黄檗の言句をはからん。黄檗は古佛なり、嗣法に究參なり。なんぢは嗣法の道理、かつて夢也未見聞參學在なり、黄檗は師に嗣法せり、祖を保任せり。黄檗は師にまみえ師をみる、なんぢはすべて師をみず、祖をしらず、自己をしらず、自己をみず。なんぢをみる師なし、なんぢ師眼いまだ參開せず、眞箇なんぢ見處不圓なり、嗣法未圓なり。なんぢしるやいなや、雲門大師は、この黄檗の法孫なることを。なんぢいかでか百丈黄檗の道處を測量せん、雲門大師の道處、なんぢなほ測量すべからず、百丈黄檗の道處は、參學のちからあるもの、これを拈擧するなり。直指の落處あるもの、測量すべし。なんぢは參學なし、落處なし、しるべからず、はかるべからざるなり。馬大師遷化未得五年なるに、馬大師に嗣法せずといふ、まことにわらふにもたらず。たとひ嗣法すべくば、無量劫ののちなりとも、嗣法すべし。嗣法すべからざらんば、半日なりとも須臾なりとも、嗣法すべからず。なんぢすべて佛道の日面月面をみざる、暗者愚蒙なり。雲門大師入滅已得一百餘年なれども、雲門に承嗣すといふ。なんぢにゆゆしきちからありて、雲門に承嗣するか、三歲の孩兒よりははかなし。一千年の

世師子奮迅ニ爲ニ二事ニ故、一爲レ奮ニ却塵土ニ、二能前走却走捷疾異ニ於諸獸ニ、此三昧亦爾ナリ一則奮ニ除障ノ定細微無知之惑ニ、二則能入出捷疾無間異ニ所得禪定ニ也、故上名ニ師子奮迅三昧ニと。又大般若五十二にも出づ。

【烏龜上樹話】禪頻卷五に云く香山良禪師僧問馬祖陞レ堂百丈卷レ席意旨如何、師云蚊子上ニ鐵牛ニ、云畢竟如何、師云烏龜倒上レ樹云古之今之、師云放ニ儞三十棒ニと。香山蘊良、慈明の楚圓に嗣ぐ、續傳燈卷七に傳あり。

【佛國禪師惟白】續傳燈十二、東京法雲佛國惟白、靖江の人、法雲圓通の秀に嗣ぐ。建中靖國元年に禪門續燈錄三十卷を著成す承古を以て雲門の嗣に列す。

のち、雲門に嗣法せんものは、なんぢに十倍せるちからあらん。われいまなんぢをすくふ、しばらく話頭を參學すべし、百丈の道取する『子向後莫レ承ニ嗣大師ニ否。』の道取は、馬大師に嗣法せよといふにはあらぬなり。しばらくなんぢ師子奮迅話を參學すべし。烏龜倒上樹話を參學して、進歩の活路を參究すべし。嗣法に恁麼の參學力あるなり、黃檗のいふ、『恐喪ニ我兒孫ニ。』のことば、すべてなんぢはかるべからず、我の道取および兒孫の人、これたれなりとかしれる、審細に參學すべし。かくれずあらはして道現成せり、しかあるを佛國禪師惟白といふ、佛祖の嗣法にくらきによりて、承古を雲門の法嗣に排列せり、あやまりなるべし。晩進しらずして承古も參學あらんとおもふことなかれ、なんぢがごとく文字によりて嗣法すべくば、經書をみて發明するものは、みな釋迦牟尼佛に嗣法するか、さらにしかあらざるなり。經書によれる發明、かならず正師の印可をもとむるなり。なんぢ承古がいふごとくには、なんぢ雲門の語錄なほいまだみざるなり。雲門の語をみしともがらのみ、雲門には嗣法せり。なんぢ自己眼をもて、いまだ雲門をみず。自己眼をもて、自己をみず、雲門眼をもて、雲門をみず、雲門眼をもて、自己をみず。かくのごとくの未參究おほし、さらに艸鞋を買來買去して、正師をもとめて嗣法すべし。なんぢ雲門大師に承嗣すといふことなかれ、もしかくのごとくいはば、すなはち外道の流類なるべし。たとひ百丈なりとも、なんぢがいふがごとくいはば、おほきなるあやまりなるべし。

正法眼藏面授　畢

【坐禪儀】永平高祖に普勸坐禪儀あり漢文なり。國譯して本書に編入せり。此一篇を假名がきの坐禪儀といふ。普勸坐禪儀と用語殆ど一なり、故に此篇冠註せず。

正法眼藏坐禪儀

參禪は坐禪なり。坐禪は靜處よろし、坐蓐あつくしくべし、風煙をいらしむることなかれ、雨露をもらしむることなかれ、容身の地を護持すべし。かつて金剛のうへに坐し、盤石のうへに坐する蹤跡あり。かれらみな艸をあつくしきて坐せしなり。坐處あきらかなるべし、晝夜くらからざれ、冬暖夏涼をその術とせり。諸緣を放捨し萬事を休息すべし、善也不思量なり、惡也不思量なり。心意識にあらず、念想觀にあらず、作佛を圖することなかれ。坐臥を脫落すべし、飲食を節量すべし、光陰を護惜すべし、頭然をはらふがごとく坐禪をこのむべし。黃梅山の五祖ことなるいとなみなし、唯務坐禪のみなり。坐禪のとき、袈裟をかくべし、蒲團をしくべし。蒲團は全跏にしくにはあらず、跏趺のなかばよりはうしろにしくなり。しかあれば累足のしたは坐蓐にあたれり、脊骨のしたは蒲團にてあるなり。これ佛佛祖祖の坐禪のとき坐する法なり。あるひは半跏趺坐し、あるひは結跏趺坐す。結跏趺坐は、みぎのあしをひだりのもものうへにおく、ひだりのあしをみぎのもものうへにおく、あしのさきおのおのもゝとひとしくすべし、參差なることをえざれ。半跏趺坐は、ただひだりのあしをみぎのもものうへにおくのみなり。衣衫を寬繫して、齊整ならしむべし。右手を左足のうへにおく、左手を右手のうへにおく、ふたつのおほゆびさきあひささ

【寛元元年】祖齡四十四歳、吉峰寺に於ける示衆。

【梅華】一華開五葉を梅華の華開といひ、結果自然成を梅華の結果といふ。この一華は釋尊西天に下種し嫡嫡其芳薫を相承して達祖震旦に華開せり。之を嶺南に流し之を洞上に傳へて滿地に香を布く天童浄祖に芳馥たるところ永平高祖に至つて我日本に薫發す。

ふ。兩手かくのごとくして身にちかづけておくなり、ふたつのおほゆびのさしあはせたるさきを、ほぞに對しておくべし。正身端坐すべし、ひだりへそばだちみぎへかたぶき、まへにくぐまりうしろへあふぐことなかれ。かならず耳と肩と對し、鼻と臍と對すべし。舌はかみの腭にかくべし。息は鼻より通ずべし。脣齒あひつくべし。目は開すべし、不張不微なるべし。かくのごとく身心をととのへて欠氣一息あるべし。兀兀と坐定して、思量箇不思量底なり、不思量底如何思量これ非思量なり、これすなはち坐禪の法術なり。坐禪は習禪にはあらず、大安樂の法門なり、不染汚の修證なり。

爾時寛元元年癸卯冬十一月在二越州吉田縣吉峰精舍一示衆

正法眼藏坐禪儀　畢

正法眼藏梅華

先師天童古佛者、大宋慶元府太白名山天童景德寺第三十代堂上大和尚也。上堂示レ衆云、天童仲冬第一句、槎槎牙牙老梅樹、忽開華一華兩華、三四五華無數華、清不レ可レ誇、香不レ可レ誇、散作二春容一吹二艸木一、衲僧箇箇頂門禿、驀劄變怪狂風暴雨、乃至交二袞大地一雪漫漫、老梅樹太無レ端、寒凍摩挲鼻孔酸。いま開演ある老梅樹それ太無端なり、忽開華す、自結果す。あるひは春をなし、あるひは冬をなす。あるひは狂風をなし、あるひ

【先師天童古佛】尊敬の極れるなり。天童の開祖は晋の義興、正宗の初住者は洞山下の咸啓禪師第一世、淨祖に至つて第三十代。

【上堂示衆】淨祖語錄に出づ。

【槎槎牙牙】老梅の形象なり、王安石の詩に槎牙老樹鳴老烏といふ。

【交袞】狂風のぐるぐると吹きまはす姿なり。

【摩挲】摩抄ともいふ、梅樹を摩抄す。こするなり。

【瞿曇打失】如淨錄清涼に於ける臘八上堂語なり。

は暴風をなす。あるひは衲僧の頂門なり、あるひは古佛の眼睛なり、あるひは艸木となれり、あるひは清香となれり。驀劄なる神變神怪きはむべからず、乃至大地高天、明日清月、これ老梅樹の樹功より樹功せり、葛藤の葛藤を結纒するなり。老梅樹の忽開華のとき、華開世界起なり。華開世界起の時節、すなはち春到なり。この時節に開五華の一華あり、この一華時、よく三華四華五華あり、百華千華萬華億華あり、乃至無數華あり。これらの華開、みな老梅樹の一枝兩枝無數枝の不可誇なり、優曇華、優鉢羅華等、おなじく老梅樹華の一枝兩枝なり。おほよそ一切の華開は、老梅樹の恩給なり、人中天上の老梅樹あり、老梅樹中に、人間天堂を樹功せり、百千華を人天華と稱す、萬億華は佛祖華なり、恁麼の時節を、諸佛出現於世と喚作するなり、祖師本來茲土と喚作するなり。

先師古佛、上堂示衆云、「瞿曇打失眼睛時、雪裡梅華只一枝、而今到處成荊棘、却笑春風繚亂吹」いまこの古佛の法輪を盡界の最極に轉ずる、一切人天の得道の時節なり。乃至雲雨風水、および艸木昆蟲にいたるまでも、法益をかうぶらずといふことなし。天地國土も、この法輪に轉ぜられて活鱍鱍地なり、未曾聞の道をきくといふは、いまの道を聞著するをいふ。未曾有をうるといふは、いまの法を得著するを稱するなり。おほよそおぼろけの福德にあらずば、見聞すべからざる法輪なり。いま現在大宋國一百八十州の内外に、山寺あり、人里の寺あり、そのかず稱計すべからず。そのなかに雲水おほし。しかあれども先師古佛をみざるはおほく、みたるはすくなからん、いはんやことばを見聞する

は少分なるべし。いはんや相見問訊のともがらおほからんや、堂奥をゆるさるるいくばくにあらず。いかにいはんや先師の皮肉骨髓眼睛面目を禮拜することを聽許せられんや、先師古佛たやすく僧家の謝掛搭をゆるさず。よのつねにいはく、「無道心慣頭我箇裏不可也。」すなはちおひいだす。出了いはく、「不是一本分人要作甚麼。」かくのごときの狗子は騒人なり、掛搭不得といふ。まさしくこれをみ、まのあたりこれをきく。ひそかにおもふらくは、かれらいかなる罪根ありてか、このくにの人なりといへども、共住をゆるされざる、われなにのさいはひありてか、遠方外國の種子なりといへども、掛搭をゆるさるるのみにあらず、ほしきままに堂奥に出入して、尊儀を禮拜し、法道をきく、愚暗なりといへども、むなしかるべからざる結了緣なり。先師の宋朝を化せしとき、なほ參得人あり、參不得人ありき。先師古佛すでに宋朝をさりぬ、暗夜よりもくらからん。ゆゑはいかん、先師古佛より前後に、先師古佛のごとくなる古佛なきがゆゑにしかいふなり。しかあればいまこれを見聞せんときの晩學おもふべし、自餘の諸方の人天も、いまのごとく、法輪を見聞すらん參學すらんとおもふことなかれ。雪裏の梅華は、一現の曇華なり。ひごろはいくめぐりか我佛如來の正法眼睛を拜見しながら、いたづらに瞬目を蹉過して、破顔せざる。而今すでに雪裏の梅華まさしく如來の眼睛なりと正傳し承當す。これを拈じて、頂門眼とし、眼中睛とす。さらに梅華裏に參到して、梅華を究盡するに、さらに疑著すべき因緣いまだきたらず、これすでに天上天下唯我獨尊の眼睛なり、法界中尊なり。しかあればすなは

ら天上の天華、人間の天華、天雨曼陀羅華、摩訶曼陀羅華、曼殊沙華、摩訶曼殊沙華、および十方無盡國土の諸華は、みな雪裏梅華の眷屬なり、梅華の恩德分をうけて華開せるがゆゑに、百億華は、梅華の眷屬なり、小梅華と稱すべし。乃至空華地華三昧華等、ともに梅華の大小の眷屬群華なり。華裏に百國億をなす、國土に開華せる、みなこの梅華の恩分なり。梅華の恩分のほかは、さらに一恩の雨露あらざるなり、命脈みな梅華よりなれるなり。ひとへに嵩山少林の雪漫漫地と參學することなかれ、如來の眼睛なり。頭上をてらし脚下をてらす、ただ雪山雪宮のゆきと參學することなかれ。老瞿曇の正法眼睛なり。五眼の眼睛、このところに究盡せり。千眼の見睛、この眼睛に圓成すべし。まことに老瞿曇の身心光明は、究盡せざる諸法實相の一微塵あるべからず。人天の見別ありとも、凡聖の情隔すとも、雪漫漫は大地なり、大地は雪漫漫なり。雪漫漫にあらざれば、盡界に大地あらざるなり、この雪漫漫の表裏團圝、これ瞿曇老の眼睛なり。しるべし華地悉無生なり。華無生なり。華無生なるゆゑに、地無生なり。華地悉無生のゆゑに、眼睛無生なり。無生といふは、無上菩提をいふ。正當恁麼時の見取は、梅華只一枝なり。正當恁麼時の見取は、雪裏梅華只一枝なり、地華生生なり。これをさらに雪漫漫といふは、全表裏雪漫漫なり、盡界は心地なり、盡界は華情なり、盡界華情なるゆゑに、盡界は梅華なり、盡界梅華なるがゆゑに、盡界は瞿曇の眼睛なり。而今の到處は、山河大地なり、到事到時みな『吾本來玆土、傳法救命情、一華開五葉、結果自然成』の到處現成なり、西來東漸ありといへども、

【雲月是同】傳燈夾山章に雲月是同谿山各異の語あり

【歳旦上堂】天童錄中瑞巖に於ける一月一日の上堂語今文の下に有還見麼、擧拂子云一枝拈起眼中塵と

梅華而今の到處なり、而今の現成かくのごとくなる、成荊棘といふ。大枝に舊枝新枝の而今あり、小條に舊條新條の到處あり、處は到に參學すべし、到は今に參學すべし。三門五六華裏は、無數華裏なり。華に裏功德の深廣なる具足せり、表功德の高大なるを開闔せり。この表裏は一華の華發なり。只一枝なるがゆゑに、異枝あらず、異種あらず。一枝の到處を而今と稱する、瞿曇老漢なり、只一枝のゆゑに付屬嫡嫡なり。このゆゑに吾有の正法眼藏付屬摩訶迦葉なり、汝得は吾髓なり、かくのごとく到處の現成、ところとしても大尊貴生にあらずといふことなきがゆゑに、開五葉なり、五葉は梅華なり。このゆゑに七佛祖あり、西天二十八祖、東土六祖、および十九祖あり。みな只一枝の開五葉なり、五葉の只一枝なり。一枝を參究し、五葉を參究しきたれば、雲裏梅華の正傳付屬相見なり、只一枝の語脈裏に轉身轉心しきたるに、雲月是同なり、谿山各別なり。しかあるをかつて參學眼なきともがらいはく、五葉といふは、東地の五代と初祖とを一華として、五世をならべて古今前後にあらざるがゆゑに、五葉といふと。この言は擧して勘破するにたらざるなり。これらは參佛參祖の皮袋にあらず、あはれむべきなり。五葉一華の道、いかでか五代のみならん。六祖よりのちは、道取せざるか。小兒子の說話におよばざるなり、ゆめゆめ見聞すべからず。

先師古佛、歳旦上堂曰、「元正啓祚、萬物咸改、伏惟大衆、梅開早春」。しづかにおもひみれば過現當來の老古錐、たとひ盡十方に脫體なりとも、いまだ梅開早春の道あ

【一言相契萬古等】如淨禪師淨慈錄、謝新舊知事上堂語也。今文の下に擧ニ拂子ニ曰、總在ニ這裡ニ看看。機先箇箇莫ニ囊漢とあり。

【揚柳粧腰帶等】如淨錄中再住淨慈上堂の語、本錄今文の下に黃鶯偸眼顧、舞得尤風流、是什麼人境界、淨慈門下羅蔔頭とあり。

【腰帶臂鞲】杜詩に百寶裝ニ腰帶ニ、眞珠絡ニ臂鞲ニと、腰帶は腰に卷く帶、臂鞲は臂にまく環の如きものにて、たすきの類す、梅華の景色の立派なる形容とす。

らずば、たれかなんぢを道盡箇といはん。ひとり先師古佛のみ、古佛中の古佛なり。その宗旨は、梅華に帶せられて萬春はやし、萬春は梅裏一兩の功德なり。一春なほよく萬物を咸新ならしむ。萬法を元正ならしむ、啓祚は眼睛正なり。萬物といふは、過現來のみにあらず、威音王以前乃至未來なり、無量無盡の過現來ことごとく新なりといふがゆゑに、この新は新を脫落せり。このゆゑに伏惟大衆なり、伏惟大衆は恁麼なるがゆゑに。

先師天童古佛、上堂示衆云、一言相契萬古不レ移、柳眼發ニ新條ニ、梅華滿ニ舊枝ニ。いはく百大劫の辨道は、終始ともに一言相契なり。一念頃の功夫は、前後おなじく萬古不移なり。新條を繁茂ならしめて、眼睛を發明する新條なりといへども眼睛なり眼睛の他にあらざる道理なりといへども、これを新條と參究す、新は萬物咸新に參學すべし。梅華滿舊枝といふは、梅華全舊枝なり、通舊枝なり。舊枝是梅華なり。たとへば華枝同條參、華枝同條生、華枝同條滿なり。華枝同條滿のゆゑに、古有正法付屬迦葉なり、面面滿拈華華華滿破顏なり。

先師古佛上堂、示ニ大衆ニ云、楊柳粧ニ腰帶ニ、梅華絡ニ臂鞲ニ。かの臂鞲は、蜀錦和璧にあらず、梅華開なり。梅華開は、髓吾得汝なり。

波斯匿王、請ニ賓頭盧尊者ニ齋次、王問、承聞尊者親見レ佛來是不。尊者以レ手策ニ起眉毛ニ示レ之。先師古佛頌云、策ニ起眉毛ニ答ニ問端ニ、親曾見レ佛不ニ相瞞ニ、至レ今應ニ供四天下ニ、春在ニ梅梢ニ帶レ雪寒。この因緣は、波斯匿王ちなみに尊者の見佛未見佛を

【蜀錦和璧】蜀の成都にて織れる錦最後に必ず江水にて濯ふ、故に蜀江の錦といふ、和璧は楚人卞和の文王に献じたる璞、後に連城の璧といはる。
【波斯匿王請賓】雜阿含經に出づ。
【賓頭盧】梵音(Piṇḍola)不動と譯す。釋尊の弟子、十六羅漢の一。
【先師古佛頌云】天童淨祖錄、偈頌部に載す。
【先師云本來】如淨錄小佛事爲二醫者一下火語なり。

問取するなり。見佛といふは、作佛なり。作佛といふは、策起眉毛なり。尊者もしただ阿羅漢果を證すとも、眞阿羅漢にあらずば、見佛すべからず。見佛にあらずば、作佛すべからず。作佛にあらずば、策起眉毛佛不得ならん。しかあればしるべし釋迦牟尼佛の面授の弟子として、すでに四果を證して後佛出世をまつ尊者、いかでか釋迦牟尼佛をみざらん、この見釋迦牟尼佛は、見佛にあらず、釋迦牟尼佛のごとく見釋迦牟尼佛なるを、見佛と參學しきたれり。波斯匿王この參學眼を得開せるところに、策起眉毛の好手にあふなり。親曾見佛の道旨、しづかに參佛眼あるべし。この春は人間にあらず、佛國にかぎらず、梅梢にあり、なにとてしかしかあるとしる、雪裏の眉毛策なり。

先師古佛云、「本來面目無二生死一、春在二梅華一入二畫圖一。」春を畫圖するに、楊梅桃李を畫すべからず、まさに春を畫すべし。楊梅桃李を畫するは、楊梅桃李を畫するなり。いまだ春を畫せるにあらず、春は畫せざるべきにあらず。しかあれども先師古佛のほかは、西天東地のあひだ、春を畫せる人いまだあらず。ひとり先師古佛のみ春を畫する尖筆頭なり。いはゆるいまの春は、畫圖の春なり、入畫圖のゆゑにこれ餘外の力量をとぶらはず、ただ梅華をして春をつかはしむるゆゑに、畫にいれ木にいるるなり、善巧方便なり。先師古佛、正法眼藏あきらかなるによりて、この正法眼藏を過去現在未來の十方に聚會する佛祖に正傳す、このゆゑに眼睛を究徹し、梅華を開明せり。

正法眼藏梅華

【仁治四年】寛元元年のこと祖齢四十四歳吉峰寺に於ける示衆。

【先師云明歴歴】如淨錄偈頌部、寄拄杖松源岳の偈。

【法演禪師云朔風】古尊宿錄中の五祖錄に載す。

【太原孚上座頌】傳燈十九、會元七等に出づ。

【夾山の典座】碧巖九十九則評に大原孚上座の因縁を引いて云く、有遊方僧、即夾山典座也、阻雪往聽云云と。

爾時日本國仁治四年癸卯十一月六日、在越州吉田縣吉嶺寺深雪三尺大地漫漫

もしおのづから自靡きたりて梅華は瞿曇の眼睛ならずとおぼえは、思量すべし。このほかに何法の梅華よりも眼睛なりぬべきを擧しきたらんにか眼睛とみん。そのときも、これよりほかに眼睛をもとめば、いづれのときも對面不相識なるべし。相逢未拈出なるべきがゆゑに、今日はわたくしの今日にあらず、大家の今日なり。直に梅華眼睛を開明なるべし、さらにもとむることやみぬ。

先師古佛云、明歴歴、梅華影裏休相覓、爲雨爲雲自古今、古今寥寥有何極。しかあればすなはちくもをなしあめをなすは、梅華の云爲なり。行雲行雨は、梅華の千曲萬重色なり、千功萬徳なり。自古今は梅華なり。梅華を古今と稱するなり。

古來法演禪師云、朔風和雪振谿林、萬物潛藏恨不深、唯有嶺梅多意氣、臘前吐出歳寒心。しかあれば梅華の消息を通ぜざるほかは歳寒心をしりがたし。梅華小許の功徳を朔風に和合して雪となせり。はかりしりぬ風をひき雪をなし、歳を序あらしめ、および谿林萬物をあらしむる、みな梅華のちからなり。

大原孚上座、頌悟道云、憶昔當初未悟時、一聲畫角一聲悲、如今枕上無閑夢、一任梅華大小吹。孚上座はもと講者なり、夾山の典座に開發せられて大悟せり。これ梅華の春風を大小吹せしむるなり。

正法眼藏梅華　畢

【十方】元來方所無し、東南西北何の邊表あらんや、今十方佛土中唯有一乘法の十方を擧拈して十方佛土の七尺八尺を參學せしむ。

【十方佛土中】法華方便品。

正法眼藏十方

拳頭一隻、只箇十方なり、赤心一片、玲瓏十方なり。敲出骨裏髓了也

釋迦牟尼佛告大衆言、十方佛土中、唯有一乘法。いはゆる十方は佛土を把來してこれをなせり。このゆゑに佛土を拈來せざれば、十方いまだあらざるなり。佛土なるゆゑに以佛爲主なり。この娑婆國土は、釋迦牟尼佛土なるがごとし。この娑婆世界を擧拈して、八兩半斤をあきらかに記して、十方佛土の七尺八尺なることを參學すべし。この十方は一方にいり、一佛にいる。このゆゑに現十方せり。十方一方、是方自方今方なるがゆゑに、眼睛方なり、拳頭方なり、露柱方なり、燈籠方なり。かくのごとくの十方佛土の十方佛、いまだ大小あらず、淨穢あらず。このゆゑに十方の唯佛與佛、あひ稱揚讚歎するなり、さらにあひ誹謗してその長短好惡をとくを、轉法輪とし說法とせず。諸佛および佛子として助發問訊するなり。佛祖の法を稟受するには、かくのごとく參學するなり、外道魔黨のごとく是非毀辱することあらざるなり。いま眞丹國につたはれる佛經を披閲して、一化の始終を覩見するに、釋迦牟尼佛いまだかつて他方の諸佛それ劣なりとときかず、他方の諸佛それ勝なりとときかず、また他方の諸佛は諸佛にあらずとときかず。おほよそ一代の說教に、すべてみえざるところは、諸佛のあひ是非する佛語なり、他方の諸佛、また釋迦牟尼佛を是非

【唯我知是相】同上。

【長沙盡十方】傳燈卷十四に出づ。以下四段盡十方界皆一文章。

【索馬索鹽】仙陀婆なり。王索仙陀婆卷詳出。

したてまつる佛語つたはれず。このゆゑに、

釋迦牟尼佛告二大衆一言、「唯我知二是相一、十方佛亦然。」しるべし唯我知是相の相は、打圓相なり。圓相は遮竿得恁麼長、那竿得恁麼短なり。十方佛道は、唯我知是相、釋迦牟尼佛亦然の說著なり。唯我證是相、自方佛亦然なり。我相、知相、是相、一切相、十方相、娑婆國土相、釋迦牟尼佛相なり。この宗旨はこれ佛經なり、諸佛ならびに佛土は、兩頭にあらず、有情にあらず、無情にあらず、迷悟にあらず、善惡無記等にあらず、淨にあらず穢にあらず、成にあらず、住にあらず、壞にあらず空にあらず、常にあらず無常にあらず、有にあらず無にあらず、自にあらず他にあらず。離四句なり、絕百非なり、ただこれ十方なるのみなり、佛土なるのみなり。しかあれば十方は有頭無尾漢なるのみなり。

長沙景岑禪師告二大衆一言、「盡十方界、是沙門一隻眼。」いまいふところは瞿曇沙門眼の一隻なり。瞿曇沙門眼は、吾有正法眼藏なり。阿誰に付屬すれども、瞿曇沙門眼なり。盡十方界の、角角尖尖、瞿曇の眼處なり。この盡十方界は、沙門眼のなかの一隻なり、これより向上に如許多眼あり。

「盡十方界、是沙門家常語。」家常は尋常なり、日本國の俗のことばによのつねといふ、しかあるに沙門家常のよのつねの言語は、これ盡十方界なり、言端語端なり。家常語は、盡十方界なるがゆゑに、盡十方界は、家常語なる道理、あきらかに參學すべし。この十方無盡なるがゆゑに、盡十方なり、家常にこの語をもちゐるなり、かの索馬索鹽索水索器のご

とし、奉水奉器奉鹽奉馬のごとし。たれかしらん沒量大人この語脈裏に轉身轉腦することを、語脈裏に轉語するなり、海口山舌言端語直の家常なり、しかあれば掩口し掩耳する十方の眞箇是なり。

『盡十方界沙門全身一手指天是天、一手指地是地、雖然如是、天上天下、唯我獨尊。』これ沙門全身なる十方盡界なり。頂𩕳、眼睛、鼻孔、皮肉、骨髓の箇箇、みな透脫盡十方の沙門身なり、盡十方を動著せず、かくのごとくなり、擬議量をまたず、盡十方界沙門身を粘來して、見盡十方界沙門身するなり。

『盡十方界、是自己光明。』自己とは、父母未生以前の鼻孔なり、鼻孔あやまりて自己の手裏にあるを盡十方界といふ。しかあるに自己現成して現成公案なり、開殿見佛なり。しかあれども『眼睛被別人換却木槵子了也。』しかあれども劈面來大家相見することをうべし、さらに『呼則易、遣則難。』なりといへども、『喚得廻頭、自廻頭堪作何用、便著者漢廻頭』なり。飯待喫人、衣待著人のとき、摸索不著なるがごとくなりとも、可惜許、曾與儞三十棒。

『盡十方界、在自己光明裏。』眼皮一枚、これを自己の光明とす、忽然として打綻するを在裏とす、見由在眼を盡十方界といふ、しかもかくのごとくなりといへども、同牀眠知被穿。

『盡十方界無一人不自己。』しかあればすなはち箇箇の作家、箇箇の拳頭、ひとりの十方

としても自己にあらざるなし、自己なるがゆゑに自自己己みなこれ十方なり、自自己己の十方、したしく十方を罣礙するなり。自自己己の命脈、ともに自己の手裏にあるがゆゑに、還他本分草料なり。いまなにとしてか達磨眼睛、瞿曇鼻孔あらたに露柱の胎裏にある。いはく、『出入也十方十面一任』なり。

玄沙院宗一大師云、「盡十方界、是一顆明珠。」あきらかにしりぬ一顆明珠はこれ盡十方界なり、神頭鬼面これを窟宅とせり、佛祖兒孫これを眼睛とせり、人家男女これを頂𩕳拳頭とせり、初心晩學これを著衣喫飯とせり、先師これを泥彈子として兄弟を打著す、しかもこれ單提の一著子なりといへども、祖宗の眼睛を抉出しきたれり、抉出するとき、祖宗ともに一隻手をいだす、さらに眼睛裏放光するのみなり。

乾峰和尚因僧問、「十方薄伽梵一路涅槃門、未審路頭在二什麼處一。」乾峰以二拄杖一畫一畫云、「在二遮裏一。」いはゆる在遮裏は十方なり、薄伽梵とは、拄杖なり、拄杖とは、在遮裏なり、一路は十方なり、しかあれども瞿曇の鼻孔裏に拄杖をかくすことなかれ、拄杖の鼻孔に拄杖をかくすことなかれ、拄杖の鼻孔、拄杖を撞著することなかれ。しかもかくのごとくなりとも、乾峰老漢すでに十方薄伽梵一路涅槃門を料理すると認ずることなかれ、ただ在遮裏と道著するのみなり。在遮裏はなきにあらず、乾峰老漢はじめより拄杖に瞞ぜられざらんよし、おほよそ活鼻孔を十方に參學するのみなり。

爾時寬元元年癸卯十一月十三日在二日本國越州吉峰精舍一示衆

【玄沙盡十方界】一顆明珠卷に詳出

【乾峰十方薄伽梵】傳燈十七、會元十三に此則を載す。薄伽梵(Bhagavat)に六義あり、自在、熾盛、端嚴、名稱、吉祥、尊貴と、衆德と譯す、多義の故に譯せざるを常とす。

【寬元元年】祖齡四十四歲、吉峰寺に於ける示衆。

【見佛】金剛經に若見ニ諸相非レ相卽見ニ如來一と、之を見佛といふ、百福莊嚴徧界不レ藏の見佛也、如レ去如レ來而も無レ所レ從來ニ亦無レ所レ去の見佛なり。
【佛告大衆言若見】金剛般若波羅蜜經の文。
【大法眼禪師云若】禪類卷八に出づ。

正法眼藏十方　畢

正法眼藏見佛

釋迦牟尼佛告ニ大衆ニ言、『若見ニ諸相非相一、卽見ニ如來一。』いまの見諸相と見非相と、透脫せる體達なり、ゆゑに見如來なり。この見佛眼、すでに參開なる現成を見佛とす。見佛眼の活路、これ參佛眼なり。自佛を他方にみ、佛外に自佛をみるとき、條條の葛藤なりといへども、見佛を參學せるに、見佛を辨肯すると、見佛を脫落すると、見佛を得活すると、見佛を使得すると、日面佛見なり、月面佛見なり、恁麼の見佛、ともに無盡面、無盡身、無盡心、無盡手眼の見佛なり。而今脚尖に行履する、發心發足よりこのかた、辨道功夫、および諮契究徹、みな見佛裏に走入する、活眼睛なり、活骨髓なり、しかあれば自盡界、他盡力、遮箇頭、那箇頭おなじく見佛功夫なり。如來道の若見諸相非相を拈來するに、參學眼なきともがらおもはくは、諸相を相にあらずとみる、すなはち見如來といふ、そのおもむきは、諸相は相にあらず如來なりとみるといふとおもふ。まことに小量の一邊は、しかのごとくも參學すべしといへども、佛意の道成はしかにあらざるなり。しるべし諸相を見取し、非相を見取する、卽見如來なり、如來あり、非如來あり。

清涼院大法眼禪師云、『若見ニ諸相非相一、卽不レ見ニ如來一。』いまこの大法眼道は、見佛道なり、

これに法眼道あり、見佛道ありて、通語するに、鏡頭來なり、共出手なり、法眼道は耳處に聞著すべし、見佛道は眼處に聞聲すべし。しかあるをこの宗旨を參學する從來のおもはくは、諸相は如來相なり、一相の如來相にあらざる、まじはれることなし。この相をかりにも非相とすべからず、もしこれを非相とするは、捨父逃逝なり。この相すなはち如來相なるがゆゑに、諸相は諸相なるべしと道取するなりといひきたれり、まことにこれ大乘の極談なり、諸方の所證なり、しかのごとく決定一定して、信受參受すべし。さらに隨風東西の輕毛なることなかれ、諸相は如來相なり非相にあらずと參究見佛し、決定證信して受持すべし、諷誦通利すべし。かくのごとくして、自己の耳目に見聞ひまなからしむべし、自己の身心骨髓に脱落ならしむべし、自己の山河盡界に透脱ならしむべし。これ參學佛祖の行履なり、自己の云爲にあれば、自己の眼睛を發明せしむべからずとおもふことなかれ。自己の一轉語に轉ぜられて、自己の一轉佛祖を見脱落するなり、これ佛祖の家常なり。このゆゑに參取する隻條道あり、いはゆる諸相すでに非相にあらず、非相すなはち諸相なり。非相これ諸相なるゆゑに、非相まことに非相なり、喚作非相の相、ならびに喚作諸相の相、ともに如來相なりと參學すべし、參學の屋裏に兩部の典籍あり、いはゆる參見典と參不見典となり、これ活眼睛の所參學なり。もしいまだこれらの典籍を著眼看の參徹せざれば、參徹眼にあらず、參徹眼にあらざれば、見佛にあらず、見佛に諸相處見、非相處見あり、若不會佛法なり、不見佛に諸相處不見、非相處不見あり、會佛法人得なり、法

眼道の八九成それかくのごとし。しかありといへどもこの一大事因緣、さらにいふべし若見諸相實相、卽見如來、かくのごとくの道取、みなこれ釋迦牟尼佛之所加被力なり、異面目の皮肉骨髓にあらず。

爾時釋迦牟尼佛、在靈鷲山、因藥王菩薩告大衆言、若親近法師、卽得菩薩道、隨順是師學、得見恆沙佛。いはゆる親近法師といふは、二祖の八載事師のごとし、しからしてのち全臂得髓なり、南嶽の十五年の辨道のごとし、師の髓をうるを親近といふ、菩薩道といふは、吾亦如是、汝亦如是なり、如許多の葛藤行履を卽得するなり、卽得は、古來より現ぜるを引得するにあらず、未生を發得するにあらず、現在の漫漫を策把するにあらず、親近得を脫落するを卽得といふ、このゆゑに一切の得は卽得なり、隨順是師學は、猶是侍者の古蹤なり、參究すべし。この正當恁麼行履時、すなはち得見の承當あり、そのところ見恆沙佛なり、恆沙佛は、頭頭活鱍鱍なり。あながちに見恆沙佛をそしりへつらふことなかれ、まづすべからく隨師學をはげむべし、隨師學得佛見なり。

釋迦牟尼佛、告一切諸菩薩衆言、深入禪定、見十方佛。盡界は深なり、十方佛土中なるがゆゑに、これ廣にあらず、大にあらず小にあらず窄にあらず、擧すれば隨他擧す、これを全收と道す。これ七尺にあらず、八尺にあらず、一丈にあらず、全收無外にして入之一字なり。この深入は、禪定なり、深入禪定は、見十方佛なり。設使將來也亦不受のゆゑに、佛十方在なり、深入は長長出不得なり、見十方佛は、只見臥如來なり、禪定は入

【爾時佛在靈鷲山】法華法師品の文。

【佛告一切衆深入】法華安樂品の文。

【佛告普賢菩薩言】
法華勸發品の文。

來出頭不得なり、眞龍をあやしみ恐怖せずば、見佛の而今さらに疑著を抛捨すべからず、見佛より見佛するゆゑに、禪定より禪定に深入す、この禪定見佛深入等の道理、さきより閑功夫漢ありて造作しおきて、いまの漢に傳受するにあらず、而今の新條にあらざれども、恁麼の道理必然なり、一切の傳道受業かくのごとし、修因得果かくのごとし。

釋迦牟尼佛告二普賢菩薩一言、若有下受二持讀誦正憶念修習書寫上是法華經一者、當レ知是人、則見二釋迦牟尼佛一、如下從二佛口一聞中此經典上。おほよそ一切諸佛は、見釋迦牟尼佛成釋迦牟尼佛するを成道作佛といふなり。かくのごとくの佛儀、もとよりこの七種の行處の條條よりうるなり、七種行人は、當知是人なり如是當人なり、これすなはち見釋迦牟尼佛處なるがゆゑに、したしくこれ如從佛口聞此經典なり、釋迦牟尼佛は見釋迦牟尼佛よりこのかた、釋迦牟尼佛なり、これによりて舌相あまねく三千を覆す、いづれの山海か佛經にあらざらん、このゆゑに書寫の當人ひとり見釋迦牟尼佛なり、佛口はよのつねに萬古に開す、いづれの時節か經典にあらざらん、このゆゑに受持の行者のみ見釋迦牟尼佛なり、乃至眼耳鼻等の功德も、またかくのごとくなるべきなり、およそ前後左右取捨造次かくのごとくなり、いまの此經典にうまれあふ、見釋迦牟尼佛をよろこばざらんや、生値釋迦牟尼佛なり。身心をはげまして受持讀誦正憶念修習書寫是法華經者則見釋迦牟尼佛なるべし、如從佛口聞此經典、たれかこれをきほひきかざらん、いそがずつとめざるは、貧窮無福慧の衆生なり、修習するは當知是人則見釋迦牟尼佛なり。

【佛告大衆言若】法華分別功徳品の文。

釋迦牟尼佛告二大衆一言、若善男子善女人、聞三我説二壽命長遠一、深心信解、則爲見下佛常在二耆闍崛山一、共二大菩薩諸聲聞衆一圍遶説法上。又見二此娑婆世界、其地瑠璃、坦然平正一。

この深心といふは、娑婆世界なり、信解といふは、無廻避處なり、誠諦の佛語、たれか信解せざらん。この經典にあひたてまつれるは、信解すべき機縁なり、深心信解是法華深心信解壽命長遠のために、願生此娑婆國土しきたれり、如來の神力慈悲力、壽命長遠力、よく心を拈じて信解せしめ、身を拈じて信解せしめ、盡界を拈じて信解せしめ、佛祖を拈じて信解せしめ、諸法を拈じて信解せしめ、實相を拈じて信解せしめ、皮肉骨髓を拈じて信解せしめ、生死去來を拈じて信解せしむるなり、これらの信解これ見佛なり。しかあればしりぬ心頭眼ありて見佛す、信解眼をえて見佛す、ただ見佛のみにあらず、常在耆闍崛山をみるといふは、耆闍崛山の常在は、如來壽命と一齊なるべし。しかあれば見佛常在耆闍崛山は、前頭來も如來および耆闍崛山ともに、常在なり、後頭來も如來および耆闍崛山ともに常在なり、菩薩聲聞も、おなじく常在なるべし、説法もまた常在なるべし、娑婆世界共地瑠璃坦然平正をみる、娑婆世界をみること、動著すべからず。高處高平、低處低平なり、この地はこれ瑠璃地なり、これを坦然平正なるとみる。目をいやしくすることなかれ、瑠璃爲地の地はかくのごとし、この地を瑠璃にあらずとせば、耆闍崛山は耆闍崛山にあらず、釋迦牟尼佛は釋迦牟尼佛にあらざらん。其地瑠璃を信解する、すなはち深信解相なり、これ見佛なり。

【佛告大衆言一心】法華壽量品の文。

【佛告大衆乃至化佛】法華見寶塔品の文。

【我常住乃至而不見】法華壽量品の文。

【佛告大衆言能持】法華神力品の文。

【雲雷音王乃至提心】法華妙莊嚴王本事品の文。

釋迦牟尼佛告大衆言、「一心欲見佛、不自惜身命、時我及衆僧、俱出靈鷲山。」といふところの一心は凡夫二乘等のいふ一心にあらず、見佛の一心なり、見佛の一心といふは、靈鷲山なり、及衆僧なり。而今の箇箇、ひそかに欲見佛をもよほすは、靈鷲山心をこして欲見佛するなり、しかあれば一心すでに靈鷲山なり。一身それ心に俱出せざらんや、俱一身心ならざらんや、身心すでにかくのごとし、壽者命者またかくのごとし。かるがゆゑに自惜を靈鷲山の俱惜無上道に一任す、このゆゑに我及衆僧靈鷲山俱出なるを見佛の一心と道取す。

釋迦牟尼佛、告大衆言、「若說此經、則爲見我多寶如來、及諸化佛。」說此經は、「我常住於此、以諸神通力、令顚倒衆生、雖近而不見。」なり。この表裏の神力如來に、則爲見我等の功德そなはるに

釋迦牟尼佛、告大衆言、「能持是經者、則爲已見我、亦見多寶佛、及諸分身者。」この經を持することかたきゆゑに、如來よのつねにこれをすすむ。もしおのづから持是經者あるは、すなはち見佛なり。はかりしりぬ見佛すれば持經す、持經のもの見佛のものなり、しかあればすなはち乃至聞一偈一句受持するは、得見釋迦牟尼佛なり、亦見多寶佛なり、見諸分身佛なり、傳佛法藏なり、得佛正眼なり、得見佛命なり、得佛向上眼なり、得佛頂顊眼なり、得佛鼻孔なり。

雲雷音宿王華智佛、告妙莊嚴王言、「大王當知善知識者、是大因緣、所謂化導令得見

佛發二阿耨多羅三藐三菩提心一。』いまこの大會はいまだむしろをまかず、過去現在未來の諸佛と稱すといへども、凡夫の三世に準的すべからず。いはゆる過去は心頭なり。現在は拳頭なり、未來は腦後なり。しかあれば雲雷音宿王華智佛は、心頭現成の見佛なり、見佛の通語いまのごとし、化導は見佛なり、見佛は發阿耨多羅三藐三菩提心なり、發菩提心は見佛の頭正尾正なり。

釋迦牟尼佛言、『諸有修二功德一柔和質直者、則皆見二我身在一レ此而說レ法。』あらゆる功德と稱するは、陀泥帶水なり、隨波逐浪なり、これを修するを、吾亦如是、汝亦如是の柔和質直者といふ。これを泥裏に見佛しきたり、波心に見佛しきたる、在此而說法にあづかる。しかあるに近來大宋國に禪師と稱するともがらおほし、佛法の縱橫をしらず、見聞いとすくなし、わづかに臨濟雲門の兩三語を諳誦して、佛法の全道とおもへり。佛法もし臨濟雲門の兩三語に道盡せられば、佛法今日にいたるべからず、臨濟雲門を佛法の爲尊と稱しがたし。いかにいはんやいまのともがら臨濟雲門におよばず、不足言のやからなり。かれらおのれが愚鈍にして佛經のこころあきらめがたきをもて、みだりに佛經を謗す、さしおきて修習せず、外道の流類といひぬべし、佛祖の兒孫にあらず、いはんや見佛の境界におよばんや。孔子老子の宗旨になほいたらざるともがらなり、佛祖の屋裏兒かの禪師と稱するやからにあふことなかれ、ただ見佛眼の眼睛を參究體達すべし。

先師天童古佛擧、『波斯匿王問二賓頭盧尊者一、承聞尊者親見レ佛來是否。』尊者以レ

【佛言諸有修】法華壽量品の文。

【先師擧波斯】梅華卷に已に出づ。

【三億家の見佛】大智度論九に云く、舍衛城中九億家、三億家人眼見佛、三億家人耳聞有佛、三億家人不聞不見、佛在舍衛城廿五年と。

【賓頭盧赴阿育王宮】阿育王經三に載す。

手策起眉毛示之。』先師頌云、『策起眉毛答問端、親曾見佛不相瞞、至今應供四天下、春在梅梢帶雪寒。』いはゆる見佛は見自佛にあらず見他佛にあらず、見佛なり。一枝梅は見一枝梅のゆゑに、開華明明なり。いま波斯匿王の問取する宗旨は、尊者すでに見佛なりや作佛なりやと問取するなり。尊者あきらかに眉毛を策起せり、見佛の證驗なり、相瞞ずべからず。至今していまだ休罷せず、應供あらはれてかくるることなし、親曾の見佛たどるべからず。かの三億家の見佛といふは、この見佛なり、見三十二相にはあらず。見三十二相は、たれか境界をへだてん。この見佛の道理をしらざる、人天聲聞縁覺の類おほかるべし。たとへば佛子を竪起するおほしといへども、拂子を竪起するはおほきにあらずといふがごとし。見佛は被佛見成なり、たとひ自己は覆藏せんことをおもふとも、見佛さきだちて漏泄せしむるなり、これ見佛の道理なり。如恆河沙數量の身心を功夫して、審細にこの策起眉毛の面目を參究すべし。たとひ百千萬劫の晝夜つねに釋迦牟尼佛に共住せりとも、いまだ策起眉毛の力量なくば、見佛にあらず。たとひ二千餘載よりこのかた、十萬餘里の遠方にありとも、策起眉毛の力量したしく、見成せば、空王已前より見釋迦牟尼佛なり、見一枝梅なり、見梅梢春なり。しかあれば親曾見佛は、禮三拜なり、合掌問訊なり、破顔微笑なり、拳頭飛霹靂なり、跏趺坐蒲團なり。

「賓頭盧尊者、赴阿育王宮大會齋、行香次、王作禮問尊者曰、『承聞、尊者親見佛來是否。』尊者以手撥開眉毛曰、『曾來。』王曰、『不會。』尊者曰、『阿那婆達多龍王、請佛齋時、貧道亦預共數。』」いはゆる阿育王問の宗

【保寧仁勇】保寧は楊岐方會の嗣。【唵摩尼悉哩蘇嚧】唵見佛の眞言也。唵は供養恭敬の義、摩尼は無垢、悉哩は吉祥、蘇嚧は妙寂妙入の義と。【趙州因僧問】趙州錄上卷に出づ。

旨は、尊者親見佛來是否の言、これ尊者すでに尊者なりやと問著するなり、ときに尊者すみやかに眉毛を撥開す、これ見佛を出現於世せしむるなり、作佛を親見せしむるなり、「阿那婆達多龍王請佛齋時貧道亦預其數」といふ、しるべし請佛の會には唯佛與佛稻麻竹葦すべし、四果支佛のあづかるべきにあらず。たとひ四果支佛きたれりとも、かれを擧して請佛の數にあづかるべからず、尊者すでに自稱す、諸佛齋時貧道またそのかずなりきと、無端にきたれる白道取なり、見佛なる道理あきらかなり、請佛といふは、請釋迦牟尼佛のみにあらず、請無量無盡三世十方一切諸佛なり、請諸佛の數にあづかる、無諱不諱の親曾見佛なり。見佛見師見自見汝の指示、それかくのごとくなるべし、阿那婆達多龍王といふは阿耨達池龍王なり、阿耨達池ここには無熱惱池といふ。保寧仁勇禪師頌曰、「我佛親見賓頭盧、眉長髮短雙目瞻、阿育王猶尙狐疑、唵摩尼悉哩蘇嚧。」この頌は十成の道にあらざれども、趣向の參學なるがゆゑに拈來するなり。

趙州眞際大師因僧問、「承聞和尙親見南泉、是否。」師曰、「鎭州出大蘿蔔頭。」いまの道現成は、眞見南泉の證驗なり、有語にあらず無語にあらず、下語にあらず通語にあらず、策起眉毛にあらず、撥開眉毛にあらず、親見眉毛なり、たとひ軼才の獨歩なりとも親見にあらずよりはかくのごとくなるべからず、この鎭州出大蘿蔔頭の語は、眞際大師の鎭州寶家園眞際院に住持なりしときの道なり、のちに眞際大師の號をたてまつれり、かくのごとくなるがゆゑに、見佛眼を參開するよりこのかた、佛祖正法眼藏を正傳せり、正法

【寛元元年】祖師四十四歲、禪師峰に於ける示衆。

【偏參】參師訪道して佛祖の大道に究竟參徹し、足下無絲去來自由なる足下を偏參とす。大千沙界方寸を離れざるの偏參なり。徒に東奔西走して草鞋錢を費すをいふにはあらず。

【玄沙備頭陀何不】傳燈玄沙章、禪類卷十一に出づ。

【南嶽甚麼物】行持卷等屢出づ。

眼藏の正傳あるとき、佛兒雍容の威儀現成し、見佛ここに巍巍堂堂なり。

爾時寛元元年癸卯冬十一月朔十九日在二禪師峯山一示衆

正法眼藏見佛　畢

正法眼藏偏參

佛祖の大道は、究竟參徹なり、足下無絲去なり。足下雲生なり。しかもかくのごとくなりといへども、華開世界起なり、吾常於此切なり。このゆゑに甜瓜徹蔕甜なり、苦瓠連根苦なり、甜甜徹蔕甜なり、かくのごとく參學しきたれり。

玄沙山宗一大師、因雪峯召レ師曰、『備頭陀、何不二偏參去一。』師云、『達磨不レ來二東土一、二祖不レ往二西天一。』雪峯深然レ之。いはゆる偏參底の道理は、翻巾斗參なり、聖諦の亦不爲なり、何階級有之なり。南嶽大慧禪師、はじめて曹谿古佛に參ずるに、古佛いはく、『是甚麼物恁麼來。』この泥彈子を偏參すること、始終八年なり。末上に偏參する一著子を、古佛に白してまうさく、『懷讓會二得當初來時、和尚接二懷讓一是甚麼物恁麼來一。』ちなみに曹谿古佛道、『儞作麼生會。』ときに大慧まうさく、『説似一物即不中。』これ偏參現成せり、八年現成なり。曹谿古佛とふ、『還假二修證一否。』大慧まうさく、『修證不レ無、染汚即不レ得。』すなはち曹谿いはく、『吾亦如レ是、汝亦如レ是、乃至西天諸佛諸祖亦如レ是。』これよりさらに八載、

【十五白】梵語に一年を一白といふ。傳燈達磨章に止ニ林間一已經ニ九白一。律に白夏安居の字あり。十五白は十五年なり。

【六千五百千萬億】法華妙莊嚴王品に云く此二子已曾供ニ養六千五百千萬億那由陀恆河沙諸佛一の語あり。

徧參す。頭正尾正かぞふるに、十五白の徧參なり。恁麼來は、徧參なり。說似一物即不中に、諸佛諸祖を開殿參見する、すなはち亦如是參なり。入畫看よりこのかた六千五百千萬億の轉身徧參す、等閑の入一叢林出一叢林を徧參とするにあらず、全眼睛の參見を徧參とす、打得徹を徧參とす。面皮厚多少を見徹する、すなはち徧參なり、雪峯道の徧參の宗旨もとより出嶺をすすむるにあらず、北往南來をすすむるにあらず、玄沙道の達磨不來東土、二祖不往西天の徧參を助發するなり、たとへばなんぞ徧參にあらざらんといはんがごとし。玄沙道の達磨不來東土は、來而不來の亂道にあらず、大地無寸土の道理なり。いはゆる達磨は、命脈一尖なり、たとひ東土の全土たちまちに極涌して、參侍すとも轉身にあらず、さらに語脈の翻身にあらず、不來東土なるゆゑに、東土に見面するなり。東土たとひ佛面祖面相見すとも來東土にあらず、拈得佛祖失却鼻孔なり。おほよそ土は東西にあらず、東西は土にかかはれず。二祖不往西天は、西天を徧參するには、不往西天なり。二祖もし西天にゆかば、一臂落了也。しばらく二祖なにとしてか西天にゆかざる、いはゆる碧眼の眼睛裏に跳入するゆゑに、不往西天なり。もし碧眼裏に跳入せずば、必定して西天にゆくべし、抉出達磨眼睛を徧參とす。西天にゆき東土にきたる、徧參にあらず。天台南嶽にいたり、五臺上天にゆくをもて、徧參とするにあらず。四海五湖、もし透脫せざらんば、徧參にをらず。四海五湖に往來するは、四海五湖をして徧參せしめず、路頭を滑ならしむ、脚下を滑ならしむ、ゆゑに徧參を打失せしむ。おほよそ盡十方界、是箇眞實人體の參徹を

【倶胝參天龍得】倶胝和尚凡そ所問あれば唯一指を竪つ、是れ師の天龍和尚より得たる一指頭の禪なり。
【玄沙示衆云】玄沙錄、禪類に載す。
【謝三郎】玄沙の俗姓は謝氏、三郎は三男なるべし。

偏參とするゆゑに、達磨不來東土、二祖不往西天の參究あるなり。偏參は石頭大底大、石頭小底小なり。石頭を勞著せしめず大參小參ならしむるなり、百千萬箇を百千萬頭に參學するは、いまだ偏參にあらず、半語脈裏に百千萬轉身なるを偏參とす、たとへば打地唯打地は、偏參なり。一番打地、一番打空、一番打四方八面來は、偏參にあらず、倶胝參天龍得一指頭は、偏參なり、倶胝唯竪一指は、偏參なり。

玄沙示衆云『我與二釋迦老子一同參。』時有レ僧出問、『未審參二見甚麼人一。』師云、『釣魚船上謝三郎。』釋迦老子參底の頭正尾正、おのづから釋迦老子に同參なり。玄沙老漢參底の頭正尾正、おのづから玄沙老漢と同參なるゆゑに、釋迦老子と玄沙老漢と同參なり。釋迦老子と玄沙老漢と、參足參不足を究竟するを、偏參の道理とす。釋迦老子は、玄沙老漢と同參するゆゑに古佛なり、玄沙老漢は、釋迦老子と同參なるゆゑに兒孫なり、この道理、審細に偏參すべし。『釣魚船上謝三郎』この宗旨あきらめ參學すべし。いはゆる釋迦老子と玄沙老漢と、同時同參の時節を偏參功夫するなり。釣魚船上謝三郎を參見する玄沙老漢ありて同參す、玄沙山上禿頭漢を參見する謝三郎ありて、同參す。同參不同參みづから功夫せしめ他づから功夫ならしむべし。玄沙老漢と釋迦老子と、同參す偏參す、謝三郎與我參見甚麼人の道理を偏參すべし、同參すべし。いまだ偏參の道理現在前せざれば、參自不得なり、參自不足なり、他參不得なり、參他不足なり、參人不得なり、參我不得なり、參拳頭不得なり、參眼睛不得なり、自釣自上不得なり、未釣先上不得なり。すでに偏參究盡なるには、

【天童上堂云大道】淨祖住清涼寺に於ける語。

【四五千條】大慧廣錄、乾峰一路の頌に云く、擔拾雲門一柄扇、拗折乾峰一拄杖、二三千處管絃樓、四五百條華柳巷と、

脫落徧參なり、海枯不見底なり、人死不留心なり。海枯といふは、全海全枯なり。しかあれども海もし枯竭しぬれば、不見底なり。不留全留、ともに人心なり。人死のとき、心不留なり。死を拈來せるがゆゑに、心不留なり。このゆゑに全人は心なり、全心は人なりとしりぬべし。かくのごとくの一方の表裏を參究するなり。

先師天童古佛、あるとき諸方の長老の道舊なるいたりあつまりて上堂を請するに、上堂云、『大道無門、諸方頂顙上跳出、虛空絕路、淸涼鼻孔裏入來、恁麼相見、瞿曇種賊、臨濟禍胎、咦、大家顚倒舞二春風一、驚二落杏華一飛二亂紅一』而今の上堂は、先師古佛、ときに建康府の淸涼寺に住持のとき、諸方の長老きたれり。これらの道舊とは、あるときは賓主とありき、あるひは鄰單なりき。諸方にしてかくのごとくの舊友なり、おほからざらめやは。あつまりて上堂を請するときなり、渾無箇話の長老は、交友ならず、請するともものかすにあらず、大尊貴なるをかしづき請するなり。おほよそ先師の徧參は、諸方のきはむるところにあらず、大宋國二三百年來は、先師のごとくなる古佛あらざるなり。大道無門は、四五千條華柳巷、二三萬座管絃樓なり。しかあるを渾身跳出するに餘外をもちゐず、頂顙上に跳出するなり、鼻孔裏に入來するなり、ともにこれ參學なり。頂顙上の跳脫いまだあらず、鼻孔裏の轉身いまだあらざるは、參學人ならず、徧參漢にあらず、徧參の宗旨、ただ玄沙に參學すべし。四祖かつて三祖に參學すること九載せし、すなはち徧參なり。南泉願禪師、そのかみ池陽に一住してやや三十年やまをいでざる徧參なり。雲巖道吾等、在

【無情三昧】無靜三昧の說也。肅宗皇帝忠國師に問ふ、如何是無靜三昧、國師云、踏毘盧頂上行と。

【選佛道場】傳燈丹霞章に云く、初習儒學將入長安應擧、一禪者問曰、仁者何往、曰選官去、禪者何如選佛、曰選佛當往何處、禪者曰今江西馬大師出世、是乃選佛場と。

【寛元元年】祖齡四十四歲、禪師峰に於ける示衆。

【眼睛】五眼千手眼正法眼頂門眼。これを眼睛といふ。箇箇本具の眼睛、人人光明のあるあり。十方に遍照して此中塵埃を絕す般若の光明の一片なるを參學眼とす。

【先師住瑞巖示衆】淨祖錄、明州瑞巖寺在住の時の上堂示衆。

藥山四十年のあひだ功夫參學する、これ徧參なり、二祖そのかみ嵩山に參學すること八載なり、皮肉髓を徧參しつくす。徧參はただ只管打坐身心脫落なり、而今の去那邊去來遮裏來、その間隙あらざるがごとくなる渾體徧參なり、大道の渾體なり。毘盧頂上行は、無情三昧なり。決得恁麼は毘盧行なり。跳出の徧參を參徹する、これ葫蘆の葫蘆を跳出する。葫蘆頂上を選佛道場とせることひさし、命如絲なり、葫蘆徧參葫蘆なり、一莖艸を建立するを、徧參とせるのみなり。

爾時寛元元年癸卯十一月二十七日在越宇禪師峯下茅菴示衆

正法眼藏徧參　畢

正法眼藏眼睛

億千萬劫の參學を拈來して、團圝せしむるは、八萬四千の眼睛なり。先師天童古佛、住瑞巖時上堂示衆云、「秋風清、秋月明、大地山河露眼睛、瑞巖點瞎重相見、棒喝交馳驗衲僧。」いま衲僧を驗すといふは、古佛なりやと驗するなり。その要機は、棒喝の交馳せしむるなり、これを點瞎とす。恁麼の見成活計は、眼睛なり。山河大地、これ眼睛露の朕兆不打なり、秋風清なり、一老なり、秋月明なり、一不老なり。秋風清なる、四大海も比すべきにあらず、秋月明なる、千日月よりもあきらかなり。清明は眼睛なる山河

【洞山在雲巖時】洞山錄及傳燈十四洞山章に出づ。

大地なり、衲僧は佛祖なり。大悟をえらばず不悟をえらばず、朕兆前後をえらばず。眼睛なるは佛祖なり、驗は眼睛露なり、瞎現成なり、活眼睛なり、相見は相逢なり、相逢相見は、眼頭尖なり眼睛礙處なり、おそよそ渾身はおほきに、渾眼はちひさかるべしと、おもふことなかれ。往往に老老大大なりとおもふも、渾身大なり、渾眼小なりと解會せり、これ未具眼睛のゆゑなり。

洞山悟本大師、在ニ雲巖會一時、遇ニ雲巖作レ鞋次一、師白ニ雲巖一曰、「就ニ和尚一乞ニ眼睛一。」雲巖云、「汝底與ニ阿誰一去也。」師曰、「某甲無。」雲巖云、「有汝向ニ什麼處一著。」師無語。雲巖云、「乞ニ眼睛一底是眼睛否。」師曰、「非眼睛。」雲巖咄レ之。しかあればすなはち全彰の參學は、乞眼睛なり、雲堂に辨道し、法堂に上參し、寢堂に入室する乞眼睛なり。おほよそ隨衆參來、隨衆參來、おのれづからの眼睛なり。眼睛は自己にあらず、他己にあらざる道理あきらかなり。いはく洞山すでに就師乞眼睛の請益あり。はかりしりぬ自己ならんは、人に乞請せらるべからず、他己ならんは、人に乞請すべからず。汝底與レ誰去也と指示す、汝底の時節あり、與誰の處分あり。「某甲無。」これ眼睛の自道取なり、かくのごとくの道現成、しづかに究理參學すべし。雲巖いたく、「有向ニ什麼處一著。」この道眼睛は、某甲無の無は、有向ニ什麼處一著なり、向什麼處著は有なり、その恁麼道なりと參究すべし。「洞山無語。」これ茫然にあらず、業識獨竪の標的なり。雲巖爲示するにいはく、「乞眼睛底是眼睛否。」これ黠瞎眼睛の節目なり、活碎眼睛なり。いはゆる雲巖道の宗旨は、眼睛乞眼睛なり、水引水な

【奇哉十方佛】會元十二に出づ、空華卷を併せ看よ。

【先師抉出達磨】淨祖錄、清涼寺晉山方丈語なり。

【先師讃歎成道】淨祖清涼錄、臘八上堂語、次下に清涼恁麼讃歎喚作ニ知恩報恩一、其或不レ然年年臘八一甌茶禮拜燒香鈍ニ置他一と。

り、山連山なり、異類中行なり、同類中生なり。洞山いはく、「非眼睛。」これ眼睛の自擧唱なり、非眼睛の身心處知形段あらんところをば、自擧の活眼睛なりと相見すべきなり、三世諸佛は、眼睛の轉大法輪說大法輪を立地聽しきたれり。畢竟して參究する堂奧には、眼睛裏に跳入して、發心修行證大菩提するなり。この眼睛もとよりこのかた、自己にあらず、他己にあらず、もろもろの罣礙なきがゆゑに、かくのごとくの大事も罣礙あらざるなり。このゆゑに古先いはく、「奇哉十方佛、元是眼中華。」いはゆる十方佛は眼睛なり、眼中華は十方佛なり。いまだ進步退步する、打坐打睡する、しかしながら眼睛づからのちからを承攬して恁麼なり、眼睛裏の把定放行なり。

先師古佛云、「抉ニ出達磨眼睛一、作ニ泥團子一打人。」高聲云、「著。海枯徹レ底過、波浪拍レ天高。」これは清涼寺の方丈にして海衆に爲示するなり。しかあれば打人といふは、作人といはんがごとし。打のゆゑに人人は箇箇の面目あり、たとへば達磨の眼睛にて、人人をつくれりといふなり、つくれるなり。その打人の道理かくのごとし、眼睛にて打坐せる人人なるがゆゑに、いま雲堂他人の拳頭、法堂打人の拄杖、方丈打人の竹篦拂子、すなはち達磨眼睛なり。達磨眼睛を抉出しきたりて、泥團子につくりて打人するは、いまの人これを參請請益、朝上朝參、打坐功夫といふなり、打著什麼人いはく、「海枯徹底浪高拍天」なり。

先師古佛上堂讃ニ歎如來成道一云、「六年落艸野狐精、跳出渾身是葛藤、打ニ失眼睛一無レ處

覺、誰人剛道悟明星。』その明星にさとるといふは、打失眼睛の正當恁麼時の傍觀人話なり。これ渾身の葛藤なり、ゆゑに容易跳出なり。覺處覺は現成をも無處覺す、未現成にも無處覺なり。

先師古佛上堂云、『瞿曇打失眼睛時、雪裏梅華只一枝、而今到處成荊棘、却笑春風繚亂吹。』且道すらくは、瞿曇眼睛は、ただ一二三のみにあらず、いま打失するは、いづれの眼睛なりとかせん、打失眼睛と稱する眼睛のあるならん。さらにかくのごとくなるなかに、雪裏梅華只一枝なる眼睛あり、はるにさきだちて、はるのところを漏泄するなり。

先師古佛上堂云、『霖霪大雨、豁達大晴、蝦蟆啼、蚯蚓鳴、古佛不曾過去、發揮金剛眼睛、咄、葛藤葛藤。』いはくの金剛眼睛は、霖霪大雨なり、豁達大晴なり、蝦蟆啼なり、蚯蚓鳴なり。不曾過去なるゆゑに、古佛なり。古佛たとひ過去すとも、不古佛の過去に一齊なるべからず。

先師古佛上堂云、『日南長至、眼睛裏放光、鼻孔裏出氣。』いま緜緜なる、一陽三陽、日月長至、連底脫落なり。これ眼睛裏放光なり、日裏看山なり。このうちの消息威儀かくのごとし。

先師古佛ちなみに臨安府淨慈寺にして、上堂するにいはく、『今朝二月初一、佛子眼睛凸出、明似鏡、黑如漆、驀然跳、吞却乾坤一色、衲僧門下、猶是撞牆撞壁、畢竟

【先師上堂瞿曇】淨祖清涼錄臘八上堂語、次下に諸方說禪、清涼念詩、澄當得麼其如不然燒香點燭拜泥團、驟後逢天鷂子飛と。

【先師上堂霖霪】淨祖錄淨慈上堂の語。

【先師上堂日南】淨祖瑞巖錄冬至上堂語。

【臨安府淨慈寺】一統志に杭州府、云宋南渡遷都於杭、陞爲臨安府と。淨慈寺は西湖の上に在り。淨慈開山は永明延壽禪師なり

如何、盡レ情拈却笑呵呵、一ニ任春風沒ニ奈何一。』いまいふ撞牆撞壁は、渾牆撞なり、この眼睛あり、今朝および二月、ならびに初一、ともに條條の眼睛なり、いはゆる拂子眼睛なり、驀然として跨跳するゆゑに今朝なり、呑却乾坤いく千萬箇するゆゑに二月なり。盡情拈却のとき初一なり、眼睛の見成活計かくのごとし。

于時寛元元年癸卯十二月十七日在ニ越州禪師峯下ニ示衆

正法眼藏眼睛　畢

正法眼藏家常

おほよそ佛祖の屋裏には、茶飯これ家常なり。この茶飯の儀、ひさしくつたはれて、而今の現成なり、このゆゑに佛祖茶飯の活計きたれるなり。

大陽山楷和尚問ニ投子ニ曰、『佛祖意句、如ニ家常茶飯ニ離レ此之外、還有ニ爲人言句ニ也無。』投子曰、『汝道、寰中天子勅、還假ニ禹湯堯舜ニ也無。』大陽擬レ開レ口。投子拈ニ拂子ニ掩ニ師口ニ曰、『汝發意來時、早有ニ三十棒分ニ也。』大陽於レ此開悟、禮拜便行。投子曰、『且來闍梨。』大陽竟不レ回レ頭。投子曰、『子到ニ不疑之地ニ耶。』大陽以レ手掩レ耳而去。しかあればあきらかに保任すべし、佛祖意句は、佛祖家常の茶飯なり、家常の麤茶淡飯は佛祖意句なり。佛祖は茶飯をつくる、茶飯佛祖を保任せしむ。しかあれどもこのほかの茶飯力をから

【今朝二月二】浄祖浄慈録二月一日上堂語。

【寛元元年】祖齢四十四歳、禪師峰下の示衆。

【家常】家常又家風と稱す、茶に逢うては茶を喫し飯に逢うては飯を喫するは佛祖の家常也、困時打眠飢來喫飯、是れ祖宗の家風也、佛祖茶飯の活計見つべし知るべし。

【大陽山投子】續傳燈十芙蓉章、會元十四投子章に出づ。大陽山芙蓉道楷禪師は投子義青の嗣、投子山の義青禪師は大陽山警玄の嗣。

【南嶽山石頭】石頭希遷禪師石頭草菴歌の句。傳燈卷三十に出づ。

【先師示衆記得】淨祖錄、天童入院の拈則也。本則は傳燈百丈章に載す。

ず、このうちの佛祖力をつひやさざるのみなり。還假二堯舜禹湯一也無の見示を、功去參學すべきなり。離此之餘、還有爲人言句也無。この問頭の頂𩕳を參跳すべし、跳得也不跳得也と試參看すべし。

南嶽山石頭菴無際大師曰、『吾結二艸菴一無二寶貝一、飯了從容圖二睡快一。』道來道去。道來去する飯了は、參飽佛祖意句なり、未飯なるは未飽參なり、しかあるにこの飯了從容の道理は、飯先にも現成す、飯中にも現成す、飯後にも現成す、飯了の屋裏に喫飯ありと錯認する、四五升の參學なり。

先師古佛示衆曰、『記得僧問二百丈一、「如何是奇特事。」百丈曰、「獨坐大雄峯。」大衆不レ得二動著一、且教レ坐二殺者漢一、今日忽有レ人、問二淨上座如何是奇特事一、只向レ他道、有二甚奇特事一、畢竟如何。淨慈鉢盂、移二過天童一喫飯。』佛祖の家常にかならず奇特事あり、いはゆる獨坐大雄峯なり、いま坐殺者漢せしむるにあふとも、なほこれ奇特事なり。さらにかれよりも奇特なるあり。いはゆる淨慈鉢盂、移過天童喫飯なり。奇特事は、條條面面みな喫飯なり。しかあれば獨坐大雄峯、すなはちこれ喫飯なり。鉢盂は喫飯用なり、喫飯用は鉢盂なり。このゆゑに淨慈鉢盂なり、天童喫飯なり。飽了知飯あり、喫飯了飽あり、知了飽飯あり、飽了更喫飯あり、しばらく作麼生ならんかこれ鉢盂、おもはくは祇是木頭にあらず、黑如黍にあらず、頑石ならんや、鐵漢ならんや。無底なり、無鼻孔なり。一口呑虚空、虚空合掌受なり。

【先師示衆飢來】淨祖錄、瑞巖に住し方丈に遍するの語也。次下に莫有透鉗鎚底麼、咄、倒退三千と。

【先師淨慈赴請上堂】淨祖錄、瑞巖退院の語、晩峰は臺州府瑞巖寺の別峰の名なり。

【先師瑞巖佛殿示衆】淨祖錄、明州瑞巖に住する佛殿の語。法華安樂品の諸佛身金色百福相の莊嚴の語を假る。

先師古佛、ちなみに台州瑞巖淨土禪院の方丈にして示衆するに曰く、『飢來喫飯、困來打眠、爐鞴互レ天。』いはゆる飢來は、喫飯人の活計なり、未曾喫飯人は、飢不得なり。しかあればしるべし、飢一家常ならんわれは、飯了人なりと決定すべし。困來は、困中又困なるべし。困の頂𩕳上より全跳しきたれり、このゆゑに渾身の活計に、都撥轉渾身せらるる而今なり、打眠は佛眼、法眼、慧眼、祖眼、露柱燈籠眼を假借して、打眠するなり。

先師古佛、ちなみに台州瑞巖寺より臨安府淨慈寺の請におもむきて上堂にいはく、『半年喫レ飯坐二晩峯一、鎖二斷煙雲千萬重一、忽地一聲轟二霹靂一、帝鄕春色杏花紅。』佛代化儀の佛祖、その化みなこれ坐晩峯喫飯なり。續佛慧命の參究、これ喫飯の活計見成なり。坐晩峯の半年、これを喫飯といふ。鎖斷する煙雲いくかさなりといふことをしらず、一聲の霹靂たとひ忽地なりとも、杏華の春色くれなゐなるのみなり。帝鄕といふは、いまの赤赤條條なり、これらの恁麼は喫飯なり。晩峯は瑞巖寺の峯の名なり。

先師古佛、ちなみに明州慶元府の瑞巖寺の佛殿にして示衆するにいはく、『黃金妙相、著衣喫飯、因我禮レ儞、早眠晏起、咦、談玄說妙太無レ端、切忌拈華自熱瞞。』たちまちに透擔來すべし、黃金妙相といふは、著衣喫飯なり。著衣喫飯は、黃金妙相なり、さらにたれ人の著衣喫飯すると摸索せざれ、たれ人の黃金妙相なるといふことなれ。かくのごとくすればこの道著なり、因我禮儞のしかあるなり、我旣喫飯、儞擔喫飯なり、切忌拈華のゆゑにしかあるなり。

【福州大安示衆】後大潙和尚也、已に行持卷に出づ。【露地白牛】長者方論に露地白牛は無依處に至るを明す、露地は即ち佛地也、佛智は無依處の故に露地と爲す。白牛は即ち法身也と。【趙州問新到僧】趙州錄下、會元趙州章に出づ。趙州喫茶去の公案として名高し。【誰在畫樓】もと法昌遇の偈語、續宗圓相門に出づ。黄龍の偈に頭戴ニ花巾ニ離ニ少室ニ、手携ニ席帽ニ出ニ長安ニ、鷲峰峰下重相見、鼻孔元來總一船とあるを法昌和して胡蘆棚上掛ニ冬瓜ニ、滄浪堆中釣ニ得鰕ニ、誰在ニ畫樓沽酒處ニ、相邀來喫ニ趙州茶ニ、といふ。【寛元元年】祖師四十四歳、禪師峰下の示衆。

福州長慶院圓智禪師大安和尚、上堂示衆云、「大安住ニ潙山ニ三十年來、喫ニ潙山飯ニ、屙ニ潙山屎ニ、不レ學ニ潙山禪ニ、只看ニ一頭水牯牛ニ、若落路入艸便牽出、若犯ニ人苗稼ニ即鞭撻、調伏既久、可憐生受ニ人言語ニ、如今變作ニ箇露地白牛ニ、常在ニ面前ニ、終日露迥迥地、趁亦不レ去也。」あきらかにこの示衆を受持すべし、佛祖の會下に功夫なる三十年來は喫飯なり、さらに雜用心あらず、喫飯の活計見成すれば、おのづから看ニ一頭水牯牛ニの標格なり。

趙州眞際大師問ニ新到僧ニ曰、「曾到ニ此間ニ否。」僧曰、「曾到。」師曰、「喫レ茶去。」又問ニ一僧ニ、「曾到ニ此間ニ否。」僧曰、「不ニ曾到ニ。」師曰、「喫レ茶去。」院主問レ師、「爲レ甚曾到ニ此間ニ也喫レ茶去、不ニ曾到ニ此間ニ也喫レ茶去。」師召ニ院主ニ。主應諾。師曰、「喫茶去。」いはゆる此間は、頂𩕳にあらず、鼻孔にあらず、趙州にあらず、此間を跳脱するゆゑに、曾到此間なり、不曾到此間なり、這裏是甚麼處在、祇管道曾到不曾到なり。このゆゑに先師いはく、「誰在ニ畫樓沽酒處ニ、相邀來喫ニ趙州茶ニ。」しかあれば佛祖家常は、喫茶喫飯のみなり。

于時寛元元年癸卯十二月十七日在ニ越宇禪師峯下ニ示衆

正法眼藏家常　畢

正法眼藏龍吟

舒州投子山慈濟大師、因僧問、「枯木裏還有ニ龍吟ニ也無。」師曰、「我道髑髏裏有ニ師子吼ニ。」

【龍吟】枯木龍吟の略、枯木の體が龍にて枯木の用が吟なり。枯木の體が枯れて生生しからず枯木の用活きて潑溂たり、故に枯木死灰にあらず。枯木花開也。木人方歌石女起舞也。木馬游レ春駿不レ羈也髑髏裏有二獅子吼一也。

【舒州投子慈濟】傳燈十五投子章に出づ。投子山の開祖大同禪師諡號慈濟大師なり。

【朽木】論語に朽木不レ可レ雕とあり

【依根、本末】石頭大師參同契の語。

【幾度逢春】傳燈第七大梅章、大梅法常禪師の語、大梅持卷に已に出づ。

【宮商角徵羽】說文に聲也生レ於レ心有レ節レ於レ外謂二之音一、宮商角徵羽者聲也、金石絲竹土革木者音也と。

【髑髏徧野】傳燈

枯木死灰の談は、もとより外道の所教なり。しかあれども外道のいふところの枯木と、佛祖のいふところの枯木と、はるかにことなるべし。外道は枯木を談ずといへども、枯木をしらず、いはんや龍吟をきかんや。外道は枯木は朽木ならんとおもへり、不可逢春と學せり。佛祖道の枯木は、海枯の參學なり。海枯は木枯なり、木枯は逢春なり。木の不動著は枯なり、いまの山木海木空木等、これ枯木なり。萠芽も枯木龍吟なり、百千萬圍とあるも枯木の兒孫なり、枯の相性體力は、佛祖道の枯椿なり、非枯椿なり、山谷木なり、田里木なり。山谷木、よのなかに松栢と稱す、田里木、よのなかに人天と稱す、『依レ根葉分布』これを佛祖と稱す、『本末須レ歸レ宗。』すなはち參學なり。かくのごとくなる枯木の長法身なり、枯木の短法身なり。もし枯木にあらざれば、いまだ龍吟せず、枯木にあらざれば、龍吟を打失せず、幾度逢レ春不レ變レ心は、渾枯の龍吟なり、宮商角徵羽に不群なりといへども、宮商角徵羽は、龍吟の前後二三子なり。しかあるに這僧道の枯木裏還有二龍吟一也無は、無量劫のなかに、はじめて問頭に現成せり、話頭の現成なり。投子道の我道髑髏裏有二師子吼一は、有二甚麼掩處一なり、屈レ己推レ人也未レ休なり、髑髏徧レ野なり。

香嚴寺襲燈大師、因僧問、『如何是道。』師云、『枯木裏龍吟。』僧曰、『不會。』師曰、『髑髏裏眼睛。』後有レ僧問二石霜一、『如何是枯木裏龍吟。』霜云、『猶帶レ喜在。』僧曰、『如何是髑髏裏眼睛。』霜云、『猶帶レ識在。』又有レ僧問二曹山一、『如何是枯木裏龍吟。』山云、『血脈不斷。』僧曰、『如何是髑髏裏眼睛。』山云、『乾不盡。』僧曰、『未審、還有二得レ聞者一麼。』山云、『盡大地未レ有二一箇

十八、福州長發章の遊山話に云く、鼓山曰、孫公若無二此語一、可レ謂二髑髏偏一野と。

【香嚴僧問如何】傳燈十一香嚴章に出づ。

【又有僧問曹山】傳燈十七曹山章に出づ。

【頭角生】傳燈十吾章に藥山曰、智不到處切忌道著、道著頭角生と。

【寬元元年】祖齡四十四歲、禪師峰下の示衆。

不レ聞。僧曰、未審、龍吟是何章句。山云、也不レ知二是何章句一、聞者皆喪。いま擬道する聞者吟者は、吟龍吟者に不齊なり、この曲調は龍吟なり、枯木裏髑髏裏、これ内外にあらず、自他にあらず、而今而古なり、猶帶喜在は、さらに頭角生なり、猶帶識在は、皮膚脱落盡なり。曹山道の血脈不斷は、道不諱なり、語脈裏轉身なり。乾不盡は、海枯不盡底なり、不盡是乾なるゆゑに、乾上又乾なり、聞者ありやと道著せるは、不得者ありやといふがごとし。盡大地未有一個不聞は、さらに問著すべし、未有一個不聞は、しばらくおく、未有盡大地時、龍吟在甚麼處、速道速道なり。未審龍吟是何章句は、爲問すべし、吟龍はおのれづから泥裏の作聲擧拈なり、鼻孔裏の出氣なり。也不知是何章句は、章句裏有龍なり、聞者皆喪は、可惜許なり、いま香嚴、石霜、曹山等の龍吟來、くもをなし、みづをなす、不道道、不道眼睛髑髏、只是龍吟の千曲萬曲なり、猶帶レ喜在也蝦蟆啼、猶帶レ識也蚯蚓鳴、これによりて血脈不斷なり、葫蘆嗣葫蘆なり、乾不盡のゆゑに、露柱懷胎生なり、燈籠對燈籠なり。

于時寬元元年癸卯十二月二十五日在二越宇禪師峯下一示衆

正法眼藏龍吟　畢

正法眼藏春秋

洞山悟本大師、因僧問、寒暑到來如何廻避。師云、何不向無寒暑處去。僧云、如何是無寒暑處。師云、寒時寒殺闍梨、熱時熱殺闍梨。この因緣かつておほく商量しきたれり。而今おほく功夫すべし。佛祖かならず參來せり。參來せるは佛祖なり。西天東地古今の佛祖、おほくこの因緣を現成の面目とせり。この因緣の面目現成は、佛祖公案なり。

しかあるに僧問の寒暑到來如何廻避、くはしくすべし。いはく正當寒到來時、正當熱到來時の參詳看なり。この寒暑渾寒渾暑ともに寒暑づからなり。寒暑づからなるゆゑに、到來時は寒暑づからの頂𩕳より到來するなり。寒暑づからの眼睛より現前するなり。この頂𩕳上、これ無寒暑のところなり。この眼睛裏、これ無寒暑のところなり。高祖道の寒時寒殺闍梨、熱時熱殺闍梨は、正當到時の消息なり。いはゆる寒時たとひ道寒殺なりとも、熱時かならずしも熱殺道なるべからず。寒也徹蔕寒なり、熱也徹蔕熱なり。たとひ萬億の廻避を參得すとも、なほこれ以頭換尾なり。寒はこれ祖宗の活眼睛なり、暑はこれ先師の煖皮肉なり。

淨因枯木禪師（嗣芙蓉和尚、諱法成和尚）云、衆中商量道、這僧問既落偏、洞山答歸正位、其僧言中知音、却入正來、洞山却從偏去、如斯商量、不唯謗瀆先聖、亦乃屈沈自

【春秋】寒の寒に任せざるを春といひ、暑の暑に任せざるを秋といふ。春に春無うして春、秋に秋無うして秋也。寒時寒殺闍梨を春とし、熱時熱殺闍梨を秋とす。寒熱は生死也。生の生ならざるを春とし死の死ならざるを秋とす。春秋を明むるを佛家一大事因緣とせり。

【洞山僧問寒暑】洞山錄、及傳燈洞山章等に出づ。

【煖皮肉】傳燈嵩州安國慧琳章に師問十院主、先師道盡十方世界是眞實人體、爾見僧堂麼。曰勿眼華。師曰先師遷化矣、肉尚煖在と。

【淨因枯木云衆中】續傳燈云、枯木法成は芙蓉楷祖に嗣ぐと。此則師の章に載せず。

【炯誡】說文に誡警也と、炯は明也、はつきりと誡む。

【慶元府宏智云】宏智錄四、天童に住する上堂語。

【著碁】博物志に堯造ニ圍碁一以教ニ子丹朱一と、梵網經虛作無義戒に云く不レ得ニ樗蒲圍碁一と、碁を圍むこと。

【足をあらひ纓を】楚辭漁父云く、滄浪之水清可ニ以濯ニ吾纓一、滄浪之水濁可ニ以濯ニ吾足一と。

己ニ不レ見レ道、聞ニ衆生解一、意下丹青、目前雖レ美、久蘊成レ病。大凡行脚高士、欲レ窮ニ此事一、先須三識ニ取上祖正法眼藏一、其餘佛祖言教、是什麼熱盌鳴聲。雖ニ然如レ是、敢問ニ諸人一、畢竟作麼生是無寒暑處、還會麼、玉樓巢ニ翡翠一、金殿鎖ニ鴛鴦一。師はこれ洞山の遠孫なり、祖席の英豪なり、しかあるに箇箇おほくあやまりて、偏正の窟宅にして、高祖洞山大師を禮拜せんとすることを炯誡するなり、佛法もし偏正の局量より相傳せば、いかでか今日にいたらん。あるひは野猫兒、あるひは田厙奴、いまだ洞山の堂奥を參究せず、かつて佛法の道闈を行李せざるともがら、あやまりて洞山に偏正等の五位ありて、人を接すといふ、これは胡說亂說なり、見聞すべからず。ただまさに上祖の正法眼藏あることを參究すべし。

慶元府、天童山、宏智禪師、嗣丹霞和尙云、若會ニ此事一、如ニ兩家著碁一相似、儞不レ應ニ我著一、我卽瞞レ汝去也、若恁麼體得、始會ニ洞山意一、天童不レ免下ニ箇注腳一、裏頭看勿ニ暑寒一、直下滄溟瀝得乾、我道巨鼇能俯拾、笑君沙際弄ニ釣竿一。しばらく著碁はなきにあらず、作麼生是兩家、もし兩家著碁といはば、八目なるべし。もし八目ならんは著碁にあらず、いかん。いふべくば、かくのごとくいふべし、著碁一家敵手相逢なり。しかありといふとも、いま宏智道の儞不應我著、こころをおきて功夫すべし。身をめぐらして參究すべし。儞不應我著といふは、なんぢわれなるべからずといふなり。我卽瞞レ汝去也、すごすことなかれ、泥裏有泥なり、踏著あしをあらひ、また纓をあらふ、珠裏有

【雪竇云垂手還同】雪竇頌古第四十三則洞山無寒暑の頌

【長靈云偏中有】會元天寧長靈守卓禪師は泉州莊子の子黃龍の淸に嗣ぐ。類本則下に出づ。

【大潙佛性云無】會元、潭州大潙佛性法泰は漢州李氏の子、圜悟に嗣ぐ。禪類本則下に出づ。

【刻舟求劍】呂氏春秋に云く楚人劍自二舟中一墜レ水、遽刻二其舟一曰是吾劍之所レ從墜也、舟已行而惑不レ行、不二亦惑一乎焉と。

珠なり、光明するにかれをてらし、自をてらすなり。

夾山圜悟禪師 嗣五祖法演禪師 諱克勤和尙 云、『盤走レ珠、珠走レ盤、偏中正正中偏、羚羊掛レ角無二蹤跡一、獵狗遶レ林空踧踖。』いま盤走珠の道、これ光前絕後、古今罕聞なり、古來はただいはく、盤にはしる珠は住著なきがごとし、羚羊いまは空に掛角せり、林いま獵狗をめぐる。

慶元府、雪竇山、資聖寺、明覺禪師 嗣北塔祚和尙 諱重顯和尙 云、『垂手還同二萬仞崖一、正偏何必在二安排一、瑠璃古殿照二明月一、忍俊韓驢空上レ階。』雪竇は、雲門三世の法孫なり、參飽の皮袋といひぬべし、いま垂手還同萬仞崖といひて、奇絕の標格をあらはすといへども、かならずしもしかあるべからず。いま僧問山示の因緣、あながちに垂手不垂手にあらず、出世不出世にあらず、いはんや偏正の道をもちゐんや。偏正の眼をもちゐざれば、この因緣に下手のところなきがごとし。參請の巴鼻なきがごとくなるは、高祖の邊域にいたらず、佛法の大家を覰見せざるによれり、さらに草鞋を拈來して參請すべし、みだりに高祖の佛法は正偏等の五位なるべしといふことやみね。

東京天寧長靈禪師守卓和尙云、『偏中有レ正正中偏、流二落人間一千百年。幾度欲レ歸歸未レ得、門前依レ舊草芊芊。』これもあながちに偏正と道取すといへども、しかも拈來せり、拈來はなきにあらず、いかならんかこれ偏中有。

潭州大潙佛性和尙 嗣圜悟 諱法泰 云、『無寒暑處爲レ君通、枯木生レ華又一重、堪レ笑刻レ舟求レ劍者、至レ今猶在二冷灰中一。』この道取、いささか公案踏著戴著の力量あり。

【湛堂文準曰熱】會元、十七、泐潭湛堂文準、興元府梁氏の子、寶峰の克文に嗣ぐ、禪類本則下に出づ。

【何山佛燈云無】會元、十九、安吉州何山佛燈守珣、郡之施氏の子、佛鑑の懃に嗣ぐ、禪類本則下に出づ。

【寛元二年】祖齡四十五歲、越宇山奥（吉峰寺ならん）の示衆。

【祖師道衆角】傳燈青原章に青原禪師の云へる語。

泐潭湛堂文準禪師曰、熱時熱殺寒時寒、寒暑由來總不干、行盡天涯諳世事、老君頭戴猪皮冠。しばらくといふべし、作麼生ならんかこれ不干底道理、速道速道。

蘄州、何山、佛燈禪師（嗣大平佛鑑懃禪師）（諱守珣和尚）云、無寒暑處洞山道、多少禪人迷處所、寒時向火熱乘涼、一生免得避寒暑。この珣師は、五祖法演禪師の法孫といへども、小兒子の言語のごとし、しかあれども一生免得避寒暑、のちに老大の成風ありぬべし、いはく一生とは、盡生なり、避寒暑は、脱落身心なり、おほよそ諸方の諸代、かくのごとく鼓兩片皮をこととして、頌古を供達すといへども、いまだ高祖洞山の邊事を覰見せず、いかんとならば、佛祖の家常には、寒暑いかなるべしとしらざるによりて、いたづらに乘涼向火といふ、ことにあはれむべし、なんぢ老尊宿のほとりにして、なにを寒暑といふとか聞取せし、かなしむべし祖師道廢せることを。この寒暑の形段をしり、寒暑の時節を經歴し、寒暑を使得しきたりて、さらに高祖爲示の道を頌古すべし、拈古すべし。いまだしかあらざらんは知非にはしかじ。俗なほ日月をしり、萬物を保任するに、聖人賢者のしなじなあり、君子と愚夫とのしなじなあり、佛道の寒暑、なほ愚人の寒暑と、ひとしかるべしと錯會することなかれ、直須勤學すべし。

爾時寛元二年甲辰在越宇山奥再示衆。

逢佛事而轉佛麟經。祖師道、衆角雖多一麟足矣。

正法眼藏春秋　畢

【祖師西來意】達磨西來して後初めて祖師西來意あるにあらず、祖師西來せざる以前、祖師西來意不減也。祖師西來して以後祖師西來意不增也。互古互今の祖師西來意也。艸木、國土日月、星辰祖師西來意也、坐臥經行祖師西來意也、蒲團禪版祖師西來意也、不增不減不生不滅の祖師西來意也。【香嚴示衆云如】傳燈香嚴章、宏智拈古第七則等出。香嚴阿育王經優婆毱多の因緣を假りて此機緣を設けしものならん。

正法眼藏祖師西來意

香嚴寺襲燈大師諱智閑嗣大潙、示衆云、『如人千尺懸崖上樹、口啣樹枝、脚不踏樹、手不攀枝、樹下忽有人、問如何是祖師西來意、當恁麼時、若開口答他、即喪身失命、若不答他、又違所問、當恁麼時、且道、作麼生即得。』時有虎頭昭上座、出衆云、『上樹時即不問、未上樹時請和尚道如何。』師乃呵呵大笑。而今の因緣、おほく商量拈古すれど、道得箇まれなり、おそらくはすべて茫然なるがごとし、しかありといへども不思量を拈來し、非思量を拈來して思量せんに、おのづから香嚴老と一蒲團の功夫あらん、すでに香嚴老と一蒲團上に兀坐せば、さらに香嚴未開口已前に、この因緣を參詳すべし、香嚴老の眼睛をぬすみて覰見するのみにあらず、釋迦牟尼佛の正法眼藏を拈出して覰破すべし、『如人千尺懸崖上樹。』この道しづかに參究すべし、なにをか人といふ、露柱にあらずば木橛といふべからず、佛面祖面の破顏なりとも、自己他己の相見あやまらざるべし。いま人上樹のところは、盡大地にあらず、百尺竿頭にあらず、これ千尺懸崖なり、たとひ脫落去すとも、千尺懸崖裏なり、落時あり、上時あり、如人千尺懸崖裏上樹といふ、しるべし上時ありといふこと。しかあれば向上也千尺なり、向下也千尺なり、左頭也千尺なり、右頭也千尺なり、遮裏也千尺なり、那裏也千尺なり、如人也千尺なり、上樹也千尺

【古鏡火爐量】傳燈玄沙章に「世界濶一丈、古鏡濶一丈、世界濶一尺、古鏡濶一尺、師指ニ火爐ニ曰、且道火爐濶多少、雪峰曰如ニ古鏡濶ニ」と。

【無縫塔量】傳燈忠國師章に云く、代宗問曰師滅度後弟子將レ何所レ記、師曰告ニ檀越ニ造ニ取一所無縫塔ニ、帝曰就レ師請ニ取塔樣ニ、師良久曰會麼、帝曰不會、師曰貧道去後有ニ侍者應眞ニ、却知ニ此事ニ、代宗詔ニ應眞ニ入レ內擧ニ之、問ニ前語ニ、眞良久曰聖上會麼、曰不會、眞述レ偈云云。

なり、向來の千尺は恁麼なるべし。且問すらくは、『千尺量多少。』いはく如古鏡量なり、如火爐量なり、如無縫塔量なり。『口銜ニ樹枝ニ』いかにあらんかこれ口、たとひ口の全闊全口をしらずといへども、しばらく樹枝より尋枝摘葉しもてゆきて、口の所在しるべし。しばらく樹枝を把拈して口をつくれるあり、このゆゑに全口是枝なり、全枝是口なり、通身口なり、通口是身なり、『樹自踏樹。』ゆゑに脚不踏樹といふ。脚自踏脚のごとし、『枝自攀枝。』ゆゑに、手不攀枝といふ、手自攀手のごとし。しかあれども脚跟なほ進歩退歩あり、手頭なほ作拳開拳あり、自他の人家しばらくおもふ掛虚空なりと。しかあれども掛虚空それ銜樹枝にしからんや、『樹下忽有レ人問、如何是祖師西來意。』この樹下忽有人は、樹裏有人といふがごとし、人樹ならんがごとし、『人下忽有人問。』すなはちこれなり、しかあれば樹問樹なり、人問人なり、擧樹擧問なり、擧西來意、問西來意なり、問著人また口銜樹枝して問來するなり、口銜枝にあらざれば、問著することあたはず。滿口の音聲なし、滿言の口あらず、西來意を問著するときは、銜西來意にて問著するなり。『若開レ口答レ他、卽喪レ身失命。』いま若開口答他の道、したしくすべし、不開口答他もあるべしときこゆ、もししかあらんときは、不喪身失命なるべし、たとひ開口不開口ありとも、口銜樹枝をさまたぐべからず、開閉かならずしも全口にあらず、口に開閉もあるなり。しかあれば銜枝は全口の家常なり、開閉口をさまたぐべからず、開口答他といふは、開樹枝答他するをいふか、開西來意答他するをいふか、もし開西來意答他にあらずば、答西來意にあらず。すでに答他あらず、こ

【雪竇云樹上】擊節第七則雪竇拈語なり。

【寛元二年】前卷に同じ。

れ全身保命なり、喪身失命といふべからず。さきより喪身失命せば答他あるべからず、しかあれども香嚴のこころ答他を辭せず、ただおそらくは喪身失命のみなり、しるべし未答他時護身保命なり、忽答他時飜身活命なり、はかりしりぬ人人滿口是道なり、答他すべし、答自すべし、問他すべし、問自すべし、これ口銜道なり、口銜道を口銜枝といふなり。若答レ他時、口上更開一隻口なり、若不レ答レ他違ニ他所問一なりといへども、不違自所問なり。しかあればしるべし、答西來意する一切の佛祖は、みな上樹口銜樹枝の時節にあひあたりて答來するなり、問西來意する一切の佛祖は、みな上樹口銜樹枝の時節にあひあたりて問來せるなり。雪竇明覺禪師重顯和尚云、『樹上道卽易、樹下道卽難、老僧上樹也、致ニ將一問一來。』いま致將一問來は、たとひ盡力來すとも、この問きたることおそくして、うらむらくは答よりものちに問來せることを、あまねく古今の老古錐にとふ、香嚴呵呵大笑する、これ樹上道なりや、樹下道なりや、答西來意なりや、不答西來意なりや、試道看。

爾時寛元二年甲辰二月四日在ニ越宇深山裏一示

正法眼藏祖師西來意　畢

【優曇華】優曇鉢羅華を略して優曇華といふ。此に、希有、又一切[illegible]。靈瑞の意あり。[illegible]上世尊拈華、迦葉微笑の消息、[illegible]笑の華なり。[illegible]西來[illegible]華開五葉、[illegible]一華[illegible]七佛諸佛共に拈華[illegible]來して[illegible]世界起[illegible]し四七二三[illegible]一華[illegible]なり、[illegible]の正法眼藏を傳す。
【三百六十餘會】賢劫經の一に、三百六十總持門中有二三百六十餘會千佛發心因緣一也の文あり。
【五千四十八卷】唐玄宗の時沙門智昇、開元釋教錄を撰して續譯の二十卷、大約五千四十八卷の目錄を載す。
【三乘十二分教】佛教の卷に委出す
【三賢十聖】三賢

正法眼藏優曇華

靈山百萬衆前、世尊、拈二優曇華一瞬レ目、于レ時摩訶迦葉、破顔微笑、世尊云、我有二正法眼藏涅槃妙心、付二屬摩訶迦葉一。七佛諸佛は、おなじく拈華來なり。これを向上の拈華と修證現成せるなり、直下の拈華と裂破開明せり。しかあればすなはち拈華裏の向上下、向自他、向表裏等、ともに渾華拈なり。華量、佛量、心量、身量なり。いく拈華も面面の嫡嫡なり、付屬有在なり。世尊拈華來、なほ放下著、いまだし拈華世尊來、ときに嗣世尊なり、拈華時すなはち盡時のゆゑに、同參世尊なり、同拈華なり。いはゆる拈華といふは、華拈華なり、梅華、春華、雪華、蓮華等なり。いはくの梅華の五葉は、三百六十餘會なり、五千四十八卷なり、三乘十二分教なり、三賢十聖なり、これによりて三賢十聖およばざるなり、大藏あり奇特あり、これを華開世界起といふ。一華開五葉、結果自然成とは、渾身是已掛渾身なり、桃華をみて眼睛を打失し、翠竹をきくに耳處を不現ならしむる、拈華の而今なり、腰雪斷臂、禮拜得髓する華自開なり、石碓米白、夜半傳衣する華已拈なり、これら世尊手裏の命根なり。おほよそ拈華は、世尊成道より已前にあり、世尊成道と同時なり、世尊成道よりものちにあり、これによりて華成道なり。拈華はるかにこれらの時節を超越せり、諸佛諸祖の發心、發足、修證、保任、ともに拈華の春風を蝶舞するなり。しかあれ

は十住十行十回向の位にある者、十聖は十地の位にある行者をいふ。
【一華開五葉】達磨大師の二祖付法の偈、「吾本來此土傳法救迷情一華開五葉結果自然成」。
【石碓米白夜半傳衣】六祖慧能禪師の五祖に嗣法の消息。
【譬如優曇華】法華方便品の語。

ばいま瞿曇世尊、はなのなかに身をいれ、空のなかに身をかくせるによりて、鼻孔をとるべし、虚空をとれり。拈華と稱す、拈華は眼睛にて拈ず、心識にて拈ず、鼻孔にて拈ず、華拈にて拈ずるなり。おほよそこの山河大地、日月風雨、人畜艸木のいろいろ、角角拈來せる、すなはちこれ拈優曇華たり。生死去來も、華のいろいろなり、華の光明なり。いまわれら、かくのごとく參學する、拈華來なり。佛言「譬如優曇華、一切皆愛樂」いはくの一切は、現身藏身の佛祖なり、艸木昆蟲の自有光明在なり。皆愛樂とは、面面の皮肉骨髓、いまし活鱍鱍なり、しかあればすなはち一切はみな優曇華なり、かるがゆゑにすなはちこれをまれなりといふ。瞬目とは、樹下に打坐して明星に眼睛を換却せしときなり、このとき摩訶迦葉、破顔微笑するなり。顔容はやく破して、拈華顔に換却せり。如來瞬目のときに、われらが眼睛はやく打失しきたれり、この如來瞬目、すなはち拈華なり、優曇華のこころおのづからひらくるなり。拈華正當恁麼時は、一切の瞿曇、一切の迦葉、一切の衆生、一切のわれら、ともに一隻の手をのべて、おなじく拈華すること只今までもいまだやまざるなり。さらに手裏藏身三昧あるがゆゑに、四大五陰といふなり、我有は付屬なり、付屬は我有なり、付屬はかならず我有に罣礙せらるるなり。我有は頂𩕳なり、その參學は、頂𩕳量を巴鼻して參學するなり、我有を拈じて付屬に換却するとき、保任正法眼藏なり、祖師西來、これ拈華來なり、拈華を弄精魂といふ、弄精魂とは、祗管打坐脱落身心なり、佛となり祖となる。弄精魂といふ、著衣喫飯を弄精魂といふなり。おほよ

【雲中に拍し】雲頂德敷の語に木人把レ板雲中拍、石女含レ笙水底吹と。雲門の語の僧堂佛殿厨庫三門を轉用して成語す。
【梅華引】古樂府に梅花落の曲あり其詞に曰く、爾零落逐ニ風飃一、徒有ニ霜華一無ニ霜實一と。
【先師古佛云】淨祖の淸涼寺に於ける臘八上堂の語。
【靈雲見處】淨祖天童錄上堂語。
【寛元二年】祖師四十五歲、越前吉峰寺に於ける示衆。
【發無上心】寛元二年二月十四日に發無上心と發菩提心と二卷の示衆あり、古來往往にし

そ佛祖極則事、かならず弄精魂なり。佛殿に相見せられ、僧堂を相見する、はなにいろいろいよいよそなはり、いろにひかりますますかさなるなり。さらに僧堂いま版をとりて雲中に拍し、佛殿いま笙をふくんで水底にふく。到恁麼のとき、あやまりて梅華引を吹起せり、いはゆる先師古佛いはく、『瞿曇打ニ失眼睛一時、雪裏梅華只一枝、而今到處成ニ荊棘一、却笑春風繚亂吹。』いま如來の眼睛あやまりて梅華となれり、梅華いま彌綸せる荊棘をなせり、如來は眼睛に藏身し、眼睛は梅華に藏身す、梅華は荊棘に藏身せり。いまかへりて春風をふく、しかもかくのごとくなりといへども、梅華樂を慶快す。

先師天童古佛云、『靈雲見處桃華開、天童見處桃華落。』しるべし桃華開は靈雲の見處なり、直至ニ如今一更不レ疑なり。桃華落は天童の見處なり。桃華のひらくるは春のかぜにもよほされ、桃華のおつるは春のかぜにくまる。たとひ春風ふかく桃華をにくむとも、桃華おちて身心脫落せん。

爾時寛元二年甲辰二月十二日在ニ越宇吉峯精藍一示衆

正法眼藏優曇華　畢

正法眼藏發無上心

西國高祖曰、『雪山喩大涅槃。』しるべしたとふべきをたとふ。たとふべきといふは親曾な

て此標號を誤る。梵清本には此卷を發菩提心と題し異本作二發無上心一と詳せり。參本は宋吾本及び通本に從ひ發無上心と名くる旨を附記せり。同一目の說示なれ共唯對機を異にするを以て發菩提心と發無上心とに分たれしものなるべし。前者は體に說き後者は用に就く體の名は三乘に通じ用の名は菩薩に局る、所以に分別す無上心は廣度衆生の悲願心より起る故に菩薩に局るとは西師の說なり【西國ノ記】釋錄のことなり。古尊宿錄卷一の百丈懷海禪師錄に云く西因高祖六祖山云大涅槃此上初祖云心心如木石と。大涅槃經卷三十二に大高山者喩大涅槃の語あり。

【造佛造經】供養

るなり、端的なるなり。いはゆる雪山を拈來するは、喩雪山なり、大涅槃を拈來する大涅槃にたとふるなり。

震旦初祖曰、「心心如木石。」いはゆる心は心如なり、盡大地の心なり、このゆゑに自他の心なり。盡大地人、および盡十方界の佛祖、および天龍等の心心は、これ木石なり、このほかさらに心あらざるなり、この木石おのれづから有無空色等の境界に籠絡せられず、この木石心をもて、發心修證するなり、心木色石なるがゆゑなり。この心木心石のちからをもて、而今の思量箇不思量底は現成せり。心木心石の風聲を見聞するより、はじめて外道の流類を超越するなり、それよりさきは佛道にあらざるなり。

大證國師曰、「牆壁瓦礫是古佛心。」いまの牆壁瓦礫、いづれのところにあると、參詳看あるべし、是什麼物恁麼現成と問取すべし。古佛心といふは、空王那畔にあらず、粥足飯足なり、艸足水足なり。かくのごとくなるを拈來して、坐佛し作佛するを、發心と稱す。

おほよそ發菩提心の因緣、ほかより菩提心を拈來せず、菩提心を拈來して發心するなり。菩提心を拈來するといふは、一莖艸を拈じて造佛し、無根樹を拈じて造經するなり。いさごをもて供佛し、漿をもて供佛するなり。一摶の食を衆生にほどこし、五莖の華を如來にたてまつるなり、他のすすめによりて、片善を修し、魔に嬈せられて禮佛する、また發菩提心なり、しかのみにあらず、知二家非一レ家、捨レ家出家、入山修道、信行、法行するなり、造佛造塔するなり、讀經念佛するなり、爲衆說法するなり、尋師訪道するなり、結跏趺坐

するなり、一禮三寶するなり、一稱南無佛するなり。かくのごとく八萬法藴の因縁、かならず發心なり、あるひは夢中に發心するもの得道せるあり、あるひは醉中に發心するもの得道せるあり、あるひは飛華落葉のなかより、發心得道するあり、あるひは桃華翠竹のなかより發心得道するあり、あるひは天上にして發心得道するあり、あるひは海中にして發心得道するあり。これみな發菩提心中にして、さらに發菩提心するなり、身心のなかにして、發菩提心するなり。諸佛の身心中にして、發菩提心するなり、佛祖の皮肉骨髓のなかにして、發菩提心するなり。しかあれば而今の造塔造佛等は、まさしくこれ發菩提心なり、直至成佛の發心なり、さらに中間に破廢すべからず、これを無爲の功德とす、これを無作の功德とす。これ眞如觀なり、これ法性觀なり、これ諸佛集三昧なり、これ得諸佛陀羅尼なり、これ阿耨多羅三藐三菩提心なり、これ阿羅漢果なり、これ佛現成なり。このほかさらに無爲無作等の法なきなり。しかあるに小乘愚人いはく、「造像起塔は、有爲の功業なり、さしおきていとなむべからず、息慮凝心、これ無爲なり、無生無作、これ眞實なり、法性實相の觀行、これ無爲なり。」かくのごとくいふを西天東地の古今の習俗とせり、これによりて重罪逆罪をつくるといへども造像起塔せず、塵勞稠林に染汙すといへども、念佛讀經せず。これただ人天の種子を損壞するのみにあらず、如來の佛性を撥無するともがらなり。まことにかなしむべし、佛法僧の時節にあひながら、佛法僧の怨敵となりぬ。三寶の山にのぼりながら、空手にしてかへり、三寶の海にいりながら、空手にしてかへらん

諸佛の卷、歸依三寶卷中に具出す。

【いさごをもて】阿育王の前世に沙を佛鉢中に奉りし故事四攝法卷中に出づ。

【栗をもて】釋尊阿難と共に舍婆提城より婆羅門城に向つて食を乞ひたまふに國王外道に歸し制を設けて供養することを許さず、一老婢佛の空鉢を見て心に施を念ず、佛之を知りて鉢を伸べて從ひて乞ふ、老婢淨心を以て米洗ひ水を施す、此一念の信心により十五劫中受喧快樂すと、智論八に記し。

【一搏の食】大論三十八に出づ。

【五葉の華】瑞應本起經に出づ。

【他のすゝめに】譬喩經に出づ。

【魔に嬈せられて】莊嚴論に出づ。

【禮佛念佛】禪門

祖偈下卷、禮佛敬ニ佛德ヲ、念佛感ニ佛恩ニ、持戒行ニ佛行ヲ、看經明ニ佛理ヲ、坐禪達ニ佛境ニ、參禪合ニ佛心ニ、得悟證ニ佛道ヲ、說法滿ニ佛願ヲ、實際理地不ㇾ受ニ一塵ヲ、佛事門中不ㇾ捨ニ一法ヲ、然此八事猶如ニ四方四隅ノ、闕ㇾ一不可と、之を八溢聖解脫門といふ。

【夢中に發心】法華安樂品に出づ。

【睡中に發心】婆羅門睡中に出家を求む、佛剃髮せしめたまふ事智論に出づ。

【桃華翠竹】桃華は靈雲、翠竹は香嚴悟道の因緣。

【眞如觀、法性觀】瓔珞本業經中に六觀法を說く、一住觀、二行觀、三向觀、四地觀、五無相觀、六一切種觀、第五無相觀又名ニ眞如觀ニ、第六一切種智觀又名ニ法

ことは、たとひ千佛萬祖の出世にあふとも、得度の期なく發心の方を失するなり、これ經卷にしたがはず、知識にしたがはざるによりてかくのごとし、おほく外道邪師にしたがふによりてかくのごとし。造塔等は、發菩提心にあらずといふ見解は、はやくなげすつべし。こころをあらひ、身をあらひ、みみをあらひ、めをあらふて、見聞すべからざるなり。まさに佛經にしたがひ知識にしたがひて、正法に歸し佛法を修學すべし。佛法の大道は、一塵のなかに大千の經卷あり、一塵のなかに無量の諸佛まします、一艸一木ともに身心なり、萬法不生なれば、一心も不生なり、諸法實相なれば、一塵實相なり。しかあれば一心は諸法なり、諸法は一心なり、全身なり。造塔等もし有爲ならんときは、佛果菩提眞如佛性も、また有爲なるべし。眞如佛性、これ有爲にあらざるゆゑに、造像起塔、すなはち有爲にあらず、無爲の發菩提心なり、無爲無漏の功德なり、ただまさに造像起塔等は發菩提心なりと決定信解すべきなり。億劫の行願、これより生長すべし。億億萬劫、くつべからざる發心なり、これを見佛聞法といふなり。しるべし木石をあつめ、泥土をかさね、金銀七寶をあつめて造佛起塔する、すなはち一心をあつめて造塔造像するなり、空空をあつめて作佛するなり、心心を拈じて造佛するなり、塔塔をかさねて造塔するなり、佛佛を現成せしめて造佛するなり。かるがゆゑに經にいはく、「作是思惟時、十方佛皆現。」しるべし一思惟の作佛なるときは、十方思惟佛皆現なり、一法の作佛なるときは、諸法作佛なり。

釋迦牟尼佛言、「明星出現時、我與ニ大地有情ニ同時成道。」しかあれば發心修行、菩提涅槃は、同時の發心修行、菩提涅槃なるべし。佛道の身心は、草木瓦礫なり、風雨水火なり、これをめぐらして佛道ならしむるすなはち發心なり。虛空を撮得して、造塔造佛すべし、谿水を掬留して、造佛造塔すべし、これ發阿耨多羅三藐三菩提なり、一發菩提心を百千萬發するなり、修證もまたかくのごとし。しかあるに發心は一發にしてさらに發心せず、修行は無量なり、證果は一證なりとのみきくは、佛法をきくにあらず、佛法をしれるにあらず、佛法にあふにあらず。千億發の發心は、さだめて一發心の發なり、千億人の發心は、一發心の發なり。一發心は、千億の發心なり。修證轉法もまたかくのごとし。艸木等にあらずば、いかでか身心あらん、身心にあらずば、いかでか艸木あらん。艸木にあらずば、艸木あらざるがゆゑにかくのごとし。坐禪辨道、これ發菩提心なり。發心は一異にあらず、坐禪は一異にあらず、再三にあらず處分にあらず、頭頭みなかくのごとく參究すべし。艸木七寶をあつめて、造塔造佛する始終、それ有爲にして成道すべからずば、三十七品菩提分法も有爲なるべし、三界人天の身心を拈じて修行せん、ともに有爲なるべし、究竟地なるべからず。艸木瓦礫と四大五蘊と、おなじくこれ唯心なり、おなじくこれ實相なり。盡十方界、眞如佛性、おなじく法住法位なり。眞如佛性のなかに、いかでか艸木等あらん、艸木等いかでか眞如佛性ならざらん。諸法は有爲にあらず、無爲にあらず、實相なり。實相は如是實相なり、如是は而今の身心なり。この身心をもて發心すべし、水をふみ石をふむをきらふ

性觀」と。

【諸佛集三昧】一如の註に「三億祕密藏也佛集ニ其中ニ唯佛行處非ニ餘人ニ也」と。

【息慮凝心】息慮は無念無想、無心の狀態、凝心は心を一境に住せしむる也。小乘の坐禪

【重罪逆罪】重罪は十重禁を犯すなり逆罪は五逆罪を犯すなり。

【作是思惟時】法華方便品の文。

【佛言優婆塞】此文出處未考。

【栽松道者】五祖曾て栽松道者たりしこと已に出づ。

【臨濟は黃檗】臨濟栽松のこと行持卷に出づ。

【洞山には劉氏翁】傳燈十七洞山章に靑林師虔、先洞山に在りて松を栽う劉氏翁なる者あり師に從ひて偈を求む、師頌を作つて曰く、長長三尺餘、鬱鬱覆ニ荒草一、不レ知何世人、得レ見ニ此松老一。

ことなかれ。ただ一莖艸を拈じて、丈六の金身を造作し、一微塵を拈じて、古佛の塔廟を建立する、これ發菩提心なるべし。見佛なり、聞佛なり、見法なり、聞法なり、作佛なり、行佛なり。

釋迦牟尼佛言、「優婆塞、優婆夷、善男子、善女人、以ニ妻子肉一供ニ養三寶一、以ニ自身肉一供ニ養三寶一、諸比丘既受ニ信施一、云何不レ修。」しかあればしりぬ、飲食、衣服、臥具、醫藥、僧房、田林等を三寶に供養するは、自身および妻子等の身肉皮骨髓を供養したてまつるなり。すでに三寶の功德海にいりぬ、すなはち一味なり、すでに一味なるがゆゑに三寶なり。三寶の功德、すでに自身および妻子の皮肉骨髓に現成する、精勤の辦道功夫なり、いま世尊の性相を擧して、佛道の皮肉骨髓を參取すべきなり、いまこの信施は發心なり、受者比丘、いかでか不修ならん。頭正尾正なるべきなり。これによりて一塵たちまちに發すれば、一心したがひて發するなり、一心はじめて發すれば、一空わづかに發するなり。おほよそ有覺無覺の發心するとき、はじめて一佛性を種得するなり。四大五蘊をめぐらして、誠心に修行すれば得道す、艸木牆壁をめぐらして誠心に修行せん得道すべし、四大五蘊と艸木牆壁と同參なるがゆゑなり、同性なるがゆゑなり、同心同命なるがゆゑなり、同身同機なるがゆゑなり。これによりて佛祖の會下、おほく拈艸木心の辦道なり、これ發菩提心の樣子なり。五祖は一時の栽松道者なり、臨濟は黃檗山の栽杉松の功夫あり。洞山には、劉氏翁あり栽松す、かれこれ松柏の操節を拈じて、佛祖の眼睛を抉出するなり、これ弄活眼睛

のちから、開明眼睛なることを見成するなり。造塔造佛等は、弄眼睛なり、喫發心なり、使發心なり、造塔等の眼睛をえざるがごときは、佛祖の成道あらざるなり。造佛の眼睛をえてのちに、作佛祖するなり。造塔等はつひに塵土に化す、眞實の功德にあらず。無生の修練は、堅牢なり、塵埃に染汙せられずといふは、佛語にあらず、塔婆もし塵土に化するなり、無生もし塵土に化せずは、塔婆また塵土に化すべからず、這裏是甚麼處在、說ニ行爲ニ說ニ無爲ニなり。

經曰、「菩薩於ニ生死ニ、最初發心時、一向求ニ菩提ニ、堅固不ㇾ可ㇾ動、彼一念功德、深廣無ニ涯際ニ、如來分別說、窮劫不ㇾ能ㇾ盡」。あきらかにしるべし生死を拈來して發心する、これ一向求菩提なり。彼一念は、一艸一木とおなじかるべし、一生一死なるがゆゑに。しかあれどもその功德の深も無涯際なり、廣も無涯際なり、窮劫を言語として、如來これを分別すとも盡期あるべからず。海かれてなほ底のこり、人は死すとも心のこるべきがゆゑに、不能盡なり。彼一念の深廣無涯際なるがごとく、一艸一木、一石一瓦の深廣も無涯際なり。一艸一石もし七尺八尺なれば、彼一念も七尺八尺なり、發心もまた七尺八尺なり。しかあればすなはち入於深山、思惟佛道は容易なるべし、造塔造佛は甚難なり、ともに精進無怠より成就すといへども、心を拈來すると心に拈來せらるると、はるかにことなるべし。かくのごとくの發菩提心つもりて、佛祖現成するなり。

爾時寬元二年甲辰二月十四日在ニ越州吉田縣吉峯精舍ニ示衆

【塵土に化す】賢愚因緣經に云く「譬如下立ニ七寶塔一高至中三十三天上、功德雖ニ最大一比ニ出家功德一百分之一不レ及、寶塔破壞而成ニ微塵一長年不レ見ニ其形一。」

【經曰菩薩】華嚴經賢首品の文。

【入於深山】法華方便品の語。

【寬元二年】祖師四十五歲、吉峰寺に於ける示衆。

正法眼藏發無上心　畢

正法眼藏如來全身

爾時釋迦牟尼佛、住二王舍城耆闍崛山一、告二藥王菩薩摩訶薩一言、藥王、在在處處、若說、若讀、若誦、若書、若經卷所住之處、皆應下起二七寶塔一、極令中高廣嚴飾上、不レ須三復安二舍利一、所以者何、此中已有二如來全身一、此塔應下以二一切華、香、瓔珞、繒蓋、幢旛、妓樂、歌頌一供養、恭敬、尊重、讚歎上、若有レ人得レ見二此塔一、禮拜供養、當レ知是等皆近二阿耨多羅三藐三菩提一。

いはゆる經卷は、若說これなり、若讀これなり、若誦これなり、若書これなり。經卷は、實相これなり。應起七寶塔は、實相を塔といふ、極令の高廣、その量かならず實相量なり。此中已有如來全身は、經卷これ全身なり。しかあれば若說、若讀、若誦、若書等、これ如來全身なり。一切の華、香、瓔珞、繒蓋、幢、旛、妓樂、歌頌をもて供養恭敬尊重讚歎すべし。あるひは天華、天香、天繒蓋等なり、みなこれ實相なり。あるひは人中上華、上香、名衣、名服なり、これらみな實相なり。供養恭敬、これ實相なり。起塔すべし。不須復安舍利といふ、しりぬ經卷はこれ如來舍利なり、如來全身なりといふことを、まさしく佛口の金言、これを見聞するよりもすぎたる大功德あるべからず。いそぎて功をつみ、德をかさぬべし。もし人ありてこの塔を禮拜供養するは、まさにしる

【如來全身】法華經法師品の此中已有如來全身の語に出づ。如來全身の佛法を宣說し、顯示す。觸處如來身、盡界大經卷、明歷歷、露堂堂、細入無間、大絕方所、逃れんと欲して逃るることを能はざるの如來全身なり。

【爾時釋迦牟尼佛】以上の文法華經法師品に出づ。

【七寶塔】梵音スツーパ(Stupa)方墳、高顯、廟、大聚等と譯す。如來の舍利を藏めんため、供養のため、報恩のため、靈域を表はすために建つるもの、七寶は金銀瑠璃硨磲碼碯珊瑚琥珀眞珠。

【舍利】梵音シヤリーラ(Śarīra)身骨、體、骨分、佛又は聖者の遺骨也。

智論に碎骨はこれ生身の舍利、經卷はこれ法身の舍利なりといへり。

【闍維】茶毘、闍毗ともいふ、巴利語のヂユハーペータ(Jhapeta)の音譯、燃燒といふ意、死骸を火葬すること。

【我本行菩薩道】法華壽量品の文。

べし皆近阿耨多羅三藐三菩提なり、この塔をみんとき、この塔を誠心に禮拜供養すべし、すなはち阿耨多羅三藐三菩提に皆近ならん。近は、さりて近なるにあらず、きたりて近なるにあらず、阿耨多羅三藐三菩提を皆近といふなり。而今われら受持、讀誦、解說、書寫をみる、得見此塔なりよろこぶべし。皆近阿耨多羅三藐三菩提なり、しかあれば經卷は、如來全身なり、經卷を禮拜するは、如來を禮拜したてまつるなり、經卷にあひたてまつれるは、如來にまみえたてまつるなり、經卷は如來舍利なり、かくのごとくなるゆゑに舍利は此經なるべし、たとひ經卷はこれ舍利なりとしるといふとも舍利はこれ經卷なりとしらずば、いまだ佛道にあらず、而今の諸法實相は經卷なり。人間、天上、海中、虛空、此土、他界、みなこれ實相なり、經卷なり、舍利なり、舍利を受持、讀誦、解說、書寫して、開悟すべし。これ或從經卷なり、古佛舍利あり、今佛舍利あり、辟支佛舍利あり、轉輪王舍利あり、師子舍利あり、あるひは木佛舍利あり、繪佛舍利あり、あるひは人舍利あり。現在大宋國、諸代の佛祖、いきたるとき、舍利を現出せしむるあり、闍維ののち、舍利を生ぜるおほくあり、これみな經卷なり。

釋迦牟尼佛告二大衆一言、『我本行二菩薩道一、所レ成壽命、今猶未レ盡、復倍二上數一』いま八斛四斗の舍利は、なほこれ佛壽なり、本行菩薩道の壽命は、三千大千世界のみにあらず、そこばくなるべし、これ如來全身なり、これ經卷なり。

智積菩薩言、『我見二釋迦如來一、於二無量劫一、難行苦行、積功累德、求二菩薩道一、未二曾止息一、

【八斛四斗】釋迦譜に云く爾時金棺從座而擧高七多羅樹往反空中化火光三昧須臾灰生得舍利八斛四斗と。

【智積菩薩言】法華提婆達多品の文。

【寛元二年】祖師四十五歳、吉峰寺に於ける示衆。

【三昧王三昧】大論に云く三昧王三昧とは一切諸の三昧皆其中に入る、故に三昧王三昧と名く、譬へば閻浮提の衆川萬流皆大海に入るが如し、亦一切の人民の皆國王に屬するが如しと、謂ゆる佛佛の要機、祖祖の機要、高うして上無く廣らして涯り無きもの、佛祖の居

觀三千大千世界、乃至無有如芥子許、非是菩薩捨身命處、爲衆生故、然後乃得成菩薩道。」はかりしりぬこの三千大千世界は、赤心一片なり、虚空一隻なり、如來全身なり。捨未捨にかかはるべからず、舍利は佛前佛後にあらず、佛とたらべるにあらず。無量劫の難行苦行は、佛胎佛腹の活計消息なり、佛皮肉骨髓なり。すでに未曾止息といふ、佛にいたりても、いよいよ精進なり、大千界に化しても、なほすすむなり、全身の活計かくのごとし。

爾時寛元二年甲辰二月十五日在越州吉田縣吉峯精舍示衆

正法眼藏如來全身　畢

正法眼藏三昧王三昧

驀然として盡界を超越して、佛祖の屋裏に大尊貴生なるは、結跏趺坐なり、外道魔黨の頂𩕳を踏飜して、佛祖の堂奥に箇中人なることは、結跏趺坐なり、佛祖の極之極を超越するは、ただこの一法なり、このゆゑに佛祖これをいとなみて、さらに餘務あらず。まさにしるべし坐の盡界と餘の盡界とははるかにことなり、この道理をあきらめて、佛祖の發心修行菩提涅槃を辨肯するなり、正當坐時は、盡界それ竪なるか、横なるかと參究すべし。正當坐時、その坐それいかん、飜筋斗なるか、活鱍鱍地なるか、思量か、不思量か、作か、

裏に大尊貴生なるもの、唯是れ三昧王三昧なり。

【佛告大衆言若結】大論第七ノ偈。

【佛言以是故結跏】前文の續き。

無作か、坐裏に坐すや、身心裏に坐すや、坐裏身心裏等を脱落して坐すや、恁麼の千端萬端の參究あるべきなり。身の結跏趺坐すべし、心の結跏趺坐すべし、身心脱落の結跏趺坐すべし。

先師古佛云、參禪者、身心脱落也、祇管打坐始得、不レ要二燒香禮拜念佛修懺看經一。あきらかに佛祖の眼睛を抉出しきたり、佛祖の眼睛裏に打坐すること、四五百年よりこのかたは、ただ先師ひとりなり、震旦國に齊肩すくなし。打坐の佛法なること、佛法は打坐なることをあきらめたるまれなり。たとひ打坐を佛法と體解すといふとも、打坐を打坐としれるいまだあらず、いはんや佛法を佛法と保任するあらんや。しかあればすなはち心の打坐あり、身の打坐とおなじからず。身の打坐あり、心の打坐とおなじからず、身心脱落の打坐あり、身心脱落の打坐とおなじからず。既得恁麼ならん、佛祖の行解相應なり。この念想觀を保任すべし、この心意識を參究すべし。

釋迦牟尼佛告二大衆一言、若結二跏趺坐一、身心證二三昧一、威德衆恭敬、如三日照二世界一、除二睡懶覆心一、身輕不二疲懈一、覺悟亦輕便、安坐如二龍蟠一、見レ畫二跏趺坐一、魔王亦驚怖、何況證道人、安坐不二傾動一。しかあれば跏趺坐を畫圖せるを見聞するを、魔王なほおどろきうれへおそるるなり。いはんや眞箇に跏趺坐せん、その功德はかりつくすべからず、しかあればすなはちよのつねに打坐する福德無量なり。

釋迦牟尼佛告二大衆一言、以二是故一、結跏趺坐、復次如來世尊、教三諸弟子應二如レ是坐一、或外

【五十小劫等】法華從地涌出品に「五十小劫、佛神力故、令ニ諸大衆謂ヒ如シ半日ノ」、又序品に「六十小劫不レ起ニ于座ヲ、時會聽者亦坐ニ一處ニ、六十小劫身心不レ動、聽ニ佛所說ヲ、謂フ如シト食頃ノ」と。

【九白】印度は一年を以て一白と爲す、九白は九年なり。

【把尾收頭】頭は始、尾は終なり、終始なり、始の始なく終の終なきを以て尾を把り頭を收むといふ。

道輩、或常翹レ足求レ道、或常立求レ道、或荷レ足求レ道、如レ是狂狷心沒ニ邪海ニ、形不ニ安穩ナラ、以レ是故、佛敎ニ弟子結跏趺坐直心坐ヲ。何以故、直身心易レ正故、其身直坐、則心不レ懶、端心正意、繫念在前、若心馳散、若身傾動、攝レ之令レ還、欲レ證ニ三昧ヲ、欲レ入ニ三昧ニ、種種馳念、種種散亂、皆悉攝レ之、如レ此修習證ニ入三昧王三昧ニ。』あきらかにしりぬ結跏趺坐、これ三昧王三昧なり、これ證入なり。一切の三昧は、この王三昧の眷屬なり。結跏趺坐は、直身なり、直心なり、直身心なり、直佛祖なり、直修證なり、直頂𩕳なり、直命脈なり。いま人間の皮肉骨髓を結跏して、三昧中王三昧を結跏するなり。世尊つねに結跏趺坐を保任しまします、諸弟子にも結跏趺坐を正傳しまします、人天にも結跏趺坐ををしへましますなり。七佛正傳の心印すなはちこれなり。釋迦牟尼佛、菩提樹下に跏趺坐しましまして、五十小劫を經歷し、六十劫を經歷し、無量劫を經歷しまします。あるひは三七日結跏趺坐、あるひは時間の跏坐、これ轉妙法輪なり、これ一代の佛化なり。さらに虧缺せず。これすなはち黃卷朱軸なり、ほとけのほとけをみる、この時節なり。これ衆生成佛の正當恁麼時なり。初祖菩提達磨尊者、西來のはじめより、嵩嶽少室峯少林寺にして面壁跏趺坐禪のあひだ、九白を經歷せり、それより頂𩕳眼睛、いまに震旦國に遍界せり、初祖の命脈ただ結跏趺坐のみなり、初祖西來よりさきは、東土の衆生、いまだかつて結跏趺坐をしらざりき、祖師西來よりのちこれをしれり。しかあればすなはち一生萬生、把尾收頭、不離叢林、晝夜祇管跏趺坐して、餘務あらざる三昧王三昧なり。

【寛元二年】祖齡四十五歲、吉峰寺に於ける示衆。

【三十七品菩提分法】四念住、四正斷、四神足、五根、五力、七覺支、八正道之を三十七品菩提分法とす。一發菩提心を分つて三十七品と作す。品は猶し類の如し。分は支分の義。小乘大乘の詮疏甚だ多しと雖も永平高祖は三十七道品を以て古佛の公案也と拈提し因圓果滿の諸佛諸祖也と喚作して縱横說盡す古佛曾て說かず諸祖未だ言はざるの深義遠理を開闡せり。

【古佛の公案】三世十方佛の公案にして大小乘の法にあらず。三世佛歷代祖の正法眼藏也。

【教行證】教理、

爾時寛元二年甲辰二月十五日在越宇吉峯精舍示衆

正法眼藏三昧王三昧　畢

正法眼藏三十七品菩提分法

古佛の公案あり、いはゆる三十七品菩提分法の教行證なり。昇降階級の葛藤する、さらに葛藤公案なり、喚作諸佛なり。喚作諸祖なり。

四念住（四念處とも稱す）

一者觀身不淨、二者觀受是苦、三者觀心無常、四者觀法無我。觀身不淨といふは、いまの觀身の一袋皮は、盡十方界なり。これ眞實體なるがゆゑに、活路に跳跳する觀身不淨なり。不跳ならんは觀不得ならん、若無身ならん、行取不得ならん、說取不得ならん、觀取不得ならん。すでに觀得の現成あり、しるべし跳跳得なり、いはゆる觀得は毎日の行履掃地掃牀なり。第幾月を擧して掃地し、正是第二月を擧して、掃地掃牀するゆゑに、盡大地の恁麼なり。觀身は身觀なり、身觀にて餘物觀にあらず、正當觀は卓卓來なり。身觀の現成するとき、心觀すべて摸未着なり、不現成なり。しかあるゆゑに金剛定なり、首楞嚴定なり、ともに觀身不淨なり。おほよそ夜半見明星の道理を觀身不淨といふなり、淨穢の比論にあらず、有身是不淨なり、現身便不淨なり。かくのごとくの參學は、魔作佛のと

修行、證果の三法即ち一始一等なるなり。

【掃地掃牀第幾月】雲巖掃地次、溈山云太區區生、雲巖云須知有不區區者、山云恁麼即有第二月也、巖豎起掃箒云這箇第幾月、溈山低頭去、玄沙聞云正是第二月と、傳燈十四雲巖章に出づ。

【金剛定、首楞嚴定】北本涅槃經師子吼品に首楞嚴三昧者有五種名、一首楞嚴三昧、二般若波羅蜜、三金剛三昧、四師子吼三昧、五佛性、隨其所作處得名と。

【孃生袈裟】商那和修尊者母胎より生れながら衣を纏へりといふ。

きは、魔を拈じて降魔し作佛す。佛作佛のときは、佛を拈じて圖佛し作佛す。人作佛のときは、人を拈じて調人し作佛するなり。まさに拈處に通路ある道理を參究すべし。たとへば浣衣の法のごとし、水は衣に染汙せられ、衣は水に浸却せらる。この水を用著して浣洗し、この水を換却して浣洗すといへども、なほこれ水をもちゐる、なほこれ衣をあらふなり。一番洗、兩番洗に、見淨ならざれば、休歇に滯累することなかれ。水盡更用水なり、衣淨浣衣なり。水は、諸類の水ともにもちゐる、浣衣によろし、水濁知有魚の道理を參究するなり。衣は諸類の衣ともに浣洗あり、恁麼功夫して、浣衣公案現成なり。しかあれども淨潔を見取するなり。この宗旨、かならずしも衣を水に浸却するを本期とせず、水の衣に染却するを本期とせず、染汙水をもちゐて衣を浣洗するに、浣衣の本期あり。さらに火風土水空を用著して、衣をあらひ物をあらふ法あり、地水火風空をもちゐて、地水火風空をあらひきよむる法あり。いまの觀身不淨の宗旨またかくのごとし。これによりて盡身盡觀盡不淨、すなはち孃生袈裟なり。袈裟もし孃生袈裟にあらざれは、佛祖いまだもちゐざるなり、ひとり商那和修のみならんや。この道理、よくよくこころをとめて參學究盡すべし。」觀受是苦といふは、苦これ受なり、自受にあらず、他受にあらず、有受にあらず、無受にあらず、生身受なり、生身苦なり、甜熟瓜を苦胡蘆に換却するをいふ、これ皮肉骨髓ににがきなり、有心無心等ににがきなり。これ一上の神通修證なり、徹蒂より跳出し、連根より跳出する神通なり。このゆゑに將謂、衆生苦更有苦衆生なり。衆生は自にあら

【永嘉大師云】永嘉の證道歌の語。

【佛曰一切諸佛】佛説出處未考。

ず衆生は他にあらず、更有苦衆生、つひに瞞他不得なり。甜瓜徹蔕甜、苦瓠連根苦なりといへども、苦これたやすく摸索著すべきにあらず、自己に問著すべし、作麼生是苦。」觀心無常は、曹谿古佛いはく、『無常即佛性也。』しかあれば諸類の所解する無常、ともに佛性なり。永嘉眞覺大師云、『諸行無常一切空、即是如來大圓覺。』いまの觀心無常、すなはち如來大圓覺なり、大圓覺如來なり。心もし不觀ならんとするにも、隨他去するがゆゑに、心もしあれば、觀もあるなり。おほよそ無上菩提にいたり、無上正等覺の現成、すなはち無常なり、觀心なり。心かならずしも常にあらず、離四句絶百非なるがゆゑに、牆壁瓦礫石頭大小、これ心なり、これ無常なり、すなはち觀なり。」觀法無我は、長者長法身、短者短法身なり。現成活計なるがゆゑに無我なり、狗子佛性無なり、狗子佛性有なり、一切衆生無佛性なり、一切佛性無衆生なり、一切諸佛無衆生なり、一切諸佛無諸佛なり、一切佛性無佛性なり、一切衆生無衆生なり。かくのごとくなるがゆゑに一切法無一切法を、觀法無我と參學するなり。しるべし跳出渾身自葛藤なり。」釋迦牟尼佛曰、『一切諸佛菩薩、長安此法爲聖胎也。』しかあれば諸佛菩薩、ともにこの四念住を聖胎とせり。しるべし等覺の聖胎なり、妙覺の聖胎なり。すでに一切諸佛菩薩となり、妙覺にあらざらん諸佛もこれを聖胎とせり。等覺よりさき、妙覺よりほかに超出せる菩薩、またこの四念住を聖胎とするなり、まことに諸佛諸祖の皮肉骨髓、ただ四念住のみなり。

四正斷　あるひは四正勤と稱す

【彌天の積惡】今惡なり、惡の外に物なきが故に。是れ即ち不生惡なり知取し見取する能はざるが故に。

一者未生惡令不生、二者已生惡令滅、三者未生善令生、四者已生善令增長。未生惡令不生といふは、惡の稱かならずしもさだまれる形段なし、ただ地にしたがひ界によりて立稱しきたれり。しかあれども未性をして不生ならしむるを、佛法と稱し正傳しきたれり。外道の解には、これ未萠我を根本とせりといふ、佛法にはかくのごとくなるべからず。しばらく問取すべし、惡未生のとき、いづれのところにかある。もし未來にありといはば、ながくこれ斷滅見の外道なり、もし未來きたりて現在となるといはば、佛法の談にあらず、三世混亂しぬべし。三世混亂せば、諸法混亂すべし、諸法混亂せば、實相混亂すべし、實相混亂せば、唯佛與佛混亂すべし。かるがゆゑに未來はのちに現在となるといはざるなり。さらに問取すべし。未生惡とは、なにを稱すべきぞ、たれかこれを知取見取せる。もし知取見取することあらば、未生時あり、非未生時あらん。もししかあらば未生法と稱すべからず、已滅の法と稱しつべし。外道および小乘聲聞等に學せずして、未生惡令不生の參學すべきなり。彌天の積惡、これを未稱惡と稱す。不生惡なり、不生といふは、昨日說定法、今日說不定法なり。已生惡令滅といふは、已生は盡生なり、盡生なりとは半生なり、半生なりとは此生なり。此生は被生礙なり、跳出生之頂𩕳なり。これをして滅ならしむといふは、調達生身入獄なり、調達生身得授記なり、生身入驢胎なり、生身作佛なり。かくのごとくの道理を拈來して、令滅の宗旨を參學すべきなり、滅は滅を跳出透脫するを滅とす。未生善令生といふは、父母未生前の面目參飽なり。朕兆已前の明擧なり、

【谿深杓柄長】傳燈雪峰の傳に出づ。
【只爲有所以來】藥山因僧問、祖師未ニ西來一時還有ニ祖師意一也無、師云有、既有又來作什麼、師云只爲ニ有所以來と。傳燈十四藥山章に出づ。
【圖睡快】石頭草庵歌に吾結草庵無寶貝、飯了從容圖睡快と。
【鳥飛空】宏智坐禪箴の語に水清徹底兮魚行遲遲、空濶莫涯兮鳥飛杳杳と。
【佛言未運而到】經名未詳、般若か。
【ときことときり】稜角尖尖光似錐、荷葉團團團如鏡の句より造語す。

威音以前の會取なり。已生善令増長は、しるべし已生善令生といはず、令増長するなり。自見ニ明星ー訖、更教ニ他見ニ明星ーなり。眼睛作明星なり。胡亂後三十年不曾闕鹽醋なり、たとへば増長するゆゑに已生するなり。このゆゑに谿深杓柄長なり、只爲レ有所以來なり。

四神足

一者欲神足、二者心神足、三者進神足、四者思惟神足。欲神足は、圖作佛の身心なり、圖睡快たり、因我惧備なり。おほよそ欲神足、さらに身心の因縁にあらざるなり、莫測空の鳥飛なり、徹底水の魚行なり。心神足は、牀壁瓦礫なり、山河大地なり、條條の三界なり、赤赤の椅子竹木なり。盡使得なるがゆゑに、佛祖心あり、凡聖心あり、艸木心あり、變化心あり。盡心は心神足なり。進神足は百尺竿頭驀直歩なり。いづれのところかこれ百尺竿頭、いはゆる不驀直不得なり、驀直一歩はなきにあらず、道裏是甚處在説レ進説レ退なり。正當進神足時、盡十方界、隨神足到也。隨神足至也。思惟神足は、一切佛祖、業識茫茫、無ニ本可一據なり。身思惟あり、心思惟あり、識思惟あり、艸鞋思惟あり、空劫已前自己思惟あり、これをまた四如意足といふ、無躊躇なり。釋迦牟尼佛言、未レ運而到、名ニ如意足一。しかあればすなはちときことときりのくちのごとし、方なることのみのはのごとし。

五根

【佛言我常勤】法華學記品の語。

一者信根、二者精進根、三者念根、四者定根、五者慧根。信根は、しるべし自己にあらず、他己にあらず、自己の强爲にあらず、自己の結構にあらず、他の牽挽にあらず、自立の規矩にあらざるゆゑに、東西密相付なり、渾身似信を信と稱するなり。かならず佛果位と隨他去し隨自去す。佛果位にあらざれば、信現成あらず。このゆゑにいはく、「佛法大海信爲能入」なり。およそ信現成のところは、佛祖現成のところなり。」精進根は省來祇管打坐なり、休也休不得なり、休得更休得なり、太區區生なり、不區區者なり、太區不區一月二月なり。」釋迦牟尼佛言、「我常勤精進、是故我已得成阿耨多羅三藐三菩提。」いはゆる常勤は盡過現當來、頭正尾正なり、我常勤精進を、我已得成菩提とせり。我已得成阿耨菩提のゆゑに、我常勤精進なり、しかあらずばいかでか我已得ならん。論師經師この宗旨を見聞すべからず、いはんや參學せるあらんや。」念根は、枯木の赤肉團なり、赤肉團を枯木といふ。枯木は念根なり、摸索當の自己これ念なり、有身のときの念あり、無心のときも、念あり、有心の念あり、無身の念あり。盡大地人の命根、これを念根とせり。盡十方佛の命根、これは念根なり。一念に多人あり、一人に多念あり、しかあれども有念人あり、無念人あり、人にかならずしも念あるにあらず、念かならずしも人にかかれるにあらず、しかありといへどもこの念根よく持して究盡の功德あり。」定根は、揩取眉毛なり、このゆゑに不昧因果なり、不落因果なり。ここをもて入驢胎入馬胎なり、石の玉をつめるがごとし、全石全玉なりといふべからず、地の山をいただけるがごとし、盡地盡山といふ

べからず、しかあれども頂𩕳より跳出し跳入す。」慧根は、三世諸佛不知有なり、理奴白牯却知有なり、貧ノ甚ニ知ル此ヲといふべからず、いはれざるなり、鼻孔有消息なり、拳頭有指尖なり、髓々髓を保任す、井は井に相見す、おほよそ根嗣根なり。

五力

一者信力、二者精進力、三者念力、四者定力、五者慧力。信力は、被自瞞無廻避處なり、被他喚必廻頭なり、從生至老只是這個なり、七顛也放行なり、八倒也拈來なり、このゆゑに信如水精珠なり、傳法傳衣を信とす、傳佛傳祖なり。」精進力は、說取行不得底なり、行取說不得底なり、しかあればすなはち說得一寸不如說得一寸なり、行得一句不如行得一句なり、力裏得力これ精進力なり。」念力は、拽人鼻孔太煞人なり、このゆゑに鼻孔拽人なり、拋玉引玉なり、拋瓢引瓢なり、さらに未拋也三十棒なり、天下人用著未吝なり。」定力は、あるひは如三子得ニ其母一なり、あるひは如三母得ニ其子一なり、あるひは如三子得ニ其子一なり、あるひは如三母得ニ其母一なり。しかあれども以頭換面にあらず、以金買金にあらず、唱而彌高なるのみなり。」慧力は、年代深遠なり、如船遇度なり、かるがゆゑにふるくいはく、『如渡得船。』いふところは渡必是船なり、渡の渡を罣礙せざるを船といふ、春自消　氷なり。

七等覺支

一者擇法覺支、二者精進覺支、三者喜覺支、四者除覺支、五者捨覺支、六者定覺支、七

【說得一寸不如】傳燈九大慧寶中の傳に示衆云、說ニ得一丈ヲ不ノ如ノ行ニ取ル一尺ヲ、說ニ得一尺ヲ不ノ如ノ行ニ取ル一寸ヲ。洞山云、說ニ取ス行不得底ヲ、行ニ取ス說不得底ヲと。

【栴檀林裏】禪苑八に獅子窟中悉爲獅子、栴檀林下一是栴檀の語あり。

【作是思惟時】法華方便品の語。

者念覺支。擇法覺支は、毫釐有レ差天地懸隔なり。このゆゑに至道不二難易一、唯要二自揀擇一のみなり。精進覺支は、不曾擾奪行市なり。自買自賣ともに定價あり、知貴あり。屈己推人に相似なりといへども、通身撲不碎なり。一轉語を自賣することいまだやまざるに。一轉心を自買する商客に相逢す。驢事未了、馬事到來なり。喜覺支は、老婆心切血滴滴なり。大悲千手眼、遮莫太多端、臘雪梅華先漏泄、來春消息太家寒なり。しかもかくのごとくなりといへども、活鱍鱍笑呵呵なり。除覺支はもしみづからがなかにありては、みづからと群せず、他のなかにありては他と群せず。我得儞不得なり。灼然道著異類中行なり。捨覺支は、設使將來他亦不レ受なり。唐人赤脚學二唐歩一、南海波斯求二象牙一なり。定覺支は、機先保二護機先眼一なり、自家鼻孔自家穿なり、自家把索自家牽なり。しかもかくのごとくなりといへども、さらに牧得一頭水牯牛なり。念覺支は、露柱歩空行なり。このゆゑに口似レ椎如レ眉なりといふとも、なほこれ栴檀林裏爇二栴檀一、師子窟中師子吼なり。

八正道支（また八聖道とも稱す）

一者正見道支、二者正思惟道支、三者正語道支、四者正業道支、五者正命道支、六者正精進道支、七者正念道支、八者正定道支。正見道支は、眼睛裏藏身なり、しかあれども身先須具身先眼なり。向前の堂堂成見なり親曾見なり。おほよそ眼裏藏身せざれば、佛祖にあらざるなり。正思惟道支は、作是思惟時、十方佛皆現なり。しかあれば十方現、諸佛現、これ作是思惟時なり、作是思惟時は、自己にあらず他

己をこえたりといへども、而今も思惟是事已、卽趣波羅奈なり。思惟の處在は、波羅奈なり。古佛いはく、「思量箇不思量底、不思量底如何思量、非思量。」これ正思量正思惟なり、破蒲團これ正思惟なり。「正語道支は、啞子自己不啞子なり。諸人中の啞子は、未道得なり。啞子界の諸人は、啞子にあらず、不棄諸聖なり、不重己靈なり、口是掛壁の參究なり、一切口掛一切壁の參究なり、一切口一切掛壁なり。」正業道支は、出家修道なり、入山取證なり。釋迦牟尼佛言、「三十七品是僧業。」僧業は大乘にあらず、小乘にあらず。僧は佛僧、菩薩僧、聲聞僧等あり。いまだ出家せざるものの佛法の正業を嗣續せることあらず、佛法の大道を正傳せることあらず。在家わづかに近事男女の學道といへども、達道の先蹤なし。達道のとき、かならず出家するなり、出家に不堪ならんともがら、いかでか佛位を嗣續せん。しかあるに二三百年來のあひだ、大宋國に禪宗僧と稱するともがら、おほくいはく、「在家の學道と出家の學道とこれ一等なり」といふ。これただ在家人の屎尿を飲食とせんがために、狗子となれる類族なり。あるひは國王大臣にむかひていはく、「萬機の心はすなはち祖佛の心なり、さらに別心あらず」といふ。王臣いまだ正說正法をわきまへず、大悅して師號等をたまふ、かくのごとくの道ある諸僧は調達なり、啼唾をくらはんがために、かくのごとくの小兒の狂話あり、啼哭といふべし。七佛の眷屬にあらず、魔黨畜生なり。いまだ身心學道をしらず參學せず、身心出家をしらず、王臣の法政にくらく、佛祖の大道をゆめにもみざるによりてかくのごとし。維摩居士の佛出世時にあふし、道未盡の法おほし、學

【古佛いはく】藥山弘導大師の語。
【不棄諸聖不重己靈】石頭無際大師の語。
【佛言三十七品】增一阿含の文か。
【近事男女】優婆塞優婆夷、淸信士淸信女なり。
【萬機の心卽ち祖佛の心】古尊宿錄奏對錄に佛果圜悟、宋高宗皇帝に對して陛下仁孝以治天下、率土生靈咸被仁澤、雖草木昆蟲各得其處、是佛祖所傳之心也、此心外若別有心、非佛祖之心矣、帝大喜賜圜悟禪師之號とあるが如きを云ふ。
【調達】提婆達多なり、阿闍世王の啼唾を食ふ。
【維摩居士】居士にして未出家なりしを云ふ。

【龐蘊居士】　馬祖下の居士。
【李駙馬】名は遵勗、谷隱に謁して出家の事を問ふ。
【楊文公】名は億、號は大年、首め廣慧璉に謁して道に入り後首山に見えて省あり。

未到すくなからず。龐蘊居士が祖席に參歷せしめ、藥山の堂奧をゆるされず、江西におよばず、ただわづかに參學の名をぬすめりといへども、參學の實あらざるなり。自餘の李駙馬、楊文公等、おのおの參飽とおもふといへども、乳餅いまだ喫せず、いはんや畫餅を喫せんや、いはんや喫佛祖粥飯せんや、未有盋盂なり。あはれむべし一生の皮袋いたづらなることを、普勸すらくは盡十方の天衆生、人衆生、龍衆生、諸衆生、はるかに如來の法を慕古して、いそぎて出家修道し、佛位祖位を嗣續すべし。而今の禪師等が未達の道をきくことなかれ、身をしらず心をしらざるがゆゑに、しかのごとくいふなり。あるひはまたすべて衆生をあはれむこころなく、佛法をまもるおもひなく、ただひとすぢに在家人の屎糞をくらはんとして、惡狗となれる、人面狗人皮狗かくのごとくいふなり、同坐すべからず、同語すべからず、同依正すべからず。かれらはすでに生身墮畜生なり、出家人もし屎糞ゆたかならば、出家人すぐれたりといはまし。出家人の屎糞、この畜生におよばざるがゆゑに、かくのごとく道取するなり。在家心と、出家心と一等なりといふこと、證據といひ、道理といひ、五千餘軸の文にみえず、二千餘年のあとなし、五十代四十餘世の佛祖、いまだその道取なし、たとひ破戒無戒の比丘となりて、無法無慧なりといふとも、在家の有智持戒にはすたるべきなり。僧業これ智なり、悟なり、道なり、法なるがゆゑに、在家たとひ隨分の善根功德あれども、身心の善根功德おろそかなり。一代の化儀、すべて在家得道せるものなし、これ在家いまだ學佛道の道場ならざるゆゑなり、遮障おほきゆゑなり。萬

【六群比丘六群比尼】六群比丘は佛在世時に結黨して諸非威儀事を成す。諸六群比丘尼は欲心熾盛、瞋恚又呪咀を作す、各六群あり。

【十八群比丘】四分律に舍衞城中有二長者一、欲レ請二衆僧飯食一、時有二十七群比丘一、取二僧坐具一、在二露地一云云。又世尊問二十七群比丘一云云の十七群あり、十八群は十七群の誤なり。

機心と祖師心と一等なりと道取するともがらの身心をさぐるに、いまだ佛法の身心にあらず、佛祖の皮肉骨髓つたはれざらん、あはれむべし佛正法にあひながら畜生となれることを、かのごとくなるによりて、曹谿古佛たちまちに辭親尋師す、これ正業なり。金剛經をきゝて發心せざりしときは、樵夫として家にあり、金剛經をきゝて、佛法の薰力あるときは、重擔を放下して出家す。しるべし身心もし佛法あるときは、在家にとゞまることあたはずといふことを、諸佛祖みなかくのごとし、出家すべからずといふともがらは、造逆よりもおもき罪條なり、調達よりも猛惡なりといふべし。六群比丘、六群尼、十八群比丘等よりおもしとしりて、共語すべからず。一生の壽命いくばくならず、かくのごとくの魔子畜生等と共語すべき光陰なし。いはんやこの人身は先世に佛法を見聞せし種子よりうけたり、公界の調度なるがごとし、魔族となすべきにあらず、魔族とともならしむべきにあらず、佛祖の深恩をわすれず、法乳の德を保護して、惡狗の吽吠をきくことなかれ、惡狗と同坐同食することなかれ。嵩山高祖古佛、はるかに西天の佛國をはなれて、邊邦の神丹に西來するとき、佛祖の正法まのあたりつたはれしなり。これ出家得道にあらずば、かくのごとくなるべからず、祖師西來已前は、東地の衆生人天、いまだかつて正法を見聞せず。しかあればしるべし正法正傳たゞこれ出家の功德なり、大師釋尊かたじけなく父王の位をすてて嗣續せざることは、王位の貴ならざるにあらず、佛位の最貴なるを嗣續せんがためなり。佛位はこれ出家位なり、三界の天衆生人衆生ともに頂戴恭敬するくらゐなり。

【佛日出家受戒】經名未考。

梵王釋像の同坐するところにあらず、いはんや下界の諸人王諸龍王の同坐するくらゐあらんや、無上正等覺位なり。くらゐよく說法度生し、放光現瑞す。この出家位の諸業、これ正業なり、諸佛七佛の懷業なり。唯物與物にあらざれば、究盡せざるところなり。いまだ出家せざらんともがらは、すでに出家せるに奉覲給仕し頭頂敬禮し身命を抛捨して供養すべし。釋迦牟尼佛曰、「出家受戒、是佛種子也、已得度人。」しかあればすなはちしるべし得度といふは出家なり、未出家は沈淪にあり。かなしむべしおほよそ一代の佛說のなかに、出家の功德を讃歎せること、稱計すべからず。釋尊誠說し、諸佛證明す、出家人の破戒不修なるは得道す、在家人の得道いまだあらず。帝者の僧尼を禮拜するとき、僧尼答拜せず、諸天の出家人を拜するに、比丘比丘尼またく答拜せず、これ出家の功德すぐれたるゆゑなり。もし出家の比丘比丘尼に拜せられば、諸天の宮殿光明果報等たちまちに破壞墜墮すべきがゆゑにかくのごとし。おほよそ佛法東漸よりこのかた、出家人の得道は、稻麻竹葦のごとし、在家ながら得道せるもの一人もいまだあらず。すでに佛法その眼耳におよぶときは、いそぎて出家をいとなむ。はかりしりぬ在家は佛法の在家にあらず、しかあるに萬機の身心すなはち佛祖の身心なりといふやからは、いまだかつて佛法を見聞せざるなり。おのれが言語、なほ見聞せざる愚人なり、國賊なり。萬機の心をもて佛祖の心に同ずるを詮とするは、佛法のすぐれたるによりてしかいふを、帝者よろこぶ、しるべし佛法すぐれたりといふこと。萬機の心は假令おのづから佛祖の心に同ずとも、佛祖の身心おの

づから萬機の身心とならんとき、萬機の身心なるべからず。萬機心と佛祖心と一等なりといふ禪師等、すべて心法のゆきかた樣子をしらざるなり、いはんや佛祖心をゆめにもみることあらんや。おほよそ梵王、釋王、人王、龍王、鬼神王等おのおの三界の果報に著することなかれ、はやく出家受戒して諸佛諸祖の道を修習すべし、曠大劫の佛因ならん。みずや維摩老もし出家せましかば、維摩よりもすぐれたる維摩比丘をみん。今日はわづかに空生舍利子文殊彌勒等をみる、いまだ半維摩をみず、いはんや三四五の維摩をみんや。もし三四五の維摩をみずしらざれば、一維摩いまだみず、しらず、保任せざるなり。一維摩いまだ保任せざれば、維摩佛をみず、維摩佛をみざれば、維摩文殊、維摩彌勒、維摩普現、維摩舍利子等いまだあらざるなり。いはんや維摩山河大地、維摩艸木瓦礫、風雨水火、過去現在未來等あらんや。維摩いまだこれらの光明功德みえざることは、不出家のゆゑなり、維摩もし出家せば、これらの功德あるべきなり。當時唐朝宋朝の禪師等これらの宗旨に達せず、みだりに維摩を擧して、作得是とおもひ、道得是といふ。これらのともがら、あはれむべし。言教をしらず佛法にくらし。あるひはまたあまりさへは維摩と釋尊と、その道ひとしとおもひいへるおほし。これらまたいまだ佛法をしらず、祖道をしらず、維摩をもしらざるなり。かれらいはく、「維摩默然無言して諸菩薩にしめす、これ如來の無言爲人にひとし」といふ、これおほきに佛法をしらず、學道の力量なしといふべし。如來の有言、すでに自餘とことなり、無言もまた諸類とひとしかるべからず、しかあれば如來の一默と

維摩の一默と、相似の比論にすらおよぶべからず。言說はことなりとも、默然はひとしかるべしと憶想せるともがらの力量をさぐるには、佛邊人とするにもおよばざるなり。かなしむべしかれらいまだ聲色の見聞なし、いはんや跳聲色の光明あらんや、いはんや默の默を學すべしとだにもしらず、ありとだにもきかず。おほよそ諸類と諸類と、その動靜なほことなり、いかでか釋尊と諸類とおなじといひ、おなじからずと比論せん、これ佛祖の堂奥に參學せざるともがら、かくのごとくいふなり。あるひは邪人おほくおもはく、「言說動容はこれ假法なり、寂默凝然はこれ眞實なり。」かくのごとくいふまた佛法にあらず、梵天自在天等の經教を傳聞せるともがらの所計なり、佛法いかでか動靜にかかはらん、佛道に動靜ありや、動靜なしや、動靜を接すや、動靜に接せらるやと、審細に參學すべし、而今の晩學たゆむことなかれ。現在大宋國をみるに、佛祖の大道を參學せるともがら斷絶せるがごとし、兩三箇あるにあらず。維摩は是にして一默あり、いまは一默せざるは、維摩よりも劣なりとおもへるともがらのみあり。さらに佛法の活路なし、あるひはまた維摩の一默はすなはち世尊の一默なりとおもふともがらのみあり、さらに分別の光明あらざるなり。かくのごとくおもひいふともがら、すべていまだかつて佛法見聞の參學なしといふべし。大宋國人にあればとて佛法なるらんとおもふことなかれ、その道理あきらめやすかるべし。いはゆる正業は僧業なり、論師經師のしるところにあらず、僧業といふは雲堂裏の功夫なり、佛殿裏の禮拜なり、後架裏の洗面なり、乃至合掌問訊、燒香燒湯する、これ

【汾陽の七八衆】汾陽の善昭、首山省念の嗣。座下七八衆に過ぎず。

【聲聞持戒菩薩破戒】大寶積經九十に云く、汝今當知、有聲聞乘持清淨戒、於菩薩乘名破戒、有菩薩乘持清淨戒、於聲聞乘名大破戒云云。

正業なり。以頭換尾するのみにあらず、以頭換頭なり、以心換心なり、以佛換佛なり、以道換道なり、これすなはち正業道支なり。あやまりて佛法の商量すれば、眉鬚墮落し、面目破顔するなり。正命道支とは、早朝粥午時飯なり、在叢林弄精魂なり、曲木座上直指なり。老趙州の不滿二十衆、これ正命の現成なり、藥山の不滿十衆、これ正命の命脈なり、汾陽の七八衆、これ正命のかかれるところなり、もろもろの邪命をはなれたるがゆゑに。釋迦牟尼佛言、「諸聲聞人、未得正命。」しかあればすなはち聲聞の教行證、いまだ正命にあらざるなり。しかあるを近日庸流いはく、「聲聞菩薩を分別すべからず、その威儀戒律ともにもちゐるべし」といひて、小乘聲聞の法をもて大乘菩薩法の威儀進止を判ず。釋迦牟尼佛言、「聲聞持戒、菩薩破戒。」しかあれば聲聞の持戒とおもへる、もし菩薩戒に比望するがごときは、聲聞戒みな破戒なり、自餘の定慧もまたかくのごとし。たとひ不殺生等の相、おのづから聲聞と菩薩とあひにたりとも、かならず別なるべきなり、天地懸隔の論におよぶべからざるなり、いはんや佛佛祖祖正傳の宗旨と諸聲聞とひとしからんや。正命のみにあらず、清淨命あり、しかあればすなはち佛祖の參學するのみ、正命なるべし。論師等の見解、もちゐるべからず、未得正命なるがゆゑに、本分命にあらず。」正精進道支とは、抉出通身の行李なり、抉出通身打人面なり。倒騎佛殿打一帀、兩帀三四五帀なるがゆゑに、九九算來八十二なり、重報君の千萬條なり、換頭也十字縱橫なり、換面也縱橫十字なり、入室來上堂來なり、望州亭相見了也、烏石嶺相見了也、僧堂

前相見了也、佛傳裏相見了也。兩鏡相對して三枚影あるをいふ。」正念道支は、被白瞞の八九成なり、念よりさらに發智すると學するは、拾父逃逝なり。念中發智と學するは、纒縛之甚なり。無念はこれ正念といふは外道なり、また地水火風の精靈を念とすべからず、心意識の顚倒を念と稱せず、まさに汝得吾皮肉骨髓、すなはち正念道支なり。」正定道支とは、脫落佛祖なり。脫落正定なり、他是能舉なり、剖來頂顙作鼻孔なり、正法眼藏裏、拈優曇華なり、優曇華裏、有百千枚迦葉破顏微笑なり、活計ひさしくもちゐきたりて木杓破なり、このゆゑに落草六年、花開一夜なり、劫火洞然大千俱壞、隨他去なり。

三十七品菩提分法、すなはち佛祖の眼睛鼻孔、皮肉、骨髓、手足面目なり、佛祖一枚、これを三十七品菩提分法と參學しきたれり。しかあれども一千三百六十九品の公案現成なり、菩提分法なり、坐斷すべし脫落すべし。

爾時寬元二年甲辰二月二十四日在越宇吉峯精舍示衆

正法眼藏三十七品菩提分法　畢

正法眼藏轉法輪

先師天童古佛上堂擧、世尊道、一人發眞歸源、十方虛空、悉皆消殞。師拈云、

【一千三百六十九品】三十七品の各品各に三十七品を具す、故に乙の數を得。

【寬元二年】祖齡四十五歲吉峯寺に於ける示衆。

【轉法輪】轉輪は聖王邪黨を摧破するの義、涅槃經に諸佛世尊凡そ所說あり皆悉く名けて轉法輪と爲すと、

佛法の外道を摧破する亦之に類す。佛子たる者人に常に之を轉じて頓漸を摧き自他共に救度せさるべからず。

【天童上堂】世尊道下の十四字は楞嚴經卷九に出づ。淨祖天童に住する時の上堂語、永平廣錄に五祖等の拈提するを擧して永平の道處あり、本卷に同じ。

【佛性法泰】大溈山の佛性法泰禪師圜悟に嗣ぐ。

【大佛】大佛は大佛寺主にして道元禪師のこと。道は云はくなり。

【これを僞經と】楞嚴經の論は支那に起り寄制には傳はる。詳しくは南山法典事を看よ。

【神龍年中の譯】大唐神龍元年乙巳歲五年廿五日中天竺沙門般刺蜜帝、廣州の制止道場に於て譯す。

既是世尊所說、未免盡作奇特商量、天童則不然、一人發眞歸源、乞兒打破飯椀。五祖山法演和尚道、一人發眞歸源、十方虛空、築著磕著。佛性法泰和尚道、一人發眞歸源、十方虛空、只是十方虛空。夾山圜悟禪師克勤和尚道、一人發眞歸源、十方虛空、錦上添華。大佛道、一人發眞歸源、十方虛空、發眞歸源。いま擧するところの「一人發眞歸源、十方虛空、悉皆消殞」は、首楞嚴經のなかの道なり。この句、かつて數位の佛祖おなじく擧しきたれり。いまよりこの句まことに佛祖骨髓なり、佛祖眼睛なり。しかいふこころは、首楞嚴經一部十軸、あるいはこれを僞經といふ、あるいは僞經にあらずといふ、兩說すでに往往よりいまにいたれり。舊譯あり、新譯ありといへども、疑著するところ、神龍年中の譯をうたがふなり。しかあれどもいますでに五祖演和尚、佛性泰和尚、先師天童古佛、ともにこの句を擧しきたれり。ゆゑにこの句すでに佛祖の法輪に轉ぜられたり、佛祖法輪轉なり。このゆゑにこの句すでに佛祖を轉じ、この句すでに佛祖をとく。佛祖に轉ぜられ、佛祖を轉ずるがゆゑにたとひ僞經なりとも、佛祖もし轉擧しきたらば、眞箇の佛經祖經なり、親曾の佛祖法輪なり。たとひ瓦礫なりとも、たとひ黃葉なりとも、たとひ優曇華なりとも、たとひ金襴衣なりとも、佛祖すでに拈來すれば佛法輪なり。佛正法眼藏なり。しるべし衆生もし超出成正覺すれば佛祖なり、佛祖の師資なり、佛祖の皮肉骨髓なり。さらに從來の兄弟衆生を兄弟とせず、佛祖これ兄弟なるがごとく、十軸の文句たとひ僞なりとも、而今の句は超出の句なり。佛句祖句なり、餘文餘句に群すべからず。

【寛元二年】祖師四十五歳、吉峰寺に於ける示衆。

【自證三昧】諸佛は自證三昧の相也。松も竹も燈籠も露柱も自證三昧の相也。自證は自然見にはあらず、或從經卷或從知識するを自證といふ。宗

たとひこの句は超越の句なりとも、一部の文句性相を佛言祖語に擬すべからず、參學眼睛とすべからず、而今の句を諸句に比論すべからざる道理おほかる、そのなかに一端を擧拈すべし。いはゆる轉法輪は、佛祖儀なり、佛祖いまだ不轉法輪あらず。その轉法輪の様子、あるひは聲色を擧拈して聲色を打失す、あるひは聲色を跳脱して轉法輪す、あるひは眼睛を抉出して轉法輪す、あるひは拳頭を擧起して轉法輪す。あるひは鼻孔をとり、あるひは虛空をとるところに、法輪自轉なり。而今の句をとる、いましこれ明星をとり、鼻孔をとり、桃華をとり、虛空をとるすなはちなり、佛祖をとり、法輪をとるすなはちなり、この宗旨あきらかに轉法輪なり、轉法輪といふは、功夫參學して、一生不離叢林なり、長連牀上に請益辦道するをいふ。

于時寛元二年甲辰二月二十七日在ニ越宇吉峰精舍一示衆

正法眼藏轉法輪　畢

正法眼藏自證三昧

諸佛七佛より、佛佛祖祖の正傳するところ、すなはち自證三昧なり。いはゆる或從知識、或從經卷なり、これはこれ佛祖の眼睛なり。このゆゑに、曹谿古佛問レ僧云、還假ニ修證一也無。僧云、修證不レ無、染汙即不レ得。しかあればしるべし、不染汙の修證、これ

鏡讖に云く爲ノ伎ニ他ニ求覓ス須ニ自證ス爲ノ自ニ解ニ故ニ從ノ他ノ印可ヲ云云と、印可證明なくんば無師自證にして佛法に非ず邪見の外道なり。

【法本】素呾纜或は修多羅（Sutra）の譯語、契經、直說等とも譯す。

佛祖なり、佛祖三昧の霹靂風雷なり。或從知識の正當恁麼時、あるひは半面を相見す、あるひは半身を相見す、あるひは全面を相見す、あるひは全身を相見す。半身を相見することあり、半他を相見することあり。神頭の披毛せるを相識し、鬼面の戴角せるを相識す。異類行の隨他來あり、同條生の變異あり。かくのごとくのところに爲法捨身すること、いく千萬回といふことをしらず、爲身求法すること、いく億百劫といふことをしらず。これ或從知識の活計なり、參身從自の消息なり、瞬目に相見するとき破顏あり、得髓を禮拜するちなみに斷臂す。おほよそ七佛の前後より、六祖の左右にあまれる、見自の知識ひとりにあらず、ふたりにあらず、見他の知識、むかしにあらず、いまにあらず。或從經卷のとき、自己の皮肉骨髓を參究し、自己の皮肉骨髓を脫落するとき、桃華眼睛づから、突出相見せらる、竹聲耳根づから、霹靂相聞せらる。おほよそ經卷に從學するとき、まことに經卷出來す。その經卷といふは、盡十方界、山河大地、草木自他なり、喫飯著衣、造次動容なり。この一一の經典にしたがひ、學道するに、さらに未曾有の經卷、いく千萬卷となく出現在前するなり、是字の句ありて宛然なり、非字の偈あらたに歷然なり。これらにあふことをえて、拈身心して參學するに、長劫を消盡し、長劫を舉起すといふとも、かならず通利の到處あり。放身心して參學するに、朕兆を抉出し、朕兆を超飛すといふことも、かならず受持の功成するなり。いま西天の梵文を、東土の法本に飜譯せる、わづかに半萬軸にたらず、これに

三乘、五乘、九部、十二部あり。これらみなしたがひ學すべき經卷なり、したがはざらんと廻避せんとすとも、うべからざるなり。かるがゆゑに、あるひは眼睛となり、あるいは吾髓となりきたれり、頭角正なり、尾條正なり。他よりこれをうけ、これを他にさづくといへども、ただ眼睛の活出なり。自他を脱落す、ただ吾髓の付囑なり、自他を透脱せり、眼睛吾髓、それ自にあらず、他にあらざるがゆゑに、佛祖むかしよりむかしに正傳しきたり、而今より而今に付囑するなり。拄杖經あり、横說從說、おのれづから空を破し有を破す、拂子經あり、雪を澡し霜を澡す、坐禪經の一會兩會あり、袈裟經一卷十軸あり、これら諸佛祖の護持するところなり。かくのごとくの經卷にしたがひて、修證得道するなり、あるひは天面人面、あるひは日面月面あらしめて、從經卷の功夫現成するなり。しかあるに、たとひ知識にもしたがひ、たとひ經卷にもしたがふ、みなこれ自己にしたがふなり、經卷おのれづから自經卷なり、知識おのれづから自知識なり。しかあれば、遍參知識は、遍參自己なり、拈百草は拈自己なり、拈萬木は拈自己なり、自己はかならず恁麼の功夫なりと參學するなり、この參學に自己を脱落し、自己を諦契するなり。これによりて佛祖の大道に、自證自悟の調度あり、正嫡の佛祖にあらざれば正傳せず、嫡嫡相承せる調度あり、佛祖の骨髓にあらざれば正傳せず。かくのごとく參學するゆゑに、人のために傳受するときは、汝得吾髓の付囑有在なり、吾有正法眼藏、付囑摩訶迦葉なり。爲說はかならずしも、自他にかかはれず、他のための說著、すなはち、みづからのための

説著なり。自と自と同參の聞説なり。一耳はきき、一耳はとく、一舌はとき、一舌はきく、乃至眼耳鼻舌身意根識塵等もかくのごとし。さらに一身一心ありて、證するあり、修するあり、耳づからの聞説なり、舌づからの聞説なり。昨日は他のために不定法をとくといへども、今日はみづからのために定法をとくなり。かくのごとくの日面あひつらなり、月面あひつらなれり。他のために法をとき、法を修するは、生生のところに法をきき、法をあきらめ、法を證するなり。今生にも法を他のためにとくに、誠心あれば、自己の得法やすきなり、あるひは他人の法をきくをも、たすけすすむれば、みづからが學法よきたよりをうるなり、身中にたよりをえ、心中にたよりをうるなり。聞法を障礙するがごときは、みづからが聞法を障礙せらるるなり、生生の身身に法をとき法をきくは、世世に聞法するなり。前來わが正傳せし法を、さらに今世にもきくなり、法のなかに生じ、法のなかに滅するがゆゑに、盡十方界のなかに、法を正傳しつれば、生生にきき、身身に修するなり、生生を法に現成せしめ、身身を法ならしむるゆゑに、一塵法界ともに拈來して法を證せしむるなり。しかあれば、東邊にして一句をききて、西邊にきたりて一人のためにとくべし。これ一自己をもて、聞著説著を一等に功夫するなり、東自西自を一齊に修證するなり。なにとしても、ただ佛法祖道を自己の身心にあひちかづけ、あひいとなむを、よろこび、のぞみ、こころざすべし、一時より一日におよび、乃至一年より一生までのいとなみとすべし、佛法を精魂として弄すべきなり、これを生生をむなしくすごさざるとす。しかあるを、

いまだあきらめざれば、ひとのためにとくべからずとおもふことなかれ、あきらめんことをまたんば、無量劫にもかなふべからず、たとひ人佛をあきらむとも、さらに天佛あきらむべし。たとひ山のこころをあきらむとも、さらに水のこころをあきらむべし、たとひ因緣生法をあきらむとも、さらに非因緣生法をあきらむべし、たとひ佛祖邊をあきらむとも、さらに佛祖向上をあきらむべし。これらを一世にあきらめをはりて、のちに他のためにせんと擬せんば、不功夫なり、不丈夫なり、不參學なり。おほよそ學佛祖道は、一法一儀を參學するより、すなはち爲他の志氣を衝天せしむるなり、しかあるによりて、自他を脫落するなり、さらに自己を參徹すれば、さきより參徹他己なり、よく他己を參徹すれば、さきより參徹自己なり、この佛儀は、たとひ生知といふとも、師承にあらざれば、體達すべからず、生知いまだ師にあらざれば、不生知をしらず、不生不知をしらず、たとひ生知といふとも、佛祖の大道はしるべきにあらず、學してしるべきなり、自己を體達し、他己を體達する、佛祖の大道なり。ただまさに自初心の參學をめぐらして他初心の參學を同參すべし、初心より自他ともに同參しもてゆくは、究竟同參に得到するなり、自功夫のごとく、他功夫をもすすむべし。しかあるに自證自悟等の道をききて、麤人おもはくば、師に傳受すべからず、自學すべし、これはおほきなるあやまりなり、自解の思量分別を邪計して、師承なきは、西天の天然外道なり、これをわきまへざらんともがら、いかでか佛道人ならん、いはんや自證の言をききて、積聚の五蘊ならんと計せば、小乘の自調に同ぜん、大乘

【紹興中徑山大慧】宋朝紹興年中臨安府の徑山に住し、大いに宗風を唱ふ。名は宗杲。隆興元年八月六日寂、壽七十五、勅して普覺禪師と諡す。續傳燈錄卷二十七に詳出す。

【理禪師】明教紹理禪師、興教坦の嗣にして瑯瑘覺の孫にあたる。

【洞山微和尚】芙蓉道楷禪師の嗣。

小乘をわきまへざるともがら、おほく佛祖の兒孫と自稱するおほし、しかあれども明眼人たれか瞞せられん。

大宋國紹興のなかに、徑山の大慧禪師宗杲といふあり、もとはこれ經論の學生なり、遊方のちなみに、宣州の理禪師にしたがひて、雲門の拈古、および雪竇の頌古、拈古を學す、參學のはじめなり。雲門の風を會せずして、つゐに洞山微和尚に參學すといへども、微つゐに堂奧をゆるさず、微和尚は芙蓉和尚の法子なり、いたづらなる席末人に齊肩すべからず、杲禪師ややひさしく參學すといへども、微の皮肉骨髓を摸著することあたはず、いはんや塵中の眼睛ありとだにもしらず。あるとき佛祖の道に臂香、嗣書の法ありとばかりききて、しきりに嗣書を微和尚に請す、しかあれども微和尚ゆるさず、つゐにいはく、「なんぢ嗣法を要せば、倉卒なることなかれ、直須功夫勤學、佛祖受授不妄付授也、吾不惜付授、只是儞未具眼在。」ときに宗杲いはく、「本具正眼、自證自悟、豈有不付授也。」微和尚笑而休矣。のちに湛堂準和尚に參ず、湛堂一日問宗杲云、「儞鼻孔因什麼今日無半邊。」杲云、「寶峯門下。」湛堂云、「杜撰禪和。」杲看經次、湛堂問、「看什麼經。」杲云、「金剛經。」湛堂云、「是法平等無有高下。爲什麼雲居山高、寶峯山低。」杲云、「是法平等無有高下。」湛堂云、「儞作得箇座主奴。」又一日湛堂見於粧十王處、問宗杲上座云、「此官人姓什麼。」杲云、「姓梁。」湛堂以手自摸頭云、「爭奈姓梁底、少箇幞頭。」杲云、「雖無幞頭、鼻孔髣髴。」湛堂云、「杜撰禪和。」湛堂一日問宗杲云、「杲上座、我這裏禪、儞一時

理會得、教二儞說一也說得、教二儞參一也參得、教二儞做二頌古、拈古、小參、普說、請益一、儞也做得、祇是儞有二一件事未在一、儞還知否。杲云、甚麼事未在。湛堂云、儞祇欠二這一解一在、因、若作レ不レ得二這一解一、我方丈與レ儞說時、便有レ禪、纔出二方丈一、便無了也、惺惺思量時、便有レ禪、纔睡著、便無了也、若如レ此、如何敵二得生死一。杲云、正是宗杲疑處。後稍經レ載、湛堂示レ疾、宗杲問云、和尙百年後、宗杲依二附阿誰一可レ以了二此大事一。湛堂囑云、有二箇勤巴子一、我亦不レ識レ他、雖レ然、儞若見レ他、必能成二就此事一、儞若見レ他了、不レ可二更他遊一、後世出來參禪也。

この一段の因緣を撿點するに、湛堂なほ、宗杲をゆるさず、たびたび開發を擬すといへども、つゐに欠一事なり、補一件事あらず、脫落一件事せず、微和尙そのかみ嗣書をゆるさず、なんぢいまだしきことありと勸勵する、微和尙の觀機あきらかなること信仰すべし、正是宗杲疑處を參究せず。脫落せず、打破せず、大疑なし、被疑礙、そのかみみだりに嗣書を請する、參學の倉卒なり、無道心のいたりなり、無稽古のはなはだしきなり、無遠慮なりといふべし。道機ならずといふべし、疎學のいたりなり。貪名愛利によりて、佛祖の堂奧をおかさんとす。あはれむべし佛祖の語句をしらざることを。稽古はこれ自證と會せず、萬代を涉獵するは自悟ときかず、學せざるによりて、かくのごとく不是あり、かくのごとくの自錯あり、かくのごとくなるによりて、宗杲禪師の門下に、一箇半箇の眞巴鼻あらず、おほくこれ假底なり、佛法を會せず、佛法を不會せざるは、かくのごとくなり。

而今の雲水、かならず審細の參學すべし、疎慢なることなかれ。宗杲因ニ湛堂之囑ニ、而湛堂順寂後、參ニ圜悟禪師於京師天寧ニ。圜悟一日陞座、宗杲有ニ神悟ニ、以レ悟告ニ呈圜悟ニ。悟云、「未也、子雖レ如レ是、而大法故未レ明。」又一日圜悟上堂、擧ニ五祖演和尚、有句無句語ニ、宗杲聞、而言下得ニ大安樂法ニ、解ニ呈圜悟ニ。圜悟笑而云、「吾不レ欺レ汝耶。」

これ宗杲禪師のちに圜悟に參ずる因緣なり、圜悟の會にして書記に充す。しかあれども前後いまだあらたなる得處みえず、みづから普說陞座のときも、得處を擧せず、しるべし記錄者は神悟せるといひ、得大安樂法と記せりといへども、させることなきなり、おもくおもふことなかれ、ただ參學の生なり。圜悟禪師は古佛なり、十方中の至尊なり、黃檗よりのちは、圜悟のごとくなる尊宿いまだあらざるなり、他界にもまれなるべき古佛なり、しかあれども、これをしれる人天まれなり、あはれむべき娑婆國土なり。いま圜悟古佛の說法を擧して、宗杲上座を撿點するに、師におよべる智いまだあらず、師ひとしき智いまだあらず、いかにいはんや師よりもすぐれたる智ゆめにもいまだみざるがごとし。しかあればしるべし、宗杲禪師は減師半德の才におよばざるなり、ただわづかに華嚴、楞嚴等の文句を諳誦して、傳說するのみなり。いまだ佛祖の骨髓あらず、宗杲おもはくは、大小の隱倫わづかに依草附木の精靈にひかれて、保任せるところの見解、これを佛法とおもへり、これを佛法と計せるをもて、はかりしりぬ佛祖の大道いまだ參究せずといふことを、圜悟よりのち、さらに他遊せず、智識をとぶらはず、みだりに大刹の主として、雲水の參頭な

り、のこれる語句、いまだ大法のほとりにおよばず、しかあるをしらざるともがらおもはくは、宗杲禪師むかしにもはぢざるとおもふ、みしれるものは、あきらめざると決定せり、つゐに大法をあきらめず、いたづらに口吧吧地のみなり。しかあればしりぬ、洞山の微和尙、まことに後鑑あきらかに、あやまらざりけりといふことを。宗杲禪師に參學せるともがらは、それするまでも微和尙をそねみねたむこと、いまにたえざるなり、微和尙はただゆるさざるのみなり、準和尙のゆるさざることは、微よりもはなはだし、まみゆることには勘過するのみなり。しかあれども準和尙をねたまず。而今および、こしかたのねたむともがら、いくばくの懡㦬なりとかせん、おほよそ大宋國の佛祖の兒孫と自稱するおほかれども、まことを學せるすくなきゆゑに、まことをしふるすべなし。そのむね、この因緣にてもはかりしりぬべし。紹興のころすら、なほかくのごとし、いまはそのころよりもおとれり、たとふるにもおよばず、いまは佛祖の大道なにとあるべしとだにもしらざるともがら、雲水の主人となれり、しるべし佛佛祖祖、西天東土、嗣書正傳は、靑原山下これ正傳なり、靑原山下よりのち、洞山おのづから正傳せり、自餘の十方かつてしらざるところなり、しるものはみなこれ洞山の兒孫なり、雲水に聲名をほどこす、宗杲禪師、ただ生前に自證自悟の言句をしらず。いはんや自餘の公案を參徹せんや。いはんや宗杲禪老よりも晩進のもの、たれか自證の言をしらん。しかあればすなはち、佛祖道の道自道他かならず佛祖の身心あり、佛祖の眼睛あり。佛祖の骨髓なるがゆゑに庸者の得皮にあらず。

爾時寛元二年甲辰二月二十九日在越宇吉峯精舍示衆

正法眼藏自證三昧　畢

【寛元二年】祖齢四十五歳、吉峰寺に於ける示衆。

正法眼藏大修行

洪州百丈山大智禪師嗣馬祖諱懷海凡參次、有一老人、常隨衆聽法。大衆若退、老人亦退。忽一日不退。師遂問、「面前立者、復是何人。」『老人對曰、「某甲是非人也、於過去迦葉佛時、曾住此山、因學人問、「大修行底人、還落因果也無。」某甲答他云、「不落因果。」後五百生、墮野狐身。今請和尚代一轉語。貴脫野狐身。」遂問曰、「大修行底人、還落因果也無。」』師云、『不昧因果。』老人於言下大悟。作禮曰、「某甲已脫野狐身、住此山後。敢告和尚、乞依亡僧事例。」師令維那白槌告衆曰、『食後送亡僧。』大衆言議、『一衆皆安、涅槃堂又無病人。何故如是。』食後只見師領衆至山後巖下、以杖指出一死野狐、乃依法火葬。師至晚上堂、擧前因緣。黃檗便問、『古人錯對一轉語、墮五百生野狐身。轉轉不錯、合作箇什麼。』師云、『近前來與儞道。』檗遂近前、與師一掌。師拍手笑云、『將爲胡鬚赤、更有赤鬚胡。』而今現成の公案、これ大修行なり。老人道のごときは、過去迦葉佛のとき洪州百丈山あり、現在釋迦牟尼佛のとき洪州百丈山あり。これ現成の一轉語なり。かくのごとくなりといへども、過去迦葉佛

【大修行】百丈野狐の話に於ける大修行底人を擧して不落不昧墮脫一如の法を開演す。大修行人は是れ大因果人なり、因も實相果も實相、因果一枚、實相の一條鐵なり、落ちんとして落つべき無く、昧まさんとして昧ますべき無し。

【洪州百丈山】乙の文、洪州百丈山大智禪師語錄第一に出づ。

時の百丈山と、現在釋迦牟尼佛時の百丈山と、一にあらず、異にあらず、前三三にあらず、後三三にあらず。過去の百丈山きたりて、而今の百丈山となれるにあらず。いまの百丈山さきだちて、迦葉佛時の百丈山にあらざれども、曾住此山の公案あり。爲學人道、それ今百丈の爲老人道のごとし、因學人問、それ今老人問のごとし。擧一不得擧二、放過一著、落在第二なり。過去學人問、過去百丈山の大修行底人還落因果也無。この問まことに卒爾に容易會すべからず。そのゆゑは、後漢永平のなかに、佛法東漸よりのち、梁代普通のなか、祖師西來ののち、はじめて老野狐の道より、過去の學人問をきく、これよりさきは、いまだあらざるところなり。しかあれば、まれにきくといふべし。大修行を模得するに、これ大因果なり。この因果かならず圓因滿果なるがゆゑに、いまだかつて落不落の論あらず、昧不昧の道あらず。不落因果もしあやまりならば、不昧因果もあやまりなるべし。將錯就錯すといへども、墮野狐身あり、脱野狐身あり。「不落因果」たとひ迦葉佛時にはあやまりなりとも、釋迦佛時はあやまりにあらざる道理もあり。「不昧因果」たとひ現在釋迦佛のときは、脱野狐身すとも、迦葉佛時しかあらざる道理も現成すべきなり。老人道の後五百生墮野狐身は、「作麼生是墮野狐身。」さきより野狐ありて、先百丈をまねきおとさしむるにあらず。先百丈もとより野狐なるべからず。先百丈の精魂いでて、野狐皮袋に撞入すといふは、外道なり。野狐きたりて先百丈を呑却すべからず。もし先百丈さらに野狐となるといはば、まづ脱先百丈身あるべし。のちに墮野狐身す

べきなり。以百丈山換、野狐身なるべからず。因果のいかでか、しかあらん。因果の本有にあらず。始起にあらず。因果のいたづらなるありて、人をまつことなし、たとひ不落因果の祇對、たとひあやまれりとも、かならず野狐身に墮すべからず。學人の問著を錯對する業因によりて、野狐身に墮すること必然ならば、近來ある臨濟德山、およびかの門人等いく千萬枚の野狐にか墮在せん。そのほか、二三百年來の杜撰長老等、そこばくの野狐ならん。しかあれども、墮野狐せりと、きこえず。おほからば見聞にもあるべきなり。あやまらず、あるらんと、いふつべしといへども、不落因果よりも、はなはだしき。胡亂答話のみおほし。佛法の邊に、おくべからざるも、おほきなり。參學眼ありてしるべきなり。未具眼はわきまふべからず。しかあればしりぬあしく祇對するによりて、野狐身となり、よく祇對するによりて野狐身とならずと、いふべからず。この因緣のなかに、脫野狐身ののち、いかなりといはず、さだめて皮袋につつめる眞珠あるべきなり。しかあるに、すべていまだ佛法を見聞せざるともがらいはく、野狐を脫しをはりぬれば、本覺の性海に歸するなり。迷妄によりて、しばらく野狐に墮生すといへども、大悟すれば野狐身はすてて、本性に歸するなり。これは外道の本我にかへるといふ義なり。さらに佛法にあらず、もし野狐は本性にあらず、野狐に本覺なしといはば、佛法にあらず。大悟すれば野狐身ははなれぬ。すてつるといはば、野狐の大悟にあらず。閑野狐なるべし。しかいふべからざるなり、今百丈の一轉語によりて、先百丈五百生の野狐、たちまちに脫野狐すといふ、こ

の道理あきらむべし。もし傍觀の一轉語すれば、傍觀脫野狐身すといはば、從來のあひだ、山河大地いく一轉語となく、おほくの一轉語しきりなるべし。しかあれども、從來いまだ脫野狐身せず。今百丈の一轉語に脫野狐身す。これ疑殺古先なり。山河大地いまだ一轉語せずといはば、今百丈つひに開口のところなからん。また往往の古德、おほく不落不昧の道、おなじく道是なるといふを、競頭道とせり。いまだ不落不昧の語脈に體達せず。かるがゆゑに、墮野狐身の皮肉骨髓を參せず、脫野狐身の皮肉骨髓を參せず。頭正あらざれば尾正いまだし。老人道の後五百生墮野狐身、なにかこれ能墮、なにかこれ所墮なる。正當墮野狐身のとき、從來の盡界、いまいかなる形段かある。不落因果の語脈。なにとしてか五百枚なる。いま山後巖下の一條皮那裏得來なりとかせん。不落因果の道は、墮野狐身なり。不昧因果の聞は脫野狐身なり、墮脫ありといへどもなほこれ野狐の因果なり。しかあるに、古來いはく、不落因果は、撥無因果に相似の道たるがゆゑに、墜墮すといふ。この道その宗旨なし、くらきひとの、いふところなり。たとひ先百丈、ちなみありて不落因果と道取すとも、大修行の瞞他不得なるなり、撥無因果なるべからず。またいはく、不昧因果は、因果にくらからずといふは、大修行の超脫の因果なるがゆゑに、脫野狐身すといふ。まことにこれ八九成の參學眼なり。しかありといへども、迦葉佛時曾住此山、釋迦佛時今住此山、曾身今身日面月面、遮野狐精現野狐精するなり。野狐いかにしてか、五百生の生をしらん。もし狐狐の知をもちゐて、五百生をしるといはば、野狐

の知いまだ一生の事を盡知せず。一生いまだ野狐皮に撞入するにあらず。野狐は、かならず、五百生の墮を知取する、公案現成するなり、一生の生を盡知せず。しることあり、しらざることあり。もし身知ともに生滅せずば、五百生を算數すべからず。算數することあたはずば、五百生の言、それ虛說なるべし。もし野狐の知にあらざる知をもちゐてしるといはば、野狐のしるにあらず、たれひとか野狐のためにこれを代知せん。知不知の通路、すべてなくば、墮野狐身といふべからず。墮野狐身せずば、脫野狐身あるべからず。墮脫ともになくば、先百丈あるべからず。先百丈なくば、今百丈あるべからず。みだりに、ゆるすべからず。かくのごとく參詳すべきなり。この宗旨を擧拈して、梁陳隋宋唐のあひだに、ままにきこゆる謬說、ともに撿破すべきなり。老非人また今百丈に告していはく、乞依亡僧事例。この道しかあるべからず。百丈よりこのかた、そこばくの善知識、この道を疑著せず、おどろかず。その宗趣は、死野狐いかにしてか亡僧ならん、得戒なし、夏臘なし、威儀なし、僧宗なし。かくのごとくなる物類、みだりに亡僧の事例に依行せば、未出家の何人死、ともに亡僧の例に準ずべきならん。死優婆塞、優婆夷、もし請することあらば、死野狐のごとく、亡僧の事例に依準すべし。依例をもとむるにあらず、きかず、佛道にその事例を正傳せず。おこなはんとおもふとも、かなふべからず。いま百丈の依法火葬すといふ、これあきらかならず、おそらくは、あやまりなり。しるべし亡僧の事例は入涅槃堂の功夫より、到菩提園の辨道におよぶまで、みな事例ありて、みだりならず。

巖下の死野狐、たとひ先百丈の自稱すとも、いかでか大僧の行李あらん、佛祖の骨髓あらん、たれか先百丈なることを證據する。いたづらに野狐精變怪を、まことなりとして、佛祖の法儀を輕慢すべからず。佛祖の兒孫としては、佛祖の法儀をおもくすべきなり。百丈のごとく請するに、まかすることなかれ。一事一法もありがたきなり。世俗にひかれ、人情にひかれざるべし。この日本國のごときは、佛儀祖儀あひがたく、ききがたかりしなり。而今まれにもきくことあり、みることあらば、ふかく髻珠よりも、おもく崇重すべきなり。無福のともがら、尊崇の信心あつからず。あはれむべし、それ事の輕重を、かつていまだしらざるによりてなり。五百歳の智なし、一千年の智なきによりてなり。しかありといふとも、自己をはげますべし、他己をすすむべし。一禮拜なりとも、一端坐なりとも、佛祖より正傳することあらば、ふかくあひがたきにあふ。大慶快をなすべし、大福德を懽喜すべし。このこころなからんともがら、千佛の出世にあふとも、一功德あるべからず、一得益あるべからず。いたづらに付佛法の外道なるべし、くちに佛法をまなぶに相似なりとも、くちに佛法をとくに證實あるべからず。しかあれば、すなはち、たとひ國王大臣なりとも、たとひ梵天釋天なりとも、未作僧のともがら、きたりて亡僧の事例を請せんに、さらに聽許することなかれ。出家受戒し、大僧となりて、きたるべしと答すべし。三界の業報を愛惜して、三寶の尊位を願求せざらんともがら、たとひ、千枚の死皮袋を拈來して、亡僧の事例をけがし、やぶるとも、さらにこれ、をかしの、はなはだしきなり、功德とな

【枯木法成頌】芙蓉道楷禪師の嗣、東京淨因寺に住して化を振ふ。南宋の高宗紹興二十九年寂。法成或は法常に作る。此頌のある處未考。

るべからず。もし佛法の功德を、結良緣せんとおもはば、すみやかに佛法によりて、出家受戒し、大僧となるべし。今百丈、至晩上堂、擧前因緣、この擧底の道理、もつとも未審なり。作麼生擧ならん。老人すでに五百生來のをはり、脫從來身といふがごとし。いまいふ五百生、そのかず人間のごとく算數すべきか、野狐道のごとく算數すべきか。佛道のごとく算數するか。いはんや老野狐の眼睛、いかでか百丈を覰見することあらん。野狐に覰見せらるるは、野狐精なるべし。百丈に覰見することあらん、佛祖なり。このゆゑに、枯木禪師法成和尚、頌曰、「百丈親曾見二野狐一、爲レ渠參請太心麤、而今敢問諸參學、吐二得狐涎一盡也無。」しかあれば、野狐は百丈親曾眼睛なり。吐得狐涎、たとひ半分なりとも、出廣長舌、代一轉語なり。正當恁麼時、脫野狐身、脫百丈身、脫老非人身、脫盡界身なり。黃檗便問、「古人錯對一轉語、墮五百生野狐身、轉轉不錯合作二箇什麼一。」といまこの問、これ佛祖道現成なり。南嶽下の尊宿のなかに、黃檗のごとくなるは、さきにもいまだあらず、のちにもなし。しかあれども、老人もいまだいはず、錯對學人と。百丈もいまだいはず、錯對せりけると。なにとしてか、いま黃檗みだりにいふ、古人錯對一轉語と。もし錯によれりと、いふならんと、いはば、黃檗いまだ百丈の大意をえたるにあらず。佛祖道の錯對不錯對は、黃檗いまだ參究せざるがごとし。この一段の因緣に、先百丈も錯對といはず。今百丈も錯對といはずと參學すべきなり。しかありといへども、野狐皮五百枚、あつさ三寸なるをもて、曾作此山し、爲學人道するなり。野狐皮に脫落の尖

【百丈道處通方】これ高祖の本則に對する提示。【寛元二年】祖齢四十五歳、吉峰寺に於ける示衆。

毛あるによりて、今百丈一枚の臭皮袋あるなり。度量するに、半野狐皮の脱來なり、轉轉不錯の墮脱あり、轉轉代語の因果あり、歴然の大修行なり。いま黄檗きたりて、轉轉不錯、合作箇什麼と問著せんに、いふべし「也墮作野狐身」と、黄檗もしなにとしてか恁麼なるといはば、さらにいふべし『這野狐精』、かくのごとくなりとも、錯不錯にあらず。黄檗の問を、「問得是なり」と、ゆるすことなかれ。また黄檗合作什麼と問著せんに摸索得面皮也未といふべし。また儞脱野狐身也未といふべし。また儞答他學人不落因果也未といふべし。しかあれども『百丈道の近前來與儞道』、すでに合作箇這箇の道處あり。黄檗近前す、亡前失後なり。與百丈一掌する、そこばくの野狐變なり。百丈拍手笑云、『將爲胡鬚赤、更赤鬚胡。』この道取いまだ十成の志氣にあらず。わづかに、八九成なり、たとひ八九成をゆるすとも、いまだ八九成あらず、十成をゆるすとも、八九成なきものなり。しかあれどもいふべし、百丈道處通方、雖然未出野狐窟、黄檗脚跟點地、雖然猶滯蟷螂徑、與掌拍手、一有二無、赤鬚胡胡鬚赤。

爾時寛元二年甲辰三月九日在越宇吉峯古精舍示衆

正法眼藏大修行　畢

【虛空】五蘊皆空なりと照見する般若の眞空也、頑空をいふには非ず、無凝の空處をいふ、人人日日の行住坐臥念念返照すれば皆虛空の云爲動作也、虛空の日常眞に無相三昧に入る

【二十空】大般若第三に二十空を說く、云く、内空、外空、内外空、空空、大空、勝義空、有爲空、無爲空、畢竟空、無際空、散空、無變異空、本性空、自相空、共相空、一切法空、不可得空、無性空、自性空、無性自性空。

【撫州石鞏】傳燈卷六に出づ。馬祖下石鞏慧藏和尚。

正法眼藏虛空

道裏是什麼處在のゆゑに、道現成をして佛祖ならしむ。佛祖の道現成、おのれづから嫡嫡するゆゑに、皮肉骨髓の渾身せる掛虛空なり。この虛空は、二十空等の群にあらず。おほよそ空、ただ二十空のみならんや、八萬四千空あり、およびそこばくあるべし。

撫州石鞏慧藏禪師、問西堂智藏禪師、汝還解捉得虛空麼。西堂曰、解捉。師云、儞作麼生捉。西堂以手撮虛空。師云、儞不解捉虛空。西堂曰、師兄作麼生捉。師把西堂鼻孔拽。西堂作忍痛聲曰、太殺拽人鼻孔、直得脫去。師云、直須恁地把捉始得。

石鞏道の汝還解捉得虛空麼、なんぢまた通身是手眼なりやと問著するなり。西堂道の解捉得、虛空一塊觸而染汙なり。染汙よりこのかた、虛空落地しきたれり。石鞏道の儞作麼生捉、喚作如如、早是變了也なり。しかもかくのごとくなりといへども、隨變而如去也なり。西堂以手撮虛空、只會騎虎頭、未會把虎尾なり。石鞏道、儞不解捉虛空。ただ不解捉のみにあらず、虛空也未夢見在なり。しかもかくのごとくなりといへども、年代深遠、不欲爲伊擧似なり。西堂道、師兄作麼生捉。和尚也道取一半、莫全靠某甲なり。石鞏把西堂鼻孔拽。しばらく參學すべし、西堂の鼻孔に石鞏藏身せり、あるひは鼻孔拽石鞏の道現成あり、しかも、か

くのごとくなりといへども、虛空一團、磕著築著なり。西堂作ニ忍痛聲一曰、『太殺拽ニ人鼻孔一、直得脫去。』從來は人にあふとおもへども、たちまちに自己にあふことをえたり。しかあれども、染汙自己即不得なり、修己すべし。石鞏道、『直須恁地把捉始得。』恁地把捉始得は、なきにあらず、ただし石鞏と石鞏と、共出一隻手の捉得なし、虛空と虛空と、共出一隻手の捉得あらざるがゆゑに、いまだみづからの費力をからず。およそ盡界には、容虛空の間隙なしといへども、この一段の因緣、ひさしく虛空の霹靂をなせり。石鞏西堂よりのち、五家の宗匠と稱する參學おほしといへども、虛空を見聞測度せるまれなり、石鞏西堂より前後に、弄虛空を擬するともがら面面なれども、著手せるすくなし、石鞏は虛空をとれり、西堂は虛空を覷見せず、大佛まさに石鞏に爲道すべし。いはゆるそのかみ西堂の鼻孔をとる捉虛空なるべくば、みづから石鞏の鼻孔をとるべし、指頭をもて指頭をとることを會取すべし、しかあれども石鞏いささか捉虛空の威儀をしれり、たとひ捉虛空の好手なりとも、虛空の內外を參學すべし、虛空の殺活を參學すべし。虛空の輕重をしるべし、佛佛祖祖の功夫辨道發心修證道取問取、すなはち捉虛空なると保任すべし。

先師天童古佛道、『渾身似ㇾ口掛ニ虛空一。』あきらかにしりぬ虛空の渾身は虛空にかかれり。

洪州西山亮座主、因參ニ馬祖一。祖問、『講ニ什麼經一。』師曰、『心經。』祖云、『將ニ什麼一講。』師曰、『將ㇾ心講。』祖云、『心如ニ工伎兒一、意如ニ和伎者一、六識爲ニ伴侶一、爭解ニ講ニ得經一。』師

【先師道渾身】風鈴頌、般若卷に出づ。渾身似口掛虛空、不問東西南北風、一等爲他談般若、滴丁東了滴丁東。

【洪州西山】傳燈卷八に出づ。西山高座主、馬祖道一禪師に嗣ぐ。

【第二十一祖婆修】二十一は七の誤り。會元第一に此偈出づ。

【寬元三年】祖師四十六歳、大佛寺に於ける示衆。

曰、「心既講不得、莫是虚空講得麼。」祖云、「却是虚空講得。」師拂袖而退。祖召云、「座主。」師回首。祖云、「從生至死只是這箇。」師因而有省。遂隱西山、更無消息。」しかあればすなはち、佛祖はともに講經者なり、講經はかならず虚空なり、虚空にあらざれば一經をも講ずることをえざるなり。心經を講ずるにも、身經を講ずるにも、ともに虚空をもて講ずるなり、虚空をもて思量を現成し、不思量を現成せり。有師智をなし、無師智をなす、生知をなし、學而知をなす。ともに虚空なり、作佛作祖おなじく虚空なるべし。

第二十一祖、婆修盤頭尊者道、「心同虚空界、示等虚空法、證得虚空時、無是無非法。」いま壁面人と人面壁と、相逢相見する、牆壁心枯木心、これはこれ虚空界なり。「應以此身得度者、即現此身而爲説法。」これ示等虚空法なり。「應以他身得度者、即現他身而爲説法。」これ示等虚空法なり。被十二時使、および使得十二時、これ證得虚空時なり。石頭大底大石頭小底小、これ無是無非法なり、かくのごとくの虚空、しばらくこれを正法眼藏涅槃妙心と參究するのみなり。

爾時寬元三年乙巳三月六日在越宇大佛寺示衆

正法眼藏虚空　畢

【鉢盂】佛衣佛鉢を正傳するを佛嗣佛と爲す、傳衣、袈裟功德は既に說く、今鉢多羅應量器の傳授功德を示す、鉢多羅は是れ千佛の髑髏なり、二時佛の粥飯宜しく照顯すべし、盡未來際の法味に饑ゑざるもの用つて鉢盂となす。

【先師上堂曰】淨祖天童錄に出づ。

正法眼藏鉢盂

七佛向上より七佛に正傳し、七佛裏より七佛に正傳し、渾七佛より渾七佛に正傳し、七佛より二十八代正傳しきたれり。第二十八代の祖師、菩提達磨高祖みづから神丹國にいりて、二祖大祖正宗普覺大師に正傳し、六代つたはれて曹谿にいたる、東西都盧五十一傳、すなはち正法眼藏涅槃妙心なり、袈裟鉢盂なり。ともに先佛は先佛の正傳を保任せり、かくのごとくして、佛佛祖祖正傳せり。しかあるに佛祖を參學する皮肉骨髓拳頭眼睛、おのおの道取あり、いはゆる、あるひは鉢盂はこれ佛祖の身心なりと參學するあり、あるひは鉢盂はこれ佛祖の飯椀なりと參學するあり、あるひは鉢盂はこれ佛祖の眼睛なりと參學するあり、あるひは鉢盂はこれ佛祖の光明なりと參學するあり、あるひは鉢盂はこれ佛祖の眞實體なりと參學するあり、あるひは鉢盂はこれ佛祖の正法眼藏涅槃妙心なりと參學するあり、あるひは鉢盂はこれ佛祖の轉身所なりと參學するあり、あるひは佛祖はこれ鉢盂の緣底なりと參學するあり。かくのごとくの、ともがらの參學の宗旨、おのおの道得の處分ありといへども、さらに向上の參學あり。

先師天童古佛、大宋寶慶元年、住二天童一日上堂曰、「記得、僧問二百丈一、如何是奇特事。百丈云、「獨坐大雄峯、大衆不レ得二動著一、且教レ坐二殺者漢一。」今日忽有レ人、問二淨上

【四天王護持】大般若一奉鉢品に云く、是時四天王皆大歡喜、意念言當以四鉢奉上菩薩、如前天王奉先佛鉢。云云又禪類十五に云く、世尊成道四天王復將四石鉢奉上世尊、乃總受四鉢以神力合成一鉢と。

【龍王擁護】蓮華面經に云く、於後我鉢即於閻浮提沒、現娑伽羅龍王宮中、爾時龍王見鉢供養、如是我鉢於龍宮沒、四天王宮而出、天王供養云云。

座、如何是奇特事、只向他道、有甚奇特、畢竟如何。淨慈鉢盂、移過天童喫飯。

しるべし奇特事はまさに奇特人のためにすべし、奇特事には奇特の調度をもちひるべきなり、これすなはち奇特の時節なり、しかあればすなはち、奇特事の現成せるところ、奇特鉢盂なり。これをもて四天王をして護持せしめ、諸龍王をして擁護せしむる、佛道の玄軌なり。このゆゑに佛祖に奉獻し、佛祖より付屬せらる。佛祖の堂奥に參學せざるともがらいはく、「佛袈裟は、絹なり布なり、化絲のおりなせるところなり」といふ、「佛鉢盂は、石なり瓦なり鐵なり」といふ。かくのごとくいふは未具參學眼のゆゑなり、佛袈裟は佛袈裟なり。さらに絹布の見あるべからず、絹布等の見は舊見なり、佛鉢盂は佛鉢盂なり、さらに石瓦といふべからず、鐵木といふべからず、おほよそ佛鉢盂は、これ造作にあらず、生滅にあらず、去來せず得失なし、新舊にわたらず、古今にかかはれず、佛祖の衣盂は、たとひ雲水を採集して現成せしむとも、雲水の羅籠にあらず、たとひ艸木を採集して現成せしむとも、艸木の羅籠にあらず。その宗旨は、水は衆法を合成して水なり、雲は衆法を合成して雲なり、雲を合成して雲なり、水を合成して永なり、鉢盂は但以衆法、合成鉢盂なり、但以鉢盂、合成衆法なり、但以渾心、合成鉢盂なり、但以虛空、合成鉢盂なり、但以鉢盂、合成鉢盂なり。鉢盂は鉢盂に罣礙せられて、鉢盂に染汙せらる。いま雲水の傳持せる鉢盂、すなはち四天王奉獻の鉢盂なり、鉢盂もし四天王奉獻せざれば現前せず。いま諸方に傳佛正法眼藏の佛祖の正傳せる鉢盂、これ透脫古今底の鉢盂なり、しかあれば、いまこの鉢盂

【寛元三年】祖齡四十六歲、大佛寺に於ける示衆。

【安居】南山業疏四に形心攝靜曰レ安、要期在住曰レ居。安居の法大小乘經諸律文に亘細に誡勗す、今佛祖正傳の安居を開示す。

【先師結夏小參】淨祖錄卷下に出づ

は、鐵漢の舊見を覰破せり。木橛の商量に拘牽せられず、瓦礫の聲色を超越せり。石玉の活計を罣礙せざるなり、碌甎といふことなかれ、木突といふことなかれ、かくのごとく承當しきたれり。

爾時寛元三年三月十二日在二越宇大佛精舍一示衆

正法眼藏鉢盂

正法眼藏安居

先師天童古佛、結夏小參云、「平地起二骨堆一、虛空剜二窟籠一、驀透二兩重關一、拈二却黑漆桶一。」

しかあれば得二這巴鼻子一了、未レ免喫飯伸レ脚睡、在這裏三十年なり。すでにかくのごとくなるゆゑに、打併調度、いとまゆるくせず、その調度に、九夏安居あり、これ佛佛祖祖の頂額面目なり、皮肉骨髓に親曾しきたれり。佛祖の眼睛頂額を拈來して、九夏の日月とせり、安居一枚、すなはち佛佛祖祖と喚作せるものなり。安居の頭尾、これ佛祖なり、このほかさらに寸土なし大地なし。夏安居の一橛、これ新にあらず舊にあらず、來にあらず去にあらず。その量は拳頭量なり、その樣は巴鼻樣なり。しかあれども結夏のゆゑにきたる、虛空塞破せり。あまれる十方あらず、解夏のゆゑにさる、帀地を裂破す、のこれる寸土あらず。このゆゑに結夏の公案現成する、きたる相似たり、解夏の羅籠打破する、さるに相

【黄龍死心云】嚴燈十七、續傳燈廿八に出づ。

似なり。かくのごとくなれども親曾の面面、ともに結解を罣礙するのみなり、萬里無寸艸なり。還吾九十日飯錢來なり。

黄龍死心和尚云、「山僧行脚三十餘年、以九十日爲一夏。增一日也不得、減一日也不得。」しかあれば三十餘年の行脚眼、わづかに見徹するところ、九十日爲一夏安居のみなり。たとひ增一日せんとすといふとも、九十日かへりきたりて競頭參すべし、たとひ減一日せんとすといふとも、九十日かへりきたりて競頭參するものなり、さらに九十日の窟籠を跳脱すべからず、この跳脱は、九十日の窟籠を手脚として跨跳するのみなり、九十日爲一夏は、我箇裏の調度なりといへども佛祖のみづからはじめてなせるにあらざるがゆゑに佛佛祖祖嫡嫡正稟して今日にいたれり。しかあれば夏安居にあふは、諸佛諸祖にあふなり、夏安居にあふは、見佛見祖なり、夏安居、ひさしく作佛祖せるなり。この九十日爲一夏、その時量たとひ頂𩕳量なりといへども、一劫十劫のみにあらず、百千無量劫のみにあらざるなり、餘時は百千無量等の劫波に使得せらる、九十日は百千無量等の劫波を、使得するがゆゑに、無量劫波たとひ九十日にあふて見佛すとも、九十日かならずしも劫波にかかはれず。しかあれば參學すべし、九十日爲一夏は、眼睛量なるのみなり、身心安居は、それまたかくのごとし。夏安居の活鱍鱍地を使得し、夏安居の活鱍鱍地を跳脱せる、來處あり職由ありといへども、他方多時よりきたりうつれるにあらず、當處當時より起興するにあらず。來處を把定すれば、九十日たちまちにきたる、職由を摸索すれば、九十日たちま

【世尊在摩竭陀】諸佛要集經、釋類十四に出づ。

【二千一百九十四年】法雲の翻譯名義集說の周の穆王五十三年壬申入滅より日本寬元三年に至る佛滅後の年數。

【言語道斷】維摩經弟子品に法無名字、言語道斷と、三祖信心銘に言語道斷、非古來今とあり。

ちにきたる、凡聖これを窟宅とせり命根とせりといへども、はかるに凡聖の境界を超越せり、思量分別のおよぶところにあらず、不思量分別のおよぶところにあらず、思量不思量の不及のみにあらず。

世尊、在二摩竭陀國一、爲レ衆說法、是時將レ欲二白夏一、乃謂二阿難一曰、諸大弟子、人天四衆、我常說法、不レ生二敬仰一、我今入二因沙臼室中一、坐夏九旬。忽有レ人來、問レ法之時、汝代爲レ我說、一切法不生、一切法不滅。言訖掩レ室而坐。しかありしよりこのかた、すでに二千一百九十四年當日本寬元三年乙巳歲なり。堂奧にいらざる兒孫、おほく摩竭掩室を無言說の證據とせり。いま邪黨おもはくは掩室坐夏の佛意は、その言說をもちゐるは、ことごとく實にあらず、善巧方便なり、至理は言語道斷し、心行處滅なり。このゆゑに無言無心は、至理にかなふべし、有言有念は、至理なり。このゆゑに、掩室坐夏九旬のあひだ、人跡を斷絕せるなりとのみいひいふなり。これらのともがらのいふところ、おほきに世尊の佛意に孤負せり、いはゆるもし言語道斷、心行處滅を論ぜば、一切の治生產業、みな言語道斷し、心行處滅なり。言語道斷とは、一切の言語をいふ、心行處滅とは、一切の心行をいふ。いはんやこの因緣、もとより無言をたふとびんためにはあらず、通身ひとへに泥水し入艸して、說法度人いまだのがれず。轉法拯物いまだのがれざるのみなり。もし兒孫と稱するともがら、坐夏九旬を無言說なりといはば、還二吾九句坐夏一來といふべし。阿難に勅令して、いはく、汝代爲レ我說一切法不生、一切法不滅と代說せしむ、この佛儀、いたづらにすごすべから

【可憐三尺龍泉劍】頌古聯珠集に佛性泰の疎山藤樹話に云く、樹倒藤枯意如何、潙山開口笑呵呵、可憐三尺龍泉劍、徒掛陶家壁上梭と。

【清規云】禪苑清規卷三結夏章。

【白衣舍】在家なり。

ず。おほよそ掩室坐夏、いかでか無言不說なりとせん。しばらくもし阿難として、當時すなはち世尊に白すべし、「一切法不生、一切法不滅、作麼生說、縱說ニ恁麼一、要レ作ニ什麼一」かくのごとく白して世尊の道を聽取すべし。おほよそ而今の一段の佛儀、これ說法轉法の、第一義諦、第一無諦なり、さらに無言說の證據とすべからず。もしこれを無言說とせば、可レ憐三尺龍泉劍、徒掛ニ陶家壁上梭一ならん。しかあればすなはち九旬坐夏は、古轉法輪なり、古佛祖なり。而今の因緣のなかに、時將レ欲ニ白夏一とあり、しるべし。のがれずおこなはるゝ、九旬坐夏安居なり、これをのがるゝは外道なり。おほよそ世尊在世には、あるひは忉利天にして九旬安居し、あるひは耆闍窟山靜室中にして、五百比丘ともに安居す、五天竺國のあひだ、ところを論ぜず、ときいたれば白夏安居し、九旬安居おこなはれき。いま現在せる佛祖、もとも一大事としておこなはるゝところなり、これ修證の無上道なり。梵網經中に、冬安居あれども、その法つたはれず、九夏安居の法のみつたはれり、正傳まのあたり。五十一世なり。

清規云、「行脚人欲下就ニ處所一結夏上、須下於ニ半月前一掛搭上、所貴茶湯人事不ニ倉卒一。」いはゆる半月前とは、三月下旬をいふ。しかあれば三月の内にきたり掛搭すべきなり、すでに四月一日よりは、比丘僧ありきせず、諸方の接待、および諸寺の旦過、みな門を鎖せり。しかあれば四月一日よりは、雲衲みな寺院に安居せり、菴裏に掛搭せり、あるひは白衣舍に安居せる先例なり。これ佛祖の儀なり、慕古の修行すべし。拳頭鼻孔、みな面々

【戒臘】受戒先後の次第也。梵網經に云く佛子應二如レ法次第坐一。先受戒者在レ前坐、後受戒者在レ後坐と。

に寺院をしめて安居のところに掛搭せり。」しかあるを魔黨いはく、「大乘の見解、それ要樞なるべし、夏安居は、聲聞の行儀なり、あながちに修習すべからず。」かくのごとくいふともがらは、かつて佛法を見聞せざるなり、阿耨多羅三藐三菩提、これ九旬安居坐夏なり、たとひ大乘小乘の至極ありとも、九旬安居の枝葉華果なり。四月三日の粥罷より、はじめてことをおこなふといへども、堂司あらかじめ四月一日より、戒臘の牓を理會す、すでに四月三日の粥罷に戒臘牌を衆寮前にかく、いはゆる前門の下間の窓外にかく。寮窓みな槅子なり。粥罷にこれをかけ、放參鐘ののちこれををさむ。三日より五日にいたるまでこれをかく。をさむる時節、かくの時節おなじ。かの牓かく式あり、知事頭首によらず。戒臘のままにかくなり、諸方にして頭首知事をへたらんは、おのおの首座監寺とかくなり。數職をつとめたらんなかには、そのうちにつとめておほきならん職をかくべし。かつて住持をへたらんは、某甲西堂とかく。小院の住持をつとめたりといへども、雲水にしられざるは、しばしばこれをかくして稱せず、もし師の會裏にしては、西堂なるもの西堂の儀なし。某甲上座とかく例もあり、おほくは衣鉢侍者寮に歇息する勝躅なり、さらに衣鉢侍者に充し、あるひは燒香侍者に充する舊例なり。いはんやその餘の職、いづれも師命にしたがふなり。他人の弟子のきたれるが、小院の住持をつとめたるといへども、おほきなる寺院にては、なほ首座、書記、都寺、監寺等に請ずるは、依例なり、芳躅なり。小院の小職をつとめたるを稱するをば、叢林わらふなり、よき人は住持をへたるなほ小院をばか

【陳如尊者】阿若憍陳如尊者、比丘の第一なり。

くして稱せざるなり。牓式かくのごとし。

某國某州某山寺今夏結夏海衆戒臘如後

陳如尊者

堂頭和尚

建保元戒

某甲上座　某甲藏主　某甲上座　某甲上座

建保二戒

某甲西堂　某甲維那　某甲首座　某甲知客　某甲上座　某甲浴主

元曆元戒

某甲直歲　某甲侍者　某甲首座　某甲首座　某甲化主　某甲上座

某甲典座　某甲堂主

建曆三戒

某甲書記　某甲上座　某甲西堂　某甲首座　某甲上座　某甲上座

右謹具呈若有誤錯各請指揮謹狀

某年四月三日堂司比丘某甲謹狀

かくのごとくかく、しろきかみにかく、眞書にかく、草書隸書等をもちゐず。かくるには、布線のふとさ兩米粒許なるをその紙牓頭につけてかくるなり、たとへば簾額のすぐ

【清淨法身佛】以下之を合せて十佛名と稱す。彌天の道安に始り南山の道宣に依つて盛んに行はるるに至れりといふ。十佛名一體現前住持の三寶を稱念す首め彌

ならんがごとし。四月五日の放參罷にをさめをはりぬ。」四月八日は佛生會なり。」四月十三日の齋罷に、衆寮の僧衆、すなはち本寮につきて煎點諷經す。寮主ことをおこなふ。點湯燒香、みな寮主これをつとむ。寮主は、衆寮の堂奧に、その位を安排せり。寮首座は寮の聖僧の左邊に安排せり。しかあれども寮主いでて燒香行事するなり。首座知事等、この諷經におもむかず。ただ本寮の僧衆のみおこなふなり。維那あらかじめ一枚の戒臘牌を修理して、十五日の粥罷に僧堂前の東壁にかく、前架のうへにあたりてかく、正面のつぎのみなみの間なり。」清規云『堂司預設ニ戒臘牌一香華供養。』在僧堂前設之 四月十四日齋後に、念誦牌を僧堂前にかく、諸堂おなじく念誦牌をかく、至晚に知事あらかじめ土地堂に香華をまうく、額のまへにまうくるなり。集衆念誦す。念誦の法は、大衆集定ののち、住持人まづ燒香す、つぎに知事頭首燒香す、浴佛のときの燒香の法のごとし。つぎに維那くらゐより正面にいでて、まづ住持人を問訊してつぎに土地堂にむかふて問訊して、おもてをきたにして土地堂にむかふて念誦す。詞云

竊以薰風扇レ野、炎帝司レ方、當ニ法王禁足之辰一、是釋子護生之日、躬率ニ大衆一、肅ニ詣靈祠一、諷ニ持萬德洪名一、回ニ向合堂眞宰一、所レ祈加護得レ遂ニ安居一、仰憑尊衆念。

清淨法身毘盧舍那佛　圓滿報身盧舍那佛　千百億化身釋迦牟尼佛　當來下生彌勒尊佛。
十方三世一切諸佛　大聖文殊師利菩薩　大聖普賢菩薩　大悲觀世音菩薩。
諸尊菩薩摩訶薩　摩訶般若波羅蜜。

陀勢至等をも加へたるものの如し永平赴粥飯法には十方三世一切諸佛の次に大乘妙法蓮華經を加ふ、故に通常の稱擧に加へて唱ふ。

念誦功德、竝用回向護持正法土地龍神、伏願神光協贊、發揮有利之勳、梵樂興隆、永錫無私之慶、再憑尊衆念、十方三世一切諸佛、諸尊菩薩摩訶薩、摩訶般若波羅蜜。

ときに鼓響すれば、大衆すなはち雲堂の點湯の座に赴す。點湯は庫司の所辦なり、大衆赴堂し、次第巡堂し、被位につきて正面而坐す。知事一人行法事す、いはゆる燒香等をつとむるなり。淸規云、本令鑑院行事、有故維那代之すべからく念誦以前に寫牓して首座に呈す、知事搭袈裟帶坐具して、首座に相見するとき、あるひは兩展三拜しをはりて、牓を首座に呈す、首座答拜す、知事の拜とおなじかるべし、牓は箱に複袱子をしきて、行者にもたせゆく、首座知事をおくりむかふ。

牓式

庫司今晩就
雲堂煎點、特爲
首座
大衆、聊表結制之儀、伏冀
衆慈同垂
光降。
寛元三年四月十四日庫司比丘某甲謹白

【殼漏子】かくろす　封皮のこと。

知事の第一の名字をかくなり、牓を首座に呈してのち、行者をして雲堂前に貼せしむ。堂前の下間に貼するなり、前門の南頰の外面に、牓を貼する版あり、このいたぬれり。殼漏子あり、殼漏子は牓の初にならべて竹釘にてうちつけたり、しかあれば殼漏子もかたはらに押貼せり、この牓は如法につくれり、五分許の字にかく、おほきにかかず。殼漏子の表書は、かくのごとくかく。

状請　首座　大衆　庫司比丘某甲等謹封

煎點をはりぬれば牓をさむ。十五日の粥前に知事頭首、小師法眷、まづ方丈内にまうでて人事す、住持人もし隔宿より免人事せば、さらに方丈にまうづべからず。免人事といふは、十四日より、住持人あるひは頌子あるいは法語をかける、牓を方丈門の東頰に貼せり、あるいは雲堂前にも貼す。十五日の陞座罷、住持人法座よりおりて階のまへにたつ、拜席の北頭をふみて面南してたつ、知事近前して兩展三禮す。一展云、此際安居禁足、獲レ奉ニ巾瓶一、惟仗ニ和尚法力資持一、願無ニ難事一。又一展、敍ニ寒暄一、觸禮三拜。住持人念、此者多幸得ニ同安居一、亦冀某人等、法力相資、無ニ諸難事一。首座大衆、同ニ此式一也。このとき首座大衆知事等、みな面北して禮拜するなり。住持人ひとり面南にして法座の階前に立せり、住持人の坐具は、拜席のうへに展するなり。つぎに首座大衆、於ニ住持人面一兩展

三禮、このとき小師、侍者法眷、沙彌、在二一邊一立、未レ得下與二大衆一同人事上、いはゆる一邊にありてたつとは、法堂の東壁のかたはらにありてたつなり、もし東壁邊に、施主の垂箔のことあらば、法鼓のほとりにたつべし、また西壁邊にも立すべきなり。大衆禮拜をはりて、知事まづ庫堂にかへりて、主位に立す。つぎに首座すなはち大衆を領して庫司にいたりて人事す、いはゆる知事と觸禮三拜するなり。このとき小師侍者法眷等は法堂上にて住持人を禮拜す、法眷は兩展三拜すべし、住持人の答拜あり、小師侍者おのおの九拜す、答拜なし。沙彌九拜、あるいは十二拜なり。住持人合掌してうくるのみなり。つぎに首座僧堂前にいたりて上間の知事牀のみなみのはしにあたりて、雲堂の正面にあたりて面南にして大衆にむかふてたつ、大衆面北して首座にむかふて觸禮三拜す、首座大衆をひきて入堂し、戒臘によりて巡堂立定す。知事入堂し、聖僧前にて大展禮三拜しておく。つぎに首座前にて觸禮三拜しておく。つぎに首座前にて觸禮三拜す、大衆答拜す。知事巡堂一帀していでて、くらゐによりて叉手してたつ。住持人入堂、聖僧前にして燒香、大展三拜起、このときは小師於二聖僧後一避立、法眷隨二大衆一つぎに住持人、於二首座一觸禮三拜、いはく住持人ただくらゐによりてたち、面西にて觸禮す。首座大衆答拜さきのごとし。住持人巡堂していづ、首座前門の南頰よりいでて、住持人をおくる。住持人出堂ののち、首座以下對禮三拜していはく、「此際幸同二安居一、恐三業不善、且望二慈悲一。」この拜は、展坐具拜三拜なり。かくのごとくして首座書記藏主等おのおのその寮にかへる、もしそれ衆寮僧

【安老、勤舊、前資等】安老は老病耆年を安處せしむる舍。勤舊は舊は久にして前來他方叢林に在つて知事等に充て來るの人。前資は前來其院を資助して兩序以上に充てし老宿。頤堂は禮に百歳曰レ頤と今は極老を安存せしむるの堂なり。單寮は一人一寮を領するをいふ。

は、寮主、寮首座已下、おのおの觸禮三拜す、致語は堂中の法におなじ。住持人こののち庫堂よりはじめて巡寮す、次第に大衆相隨送至二方丈一、大衆乃退。いはゆる住持人まづ庫堂にいたる、知事と人事しをはりて、住持人いでて巡寮すれば、知事しりへにあゆめり、知事のつぎに東廊のほとりにある人あゆめり、住持人このとき延壽院にいたらず、東廊より西におりて、山門をとほりて巡寮すれば、山門の邊の寮にある人あゆみつらなる、みなみより西の廊下および諸寮にめぐる、このとき西をゆくときは北にむかふ。このときより安老、勤舊、前資、頤堂單寮のともがら、淨頭等あゆみつらなれり、維那首座等あゆみつらなる、つぎに衆寮の僧衆あゆみつらなる、巡寮は寮の便宜によりてあゆみくははる、これを大衆相隨送とはいふ。かくのごとくして方丈の西階よりのぼりて、住持人は方丈の正面のもやの住持人のくらゐによりて、西南にて叉手してたつ、大衆は知事以下、みな面北にて住持人を問訊す。この問訊、ことにふかかるべし、住持人答問訊あり、大衆退す。」先師は方丈に大衆をひかず、法堂にいたりて、法座の階前にして、南面叉手してたつ、大衆問訊して退す、これ古往の儀なり。」しかうしてのち衆僧おのおのこゝろにしたがひて人事す。人事とは、あひ禮拜するをり、たとへばおなじ郷間のともがら、あるひは照堂、あるひは廊下の便宜のところにして、幾十人もあひ拜して、同安居の理致を賀す。しかあれども致語は堂中の法になずらふ、人にしたがひて今案のことばも存す。あるひは小師をひきゐたる本師あり、これ小師かならず本師を拜すべし、九拜をもちゐる、法眷の住持人を

拝する、両展三拝なり、あるひはただ大展三拝す、法眷のともに衆にあるは拝おなじかるべし、師叔師伯またかならず拝あり、隣単隣肩みな拝す、相識道舊ともに拝あり、單寮にあるともがらと、首座、書記、藏主、知客、浴主等と、到寮拝賀すべし。單寮にあるともがらと、都寺、監寺、維那、典座、直歳、西堂、尼師、道士等とも、到寮到位して拝賀すべし。到寮せんとするに人しげくて入寮門にひまをえざれば、牓をかきてその寮門におす。その牓はひろさ一寸餘、ながさ二寸ばかりなる白紙にかくなり。

かく式は

巣雲　懐昭等 拝　賀

又の式

某甲 禮　賀

又の式

某甲 拝　賀

某甲　禮拜

かく式おほけれど、大旨かくのごとし、しかあれば門側にはこの牓あまたみゆるなり、門側には左邊におさず、門の右におすなり。この牓は、齋罷に、本寮主をさめとる。今日は、大小諸堂諸寮、みな門簾をあげたり。堂頭、庫司、首座、次第に煎點といふことあり、しかあれども遠島深山のあひだには省略すべし、ただこれ禮數なり。退院の長老、および立僧の首座、おのおの本寮につきて知事頭首のために、特爲煎點するなり。かくのごとく結夏してより功夫辨道するなり、衆行を辨肯せりといへども、いまだ夏安居せざるは、佛祖の兒孫にあらずまた佛祖にあらず、孤獨園、靈鷲山、みな安居によりて現成せり。安居の道場、これ佛祖の心印なり、諸佛の住世なり。」解夏、七月十三日、衆寮煎點諷經、またその月の寮主これをつとむ。

十四日、晩の念誦、來日の陞堂、人事、巡寮、煎點、並同二結夏一、唯牓狀詞語、不レ同而已。

庫司湯牓云。

庫司今晩、就二雲堂一煎點、特爲首座大衆、聊表二解制之儀一、伏冀衆慈同垂二光降一、

庫司比丘某甲謹白

土地堂念誦、詞云、

切以、金風扇レ野、白帝司レ方、當ニ覺皇解制之時一、是法歳周圓之日。九旬無レ難、一衆咸安、誦ニ持諸佛洪名一、仰報ニ合堂眞宰一、仰憑大衆念。

これよりのちは、結夏の念誦におなじ。」陞堂罷、知事等謝詞にいはく、『伏喜法歳周圓、無ニ諸難事一、此蓋和尚法力癃庇、下情無レ任ニ感激之至一。』住持人謝詞いはく、『此者法歳周圓、皆謝ニ某首鑑寺人等法力相資一、不レ任ニ感激之至一。』堂中首座已下、寮中寮主已下謝詞にいはく、『九夏相依、三業不善、惱ニ亂大衆一、伏望慈悲。』知事頭首告云、『衆中兄弟行脚、須レ候ニ茶湯罷一、方可ニ隨意一、如有ニ緊急縁事一不レ在ニ此限一』この儀は、これ威音空王の前際後際よりも頂𩕳量なり、佛祖のおもくすることただこれのみなり、外道天魔のいまだ惑亂せざる、ただこれのみなり。三國のあひだ、佛祖の兒孫たるもの、いまだひとりもこれをおこなはざるなし、外道はいまだきかず、佛祖一大事の本懷なるがゆゑに、得道のあしたより、涅槃のゆふべにいたるまで開演するところ、ただ安居の宗旨のみなり。西天の五部の僧衆ことなれども、おなじく九夏安居を護持してかならず修證す。震旦の九宗の僧衆、ひとりも破夏せず、生前にすべて九夏安居せざらんをば、佛弟子比丘僧と稱すべからず。ただ因地に修習するのみにあらず、果位の修證なり。大覺世尊、すでに一代のあひだ、一夏も闕如なく修證しましませり、しるべし果上の佛證なりといふことを。しかあるを九夏安居は修證せざれども、われは佛祖の兒孫なるべしといふは、わらふべし、わらふにたらざるおろかなるものなり、かくのごとくいはんともがらのことばをば、かくべからず、共語すべからず、同坐

【西天の五部】優婆離結集の律藏、後に優婆毱多に至りて五部に分たる、
一曇無德部四分律
二薩婆多部十誦律
三彌沙塞部五分律
四迦葉遺部解脫律
五婆麁富羅部僧祇律是なり。

【震旦の九宗】倶舍成實律三論天台華嚴法相眞言禪の九宗なり。

すべからず、ひとつみちをあゆむべからず、佛法には梵壇の法をもて悪人を治するがゆゑに、ただまさに九夏安居これ佛祖と會取すべし、保任すべし。その正傳しきたれること、七佛より摩訶迦葉におよぶ。西天二十八祖、嫡嫡正傳せり。第二十八祖みづから震旦にいでて、二祖大祖正宗普覺大師をして正傳せしむ。二祖よりこのかた、嫡嫡正傳して、而今に正傳せり、震旦にいりて、まのあたり佛祖の會下にして正傳し、日本國に正傳す、すでに正傳せる會にして、九旬坐夏しつれば、すでに夏法を正傳するなり、この人と共住して安居せしは、まことの安居なるべし、まさしく佛在世の安居より、嫡嫡面授しきたれるがゆゑに、佛面祖面まのあたり正傳しきたれり、佛祖身心したしく證契しきたれり、かるがゆゑにいふ安居をみるは佛をみるなり、安居を證するは佛を證するなり、安居を行ずるは佛を行ずるなり。安居をきくは佛をきくなり、安居をならふは佛を學するなり。おほよそ九旬安居を、諸佛諸祖、いまだ違越しましまさざる法なり。しかあればすなはち人王、釋王、梵王等、比丘僧となりて、たとひ一夏なりといふとも安居すべし、それ見佛ならん。人衆、天衆、龍衆、たとひ一九旬なりとも、比丘比丘尼となりて安居すべし、すなはち見佛ならん。佛祖の會にまじはりて、九旬安居しきたれるは、見佛來なり。われらさいはひにいま露命のおちざるさき、あるひは天上にもあれ、あるひは人間にもあれ、すでに一夏安居するは、佛祖の皮肉骨髓をもて、みづからが皮肉骨髓に換却せられぬるものなり。佛祖きたりてわれらを安居するがゆゑに、面面人人の安居を行ずるは、安居の面面人人を

【世尊告圓覺】圓覺經の文。

【世尊於一處】大方廣寶篋經の取意文也。永平廣錄卷八小參章往檢。

行ずるなり。恁麼なるがゆゑに安居ある千佛萬祖といふのみなり。ゆゑいかんとなれば、安居これ佛祖の皮肉骨髓、心識身體なり、頂顙眼睛なり、拳頭鼻孔なり、圓相佛性なり、拂子拄杖なり、竹篦蒲團なり。安居はあたらしきをつくりいだすにあらざれども、ふるきをさらにもちゐるにはあらざるなり。

世尊告二圓覺菩薩、及諸大衆、一切衆生一言、「若經二夏首一、三月安居、當レ爲二清淨菩薩止住一、心離二聲聞一、不レ假二徒衆一、至二安居日一、即於二佛前一作二如レ是言一、我比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、某甲踞二菩薩乘一、修二寂滅行一、同入二清淨實相住持一、以二大圓覺一、爲二我伽藍一、身心安居平等性智、涅槃自性、無二繫屬一故、今我敬請、不レ依二聲聞一、當下與二十方如來及大菩薩一、三月安居上、爲レ修二菩薩無上妙覺大因緣一故、不レ繫二徒衆一、善男子、此名二菩薩示現安居一。」しかあればすなはち比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷等、かならず安居三月にいたるごとには、十方如來、および大菩薩とともに、無上妙覺大因緣を修するなり。しるべし優婆塞優婆夷も安居すべきなり。この安居のところは、大圓覺なり。しかあればすなはち鷲峯山、孤獨園、おなじく如來の大圓覺伽藍なり。十方如來、及大菩薩、ともに安居三月の修行あること、世尊のをしへを聽受すべし。

世尊於二一處一、九旬安居、至二自恣日一、文殊倏來在レ會、迦葉問二文殊一云、「今夏何處安居。」文殊云、「今夏在二三處一安居。」迦葉於レ是集レ衆白椎、欲レ擯二文殊一、纔擧二揵稚一、即見下無量佛刹顯現、一一佛所、有二一一文殊一、有二一一迦葉一、擧レ椎欲レ擯二文殊一、世尊於レ是告二迦葉一

云、汝今欲レ擯二阿那箇文殊一、于時迦葉茫然。圜悟禪師拈古云、『鐘不レ撃不レ響、鼓不レ打不レ鳴。迦葉既把二定要津一、文殊乃十方坐斷、當時好一場佛事、可レ惜放二過一著一、待二釋迦老子道下欲レ擯二阿那箇文殊一、便與二擊一椎一、看他作二什麼合殺一。圜悟禪師頌古云、『大象不レ遊二兎徑一、燕雀安知二鴻鵠一、據レ令宛若レ成レ風、破レ的渾如レ囓レ鏃、徧界是文殊、徧界是迦葉、相對各儼然、擧レ椎何處罰、好一劄、金色頭陀曾落節。』しかあればすなはち世尊一處安居、文殊三處安居たりといへども、いまだ不安居あらず、もし不安居は、佛及菩薩にあらず、佛祖の兒孫なるもの、安居せざるはなし、安居せんは、佛祖の兒孫としるべし。安居するは佛祖の身心なり。佛祖の眼睛なり。佛祖の命根なり。安居せざらんは、佛祖の兒孫にあらず、佛祖にあらざるなり。いま泥木素金七寶の佛菩薩、みなともに安居三月の夏坐おこなはるべし。これすなはち住持佛法僧寶の故實なり、佛訓なり。おほよそ佛祖の屋裏人さだめて坐夏安居三月つとむべし。

寛元三年乙巳夏安居六月十三日在二越宇大佛寺一示衆

正法眼藏安居　畢

【寛元三年】祖齡四十六歲、大佛寺に於ける示衆。

正法眼藏他心通

西京光宅寺慧忠國師者、越州諸暨人也。姓冉氏、自レ受二心印一、居二南陽白崖山黨子谷一、四十餘

【他心通】外道に他心通あり、小乘聲聞の六通中に他心通あり、支那に道家の妖通あり、

佛家にいふ神通と迥かに異れり。如來悉知悉見の他心通を說く、自他不二心心無異の道理を知るべし。

【西京光宅寺】傳燈卷五慧忠國師章詳出。

【大耳三藏】西天竺國より來るといふのみにて傳記全く不詳、三藏は經律論に通ずる學者卽ち敬語なり。

【這野狐精】野狐の化けたるにて眞個の物にあらざるを叱する語。

祀、不下山門、道行聞于帝里。唐肅宗上元二年、勅中使孫朝進賚詔徵赴京、待以師禮、勅居千福寺西禪院。及代宗臨御、復迎止光宅精藍、十有六載、隨機說法。時有西天大耳三藏到京、云得他心慧眼。帝勅令與國師試驗。三藏才見師便禮拜、立于右邊。師問曰、「汝得他心通耶。」對云、「不敢。」師曰、「汝道老僧卽今在什麼處。」三藏云、「和尚是一國之師、何得却去西川看競渡。」師再問、「汝道老僧卽今在什麼處。」三藏云、「和尚是一國之師、何得却在天津橋上看弄猢猻。」『師第三問、「汝道老僧卽今在什麼處。」』三藏良久罔知去處。師叱曰、「這野狐精、他心通在什麼處。」三藏無對。僧問趙州曰、「大耳三藏第三度、不見國師在處、未審國師在什麼處。」趙州云、「在三藏鼻孔上。」僧問玄沙、「既在鼻孔上、爲什麼不見。」玄沙曰、「只爲太近。」僧問仰山曰、「大耳三藏第三度爲什麼不見國師。」仰山曰、「前兩度是涉境心、後入自受用三昧、所以不見。」海會端曰、「國師若在三藏鼻孔上、有什麼難見、殊不知國師在三藏眼睛裏。」玄沙徵三藏曰、「汝道前兩度還見麼。」雪竇明覺重顯禪師曰、「敗也敗也。」大證國師の大耳三藏を試驗せし因緣、ふるくより下語し道著する臭拳頭おほしといへども、ことに五位の老拳頭あり。しかあれどもこの五位の尊宿、おのおの諦當甚諦當はなきにあらず、國師の行履を覷見せざるところおほし。ゆゑいかんとなれば、古今の諸員、みなおもはく、前兩度は三藏あやまらず國師の在處をしれりとおもへり。これすなはち古先のおほきなる不是なり、瞭進しらずんばあるべからず。いま五位の尊宿を疑著すること兩般あり、一者いは

く國師の三藏を試驗する本意をしらず、二者いはく國師の身心をしらず。しばらく國師の三藏を試驗する本意をしらずといふは、第一番に國師いはく、「汝道老僧即今在什麼處」といふ本意は三藏もし佛法を見聞する眼睛ありや。試問するなり、三藏おのれづから佛法の他心通ありやと試問するなり。當時もし三藏に佛法あらば、「老僧即今在什麼處」としめされんとき、出身のみちあるべし、親曾の便宜あらしめん。いはゆる國師道の「老僧即今在什麼處」は、什麼生是老僧と問著せんがごとし。「老僧即今在什麼處」は、即今是什麼時節と問著するなり。「在什麼處」は、道裏是什麼處在と道著するなり、喚什麼作老僧の道理あり、國師かならずしも老僧にあらず、老僧かならず拳頭なり。大耳三藏、はるかに西天よりきたれりといへども、このこころをしらざることは、佛道を學せざるによりてなり、いたづらに外道二乘のみちをのみまなべるによりてなり。國師かさねてとふ「汝道老僧即今在什麼處」。ここに三藏さらにいたづらのことばをたてまつる、國師かさねてとふ、「汝道老僧即今在什麼處」ときに三藏ややひさしくあれども茫然として祇對なし。國師ときに三藏を叱していはく、「這野狐精、他心通在什麼處」かくのごとく叱せらるといへども、三藏なほいふことなし、祇對せず通路なし。しかあるを古先みなおもはくは、國師の三藏を叱すること、前兩度は國師の所在をしれり、第三度のみしらずみざるがゆゑに、國師に叱せらるとおもふ、これおほきなるあやまりなり、國師の三藏を叱することは、おほよそ三藏はじめより佛法也未夢見在なるを叱するなり、前兩度はしれりといへども第三度をしらざ

ると叱するにあらざるなり。おほよそ他心通をえたりと自稱しながら、他心をしらざることを叱するなり、國師まづ佛法に他心通ありやと問著し試驗するなり、すでに不敢といひてありときこゆ、そのゝち國師おもはく、たとひ佛法に他心通ありといひて、他心通を佛心にあらしめば、恁麼なるべし。道處もし擧處なくば、佛法なるべからずとおもへり。三藏たとひ第三度わづかにいふところありとも、前兩度のごとくあらば、道處あるにあらず、總じて叱すべきなり。いま國師三度こゝろみに問著することは、三藏もし國師の問著をきくことをうるやと、たびたびかさねて三番の問著あるなり。二者いはく、國師の身心をしれる古先なし。いはゆる國師の身心は、三藏法師のたやすく見及すべきにあらず、知及すべきにあらず、十聖三賢もおよばず、補處等覺のあきらむるところにあらず、三藏學者の凡夫なる、いかでか國師の渾身をしらん、この道理、かならず一定すべし。國師の身心は、三藏の學者しるべしみるべしといはば、謗佛法なり。經論師と齊肩なるべしと認ずるの狂顚のはなはだしきなり。他心通をえたらんともがら國師の在處しるべしと學することなかれ。他心通は、西天竺國の土俗として、これを修得するともがら、まゝにあり。發菩提心によらず、大乘の正見によらず、他心通をえたるともがら他心通のちからにて、佛法を證究せる勝躅、いまだかつてきかざるところなり。他心通を修得してのちにも、さらに凡夫のごとく、發心し修行せば、おのづから佛道に證入すべし。たゞ他心通のちからをもて佛道を知見することをえば、先聖みなまづ他心通を修得して、そのちからをもて、佛果を

【不中用】百川學海云く人の用ふる無き者を言ふと。

【頻伽の卵にある】大論廿八に如迦羅頻伽鳥在殼中未出發聲微妙勝於餘鳥とあり

【尺璧なほ寶に】淮南子原道訓に聖人不貴尺之璧而重寸之陰時難得而易失也と

しるべきなり。しかあること千佛萬祖の出世にもいまだあらざるなり。すでに佛祖の道をしることあたはざらんば、なににかせん、佛道に不中用なりといふべし。他心通をえたるも、他心通をえざる凡夫も、ただひとしかるべし。佛性を保任せんことは、他心通も凡夫もおなじかるべきなり。學佛のともがら、外道二乘の五通六通を、凡夫よりもすぐれたりとおもふことなかれ。ただ道心あり佛法を學せんものは、五通六通よりもすぐれたるべし。頻伽の卵にある、聲まさに衆鳥にすぐれたるがごとし。いはんやいま西天に他心通といふは、他念通といひぬべし、念起はいささか緣ずといへども、未念は茫然なり、わらふべし。いかにいはんや心かならずしも念にあらず、念かならずしも心にあらず。心の念ならんとき、他心通しるべからず。しかあればすなはち西天の五通六通、このくにの薙艸修田にもおよぶべからず、都無所用なり。かるがゆゑに震旦國より東には、先德みな五通六通をこのみ修せず、その要なきによりてなり。尺璧はなほ要なるべし、五通六通は要にあらず、尺璧なほ寶にあらず、寸陰これ要樞なり。五六通、たれの寸陰をおもくせん人かこれを修習せん。おほよそ他心通のちから、佛智の邊際におよぶべからざる道理、よくよく決定すべし。しかあるを五位の尊宿、ともに三藏さきの兩度は國師の所在をしれりとおもへるはもともあやまれるなり。國師は佛祖なり、三藏は凡夫なり、いかでか相見の論にもおよばん。國師まづいはく、汝道老僧即今在什麼處。この問かくれたるところなし、あらはれたる道處あり、三藏のしらざらんはとがにあらず、五位の尊宿のきかずみざるはあやまりな

【五位尊宿勘破】趙州、玄沙、仰山再び玄沙、海會端の語を難詰して眞意を表はす。

り。すでに國師いはく、「老僧卽今在二什麽處一」とあり、さらに「汝道老僧心卽今在二什麽處一」といはず、「老僧念卽今在二什麽處一」といはず、もともきゝしり、みとがむべき道處なり。しかあるをしらずみず、國師の道處をきかずみず、かるがゆゑに國師の身心をしらざるなり。道處あるを國師とせるがゆゑに、もし道處なきは國師なるべからざるがゆゑに。いはんや國師の身心は、大小にあらず自他にあらざることしるべからず、頂𩕳あること鼻孔あることとわすれたるがごとし。國師たとひ行李ひまなくとも、いかでか作佛を圖せん、かるがゆゑに佛を念じて相待すべからず。國師すでに佛法の身心あり、神通修證をもて測度すべからず、絕慮忘緣を擧して擬議すべからず、商量不商量のあたれるところにあらざるべし。國師は有佛性にあらず、無佛性にあらず、虛空身にあらず。かくのごとくの國師の身心、すべてしらざるところなり。いま曹谿の會下には、青原南嶽のほかは、わづかに大證國師、その佛祖なり、いま五位の尊宿、おなじく勘破すべし。」趙州のいはく、「國師は三藏の鼻孔上にあるがゆゑにみずといふ。」この道處そのいひなし。國師なにとしてか三藏の鼻孔上にあらん、三藏いまだ鼻孔あらず。もし三藏に鼻孔ありとゆるさば、國師かへりて三藏をみるべし。國師の三藏をみることたとひゆるすとも、たゞこれ鼻孔對鼻孔なるべし、三藏さらに國師と相見すべからず。」玄沙いはく、「只爲二太近一」まことに太近はさもあらばあれ、あたりにはいまだあたらず。いかならんかこれ太近、おもひやる玄沙いまだ太近をしらず、太近を參ぜず。ゆゑいかんとなれば、太近に相見なしとのみしりて、相見の太

【小釋迦のほまれ】會元九仰山章に云く有二梵土一從レ空而至。師云近離何處。曰西天。師云幾時離レ彼。曰今早。師曰太遲生。曰遊山翫水。師曰神通遊戲則不レ無。佛法須下還二老僧一始得上。曰特來二東土一禮二文殊一、卻遇二小釋迦一と。

近なることをしらず、いふべし佛法におきて遠之遠なりと。もし第三度のみを太近といはば、前兩度は太遠在なるべし。しばらく玄沙にとふ、「なんぢなにをよんでか太近とする、拳頭をいふか、眼睛をいふか、いまよりのち太近にみるところなしといふことなかれ。」仰山いはく、「前兩度是涉境心後入二自受用三昧一所以不レ見。」仰山なんぢ東土にありながら小釋迦のほまれを西天にほどこすといへどもいまの道取おほきなる不是あり。涉境心と自受用三昧とことなるにあらず、かるがゆゑに涉境心と自受用とのことなるゆゑにみずといふべからず。しかあれば自受用と涉境心とのゆゑを立すとも、その道取いまだ道取にあらず、自受用三昧にいれば、他人われをみるべからずといはば、自受用さらに自受用を證すべからず、修證あるべからず。仰山なんぢ前兩度は實に國師の所在を三藏みるとおもひしれりと學せば、いまだ學佛の漢にあらず、おほよそ大耳三藏は、第三度のみにあらず、前兩度も、國師の所在は、しらずみざるなり。この道取のごとくならず、三藏の國師の所在をしらざるのみにあらず、仰山もいまだ國師の所在をしらずといふべし。しばらく仰山にとふ、「國師卽今在二什麼處一。」このとき、仰山もし開口を擬せば、まさに一喝をあたふべし。」玄沙徵していはく、「前兩度還見麼。」いまこの前兩度還見麼の一言、いふべきをいふときこゆ、玄沙みづから自己の言句を學すべし。この一句、よきことはすなはちよし、しかあれどもただこれ見如不見といはんがごとし、ゆゑに是にあらず。これをききて、雪竇山明覺禪師重顯いはく、「敗也敗也。」これ玄沙のいふところを道とせるとき、しかいふとも、玄沙の

道は道にあらずとせんとき、しかいふべからず。海會端いはく、「國師若在三藏鼻孔上、有什麼難見。殊不知國師在三藏眼睛裏。」これまた第三度を論ずるのみなり。前兩度もかつていまだみざることを呵すべきを呵せず、いかでか國師を三藏の鼻孔上にあり、眼睛裏にあるともしらん。もし恁麼いはば、國師の言句いまだきかずといふべし。三藏いまだ鼻孔なし眼睛なし、たとひ三藏おのれが眼睛鼻孔を保任せんとすとも、もし國師きたりて鼻孔眼睛裏にいらば、三藏の鼻孔眼睛、ともに當時裂破すべし。すでに裂破せば國師の窟籠にあらず。五位の尊宿、ともに國師をしらざるなり。國師はこれ一代の古佛なり、一世界の如來なり。佛正法眼藏あきらめ正傳せり、木槵子眼たしかに保任せり、自佛に正傳し、他佛に正傳す。釋迦牟尼佛と同參しきたれりといへども、七佛と同時參究す。かたはらに三世諸佛と同參しきたれり、空王のさきに成道せり、空王ののちに成道せり、正當空王佛に同參成道せり。國師もとより娑婆世界を國土とせりといへども、娑婆かならずしも法界のうちにあらず、盡十方界のうちにあらず。釋迦牟尼佛の娑婆國主なる、國師の國土をうばはず、罣礙せず。たとへば前後の佛祖おのおのそこばくの成道あれども、あひうばはず、罣礙せざるがごとし。前後の佛祖の成道、ともに成道に罣礙せらるるがゆゑにかくのごとし。大耳三藏の國師をしらざるを證據として、聲聞縁覺人、小乘のともがら、佛祖の邊際をしらざる道理、あきらかに決定すべし。國師の三藏を叱する宗旨、あきらめ學すべし。いはゆるたとひ國師なりとも前兩度は所在をしらん、第三度はわづかにしられざらんを叱

【寛元三年】祖齢四十六歳、大佛寺に於ける示衆。

せんはそのいひなし。三分に兩分しられんは、全分をしれるなり、かくのごとくならん叱すべきにあらず、たとひ叱すとも全分の不知にあらず。三藏のおもはんところ、國師の懡㦬なり、わづかに第三度しられずとて叱せんには、たれか國師を信ぜん、三藏の前兩度をしりぬるちからをもて、國師をも叱すべし。國師の三藏を叱せし宗旨は、三度ながらはじめよりすべて國師の所在所念身心をしらざるゆゑに叱するなり。かつて佛法を見聞習學せざりけることを叱するなり。この宗旨あるゆゑに、第一度より第三度にいたるまで、おなじことばにて問著するなり。第一番に三藏まうす、和尚是一國之師、何得却去西川看競渡。しかいふに國師いまだいはず、なんぢ三藏まことに老僧所在をしれりとゆるさず、ただかさねざまに三度しきりに問するのみなり。この道理をしらずあきらめずして、國師よりのち、數百歳のあひだ、諸方の長老、みだりに下語說道理するなり。前來の箇箇、いふことすべて國師の本意にあらず、佛法の宗旨にかなはず、あはれむべし前後の老古錐おのおの蹉過せること。いま佛法のなかにもし他心通ありといはば、まさに他心通あるべし、他拳頭通あるべし、他眼睛通あるべし。すでに恁麼ならば、まさに自心通あるべし、自心通なるべし、すでにかくのごとくならんには自心の自拈、いまし自心通なるべし。かくのごとく道取現成せん。おのれづから心づからの他心通ならん、しばらく問著すべし。拈他心通也是、拈自心通也是、速道、速道。是則且置、汝得吾髓、是他心通也。

爾時寛元三年乙巳七月四日在越宇大佛寺示衆

正法眼藏他心通　畢

【王索仙陀婆】仙陀婆は一名四實、鹽器水馬也。王臣に向つて仙陀婆を求索す、鹽か器か水か馬か、有智の臣のみ能く此名を知る。師資相見、君臣道合、心心相通、知音は知音と作家は作家と相見了の消息なり。

【大般涅槃經中】卷十如來性品の文

【大宋宏智上堂】宏智錄第四卷に出づ。

正法眼藏王索仙陀婆

有句無句、如藤如樹、餧驢餧馬、透水透雲。すでに恁麼なるゆゑに、

大般涅槃經中、世尊道、譬如大王告諸群臣仙他婆來。仙他婆者、一名四實、一者鹽、二者器、三者水、四者馬。如是四物、共同一名。有智之臣、善知此名。若王洗時索仙陀婆、即便奉水。若王食時、索仙他婆、即便奉鹽。若王食已、欲飲漿時、索仙他婆、即便奉器。若王欲遊、索仙他婆、即便奉馬。如是智臣、善解大王四種密語。

この王索仙他婆、ならびに臣奉仙他婆、きたれることひさし。法服とおなじくつたはれり、世尊すでにまぬかれず擧拈したまふゆゑに、兒孫しげく擧拈せり。疑著すらくは世尊と同參しきたれるは、仙他婆を履踐とせり、世尊と不同參なるは、更買草鞋行脚、進一歩始得。すでに佛祖屋裏の仙他婆、ひそかに漏泄して大王家裏に、仙他婆あり。

大宋慶元府天童山宏智古佛上堂、示衆云、學僧問趙州、「王索仙他婆時如何。」趙州曲躬叉手。雪竇拈云、「索鹽奉馬。」師云、雪竇一百年前作家、趙州百二十歲古佛。趙州若是、雪竇不是、雪竇若是、趙州不是。且道竟畢如何。天童不免下箇注脚。差之毫釐、失之千里。會也打草驚蛇、不會也燒錢引鬼。荒田不揀老俱胝、只今信手拈來

【南泉一日見】禪類卷十六に出づ。鄧隱峯は福州邵武の人、馬祖に嗣ぐ。

【香嚴僧問】傳燈香嚴章に出づ。

【鈍置殺人】エエ鈍な奴、人までばかにしてしまひくさると云ふ意。

底。「先師古佛上堂のとき、よのつねにいはく、「宏智古佛。」しかあるを宏智古佛と古佛と相見せる、ひとり先師古佛のみなり。宏智のとき、徑山の大慧禪師宗杲といふあり、南嶽の遠孫なるべし。大宋一國の天下おもはく、大慧は宏智にひとしかるべし、あまつさへ宏智よりもその人なりとおもへり。このあやまりは大宋國内の道俗、ともに疎學にして道眼いまだあきらかならず、知人のあきらめなし、知己のちからなきによりてなり。宏智のあぐるところ眞箇の立志あり、趙州古佛曲躬叉手の道理を參學すべし。正當恁麼時これ王索仙陀婆なりやいなや、臣奉仙陀婆なりやいなや。雪竇の索鹽奉馬の宗旨を參學すべし、いはゆる索鹽奉馬、ともに王索仙陀婆なり、臣索仙陀婆なり。世尊索仙陀婆、迦葉破顔微笑なり。初祖索仙陀婆、四子馬鹽水器を奉ず。馬鹽水器のすなはち索仙陀婆なるとき、奉馬奉水する關棙子學すべし。

南泉一日見二鄧隱峯來一、遂指二淨缾一云、「淨缾即境、缾中有レ水、不レ得レ動二著境一、與二老僧一將レ水來。」峯遂將二缾水一向二南泉面前一瀉、泉即休。すでにこれ南泉索水、徹底海枯、隱峯奉器、缾漏傾湫。しかもかくのごとくなりといへども、境中有水、水中有境を參學すべし、動水也未、動境也未。

香嚴襲燈大師、因僧問、「如何是王索仙陀婆。」嚴云、「過二這邊一來。」僧過去。嚴云、「鈍二置殺人一。」しばらくといふ香嚴道底の過這邊來これ索仙陀婆なりや、奉仙陀婆なりや、試請道看。ちなみに僧過這邊去せる、香嚴の索底なりや、香嚴の奉底なりや、香嚴の本期なり

【敗軍之將】史記淮陰侯傳に云く、韓信生得李左車、解其縛師事之、左車曰臣聞敗軍之將不可以言勇、亡國太夫不可以圖存、敗亡之虜何足權大事と。

【膠柱調絃】書言故事に膠柱は拘執して通ぜざるを言ふ。碧巖論に遺劍刻舟膠柱調瑟とあり。

【世尊一日陞座】會元世尊章。碧巖集九十二則雪竇頌古。

や、もし本期にあらずば、鈍置殺人といふべからず、もし本期ならば、鈍置殺人なるべからず。香嚴一期の盡力道底なりといへども、いまだ喪身失命をまぬかれず、たとへばこれ敗軍之將、さらに武勇をかたる。おほよそ說黃道黑、頂𩕳眼睛、おのれづから仙陀婆の索奉審審細細なり。拈拄杖、擧拂子たれかしらざらんといひぬべし。しかあれども膠柱調絃するともがらの分上にあらず、このともがら膠柱調絃をしらざるがゆゑに、分上にあらざるなり。

世尊一日陞座、文殊白椎曰、「諦觀法王法法王法如是。」世尊下座。雪竇山明覺禪師重顯云、「列聖叢中作者知、法王法令不如斯、衆中若有仙陀客、何必文殊下一椎。」しかあれば雪竇道は、一椎もし渾身無孔ならんがごとくば、下了未下、ともに脫落無孔ならん、もしかくのごとくならんは一椎すなはち仙陀婆なり、すでに恁麼人ならん、これ列聖一叢仙陀客なり、このゆゑに法王法如是なり。使得十二時、これ索仙陀婆なり、被十二時使、これ索仙陀婆なり、索拳頭奉拳頭すべし、索拂子奉拂子すべし。しかあれどもいま大宋國の諸山にある長老と稱するともがら、仙陀婆すべて夢也未見在なり。苦哉苦哉、祖道陵夷なり、苦學おこたらざれ、佛祖の命脈まさに嗣續すべし。たとへば如何是佛といふがごとき、即心是佛と道取する、その宗旨いかん。これ仙陀婆にあらざらんや、即心是佛といふは、たれといふぞと審細に參究すべし、たれかしらん仙陀婆の築著礚著なることを。

【寛元三年】祖師四十六歳、大佛寺に於ける示衆。

爾時寛元三年十一月二十三日在ニ越州大佛寺一示衆

正法眼藏王索仙陀婆　畢

【示庫院文】庫院に奉仕する僧衆に示誨する文なり。三業中特に口業を戒めて身を愼しみ意を愼ましむ。

【寛元四年】示衆の紀年月日を冒頭に擧げしなり。

【齋僧之法】禪苑清規第十齋僧儀の語なり。

【毘闍、首陀】印度四姓階級中卑賤なる族、毘闍は第三位にしてアリアン民族中の最下位、商業を營む階級。首陀はアリアン族に征服せられたる土着の劣等人種、農業屠殺の賤業に從事す。

【香積局】維摩經香積品に衆香世界有レ佛名ニ香積一以ニ衆香飯一與ニ化菩

正法眼藏示庫院文

寛元四年八月六日示レ衆云、「齋僧之法、以レ敬爲レ宗。」はるかに西天竺の法を正傳し、ちかくは震旦國の法を正傳するに、如來滅度ののち、あるひは諸天の天供を、佛ならびに僧に奉獻し、あるひは國王の王膳を、佛ならびに僧に供養し、たてまつりき。そのほか長者居士のいへよりたてまつり、毘闍首陀のいへよりたてまつるもありき。かくのごとく供養、ともに敬重するところ、ねんごろなり。よく天上人間のなかに、極重の敬禮をもちゐ、至極の尊言をして、うやまひたてまつりて、飯饌等の供養のそなへを造作するなり、深意あり。いま遠方の深山なりとも、寺院の香積局、その禮儀言語、したしく正傳すべきなり、これ天上人間の佛法を習學するなり。いはゆる粥をば、御粥とまをすべし、朝粥とも、まをすべし、粥とまをすべからず。齋をば、御齋とまをすべし、齋時とも、まをすべし、齋とまをすべからず。よねしろゐ、まゐらせよと、まをすべし、よねつけと、いふべからず。よねあらひ、まゐらするをば、淨米し、まゐらせよと、まをすべし、よねかせと、まをすべからず。御菜の御料のなにもの、えりまゐらせよと、まをすべし、菜えれと、まをす

べからず。御汁のもの、し、まゐらせよと、まをすべし、汁によと、まをすべからず。御羹しまゐらせよともまをすべし、羹せよと、まをすべからず。御齋、御粥は、むませさせ、たまひたると、まをすべし。齋粥いれたてまつらん調度、みなかくのごとく、うやまふべし、不敬はかへりて、殃過をまねく、功德をうることなきなり。齋粥をととのへ、まゐらするとき、人の息にて米菜および、いづれの、ものをも、ふくべからず、たとひ、かはきたるものなりとも、裰袖に觸することなかれ。頭顔に觸たる手を、いまだあらはずして、齋粥の器、および齋粥に手ふるることなかれ。よねをえり、まゐらすより、乃至飯羹に、つくり、まゐらする、經營のあひだ、身のかゆき、ところ、かきはて、かならず、その手をあらふべし。齋粥ととのへまゐらするところにては、佛經の文、および祖師の語を諷誦すべし、世間の語、雜穢の話、いふべからず。おほよそ、米菜鹽醬等の、いろいろのもの、ましますと、まをすべし、米あり菜ありと、まをすべからず。齋粥のあらんところを、すぎんには、僧行者は問訊したてまつるべし、零菜零米等ありとも、齋粥ののち使用すべし、齋粥をはらざらんほど、をかすべからず。齋粥ととのへまゐらする調度、ねんごろに護惜すべし、他事に、もちゆべからず。在家より、きたれらん、ともがらの、いまだ手をきよめざらんには、手をふれさすべからず、在家よりきたれらん菜果等、いまだきよめずば、灑水して行香し行火してのちに、三寶衆僧にたてまつるべし、現在大宋國の諸山諸寺には、もし在家より饅頭、乳餅、蒸餅等、きたらんは、かさねてむしまゐらせて、衆僧にたてまつ

薩ーと、香積局は庫下のこと。

【御粥御齋】韻會に凡そ天子の止まる所を御前といふ、書を御書といふ、皆四海を統ぶるの義を取ると。粥に八種あり、酥粥油粥胡麻粥乳粥小豆粥麻沙豆粥麻子粥薄粥なり。齋は午齋にして飯なり。

【世間の語】政治經濟、治亂に關する批評、所謂世俗の語。

【雜穢の話】一切の染心より發する所の言語。

【非時之藥石】華嚴演義疏に云く西域に一歳を分つて三際と爲す正月十六日より五月十五日までを熱時、五月十六日より九月十五日までを雨時、九月十六日より正月十五日までを寒時と爲すと。藥石は說文に許愼云く石を以て病を刺す也と、叢林の夕食を藥石と稱す、午時を過ぎて食するを非時食、邪命食として戒しむるが故に藥石として聊か空腹をしのぐが故に、

【希玄】本朝名家譜に道元和尙諱希玄後改二道元一と云ふ。

【出家】出家功德を說く出家功德卷最も詳し、其一分を說くもの本卷なり。

【禪苑淸規云】禪苑第一卷受戒條下

る、これきよおするなり、いまだむさざれば、たてまつらざるなり、これおほかるなかに、すこしばかりなり、この大旨をえて、庫院香積、これを行ずべし、萬事非議なることなかれ。

右條條、佛祖之命脈、衲僧之眼睛也、外道未レ知、天魔不レ堪、唯有ニ佛子一、卽能傳レ之、庫院之知事、明察莫レ失焉。

開闢沙門　道元示

永平寺

今告ニ知事一、自今已後、若過ニ午後一、檀那供飯、留ニ待翌日一、如ニ其麪餠菓子、諸般粥等一、雖レ晩猶行、乃佛祖會下藥石也、況大宋國內、有道之勝躅也。

如來曾許ニ雪山僧裹服衣一、當山亦許ニ非時之藥石一矣。

開闢永平寺　希玄印

正法眼藏示庫院文　畢

正法眼藏出家

禪苑淸規云、三世諸佛皆曰ニ出家成道一、西天二十八祖、唐土六祖、傳ニ佛心印一、盡是沙門、蓋以レ嚴ニ淨毘尼一、方能洪ニ範三界一、然則參禪問道、戒律爲レ先、既非ニ離レ過防レ非、何以成佛作祖。受戒之法、應レ備ニ三衣鉢具、竝新淨衣物一、如レ無ニ新衣一、浣染令レ淨。

【迦葉隨順世尊】傳燈卷一迦葉章。

【大般若經第三】初分學觀品の文。

入壇受戒、不得借衣鉢、一心專注、愼勿異轍、像佛形儀、具佛戒律、得佛受用、此非小事、豈可輕心。若借衣鉢、雖登壇受戒、並不得戒。若不曾受、一生爲無戒之人、濫厠空門、空受信施、初心入道、法律未諳、師匠不言、陷人於此、今茲苦口敢望銘心。旣受聲聞戒、應受菩薩戒、此入法之漸也。」あきらかにしるべし諸佛諸祖の成道、ただこれ出家受戒のみなり、諸佛諸祖の命脈ただこれ出家受戒のみなり。いまだかつて出家せざるものは、ならびに佛祖にあらざるなり、佛をみ祖をみるとは、出家受戒するなり。

「摩訶迦葉隨順世尊、志求出家、冀度諸有、佛言善來比丘、鬚髮自落、袈裟著體。」

ほとけを學して諸有を解脫するとき、みな出家受戒する勝躅かくのごとし。

大般若經第三曰、佛世尊言、『若菩薩摩訶薩、作是思惟、我於何時、當捨國位、出家之日、卽成無上正等菩提、還於是日、轉妙法輪、卽令無量無數有情、遠塵離垢生淨法眼、復令無量無數有情、永盡諸漏、心慧解脫、亦令無量無數有情、皆於無上正等菩提得不退轉、是菩薩摩訶薩、欲成斯事、應學般若波羅蜜多。』

おほよそ無上菩提は、出家受戒のとき滿足するなり、出家の日にあらざれば成滿せず。しかあればすなはち出家之日を拈來して、成無上菩提の日を現成せり、成無上菩提の日を拈出する出家の日なり、この出家の翻筋斗する轉妙法輪なり、この出家すなはち無數有情をして無上菩提を不退轉ならしむるなり。しるべし自利利他、ここに滿足して、阿耨菩提

不退不轉なるは、出家受戒なり、成無上菩提かへりて出家の日を成菩提するなり。まさにしるべし出家の日は、一異を超越せるなり、出家の日のうちに三阿僧祇劫を修證するなり、出家の日のうちに、往無邊劫海轉妙法輪するなり。出家の日は、謂如食頃にあらず、六十小劫にあらず、三際を超越せり、頂𩕳を脱落せり、出家の日は、出家の日を超越せるなり、しかもかくのごとくなりといへども、羅籠打破すれば、出家の日すなはち出家の日なり、成道の日すなはち成道の日なり。

【大論第十三】醉婆羅門出家の故事

大論第十三曰、佛在祇桓、有醉婆羅門、來至佛所、欲作比丘、佛勅諸比丘、與剃頭著袈裟、酒醒驚怪、見身變異忽爲比丘、即便走去、諸比丘問佛、『何以聽醉婆羅門、而作比丘、而今歸去。』佛言、『此婆羅門、無量劫中無出家心、今因醉後、暫發微心、爲此緣故、後出家。如是種種因緣出家破戒、猶勝在家持戒、以在家戒不爲解脱。』佛勅の宗旨あきらかにしりぬ、佛化はただ出家それ根本なり、いまだ出家せざるは佛法にあらず、如來在世、もろもろの外道、すでにみづからが邪道をすてて、佛法に歸依するとき、かならずまづ出家をこふしなり、世尊あるひはみづから善來比丘とさづけまします。あるひは諸比丘に勅して剃頭鬚髮出家受戒せしめましますに、ともに出家受戒の法たちまちに具足せしなり。しるべし佛化すでに身心にかうぶらしむるとき、頭髮自落し、袈裟覆體するなり、もし諸佛いまだ聽許しましまさざるには、鬚髮剃除せられず、袈裟覆體せられず、佛戒受得せられざるなり、しかあればすなはち出家受戒は、諸佛如來の親受記なり。

釋迦牟尼佛言、諸善男子、如來見下諸衆生樂二於小法一、德薄垢重者上、爲二是人一說二我少出家、得二阿耨多羅三藐三菩提一、然我實成佛已來、久遠若レ斯、但以二方便一、敎二化衆生一、令レ入二佛道一、作二如レ是說一。しかあれば久遠實成は、我少出家なり、得阿耨多羅三藐三菩提は、我少出家なり、我少出家を擧拈するに、德薄垢重の樂小法する衆生、ならびに我少出家するなり、我少出家の說法を見聞參學するところに、見佛阿耨多羅三藐三菩提なり、樂小法の衆生を救度するとき、爲是人說我少出家得阿耨多羅三藐三菩提なり。しかもかくのごとくなりといふとも、畢竟してとふべし、出家功德それいくらばかりなるべきぞ、かれにむかふていふべし頂顙許なり。

爾時寬元四年丙午九月十五日在二越宇永平寺一示衆

正法眼藏出家　畢

正法眼藏三時業

第十九祖鳩摩羅多尊者、至二中天竺國一、有二大士一、名二闍夜多一。問曰、『我家父母、素信二三寶一、而嘗縈二疾瘵一、凡所レ營事、皆不二如意一。而我隣家、久爲二旃陀羅行一、而身常勇健、所作和合、彼何幸、而我何辜。』尊者曰、『何足レ疑乎、且善惡之報有二三時一焉、凡人但見二仁夭暴壽、逆吉義凶一、便謂下亡二因果一、虛中罪福上、殊不レ知影響相隨、毫釐靡レ忒、

【釋迦牟尼佛言】法華壽量品の文。

【寬元四年】祖齡四十七歲、永平寺に於ける示衆。

【三時業】因果に三時の業報あることを說いて深く因果業報を信ぜしめ邪見に陷らざらしめむ。

【第十九祖】傳燈卷二、西天第十九代の祖、廿祖闍夜多の爲に三時の業報を說いて深く因果を信ぜしむ。

【邪見】五邪見は身見、邊見、邪見、見取見、戒禁取見、これ皆邪見也、中に就て撥無因果して誹謗正法なるを以て邪見とす。

【善惡之報有】以下漢文にて書かれたる事例等は大毘婆沙論第一百十四巻の文。

【異熟果】原因と性質を異にして成熟する結果、善の因にして樂の果を得、惡の因にして苦の果を得るが如きをいふ。

縱經百千萬劫、亦不磨滅。時闍夜多、聞是語已、頓釋所疑。」鳩摩羅多尊者は、如來より第十四代の付法なり、如來まのあたり名字を記しまします。ただ釋尊一佛の法をあきらめ正傳せるのみにあらず、かねて三世の諸佛の法をも曉了せり。闍夜多尊者、いまの問をまうけしよりのち、鳩摩羅多尊者にしたがひて、如來の正法を修習し、つひに第二十代の祖師となれり。これもまた世尊はるかに第二十祖は、闍夜多なるべしと記しましませり。しかあればすなはち佛法の批判、もののかくのごとくの祖師の所判のごとく習學すべし。いまのよに因果をしらず、業報をあきらめず、三世をしらず、善惡をわきまへざる邪見のともがらには群すべからず。」いはゆる善惡之報、有三時焉といふは、一者順現報受、二者順次生受、三者順後次受、これを三時といふ。佛祖の道を修習するには、その最初より、この三時の業報の理をならひあきらむるなり。しかあらざれば、おほくあやまりて邪見に墮するなり。ただ邪見に墮するのみにあらず、惡道におちて、長時の苦をうく。續善根せざるあひだは、おほくの功德をうしなひ、菩提の道ひさしくさはりあり、をしからざらめや、この三時の業は、善惡にわたるなり。

「第一順現報受業者、謂若業、此生造作增長、即於此生受異熟果。是名順現報受業。」いはく人ありてあるひは善にもあれあるひは惡にもあれ、この生につくりて、すなはちこの生にその報をうくるを、順現報受業といふ。」惡をつくりてこの生に惡報をうけたる例。

【僧伽藍】僧伽藍摩(Saṃghārāma)衆園、僧房、靜處と譯す、寺のこと。
【窣堵婆】梵音スツーパ(Stūpa)大聚、方墳、靈廟、高顯、佛舍利處、塔、塔婆のこと。

曾有採樵者。入山遇雪、迷失途路。時會日暮、雪深寒凍、將死不久、卽前入一蒙密林中。乃見一羆、先在林内。形色青紺、眼如雙炬、其人惶恐、分當失命。此實菩薩現受羆身。見其憂恐、慰諭言、『汝今勿怖、父母於子或有異心、吾今於汝終無惡意。』卽前捧取、將入窟中。溫煖其身、令蘇息已、取諸根果、勸隨所食、恐冷不消、抱持而臥。如是恩養、經於六日、至第七日、天晴路現、人有歸心。羆既知已、復取甘果。飽而餞之。送至林外、慇懃告別。人跪謝曰、『何以報恩。』羆言、『我今不須餘報、但如比日我護汝身、汝於我命、亦願如是。』其人敬諾、擔樵而下山。逢二獵師、問言、『山中見何蟲獸。』樵人答言、『我亦不見餘獸。唯見一羆。』獵師求請、『能示我不。』樵人答言、『若能與我三分之二、吾當示汝。』獵師依許、知與俱行、竟害羆命、分肉爲三。樵人兩手欲取羆肉、惡業力故、雙臂俱落。如珠綫斷、如截藕根。獵師危忙、驚問所以。樵人耻愧、具述委曲。是二獵師、責樵人曰、『他既於汝有此大恩、汝今何忍行斯惡逆。怪哉汝身何不糜爛。』於是獵師共持其肉、施僧伽藍。時僧上座、得妙願智、卽時入定、觀是何肉。卽知是與一切衆生作利樂者大菩薩肉。尋時出定、以此事白衆。衆聞驚歎、共取香薪、焚燒其肉。收其餘骨、起窣堵婆、禮拜供養。如是惡業、要待相續、或度相續、方受其果。かくのごとくなるを惡業の順現報受業となづく、おほよそ恩をえては報をこころざすべし、他に恩しては報をもとむること

【黄門】扇搋迦又半擇迦の譯語、五種の不男あり、男根不具のもの。

【恩田、徳田】父母師僧を恩田と名け、三寶賢聖を徳田と名け、三途六趣を悲田と名く、之を三福田と云ふ。

となかれ、いまも恩ある人を逆害をくはへんとせん、この悪業かならずうくべきなり、衆生ながくいまの樵人のこころなかれ。林外にして告別するには、いかがしてこの恩を謝すべきといふといへども、やまのふもとに獵師にあふては、二分の肉をむさぼる、貪欲にひかれて、大恩所を害す、在家出家、ながくこの不知恩のこころなかれ、悪業力のきるところ兩手を斷ずること、刀劍のきるよりもはやし。この生に善をつくりて、順現報受に、善報をえたる例。昔健駄羅國迦膩色迦王、有一黄門。恆監内事。暫出城外、見有群牛數盈五百來入城内、問驅牛者、此是何牛。答言、此牛將去其種。於是黄門即自思惟、我宿惡業、受不男身、今應以財救此牛難。遂償其價、悉令得脱。善業力故、令此黄門復男身。深生慶悦、尋還城内、佇立宮門、附使啓王、請入奉觀。王令喚入、怪問所由。於是黄門具奏上事。王聞驚喜、厚賜珍財、轉授高官、令知外事。如是善業、要待相續、或度相續、方受其果。あきらかにしりぬ牛畜の身をしむべきにあらざれども、すくふひと善果をうく。いはんや恩田をうやまひ、徳田をうやまふ、もろもろの善を修せんをや、かくのごとくなるを善の順現報受業となづく。善により悪によりて、かくのごとくのことおほかれど、つくしあぐるにいとまあらず。

第二順次生受業者、謂若業此生造作增長、於第二生、受異熟果。是名順次生受業。いはくもし人ありてこの生に五無間業をつくれる、かならず順次生に地獄におつるな

【四佛の提婆】大目連阿鼻獄上の空中にて提婆達多を呼ぶに獄卒云く拘樓秦佛拘那含牟尼佛迦葉佛釋迦牟尼佛の四佛の提婆あり何れの佛時の提婆なりや、目連云く釋迦牟尼佛叔父兒の提婆達多也と増一阿含經に出づ

【俱伽離比丘】形相を具へし人の顏色を見る、舍利弗目犍連牧牛の女を姪したりと諸比丘に向て貢高す。大論十三に出づ。

【波羅夷】十三僧殘罪の第八、斬罪の義、極惡に當る

【四禪比丘】佛弟子中の一比丘第四禪の悟りを得たりと稱す。未得謂得未證謂證の增上慢の徒也。四禪比丘卷に詳し、

り、順次生とはこの生のつぎの生なり、餘のつみは順次生に地獄におつるものあり。また順後次受のひくべきあれば、順次生に地獄におちず、順後業となることもあり。この五無間業は、さだめて順次生受業に地獄におつるなり。順次生、また第二生ともこれをいふなり。五無間業といふは、一殺父、二殺母、三殺阿羅漢、四出佛身血、五破法輪僧。これを五無間業となづく、また五逆罪となづく。はじめの三は殺生なり、第四は殺生の加行なり。如來はいかにも人にころされさせたまはず、ただ身血をいだすを逆とす。中夭なきは、最後身菩薩、都史多天一生所繫菩薩、北洲、樹提伽、佛醫なり。第五破僧罪は、虛誑語なり。この五逆、かならず順次生受業に、地獄におつるなり。提婆達多は、この五無間業のなかに三をつくれり。いはく、蓮華色比丘尼をうちころす、この比丘尼大阿羅漢なり、これを殺阿羅漢とす。盤石をなげて、世尊をうちころしたてまつらんとす。盤石ときに山神にさへられてくだけぬ、そのくだけほとばしりて如來の足指にあたれり。足指やぶれ血まさにいづ、これ出佛身血罪なり。初學愚鈍の比丘五百人をかたらひて、伽耶山頂にゆきて、別羯磨をつくる、これ破僧罪なり。この三逆罪によりて、阿鼻地獄におちぬ、いまに無間の苦をうく。四佛の提婆達多、なほ阿鼻にあり。俱伽離比丘、この生に舍利弗、目犍連を謗するに、無根波羅夷の法をもてす。世尊みづからいさめましますに、梵王きたりて制すれどもやまず、二尊者を謗して、地獄におちぬ。四禪比丘、臨命終のときに、謗佛せしにより阿鼻地獄におつ。かくのごとくなる、順次生受業となづく。

「第三順後次受業者、謂若業此生造作增長、隨第三生、或復過此、雖百千劫、受異熟果。是名順後次受業。」いはく、人ありてこの生にあるひは善にもあれあるひは悪にもあれ、造作しをはれりといへども、あるひは第三生、あるひは第四生、乃至百千生のあひだにも、善悪の業を感ずるを、順後次受業となづく。菩薩の三祇劫の功德、おほく順後次受業なり。かくのごとくの道理、しらざるがごときは、行者おほく疑心をいだく、いまの闍夜多尊者の在家のときのごとし。もし鳩摩羅多尊者にあはずば、そのうたがひとけがたからん。行者もし思惟それ善なれば、悪すなはち滅す、それ悪思惟すれば、善すみやかに滅するなり。

室羅筏國昔有二人、一恆修善、一常作悪。修善行者、於一身中、恆修善行、未嘗作悪。作悪行者、於一身中、常作悪行、未嘗修善。修善行者、臨命終時、順後次受悪業力故、欻有地獄中有現前。便作是念、我一身中、恆修善行、未嘗作悪、應生天趣、何緣有此中有現前、遂起念言、我定應有順後次受悪業今熟、故此地獄中有現前、即自憶念一身已來所修善業、深生歡喜。由勝善思現在前故、地獄中有、即便隱歿、天趣中有、欻爾現前。從此命終、生於天上。この恆修善行のひと、順後次受のさだめてうくべきわが身にありけりとおもふのみにあらず。さらにすすみておもはく一身の修善もまたさだめてのちにうくべし、ふかく歡喜すとはこれなり。この憶念まことなるがゆゑに、地獄の中有すなはちかくれて、天趣の中

【中有】生有本有死有中有之を四有と名く、有情輪廻轉生の次第を説く中有は死有より生有に至る中間の期間なり。

【皓月供奉】傳燈二祖章に出づ。古德云は永嘉の證道歌、師子尊者は罽賓王の爲に頭を斬らる、二祖慧可大師は辨和法師の爲に非法を以て殺さる。

有たちまちに現前して、いのちをはりて天上にうまる。この人もし惡人ならば、命終のとき、地獄の中有現前せば、おもふべしわれ一身の修善、その功德なし。善惡あらんには、いかでかわれ地獄の中有をみん。このとき因果を撥無し、三寶を毀謗せん、もしかくのごとくならば、すなはち命終し地獄におつべし。かくのごとくならざるによりて。天上にうまるるなり、この道理あきらめしるべし。

作惡行者、臨命終時、順後次受善業力故、欻有二天趣中有現前一、便作二是念一、我一身中、常作二惡行一、未三曾修二善一、應レ生二地獄一、何緣有二此中有一現前一、遂起二邪見一、撥二無善惡及異熟果一、邪見力故、天趣中有、尋卽隱沒、地獄中有、欻爾現前。從レ此命終、生二於地獄一。この人いけるほどつねに惡をつくり、さらに一善を修せざるのみにあらず、命終のとき、天趣の中有の現前せるをみて、順後次受をしらず。われ一生のあひだ惡をつくれりといへども天趣にうまれんとす、はかりしりぬさらに善惡なかりけり。かくのごとく善惡を撥無する邪見力のゆゑに、天趣の中有たちまちに隱沒して、地獄の中有すみやかに現前し、いのちをはりて地獄におつ。これは邪見のゆゑに、天趣の中有かくるるなり、しかあればすなはち行者かならず邪見なることなかれ。いかなるか邪見、いかなるか正見と、かたちをつくすまで學習すべし。まづ因果を撥無し、佛法僧を毀謗し、三世および解脫を撥無する、ともにこれ邪見なり。まさにしるべし今生のわがみ、ふたつなしみつなし、いたづらに邪見にをちて、むなしく惡業を感得せん、をしからざらめや、惡をつくりながら惡にあらずとおもひ、惡の

【不定業】順不定受業にして果報も果報を受くる時も定まらざるをいふ。
【八種の業】(一)順現業に報定、報不定の二業あり、(二)順次業に報定報不定の二業あり、(三)順後業に報定報不定の二業あり、(四)順不定業に報定時不定と報時俱不定との二業あり。總じて之を八種の業といふ。
【世尊言】大寶積經第五十七の偈頌と長行と也。純白業は善業の因、純白異熟は善の異熟果、純黑業は惡業の因、純黑異熟は惡の異熟果、黑白業は善惡業因にして雜異熟は雜善雜惡の異熟果を得るの謂也。聞佛說已等の本經の流通文とす。
【建長五年】本卷以下唯佛與佛卷に至る十一卷は高祖

報あるべからずと邪思惟するによりて、惡の報を感得せざるにはあらず。

皓月供奉問長沙岑和尚云、古德云、了即業障本來空、未了應須償宿債。只如師子尊者、二祖大師、爲什麼得償債去。長沙云、大德、不識本來空。彼云、如何是本來空。長沙云、業障是。又問、如何是業障。長沙云、本來空是。彼無語。長沙便示一偈云、假有元非有、假滅亦非無、涅槃償債義、一性更無殊。長沙の答は答にあらず、鳩摩羅多の闍夜多にしめす道理なし、しるべし業障のむねをしらざるなり。佛祖の兒孫、修證辦道するには、まづかならずこの三時の業をあきらめしらんこと、鳩摩羅多尊者のごとくなるべし。すでにこれ祖宗の業なり。廢怠すべからず。このほか不定業あり、また八種の業あること、ひろく參學すべし。いまだこの業報の道理、あきらめざらんともがら、みだりに人天の導師と稱することなかれ。かの三時の惡業報、かならず感ずべしといへども、懺悔するがごときは、重を轉じて輕受せしむ、また滅罪淸淨ならしむるなり。善業また隨喜すれば、いよいよ增長するなり、これみな作業の黑白にまかせたり。

世尊言、『假令經百劫、所作業不亡、因緣會遇時、果報還自受。汝等當知、若純黑業、得純黑異熟。若純白業、得純白異熟。若黑白業、得雜異熟。是故應離純黑及黑白雜業。當勤修學純白之業。』時諸大衆、聞佛說已、歡喜信受。

建長五年癸丑三月九日在於永平寺首座寮書寫之畢　懷奘

說時說處を記したまはず、故に卷末に排列す。延長五年三月は高祖在世中なるも此は懷弉祖が書寫せられし年月日なり。

【四馬】馬に四種あり、阿含涅槃に說くが如し。根機の利鈍、曉了の遲速ありと雖も佛法の皮肉骨髓を了知し生老病死を透脫すべしとなり。

【世尊一日外道】傳燈二十七卷に出づ、外道問佛の話と稱す。

【聖默聖說】思益梵天所問經に云く、若說法若聖默然、何謂說法、何謂聖默然、答言、若說法不違佛、不違法、不違僧、是名說法、若知法即是佛、離相即是法、無爲即是僧、是名聖默然。

正法眼藏三時業　畢

正法眼藏四馬

世尊、一日外道來詣佛所問佛、「不問有言、不問無言。」世尊據座良久。外道禮拜讚歎云、「善哉世尊、大慈大悲、開我迷雲、令我得入。」乃作禮而去。外道去已、阿難尋白佛言、「外道以何所得而言得入、稱讚而去。」世尊云、「如世間良馬見鞭影而行。」

祖師西來よりのちいまにいたるまで、諸善知識おほくこの因緣を擧して、參學のともがらにしめすに、あるひは年載をかされ、あるいは日月をかされて、ままに開明し佛法に信入するものあり、これを外道問佛の話と稱す。しるべし、世尊に聖默聖說の二種の施設まします、これによりて得入するもの、みな「如世間良馬見鞭影而行」なり。聖默聖說にあらざる施設によりて得入するも、またかくのごとし。龍樹祖師曰、「爲人說句、如快馬見鞭影即入正路。」あらゆる機緣、あるひは生不生の法をきき、三乘一乘の法をきく、しばしば邪路におもむかんとすれども、鞭影しきりにみゆるがごときは、すなはち正路にいるなり。もし師にしたがひ人にあひぬるがごときは、ところとして說句にあらざることなし、ときとして鞭影をみずといふことなきなり。卽坐に鞭影を見るもの、三阿僧祇をへて鞭影をみるもの、無量劫をへて鞭影をみ、正路にいることをうるなり。

【雜阿含經】雜阿含經第三十三の文

【佛以一音】維摩經第一佛國品の文

【大經云佛言】大般涅槃經第十八梵行品、文小異。

雜阿含經曰、「佛告比丘、有四種馬、一者見鞭影、即便驚悚、隨御者意、二者觸毛、便驚悚、隨御者意、三者觸肉、然後乃驚、四者徹骨、然後方覺、初馬如聞他聚落無常、即能生厭、次馬如聞己聚落無常、即能生厭、三馬如聞己親無常、即能生厭、四馬猶如己身病苦、方能生厭。」これ阿含の四馬なり、佛法を參學するとき、かならず學するところなり。眞善知識として人中天上に出現し、ほとけのつかひとして祖師なるは、かならずこれを參學しきたりて、學者のために傳授するなり、しらざるは人天の善知識にあらず。學者もし厚殖善根の衆生にして佛道ちかきもの、はからずこれをきくことをうるなり。佛道とほきものは、きかずしらず。しかあればすなはち師匠いそぎとかんことをおもふべし、弟子いそぎきかんとこひねがふべし。いま生厭といふは、「佛以一音演說法、衆生隨類各得解、或恐怖、或歡喜、或生厭離、或斷疑」なり。

大經云、「佛言、復次善男子、如調馬者凡有四種、一者觸毛、二者觸皮、三者觸肉、四者觸骨、隨其所觸、稱御者意、如來亦爾、以四種法、調伏衆生、一者爲說生、便受佛語、如觸其毛隨御者意、二者說生老、便受佛語、如觸毛皮隨御者意、三者說生及以老病、便受佛語、如觸毛皮肉隨御者意、四者說生及以老病死、便受佛語、如觸毛皮肉骨、隨御者意、善男子、御者調馬、無有決定、如來世尊、調伏衆生、必定不虛、是故號佛調御丈夫。」これを涅槃經の四馬となづく、學者ならはざるな

【八尺龍馬】周禮に云く凡馬八尺以上爲ノ龍と。

【調御丈夫】佛十號の一、意此に出づ。

し、諸佛ときたまはざるをはしまさず。ほとけにしたがひたてまつりてこれをきき、ほとけをみたてまつり供養したてまつることには、かならず聽聞し、佛法を傳授することには、衆生のためにこれをとくこと、歴劫におこたらず、つひに佛果にいたりて、はじめ初發心のときのごとく、菩薩聲聞人天大會のためにこれをとく。このゆゑに佛法僧寶種不斷なり、かくのごとくなるがゆゑに諸佛の所說と菩薩の所說と、はるかにことなり。しるべし調馬師の法におほよそ四種あり、いはゆる觸毛觸皮觸肉觸骨なり。これなにものを觸毛せしむるとみえざれども、傳法の大士おもはくは、鞭なるべしと解す。しかあれどもかならずしも調馬の法に鞭をもちゐるもあり、鞭をもちゐざるもあり。調馬かならず鞭のみにはかぎるべからず、たてるたけ八尺なる、これを龍馬とす。このうまととのふること、人間にすくなし。また千里馬といふうまあり、一日のうちに千里をゆく。このうま五百里をゆくあひだ血汗をながす、五百里すぎぬれば、清涼にしてはやし、このうまにのる人すくなし、ととのふる法しれるものすくなし。このうま神丹國にはなし、外國にあり。このうまおのおのしきりに鞭を加すとみえず。しかあれども古德いはく、「調馬かならず鞭を加す、鞭にあらざればうまととのふらず。」これ調馬の法なり。いま觸毛皮肉骨の四法あり、毛をのぞきて皮骨觸することあるべからず、毛皮をのぞきて肉骨に觸することあるべからず。かるがゆゑにしりぬこれ鞭を加すべきなり。いまここにとかざるは、文の不足なり、諸經かくのごときのところおほし。如來世尊調御丈夫またしかなり、四種の法をもて、一切衆生を

【建長七年】說時說處不記、祖滅後三年孤雲弉祖書寫

【發菩提心】發菩提心は衆生無邊誓願度の心、自未得度先度他の心なり

【質多、汗栗多、矣栗多】質多(Citta)分別心、汗栗多(Hṛdaya)非情心、矣栗多は汗栗多の異名にして有情に就いて云ふ積聚肉團心なり。

調伏して、必定不虛なり。いはゆる生を爲說するに、すなはち佛語をうくるあり、生老を爲說するに、佛語をうくるあり、生老病死を爲說するに、佛語をうくるあり。のちの三をきくもの、いまだはじめの一をはなれず、世間の調馬の觸毛をはなれて、觸皮肉骨あらざるがごとし。生老病死を爲說すといふは、如來世尊の生老病死を爲說しまします、衆生をして生老病死をはなれしめんがためにあらず。生老病死すなはち道とかず、生老病死すなはち道なりと解せしめんがためにとくにあらず。この生老病死を爲說するによりて、一切衆生をして阿耨多羅三藐三菩提の法をえせしめんがためなり、これ『如來世尊、調伏衆生、必定不虛、是故號佛調御丈夫』なり。

正法眼藏四馬

建長七年乙卯夏安居日以二御草案一書二寫之一畢　　懷奘

正法眼藏發菩提心

おほよそ心三種あり、一者質多心、此方稱二慮知心一。一者汗栗多心、此方稱二艸木心一。三者矣栗多心、此方稱二積聚精要心一。このなかに菩提心をおこすこと、かならず慮知心をもちゐる。菩提は天竺の音、ここには道といふ。質多は天竺の音、ここには慮知心といふ。この慮知心にあらざれば、菩提心をおこすことあたはず。この慮知心をすなはち菩提

【感應道交】感は機にして應は法なり、母呼子啄の如し、道交は霽月、光を交はるが如し、心心相照し法法相冥するをいふ。

【八難處】三惡道、盲聾瘖瘂、世智辯聰、佛前佛後、北倶盧洲、無想天、之を八難處といふ。

【迦葉偈をもて】大涅槃經卷三十八の文。

心とするにはあらず、この慮知心をもて、菩提心をおこすなり。菩提心をおこすといふは、おのれいまだわたらざるさきに一切衆生をわたさんと發願しいとなむなり。そのかたちいやしといふとも、この心をおこせば、すでに一切衆生の導師なり。この心もとよりあるにあらず、いまあらたに忽起するにあらず、一にあらず、多にあらず。自然にあらず、凝然にあらず。わが身のなかにあるにあらず。わが身は心のなかにあるにあらず。この心は法界に周遍せるにあらず。前にあらず、後にあらず、あるにあらず、なきにあらず、自性にあらず、他性にあらず。共性にあらず、無因性にあらず、しかあれども感應道交するところに、發菩提心するなり。諸佛菩薩の所授にあらず、みづからが所能にあらず、感應道交するに、發心するゆゑに自然にあらず。この發菩提心、おほくは南閻浮の人身に發心すべきなり、八難處等にも、すこしきはありおほからず。菩提心をおこしてのち、三阿僧祇劫、一百大劫修行す。あるひは無量劫おこなひてほとけになる、あるひは無量劫おこなひて衆生をさきにわたして、みづからはつひにほとけにならず、ただし衆生をわたし、衆生を利益するもあり、菩薩の意樂にしたがふ。おほよそ菩提心は、いかがして一切衆生をして菩提心をおこさしめ、佛道に引導せましと、ひまなく三業にいとなむなり。いたづらに世間の欲樂をあたふるを、利益衆生とするにはあらず、この發心、この修證、はるかに迷悟の邊表を超越せり。三界に勝出し、一切に抜群せり、なほ聲聞辟支佛のおよぶところにあらず。迦葉菩薩偈をもて釋迦牟尼佛をほめたてまつるにいはく、「發心畢竟二無別、如

【雪上加霜】修行の上にも修行するの意。

【毎自作是念】法華壽量品の偈。

是二心先心難。自未得度先度他。是故我禮初發心。初發已爲天人師。勝出聲聞及縁覺。如是發心過三界。是故得名最無上。』發心とは、はじめて自未得度先度他の心をおこすなり、これを初發菩提心といふ。この心をおこすよりのち、さらにそこばくの諸佛にあひたてまつり、供養したてまつるに、見佛聞法し、さらに菩提心をおこす、雪上加霜なり。いはゆる畢竟とは、佛果菩提なり。阿耨多羅三藐三菩提と初發菩提心と格量せば、劫火螢火のごとくなるべしといへども、自未得度先度他のこころをおこせば、二無別なり。『毎自作是念、以何令衆生、得入無上道、速成就佛身。』これすなはち如來の壽量なり。ほとけは發心修行證果、みなかくのごとし。衆生を利益すといふは、衆生をして自未得度先度他のこころをおこさしむるなり、自未得度先度他の心をおこせるちからによりて、われほとけにならんとおもふべからず。たとひほとけになるべき功德熟して、圓滿すべしといふとも、なほめぐらして衆生の成佛得道に回向するなり。この心われにあらず他にあらず、きたるにあらずといへども、この發心よりのち大地を擧すればみな黄金となり、大海をかけばたちまちに甘露となる。これよりのち、土石砂礫をとる、すなはち菩提心を拈來するなり。水沫泡焔を參ずる、したしく菩提心を擔來するなり。しかあればすなはち國城妻子七寶男女頭目髓腦身肉手足をほどこす、みな菩提心の閙聒聒なり、菩提心の活鱍鱍なり。いまの質多慮知の心、ちかきにあらずとほきにあらず、みづからにあらず、他にあらずといへども、この心をもて自未得度先度他の道理にめぐらすこ

【一刹那心能起一語】大毘婆沙論卷十五の文。

【壯士の一彈指】倶舍論に云く、一壯指頃有六十五刹那。

【恆刹那】毘曇に云く、恆刹那を一瞬と稱ずと、僧祇に二十念を一瞬と爲すと。二十刹那を一恆刹那とするなり。或は又倶舍の疏には百二十刹那を恆刹那の量とすとも云へり。

と、不退轉なれば發菩提心なり。しかあればいま一切衆生の我行と執せる、艸木瓦礫金銀珍寶をもて菩提心にほどこす、また發菩提心ならざらめや。心および諸法ともに自他共無因にあらざるがゆゑに、もし一刹那この菩提心をおこすより、萬法みな增上緣となる、おほよそ刹那生滅するによるものなり。もし刹那生滅せずば、前刹那の惡さるべからず、前刹那の惡いまださらざれば、後刹那の善いま現生すべからず。かの刹那の量は、ただ如來ひとりあきらかにしらせたもふ。一刹那心、能起一語、一刹那語、能說一字も、ひとり如來のみなり、餘聖不能なり。おほよそ壯士の一彈指のあひだに、六十五の刹那ありて、五蘊生滅すれども、凡夫かつて不覺不知なり。恆刹那の量よりは、凡夫もこれをしれり、一日一夜をふるあひだに、六十四億九萬九千九百八十の刹那ありて、五蘊ともに生滅す。しかあれども凡夫かつて覺知せず、覺知せざるがゆゑに、菩提心をおこさず。佛法をしらず佛法を信ぜざるものは、刹那生滅の道理を信ぜざるなり。もし如來の正法眼藏涅槃妙心をあきらむるがごときは、かならずこの刹那生滅の道理を信ずるなり。いまこれら、如來の說敎にあふたてまつりて、曉了するに、にたれども、わづかに恆刹那よりこれをしり、その道理しかあるべしと信受するのみなり。世尊所說の一切の法、あきらめずしらざることも、刹那量をしらざるがごとし。學者みだりに貢高することなかれ、極小をしらざるのみにあらず、極大をもまたしらざるなり。もし如來の道力によるときは、衆生また三千界をみる。おほよそ本有より中有にいたり、中有より當本有にいたる、みな一刹那一刹那に

【世尊在世】法苑珠林第三に出づ。

うつりゆくなり。かくのごとくしてわがこころにならず、業にひかれて、流轉生死すること、一刹那もとどまらざるなり。かくのごとく流轉生死する身心をもて、たちまちに自未得度先度他の菩提心をおこすべきなり、たとひ發菩提心のみちに身心をしむとも、生老病死して、つひに我有なるべからず。衆生の壽行、生滅してとどまらずすみやかなること。

世尊在世、有一比丘、來詣佛所、頂禮雙足、却住一面、白世尊言、『衆生壽行、云何速疾生滅。』佛言、『我能宣說、汝不能知。』比丘言、『頗有譬喩能顯示不。』佛言、『有、今爲汝說、譬如四善射夫、各執弓箭、相背攢立、欲射四方。有一捷夫、來語之曰、汝等今可一時放箭、我能遍接俱令不墮。於意云何、此捷疾不。』比丘白佛言、『甚疾世尊。』佛言、『彼人捷疾、不及地行夜叉。地行夜叉捷疾、不及空行夜叉。空行夜叉捷疾、不及四天王天捷疾、彼天捷疾、不及日月二輪捷疾、日月二輪捷疾、不及堅行天子捷疾。此是導引日月輪車者、此等諸天、展轉捷疾、壽行生滅、捷疾於彼、刹那流轉、無有暫停。』われらが壽行生滅、刹那流轉捷疾なることかくのごとし。念念のあひだ、行者この道理をわするることなかれ。この刹那生滅流轉捷疾にありながら、もし自未得度先度他の一念をおこすがごときは、久遠の壽量、たちまちに現在前するなり。三世十方の諸佛、ならびに七佛世尊、および西天二十八祖、東地六祖、乃至傳佛正法眼藏涅槃妙心の祖師、みなともに菩提心を保任せり、いまだ菩提心をおこさざるは、祖師にあ

らず。

禪苑清規一百二十問云、「發悟菩提心否。」あきらかにしるべし佛祖の學道、かならず菩提心を發悟するをさきとせりといふこと。これすなはち佛祖の常法なる。發悟すといふは曉了なり。これ大覺にはあらず、たとひ十地を頓證せるも、なほこれ菩薩なり。西天二十八祖、唐土六祖等、および諸大祖師は、これ菩薩なり、ほとけにあらず、聲聞辟支佛等にあらず。いまのよにある參學のともがら菩薩なり、聲聞にあらずといふことあきらめしれるともがら、一人もなし。ただみだりに衲僧衲子と自稱して、その眞實をしらざるによりて、みだりがはしくせり、あはれむべし澆季祖道廢せることを。しかあればすなはちたとひ在家にもあれ、たとひ出家にもあれ、あるひは天上にもあれ、あるひは人間にもあれ、苦にありといふとも、樂にありといふとも、はやく自未得度先度他の心をおこすべし。衆生界は有邊無邊にあらざれども、先度一切衆生の心をおこすなり。これすなはち菩提心なり。一生補處菩薩、まさに閻浮提にくだらんとするとき、覩史多天の諸天のために、最後の教をほどこすにいはく、「菩提心是法明門、不斷三寶故。」あきらかにしりぬ三寶の不斷は、菩提心のちからなりといふことを。菩提心をおこしてのち、かたく守護し退轉なかるべし。

佛言、「云何菩薩守護一事、謂菩提心、菩薩摩訶薩、常勤守護是菩提心、猶如世人守護一子、亦如瞎者護餘一目、如行曠野守護導者、菩薩守護菩提心、亦復如是、因護如是菩提心、故得阿耨多羅三藐三菩提、因得阿耨多羅三藐三菩提故、常樂

【禪苑清規一百二十問】禪苑清規第八にあり。

【覩史多天】兜率天のこと。

【菩提心是法明門】佛本行集經第六に一百八の法明門を說く、第八十三に菩提心法明門、謂不斷三寶故と。註に法明門とは衆生をして一切智慧に通達せしめんが爲の故に護明菩薩兜率天宮に在りて人間に下つて託生せんと欲して即ち師子座上に於て此一百八門を宣說して諸天に留與し以て憶念を作し然して後に下生すと。

【佛言云何菩薩】大般涅槃經廿五高貴德王品の文。

【魚子、菴羅果等】大論第四に、常釋以偈答云、菩薩發大心、魚子菴樹華、三事因時多、成果時甚少と。又涅槃經聖行品に云く、譬如二魚母多有二胎子一成就者少一、如二菴羅樹花多果少一、衆生發心乃有無量及二其成就一少不レ足言。

【魔有四種】大論卷六十八の文。【百八煩惱】吾人の煩惱を百八種に計算せるもの、是に二種あり、一は楞伽經に出つ、六根が六塵の境に對する時各各好惡平

我淨具足而行、即是無上大般涅槃、是故菩薩守二護一法一。菩提心をまもらんこと、佛語あきらかにかくのごとし、守護して退轉なからしむるゆゑは、世間の常法にいはく、たとひ生ずれども熟せざるもの三種あり、いはく魚子、菴羅果、發心菩薩なり。おほよそ退失するもののおほきがゆゑに、われも退出となゐらんことをかねてよりおそるなり、このゆゑに菩提心を守護するなり。菩提の初心のとき、菩提心を退轉すること、おほくは正師にあはざるによる。正師にあはざれば、正法をきかず、正法をきかざれば、おそらくは因果を撥無し、解脫を撥無し、三寶を撥無し、三世等の諸法を撥無す。いたづらに現在の五欲に貪著して、前途菩提の功德を失す。あるひは天魔波旬等、行者をさまたげんがために、佛形に化し、父母師匠、乃至親族諸天等のかたちを現じてきたりちかづきて、菩薩にむかひてこしらへすすめていはく、「佛道長遠、久受諸苦、もともうれふべし。しかしまづわれ生死を解脫し、のちに衆生をわたさんには」。行者このかたらひをききて、菩提心を退し、菩薩の行を退す。まさにしるべしかくのごとくの說は、すなはちこれ魔說なり、菩薩しりてしたがふことなかれ、もはら自未得度先度他の行願を退轉せざるべし。自未得度先度他の行願にそむかんがごときは、これ魔說としるべし、外道說としるべし、惡友說としるべし、さらにしたがふことなかれ。

魔有二四種一、一煩惱魔、二五業魔、三死魔、四天子魔。煩惱魔者、所謂百八煩惱等、分二別八萬四千諸煩惱一。五業魔者、是煩惱和合因緣、得二是身四大及四大造色、眼根等色一、是

の三種の不同ありて十八煩惱を生じ又苦樂捨の三受ありて同じく十八煩惱を生じ合して三十六種となる、更に又之を過去現在未來の三世に配するが故に百八の煩惱となる。二は三界の見惑八十八使に三界の修惑十種（欲界に貪瞋癡慢の四惑上二界に各貪癡慢の三惑あり合して十惑となる）を加へ、更に無慚、無愧、惛沈、惡作、慳、嫉、掉擧、睡眠、忿、覆の十纏を加へたる百八種の煩惱とす。

【寛元二年】祖齡四十五、吉峰寺に於ける示衆。

【出家功德】出家は俗家を出づるのみにあらず三界の火宅を出づるなり身の出家と共に心の出家ならざるべからず、出家は是

名ニ色衆一。百八煩惱等諸受和合、名ニ爲受衆一。大小無量所有想、分別和合、名ニ爲想衆一。因ニ好醜心發一、能起ニ貪欲瞋恚等心一、相應不相應法、名ニ爲行衆一。六情六塵和合故生ニ六識一、是六識分別和合、無量無邊心、是名ニ識衆一。死魔者、無常因緣故、破ニ相續五衆壽命一盡ニ離三法一識熱壽一故、名ニ爲死魔一。天子魔者、欲界主深著ニ世樂一用ニ有所得一故生ニ邪見一憎ニ嫉一切賢聖涅槃道法一是名ニ天子魔一。魔是天竺語、秦言ニ能奪命者一、唯死魔實能奪命、餘者亦能作ニ奪命因緣一、亦奪ニ智慧命一、是故名ニ殺者一。問曰、「一五衆魔攝ニ三種魔一、何以故別說レ四。」答曰、「實是一魔、分ニ別其義一故有レ四。」上來これ龍樹祖師の施設なり、行者しりて、勤學すべし、いたづらに魔嬈をかうぶりて菩提心を退轉せされ、これ守護菩提心なり。

爾時寛元二年甲辰二月十四日在ニ越州吉田縣吉峰精舍一示衆

建長七年乙卯四月九日以ニ御草案一書寫了　懷奘

正法眼藏發菩提心　畢

正法眼藏出家功德

龍樹菩薩言、問曰、「若居家戒得レ生ニ天上一、得ニ菩薩道一、亦得ニ涅槃一、復何用ニ出家戒一。」

答曰、「雖ニ俱得度一、然有ニ難易一。居家生業種種事務、若欲レ專ニ心道法一、家業則廢、若

れ三世佛正覺の根本、出家は是れ衆生成佛の根源なり。最尊最上の大功德敬仰讃歎盡すべからす。

【龍樹菩薩言】智度論卷十三出。大三段あり初め出家と在家と修行の難易を示す。二に破戒墮罪も畢竟得脫を得、蓮華色比丘尼を以て例とす。三に好機を逸せずして心を發すれば出家せしむべし、一婆羅門醉中に微心を發する剃頭するが如し。

專修家業、大事則廢。不取不捨、能應行法、是名爲難。若出家離俗、絕諸忿亂、一向專心行道爲易。復次居家憒閙、多事多務、結使之根、衆罪之府、是爲甚難。若出家者、譬若有人出在空野無人之處而一其心、無心無慮、內想既除、外事亦去、如偈說、閑坐林樹間、寂然滅衆惡、恬澹得一心、斯樂非天樂。人求富貴利名衣好牀褥、斯樂非安穩、求利無厭足、衲衣行乞食、動止心常一、自以智慧眼、觀知諸法實、種種法門中、皆以等觀入、解慧心寂然、三界無能及、以是故知、出家修戒行道爲甚易。復次出家修戒、得無量善律儀、一切具足圓滿。以是故白衣等應當出家受具足戒。復次佛法中出家法、第一難修、如閻浮呿提梵志問舍利弗、於佛法中何者最難。舍利弗答曰、出家爲難。又問、出家有何等難。答曰、出家內樂爲難。既得內樂、復次何者爲難。修諸善法難。以是故應出家。復次若人出家時、魔王驚愁言、此人諸結使欲薄、必得涅槃、墮僧寶數中。復次佛法中出家人、雖破戒墮罪、罪畢得解脫、如優鉢羅華比丘尼本生經中說。佛在世時、此比丘尼、得六神通阿羅漢、入貴人舍、常讚出家法、語諸貴人婦女言、「姊妹可出家。」諸貴婦女言、「我等少壯、容色盛美、持戒爲難、或當破戒。」比丘尼言、「破戒便破、但出家。」問言、「破戒當墮地獄、云何可破。」答言、「墮地獄便墮。」諸貴婦女笑之言、「地獄受罪、云何可墮。」比丘尼言、「我自憶念本宿命時、作戲女、著種種衣服而說舊語、或時著比丘尼衣以爲戲笑、以是因緣故、迦葉佛時作比丘尼、自恃貴姓端正、心生憍

慢而破禁戒、破戒罪故、墮地獄、受種種罪、受畢竟、値釋迦牟尼佛出家、得六神通阿羅漢道。以是故知、出家受戒、雖復破戒、以戒因緣故、得阿羅漢道。若但作惡、無戒因緣、不得道也。我乃昔時世世墮地獄、從地獄出爲惡人、惡人死還入地獄、都無所得。今以此證知出家受戒、雖復破戒、以是因緣、可得道果。復次如佛在祇桓、有一醉婆羅門、來到佛所、求作比丘。佛勅阿難、與剃頭著法衣。醉酒既醒、驚怪己身忽爲比丘、即便走去。諸比丘問佛、何以聽此婆羅門作比丘。佛言、此婆羅門無量劫中、初無出家心。今因醉故、暫發微心。以此因緣故、後出家得道。」如是種種因緣出家之功德無量。以是白衣雖有五戒、不如出家。」世尊すでに醉婆羅門に出家受戒を聽許し、得道最初の下種とせしめまします。あきらかにしりぬ、むかしよりいまに出家の功德なからん衆生、ながく佛果菩提をうべからず、この婆羅門、わづかに醉酒のゆゑに、しばらく微心をおこして、剃頭受戒し比丘となれり。酒醉さめざるあひだいくばくにあらざれども、この功德を保護して得道の善根を增長すべきむね、これ世尊誠諦の金言なり、如來出世の本懷なり。一切衆生あきらかに已今當のなかに信受奉行したてまつるべし。まことにその發心得道、さだめて刹那よりするものなり。この婆羅門しばらくの出家の功德なほかくのごとし、いかにいはんやいま人間一生の壽者命者をめぐらして、出家受戒せん功德、さらに醉婆羅門よりも劣ならめやは。轉輪聖王は、八萬歳已上のときにいでて、四州を統領せり、七寶具足せり、そのときこの四洲みな淨土のごとし、輪王の快樂、

【四洲】　須彌四洲なり。

ことばのつくすべきにあらず。あるひは三千界統領するもありといふ。金銀銅鐵輪の別ありて、一二三四洲の統領あり、かならず身に十惡なし。この轉輪聖王、かくのごときの快樂にゆたかなれども、かうべにひとすぢの白髮おひぬれば、くらゐを太子にゆづりて、わがみすみやかに出家し袈裟を著して、山林にいりて修練し、命終すればかならず梵天にうまる。このみづからがかうべの白髮を銀函にいれて、王宮にをさめたり。のちに輪王に相傳す、のちの輪王また白髮おひぬれば、先王に一如なり。轉輪聖王の出家ののち、餘命のひさしきこと、いまの人にたくらぶべからず。すでに輪王八萬上といふ、その身に三十二相を具せり、いまの人およぶべからず。しかあれども白髮をみて無常をさとり、白業を修して功德を成就せんがために、かならず出家修道するなり。いまの諸王、轉輪聖王におよぶべからず。いたづらに光陰を貪欲のなかにすごして、出家せざるは、來世くやしからん。いはんや小國邊地は、王者の名あれども、王者の德なし、貪してとどまるべからず、出家修道せば、諸天よろこびまもるべし、龍神うやまひ保護すべし、諸佛の佛眼、あきらかに證明し隨喜しましまさん。戲女のむかしは信心にあらず、戲笑のために比丘尼の衣を著せり、おそらくは輕法の罪あるべしといへども、この衣をその身に著せしちから、二世に佛法にあふ。比丘尼衣とは、袈裟なり、戲笑著袈裟のちからによりて、第二世迦葉佛のときにあふたてまつり、出家受戒し比丘尼となれり。破戒によりて墮獄受罪すといへども、功德くちずして、つひに釋迦牟尼佛にあひたてまつり、見佛聞法、發心修習してながく三

【世尊言南洲】長阿含及起世經等に事餘の三洲に勝ると云ふ、今此文出處考へず、蓋し取意文か。

【世尊言於佛法中】賢愚因緣經卷四戶利苾提因緣品の文。

【福增】戶利苾提此に譯して福藏と云ふ、福增は非なり。

界をはなれて、大阿羅漢となれり、六通三明を具足せり、かならず無上道なるべし。しかあればすなはちはじめより一向無上菩提のために、清淨の信心をこらして、袈裟を信受せん、その功德の增長、かの戲女の功德よりもすみやかならん。いはんやまた無上菩提のために、菩提心をおこし、出家受戒せん、その功德無量なるべし、人身にあらざればこの功德を成就することまれなり、西天東土、出家在家の菩薩祖師おほしといふとも、龍樹祖師におよばず、醉婆羅門戲女等の因緣、もはら龍樹祖師これを擧して、衆生の出家受戒をすすむ、龍樹祖師、すなはち世尊金口の所說なり。

世尊言、『南洲有四種最勝、見佛、聞法、出家、得道。』あきらかにしるべし、この四種最勝、すなはち北洲にもすぐれ、諸天にもすぐれたり。いまわれら宿善根力にひかれて、最勝の身をえたり、歡喜隨喜して出家受戒すべきものなり。最勝の善身をいたづらにして、露命を無常のかぜにまかすることなかれ、出家の生生をかさねば、積功累德ならん。

世尊言、『於佛法中、出家果報、不可思議。假使有人、起七寶塔、高至三十三天、所得功德、不如出家。何以故、七寶塔者、貪惡愚人能破壞故。出家功德、無有壞毀。是故若教男女、若放奴婢、若聽人民、若自己身、出家入道、功德無量。』世尊あきらかに功德の量をしろしめして、かくのごとく校量しまします。福增これをききて、一百二十歲の耄及なれどもしひて出家受戒し、少年の席末につらなりて修練し、大阿羅漢となれり。

【日月燈明佛の八子】法華序品に、最後佛の日月燈明佛に八子あり、是八王子威德自在各領二四天下一、是諸王子聞二父出家一得二阿耨多羅三藐三菩提一、亦隨出家とあり。

【智勝佛の十六子】法華化城喩品云、大通智勝佛未レ出家一時、有二十六王子一、皆以二童子一出家爲二沙彌一、爾時衆中八萬億人見二十六王子出家一亦求二出家一として向して又云く、彼佛十六沙彌今皆得二阿耨菩提一、於二十方國一現在說法。

【妙莊嚴王の二子】法華妙莊嚴王品云、雲雷音宿王華智佛法中有二王一、名二妙莊嚴一、其王夫人號曰二淨德一、有二二子一、一名二淨藏一、二名二淨眼一、其王即時以レ國付レ弟、與二夫人

しるべし今生の人身は、四大五蘊因緣和合して、かりになせり、八苦つねにあり。いはんや刹那刹那に生滅して、さらにとどまらず、いはんや一彈指のあひだに、六十五の刹那生滅すといへども、みづからくらきによりていまだしらざるなり。すべて一日夜があひだに六十四億九萬九千九百八十の刹那ありて、五蘊生滅すといへども、しらざるなり。あはれむべしわれ生滅すといへども、みづからしらざること。この刹那生滅の量、ただ佛世尊ならびに舍利弗とのみしらせたまふ、餘聖おほかれども、ひとりもしるところにあらざるなり。この刹那生滅の道理によりて、衆生すなはち善惡の業をつくる、また刹那生滅の道理によりて、衆生發心得道す。かくのごとく生滅する人身なり、たとひをしむともとどまらじ。むかしよりをしんで、とどまれる一人、いまだなし。かくのごとくわれにあらざる人身なりといへども、めぐらして出家受戒するがごときは、三世の諸佛の所證なる阿耨多羅三藐三菩提金剛不壞の佛果を證するなり、たれの智人か欣求せざらん。これによりて過去日月燈明佛の八子、みな四天下を領する王位をすてて出家す、大通智勝佛の十六子とともに出家せり。大通入定のあひだ、衆のために法華をとく、いまは十方の如來となれり。父王轉輪聖王の所將衆中八萬億人も、十六王子の出家をみて、出家をもとむ、輪王すなはち聽許す。妙莊嚴王の二子、ならびに父王夫人みな出家せり。しるべし大聖出現のとき、かならず出家するを正法とせりといふことあきらけし。このともがらおろかにして出家せりといふべからず、賢にして出家せりとしらば、ひとしからんことをおもふべし。今釋迦牟

並諸眷屬、於二佛法中一出家修道と。

【千釋・萬釋】善見毘婆沙論十七に出づ。

【五比丘】釋尊最初の弟子、陳如、十力、阿鞞、跋提、拘利の五人。

【須跋陀羅】譯して好賢又は妙善といふ。如來最後の弟子聞法得果す。年一百廿。

【偈云若無】大智度論第十三に出づ

【古聖云出家人】毘婆沙論文、西域記二に引く。

【刹利】印度四姓中の第二位、梵音クシャトリヤ(Kṣatriya)王者武士の種族なり。

尼佛のときは、羅睺羅、阿難等みな出家し、また千釋の出家あり、二萬釋の出家あり、勝躅といふべし。はじめ五比丘出家より、をはり須跋陀羅が出家にいたるまで、歸佛のともがら、すなはち出家す、しるべし無量の功德なりといふこと。しかあればすなはち世人もし子孫をあはれむことあらば、いそぎ出家せしむべし、父母をあはれむことあらば、出家をすすむべし。かるがゆゑに偈にいはく、「若無二過去世一、應レ無二過去佛一、若無二過去佛一、無二出家受具一」この偈は、諸佛如來の偈なり、外道の過去世なしといふを破するなり。しかあればしるべし出家受具は、過去諸佛の法なり、われらさいはひに諸佛の妙法なる出家受戒するときにあひながら、むなしく出家受戒せざらん、なにのさはりによるとしりがたし。最下品の依身をもて、最上品の功德を成就せん、閻浮提および三界のなかには、最上品の功德なるべし。この閻浮の人身いまだ滅せざらんとき、かならず出家受戒すべし。

古聖云、「出家之人、雖レ破二禁戒一。猶勝下在俗受二持戒一者上。故經偈說、勸二人出家一、其恩難レ報。復次勸二出家一者、即是勸三人修二尊重業一。所得果報、勝二琰魔王、輪王、帝釋一。故經偈說、勸二人出家一、其恩難レ報。勸三人受二持近事戒等一。無二如レ是事一、故經不レ讚一」しるべし出家して禁戒を破すといへども、在家にて戒をやぶらざるにはすぐれたり、歸佛かならず出家受戒すぐれたるべし、出家すすむる果報、琰魔王にもすぐれ、輪王にもすぐれ、帝釋にもすぐれたり、たとひ毗舍首陀羅なれども、出家すれば刹利にもすぐるべし。なほ琰魔王にもすぐれ、輪王にもすぐれ、帝釋にもすぐる。在家戒かくのごとく

【三明六通】三明は宿住智證明、死生智證明、漏盡智證明。六通は天眼通、天耳通、他心通、宿命通、神變通、漏盡通。

【忍法】煖頂忍世第一の四善根中の第三忍法、上中下の三あり。

【五百大願中】悲華經、大悲芬陀利經中廣說。

【佛言及有】大方等大集月藏分八忍辱品の文。

ならず、ゆゑに出家すべし。しるべし世尊の所說はかるべからざるを。世尊および五百大阿羅漢ひろくあつめたり。まことにしりぬ佛法におきて道理あきらかなるべしといふこと。一聖三明六通の智慧、なほ近代の凡師のはかるべきにあらず、いはんや五百の聖者をや。近代の凡師らがしらざるところをしり、みざるところをみ、きはめざるところをきはめたりといへども、凡師らがしれるところろしらざるにあらず。しかあれば凡師の黑暗愚鈍の說をもて、聖者三明の言に比類することなかれ。

婆沙一百二十云、「發心出家、尚名二聖者一、況得二忍法一」しるべし發心出家すれば、聖者となづくるなり。釋迦牟尼佛、五百大願中第一百三十七願、『我未來、成二正覺一已、或有二諸人一。於二我法中一、欲二出家一者、願無二障礙一。所謂羸劣失念、狂亂憍慢、無レ有二畏懼一、癡無二智慧一、多二諸結使一、其心散亂。若不レ爾者、不レ成二正覺一。』第一百三十八願、「我未來、成二正覺一已、若有二女人一、欲下於二我法一出家學道、受中大戒上者、願令二成就一。若不レ爾者、不レ成二正覺一。」第三百十四願、「我未來。成二正覺一已、若有二衆生一、少二於善根一、於二善根中一、心生二愛樂一、我當レ令下其於二未來世一、在二佛法中一、出家學道上、安止令レ住二梵淨十戒一。若不レ爾者、不レ成二正覺一。」しるべしいま出家する善男子善女人、みな世尊の往昔の大願力にたすけられて、さはりなく出家受戒することをえたり。如來すでに誓願して出家せしめまします、あきらかにしりぬ、最尊最上の大功德なりといふことを。

佛言、「及有下依レ我剃二除鬚髮一、著二袈裟片一不レ受レ戒者上、供二養是人一。亦得三乃至入二無畏城一。」

【又云若復】同上

【佛言若有】同上

【佛言夫出家】大涅槃經文。

以是緣故、我如是說。あきらかにしる剃除鬚髮して袈裟を著せば、戒をうけずといふとも、これを供養せん人、無畏城にいらん。

又云、『若復有人、爲我出家、不得禁戒、剃除鬚髮、著袈裟片、有以非法惱害此者、乃至破壞三世諸佛法身報身、乃至盈滿三惡道故。』

佛言、『若有衆生、爲我出家、剃除鬚髮、被服袈裟、設不持戒、彼等悉已爲涅槃印之所印也。若復出家、不持戒者、有以非法而作惱亂罵辱毀呰、以手刀杖、打縛斫截、若奪衣鉢、及奪種種資生具者、是人則壞三世諸佛眞實報身、則挑一切人天眼目。是人爲欲隱沒諸佛所有正法三寶種故、令諸天人不得利益墮地獄故、爲三惡道增長盈滿故。』しるべし剃髮染衣すれば、たとひ不持戒なれども無上大涅槃の印のために印せらるるなり。ひとこれを惱亂すれば、三世諸佛の報身を壞するなり。逆罪とおなじかるべし。あきらかにしりぬ出家の功德、ただちに三世諸佛にちかしといふことを。

佛言、『夫出家者、不應起惡。若起惡者、則非出家。出家之人、身口相應。若不相應、則非出家。我棄父母兄弟妻子眷屬知識、出家修道。正是修集諸善覺時。非是修集不善覺時。善覺者、憐愍一切衆生、猶如赤子。不善覺者、與此相違。』

それ出家の自性は、憐愍一切衆生猶如赤子なり、これすなはち不起惡なり、身口相應なり。その儀すでに出家なるがごときは、その德いまかくのごとし。

【佛言復次舍利弗】大般若序品文

【佛言若菩薩】大般若第三初分學觀品文

【悉達太子從】佛本行集經剃髮染衣品文

佛言、復次舍利弗、菩薩摩訶薩、若欲下出家日、即成二阿耨多羅三藐三菩提一、即是日轉二法輪一、轉法輪時、無量阿僧祇衆生、遠塵離垢、於二諸法中一、得二法眼淨一、無量阿僧祇衆生、得二一切法不受一故、諸漏心得二解脫一、無量阿僧祇衆生、於二阿耨多羅三藐三菩提一得中不退轉上。當レ學二般若波羅蜜一。いはゆる學般若菩薩とは、祖祖なり。しかあるに阿耨多羅三藐三菩提は、かならず出家即日に成就するなり。しかあれども三阿僧祇劫に修證し、無量阿僧祇劫に修證するに、有邊無邊に染汙するにあらず、學人しるべし。

佛言、若菩薩摩訶薩、作二是思惟一、我於二何時一、當下捨二國位一、出家之日、即成二無上正等菩提一、還於二是日一、轉二妙法輪一、即令三無量無數有情、遠塵離垢、生二淨法眼一。復令下無量無數有情、永盡二諸漏一、心慧解脫上、亦令三無量無數有情、皆於二無上正等菩提一、得中不退轉上。是菩薩摩訶薩、欲レ成二斯事一、應レ學二般若波羅蜜一。これすなはち最後身の菩薩として、王宮に降生し、捨國位、成正覺、轉法輪度衆生の功德を宣說しますなり。

悉達太子從二車匿邊一、索二取摩尼雜飾莊嚴七寶靶刀一、自以二右手一、執二於彼刀一、從レ鞘拔出、即以二左手一、攬二捉紺青優鉢羅色螺髻之髮一、右手自持二利刀一割取、以二左手一擎、擲二置空中一、時天帝釋、以二希有心一、生二大歡喜一、捧二太子髻一、不レ令レ墮レ地。以二天妙衣一、承二受接取一、爾時諸天、以二彼勝上大諸供具一、而供二養之一。これ釋迦如來、そのかみ太子のとき、夜半に踰城し、日たけてやまにいたりて、みづから頭髮を斷じまします。ときに淨居天、きたりて、頭髮を剃除したてまつり、袈裟をさゝげたてまつれり、これかならず如來出世の瑞

祖なり、諸佛世尊の常法なり。三世十方諸佛、みな一佛としても在家成佛の諸佛ましまさず。過去有佛のゆゑに、出家受戒の功德あり。衆生の得道、かならず出家受戒によるなり。おほよそ出家受戒の功德、すなはち諸佛の常法なるがゆゑに、その功德無量なり。聖敎のなかに在家成佛の說あれど正傳にあらず、女身成佛の說あれど、またこれ正傳にあらず。佛祖正傳するは、出家成佛なり。

【第四祖優婆】傳燈第一優婆毱多章

第四祖優婆毱多尊者、有長者子、名曰提多迦。來禮尊者、志求出家。尊者曰、「汝身出家、心出家。」答曰、「我求出家、非爲身心。」尊者曰、「不爲身心、復誰出家。」答曰、「夫出家者、無我我所故、卽心不生滅、心不生滅故、卽是常道、諸佛亦常。心無形相、其體亦然。」尊者曰、「汝當大悟、心自通達。宜依佛法僧紹隆聖種。」卽與出家受具。

その諸佛の法にあふたてまつりて出家するは、最第一の勝果報なり。その法すなはち、我のためにあらず、我所のためにあらず、身心のためにあらず、身心の出家するにあらず、出家の我我所にあらざる道理かくのごとし。我我所にあらざれば、諸佛の法なるべし、ただこれ諸佛の常法なり。諸佛の常法なるがゆゑに我我所にあらず、身心にあらざるなり、三界の肩をひとしくするところにあらず。かくのごとくなるがゆゑに出家これ最上の法なり、頓にあらず漸にあらず、常にあらず無常にあらず、來にあらず去にあらず、住にあらず作にあらず、廣にあらず狹にあらず、大にあらず小にあらず、作にあらず無作にあらず。佛法單傳の祖師、かならず出家受戒せずといふことなし。

【第十七祖】傳燈第三僧伽難提章。

【南嶽一日自歎】傳燈第五南嶽章。

いまの提多迦はじめて優婆毱尊者にあふたてまつりて、出家をもとむる道理かくのごとし、出家受具し、優婆毱多に參學し、つひに第五の祖師となれり。

第十七祖僧伽難提尊者、室羅閥城寶莊嚴王之子也。生而能言、常讃二佛事一。七歳卽厭二世樂一、以レ偈告二其父母一曰、「稽首大慈父、和南骨肉母、我今欲二出家一、幸願哀愍故。」父母固止レ之。遂終日不レ食、乃許二其在レ家出家一、號二僧伽難提一。復命二沙門禪利多一爲二之師一。積二十九載一、未三嘗退二倦一。尊者每自念言、身居二王宮一、胡爲二出家一。一夕天光下屬、見二一路坦平一。不レ覺徐行、約十里許、至二大巖前一、有二石窟一焉。乃燕二寂于中一。父既失レ子、卽擯二禪利多一出レ國、訪二尋其子一、不レ知二所在一。經二十年一、尊者得法授記已、行化至二摩提國一。」

在家出家の稱、このときはじめてきこゆ。ただし宿善のたすくるところ、天光のなかに坦路をえたり、つひに王宮をいでて石窟にいたる、まことに勝躅なり。世樂をいとひ俗塵をうれふるは聖者なり、五欲をしたひ出離をわするるは凡愚なり。代宗肅宗しきりに僧徒にちかづけりといへども、なほ王位をむさぼりていまだなげすてず。盧居士は、すでに親を辭して祖となる、出家の功德なり。龐居士は、たからをすててちりをすてず、至愚なりといふべし。盧公の道力と龐公の稽古と、比類にたらず。あきらかなるはかならず出家す、くらきは家にをはる、黑業の因緣なり。

南嶽懷讓禪師、一日自歎曰、「夫出家者、爲二無生法一、天上人間、無レ有二勝者一。」いはく無生法とは、如來の正法なり、このゆゑに天上人間にすぐれたり。天上といふは、欲界に六

【盤山曰諸禪德】傳燈卷七盤山章

【臨濟曰夫出家】臨濟錄示衆中の語

【如來般涅槃時】大涅槃經卅三の文

天あり、色界に十八天あり、無色界に四種、ともに出家の道におよぶことなし。
盤山寶積禪師曰、諸禪德、可中學道、似地擎山不知山之孤峻、如石含玉不知玉之無瑕、若如是者、是名出家。佛祖の正法かならずしも知不知にかかはれず、出家は佛祖の正法なるがゆゑに、その功德あきらかなり。
鎭州臨濟院義玄禪師曰、夫出家者、須辨得平常眞正見解、辨佛、辨魔、辨眞、辨僞、辨凡、辨聖。若如是辨得、名眞出家。若魔佛不辨、正是出一家入一家、喚作造業衆生、未得名爲眞正出家。いはゆる平常眞正見解といふは、深信因果、深信三寶等なり。辨佛といふは、ほとけの因中果上の功德を念ずることあきらかなるなり、眞僞凡聖をあきらかに辨肯するなり、もし魔佛をあきらめざれば、學道を沮壞し、學道を退轉するなり。魔事を覺知して、その事にしたがはざれば、辨道不退なり、これを眞正出家の法とす、いたづらに魔事を佛法とおもふものおほし、近世の非なり。學者はやく魔をしり佛をあきらめ修證すべし。
如來般涅槃時、迦葉菩薩、白佛言、世尊、如來具足知諸根力、定知善星當斷善根、以何因緣聽其出家。佛言、善男子、我於往昔初出家時、吾弟難陀、從弟阿難、調婆達多、子羅睺羅、如是等輩、皆悉隨我出家修道。我若不聽善星出家、其人次當得紹王位、其力自在當壞佛法。以是因緣、我便聽許出家修道。善男子、善星比丘、若不出家、亦斷善根、於無量世都無利益。今出家已、雖斷善根、能受

【佛告諸比丘】起世因本經文か。【五結】一貪結、二瞋結、三慢結、四嫉結、五慳結、結は縛の義にして束縛即ち煩惱なり【五根】一信根、二精進根、三念根、四定根、五慧根、根は因の義。

持戒供養恭敬耆舊長老有徳之人、修習初禪乃至四禪、是名善因、如是善因、能生善法、善法既生、能修習道、既修習道、當得阿耨多羅三藐三菩提、是故我聽善星出家。善男子、若我不聽善星比丘出家受戒、則不得稱我爲如來具足十力、善男子、佛觀衆生具足善法及不善法、是人雖具如是二法、不久能斷一切善根、具不善根、何以故、如是衆生、不親善友、不聽正法、不善思惟、不如法行、以是因緣、能斷善根、具不善根。」しるべし如來世尊、あきらかに衆生の斷善根となるべきをしらせたまふといへども、善因をさづくるとして、出家をゆるさせたまふ、大慈大悲なり。斷善根となること、善友にちかづかず、正法をきかず、善思惟せず、如法に行ぜざるによれり。いま學者かならず善友に親近すべし、善友とは諸佛ましますととくなり、罪福ありとをしふるなり、因果を撥無せざるを、善友とし善知識とす。この人の所說、この正法なり、この道理を思惟する、善思惟なり、かくのごとく行ずる、如法行なるべし。しかあればすなはち衆生は親疎をえらばず、ただ出家受戒をすすむべし、のちの退不退をかへりみざれ、修不修をおそるることなかれ、これまさに釋尊の正法なるべし。

佛告諸比丘、「當知閻羅王、便作是說、我當何日脫此苦難、於人中生、以得人身、便得出家、剃除鬚髮、著三法衣、出家學道、閻羅王尙作是念、何況汝等、今得人身、得作沙門。是故諸比丘、當念行身口意行、無令有缺、當滅五結、修行五根、如是諸比丘、當作是學。」爾時諸比丘、聞佛所說、歡喜奉行。あきらかにしりぬ、たとひ閻羅王なり

【四種、四依】四分律云、一糞掃衣、二信行乞、三樹下坐、四陳棄藥と。

といへども、人中の生をこれわがふことかくのごとし、すでにうまれたる人いそぎ剃除鬚髮し、著三法衣して、學佛道すべし、これ餘趣にすぐれたる人中の功德なり。しかあるを人間にうまれながらいたづらに官途世路を貪求し、むなしく國王大臣のつかはしめとして一生を夢幻にめぐらし、後世は黒闇におもむき、いまだたのむところなきは至愚なり。すでにうけがたき人身をうけたるのみにあらず、あひがたき佛法にあひたてまつれり、いそぎ諸緣を抛捨し、すみやかに出家學道すべし。國王大臣妻子眷屬はところごとにかならずあふ、佛法は優曇華のごとくにしてあひがたし。おほよそ無常たちまちにいたるときは、國王、大臣、親暱、從僕、妻子、珍寶、たすくるなし、ただひとり黄泉におもむくのみなり。おのれにしたがひゆくは、ただこれ善惡業等のみなり、人身を失せんとき、人身ををしむこころふかかるべし。人身をたもてるとき、はやく出家すべし、まさにこれ三世の諸佛の正法なるべし。その出家行法に四種あり、いはゆる四依なり、一盡形壽樹下坐、二盡形壽著糞掃衣、三盡形壽乞食、四盡形壽有病服陳棄藥、共行此法、方名出家、方名爲僧、若不行此、不名爲僧、是故名出家行法。いま西天東地、佛祖正傳するところ、これ出家行法なり、一生不離叢林なるは、すなはちこの四依の行法そなはれり、これを行四依と稱す。これに違して五依を建立せん、しるべし邪法なり、たれか信受せん、たれか忍聽せん。佛祖正傳するところ、これ正法なり、これによりて出家する人間最上最尊の慶幸なり。このゆゑに西天竺國にはすなはち難陀、阿難、調達、阿那律、摩訶男、拔提、

ともにこれ師子頰王のむまご、刹利種姓のもとも尊貴なるなり、はやく出家せし、後代の勝躅なるべし。いま刹利にあらざらんともがら、その身をしむべからず、王子にあらざらんともがら、なにのをしむところかあらん。閻浮提最第一の尊貴より、三界最第一の尊貴に歸するは、すなはち出家なり。自餘の諸小國王、諸離車衆、いたづらにをしむべからざるをしみ、ほこるべからざるにほこり、とどまるべからざるにとどまりて、出家せざらん、たれかつたなしとせざらん、たれか至愚なりとせざらん。羅睺羅尊者は、菩薩の子なり、淨飯王のむまごなり、帝位をゆづらんとす、しかあれども世尊あながちに出家せしめまします、しるべし出家の法最尊なりと。密行第一の弟子として、いまにいたりていまだ涅槃にいりましまさず、衆生の福田として世間に現住しまします。西天傳佛正法眼藏の祖師のなかに、王子の出家せるしげし。いま震旦の初祖、これ香至王第三皇子なり、王位をおもくせず、正法を傳持せり、出家の最尊なるあきらかにしりぬべし。これらにならふるにおよばざる身をもちながら、出家しつべきにおきていそがざらん、いかならん、明日をかまつべき、出息入息をまたず、いそぎ出家せん、それかしこかるべし。またしるべし出家受戒の師、その恩德、すなはち父母にひとしかるべし。

禪苑清規第一云、「三世諸佛、皆曰二出家成道一、西天二十八祖、唐土六祖、傳二佛心印一、盡是沙門、蓋以嚴二淨毘尼一、方能洪二範三界一、然則參禪問道、戒律爲レ先、既非三離レ過防レ非一、何以成佛作祖」と。たとひ澆風の叢林なりとも、なほこれ薝蔔の林なるべし、凡木凡

【師子頰王の孫】
師子頰王 ─ 淨飯王 ─ 悉達多。難陀。
　　　　 ─ 白飯王 ─ 阿難。調達。
　　　　 ─ 斛飯王 ─ 摩訶男。阿那律。
　　　　 ─ 甘露飯王 ─ 婆娑。跋提。

【離車】名義集に離車翻じて皮薄と爲す、或は彌戾車と名く邊地主と云ふ。仙族王、邊地王ともいふ。

【三世諸佛皆曰】此文出家卷頭に出づ。

【薝蔔林】大智度論云、此云二黃華一、彩如二桂子華一、華氣

遠聞といふ、維摩經に「如二人入二薝蔔林一、唯嗅二薝蔔一不レ嗅二餘香一」と。

【建長七年】說時說處不明、高祖滅後三年書寫、懷弉の署名無きも前卷に同じかるべし。

【供養諸佛】諸佛は佛寶也、佛法僧の三寶を統一せる諸佛也、供養は一念の信心にして一水一華一饌一草を供養する所に無邊の大功德力を具ふ、日常の運心直に供養諸佛の端的にして自他の邊際を超ゆ。

【佛言若無】大智度論卷十三の文。

【佛本行集經】釋尊の本事を說く、三十億佛、八億佛、三億佛に供養したりし因緣。

剎のおよぶところにあらず。また合水の乳のごとし、乳をもちゐんときこの和水の乳をもちゐるべし、餘物をもちゐるべからず。しかあればすなはち三世諸佛、皆由出家成道の正傳、もともこれ最尊なり、さらに出家せざる三世諸佛おはしまさず、これ佛佛祖祖正傳の正法眼藏涅槃妙心無上菩提なり。

建長七年乙卯夏安居日

正法眼藏出家功德　畢

正法眼藏供養諸佛

佛言、若無二過去世一、應レ無二過去佛一、若無二過去佛一、無二出家受具一。あきらかにしるべし、三世にかならず諸佛ましますなり、しばらく過去の諸佛において、そのはじめありといふことなかれ、そのはじめなしといふことなかれ、もし始終の有無を邪計せば、さらに佛法の習學にあらず。過去の諸佛を供養したてまつり、出家し隨順したてまつるがごとき、かならず諸佛となるなり、供養の功德によりて作佛するなり。いまだかつて一佛をも供養したてまつらざる衆生、なにによりてか作佛することあらん、無因作佛あるべからず。

佛本行集經第一供養品。佛告二目犍連一、我念二往昔一、於二無量無邊諸世尊所一、種二諸善根一、乃至求二阿耨多羅三藐三菩提一。目犍連、我念二往昔一作二轉輪聖王身一、値二三十億佛一、皆同一

【佛藏經】同じく本事を説き海數億の諸佛に供養せし因緣。

號、號ニ釋迦一如來及聲聞衆、尊重承事、恭敬供養四事具足、所謂衣服、飲食、臥具、湯藥。時彼諸佛、不レ與ニ我記一汝當下得ニ阿耨多羅三藐三菩提、及世間解、天人師、佛世尊一於ニ未來世一得中成正覺上。目揵連、我念ニ往昔一作ニ轉輪聖王身一値ニ八億諸佛一皆同一號、號ニ然燈、如來及聲聞衆、尊重恭敬、四事供養、所謂衣服、飲食、臥具、湯藥、旛蓋、華香。時彼諸佛、不レ與ニ我記一汝當レ得ニ阿耨多羅三藐三菩提、及世間解、天人師、佛世尊。目揵連、我念ニ往昔一作ニ轉輪聖王身一値ニ三億諸佛一、皆同一號、號ニ弗沙一、如來及聲聞衆、四事供養、皆悉具足、時彼諸佛、不レ與ニ我記一、汝當ニ作佛一。このほかそこばくの諸佛を供養しましますゝ、轉輪聖王の身としては、かならず四天下を統領すべし、供養諸佛の具まことに豐饒なるべし、もし大轉輪王ならば、三千界に王たるべし。そのときの供養、いまの凡慮はかるべからず、ほとけときましますとも、解了することえがたからん。

佛藏經淨見品第八。曰、佛告ニ舍利弗一、我念ニ過去一求ニ阿耨多羅三藐三菩提一値ニ三十億佛一皆號ニ釋迦牟尼一、我時皆作ニ轉輪聖王一盡形供ニ養佛及諸弟子、衣服、飲食、臥具、醫藥一爲レ求ニ阿耨多羅三藐三菩提一而是諸佛不下記ニ我言中汝於ニ來世一當上レ得ニ作佛一。何以故、以ニ我有所得一故。舍利弗、我念ニ過去一得レ値ニ八千佛一、皆號ニ定光一我時皆作ニ轉輪聖王一盡形供ニ養佛及諸弟子、衣服、飲食、臥具、醫藥一爲レ求ニ阿耨多羅三藐三菩提一而是諸佛不レ記下我汝於ニ來世一當上レ得ニ作佛一。何以故、以ニ我有所得一故。舍利弗、我念ニ過去一値ニ六萬億佛一皆號ニ光明一、我時皆作ニ轉輪聖王一盡形供ニ養佛及諸弟子衣服、飲食、臥具、醫藥一爲レ求ニ阿耨

多羅三藐三菩提一、而是諸佛亦不レ記下我、汝於二來世一當上レ得レ作レ佛。何以故、以二我有所得一故。」舍利弗、我念二過世一値二三億佛一皆號二弗沙一。我時皆作二轉輪聖王一四事供養、皆不レ記レ我、以二有得一故。舍利弗、我念二過世一得レ値二萬八千佛一皆號二山王一劫名二上八一。我皆於二此萬八千佛所一剃髪染衣、修二習阿耨多羅三藐三菩提一皆不レ記レ我、以二有所得一故。」舍利弗、我念二過世一得レ値二五百佛一、皆號二華上一。我時皆作二轉輪聖王一、悉以二一切一供二養諸佛及諸弟子一、皆不レ記レ我、以二有所得一故。」舍利弗、我念二過世一得レ値二五百佛一、皆號二威徳一。我悉供養、皆不レ記レ我、以二有所得一故。」舍利弗、我念二過世一得レ値二二千佛一、皆號二憍陳如一。我時皆作二轉輪聖王一、悉以二一切供具一供二養諸佛一、皆不レ記レ我、以二有所得一故。」舍利弗、我念二過世一値二九千佛一皆號二迦葉一。我以二四事一供二養諸佛及弟子衆一、皆不レ記レ我、以二有所得一故。」舍利弗、我念二過去一於二萬劫中一無レ有二佛出一。爾時初五百劫、有二九萬辟支佛一、我盡形壽、悉皆供二養衣服、飲食、臥具、醫藥一尊重讚歎。次五百劫、復以二四事一供二養八萬四千億諸辟支佛一尊重讚歎。舍利弗、過二是千劫一已、無三復辟支佛一。我時閻浮提死生二梵世中一作二大梵王一。如レ是展轉、五百劫中、常生二梵世一作二大梵王一、不レ生二閻浮提一。過二是五百劫一已、下二生閻浮提一、治二化閻浮提一、命終生二四天王天一、於レ中命終、生二忉利天一、作二釋提桓因一。如レ是展轉、滿二五百劫一生二閻浮提一、滿二五百劫一生二於梵世一、作二大梵王一。」舍利弗、我於二九千劫中一、但一生二閻浮提一。九千劫中、但生二天上一。劫盡燒時生二光音天一。世界成已還生二梵世一。九千劫中、都不レ生二人中一。舍利弗、是九千劫中、無レ有二諸佛、辟支佛一、多二諸衆生一

墮在惡道。」舍利弗、是萬劫過已、有佛出世、號曰普守如來、應供、正遍知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛世尊。我於爾時梵世命終、生閻浮提作轉輪聖王、號曰共天。人壽九萬歲。我盡形壽、以一切樂具供養彼佛及九十億比丘、於九萬歲爲求阿耨多羅三藐三菩提。是普守佛、亦不記我、汝於來世當得作佛。何以故、我於爾時不能通達諸法實相、貪著計我有所得見。」舍利弗、於是劫中有百佛出、名號各異、我時皆作轉輪聖王、盡形供養佛及諸弟子、爲求阿耨多羅三藐三菩提、而是諸佛、亦不記我、汝於來世當得作佛、以有所得故。」舍利弗、我念過去第七百阿僧祇劫中、得値千佛、皆號閻浮檀。我盡形壽、四事供養、亦不記我、以有所得故。」舍利弗、我念過去亦於第七百阿僧祇劫中、得値六百二十萬諸佛、皆號見一切儀。我時皆作轉輪聖王、以一切樂具盡形供養佛及諸弟子、亦不記我、以有所得故。」舍利弗、我念過去亦於第七百阿僧祇劫中得値八十四佛、皆號帝相。我時皆作轉輪聖王、以一切樂具盡形供養佛及諸弟子、亦不記我、以有所得故。」舍利弗、我念過去亦於第七百阿僧祇劫中得値十五佛、皆號日明。我時皆作轉輪聖王、以一切樂具盡形供養佛及諸弟子、亦不記我、以有所得故。」舍利弗、我念過世亦於第七百阿僧祇劫中得値六十二佛、皆號善寂。我時皆作轉輪聖王、以一切樂具盡形供養、亦不記我、以有所得故。如是展轉、乃至見定光佛、乃得無生忍。即記我言、汝於來世過阿僧祇劫當得作佛、號釋迦牟尼如來、應供、正徧知、明行足、善逝、

【釋迦菩薩初】倶舍論第十八、婆沙論一百七十八卷等出三大阿僧祇劫及び九十一劫の修行中に供養せし諸佛の因緣を說く。

世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊にはじめ三十億の釋迦牟尼佛にあひたてまつりて、盡形壽供養よりこのかた、定光如來にあふたてまつらせたまふまで、みなつねに轉輪聖王の身として盡形壽供養したてまつりまします、轉輪聖王おほくは八萬歳已上なるべし。あるひは九萬歳、八萬歳の壽量、そのあひだの一切樂具の供具の供養なり。定光佛とは、然燈如來なり、三十億の釋迦牟尼佛にあひたてまつりまします、佛本行集經ならびに佛藏經の說おなじ。

釋迦菩薩、初阿僧企耶、逢㆓事供㆔養七萬五千佛㆒。最初名㆓釋迦牟尼㆒、最後名㆓寶髻㆒。第二阿僧企耶、逢㆓事供㆔養七萬六千佛㆒、最初卽寶髻、最後名㆓燃燈㆒。第三阿僧企耶、逢㆓事供㆔養七萬七千佛㆒、最初卽然燈、最後名㆓勝觀㆒。於㆘修㆓相異熟業㆒九十一劫中㆖、逢㆓事供㆔養六佛㆒、最初卽勝觀、最後名㆓迦葉波㆒。おほよそ三大阿僧祇劫の供養諸佛、はじめ身命より國城妻子七寶男女等、さらにをしむところなし、凡慮のおよぶところにあらず、あるひは黃金の粟を白銀の盌にもりみて、あるひは七寶の粟を金銀の盌にもりみて、供養したてまつる。あるひは小豆あるひは、水陸の華、あるひは栴檀沈水香等を供養したてまつり、あるひは五莖の靑蓮華を五百の金錢をもて買收して、然燈佛を供養したてまつりまします。あるひは鹿皮衣、これを供養したてまつる、おほよそ供佛は諸佛の要樞にましますべきを供養したてまつるにあらず、いそぎわがいのちの存する光陰をむなしくすごさず供養したてまつるなり。たとひ金銀なりとも、ほとけのおほんため、なにの益かあらん、たとひ香華な

【大般涅槃經曰】二十二卷光明遍照高貴德王菩薩品の文。過去の釋迦牟尼佛に供養せんに今釋迦牟尼佛賣爲身の因緣を說く。

りとも、またほとけのおほんため、なにの益かあらん。しかあれども納受せさせたまふは、衆生をして功德を增長せしめんための大慈大悲なり。

大般涅槃經十二曰、佛言、「善男子、我念ニ過去無邊無邊那由他劫ヲ一、爾時世界、名曰ニ娑婆一。有ニ佛世尊一、號ニ釋迦牟尼如來、應供正遍知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛世尊一。爲ニ諸大衆一、宣ニ說如レ是大涅槃經一。我於ニ爾時一、從ニ善友所一、轉聞ニ彼佛當下爲ニ大衆一說上ニ大涅槃一。我聞レ是已、其心歡喜、欲レ設ニ供養一。居貧無レ物。欲ニ自賣一レ身、薄福不レ售。即欲レ還レ家、路見ニ一人一、而便語言、「吾欲レ賣レ身、君能買不。」其人答曰、「我家作業、人無ニ堪者一。汝設能爲、我當レ買レ汝。」我即問言、「有ニ何作業一人無ニ能堪一。」其人見レ答、「吾有ニ惡病一。良醫處レ藥、應三當日服ニ人肉三兩一。卿若能以ニ身肉三兩一、日日見レ給、便當レ與ニ汝金錢五枚一。」我時聞已、心中歡喜、我復語言、「汝與ニ我錢一、暇ニ我七日一。須ニ我事訖一、便還相就。」其人見レ答、「七日不可、審能爾者、當レ許ニ一日一。」善男子、我於ニ爾時一、即取ニ其錢一、還至ニ佛所一、頭面禮足、盡ニ其所有一、而以奉獻。然後誠心聽ニ受是經一。我是時闇鈍、雖レ得レ聽レ經、唯能受ニ持一偈文句一。如來證ニ涅槃一、永斷ニ於生死一、若有ニ至心聽一、常得ニ無量樂一。受ニ是偈一已、即便還至ニ彼病人家一。善男子、我時雖ニ復日日與ニ三兩肉一、以ニ念偈因緣一故、不ニ以爲一レ痛。日日不レ廢、具ニ滿一月一。善男子、以ニ是因緣一、其病得レ瘥。我身平復、亦無ニ瘡瘢一。我時見ニ身具足完具一、即發ニ阿耨多羅三藐三菩提心一。一偈之力、尙能如レ是。何況具足受持讀誦。我見ニ此經有一ニ如レ是利一、復倍發心、願下於ニ未來一、得レ成ニ佛道一字中釋迦牟

【身肉を處分】身肉のわけまへをドされたるなり。

【法華經曰】法華方便品の文。

牟佛上。善男子、以二是一偈因縁力一故、令下我今日於二大衆中一、爲二諸天人一、具足宣說上。善男子、以二是因縁一、是大涅槃、不可思議、成二就無量無邊功德一。乃是諸佛如來、甚深祕密之藏。』そのときの賣身の菩薩は、今釋迦牟尼佛の往因なり。他經を會通すれば、初阿僧祇劫の最初、古釋迦牟尼佛を供養したてまつりましますときなり。かのときは瓦師なり。その名を大光明と稱す。古釋迦牟尼佛ならびに諸弟子に供養するに、三種の供養をもてす、いはゆる艸座石蜜漿、然燈なり。そのときの發願にいはく、『國土名號壽命弟子、一如今釋迦牟尼佛。』かのときの發願、すでに今日成就するものなり。しかあればすなはちほとけを供養したてまつらんとするに、その身まづしといふことなかれ、そのいへまづしといふことなかれ、みづから身をうりて諸佛を供養したてまつるは、いま大師釋尊の正法なり、たれかこれを隨喜歡喜したてまつらざらん。このなかに日日に三兩の身肉を割取するぬしにあふ、善知識なりといへども、他人のたふべからざるなり。しかあれども供養の深志のすぐるるところ、いまの功德あり。いまわれら如來の正法を聽聞する、かの往古の身肉を處分せられたるなるべし。いまの四句の偈は、五枚の金錢にかふるところにあらず、三阿僧祇一百大劫のあひだ、受生捨生にわするることなく、彼佛是佛のところに、證明せられきたりましますところまことに不可思議の功德あるべし。遺法の弟子、ふかく頂戴受持すべし。如來すでに『一偈之力尚能如レ是。』と宣說しまします、もともおほきにふかかるべし。

法華經曰、『若人於二塔廟、寶像及畫像一、以二華香旛蓋一、敬心而供養、若使二人作一レ樂、擊レ鼓吹二

【石頭大師いはく】大師の作參同契の末文。

【龍樹祖師曰】智論第七の文。

【復次有小因】前文の續き。

角唄、簫笛琴箜篌、琵琶鐃銅鈸、如是衆妙音、盡持以供養、或以歡喜心歌唄頌佛德、乃至一小音、皆已成佛道。若人散亂心、乃至以一華供養於畫像、漸見無數佛、或有人禮拜、或復但合掌、乃至擧一手、或復少低頭、以此供養像、漸見無量佛、自成無上道、廣度無數衆。」これすなはち三世諸佛の頂𩕳なり、眼睛なり、見賢思齊の猛利精進すべし。いたづらに光陰をわたることなかれ。石頭無際大師いはく、「光陰莫虛度。」かくのごときの功德、みな成佛す、過去現在未來おなじかるべし、さらに二あり三あるべからず。供養佛の因によりて、作佛の果を成ずることかくのごとし。

龍樹祖師曰、「如求佛果、讚歎一偈、稱一南謨、燒一捻香、奉獻一華、如是小行、必得作佛。」これひとり龍樹祖師菩薩の所說といふとも、歸命したてまつるべし。いかにいはんや大師釋迦牟尼佛說を、龍樹祖師、正傳擧揚しましますところなり。われらいま佛道の寶山にのぼり、佛道の寶海にいりてさいはひにたからをとれる、もとももよろこぶべし、曠劫の供佛のちからなるべし。必得作佛うたがふべからず、決定せるものなり。釋迦牟尼佛の所說かくのごとし。

「復次、有小因大果、小緣大報。如求佛道、讚一偈、一稱南無佛、燒一捻香、必得作佛。何況聞知諸法實相不生不滅、不不生不不滅、而行因緣業亦不失。」世尊の所說、かくのごとくあきらかなるを、龍樹祖師したしく正傳しましますなり。誠諦の金言、正傳の相承あり。たとひ龍樹祖師の所說なりとも、餘師の說に比すべからず。世尊の所示を正傳流布し

【龍樹曰復次諸佛】大智度論第十の文。佛盲比丘の爲に針孔を通ず、福德を愛するが爲の故にと。

ましますにあふことをえたり、もともよろこぶべし。これらの聖教をみだりに東土の凡師の虛說に比量することなかれ。

龍樹祖師曰く、『復次諸佛、恭二敬法一故、供二養於法一。以レ法爲レ師。何以故、三世諸佛皆以二諸法實相一爲レ師。』問曰、『何以不三自供二養身中法一、而供二養他法一。』答曰、『隨二世間法一。如比丘欲レ供二養法寶一。不三自供二養身中法一、而供二養餘持法知解法者一。佛亦如レ是。雖二身中有一レ法、而供二養餘佛法一。』問曰、『如レ佛不レ求二福德一、何以故供養。』答曰、『佛從二無量阿僧祇劫中一、修二諸功德一、常行二諸善一。不二但求レ報、敬二功德一故、而作二供養一。如二佛在時、有二一盲比丘一、眼無レ所レ見一。而以レ手縫レ衣。時針紝脫。佛言、誰愛二福德一、爲レ我紝レ針。是時佛到二其所一。語二比丘一、我是愛二福德一人、爲レ汝紝來。是比丘識二佛聲一、疾起著レ衣禮二佛足一、白レ佛言、佛德已滿、云何言レ愛二福德一。佛報言、我雖二功德已滿一、我深知二功德因、功德果報、功德力一。今我於二一切衆生中一、得二最第一一、由二此功德一。故我愛、佛爲二此比丘一、讚二功德一已、次爲隨意說法、是比丘得二法眼淨一、肉眼更明。』この因緣、むかしは先師の室にして夜話をきく、のちには智度論の文にむかふてこれを撿校す。傳法祖師の示誨、あきらかにして遺落せず。この文、智度論第十にあり。諸佛かならず諸法實相を大師としましますことあきらけし、釋尊また諸佛の常法を證しまします。いはゆる諸法實相を大師とするといふは、佛法僧三寶を供養恭敬したてまつるなり。諸佛は、無量阿僧祇劫、そこばくの功德善根を積集して、さらにその報をもとめず、ただ功德を恭敬して供養しましますなり。佛果菩提のくらゐにいたり

【供養に十種】菩薩地經第六に出づ

【南嶽思】北齊の慧文に嗣ぐ、南嶽の慧思大禪師の原文に出つて天台智者大師法華懺法を撰す。

【僧祇律】摩訶僧祇律四十卷、佛陀跋陀羅、法顯共譯。四部律の一、十章に分ちて諸戒律を明す。上座有部の根本律。

てなほ小功德を愛し、盲比丘のために衽針しまします。佛果の功德をあきらめんとおもはば、いまの因緣、まさしく消息なり。しかあればすなはち佛果菩提の功德諸法實相の道理、いまのよにある凡夫のおもふがごとくにはあらざるなり。いまの凡夫のおもふところは、造惡の諸法實相ならんとおもふ、有所得のみ佛果菩提ならんとおもふ。かくのごとくの邪見は、たとひ八萬劫をしるといふとも、いまだ本劫本見末劫末見をのがれず、いかでか唯佛與佛の究盡しましますところの諸法實相を究盡することあらん。ゆゑいかんとなれば、唯佛與佛の究盡しましますところ、これ諸法實相なるがゆゑなり。

おほよそ供養に十種あり、いはゆる一者身供養、二者支提供養、三者現前供養、四者不現前供養、五者自作供養、六者他作供養、七者財物供養、八者勝供養、九者無染供養、十者至處道供養。

このなかの第一身供養とは、於佛色身而設供養、名身供養。

第二供佛靈廟、名支提供養。僧祇律曰、有舍利者、名爲塔婆。無舍利者、說爲支提。或曰、通名支提。又梵曰塔婆、稱偸婆、此翻方墳、亦言靈廟、阿含言支徵。知荷反。

あるいは塔婆と稱し、あるひは支提と稱するおなじきにたれども、南嶽思大禪師の法華懺法にいはく、一心敬禮十方世界舍利尊像支提妙塔、多寶如來全身寶塔。あきらかに支提と妙塔と、舍利と尊像とは別なるがごとし。

僧祇律第三曰、塔法者、佛住拘薩羅國遊行。時有婆羅門耕地、見世尊行過、持牛

杖拄地禮佛。世尊見已、便發微笑。諸比丘白佛言、何因緣故笑。唯願欲聞之。
佛便告諸比丘、是婆羅門、今禮二世尊。諸比丘白佛言、何等二佛。佛告諸比丘、禮我
當其杖下、有迦葉佛塔。諸比丘白佛言、願見迦葉佛塔。佛告諸比丘、汝從此婆羅
門索土塊並是地。諸比丘即便索之。時婆羅門便與之。得已。爾時世尊、即現出迦
葉佛七寶塔、高一由延、面廣半由延。婆羅門見已、即便白佛言、世尊、我姓迦葉。是
我迦葉塔。爾時世尊、即於彼家作迦葉佛塔。諸比丘白佛言、世尊、我得授泥
土不。佛言、得授。即時說偈言、眞金百千擔、持用行布施、不如一團泥、敬心治
佛塔。爾時世尊、自起迦葉佛塔。下基四方、周市欄楯、圓起二重、方牙四出、上施
槃蓋、長表輪相。佛言、作塔法應如是。塔成已、世尊敬過去佛故、便自
作禮。諸比丘白佛言、世尊、我得作禮不。佛言、得。即說偈言、人等百千金、持
用行布施、不如一善心、恭敬禮佛塔。爾時世人聞世尊作塔、持香華來、奉世尊。
世尊供養過去佛故、即受香華、持供養塔。諸比丘白佛言、我等得供養不。佛言、
得。即說偈言、百千車眞金、持用行布施、不如一善心、華香供養塔。爾時大衆
雲集。佛告舍利弗、汝爲諸人說法。佛即說偈言、百千閻浮提、滿中眞金施、不如
一法施、隨順令修行。爾時座中有得道者。佛即說偈言、百千世界中、滿中眞金施、
不如一法施、隨順見眞諦。爾時婆羅門、得不壞信。即於塔前、飯佛及僧。時波
斯匿王聞世尊造迦葉佛塔、即勅載七百車塼、來詣佛所、頭面禮足、白佛言、世

【越毘尼罪】越は違越、毘尼は律、戒律に違背する罪

尊、我欲廣作此塔、爲得不。』佛言『得。』佛告大王、過去世時、迦葉佛般泥洹時、有王名吉利、欲作七寶塔。時有臣白王、未來世當有非法人出、當破此塔得重罪。唯願大王當以塼作、金銀覆上。若取金銀者、塔故在得全。王即如臣言、以塼作、金銀覆上。高一由延、面廣半由延、銅作欄楯。經七年七月七日乃成。作成已、香華供養佛及比丘僧。』波斯匿王白佛言、彼王福德多有珍寶、我今當作、不及彼王。即便作經七月七日乃成。成已、供養佛及比丘僧。作塔法者、下基四方周帀欄楯、圓起二重、方牙四出、上施槃蓋、長表輪相。若言世尊已除貪欲瞋恚愚癡、用是塔爲、得越毘尼罪、業報重故。是名塔法。塔事者、起僧伽藍時、先預度好地作塔處。塔不得在南、不得在西。應在東、應在北。不得僧地侵佛地、佛地不得侵僧地。若塔近死尸林、若狗食殘、持來汙地、應作垣牆。應在西若南作僧坊。不得使僧地水流入佛地。佛地水得流入僧地。塔應在高顯處作。不得在塔垣中浣染曬衣、著革屣、覆頭、覆肩、涕唾地。若作是言、世尊、貪欲瞋恚愚癡已除、用是塔爲、得越毘尼罪、業報重故。是名塔事。塔龕者、爾時波斯匿王往詣佛所、頭面禮足、白佛言、世尊、我等爲迦葉佛作塔、得作龕不。佛言、得。過去世時、迦葉佛般泥洹後、吉利王爲佛起塔、四面作龕、上作獅子像、種種彩畫。前作欄楯、安置華處、龕內懸繒蓋。若人言世尊貪欲瞋恚愚癡已除、但自莊嚴而受樂者、得越毘尼罪、業報重。是名塔龕。』あきらかにしりぬ佛果菩提のちへに、古佛のために塔を

たて、これを禮拜供養したてまつる。これ諸佛の常法なり。かくのごとくの事おほけれどしばらくこれを擧揚す。佛法は有部すぐれたり、そのなかに僧祇律もとも根本なり、僧祇律は、法顯はじめて荊棘をひらきて、西天にいたり、靈山にのぼれりしついでに、將來するところなり、祖祖正傳しきたれる法、まさしく有部に相應せり。

第三現前供養、面對佛身及與支提、而設供養也。

第四不現前供養、於不現前佛及支提、廣設供養。謂現前共不現前、供養佛及支提塔廟、並供不現前佛及支提塔廟。現前供養、得大功德、不現前供養、得大功德、境寬廣故、現前不現前供養者、得最大大功德。

第五自作供養、自身供養佛及支提。

第六他作供養、佛及支提、有少財物、不依懈怠、教他施作也。謂自他供養、彼此同爲。自作供養得大功德。教他供養、得大大功德。自他供養得最大大功德。

第七財物供養佛及支提塔廟舍利。謂財有三種。一資具供養、謂衣食等。二敬具供養、謂香華等。三嚴具供養、謂餘一切寶莊嚴等也。

第八勝供養、勝有三。一專設種種供養。二純淨信心。信佛德重理合供養。三廻向心、求佛心中、而設供養。

第九無染供養者、無染有二。一心無染、離一切過。二財物無染、離非法過。

第十至處道供養、謂供養順果、名至處道供養。佛果是其所至之處、供養之行、能至彼處、

【次供養心六種】大乘義章に持地論を引く、今文と少異。

【令韜禪師】六祖に依て出家、未だ曾て左右を離れず、祖歸寂の後衣塔の主と爲る。常に曹溪を離れず、故に曹溪の令韜禪師と稱す。大曉禪師と謚號す。

【建長七年】前卷に同じ。

名二至處道一。至處道供養、或名二法供養一。或名二行供養一。就レ中有レ三、一財物供養、爲二至處道供養一。二隨喜供養、爲二至處道供養一。三修行供養、爲二至處道供養一。供二養於佛一。既有二此十供養一。於レ法於レ僧、類亦同然。謂、供養法者、供二養佛所說理教行法一。竝供二養經卷一。供養僧者、謂供二養一切三乘聖衆、及其支提、竝其形像塔廟、及凡夫僧一。

次供養心有二六種一。一福田無上心、生福田中最勝。二恩德無上心、一切善樂、依二三寶一出生。三生一切衆生最勝心。四如優曇鉢華難遇心。五三千大千世界殊獨一心。六一切世間出世間具足依義心。謂如來具二足世間出世間法一。能與二衆生一爲二依止處一、名二具足依義一。以二此六心一、雖是少物、供二養三寶一、能獲二無量無邊功德一。何況其多。かくのごとくの供養かならず、誠心に修設すべし、諸佛かならず修しきたりましますところなり。その因緣あまねく經律にあきらかなれども、なほ佛祖まのあたり正傳しきたりまします、執侍服勞の日月、すなはち供養の時節なり。形像舍利を安置し、供養禮拜し、塔廟をたて支提をたつる儀則、ひとり佛祖の屋裡に正傳せり。佛祖の兒孫にあらざれば、正傳せず。またもし如法に正傳せざれば、法儀相違す、法儀相違するがごときは、供養まことならず、供養まことならざれば、功德おろそかなり。かならず如法供養の法をならひ正傳すべし。令韜禪師は、曹谿の塔頭に陪侍して年月をおくり、盧行者は晝夜にやすまず、碓米供衆する、みな供養の如法なり。これその少分なり。しげくあぐるにいとまあらず、かくのごとく供養すべきなり。

建長七年夏安居日

正法眼藏供養諸佛　畢

【歸依三寶】歸依は恭敬、三寶は佛法僧、三寶に歸依するは即ち佛法僧を恭敬するなり。この恭敬する所は佛祖正傳する所唯この恭敬佛法僧歸依三寶あるのみ。

【禪苑清規曰】卷八、一百廿問の第一。

【一闡提】信不具無性有情なり。

【僧那】大誓、弘誓の意、誓願なり。

【いはゆる歸依】永平高祖の歸依の解釋、三寶歸依の大旨を述ぶ。

正法眼藏歸依三寶

禪苑清規曰、敬佛法僧否。（一百二十問第一）あきらかにしりぬ、西天東土、佛祖正傳するところは、恭敬佛法僧なり。歸依せざれば恭敬せず、恭敬せざれば歸依すべからず。この歸依佛法僧の功德、かならず感應道交するとき成就するなり。たとひ天上人間地獄鬼畜なりといへども、感應道交すればかならず歸依したてまつるなり、すでに歸依したてまつるがごときは、生生世世在在處處に增長し、かならず積功累德し、阿耨多羅三藐三菩提を成就するなり。おのづから惡友にひかれ魔障にあふて、しばらく斷善根となり一闡提となれども、つひには續善根し、その功德增長するなり、歸依三寶の功德つひに不朽なり。その歸依三寶とは、まさに淨信をもはらにして、あるひは如來現在世にもあれ、あるひは如來滅後にもあれ、合掌し、低頭して、口にとなへていはく、

「我某甲從今身至佛身、歸依佛、歸依法、歸依僧。歸依佛兩足尊、歸依法離欲尊、歸依僧衆中尊、歸依佛竟、歸依法竟、歸依僧竟。」はるかに佛果菩提をこころざして、かくのごとく僧那を始發するなり、しかあればすなはち身心いまも刹那刹那に生滅すといへども、法身かならず長養して菩提を成就するなり。いはゆる歸依とは、歸は歸投なり、依は依伏な

【問何故偏歸】大乘義章に出づ。

【住持、化儀、理體等】四種の三寶を擧ぐ。住持は釋尊滅後常住護持する所の三寶、化儀又現前三寶とは具體的に存する三寶、理體は化儀の內面的意義にして抽象的の三寶、一體は平等にして以上三種の三寶の根本原理とも稱すべき三寶なり、三種の三寶は本是れ一體三寶に歸すべきなり、一體の上に住持も理體も存する道理知るべし。

【法華經曰】法華壽量品の偈。

り、このゆゑに歸依といふ。歸依の相は、たとへば子の父に歸するがごとし、依伏は、たとへば民の王に依するがごとし、いはゆる救濟の詞なり。佛はこれ大師なるがゆゑに歸依す、法は良藥なるがゆゑに歸依す、僧は勝友なるがゆゑに歸依す。問、『何故、偏歸此三。』答、『以此三種畢竟歸處、能令衆生出離生死證大菩提故歸。』此三種畢竟不可思議功德なり。佛は西天には佛陀耶と稱す、震旦には覺と翻ず、無上正等覺なり、法は西天には達磨と稱す、また曇無と稱す、梵音の不同なり、震旦には法と翻ず。一切の善惡無記の法、ともに法と稱すといへども、いま三寶のなかの歸依するところの法は、軌則の法なり。僧は西天には僧伽と稱す、震旦には和合衆と翻ず、かくのごとく稱讃しきたれり。「住持三寶、形像塔廟佛寶、黃紙朱軸所傳法寶、剃髮染衣、戒法儀相僧寶。」「化儀三寶、釋迦牟尼世尊佛寶、所轉法輪、流布聖教法寶、阿若憍陳如等五人僧寶。」「理體三寶、五分法身、名爲佛寶、滅諦無爲、名爲法寶、學無學功德、名爲僧寶。」「一體三寶、證理大覺、名爲佛寶、清淨離染、名爲法寶、至理和合、無擁無滯、名爲僧寶。」かくのごとくの三寶に歸依したてまつれるなり。もし薄福少德の衆生は、三寶の名字、なほききたてまつらざるなり、いかにいはんや歸依したてまつることをえんや。

法華經曰、「是諸罪衆生、以惡業因緣、過阿僧祇劫、不聞三寶名。」『法華經』は、諸佛如來一大事因緣なり、大師釋尊所說の諸經のなかには、法華經これ大王なり、大師なり、餘經餘法は、みなこれ法華經の臣民なり、眷屬なり。法華經中の所說これまことなり、餘經中

【世尊言衆人】倶舍論第十四卷文。

【制多】梵音チャイトヤ（Caitya）塔、廟、寺宇と譯す。古墳、塚、墓標の如きものをいふ。

【牛戒鹿戒等】大智度論廿二卷に出づ。外道の歸依處苦行の制戒。

の所說、みな方便を帶せり、ほとけの本意にあらず。餘經中の說をきたして、法華經に比校したてまつらん、これ道なるべし。法華の功德力をかうぶらざれば、餘經あるべからず、餘經みな法華に歸投したてまつらんことをまつなり。この法華經のなかに、いまの說まします、しるべし三寶の功德、まさに最尊なり、最上なりといふことを。

世尊言、衆人怖所逼、多歸依諸山、園苑及叢林、孤樹制多等、此歸依非勝、此歸依非尊、不因此歸依、能解脫衆苦、諸有歸依佛、及歸依法僧、於四聖諦中、恆以慧觀察、知苦知苦集、知永超衆苦、知八支聖道、趣安穩涅槃、此歸依最勝、此歸依最尊、必因此歸依、能解脫衆苦。

世尊あきらかに一切衆生のためにしめします、衆生いたづらに所逼をおそれて、山神鬼神等に歸依し、あるいは外道の制多に歸依することなかれ、かれは、その歸依によりて衆苦を解脫することなし。おほよそ外道の邪敎にしたがふて、『牛戒、鹿戒、羅刹戒、鬼戒、瘂戒、聾戒、狗戒、雞戒、雉戒、以灰塗身、長髮爲相、以羊祠時、先呪後殺、四月事火、七日服風、百千億華、供養諸天、諸所欲願、因此成就、如是等法、能爲解脫因者、無有是處、智者所不讚、唐苦無善報。』かくのごとくなるがゆゑにいたづらに邪道に歸せざらんこと、あきらかに甄究すべし。たとひこれらの戒にことなる法なりとも、その道理、もし孤樹制多等の道理に符合せらんは、歸依することなかれ。人身うることかたし、佛法あふことまれなり、いたづらに鬼神の眷屬として一生をわたり、むなしく邪見の流類として多生をすごさん、かなしむべし。はやく佛法僧の三寶に歸依したてまつりて

【希有經日】希有因緣經上卷の文。

【五衰相】一衣服垢穢、二頭上花萎、三腋下汗出、四身體臭穢、五不レ樂ニ自處一。

【唯願哀愍救濟】大方等日藏經卷十三濟龍品文。

衆苦を解脫するのみにあらず、菩提を成就すべし。希有經曰、「敎ニ化四天下、及六欲天一、皆得ニ四果一、不レ如下一人受ニ三歸一功德上。」四天下とは、東西南北洲なり、そのなかに、北洲は三乘の化いたらざるところなり、かしこの一切衆生を敎化して、阿羅漢となさん、まことにはなはだ希有なりとすべし、たとひその益ありとも、一人をしへて三歸をうけしめん功德にはおよぶべからず、また六天は、得道の衆生まれなりとするところなり、かれをして四果をえせしむとも、一人の受三歸の功德、おほくふかきにおよぶべからず。

增一阿含經曰、「有ニ忉利天子一五衰相現、當レ生ニ猪中一、愁憂之聲、聞ニ於天帝一、天帝聞レ之、喚來告曰、『汝可レ歸ニ依三寶一。』卽時如レ敎、便免レ生レ猪。佛說レ偈言、『諸有歸ニ依佛一不レ墜ニ三惡道一、盡レ漏處ニ人天一、便當レ至ニ涅槃一。』受ニ三歸一已、生ニ長者家一、還得ニ出家一、成ニ於無學一。」おほよそ歸依三寶の功德、はかりはかるべきにあらず無量無邊なり。

世尊在世に、二十六億の餓龍、ともに佛所に詣し、みなことごとくあめのごとくなみだをふらしてまうしてまうさく、「唯願哀愍、救ニ濟於我一。大悲世尊、我等憶ニ念過去世時一、於ニ佛法中一雖レ得ニ出家一、備造ニ如レ是種種惡業一。以ニ惡業一故、經ニ無量身一在ニ三惡道一、亦以ニ餘報一故、生在ニ龍中一、受ニ極大苦一。」佛告ニ諸龍一、「汝等今當下盡受ニ三歸一、一心修上レ善。以ニ此緣一故、於ニ賢劫中一、値ニ最後佛一、名曰ニ樓至一。於ニ彼佛世一、罪得ニ除滅一。」時諸龍等、聞ニ是語一已、皆悉至心、盡ニ其形壽一、各受ニ三歸一。ほとけみづから諸龍を救濟しましますに、餘法なし、餘術なし、ただ三歸をさづけましますす、過去世に出世せしとき、かつて三歸をうけたりといへども、

「爾時衆中」前文ヲ續き。

業報によりて餓龍となれるとき、餘法のこれをすくふべきなし、このゆゑに三歸をさづけましますしるべし三歸の功德、それ最尊最上甚深不可思議なりといふこと、世尊すでに證明しまします、衆生まさに信受すべし。十方の諸佛の名號を稱念せしめましまさず、ただ三歸をさづけましますー佛意の甚深なるたれかこれを測量せん、いまの衆生、いたづらに各各の一佛の名號を稱念せんよりは、すみやかに三歸をうけたてまつるべし、愚闇にして大功德をむなしくすることなかれ。

爾時衆中、有盲龍女。口中臘爛、滿諸雜蟲、狀如屎尿、乃至穢惡、猶若婦人根中不淨。腥臭難看、種種噉食、膿血流出、一切身分、常有蚊虻諸惡毒蠅之所噉食、身體臭處、難可見聞。爾時世尊以大悲心見彼龍婦眼盲困苦如是、問言、「妹何緣故得此惡身。於過去世曾爲何業。」龍婦答言、「世尊、我今此身衆苦逼迫、無暫時停。設復欲言、而不能說。我念過去三十六億於百千年、惡龍中受如是苦、乃至日夜剎那不停。爲我往昔九十一劫、於毗婆尸佛法中作比丘尼。思念欲事、過於醉人。雖復出家、不能如法。於伽藍內敷施牀褥、數數犯於非梵行事、以快欲心生大樂受。或貪求他物、多受信施。以如是故、於九十一劫常不得受天人之身、恆三惡道受諸燒煮。」佛又問言、「若如是、此中劫盡、妹何處生。」龍婦答言、「我以過去業力因緣、生餘世界。彼劫盡時、惡業風吹、還來生此。」時彼龍婦、說此語已、作如是言、「大悲世尊、願救濟我、願救濟我。」爾時世尊以手掬水、告龍女言、此

【帝釋の野干を】天宋曾有因緣經の帝拜畜爲師の因緣後段に出づ。

【佛在迦毗羅】涅槃經三十四卷文。

【法句經云】法句譬喩經第二の文。

水名爲嗔陀留脂藥和。我今誠實發言語汝、我於往昔爲救鴿故、棄捨身命終不生疑念起慳惜心。此言若實、令汝惡患悉皆除瘥。』時佛世尊、以口含水、灑彼盲龍婦女之身。一切惡患臭處皆瘥、既得瘥已、作如是說言、『我今於佛、乞受三歸。』是時世尊、即爲龍女授三歸依。この龍女、むかしは毗婆尸佛の法のなかに、比丘尼となれり、禁戒を破すといふとも、佛法の通塞を見聞すべし。いまはまのあたり釋迦牟尼佛にあひたてまつりて、三歸を乞受す。ほとけより三歸をうけたてまつる、厚殖善根といふべし、見佛の功德かならず三歸によれり。われら盲龍にあらず、畜身にあらざれども、如來をみたてまつらず、ほとけにしたがひたてまつりて三歸をうけず、見佛はるかなり、はぢつべし。世尊みづから三歸をさづけましますしるべし三歸の功德、それ甚深無量なりといふこと。天帝釋の野干を拜して三歸をうけし、みな三歸の功德の甚深なるによりてなり。

佛在迦毗羅衞尼拘陀林。時釋摩男來至佛所、作如是言、『云何名爲優婆塞也。』佛即爲說、『若有善男子、善女人、諸根完具、受三歸依、是即名爲優婆塞也。』釋摩男言、『世尊、云何名爲一分優婆塞。』佛言、『摩男、若受三歸及受一戒、是名一分優婆塞。』佛弟子となること、かならず三歸による、いづれの戒をうくるもかならず三歸をうけて、そののち諸戒をうくるなり、しかあればすなはち三歸によりて得戒あるなり。

法句經云、『昔有天帝、自知命終生於驢中、愁憂不已曰、救苦厄者、唯佛世尊。』

【未曾有經曰】未曾有因緣經上卷の文。これ天帝釋拜斎爲師の因緣と爲す。

便至二佛所一稽首伏地、歸二依於佛一未レ起之間、其命便終、生二於驢胎一、母驢鞚斷、破二陶家坏器一器主打レ之、遂傷二其胎一還二入天帝身中一、佛言、『殞命之際、歸二依三寶一罪對已畢。』天帝聞レ之得二初果一。おほよそ世間の苦厄をすくふこと、佛世尊にはしかず、このゆゑに天帝いそぎ世尊のみもとに詣す、伏地のあひだに命終し、驢胎に生ず、歸佛の功德により、驢母の鞚やぶれて、陶家の坏器を踏破す、器主これをうつ、驢母の身いたみて、託胎の驢やぶれぬ、すなはち天帝の身にかへりいる、佛說をききて初果をうる、歸依三寶の功德力なり。しかあればすなはち世間の苦厄すみやかにはなれて、無上菩提を證得せしむること、かならず歸依三寶のちからなるべし、おほよそ三歸のちから、三惡をはなるるのみにあらず、天帝釋の身に還入す、天上の果報をうるのみにあらず、須陀洹の聖者となる、ことに三寶の功德海、無量無邊にましますなり。世尊在世は、人天この慶幸あり、いま如來滅後後五百歲のとき、人天いかがせん。しかあれども如來形像舍利等、なほ世間に現住しまします、これに歸依したてまつるに、またかみのごとくの功德をうるなり。

未曾有經曰、佛言、憶二念過去無數劫時一、毗摩大國陛陀山中、有二一野干一、而爲二師子一所レ逐欲レ食、奔走墮レ井、不レ能レ得レ出、經二於三日一開心分死、而說レ偈言、禍哉今日苦所レ逼、便當レ沒二命於丘井一、一切萬物皆無常、恨不三以レ身餧二師子一、南無歸依十方佛、表二知我心淨無一レ已。時天帝釋聞二佛名一肅然毛竪、念二古佛一自惟孤露無二導師一耽二著五欲一自沈沒、即與二諸天八萬一飛下詣レ井欲レ問、詣乃見下野干在二井底一兩手攀レ土不上レ得

出、天帝復思念言、聖人應レ念無二方術一、我今雖レ見二野干形一、斯必菩薩非二凡器一。仁者向說非二凡言一、願爲二諸天一說二法要一。於レ時野干仰答曰、汝爲二天帝一無二教訓一、法師在レ下自處レ上、都不レ修レ敬問二法要一、法水淸淨能濟レ人、云何欲レ得二自貢高一。天帝聞レ是大慙愧、給侍諸天愕然笑、天王降趾大無レ利、天帝卽時告二諸天一、愼勿三以二此懷一驚怖二、是我頑嚚德不レ稱、必當三因レ是聞二法要一。卽爲垂二下天寶衣一接二取野干一、出二於上一。諸天爲設二甘露食一、野干得レ食生活望、非意禍中致二斯福一、心懷踊躍慶無量、野干爲二天帝及諸天一廣說二法要一。これを天帝拜畜爲師の因緣と稱す。あきらかにしりぬ佛名法名僧名のききがたきこと、天帝の野干を師とせし、その證なるべし。いまわれら宿善のたすくるによりて、如來の遺法にあふたてまつり、晝夜に三寶の寶號をききたてまつること、時とともにして不退なり、これすなはち法要なるべし。天魔波旬、なほ三寶に歸依したてまつりて、患難をまぬかる、いかにいはんや餘者の三寶の、功德におきて、積功累德せらん、はかりしらざらめやは。おほよそ佛子行道、かならずまづ十方の三寶を敬禮したてまつり、十方の三寶を勸請したてまつりて、そのみまへに燒香散華して、まさに諸行を修するなり、これすなはち古先の勝躅なり、佛祖の古儀なり、もし歸依三寶の儀、いまだかつておこなはざるは、これ外道の法なりとしるべし、または天魔の法ならんとしるべし。佛佛祖祖の法は、かならずそのはじめに歸依三寶の儀軌あるなり。

建長七年、乙卯夏安居日、以二先師之御草本一書寫畢、未レ及二中書淸書等一、定御再治之時

【患難をまぬかる】五祖優婆毱多尊者の行化を妬み波旬人狗蛇の三屍を化して華鬘と爲して尊者に獻ず、尊者之を知り還つて波旬に一の華鬘を贈る。此華鬘人狗蛇の屍に變じ除くこと能はず、尊者三寶の名號を稱へて除くことを得たり

【建長七年】前卷に同じ。

有ニ添削ノ賊、於レ今不レ可レ叶ニ其儀、仍御草如レ此云
正法眼藏歸依三寶　畢

正法眼藏生死

生死のなかに佛あれば、生死なし。またいはく、生死のなかに佛なければ、生死にまどはず。こころは夾山定山といはれし、ふたりの禪師のことばなり。得道の人のことばなれば、さだめてむなしくまうけじ。生死をはなれんとおもはむ人、まさにこのむねをあきらむべし。もし人生死のほかにほとけをもとむれば、ながえをきたにして越にむかひ、おもてをみなみにして北斗をみんとするがごとし。いよいよ生死の因をあつめて、さらに解脱のみちをうしなへり。ただ生死すなはち涅槃とこころえて、生死としていとふべきもなく、涅槃としてねがふべきもなし。このとき、はじめて生死をはなるる分あり。生より死にうつるとこころうるは、これあやまりなり、生はひとときのくらゐにて、すでにさきありのちあり。かるがゆゑに佛法のなかには、生すなはち不生といふ。滅もひとときのくらゐにて、またさきありのちあり。これによりて滅すなはち不滅といふ。生といふときには生よりほかにものなく、滅といふときは滅のほかにものなし。かるがゆゑに生きたらばただこれ生、滅きたらばこれ滅にむかひて、つかふべしといふことなかれ、ねがふことなかれ。この生

【生死】凡夫の生死にあらず、佛法の生死なり、惑業の生死にあらず、涅槃の上の生死なり、不生不滅の生死を談ず、佛の御命なり。

【夾山定山】傳燈卷七大梅章云、夾山與ニ定山一同言話次、定山曰、生死中無レ佛即非ニ生死一、夾山曰、生死中有レ佛即不レ迷ニ生死一、二人是非不レ止、特上ニ山參ニ見師一、人事了、夾山便問未審二人見處那箇親、師曰一親一疎、夾山曰那箇親、師曰且去明朝來、夾山明日再上問、師曰親者不レ問、問者不レ親、夾山住後自曰、當時失ニ一隻眼一と。夾山善會は船子德誠

死は、すなはち佛の御いのちなり、これをいとひすてんとすれば、すなはち佛の御いのちをうしなはんとするなり。これにとどまりて、生死に著すれば、これも佛の御いのちをうしなふなり、佛のありさまをとどむるなり。いとふことなく、したふことなき、このとき、はじめて佛のこころにいる。ただし心をもてはかることなかれ、ことばをもていふことなかれ、ただわが身をも心をも、はなちわすれて、佛のいへになげいれて、佛のかたよりおこなはれて、これにしたがひもてゆくとき、ちからもいれず、こころをも、つひやさずして、生死をはなれ佛となる、たれの人かこころにとどこほるべき。佛となるにいとやすきみちあり、もろもろの惡をつくらず、生死に著するこころなく、一切衆生のために、あはれみふかくして、かみをうやまひ、しもをあはれみ、よろづをいとふこころなく、ねがふこころなく、心におもふことなくうれふることなき、これを佛となづく、またほかにたづぬることなかれ。

年號不記

正法眼藏生死　畢

正法眼藏深信因果

百丈大智禪師懷海和尚、凡參次、有二一老人一常隨レ衆聽レ法、衆人退老人亦退、忽一

【北欝】に嗣ぐ、定山神英は大 ...

に嗣ぐ、定山神英は大鳥靈祐に嗣ぐ。

【北轅向越】越は地最も南に在り、轅を北にして越に向ふ迎めば愈越に遠ざかる、見當ちがひなり。

【向南見北斗】方角違ひだと云ふ意。

【生死卽涅槃】摩訶止觀第一圓頓章云、違邪皆中正、無道可修、生死卽涅槃、無滅可證、無苦無集、故無世間、無道無滅、故無出世間。

【年號不記】九十五卷編集の時加ふるか。

【深信因果】佛法の要諦は深信因果の一語に盡く、因果不信因果の上の法門はすべて空中の樓

闇なり。撥無因果是れ外道、深信因果是れ佛法、謬ること莫れ。

【百丈大智】この因縁、大修行卷に詳出せり「この卷は深信因果を說くが故に不落因果を撥無因果人とし、不昧因果を深信因果人とす、大修行底人は大因果の人にして不落不昧を超越せり。

【天聖廣燈錄】三十卷、宋仁宗天聖十年李遵勗之を編す。

【第十九祖】三時業卷に詳出。

日不退。師遂問、面前立者、復是何人。老人曰、某甲是非人也、於過去迦葉佛時、曾住此山、因學人問、大修行底人還落因果也無。某甲對曰、不落因果。後五百生墮野狐身。今請和尚代一轉語、貴脱野狐身。遂問曰、大修行底人還落因果也無。師曰、不昧因果。老人於言下大悟、作禮曰、某甲已脱野狐身、住在山後、敢告和尚、乞依亡僧事例。師令維那白槌告衆曰、食後送亡僧。大衆言議、一衆皆安、涅槃堂又無病人、何故如是。食後只見師領衆、至山後巖下、以杖指出一死野狐、乃依法火葬。師至晩上堂、擧前因縁。黄檗便問、古人錯祇對一轉語、墮五百生野狐身、轉轉不錯、合作箇什麼。師曰、近前來與儞道。檗遂近前、與師一掌。師拍手笑曰、將謂胡鬚赤、更有赤鬚胡。

この一段の因縁、天聖廣燈錄にあり。しかあるに參學のともがら、因果の道理をあきらめず、いたづらに撥無因果のあやまりあり。あはれむべし澆風一扇して、祖道陵替せり。不落因果は、まさしくこれ撥無因果なり、これによりて惡趣に墮す。不昧因果は、あきらかにこれ深信因果なり、これによりてきくもの惡趣を脱す。あやしむべきにあらず、うたがふべきにあらず。近代參禪學道と稱するともがら、おほく因果を撥無せり、なにによりてか因果を撥無せりとしる、いはゆる不落と不昧と一等にしてことならずとおもへり、これによりて因果を撥無せりとしろなり。

第十九祖鳩摩羅多尊者曰、且善惡之報、有三時焉。凡人但見仁夭暴壽、逆吉義凶、便謂亡因果虛罪福、殊不知影響相隨、毫釐靡忒、縱經百千萬劫亦不磨滅。あきら

【金鎖玄關句】傳燈卅九同安察十玄談回機頌の末句。

かにしりぬ曩祖いまだ因果を撥無せずといふことを。いまの晩進、いまだ祖宗の慈誨をあきらめざるは、稽古のおろそかなるなり。稽古おろそかにして、みだりに人天の善知識と自稱するは、人天の大賊なり、學者の怨家なり。なんぢ前後のともがら、亡因果のおもむきをもて、後學晩進のためにかたることなかれ、これは邪說なり、さらに佛祖の法にあらず。なんだちが疎學によりて、この邪見に墮せり、いま神丹國の衲僧等ままいはく、われらが人身をうけて、佛法にあふ、一生二生のことなほしらず、前百丈の野狐となれる、よく五百生をしれり。はかりしりぬ業報の墜墮にあらじ。『金鎖玄關留不ㇾ住、行二於異類一且輪廻』なるべし、大善知識とあるともがらの見解かくのごとし。この見解は、佛祖の屋裡におきがたきなり。あるひは人、あるひは狐、あるひは餘趣のなかに、生得にしばらく宿通をえたるともがらあり、しかあれど明了の種子にあらず、惡業の所感なり。この道理、世尊ひろく人天のために演說しまします、これをしらざる疎學のいたりなり、あはれむべし、たとひ一千一生一萬生をしるとも、かならずしも佛法なるべからず。外道すでに八萬劫をしる、いまだ佛法とせず、わづかに五百生をしらん、いくばくの能にあらず。近代宋朝の參禪のともがら、もともくらきところは、ただ不落因果を邪見の說としらざるにあり。あはれむべし如來の正法の流通するところ、祖祖正傳するにあひながら、撥無因果の邪黨とならん、參禪のともがら、まさにいそぎて因果の道理をあきらむべし。いま百丈の不昧因果の道理は、因果にくらからずとなり、しかあれば修因感果のむねあきらかなり、

【龍樹云如外道人】摩訶止觀卷三及中論取意文。

佛佛祖祖の道なるべし。おほよそ佛法いまだあきらめざらんとき、みだりに人天のために說法することなかれ。

龍樹祖師云、「如二外道人一、破二世間因果一、則無二今世後世一。破二出世因果一、則無二三寶四諦四沙門果一」。あきらかにしるべし世間出世の因果を破するは、外道なるべし。今世なしといふは、かたちはこのところにあれども、性はひさしくさとりに歸せり、性すなはち心なり、心は身とひとしからざるゆゑに、かくのごとく解する、すなはち外道なり。あるひはいはく、人死するときかならず性海に歸す。佛法を修習せざれども、自然に覺海に歸すれば、さらに生死の輪轉なし、このゆゑに後世なしといふ、これ斷見の外道なり。かたちたとひ比丘に相似なりとも、かくのごとくの邪解あらんともがら、さらに佛弟子にあらず、まさしくこれ外道なり。おほよそ因果を撥無するより、今世後世なしとはあやまるなり。因果を撥無することは眞の善知識に參學せざるによりてなり。眞の善知識に久學するがごときは、撥無因果等の邪解あるべからず。龍樹祖師の慈誨、ふかく信仰したてまつり、頂戴したてまつるべし。

永嘉眞覺大師玄覺和尙は、曹谿の上足なり、もとはこれ天台の法華を習學せり。左谿玄朗大師と同室なり、涅槃經を披閱せるところに、金光その室にみつ。ながく無生のさとりをえたり。すすみて曹谿に詣し、證をもて六祖にまうす、六祖つひに印可す。のちに證道歌をつくるにいはく、「豁達空、撥二因果一、莽莽蕩蕩招二殃過一」。あきらかにしるべし。撥無因

【宏智頌古】宏智錄及從容錄の頌古に出づ。

【圜悟頌古】圜悟錄上卷に載す。

【大慧宗杲頌】大慧廣錄卷四に載す

果は、招殃過なるべし。往代は古德ともに因果をあきらめたり、近世には、晩進みな因果にまよへり。今世なりといふとも菩提心いさぎよくして、佛法のために佛法を習學せんともがらは、古德のごとく因果をあきらむべきなり、因なし果なしといふは、すなはちこれ外道なり。

宏智古佛かみの因果を頌古するにいはく、『一尺水一丈波、五百生前不ㇾ奈何。不落不昧商量也依然撞ニ入葛藤窠一。阿呵呵、會也麼。若是汝洒洒落落、不ㇾ妨ニ我哆哆和和一。神歌社舞自成ㇾ曲、拍ニ手其間一唱ニ哩囉一。』いま不落不昧商量也、依然撞入葛藤窠の句、すなはち不落と不昧とおなじかるべしといふなり。おほよそこの因果、その理いまだつくさず。ゆゑいかんとなれば、脱野狐身は、いま現前せりといへども、野狐身をまぬかれてのち、すなはち人間に生ずといはず、天上に生ずといはず、おほよその餘趣に生ずといはず。人のうたがふところなり。脱野狐身のすなはち善趣にうまるべくば、天上人間にうまるべし、惡趣にうまるべくは、四惡趣等にうまるべきなり。脱野狐身ののち、むなしく生處なかるべからず。もし衆生死して、性海に歸し、大我に歸すといふは、ともにこれ外道の見なり。

夾山圜悟禪師克勤和尚頌古いはく、『魚行水濁、鳥飛毛落、至鑑難ㇾ逃、大虚寥廓、一往迢迢、五百生只緣ニ因果大修行一。疾雷破ㇾ山風震ㇾ海、百煉精金色不ㇾ改。』この頌なほ撥無因果のおもむきあり、さらに常見のおもむきなり。

杭州徑山大慧禪師宗杲和尚頌にいはく、『不落不昧、石頭土塊、陌路相逢、銀山粉碎、拍手呵呵笑一場、明州有ニ箇憨布袋一。』これらをいまの宋朝のともがら、作家の祖師ともおもへり。

【建長七年】歸依三寶卷等に同じ。

しかあれども宗杲が見解、いまだ佛法の施權のむねにおよばず、ややもすれば自然見解のおもむきあり、おほよそこの因緣に、頌古拈古のともがら三十餘人あり、一人として、不落因果これ撥無因果なりとうたがふものなし。あはれむべし、このともがら因果をあきらめず、いたづらに紛紜のなかに一生をむなしくせり。佛法參學には、第一因果をあきらむるなり、因果を撥無するがごときは、おそらくは猛利の邪見をおこして、斷善根とならんことを。おほよそ因果の道理、歷然としてわたくしなし、造惡のものは墮し、修善のものはのぼる、毫釐もたがはざるなり。もし因果亡じ、むなしからんがごときは、諸佛の出世あるべからず、祖師の西來あるべからず、おほよそ衆生の見佛聞法あるべからざるなり。因果の道理は、孔子老子等のあきらむるところにあらず、ただ佛佛祖祖あきらめつたへましますところなり。澆季の學者薄福にして、正法にあはず、正法をきかず、このゆゑに因果をあきらめざるなり。撥無因果すれば、このとがによりて、莽莽蕩蕩として殃過をうくるなり。撥無因果のほかに、餘惡いまだつくらずといふとも、まづこの見毒はなはだしきなり。しかあればすなはち參學のともがら、菩提心をさきとして、佛祖の洪恩を報ずべくば、すみやかに諸因諸果をあきらむべし。

建長七年乙卯夏安居日、以二御艸案一書二寫之一、未レ及二中書淸書一、定可レ有二再治事一也

懷奘

正法眼藏深信因果　畢

【道心】道心は菩提心、發無上心發菩提心卷を複演再說するに似たり。在對機說法にして在俗初入の信人に示す、文易く語平らかなり。

正法眼藏道心

佛道をもとむるには、まづ道心をさきとすべし。道心のありやう、しる人まれなり、あきらかにしれらん人にとふべし。よの人は道心ありといへども、まことには道心なき人あり、まことに道心ありて、人にしられざる人あり。かくのごとくあり、なし、しりがたし、おほかたおろかにあしき人のことばを信ぜず、きかざるなり。またわがこころをさきとせざれ、ほとけのとかせたまひたるのりをさきとすべし。よくよく道心あるべきやうを、よる、ひる、つねにこころにかけ、このよにいかでかまことの菩提あらましとねがひいのるべし。よのすゑには、まことある道心者おほかたなし。しかあれどもしばらく心を無常にかけて、よのはかなく、人のいのちのあやうきことをわすれざるべし、われはよのはかなきことをおもふとしらざるべし。あひかまえて法をおもくして、わが身わがいのちをかろくすべし、法のためには身もいのちもをしまざるべし。つぎにはふかく佛法僧三寶をうやまひたてまつるべし。生をかへ身をかへても、三寶を供養し、うやまひたてまつらんことをねがふべし。ねても、さめても、三寶の功德をおもひたてまつるべし。ねても、さめても、三寶をとなへたてまつるべし。たとひこの生をすてて、いまだのちの生にうまれざらんそのあひだ、中有といふことあり。そのいのち七日なるそのあひだも、つねにこゑもや

【三寶をとなへ】三寶恭敬と三寶憶念と三寶の稱念、即ち身口意三業の上の恭敬尊重を示さる。

【中有】大乘顯識經、俱舍論等に委說す。

【ことおもひ】異念なり、異計邪念。

まず三寶をとなへたてまつらんとおもふべし。七日をへぬれば、中有にて死して、また中有の身をうけて、七日あり。いかにひさしといへども、七日をば、すぎず。このとき、なにごとをみ、きくも、さはりなきこと天眼のごとし。かからんとき、心をはげまして三寶をとなへたてまつり、南無歸依佛、南無歸依法、南無歸依僧と、となへたてまつらんことわすれず、ひまなくとなへたてまつるべし。すでに中有をすぎて、父母のほとりにちかづかんときも、あひかまひて正智ありて託胎せん、處胎藏にありても、三寶をとなへたてまつるべし。うまれおちんときも、となへたてまつらんこと、おこたらざらん、六根にへて三寶を供養したてまつり、となへたてまつり、歸依したてまつらんと、ふかくねがふべし。またこの生のをはるときは、ふたつのまなこたちまちにくらくなるべし。そのときを、すでに生のをはりとしりて、はげみて南無歸依佛ととなへたてまつるべし。このとき十方の諸佛、あはれみをたれさせたまふ。緣ありて惡趣におもむくべきつみも、轉じて天上にうまれ、佛前にうまれて、佛をおがみたてまつり、佛のとかせたまふのりをきくなり。眼のまへに、やみのきたらんよりのちは、たゆまずはげみて三歸依をとなへたてまつること、中有までも後生までも、おこたるべからず。かくのごとくして、生生世世をつくして、となへたてまつるべし。佛果菩提にいたらんまでも、おこたらざるべし。これ諸佛菩薩のおこなはせたまふみちなり。これをふかく法をさとるともいふ、佛道の身にそなはるともいふなり。さらにことおもひをまじへざらんとねがふべし。また一生のうちに佛をつくりたてま

【三種供養】大智度論第三に今釋迦牟尼佛瓦師大光明たりし時發心して古釋迦牟尼佛に艸座石蜜漿然燈の三種供養をなし當來作佛の記を受く。

【摺寫】摺は搨の誤り、しきうつしするなり。

【第三生に】蓮華色比丘尼の因緣、袈裟功德、出家功德卷等に詳出す。

【年號不記】生死卷に同じ。

【受戒】達磨大師一心戒文に云く受は傳、傳は是れ覺即ち佛心を覺るを眞の受戒と名くと故に經に衆生受佛戒即入諸佛位と證す。

【禪苑淸規云】第一卷、出家卷首に出す。

つらんといとなむべし。つくりたてまつりては三種の供養したてまつるべし。三種とは、艸座、石蜜漿、然燈なり。これを供養したてまつるべし。またこの生のうちに、法華經をつくりたてまつるべし。かきもし、摺寫もしたてまつりて、たもちたてまつるべし。つねにはいただき禮拜したてまつり、華、香、みあかし、飮食、衣服もまゐらすべし。つねにいただきをきよくしていただきまゐらすべし。またつねに袈裟をかけて坐禪すべし。袈裟は第三生に得道する先蹤あり。すでに三世の諸佛の衣なり。功德はかるべからず。坐禪は三界の法にあらず、佛祖の法なり。

年月不記

正法眼藏道心　畢

正法眼藏受戒

禪苑淸規云、三世諸佛、皆曰二出家成道一。歷代祖師、傳二佛心印一、盡是沙門。蓋以嚴二淨毘尼一、方能洪二範三界一。然則參禪問道、戒律爲レ先。若不レ離レ過防レ非、何以成佛作祖。

受戒之法、應レ備二三衣鉢具、幷新淨衣物一。如無二新衣一、浣洗令レ淨、入壇受戒、不レ得レ借二他衣鉢一。一心專注、愼勿二異緣一。像二佛形儀一、具二佛戒律一、得二佛受用一。此非二小事一、豈可二輕心一。若借二他衣鉢一、雖二登壇受戒一、幷不レ得レ戒。若不二曾受一、一生爲二無戒之人一、濫厠二空門一、虛消二信

【嵩嶽高祖傳來】叡山戒壇院知事光定法師撰の一心戒文に云く菩提達磨持二一乘戒一遊二來漢魏一といへり。

【和尚阿闍梨】和尚は戒師、阿闍梨は教授師なり。

施二初心入道一、法律未レ諳、師匠不レ望レ信言、陷二人於此一今茲苦口、敢望レ銘レ心、既受二聲聞戒一應レ受二菩薩戒一、此入法之漸也。」西天東地、佛祖相傳しきたれるところ、かならず入法の最初に受戒あり。戒をうけざれば、いまだ諸佛の弟子にあらず、祖師の兒孫にあらざるなり。離過防非を參禪問道とせるが故なり。戒律爲先の言、すでにまさしく正法眼藏なり。成佛作祖かならず正法眼藏を傳持するによりて、正法眼藏を正傳する祖師、かならず佛戒を受持するなり、佛戒を受持せざる佛祖あるべからざるなり。あるひは如來にしたがひてこれを受持す、みなこれ命脈稟受せる處なり。いま佛佛祖祖正傳するところの佛戒、只嵩嶽高祖まさしく傳來し、震旦五傳して曹谿高祖にいたれり。靑原南嶽等の正傳、いまにつたはれりといへども、杜撰の長老等かつてしらざるもあり、もともあはれむべし。いはゆる應受菩薩戒、此入法之漸也、これすなはち參學のしるべきところなり。その應受菩薩戒の儀、ひさしく佛祖の堂奧に參學するものかならず正傳す、疎怠のともがらのうるところにあらず。その儀はかならず祖師を燒香禮拜し、應受菩薩戒を求請するなり。すでに聽許せられて、沐浴淸淨にして、新淨の衣服を著す。あるひは衣服を浣洗して、華を散じ香をたき、禮拜恭敬して、その身に著す。あまねく形像を禮拜し、三寶を禮拜し、尊宿を禮拜し、諸障を除去し、身心淸淨なることをうべし。その儀ひさしく佛祖の堂奧に正傳せり。そののち道場にして和尚、阿闍梨、まさに受者ををしへて禮拜し長跪せしめて合掌し、この語をなさしむ。

歸依佛、歸依法、歸依僧、歸依佛陀兩足尊、歸依達磨離欲尊、歸依僧伽衆中尊、歸依佛竟、歸依法竟、歸依僧竟。（三說）

如來至眞無上正等覺、是我大師、我今歸依、今已後、更不レ歸ニ依邪魔外道ニ慈愍故、慈愍故。（三遍）

善男子、既捨レ邪歸レ正、戒已周圓、應レ受ニ三聚清淨戒ニ。

第一、攝律儀戒、汝從ニ今身ニ至ニ佛身ニ此戒能持否。答云、能持。（三問三答）

第二、攝善法戒、汝從ニ今身ニ至ニ佛身ニ此戒能持否。答曰、能持。（三問三答）

第三、饒益衆生戒、汝從ニ今身ニ至ニ佛身ニ此戒能持否。答曰、能持。（三問三答）

上來三聚清淨戒、一一不レ得レ犯、汝從ニ今身ニ至ニ佛身ニ能持否。答曰、能持。（三問三答）

是事如レ是持。（受者、禮三拜長跪合掌）

善男子、汝既受ニ三聚清淨戒ニ應レ受ニ十戒ニ、是乃諸佛菩薩清淨大戒也。

第一、不殺生、汝從ニ今身ニ至ニ佛身ニ此戒能持否。答曰、能持。（三問三答）

第二、不偸盜、汝從ニ今身ニ至ニ佛身ニ此戒能持否。答曰、能持。（三問三答）

第三、不婬欲、汝從ニ今身ニ至ニ佛身ニ此戒能持否。答曰、能持。（三問三答）

第四、不妄語、汝從ニ今身ニ至ニ佛身ニ此戒能持否。答曰、能持。（三問三答）

第五、不酤酒、汝從ニ今身ニ至ニ佛身ニ此戒能持否。答曰、能持。（三問三答）

第六、不說在家出家菩薩罪過、汝從ニ今身ニ至ニ佛身ニ此戒能持否。答曰、能持。（三問三

【處世界梵】後唄と稱す、處世界如虛空、如蓮華不著水、心清淨超於彼、稽首禮無上尊と、超日三昧經に出づ。

【丹霞天然】傳燈十四卷丹霞章。石頭下に在りて槽廠に著くこと三年、一日丹霞、石頭の前に胡跪す、石頭見て笑て便ち與に剃髮す、又爲に戒法を說く、丹霞乃ち耳を掩うて去ると。

【藥山高沙彌】傳燈卷十四、藥山問什麼處來、高曰南嶽來、山曰何處去、高曰江陵受戒去、山曰受戒圖什麼、高曰圖免生死、山曰有一人不受戒亦免生死汝還知否、高曰恁麼卽佛戒何用、山曰猶掛唇齒在、云云。

【年號不記】生死卷等に同じ。

答)

第七、不自讚毀他、汝從今身至佛身此戒能持否。答曰、能持。(三問三答)

第八、不慳法財、汝從今身至佛身此戒能持否。答曰、能持。(三問三答)

第九、不瞋恚、汝從今身至佛身此戒能持否。答曰、能持。(三問三答)

第十、不謗三寶、汝從今身至佛身此戒能持否。答曰、能持。(三問三答)

上來十戒、一一不得犯、汝從今身至佛身能持否。答曰、能持。(三問三答)

是事如是持。(受者禮三拜)上來三歸、三聚淨戒、十重禁戒、是諸佛之所受持、汝從今身至佛身此十六支戒、如是持。(受者禮三拜、次作處世界梵訖曰、)歸依佛、歸依法、歸依僧。(次受者出道場)

この受戒の儀、かならず佛祖正傳せり、丹霞天然、藥山の高沙彌等、おなじく受持しきたれり。比丘戒をうけざる祖師あれども、此佛祖正傳菩薩戒をうけざる祖師いまだあらず、かならず受持するなり。

年號不記

正法眼藏受戒　畢

【四禪比丘】色界四禪の悟を得て第四果を證したりと謂へり、之を未得謂得未證謂證の增上慢の徒と爲す、無聞の致す所反省するに至らず、遂に涅槃無しと謗佛するに至る可懺懇者なり。深く誠めざるべからず。

【龍樹祖師言】大論第十七卷文。

【阿蘭若】遠離處又は閑靜處といふ阿蘭若に獨居して佛所に來詣せず、佛說法を聞かず、故に阿蘭若比丘又無聞比丘といふ。

正法眼藏四禪比丘

第十四祖龍樹祖師言、佛弟子中、有二一比丘一、得二第四禪一、生二增上慢一、謂レ得二四果一。初得二初禪一謂レ得二於須陀洹果一、得二第二禪一時、謂二是斯陀含果一、得二第三禪一時、謂二是阿那含果一、得二第四禪一時、謂二是阿羅漢一、恃レ是自高、不二復求進一。欲二命盡一時、見下有二四禪中陰相一來上、便生二邪見一。謂下無二涅槃一、佛爲上欺レ我。惡邪見故、失二四禪中陰一、便見二阿鼻泥犂中陰相一、命終卽生二阿鼻泥犂中一。諸比丘問レ佛、阿蘭若比丘、命終生二何處一。佛言、是人生二阿鼻泥犂中一。諸比丘大驚、坐禪持戒、便至二爾耶一。佛如二前答一言、彼皆因二增上慢一。得二四禪一時謂レ得二四果一。臨命終時、見二四禪中陰相一、便生二邪見一、謂無二涅槃一。我是羅漢、今還復生、佛爲二虛誑一。是時卽見二阿鼻泥犂中陰相一、命終卽生二阿鼻泥犂中一。是時佛說レ偈言、多聞持戒禪、未レ得二漏盡法一、雖レ有二此功德一、此事難レ可レ信、墮レ獄由二謗佛一。非レ關二第四禪一。

この比丘を稱して、四禪比丘といふ、または無聞比丘と稱す。四禪をえたるを四果と僻計せることをいましめ、また謗佛の邪見をいましむ、人天大會みなしれり。如來在世より、今日にいたるまで、西天東地、ともに是にあらざるを是と執せるをいましむとして、四禪をえて四果とおもふがごとしとあざける。この比丘の不是、しばらく略擧するに三種あり、第一には、みづから四禪と四果とを分別するにおよばざる無聞の身なが

【優婆毱多弟子中】付法藏因緣經第四の文。

ら、いたづらに師をはなれて、むなしく阿蘭若に獨處す。さいはひにこれ如來在世なり。つねに佛所に詣して、常恒に見佛聞法せばかくのごとくあやまりあるべからず。しかあるに阿蘭若に獨處して、佛所に詣せず。つひに見佛聞法せざるによりてかくのごとし。たとひ佛所に詣せずといふとも、諸大阿羅漢所にいたりて教訓をうくべし。いたづらに獨處する增上慢のあやまりなり。第二には、初禪をえて初果とおもひ、二禪をえて第二果とおもひ三禪をえて第三果とおもひ、四禪をえて第四果とおもふ、第二のあやまりなり。初二三禪の相と、初二三果の相と、比類におよばず、たどることあらんや。これ無聞のとがによれり。師につかへず、くらきによれるとがなり。

優婆毱多弟子中、有二一比丘一、信心出家、獲レ得二四禪一、謂レ爲二四果一。毱多方便令レ往二他處一、於レ路化二作群賊一、復化二作五百賈客一、賊劫二賈客一、殺害狼藉。比丘見生レ悸、即便自念、我非二羅漢一、應二是第三果一。賈客亡後、有二長者女一、語二比丘一言、唯願大德、與レ我共去。比丘答言、佛不レ許下我與二女人一行上。女言、我望二大德一而隨二其後一。比丘憐愍、相望而行。尊者次復變二作大河一。女人言、大德、可二共レ我度一。比丘在二下流一、女在二上流一。女便墮レ水。白言、大德濟レ我。爾時比丘手接而出、生二細滑想一、起二愛欲心一。即自知レ非二阿那含一。於二此女人一、極生二愛著一。將向二屏處一、欲二共交通一、方見二是師一、生二大慚愧一、低頭而立。尊者語言、汝曾自謂二是阿羅漢一。云何欲レ爲二如レ此惡事一。將至二僧中一、教二其懺悔一、爲說二法要一、得二阿羅漢一。この比丘はじめ生見のあやまりあれども、殺害の狼藉をみるにおそれを生ず、

【古徳曰故知】前文の續き。

【曾聞有人】前文の續き。

ときにわれ羅漢にあらずとおもふ、なほ第三果なるべしとおもふあやまりあり。のちに細滑の想によりて愛欲の心を生ずるに、阿那含にあらずとしる、さらに謗佛のおもひを生ぜず、謗法のおもひなし、聖教にそむくおもひにあらず。四禪比丘にはひとしからず。この比丘は、聖教を習學せるちからあるによりて、みづから阿羅漢にあらず阿那含にあらずとしるなり。いまの無聞のともがらは、阿羅漢はいかなりともしらず、佛はいかなりともしらざるがゆゑに、みづから阿羅漢にあらず、佛にあらずともしらず、みだりにわれは佛なりとのみおもひいふは、おほいなるあやまりなり、ふかきとがなるべし。學者まづすべからく佛はいかなるべしとならふべきなり。

古徳曰、故知習聖教者、薄知次位、縱生逾濫、亦易開解。まことなるかな古徳の語。たとひ生見のあやまりありとも、すこしきも佛法を習學せらんともがらは、みづからにも欺誑せられじ、他人にも欺誑せられじ。

曾聞、有人自謂成佛、待天不曉、謂爲魔障、曉已不見梵王請說法、自知非佛、自謂是阿羅漢、又被他人罵之、心生異念、自知非是阿羅漢、仍謂是第三果也、又見女人起欲想、知非聖人。此亦良由知教相故、乃如是也。それ佛法をしれるは、かくのごとくみづからが非を覺知し、はやくあやまりをなげすつ、しらざるともがらは、一生むなしく愚蒙のなかにあり。生より生をうくるもまたかくのごとくなるべし。この優婆毱多の弟子は、四禪をえて四果とおもふといへども、さらに我非羅漢の智あり。無聞比丘

【舍利弗の智慧】大智度論十一に云く舍利弗於一切弟子中智慧最第一、一切衆生智唯除佛世尊欲比舍利弗智慧及多聞於十六分中猶尚不及一と

も、臨命終のとき、四禪の中陰みゆることあらんに、我非羅漢としらば、謗佛の罪あるべからず、いはんや四禪をえてのちはさい、なんぞ四果にあらずとかへりみしらざらん。すでに四果にあらずとしらば、なんぞあらためざらん、いたづらに僻計にとどこほり、むなしく邪見にしづめり。第三には、命終のときおほきなるあやまりあり、そのとがふかくして、つひに阿鼻地獄におちぬるなり。たとひなんぢ一生のあひだ、四禪を四果とおもひきたれりとも、臨命終のとき、四禪の中陰みゆることあらば、一生のあやまりを懺悔して、四果にはあらざりきとおもふべし。いかでか佛われを欺誑して、涅槃なきに涅槃ありと施設せさせたまふとおもふべき、これ無聞のとがなり、このつみすでに謗佛なり、これによりて阿鼻の中陰現じて、命終して、阿鼻地獄におちぬ。たとひ四果の聖者なりとも、いかでか如來におよばん。舍利弗はひさしくこれ四果の聖者なり、三千大千世界所有の智慧をあつめて、如來をのぞきたてまつりて、ほかを一分とし、舍利弗の智慧を十六分にせる一分と三千大千世界所有の智慧とを格量するに、舍利弗の十六分の一におよばざるなり、しかあれども如來未曾說の法をときましますをききて、前後の佛說ことにしてわれを欺誑しましますとおもはず、波旬無此事とほめたてまつる。如來は輻增をわたし、舍利弗は輻增をわたさず、四果と佛果と、はるかにことなることかくのごとし。たとひ舍利弗およびもろもろの弟子のごとくならん、十方界にみちてらん、ともに佛智の測量せんことうべからず、孔老にかくのごとくの功德、いまだなし、佛法を習學せんもの、たれか孔老を測度せざら

【六師等】釋尊當時婆羅門敎團中最も勢力ありて隆盛なりし六派の敎學。
【古德曰大師】台祖止觀弘決十五。大師は釋尊なり。

【大宋嘉泰中】嘉泰普燈錄三十卷、雷庵正受撰す。
【誠意、虛心、見性】大學古之欲レ明二明德於天下一者先誠二其意一、老子聖人虛二其心一實二其腹一、六祖壇經見性之人言語須レ知又事苑有二見性成佛偈一、依りて儒道佛の三敎は異名同體と爲す。

ん、孔老を習學するもの、佛法を測量すること、いまだなし。いま大宋國のともがらおほく孔老と佛道と一致の道理をたつ、僻見もともふかきものなり、しもにまさに廣說すべし。四禪比丘みづからが僻見をまことゝして、如來の欺誑しましますとおもふ、ながく佛道を違背したてまつるなり、愚癡のはなはだしき、六師等にひとしかるべし。

古德曰、『大師在世、尚有二僻計生見之人一、況滅度後、無レ師不レ得レ禪者。』いま大師とは、佛世尊なり。まことに世尊在世出家受具せる、なほ無聞によりては、僻計生見のあやまりのがれがたし、いはんや如來滅後五百歲、邊地下賤の時處、あやまりなからんや。四禪を發せるもの、なほかくのごとし。いはんや四禪を發するにおよばず、いたづらに貪名愛利にしづめらんもの、官途世路をむさぼるともがら、不足言なるべし。いま大宋國に寡聞愚鈍のともがらおほし、かれがいはく、「佛法と孔子老子の法と一致にして異轍にあらず。」

大宋嘉泰中、有二僧正受一、撰二進普燈錄三十卷一曰、『臣聞二孤山智圓之言一曰、吾道如レ鼎也、三敎如レ足、足一虧而鼎覆焉、臣嘗慕二其人一稽二其說一、乃知儒之爲レ敎、其要在二誠意一、道之爲レ敎其要在二虛心一、釋之爲レ敎、其要在二見性一、誠意也、虛心也、見性也、異レ名同レ體、究二厥攸レ歸、無下適而不中與二此道一會上云云。』かくのごとく僻計生見のともがらのみおほし、智圓正受のみにはあらず。このともがらは四禪をえて四果とおもはんよりも、そのあやまりふかし、謗佛謗法謗僧なるべし。すでに撥無解脫なり、撥無三世なり、撥無因果なり、莽莽蕩招二殃禍一うたがひなし、三寶四諦四沙門果なしとおもひしともがらにひとし。佛

【壇經僞書】傳燈慧忠國師章に、把他壇經、卽換添糅鄙譚、削除聖意、惑亂後徒、豈成言敎。苦哉吾宗喪矣と。慧忠國師は六祖の嗣。
【古德曰老子】摩訶止觀卷三の三輔行の文。
【淸淨法行經曰】止觀會本卅七文。
【古德曰準】止觀第六弘決の文。

法いまだ其要見性にあらず、七佛、西天二十八祖、いづれのところにか佛法ただ見性のみなりとある。六祖壇經に見性の言あり、かの書これ僞書なり、付法藏の書にあらず、曹谿の言句にあらず、佛祖の兒孫、またく依用せざる書なり。正受、智聞いまだ佛法の一隅をしらざるによりて、一鼎三足の邪計をなす。

古德曰『老子莊子、尚自未識小乘能著所著、能破所破、況大乘中、若著若破。是故不與佛法少同。然者世間愚者、迷於名相、濫禪者惑於正理、欲將道德逍遙之名、齊於佛法解脫之說、豈可得乎。』むかしより名相にまよふもの、正理をしらざるともがら、佛法をもて莊子老子にひとしむるなり、いささかも佛法の稽古あるともがらは、むかしより莊子老子をおもくする、一人なし。

淸淨法行經曰『月光菩薩、彼稱顏回、光淨菩薩、彼稱仲尼、迦葉菩薩、彼稱老子云云。』むかしよりこの經の說を擧して、孔子老子等も菩薩なれば、その說ひそかに佛說におなじかるべし、いとどまた佛のつかひならん、その說おのづから佛說ならんといふ、この說みな非なり。古德曰『準諸目錄、皆推此經以爲疑僞云云。』いまこの說によらば、いよいよ佛法と孔老とことなるべし、すでにこれ菩薩なり、佛果にひとしかるべからず。また和光應迹の功德は、ひとり三世諸佛菩薩の法なり、俗塵凡夫の所能にあらず。實業の凡夫、いかでか應迹に自在あらん、孔子いまだ應迹の說なし、いはんや孔老は先因をしらず、當果をとかず、わづかに一世の忠孝をもて、きみにつかへ家をさむる術をむね

【古德曰如孔丘】止觀會本弘決第四十卷の文。

【十八大經】羅什云三種六師數二十有八一、外道宗なり。

【四韋陀】梨俱吠陀、僕馬吠陀、耶柔吠陀、阿他婆吠陀。

【龍樹曰大阿】大智度論文。

とするなり、さらに後世の說なし、すでにこれ斷見の流類なるべし。莊老をきらふに小乘なほしらず、いはんや大乘をやといふは、上古の明師なり。三敎一致といふは、智圓正受なり、後代澆季愚闇の凡夫なり。なんぢなんの勝出あればか、上古の先德の所說をさみして、みだりに佛法と孔老とひとしかるべしといふ。なんぢが所見すべて佛法の通塞を論ずるにたへず、負笈して明師に參學すべし。智圓正受なんぢら大小兩乘すべていまだしらざるなり、四禪をえて四果とおもひしよりもくらし、かなしむべし澆風のあふぐところ、かくのごとくの魔子おほかることを。

古德曰、「如二孔丘姬旦之語、三皇五帝之書一、孝以治レ家、忠以治レ國、輔以利レ民、只是一世之內、不レ渉二過未一、未レ齊三佛法之益二於三世一、豈不レ謬乎。」まことなるかな古德の語。よく佛法の至理に達せり、世俗の道理にあきらかなり。三皇、五帝の語、いまだ轉輪聖王のをしへにおよぶべからず、梵王、帝釋の說にならべ論ずべからず、統領するところ所得の果報、はるかに劣なるべし。輪王、梵王、帝釋、なほ出家受具の比丘におよばず、いかにいはんや如來にひとしからんや。孔丘姬旦の書、また天竺の十八大經におよぶべからず、四韋陀の典籍にならべがたし。西天婆羅門敎、いまだ佛敎にひとしからざるなり、なほ小乘聲聞敎にひとしからず。あはれむべし震旦小國邊方にして三敎一致の邪說あることを。

第十四祖龍樹菩薩曰、「大阿羅漢辟支佛、知二八萬大劫一、諸大菩薩、及レ知二無量劫一。」孔老等いまだ一世のうちの前後をしらず、一生二生の宿通あらんや。いかにいはんや一劫をし

らんや、いかにいはんや百劫千劫をしらんや、いかにいはんや八萬大劫をしらんや、いかにいはんや無量劫をしらんや。この無量劫をあきらかにてらししれること、たなごころをみるよりもあきらかなる諸佛菩薩を、孔老等に比類せん、愚闇といふにもたらざるなり。

みみをおほふて三教一致の言をきくことなかれ。邪說中最邪說なり。

莊子曰、「貴賤苦樂、是非得失、皆是自然。」この見すでに西國の自然見の外道の流類なり。「貴賤苦樂是非得失、」みなこれ善惡業の感ずるところなり。滿業引業をしらず、過去來世をあきらめざるがゆゑに、現在にくらし、いかでか佛法にひとしからん。あるがいはく、「諸佛如來、ひろく法界を證するゆゑに、微塵法界、みな諸佛の所證なり。」しかあれば依正二報ともに如來の所說となりぬるがゆゑに、山河大地、日月星辰、四倒三毒、みな如來の所說なり。山河をみるは、如來をみるなり、三毒四倒、佛法にあらずといふことなし。微塵をみるは法界をみるにひとし。造次顚沛、みな三菩提なり、これを大解脫といふ、これを單傳直指の祖道となづく。かくのごとくいふともがら、稻麻竹葦のごとく、朝野に偏滿せり。しかあれどもこのともがら、たれ人の兒孫といふことあきらかならず、すべて佛祖の道をしらざるなり。たとひ諸佛の所說となるとも、山河大地たちまちに凡夫の所見なかるべきにならず、諸佛の所說となる道理をならはずきかざるなり。なんぢ微塵をみるは法界をみるにひとしといふ、たみの王にひとしといはんがごとし。またなんぞ法界をみて微塵にひとしといはざる。このともがらの所見を佛祖の大道とせば諸佛出世すべからず、祖師

【眞諦三藏】眞諦は優禪那國の人梁大同十二年三十二歲聘に應じて來り武帝の好遇を受く、金光明經、攝大乘論、唯識論等六十四部、二百七十八卷譯出、大建元年一月十一日寂、壽七十一。

【古德曰今時】摩訶止觀第十の文。

出現すべからず、衆生得道すべからざるなり。たとひ生卽無生と體達すとも、この道理にあらず。

眞諦三藏云、『震旦有二二福一、一無二羅刹一、二無二外道一。』このことば、まことに西國の外道婆羅門の傳來せるなり。得通の外道なしといふとも、外道の見をおこすともがらなかるべきにあらず。羅刹はいまだみえず、外道の流類はなきにあらず。小國邊地のゆゑに、中印度のごとくにあらざることは、佛法もわづかに修習すといへども、印度のごとくに證をとれるなし。

古德曰、「今時多有二還俗者一、畏二憚王役一、入二外道中一。偷二佛法義一、竊解二莊老一、遂成二混雜一。迷二惑初心孰正孰邪一。是爲下發二得韋陀法一之見上。」しるべし佛法と莊老と、いづれか正いづれか邪をしらず、混雜するは初心のともがらを迷惑する、いまの智圓正受等これなり。ただ愚昧のはなはだしきのみにあらず、稽古なきのいたり、顯然なり炳焉なり。近日宋朝の僧徒、ひとりとしても孔老は佛法におよばずとしれるともがらなし。なほ佛祖の兒孫になれるともがら、稻麻竹葦のごとく、九州の山野にみてりといふとも、孔老のほかに佛法すぐれいでたりと曉了せる、一人半人あらず。ひとり先師天童古佛のみ、佛法と孔老とひとつにあらずと曉了せり。晝夜に施設せり。經論師また講者の名あれども、佛法はるかに孔老の邊を勝出せりと曉了せるなし。近代一百年來の講者、おほく參禪學道のともがらの儀をまなび、その解會をぬすまんとす、もともあやまれりといふべし。孔子の書に生知

【三界九地】欲色無色の三界を九地に分つ、欲界一地色界四禪四地無色界四空處四地即ち九地。

者あり、佛教には生知者なし。佛法には舍利の說あり、孔老舍利の有無をしらず。一にして混雜せんとおもふとも廣說の通塞つひに不得ならん。論語云、生而知之上、學而知者次、困學之、又其次也、困而不學、民斯爲下矣。もし生知あらば、無因のとがあり、佛法には無因の說なし。四禪比丘は、臨命終のとき、たちまちに謗佛のつみに墮す。佛法をもて孔老の教にひとしとおもはん、一生のうちより謗佛のつみふかかるべし。學者はやく佛法と孔老と一致なりと邪計する解をなげすつべし、この見たくはへてすてずば、つひに惡趣に墮すべし。學者あきらかにしるべし孔老は三世の法をしらず、因果の道理をしらず、一洲の安立をしらず、いはんや四洲の安立をしらんや。六天のことはなほしらず、いはんや三界九地の法をしらんや。小千界をしらず、中千界をしるべからず、三千大千世界をみることあらんや、しることあらんや。震旦一國になほ小臣にして、帝位にのぼらず三千大千世界に王たる如來に比すべからず。如來は、梵天、帝釋、轉輪聖王等、晝夜に恭敬侍衞し、恆時に說法を請したてまつる。孔老にかくのごとくの德なし、ただこれ流轉の凡夫なり、いまだ出離解脫の道をしらず、いかでか如來のごとく諸法實相を究盡することあらん。もしいまだ究盡せずば、なにによりてか世尊にひとしとせん。孔老內德なし、外用なし、世尊におよぶべからず、三教一致の邪說をはかんや。孔老、世界の有邊際無邊際を通達すべからず。廣をみず、しらず、大をしらずみざるのみにあらず、極微色をみず、刹那量をしるべからず。世尊あきらかに極微色をみ刹那量をしらせたまふ、いかにしてか孔

【列傳云、古德云】摩訶止觀第五の四引用の文。

老にひとしめたてまつらん。孔、老、莊子、惠子等は、ただこれ凡夫なり、なほ小乘の須陀洹におよぶべからず、いかにいはんや第二第三第四の阿羅漢におよばんや。しかあるを學者くらきによりて、諸佛にひとしむる迷中又深迷なり。孔老は三世をしらず、多劫をしらざるのみにあらず、一念しるべからず、一心しるべからず、なほ日月天に比すべからず。四大王、衆天におよぶべからざるなり。世尊に比せば、世間、出世間に迷惑するなり。

列傳云、喜爲周大夫、善星象。因見異氣、而東迎之、果得老子。請著書五千有言。喜欲從明求法。明云、若欲志心求法、當將父母等七人頭來、乃可得法。喜乃從教、七頭皆變猪頭。古德云、然俗典孝儒尚尊木像、老聃設化、令喜害親。如來教門、大慈爲本。如何老氏逆爲化原。むかしは老聃をもて世尊にひとしむる邪黨あり、いまは孔老ともに世尊にひとしといふ愚侶あり、あはれまざらめやは。孔老なほ轉輪聖王の十善をもて世間を化するにおよぶべからず。三皇五帝いかでか金銀銅鐵諸轉輪王の七寶千子具足して、あるひは四天下を化し、あるひは三千界を領せるにおよばん。孔老はいまだこれにも比すべからず。過現當來の諸佛諸祖、ともに父母師僧三寶に孝順し、病人等を供養するを化原とせり。害親を化原とせる、いまだむかしよりあらざるところなり。しかあればすなはち老聃と佛法と、ひとつにあらず。父母殺害するは、かならず順次生業にして、泥梨に墮すること必定なり。たとひ老聃みだりに虚無を談ずるとも、父母を害せんもの生報をまぬかれざらん。

【傳燈錄云】　第三卷二祖章。

【僧神光者】　前文の續き。

【如來在世有外道】　大智度論第十八。

傳燈錄云、「二祖每歎云、孔老之敎、禮術風規、莊易之書、未レ盡二妙理一、近聞達磨大士、住二止少林一、至人不レ遙、當レ造二玄境一」いまのともがら、あきらかに信ずべし、佛法の震旦に正傳せることは、ただひとへに二祖參學のちからなり。初祖たとひ西來せりとも二祖をえずば、佛法つたはれざらん。二祖もし佛法をつたへずば、東地いまに佛法なからん。おほよそ二祖は餘輩に群すべからず。

傳燈錄云、「僧神光者、曠達士、久居二伊洛一博二覽群書一善談二玄理一」しかし二祖の群書を博覽せるとき、いまの人書卷をみるとき、はるかにことなるべし。得法傳衣ののちも、むかしわれ「孔老之敎禮術風規」とおもひしは、あやまりなりとしめすことばなし、しるべし二祖すでに孔老は佛法におよぶことあらずと通達せり。いまの遠孫、なにとしてか祖父に違背して、佛法と一致なりといふや、まさにしるべし邪說なりと。二祖の遠孫にてあらずば、正受等が說たれかもちゐん、二祖の兒孫たるべくば、三敎一致といふことなかれ。

如來在世有二外道一名二論力一、自謂論議無二等者一、其力最大、故曰二論力一、受二五百梨昌募一撰二五百明難一來難二世尊一、來二至佛所一而奉レ問レ佛云、「爲二一究竟道一爲二衆多究竟道一」。佛言、「唯一究竟道」。論力云、「我等諸師、各說レ有二究竟道一、以下外道中各自謂レ是、毀二訾他法一互相是非上故、有二多道一」。世尊其時已化二六頭一、成二無學果一在二佛邊一立。佛問二論力一、「衆多道中、誰爲二第一一」。論力云、「鹿頭第一也」。佛言、「其若第一、云何捨二其道一爲二我弟子一入二我道中一」。論力見既慚愧低頭、歸依入道。是時佛說二義品偈一曰、「各各謂二究竟一而各自愛著、各是レ自非レ他、是

【建長七年】深信因果卷等に同じ。

皆非二究竟一、是人入二論衆一辨二明義涅槃一各各相是非、勝負懷二憂喜一勝者墮二慢坑一負者墮二憂獄一是故有智者不レ墮二此二法一論力汝當レ知、我諸弟子法、無レ虚亦無レ實、汝欲二何處求一汝欲レ壞二我論一終已無二此處一、一切知難明、還是自毀壞。いま世尊の金言それかくのごとし。東土愚暗の衆生、みだりに佛教に違背して佛道とひとしき道ありといふことなかれ。すなはち謗佛謗法となるべきなり。西天の鹿頭、並論力、乃至長爪梵志、先尼梵志等は、博學の人なり、東土にむかしよりいまだなし。孔老さらにおよぶべからざるなり。これらみなみづからが道をすてて、佛道に歸依す、いま孔老の俗人をもて、佛法に比類せんは、きかんものもつみあるべし。いはんや阿羅漢辟支佛も、みなつひに菩薩となる、一人としても小乘にしてをはるものなし。いかでかいまだ佛道にいらざる孔老を諸佛にひとしといはんや、大邪見なるべし。おほよそ如來世尊、はるかに一切を超越しましますこと、すなはち諸佛如來、諸大菩薩、梵天、帝釋、みなともにほめたてまつり、しりたてまつれるところなり。西天二十八祖、ともにしれるところなり。おほよそ參學のちからあるもの、みなともにしれり、いま澆運の衆生、宋朝愚暗のともがらの、三教一致の狂言もちゐるべからず、不學のいたりなり。

建長七年乙卯夏安居日、以二御草案本一書寫畢　懷奘

正法眼藏四禪比丘　畢

【唯佛與佛】法華方便品に唯佛與佛乃能究盡といふ。面授嗣法の最も尊貴なるものなり、佛嗣佛、祖嗣祖、尖と尖と合し、水水と和す、佛佛更に間隙あるべからず。

正法眼藏唯佛與佛

佛法は、人のしるべきにはあらず、このゆゑにむかしより凡夫として佛法をさとるなし、二乘として佛法をきはむるなし。ひとり佛にさとらるるゆゑに唯佛與佛、乃能究盡といふ、それをきはめさとるとき、われながらもかねてよりさとりとはかくこそあらめとおもはるることはなきなり。たとひおぼゆれどもそのおぼゆるにたがはぬさとりにてなきなり、さとりもおぼえしがごとくにてもなし。かくあれば、かねておもふその用にたつべきにあらず、さとりぬるをりは、いかにありけるゆゑに、さとりたりとおぼえぬなり、これにてかへりみるべし。さとりよりさきにとかくおもひけるは、さとりの用にあらぬと、さきのさまざまおもふ、おもひのやうにあらざりけるは、おもひのまことにあしくて、そのちからのなきにてはなし。しかたのおもひもさながらさとりにてありけるを、そのをりは、さかさまにせんとしけるゆゑに、ちからのなきとはおもひもいひもするなり。用にあらずとおぼゆることはしるべきところかならずあり。いはゆるちひさくはならじとおそれける。もしさとりよりさきのおもひをちからとして、さとりのいでこんは、たのもしからぬさとりにてありぬべし。さとりよりさきにちからとせず、はるかにこえてきたれるゆゑに、さとりとはひとすぢにさとりのちからにのみたすけらる。まどひはなきものぞともしるべし、

さとりはなきことぞともしるべし。無上菩提の人にてあるなり、これをほとけといふ。ほとけの無上菩提にてあるとき、これを無上菩提といふ。この道にあるときの面目しらざらんは、おろかなりぬべし。いはゆるその面目は、不染汚なり。不染汚とは、趣向なく取舍なからんとしひていとなみ、趣向にあらざらんところつくろひするにはあらぬなり。いかにも趣向せられず、取舍せられぬ、不染汚のあるなり。たとへば人にあふに面目のいかやうなるとおぼえ、又華にも月にもいまひとつの光色をおもひかされ、又春はただ春ながらのこころ、秋もまた秋ながらの美惡にて、のがるべきにあらぬを、われにあらざらんとするには、われなるにてもおもひしるべし。このはるあきのこゑわれならんとするにも、われにあらざるにてもかへりみるべし。われにつもれるにてもなし、いまもわれにあるおもひにてもなきなり。そのこころは、いまの四大五蘊、おのおのわれとすべきにてもあらず。たれとたどるべからず。しかあれば華月のもよほす心のいろ、また我とすべきにあらぬをわれとおもふ。われにあらぬをわれとおもふも、さもあらばあれ、そむくべきかたのいろも、おもむくべきかたのそめられぬべきもなしとてらすとき、おのづから道にある行履もかくれざりける本來の面目なり。ふるき人のいはく、「盡大地これ自己の法身にてあれども、法身にさへられざるべし。もし法身にさへられぬるには、いささか身を轉ぜんとするにもかなはず、出身の道あるべし。いかなるかこれ諸人の出身の道と、もしこの出身のみちをいはざらんものは、法身のいのちもたちまちにたえて、ながく苦海にしづみぬべし。

【一字不說】楞伽經三云、大慧白レ佛言、如二世尊說一我於二某夜一成二最正覺一、乃至某夜當レ入二涅槃一、於二其中間一不レ說二一字一、大慧、我及諸佛所レ證、眞如常住法性亦復如レ是、是故言レ不レ說二一字一と。

かくのごとくとはんに、いかにといはんか、法身をもいけ、苦海にもしづまざるべきと、このときいふべし盡大地自己の法身なり」ともしこの道理にてあらん、盡大地自己の法身といふをりはいはれぬ、またいはれざらんとき、ふつといはぬとやこころうべき、いはぬ古佛のいへることあり。死のなかにいけることあり、いけるなかに死せることあり。死せるがつねに死せるあり、いけるがつねにいけるあり。これ人のしひてしかあらしむるにあらず、法のかくのごとくなるなり。しかあれば法輪を轉ずるをりも、かくのごとくのひかりあり、こゑあり、現身度生にもしかありとしるべし、これを無生の知見とはいふ。現身度生とは、度生現身にてありけるなり。度にむかひて現をたどらず、現をみるに度をあやしむことなかるべし、この度に佛法はきはめつくせりとこころうべし、とくべし證すべし。現にも身にも度のごとくにありけるときくなり、とくなり、これも現身度生のしかあらしめけるとなり。このたねを證しけるにぞ、得道のあしたより、涅槃のゆふべにいたるまで、一字をもとかざりけるともとかるる、ことばの自在なりける。古佛いはく、「盡大地是眞實人體なり、盡大地是解脫門なり、盡大地是毗盧一隻眼なり、盡大地是自己法身なり」。いはゆるこころは眞實とは、まことの身となり、盡大地をわれらがかりにあらざりけることとしき身にてありけるとはしるべし、ひごろはなにとしてかしらざりけるとゝふ人あらば、盡大地是眞實人體といひつることをわれにかへせといふべし、また盡大地是眞實人體とは、かくのごとくしるともいふべし、また盡大地是解脫門とは、いかにもまつはれかかふること

となきになづくるなり。盡大地のことばは、ときにもとしにもこころにもことばにもしたしくして、ひまなく親密なり。かぎりなく、ほとりなきを、盡大地といふべきなり。この解脱門にいらんことをもとめ、いでんことをもとめんに、またうべからざるなり。なにとしてかくのごとくなる、發問をかへりみるべし、あらぬところをたづねばやとおもはんにも、かなふべからざるものなり。また盡大地はこれ毗盧のひとつのまなこなりとは、佛はひとつのまなことといへる、かならずしも人のまなこのやうにあらんずるとはおもはざれ、人にも目こそはふたつもあれ、まなこをいふときは人眼とばかりいひて、ふたつともみつともいはぬなり。教をまなぶものの、佛眼といひ、法眼といひ、天眼などといふも、目にてありとはならはぬなり、目のやうにあらんとしれるをばはかなきといふ。いまはただ佛の眼ひとつにて盡大地ありけるときくべし、千眼もあれ、萬眼もあれ、まづしばらく盡大地がそのなかのひとつにてあるとなり。かくおほかるなかに、ひとつぞといふもとがなし、また佛にはただまなこは、ひとつのみありとしるもあやまらず。まなこはさまざまあるべきぞかし、みつあるもあり、千眼あるもあり。八萬四千ありといふこともあれば、まなこのかくのごとくなりとききて、耳をおどろかさるべし。また盡大地はみづから法身なりときくべし。みづからをしらんことをもとむるは、いけるもののさだまれる心なり。しかあれどもまなこのみづからをばみるものまれなり、ひとり佛のみこれをしれり。そのほかの外道等は、いたづらにあらぬをのみわれとおもふなり、佛のいふみづからはすなはち盡大

【百千萬境一時】仰山問潙山、百千萬境一時來時如何、潙曰、青是非レ黄、長是非レ短、諸法各各住ニ自位一、非レ干ニ我事一。仰山乃作レ禮。

【莫管他】寶壽沼禪師因僧問、萬境來侵時如何、師曰、莫管他、僧禮拜、師曰、不レ要ニ動著一、動者即折ニ折汝腰一と。

地にてあるなり、しかあればみづからとしるもしらぬも、みなともにおのれにあらぬ盡大地はなし。このときのことはかのときの人にゆづるべし。」むかし僧ありて古德にとふ、「百千萬境一時にきたらんときいかがすべき。」古德いはく、「莫管他。」いふこころはきたらんことはさもあらばあれ、ともかくもうごかすべからずとなり、これすみやかなる佛法にてあり境にてはなし。このことばをは、炯誡とはこころうべからず、諦實にてありとこころうべし。いかにも管するかとすれば、管せられざりけるなり。ふるき佛のいはく、「山河大地と諸人とおなじくうまれ、三世の諸佛と諸人とおなじくおこなひきたれり。」しかあればすなはち一人うまるるをりに、山河大地をみるに、この一人がうまれざりつるさきよりありける山河大地のうへに、いまひとへかさねてうまれいづるとみえず、しかあればとてもまたふるきことばのむなしかるべきにはならず、いかにかこころうべき、こころえられずとてさしおくべきにはあらねば、かならずこころうべしとおもふべし。すでにとけることばにてあればきくべし、ききてはまたこころうべきなり、これをこころえんやうは、このうまる一人がかたよりこの生をたづぬるに、この生といふことはいかにあることと、はじめをはりあきらめける人はたれぞ。をはりもはじめもしらざれども、うまれきたれり。それただ山河大地のきはもしらざれども、ここをばみるこのところをばふみありくがごとし、生のごとくにあらぬ山河大地よとうらむるおもひなかれ。山河大地をひとしきわが生なりけりとあきらむべし。また三世諸佛は、すでにおこなひて道をもなり、さとりをはれり。こ

【道は知不知】傳燈趙州章に南泉云く道不ノ屬二知不ノ屬二不知一、知是妄覺不知是無記と。

【撲落非他物】會元第十、興教諦禪師因墮薪而悟入、頌曰、撲落非ㇾ他物一、縱橫非二是塵一、山河及大地、全露法王身と。

の佛と我とひとしとは、またいかにこころうべき、まづしばらく佛の行をこころうべし。佛の行は、盡大地とおなじくおこなひ、盡衆生ともにおこなふ。もし盡一切にあらぬは、いまだ佛の行にてはなし。しかあればこころをおこすより、さとりをうるにいたるまで、かならず盡大地と、盡衆生と、さとりもおこなひもするなり。これにいかにかうたがふおもひあるべきにしられぬおもひもまじるにたるをあきらめんとて、かくのごとくのこゑのきこゆるも、人のやうとはあやしまざるべし。これはこころうるをしへには、三世の諸佛のこころをもおこし、おこなふはかならずわれらが身心をばもらさぬことはりのあるなりとしるべし。これをうたがひおもふは、すでに三世の諸佛をそしるなり。しづかにかへりみれば、われらが身心は、まことに三世の諸佛とおなじくおこなひける道理あり、發心しける道理もありぬべくみゆるなり。この身心のさきのちをかへりみてらせば、たづぬべき人のわれにあらず人にあらざらんには、なにのとどこほるところとしてか、三世にはへだたれりとおもはん。このおもひとも、しかしながらわれにあらず。なにとてかはまた三世諸佛の本心の所行道のときをばさへんとはすべき。しばらく道は知不知にはあらぬとはなづくべし。」ふるき人のいはく、「撲落も他物にあらず、縱橫これ論にあらず、山河および大地、すなはち全露法王身なり」、いまの人もむかしの人のいふがごとくならふべし。すでに法王の身にてあり。」しかあれば撲落もことなるものにはあらざりけるところうる法王ありける。このこころは山の地にあるがごとし、地の山をのせてあるにたり。こころ

【非魚不知魚心】莊子云、莊子與惠子遊於濠梁之上、莊子曰、儵魚出游、是魚樂也、惠子云、子非魚、何以知魚之樂、莊子曰、子非我、何以知我不知魚之樂也と。

【龍門を遡らん】三秦記に大鯉魚登龍門化爲龍、不登點額と。

【九淅】河水九曲長者九千里入於渤海、淅は水勢の曲折。

るにこころえざりつるをりのきたりて、こころうるをさまたげず、またこころうるがこころえざりつるをやぶることもなくして、しかもこころうると、こころえぬとのはるのこころあきのこゑあり。それをもこえざりつるは、聲おほきにしてときける、そのこゑ耳にいらず、耳こゑのなかにあそびありきける。こころうるは、こゑすでに耳にいりて三昧あらはるるをりにてあるべし。このこころうるはちひさく、こころえぬはおほきにてありけるともおもはざるべし、わたくしにおもひえたることにあらねば、法王のかくのごとくなりけるとしるべし。法王の身とは、またこころも身のごとくにありこころも身とひとしかるべし。こころとみと、一毫のへだてなく全露にてあるべし、光明にも說法にもかみにいふがごとくに法王身にてありと、こころうるなり。むかしよりいへることあり、いはゆるうをにあらざれば、うをのこころをしらず、とりにあらざれば、鳥のあとをたづねがたし、このことわりをもよくしれる人まれなり、人の魚のこころをしらぬと、人のとりのこころをしらぬとのみおもへるは、あしくしれり。これをしるやうは、魚と魚とはかならずあひたがひにそのこころをしるなり、人のやうにしらぬことはなくて、龍門をさかのぼらんとおもふにもともにしられ、おなじくこころをひとつにするなり。九淅をしのぐこころもかよひしるなり、これをうをにあらぬはしることなし。また鳥の空をとびぬるをば、いかにもゆくけだものはこのあしのあとをしり、このあとをみてたづぬることは、夢にもいまだおもひこらず、さありとしらねばおもひよるたぐひなし、しかあるを鳥はよくちひさき鳥のいく百

千むらがれすぎにける。これはおほきなる鳥のいくつらみなみにさり、きたにとびにげるあとよとかすかすにみるなり。車のあとのみちにのこり。馬のあとのくさにみゆるよりもかくれなし。鳥は鳥のあとをみるなり、このことわりは佛にもあり、佛のいくよよにおこなひすぎにけるよとおもはれ、ちひさき佛おほきなる佛、かずにもれぬるかずながらしるなり、佛にあらざるをりはいかにもしらざることなり、いかにしらざるぞといふ人もありぬべし、佛のまなこにてそのあとをみるべきがゆゑに、佛にあらねは佛のまなこをそなへず。佛のものかぞふるかずなり、しらねばすべて佛のみちのあとをばたどりぬべし、このあと、もしめにみえば、佛にてあるやらんと、あしのあとをもたくらぶべし。たくらぶるところに、佛のあともしられ、佛のあとの長短も淺深もしられ、わがあとのあきらめらるることは、佛のあとをはかるよりうるなり、このあとをうるを佛法とはいふなるべし。

弘安十一年季春晦日、於ニ越州吉田縣志比庄吉祥山永平寺知賓寮南軒ニ書ニ寫之一。

正法眼藏唯佛與佛　畢

正法眼藏八大人覺

諸佛是大人也、大人之所ニ覺知、所以稱ニ八大人覺一也。覺ニ知此法一爲ニ涅槃因一、我本師釋迦牟尼佛、入涅槃夜、最後之所說也。

【弘安十一年】高祖滅後三十六年、弉祖寂後九年、誰人の書寫する所か不明。

【八大人覺】大人とは諸佛。諸佛の覺知する所の八品之を八大人覺といふ。如來最後の教誨、一代の教說此

八品に盡きたり、佛意親切、遺教懇到。永平高祖既に滅時を知り、兒孫の爲に佛遺教の八大人覺を示す、大悲徹困なり。八大人覺の一一は釋尊の暖皮肉にして高祖の活骨髓なり、恭敬尊重すべし。

一者少欲。於彼未得五欲法中、不廣追求、名爲少欲。

佛言、汝等比丘、當知多欲之人、多求利故、苦惱亦多、少欲之人、無求無欲、則無此患。直爾少欲尚應修習、何況少欲能生諸功德。少欲之人、則無諂曲以求人意。亦復不爲諸根所牽、行少欲者、心則坦然、無所憂畏、觸事有餘、常無不足、有少欲者、則有涅槃、是名少欲。

二者知足。已得法中、受取以限、稱曰知足。

佛言、汝等比丘、若欲脱諸苦惱、當觀知足。知足之法、即是富樂安穩之處。知足之人、雖臥地上、猶爲安樂、不知足者、雖處天堂、亦不稱意。不知足者、雖富而貧、知足之人、雖貧而富。不知足者、常爲五欲所牽、爲知足者之所憐愍、是名知足。

三者樂寂靜。離諸憒閙、獨處空閑、名樂寂靜。

佛言、汝等比丘、欲求寂靜無爲安樂、當離憒閙、獨處閑居、靜處之人、帝釋諸天、所共敬重。是故當捨己衆他衆、空閑獨處、思滅苦本。若樂衆者、則受衆惱、譬如大樹衆鳥集之、則有枯折之患。世間縛著、沒於衆苦、譬如老象溺泥、不能自出、是名遠離。

四者勤精進。於諸善法、勤修無間、故云精進。精而不雜、進而不退。

佛言、汝等比丘、若勤精進、則事無難者。是故汝等當勤精進。譬如少水常流、則能穿石。若行者之心、數數懈廢、譬如鑽火未熱而息、雖欲得火、火難可

得、是名精進。」

五者不忘念。　亦名守正念、守法不失、名爲正念、亦名不忘念。

佛言、汝等比丘、求善知識、求善護助、無如不忘念、若有不忘念者、諸煩惱賊、則不能入、是故汝等、常當攝念在心、若失念者、則失諸功德、若念力堅強、雖入五欲賊中、不爲所害、譬如著鎧入陣、則無所畏、是名不忘念。」

六者修禪定。　住法不亂、名曰禪定。

佛言、汝等比丘、若攝心者、心則在定、心在定故、能知世間生滅法相、是故汝等、常當精進、修習諸定、若得定者、心則不散、譬如惜水之家、善治堤塘、行者亦爾、爲智慧水故、能修禪定、令不漏失、是名爲定。」

七者修智慧。　起聞思修證、爲智慧。

佛言、汝等比丘、若有智慧、則無貪著、常自省察、不令有失、是則於我法中、能得解脫、若不爾者、既非道人、又非白衣、無所名也。實智慧者、則是度老病死海堅牢船也、亦是無明黑暗大明燈也、一切病者之良藥也、伐煩惱樹之利斧也、是故汝等當以聞思修慧、而自增益、若人有智慧之照、雖是肉眼、而是明見人也、是名智慧。」

八者不戲論。　證離分別、名不戲論、究盡實相、乃不戲論。

佛言、汝等比丘、若種種戲論、其心則亂、雖復出家、猶未得捨、是故比丘、當急捨離亂心戲論、若汝欲得寂滅樂者、唯當善滅戲論之患、是名不戲論。」これ八大人覺

【魔嬈】嬈は擾。魔の爲に嬈亂せらるるなり。

なり、一一各具八、すなはち六十四あるべし、ひろくするときは無量なるべし、略すれば六十四なり。大師釋尊、最後之說、爲大乘之所教誨、二月十五日夜半の極唱。これよりのち、さらに說法しましまさず、つひに般涅槃しまします。

佛言、汝等比丘、常當一心勤求出道、一切世間動不動法、皆是敗壞不安之相、汝等、且止、勿得復語、時將欲過、我欲滅度、是我最後之所教誨。このゆゑに如來の弟子は、かならずこれを習學したてまつる。これを修習せずしらざらんは、佛弟子にあらず、これ如來の正法眼藏涅槃妙心なり。しかあるにいましらざるものはおほく、見聞せることあるものはすくなきは、魔嬈によりてしらざるなり。また宿殖善根のすくなき、きかず、みず。むかし正法像法のあひだは、佛弟子みなこれをしれり、修習し參學しき。いまは千比丘のなかに一兩箇の八大人覺しれるものなし。あはれむべし澆季の陵夷、たとふるにものなし。如來の正法、いま大千に流布して、白法いまだ滅せざらんとき、いそぎ習學すべきなり、緩怠することなかれ。佛法にあひたてまつること、無量劫にもかたし、人身をうることも、またかたし、たとひ人身をうくといへども、三洲の人身なし、そのなかに南洲の人身すぐれたり、見佛聞法、出家得道するゆゑなり、如來の般涅槃よりさきにさきだちて、死せるともがらは、この八大人覺をきかず、かならず。いまわれら見聞したてまつり、習學したてまつる、宿殖善根のちからなり、いま習學して生生に增長し、かならず無上菩提にいたり、衆生のためにこれをとかんこと、釋迦牟尼佛にひとしくして、こと

【建長五年】祖齢五十四歳、永平寺にて最後の書なり此年八月廿八日入滅せらる。

【義演書記】業を波著寺の慧鑑に受け、法を孤雲奘和に嗣ぐ。永平寺の書記職を勤む。

なることなからん。

建長五年正月六日書于永平寺。

今建長七年乙卯解制之前日、令義演書記書寫畢、同一校之。右本先師最後御病中之御草也。仰以前所撰假字正法眼藏等、皆書改、並新草具都盧一百卷可撰之云云。既始草之御此卷、當第十二也。此後御病漸漸重增、仍御草案等事即止也。所以此御草等、先師最後之教勅也。我等不幸而不拜見一百卷之御草、尤所恨也。若奉戀慕先師之人、必書此十二卷、而可護持之。此釋尊最後之教勅、且先師最後之遺教也。

懷奘記之

正法眼藏八大人覺　畢

正法眼藏　大尾

【本篇】の述作年代は未詳なるも恐らくは大乘寺在住時代正安二年後祖三十四五歲の頃なるべし。高祖の普勸坐禪儀は語簡にして意深し太祖之を布演してその玄旨を知らしむると共に審細に坐禪に關すると用心を記して後學初心の者の爲に徹惘親切したまふもの卽ち本篇なり。

【心地を開明】開明心地は體、安住本分は用、本來面目は人、本地風光は法にして此四句畢竟一になり。心地は心性にして三界唯心の心、一切法一心の心なり。

【這箇は是れ】本來面目とは是れ誰れの面目ぞと參究せよなり。

【三祖大師曰く】東土の三祖僧璨大師信心銘を著はして信心不二不二信

坐禪用心記

太祖總持常濟大師撰

夫れ坐禪は直に人をして心地を開明し本分に安住せしむ。是を本來の面目を露すと名け、亦本地の風光を現すと名く。身心倶に脫落し、坐臥同じく遠離す。故に不思善不思惡、能く凡聖を超越し、迷悟の論量を透過し、生佛の邊際を離却す。故に萬事を休息し及び諸緣を放下して、一切爲さず、六根作すこと無し。這箇は是れ阿誰。曾て名を知らず、身と爲すべきに非ず、心と爲すべきに非ず。慮らんと欲すれば慮絕し、言はんと欲すれば言窮る。癡の如く兀の如し。山高く海深く、頂を露さず、底を見ず。緣に對せずして照す、眼、雲外に明かなり。思量せずして通ず、宗、默說に朗かなり。乾坤を坐斷して全身獨露す。沒量の大人、大死人の如く、一翳の眼に遮る無し、一塵の足に受くる無し。何れの處にか塵埃有らん、何物か遮障を作さん。淸水本表裏無く、虛空終に內外無し。玲瓏明白にして自照靈然たり、色空未だ分れず、境智何ぞ立せん、從來共に住して歷劫名無し。三祖大師且く名けて心と爲し、龍樹尊者假に名けて身と爲す。佛性の相を現じ、諸佛の體を表す。此圓月の相は缺くること無く餘ること無し。卽ち此心は便ち是れ佛なり。自己の光明、古に騰り今に輝き、龍樹の變相を得、諸佛の三昧を成ず。心本二相無く、身更に相像に

心と云へるを云ふ

【龍樹尊者圓月相】西天十四祖龍樹尊者、偈に云く「身現二圓月相一、以表二諸佛體一、說法無二其形一、用辨非二聲色一」と。傳に「祖復於二座上一現二自在身一、如二滿月輪一、一切衆唯聞二法音一、不レ覩二祖相一」と。龍樹圓月相を現ずること眼藏佛性卷に詳し、看よ。

【四大五蘊】四大は地水火風（事）、堅濕煖動（性）の四、五蘊は色受想行識の五、大は周遍、蘊は積聚の義。

【四支五根】四支は手足各二、五根は眼耳鼻舌身の五根にして支は肢、根は一切善惡の作業の根本の義。

【三十六物】身の內と外と中間とに各十二物あり、內の十二は皮膚血肉筋脈骨髓肪膏腦膜にして外の十二は髮毛爪齒眵淚涎唾

異なり。唯心と唯身と異と同とを說かず。心變じて身と成り身露れて相分る。一波纔に動いて萬波隨ひ來り、心識才に起つて萬法競ひ來る。謂ゆる四大五蘊遂に和合し、四支五根忽ち現成す。以至、三十六物、十二因緣、造作遷流し展轉相續す。但衆法を以て合成して有り。所以に心は海水の如く、身は波浪の如し。海水の外一點の波無きが如く、波浪の外一滴の水無きが如し。水波別なく動靜異ならず。故に云ふ生死去來眞實の人、四大五蘊不壞の身と。

今坐禪の者は正に佛性海に入つて、卽ち諸佛の體を標す。本有妙淨明の心、頓に現前し、本來一段の光明終に圓照し、海水都て增減無く波浪も亦退轉無し。是を以て諸佛一大事因緣の爲に世に出現し、直に衆生をして佛の知見に開示悟入せしむ。而うして寂靜無爲の妙術あり、是を坐禪と謂ふ。卽ち是れ諸佛の自受用三昧なり、又三昧王三昧と謂ふ、若し一時も此三昧に安住すれば、則ち直に心地を開明す。寔に知る佛道の正門なることとを。其れ心地を開明せんと欲する者は雜知雜解を放捨し、世法佛法を拋下し、一切の妄情を斷絕し、一實の眞心を現成せば迷雲收り晴れて心月新に明かならん。佛の言はく「聞思は猶門外に處するが如く、坐禪は正に家に還つて穩坐す」と。誠なる哉、夫聞思の如きは諸見未だ休せず、心地尚滯る、故に門外に處するが如し。只箇の坐禪は一切休歇して處として通ぜざること無し。故に家に還つて穩坐するに似たり。而して五蓋の煩惱、皆無明より起る。無明は己を明らめざるなり。坐禪は是れ己を明らむるなり。縱ひ五蓋を斷ずと雖も未

屎尿垢汗、中間の十二は肝膽腸胃脾腎心肺生臟熟臟赤痰白痰なり。

【十二因緣】無明行の二は過去の因、識名色六入觸受の五は現在の果、愛取有の三は現在の因、生老死の二は未來の果。十二緣は是を以て三世兩重の因果を示し輪廻轉生の道理を說く

【一大事因緣】法華方便品に云く諸佛世尊唯以二一大事因緣一故出二現於世一と。

【三昧王三昧】大智度論に云く如何名二三昧王三昧一是三昧於二諸三昧中一最第一自在能緣二無量諸法一、如二諸人中王第一一、王中轉輪聖王第一、一切天上天下佛第一、此三昧亦如是、於二諸三昧中一最第一と。

【五蓋の煩惱】貪欲瞋恚睡眠掉悔疑

だ無明を斷せざれば是れ佛祖に非ず。若し無明を斷ぜんと欲せば坐禪辨道最も是れ秘訣なり。古人云はく、「妄息めば寂生じ、寂生ずれば智現ず、智現ずれば眞見る」と。若し妄心を盡さんと欲せば須らく善惡の思を休すべし、又須らく一切の緣務、都來放捨して心思ふこと無く、身事とすること無かるべし。是れ第一の用心なり。妄緣盡くる時妄心隨つて滅す、妄心若し滅せば、不變の體現じ、了了として常に知る、寂滅の法に非ず、動作の法に非ず。然して行ゆる、技藝術道、醫方占相、皆處に遠離すべし。況んや歌舞、妓樂、喧諍戲論、名相利養は悉く之に近くべからず。頌詩歌詠の類、自ら淨心の因緣たりと雖も、而も好んで營むこと莫れ。文章筆硯は擲下して用ひされ。是れ道者の勝躅なり、是れ調心の主要なり。美服と垢衣とは俱に着用すべからず、美服は貪を生じ、又盜賊の畏あり、故に道者の障難と爲る。若くは因緣あり、若くは人の施與する有りとも而も受けざるは古來の嘉蹤なり。縱ひ本より之れ有るとも又照管せざれ。盜賊劫奪すとも追尋し怪惜すべからず。垢衣と舊衣とは浣洗補治して垢膩を去り、淨潔ならしめ而して之を著用すべし。垢膩を去らざれば、身冷かにして病發す、又障道の因緣たり。然も身命を管せずと雖も、衣足らず、食足らず、睡眠足らざる、是を三不足と名く、皆退墮の因緣なり。一切の生物、堅物、乃至損物、不淨食、皆之を食すべからず。腹中鳴動し、身心熱惱して打坐に煩あり、一切の美食耽着すべからず。但身心、煩あるのみに非ず、貪念未だ免れざる所なり。食は祇、氣を支ふるに取つて味を嗜むべからず。或は飽食して打坐すれば發病の因緣なり。

の五、蓋は蓋覆纏綿して心神昏暗ならしめて定慧發せざるが故に云ふ。

大小の食後、輙く坐することを得ざれ。暫く少時を經て乃し坐すべきに堪へたり。凡そ比丘僧は必ず食を節量すべし。節量食は謂く分を准るなり、三分の中に二分を食して一分を餘すべし。一切の風藥、胡麻、薯蕷等は常に之を服すべし、是れ調身の要術なり。凡そ坐禪の時牆壁、禪椅及び屏障等に靠倚すべからず。又風の烈しき處に當つて打坐すること莫れ、高顯の所に登つて打坐すること莫れ、皆發病の因縁なり。若し坐禪の時、身或は熱するが如く或は寒するが如く或は澁るが如く或は滑かなるが如く、或は堅きが如く或は柔らかなるが如く或は重きが如く或は輕きが如く、或は驚覺するが如くなるは皆息の調はざるなり。必ず之を調ふべし。調息の法は暫らく口を開張いて長息なれば長に任せ、短息なれば短に任せ、漸漸に之を調へ、稍稍として之に隨ひ、覺觸來る時自然に調適す。而して後鼻息は通ずるに任せて通ずべし。心若し或は沈むが如く或は浮ぶが如く或は朦なるが如く或は利なるが如く、或は室外通見し或は身中通見し、或は佛身を見、或は菩薩を見、或は知見を起し或は經論に通利する、是の如き等の種種の異相は悉く是れ念息不調の病なり。若し病ある時は心を兩趺の上に安じて坐す。心若し昏沈する時は心を髪際と眉間とに安ず。若し散亂する時は心を鼻端丹田に安ず。居常坐する時は心を左掌の中に安ず。若し坐久しき時は、必ずしも安心せずと雖も、心自ら散亂せず。復古教の如きは照心の家訓なりと雖も、多く之を見、之を書し、之を聞くべからず。多きときは皆亂心の因縁なり。凡そ身心を疲勞するは悉く發病の因縁なり。火難水難風難賊難、及與海邊酒肆婬房寡女處

女妓樂の邊、並に打坐すること莫れ。國王、大臣、權勢の家、多欲名聞戲論の人にも亦之に近き仕することを得ざれ。大佛事、大造營は最は善事たりと雖も、坐禪を專らにする人は之を修すべからず。說法教化を好むことを得ざれ、散心亂念是よりして起る。多樂を好樂し弟子を貪求することを得ざれ、多行多學することを得ざれ、極明極暗極寒極熱乃至遊人戲女の處、並に打坐すること莫れ。叢林の中、善知識の處、深山幽谷之に依止すべし。綠水青山、是れ經行の處、溪邊樹下、是れ澄心の處なり。無常を觀じて忘るべからず、是れ探道の心を勵すなり。

坐褥は須らく厚く敷くべし、打坐安樂なり。道場は須らく淸潔なるべし、而うして常に香を燒き花を獻ずれば護法善神及び佛菩薩影向して守護するなり。若し佛菩薩及び羅漢の像を安置すれば一切の惡魔鬼魅其便を得ず。常に大慈大悲に住して坐禪無量の功德一切衆生に回向せよ。憍慢、我慢、法慢を生ずること莫れ、此は是れ外道凡夫の法なり、誓つて煩惱を斷じ、誓つて菩提を證せんと念ひ、祇管打坐して一切不爲なる是れ參禪の要術なり、常に目を濯ひ足を洗ひ身心閑靜、威儀齊整なるべし。應に世情を捨つべし、道情を執すること莫れ。法は慳むべからずと雖も然も請せざれば說くこと莫れ、三請を守つて四實に從ひ、十たび言はんと欲して九たび休し去り、口邊醭生じて臘月の扇の如く、風鈴の虛空に懸つて四方の風を問はざるが如くなるは是れ道人の風標なり。只法を以て人に貪らず道を以て己に貢らざる便ち是れ第一の用心なり。

【三請を】法華方便品に舍利弗惟願說之惟願說之三請爾時世尊告舍利弗汝已殷勤三請豈得不說と、之を三請說法といふ。

【四實に】示教利喜之を四實と云ふ、示は說示、法の道理を說き示す、教は教訓、捨惡行善して道心を發さしむる也、利は利益、事に觸れ機に臨んで說き諭し、初心晩學を利益するなり。喜は隨喜、初學の行を讃歎して益進ましむる。此四を具ふるを眞實の說法とす。

【教行證】教は教法、一法の言教、行は修行、進修の義、證は證契にして理に證契する也、教に依て修行し、修行に依て證契す、教行證は一門にして證は果也、これ一聽の解釋、宗門の教行證は本文に看よ。

【聲聞の十六行】苦集滅道の四諦下の四行、阿羅漢に至る觀法、之を理に約すれば十六諦、之を行に約すれば十六行とす、苦諦下の四行、苦空無常無我、集諦下の四行因集生緣、滅諦下の四行滅靜妙離、道諦下の四行道如行出なり。

【緣覺の十二行】緣覺の十二因緣觀、十二因緣を觀じて眞諦の理を覺る故に緣覺と云ふ。

【菩薩の六度萬行】菩薩は初發心より四諦の境を緣じ四弘願を發し六度の

夫れ坐禪は教行證に干るに非ざれども、而も此三德を兼ぬ。謂く證は悟を待つを以て則とするは此れ坐禪の心にあらず、行は眞履實踐を以てするは是れ坐禪の心にあらず、教は斷惡修善を以てするは是れ坐禪の心にあらず、禪中終に教を立つるとも而も尋常の教に非ず。謂く、直指單傳の道、擧體全說話、語本章句を沒し、意盡き理窮る處、一言十方を盡す。絲毫も未だ擧揚せず、是れ豈佛祖眞正の教に非ざらんや。或は行を談ずと雖も又無爲の行なり。謂く、身に所作無く口に密面無く、心に尋思無く、六根自ら淸淨にして一切染汚せず、聲聞の十六行に非ず、緣覺の十二行に非ず、菩薩の六度萬行に非ず、一切爲さず、故に名けて佛と爲す。只諸佛の自受用三昧に安住して菩薩の四安樂行に遊戲す。是れ豈佛祖深妙の行にあらざらんや。或は證を說くと雖も無證にして證す、是れ三昧王三昧、無生智發現三昧、一切智發現三昧、自然智發現三昧、如來の智慧開發明門、大安樂行法門の所發なり。聖凡の格式を超え、迷悟の情量を出づ。是れ豈本有大覺の證にあらざらんや。

又坐禪は戒定慧に干るに非ざれども而も此三學を兼ぬ。謂く、戒は是れ防非止惡、坐禪は擧體無二と觀ず、萬事を抛下し諸緣を休息す、佛法世法管せず、道情世法雙べ忘じて是非も無く善惡も無く、何の防止か之れ有らんや。此は是れ心地無相の戒なり。定は觀相無餘、坐禪は身心脫落し迷悟を捨離して不變不動不爲不昧、癡の如く兀の如く山の如く海の如し、動靜の二相了然として生ぜず、定にして定相無し、定相無きが故に大定と名く。慧は是れ簡擇覺了、坐禪は所知自ら滅し、心識永く忘ず、通身慧眼、簡覺あること無し、明かに佛

行を修す、六度は布施持戒忍辱精進禪定智慧の六波羅蜜とす、六度は利他行を主とする菩薩の正修行也。教乘法教に八萬の細行を擧ぐ、行住坐臥に各二百五十戒卽ち一千となる。三聚戒に對して各一千卽ち四千身口七支に配して二萬一千、之を貪瞋癡等分の四煩惱に配して八萬四千と爲る、今八萬といふは大數を擧ぐるなり。

【菩薩の四安樂行】一正身行、二正語行、三正意行、四大悲行。法華安樂品に菩薩於二後惡世一欲レ說二是經一當レ安二住四法一と即ち是なり。

【無生智】生死を解脫する大智。

【一切智】一切空平等なる智。

【自然智】人人本具の智、修習覺察

性を見て本迷惑せず、意根を坐斷して廓然として瑩徹す、是れ慧にして慧相無し、慧相無きが故に大慧と名く。諸佛の教門、一代の所說、戒定慧の中に總べ收めざること無し。今の坐禪は戒として持たざること無く、定として修せざること無く、慧として通ぜざること無し。降魔成道、轉輪涅槃、皆此力に依る。神通妙用、放光說法、盡く打坐に在り。且つ參禪も亦坐禪なり。坐禪せんと欲せば先づ靜處宜し、茵褥須らく厚く敷くべし、風煙を入らしむること勿れ。雨露をして侵さしむること勿れ。膝を容るるの地を護持し、打坐の處を清潔にせよ。昔人金剛座に坐し、盤石の上に坐する蹤跡ありと雖も亦坐物有らざること無し。坐處は當に晝明ならず夜暗ならず、冬暖かに夏冷やかなるべし、是れ其術なり。心意識を放捨し念想觀を休息して作佛を圖ること勿れ。是非を管すること勿れ、光陰を護惜して頭燃を救ふが如くせよ。如來の端坐、少林の面壁、打成一片にして都て他事無し。石霜枯木に擬し、太白坐睡を責む、燒香禮拜念佛修懺看經持課を用ひず。祇管打坐して始めて得んと。大抵坐禪の時は袈裟を掛くべし、略すること莫れ。蒲團は全く趺坐を支ふるに非ず、跏趺の半より後、脊骨の下に至る、是れ佛祖の坐法なり。或は結跏趺坐、或は半跏趺坐。結跏趺坐の法は、先づ右の足を以て左の䏶の上に置き、左の足を以て右の䏶の上に置く。寛く衣物を繫けて齊整ならしむべし。次に右の手を以て左の足の上に安じ、左の手を以て右の手の上に安ず、兩手の大拇指相柱へて身に近け、柱指の對頭當に臍に對して安ずべし。正身端坐して左に側ち右に傾き前に躬り後に仰ぐことを得ざれ、耳と肩と、鼻と

臍と必ず倶に相對し、舌、上の腭を拄へ、息は鼻より通ず。脣齒相著け、眼は須らく正に開くべし、張らず微めず、是の如く調身し已つて欠氣して安息す。謂ゆる口を開いて氣を吐くこと一兩息なり。次に須らく坐定して身を搖かすこと七八度して麤より細に至り、兀兀として端坐すべし。此に於て箇の不思量底を思量せよ、如何が思量せん、謂く、非思量是れ乃ち坐禪の要法なり。直に須らく煩惱を破斷して菩提を親證すべし。若し定より起たんと欲せば、先づ兩手を兩膝の上に仰ぎ安じながら身を搖かすこと七八度して細より麤に至り、口を開いて氣を吐き、兩手を伸べて地を捺へ、輕輕に座を起つて徐徐として行歩す。須らく順轉し順行すべし。坐中若し昏睡來らば常に身を搖かし或は目を張り、又は心を頂上と髮際と眉間とに安ずべし。猶未だ醒めざる時は手を引べて應に目を拭ひ或は身を摩し、猶未だ醒めざる時は座を起つて經行すべし、正に順行せんことを要す。順行して行し一百許步に及ばば昏睡必ず醒めん。而して經行の法は一息怔に半步なり、行けども亦行かざるが如く寂靜にして動ぜず、是の如く經行して猶未だ醒めざる時は或は目を濯ひ頂を冷し、或は菩薩戒の序を誦し種種方便して睡眠せしむること勿れ。當に生死事大無常迅速なるに道眼未だ明かならず、昏睡何か爲んと觀ずべし。昏睡頻りに來らば應に發願して云ふべし、業習已に厚し、故に今睡眠蓋を被むる、昏蒙何れの時か醒めて、願はくば佛祖大悲を垂れて我昏重の苦を拔きたまへと。心若し散亂する時は心を鼻端丹田に安じて出入の息を數へよ。猶未だ休まざる時は須らく一則の公案を提撕して擧覺すべし、謂く

を以て得るところに非ざる智なり。

【如來智】以上の三智を總稱して如來智とす。

【戒定慧】戒は禁戒、防非止惡の義。定は禪定、散亂を攝め心を一境に住せしむ、慧は智慧にして煩惱を斷除して本性を顯はす、之を三學といふ。無相戒、大定、大慧、本文に看よ。

【經行の法】高祖の辨道法、商山の經行軌に詳出、看るべし。

【睡眠蓋】五蓋の一、前出。

【一則の公案】古德の因緣、垂示、機緣の語、拈古、拈則等。

【何物恁麼來】六祖大師と對南嶽懷讓禪師との公案。

【狗子無佛性】趙州從諗禪師、僧あり狗子還つて佛性ありや、師答へて無と云ふ。趙州無字の公案とも云ふ。

【沒滋味】無味の談、沒は超の意、俗に鐵饅頭といふ。

【休し去り歇し去】石霜慶諸禪師の示衆、休去歇去冷湫湫地去一念萬年去寒灰枯木去古廟香爐去一條白練去、之を石霜の七去といふ。

是れ何物か恁麼に來る、狗子無佛性、雲門の須彌山、趙州の柏樹子等の沒滋味の談、是れ其所應なり。猶未だ休まざる時は一息截斷、兩眼永閉の端的に向つて打坐工夫し、或は胞胎未生、不起一念已前に向つて行履工夫せば二空忽ち生じて散心必ず歇まん。定を起つの後、思量せずして威儀を現ずる時は見成卽ち公案たり。回互せずして修證を成ずる時は公案卽ち見成なり。朕兆以前の消息、空劫那畔の因緣、佛佛祖祖の靈機樞要、唯此一事なり。直に須らく休し去り歇し去り、冷湫湫地にし去り、一念萬年にし去り、寒灰枯木にし去り、一條白練にし去るべし。

坐禪用心記 畢

【本篇述作の年代未詳、坐禪用心記と略同年代なるべし。三根は上中下三種の根機、上智下愚利人鈍者實に千種萬別なるべしと雖も大體分つて上中下の三等と爲さば恐らくは攝せざる者無かるべし三人の根機相應して坐禪入門の説示、太祖の慈悲徹懇なりと云ふべし。】

【覺不覺】諸佛出世せざる以前、祖師西來せざる以前、絶學無爲の眞實人なるが故に、佛の對機説法を覺るの要なく、祖師の應機接物を煩はすに及ばず、眞實人には覺不覺、悟不悟無きなり。

【暫も怠隙】中根人の坐禪は精進不怠、暫時も放過せざるにあり、相續不斷の功夫辨道を要す。

【全身獨露】長慶

三根坐禪說

太祖總持常濟大師撰

上根の坐禪は諸佛出世の事を覺するにあらず、佛祖不傳の妙を悟るにあらず。飢ゑ來れば飯を喫し、困じ來れば打眠す。萬象森羅を指して以て自己と爲るに非ず。覺不覺倶に存せず、任運騰騰只麼に正坐す。然も是の如くなりと雖も、諸法に於て分異せず、萬法昧からず。

中根の坐禪は萬事を放捨し、諸緣を休息して十二時中暫くも怠隙無し。出息入息に就いて斷斷として工夫す。或は一則の公案を提撕し、雙眼を鼻端に注ぐ。自家本來の面目、生死去來に渉らず。眞如佛性の妙理、慮知分別に墮せず。不覺不知にして而も覺せざること無し。明明了了として、古に亙り今に亙る。當頭十方世界に朗かに、全身萬象の中に獨露す。

下根の坐禪は且く結緣を貴んで善惡業道を離れ、直に即心を以て諸佛の性源を顯す。足、佛地に結んで惡處に入らず、手、定印を結んで經卷を取らず。口を閉ぢて縫ふが如く緘むが如く、一法を說かず。眼を開いて大ならず小ならず、諸色を分つこと無く。耳善惡の聲を聞かず。鼻好惡の香を齅がず。身物に倚らず、動作頓に止み、意攀緣せず、憂喜共に

佛後の語に萬象之中獨露身、唯人自肯乃方親、昔時謬向途中覓、今日看來火裏氷と。
【五戒八戒】五戒は在家戒、八戒は沙彌戒。
【菩薩大戒】梵網の十重禁戒等、菩薩の守るべき大乘戒。
【比丘具戒】比丘の受くる具足戒、即ち二百五十戒。
【三千威儀】比丘の二百五十戒を行住坐臥の四威儀に配して一千、之を過現當の三世に配して三千威儀とす。
【無量の堂塔を】大藏一覽に云く、若人靜坐一須臾、勝造恒河沙七寶塔、寶塔畢竟化爲塵、一念靜心成正覺と。
【初心後心を選ばず】以下高祖の普勸の意を表はす、而して本論の勸結なり。

盡し、形相如如にして木佛の如し。縱ひ心種種の妄想顚倒を起すと雖も、其咎を作さず。譬へば明鏡上更に浮影を留めざるが如し。五戒、八戒、菩薩の大戒、比丘の具戒、三千の威儀、八萬の細行、諸佛菩薩の轉妙法輪、皆此坐禪の中より現前して盡くること無し。萬行の中、最勝の實行は唯坐禪の一門なり。僅に坐して一歩の功德を進むれば、則ち百千無量の堂塔を造るに勝れり。何に況んや常に修して退くこと無からんをや。永く生死を解脫して自己の心佛を見ん。行住坐臥、無作の妙用に非ざること無く、見聞覺知、悉く是れ本有の靈光なり。初心後心を選ばず、有智無智を論ずること無く、此の如きの坐禪、專精に修行して忘失すべからず。

三根坐禪說 畢

【曹洞教會は闔宗一萬四千有餘の寺院及び住職僧侶、之に歸依し附屬する檀越信徒の一大團結を總稱す。修證義は其教會中に於ける能化所化の等しく安心正依の標準とする要文なり。明治廿三年十二月一日宗規の正式に據り兩大本山貫首の名を以て一宗の末派僧侶檀信徒に領布せしものなり。其文の一節に云く、衲等欽んで高祖承陽大師正法眼藏の中に就て宗教の大意安心正依の標準を選出してこれを曹洞教會修證義と名付けたり。全篇五章三十一節三千七百四字より成る。

【第一章總序】大段五章の中の第一章にして總序は修證義の總體一篇の綱要を叙べ第二章以下の端緒を開く

曹洞教會修證義

第一章　總　序

(一)生を明らめ死を明らむるは佛家一大事の因縁なり。生死の中に佛あれば生死なし、但生死即ち涅槃と心得て、生死として厭ふべきもなく、涅槃として欣ふべきもなし。是時初めて生死を離るる分あり。唯一大事因縁と究盡すべし。(二)人身得ること難し、佛法値ふこと希れなり。今我等宿善の助くるに依りて、已に受け難き人身を受けたるのみに非ず、遇ひ難き佛法に値ひ奉れり、生死の中の善生最勝の生なるべし。最勝の善身を徒らにして露命を無常の風に任すること勿れ。(三)無常憑み難し、知らず露命いかなる道の草にか落ちん、身已に私に非ず、命は光陰に移されて暫くも停め難し、紅顔いづくへか去りにし尋ねんとするに蹤跡なし。熟觀ずる所に往事の再び逢ふべからざる多し。無常忽ちに到るときは、國王大臣親暱從僕妻子珍寶たすくる無し、唯獨り黄泉に趣くのみなり。已れに隨ひ行くは只是れ善惡業等のみなり。(四)今の世に因果を知らず、業報を明らめず、三世を知らず、善惡を辨まへざる邪見の黨侶には群すべからず。大凡因果の道理歷然として私なし、造惡の者は墮ち修善の者は陞る、毫釐も忒はざるなり。若し因果亡じて虚しからんが如きは、諸佛の出世あるべからず、祖師の西來あるべからず。(五)善惡の報に三時あり。一者順現報

受、二者順次生受、三者順後次受、これを三時といふ。佛祖の道を修習するには、其最初より斯三時の業報の理を効ひ驗らむるなり。爾あらざれば多く錯りて邪見に墮つるなり、但邪見に墮つるのみに非ず惡道に墮ちて長時の苦を受く。(六)當に知るべし、今生の我身二つ無し、三つ無し、徒らに邪見に墮ちて虛く惡業を感得せん、惜からざらめや、惡を造りながら惡に非ずと思ひ、惡の報あるべからずと邪思惟するに依りて、惡の報を感得せざるには非ず。

第二章　懺悔滅罪

(七)佛祖憐みの餘り廣大の慈門を開き置けり、是れ一切衆生を證入せしめんが爲めなり。人天誰か入らざらん。彼の三時の惡業報、必ず感ずべしと雖も、懺悔するが如きは重きを轉じて輕受せしむ、又滅罪清淨ならしむるなり。(八)然あれば誠心を專らにして、前佛に懺悔すべし、恁麼するとき前佛懺悔の功德力、我を拯ひて清淨ならしむ。此功德能く無礙の淨信精進を生長せしむるなり。淨信一現するとき自他同く轉ぜらるるなり。其利益、普ねく情非情に蒙ぶらしむ。(九)其大旨は、願くは我れ設ひ過去の惡業多く重なりて障道の因緣ありとも、佛道に因りて得道せりし諸佛諸祖、我を愍みて業累を解脫せしめ、學道障り無からしめ、其功德法門普ねく無盡法界に充滿彌綸せらん、哀みを我に分布すべし、佛祖の往昔は吾等なり、吾等が當來は佛祖ならん。(一〇)我昔所造諸惡業、皆由無始貪瞋癡、從身口意之

第一節より第六節まで。

【一】第一節九十六字は修證義一篇の大綱にして最後三十一節の九十九字に照應し吾人が安心正依の原則なり。

【二】第二節百二字は人身受け難く佛法値ひ難き自己を反省せしむ。

【三】第三節百四十七字は無常觀を發さしむ。

【四】第四節百卄字は三世業報善惡因果の道理を深信せしむ。

【五】第五節百十二字は三時業の道理を說く。

【六】第六節九十字は之の一章を結し、邪見を救うて正見に入らしむ。

【第二章懺悔滅罪】大段五章の中の第二章にして正發心門。無始以來の罪業を懺悔して阿耨菩提を求め安心を

所生、一切我今皆懺悔、是の如く懺悔すれば必ず佛祖の冥助あるなり。心念身儀發露白佛すべし、發露の力罪根をして銷殞せしむるなり。

第三章　受戒入位

次には深く佛法僧の三寶を敬ひ奉るべし、生を易へ身を易へても、三寶を供養し敬ひ奉らんことを願ふべし、西天東土佛祖正傳する所は恭敬佛法僧なり。若し薄福少德の衆生は三寶の名字猶ほ聞き奉らざるなり、何に況や歸依し奉ることを得んや。徒らに所逼を怖れて山神鬼神等に歸依し、或は外道の制多に歸依すること勿れ。彼は其歸依に因りて衆苦を解脱すること無し。早く佛法僧の三寶に歸依し奉りて、衆苦を解脱するのみに非ず、菩提を成就すべし。其歸依三寶とは正に淨信を專らにして、或は如來現在世にもあれ、或は如來滅後にもあれ、合掌し低頭して口に唱へて云く、南無歸依佛、南無歸依法、南無歸依僧。佛は是れ大師なるが故に歸依す。法は良藥なるが故に歸依す。僧は勝友なるが故に歸依す。佛弟子となること必ず三歸に依る、何れの戒を受くるも必ず三歸を受けて其後諸戒を受くるなり。然あれば即ち三歸に依りて得戒あるなり。此歸依佛法僧の功德必ず感應道交するとき成就するなり。設ひ天上人間地獄鬼畜なりと雖も、感應道交すれば必ず歸依し奉るなり。已に歸依し奉るが如きは生生世世在在處處に增長し、必ず積功累德し、阿耨多羅三藐三菩提を成就するなり。知るべし三歸の功德其れ最尊最上甚深不可思議なりと

得んと冀ふの信心を發す、之を佛祖正傳の發心門といふ第七節より第十節まで。

【七】第七節九十三字は佛祖廣大の懺悔門を開いて一切衆生を證入せしめたまふ慈恩と功德とを明す。

【八】第八節一百字は懺悔の儀式と利益。

【九】第九節百十九字は懺悔の大意

【一〇】第十節七十六字は懺悔法、

【我昔所造】この四句偈は華嚴經普賢行願品にあり、

【第三節受戒入位】大段五章の中の第三章にして佛戒を受けて諸佛の位に入るの準則を示す正修行門なり正信心門なり第十一節より第十七節まで

【一一】第十一節六十五字は恭敬三寶を誓ふ。

【一二】第十二節百

いふこと、世尊已に證明しまします、衆生當に信受すべし。(二五)次には應に三聚淨戒を受け奉るべし。第一攝律儀戒、第二攝善法戒、第三攝衆生戒なり。次には應に十重禁戒を受け奉るべし、第一不殺生戒、第二不偸盜戒、第三不邪婬戒、第四不妄語戒、第五不酤酒戒、第六不說過戒、第七不自讃毀他戒、第八不慳法財戒、第九不瞋恚戒、第十不謗三寶戒なり。上來三歸三聚淨戒十重禁戒是れ諸佛の受持したまふ所なり。(二六)受戒するが如きは三世の諸佛の所證なる阿耨多羅三藐三菩提金剛不壞の佛果を證するなり。誰の智人か欣求せざらん、世尊明らかに一切衆生の爲に示しまします。衆生佛戒を受くれば卽ち諸佛の位に入る、位大覺に同うし已る、眞に是れ諸佛の子なりと。(二七)諸佛の常に此中に住持たる各各の方面に知覺を遺さず。群生の長へに此中に使用する各各の知覺に方面露れず。是時十方法界の土地草木牆壁瓦礫皆佛事を作すを以て、其起す所の風水の利益に預る輩、皆甚妙不可思議の佛化に冥資せられて親き悟を顯はす、是を無爲の功德とす、是を無作の功德とす、是れ發菩提心なり。

第四章　發願利生

(二八)菩提心を發すといふは、己れ未だ度らざる前に一切衆生を度さんと發願し營むなり。設ひ在家にもあれ、設ひ出家にもあれ、或は天上にもあれ、或は人間にもあれ、苦にありといふとも、樂にありといふとも、早く自未得度先度他の心を發すべし。(二九)其形陋しといふと

廿九字は薄福少德の者三寶の名すら聞く能はざるを知りて邪魔外道に歸依すべからざるを誡む。

【二三】第十三節百六十五字は三寶に歸依し來る法則を示す。

【二四】第十四節百五十字は前三節を結んで三歸の功德を結勸す。

【二五】第十五節百四十四字は已に三歸を受けたれば進んで三聚淨戒十重禁戒を受くべきを示す。

【二六】第十六節百八字は已に三歸三聚淨戒十重禁戒の十六條戒を完全に受け了つて三世諸佛の證明に依りて佛果位を成ぜしことを明す。

【二七】第十七節百三十六字は持戒の功德と作用を明す。

【第四章發願利生】大段五章の中の第

四章にして佛祖相承の菩提門を發願利生と名けたり。即ち從來發心修行の功德を以て普く一切に及ぼして我等と一切衆生と共に佛道を成ぜんことを願ふなり。第十八節より第廿五節まで。

【一八〇】第十八節百二字は發菩提心の樣子を述ぶ。

【一八九】第十九節七十四字は菩提心の尊きをのべて形態の尊卑を論ずべからざるを示す。

【一九〇】第二十節百六十六字は發願を勸助し兼ねて發願以後の營みを示す。

【一九一】第廿一節二百十三字は菩薩の四攝法を擧けその第一の布施の實行を勸む。

【一九二】第廿二節百五十八字は菩薩四攝法中の第二愛語行の實踐を勸む。

【一九三】第廿三節百

も此心を發せば已に一切衆生の導師なり。設ひ七歳の女流なりとも、即ち四衆の導師なり、衆生の慈父なり、男女を論ずること勿れ、此れ佛道極妙の法則なり。若し菩提心を發して後六趣四生に輪轉すと雖も、其輪轉の因緣皆菩提の行願となるなり。然あれば從來の光陰は設ひ空く過すといふとも、今生の未だ過ぎざる際だに急ぎて發願すべし。設ひ佛に成るべき功德熟して圓滿すべしといふとも、尙ほ廻らして衆生の成佛得道に廻向するなり。或は無量劫行ひて衆生を先に度して自からは終に佛に成らず、但し衆生を度し衆生を利益するもあり。衆生を利益すといふは四枚の般若あり。一者布施、二者愛語、三者利行、四者同事、是れ則ち薩埵の行願なり。其布施といふは貪らざるなり、我物に非ざれども布施を障へざる道理あり、其物の輕きを嫌はず、其功の實なるべきなり。然あれば則ち一句一偈の法をも布施すべし、此生他生の善種となる、一錢一草の財をも布施すべし、此世他世の善根を兆す。法も財なるべし、財も法なるべし。但彼が報謝を貪らず、自からが力を頒つなり。舟を置き橋を渡すも布施の檀度なり、治生産業固より布施に非ざること無し。愛語といふは衆生を見るに先づ慈愛の心を發し、顧愛の言語を施すなり。慈念衆生猶如赤子の懷ひを貯へて言語するは愛語なり。德あるは讃むべし、德なきは憐むべし、怨敵を降伏し、君子を和睦ならしむること愛語を根本とするなり。向ひて愛語を聞くは面を喜ばしめ心を樂しくす、向はずして愛語を聞くは肝に銘じ魂に銘ず。愛語能く廻天の力あることを學すべきなり。利行といふは貴賤の衆生に於きて利益の善巧を廻らすなり。窮龜を見病

九字は四攝法中の第三利行を勸說す

【二四】第廿四節百十二字は四攝法中の第四同事行を說き勸む。

【二五】第廿五節六十字は第十八節以下を結勸してこの願心を一切衆生に被らしむべきを示す。

【第五章行持報恩】大段五章の中の第五章にして發心修行菩提涅槃の中の涅槃門にして謂ゆる佛家一大事因緣安心終局の目的也。涅槃門を行持報恩と名けたるは生死即涅槃と心得て生死として厭ふべきも無く涅槃として欣ふべきも無きは吾人が行持の目的にして佛祖の正傳によりて安心を得即心是佛を承當し

雀を見しとき彼が報謝を求めず、唯單へに利行に催ほさるるなり。愚人謂はくは利他を先とせば自からが利省れぬべしと、爾には非ざるなり。利行は一法なり、普ねく自他を利するなり。（二四）同事といふは不違なり、自にも不違なり、他にも不違なり。譬へば人間の如來は人間に同ぜるが如し。他をして自に同ぜしめて後に自をして他に同ぜしむる道理あるべし。自他は時に隨うて無窮なり。海の水を辭せざるは同事なり。是故に能く水聚りて海となるなり。（二五）大凡菩提心の行願には是の如くの道理靜かに思惟すべし。卒爾にすること勿れ。濟度攝受に一切衆生皆化を被ぶらん功德を禮拜恭敬すべし。

第五章　行持報恩

（二六）此發菩提心多くは南閻浮の人身に發心すべきなり。今是の如くの因緣あり、願生此娑婆國土し來れり、見釋迦牟尼佛を喜ばざらんや。（二七）靜かに憶ふべし、正法世に流布せざらん時は身命を正法の爲に抛捨せんことを願ふとも値ふべからず、正法に逢ふ今日の吾等を願ふべし。見ずや佛の言はく、無上菩提を演說する師に値はんには種姓を觀ずること莫れ、容顏を見ること莫れ、非を嫌ふこと莫れ、行を考ふること莫れ、但般若を尊重するが故に日日三時に禮拜し恭敬して更に患惱の心を生ぜしむること莫れと。（二八）今の見佛聞法は佛祖面面の行持より來れる慈恩なり。佛祖若し單傳せずば奈何にしてか今日に至らん、一句の恩尙ほ報謝すべし、一法の恩尙ほ報謝すべし。況や正法眼藏無上大法の大恩これを報謝せざら

んや。病雀尚ほ恩を忘れず、三府の環能く報謝あり。窮龜尚ほ恩を忘れず、餘不の印能く報謝あり。畜類尚ほ恩を報ず、人類爭か恩を知らざらん。（二九）其報謝は餘外の法は中るべからず。唯正に日日の行持其報謝の正道なるべし、謂ゆるの道理は日日の生命を等閑にせず、私に費さざらんと行持するなり。（三〇）光陰は矢よりも迅かなり、身命は露よりも脆し、何れの善巧方便ありてか過ぎにし一日を復び還し得たる。徒らに百歳生けらんは恨むべき日月なり、悲むべき形骸なり。設ひ百歳の日月は聲色の奴婢と馳走すとも、其中一日の行持を行取せば、一生の百歳を行取するのみに非ず、百歳の他生をも度取すべきなり。此一日の身命は尊ぶべき身命なり、貴ぶべき形骸なり。此行持あらん身心自からも愛すべし、自からも敬ふべし。我等が行持に依りて諸佛の行持見成し、諸佛の大道通達するなり。然あれば即ち一日の行持是れ諸佛の種子なり、諸佛の行持なり。（三一）謂ゆる諸佛とは釋迦牟尼佛なり、釋迦牟尼佛是れ即心是佛なり。過去現在未來の諸佛共に佛と成る時は必ず釋迦牟尼佛と成るなり。是れ即心是佛なり。即心是佛といふは誰といふぞと審細に參究すべし。正に佛恩を報ずるにてあらん。

て以て一切衆生と共に佛道を成ずるに至る。佛祖の恩を報ずる是より大なる無はし故に涅槃門を行持報恩と名く第二十六節より第三十一節まで

【二六】第廿六節五十六字は南洲に人身を受け見佛の好因縁に遇ふを歡喜す。

【二七】第廿七節百五十九字は前節の見佛の歡喜すべき所以を心を靜めて思惟憶念すべきを謂ふ。

【二八】第廿八節百四十六字は正法の爲に身命を抛捨して大恩を報ずべきを論す。

【二九】第廿九節六十五字は報謝の正道とは日日の行持たることを明す。

【三〇】第三十節二百廿三字は日日の生命の等閑にすべからず一日の身命の行持が諸佛の行

持と道環して生佛一如即心是佛の報恩なることを結す【二】第三十一節の九十九字は最初の第一節に照應して全篇を總結す。此一節に修證義の要諦を明すのみにあらず曹洞宗安心の眞諦要訣を說く宜しく審細に參究すべきなり。

曹洞教會修證義（さうとうけうくわいしゆしようぎ）　畢

昭和四年八月一日印刷
昭和四年八月十日發行

昭和新纂 國譯大藏經 宗典部第五卷

不許複製

編纂者　昭和新纂國譯大藏經編輯部
代表者　三井晶史

發行者　東京市下谷區上野櫻木町五十番地
株式會社東方書院
代表者　坂戸彌一郎

印刷者　東京市神田區表神保町十番地
同興舍
代表者　井波康三郎

發行所　東京市下谷區上野櫻木町五〇
株式會社 東方書院
電話下谷四二五九
振替東京六八六一一

印刷所　西村由太郎・製本所　眞貝定次郎

東京南赤門前
山喜房佛書林
振替東京一九〇〇
電話小石五三六一

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03023 3290